

京都府遺跡調査報告書

第 9 冊

古 殿 遺 跡

1988

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが設立され、京都府内の公共的事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その保存・活用及び研究を行うようになってから、すでに7年が経過いたしました。その間、京都府内の発掘調査件数も年々増加を続けてきました。一方、私達は、文化財を大切にすることを普及・育成するだけでなく、これらを後世に伝えるため、日夜努力しているつもりであります。その手段の一つとして、本書のような報告書を刊行し、斯学向上に寄与いたしたいと思っております。またこの『京都府遺跡調査報告書』のほかに、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』もあわせて刊行し、当調査研究センターが実施した発掘調査結果を報告しています。

本書に収めました「古殿遺跡」は、昭和61年度に調査した遺跡で、数多くの土器や木製品が見つかるなど、多くの成果をおさめました。この調査を実施するにあたりましては、京都府教育委員会・峰山町教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく、酷暑・厳寒の中でも多くの方がたが熱心に作業に従事していただきましたことを明記して、厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

例 言

1. 本書は、京都府中郡峰山町古殿に所在する京都府立峰山高等学校の体育館建築工事に伴う古殿遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、京都府教育委員会の依頼を受けて、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが昭和61年8月4日から同年12月2日にかけて現地調査を実施した。
3. 現地調査は、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター調査課主任調査員小山雅人・調査員鍋田 勇が担当した。現地調査及び本書作成にかかる経費は、京都府教育委員会が全額負担した。
4. 出土遺物の整理と本書の作成は、鍋田が行い、編集には調査第1課土橋 誠が劉 和子の協力を得て行った。
5. 写真撮影は、遺構を鍋田・戸原・藤原が行った。遺物写真は、主に元京都大学文部技官高橋猪之介氏に委託し、一部調査第1課調査員田中 彰と戸原が行った。
6. 本書の執筆は、鍋田・戸原・藤原・黒坪が行い各節の文末にその名を記した。また、付載として、下記専門分野の諸先生方の玉稿を掲載した。
京都大学名誉教授島地 謙，京都大学木材研究所助教授林 昭三。
大阪府立三島高等学校地理学教諭徳丸始朗。
7. 調査の実施並びに本書の作成にあたっては、各方面の方々、各機関から専門的など指導・御教示並びにご協力を賜った。記して謝意を表する。

本文目次

はじめに	1
第1章 遺跡と調査経過	2
第1節 位置と環境	2
第2節 調査の経過	5
第2章 過去の調査	8
第1節 第2次調査の経過	8
第2節 第2次調査検出遺構	10
第3節 第2次調査出土遺物 土器	23
第4節 第2次調査出土遺物 木製品	33
第5節 第2次調査出土遺物 石器・石製品・土製品・その他	46
第3章 地形と層位	48
第1節 地形	48
第2節 層位	49
第4章 遺構	54
第1節 第Ⅱ期の遺構	54
第2節 第Ⅲ～Ⅴ期の遺構	55
第3節 平安時代の遺構	63
第5章 遺物	64
第1節 土器	64
第2節 木製品	70
第3節 その他の遺物	84
第6章 総括	86
第1節 出土遺物からみた古殿遺跡	86
第2節 検出遺構からみた古殿遺跡	91
第3節 小結 一遺構の編年一	94
<付載> 古殿遺跡出土木製品の樹種	98
<付載> 古殿遺跡花粉分析	106

挿 図 目 次

第 1 図	古殿遺跡及び周辺遺跡位置図	3
第 2 図	第 1～3 次調査トレンチ配置図	5
第 3 図	調査地地区割図	6
第 4 図	第 2 次調査地地区割図	9
第 5 図	第 1 トレンチ土層断面図	11
第 6 図	第 1 トレンチ西部検出遺構実測図	15
第 7 図	旧河道SD02実測図	16
第 8 図	暗渠施設SX08変遷図	18
第 9 図	第 2 トレンチ実測図	20
第 10 図	第 3 トレンチ実測図	21
第 11 図	第 4 トレンチ実測図	22
第 12 図	黒色土器	23
第 13 図	羽状縄文土器	23
第 14 図	古殿遺跡出土土器型式分類表(1)	24
第 15 図	古殿遺跡出土土器型式分類表(2)	25
第 16 図	古殿遺跡出土土器型式分類表(3)	26
第 17 図	古殿遺跡出土土器型式分類表(4)	27
第 18 図	案A1復原図	35
第 19 図	案A2復原図	36
第 20 図	三脚案(広州漢墓5036号墓出土)	36
第 21 図	案A3復原図	37
第 22 図	案B3復原図	37
第 23 図	盤 A 復原図	37
第 24 図	盤 B2復原図	38
第 25 図	槽 B 復原図	39
第 26 図	槽 C 復原図	39
第 27 図	箱復原図	39
第 28 図	調査地周辺地形図	49
第 29 図	基本層位概念図	50

第 30 図	調査地北壁土層断面図	51
第 31 図	調査地西壁土層断面図	52
第 32 図	第 I・II 期遺構平面図	54
第 33 図	第 III～V 期遺構平面図	56
第 34 図	SD302・SD303 遺物出土状況	57
第 35 図	SD302 堰拡大図	58
第 36 図	SD302・SD303 分岐点拡大図	59
第 37 図	第 III～V 期出土遺物位置関係図	60
第 38 図	第 V 期 SX301 検出状況	61
第 39 図	第 V 期梯子状木製品出土状況	62
第 40 図	第 V 期舟・箱形木製品出土状況	62
第 41 図	平安時代遺構平面図(SD301)	63
第 42 図	SD301 断面図	63
第 43 図	土器編年試案	87

付 表 目 次

付表 1	第 2 次調査層位名・番号対照表(第 5・9～11 図)	13
付表 2	第 2 次調査出土遺物 木製品集計表	34
付表 3	第 2 次調査出土遺物 石器種別集計表	46
付表 4	第 1 次調査・第 3 次調査基本層位対応表	53
付表 5	規格をもつ角材法量表	80
付表 6	土木部材法量表	82
付表 7	古殿遺跡第 2 次調査層名略号	119
付表 8	第 2 次調査出土土器器種分類表	119
付表 9	第 2 次調査出土木製品観察表	123
付表 10	第 2 次調査出土遺物観察表(玉類・石器)	143

図 版 目 次

図版第 1	第 2 次調査	溝SD04出土土器実測図(1)
図版第 2	第 2 次調査	溝SD04出土土器実測図(2)
図版第 3	第 2 次調査	溝SD04出土土器実測図(3)
図版第 4	第 2 次調査	溝SD04出土土器実測図(4)
図版第 5	第 2 次調査	溝SD04出土土器実測図(5)
図版第 6	第 2 次調査	溝SD02-2出土土器実測図(1)
図版第 7	第 2 次調査	溝SD02-2出土土器実測図(2)
図版第 8	第 2 次調査	溝SD02-2出土土器実測図(3)
図版第 9	第 2 次調査	溝SD02-2出土土器実測図(4)
図版第 10	第 2 次調査	溝SD02-2出土土器実測図(5)
図版第 11	第 2 次調査	溝SD02-2出土土器実測図(6)
図版第 12	第 2 次調査	溝SD02-2出土土器実測図(7)
図版第 13	第 2 次調査	溝SD02-2出土土器実測図(8)
図版第 14	第 2 次調査	土壇SK03第 1 トレンチ包含層出土土器実測図(1)
図版第 15	第 2 次調査	土壇SK03第 1 トレンチ包含層出土土器実測図(2)
図版第 16	第 2 次調査	溝SD10出土土器実測図(1)
図版第 17	第 2 次調査	溝SD10・12, 土壇SK11出土土器実測図(2)
図版第 18	第 2 次調査	溝SD20・21出土土器実測図
図版第 19	第 2 次調査	溝SD21出土土器実測図
図版第 20	第 2 次調査	溝SD21・22出土土器実測図
図版第 21	第 2 次調査	第 4 トレンチピット出土土器実測図(1)
図版第 22	第 2 次調査	第 4 トレンチピット出土土器実測図(2)
図版第 23	第 2 次調査	石製品実測図(1)
図版第 24	第 2 次調査	石製品実測図(2)
図版第 25	第 2 次調査	石製品実測図(3)
図版第 26	第 2 次調査	石製品実測図(4)
図版第 27	第 2 次調査	石製品実測図(5)
図版第 28	第 2 次調査	石製品実測図(6)
図版第 29	第 2 次調査	木製品実測図(1) (案・脚)

図版第 30	第 2 次調査	木製品実測図(2)	(案・槽)
図版第 31	第 2 次調査	木製品実測図(3)	
図版第 32	第 2 次調査	木製品実測図(4)	(槽・箱・桶底)
図版第 33	第 2 次調査	木製品実測図(5)	(杓柄・杓子)
図版第 34	第 2 次調査	木製品実測図(6)	(火鑽臼・火鑽杵)
図版第 35	第 2 次調査	木製品実測図(7)	紡織具(杵)
図版第 36	第 2 次調査	木製品実測図(8)	紡織具(有頭棒), 農具(鎌柄)
図版第 37	第 2 次調査	木製品実測図(9)	(有頭棒・刷毛柄)
図版第 38	第 2 次調査	木製品実測図(10)	農具(鋤柄・鋤先・杵)
図版第 39	第 2 次調査	木製品実測図(11)	土木建築材
図版第 40	第 2 次調査	木製品実測図(12)	暗渠材
図版第 41	第 2 次調査	木製品実測図(13)	土木建築材
図版第 42	第 2 次調査	木製品実測図(14)	土木建築材(礎板)
図版第 43	第 2 次調査	木製品実測図(15)	土木建築材(擁壁材)転用材
図版第 44	第 2 次調査	木製品実測図(16)	建築材
図版第 45	第 2 次調査	木製品実測図(17)	建築材
図版第 46	第 2 次調査	木製品実測図(18)	土木建築材
図版第 47	第 2 次調査	木製品実測図(19)	土木建築材(組材)
図版第 48	第 2 次調査	木製品実測図(20)	土木建築材(杭)
図版第 49	第 2 次調査	木製品実測図(21)	武器(楯)他
図版第 50	第 2 次調査	木製品実測図(22)	武器(柄)他
図版第 51	第 2 次調査	木製品実測図(23)	不明木製品
図版第 52	第 2 次調査	木製品実測図(24)	不明木製品
図版第 53	第 2 次調査	木製品実測図(25)	不明木製品・下駄
図版第 54	第 3 次調査	土器実測図(1)	SD309・SD310・SD305
図版第 55	第 3 次調査	土器実測図(2)	SX302
図版第 56	第 3 次調査	土器実測図(3)	SD303
図版第 57	第 3 次調査	土器実測図(4)	SD303
図版第 58	第 3 次調査	土器実測図(5)	SD303
図版第 59	第 3 次調査	土器実測図(6)	SD302
図版第 60	第 3 次調査	土器実測図(7)	SD302
図版第 61	第 3 次調査	土器実測図(8)	SD304

図版第 62	第 3 次調査	土器実測図(9)	SD304・SD301
図版第 63	第 3 次調査	土器実測図(10)	SX301
図版第 64	第 3 次調査	土器実測図(11)	第Ⅲ層 b 地点
図版第 65	第 3 次調査	土器実測図(12)	第Ⅲ層 b 地点・各地区包含層・土製品
図版第 66	第 3 次調査	土器実測図(13)	第Ⅲ層 a 地点
図版第 67	第 3 次調査	土器実測図(14)	各地区包含層
図版第 68	第 3 次調査	土器実測図(15)	各地区包含層
図版第 69	第 3 次調査	木製品実測図(1)	
図版第 70	第 3 次調査	木製品実測図(2)	
図版第 71	第 3 次調査	木製品実測図(3)	
図版第 72	第 3 次調査	木製品実測図(4)	
図版第 73	第 3 次調査	木製品実測図(5)	
図版第 74	第 3 次調査	木製品実測図(6)	
図版第 75	第 3 次調査	木製品実測図(7)	
図版第 76	第 3 次調査	木製品実測図(8)	
図版第 77	第 3 次調査	木製品実測図(9)	
図版第 78	第 3 次調査	木製品実測図(10)	
図版第 79	第 3 次調査	木製品実測図(11)	
図版第 80	第 3 次調査	木製品実測図(12)	
図版第 81	第 3 次調査	木製品実測図(13)	
図版第 82	第 3 次調査	木製品実測図(14)	
図版第 83	第 3 次調査	木製品実測図(15)	
図版第 84	第 3 次調査	木製品実測図(16)	
図版第 85	第 3 次調査	木製品実測図(17)	
図版第 86	第 3 次調査	木製品実測図(18)	
図版第 87	第 3 次調査	石器実測図	
図版第 88	(1)第 2 次調査	調査地遠景(東から)	
	(2)第 2 次調査	第 1・2 トレンチ全景	
図版第 89	(1)第 2 次調査	第 1・2 トレンチ遠景(南から)	
	(2)第 2 次調査	第 1 トレンチ西半部	
図版第 90	(1)第 2 次調査	第 1 トレンチ全景(西から)	
	(2)第 2 次調査	第 1 トレンチ西半部遺構検出状況(西から)	

- 図版第 91 (1)第 2 次調査 溝SD02-2堰遺構検出状況(北から)
(2)第 2 次調査 溝SD02-2護岸施設検出状況(東から)
- 図版第 92 (1)第 2 次調査 暗渠遺構SX09検出状況-1(西から)
(2)第 2 次調査 暗渠遺構SX09検出状況-2(西から)
- 図版第 93 (1)第 2 次調査 土器溜りSK03検出状況(東から)
(2)第 2 次調査 溝SD04遺物出土状況(西から)
- 図版第 94 (1)第 2 次調査 第 2 トレンチ遺構検出状況(東から)
(2)第 2 次調査 第 4 トレンチ遺構検出状況(東から)
- 図版第 95 第 2 次調査 出土遺物 木製品(1)
- 図版第 96 第 2 次調査 出土遺物 木製品(2)
- 図版第 97 第 2 次調査 出土遺物 木製品(3)
- 図版第 98 第 2 次調査 出土遺物 木製品(4)
- 図版第 99 第 2 次調査 出土遺物 木製品(5)
- 図版第100 第 2 次調査 出土遺物 木製品(6)
- 図版第101 第 2 次調査 出土遺物 木製品(7)
- 図版第102 第 2 次調査 出土遺物 木製品(8)
- 図版第103 第 2 次調査 出土遺物 木製品(9)
- 図版第104 第 2 次調査 出土遺物 木製品(10)
- 図版第105 第 2 次調査 出土遺物 木製品(11)
- 図版第106 第 2 次調査 出土遺物 木製品(12)
- 図版第107 第 2 次調査 出土遺物 石器・石製品
- 図版第108 第 2 次調査 出土遺物 石器・石製品・その他の遺物
- 図版第109 (1)第 3 次調査 調査前全景(東から)
(2)第 3 次調査 SD301断面土層(南から)
- 図版第110 (1)第 3 次調査 第Ⅲ層上面遺物出土状況(北から)
(2)第 3 次調査 舟・箱形木製品出土状況(西から)
- 図版第111 (1)第 3 次調査 梯子状組合せ木製品出土状況(西から)
(2)第 3 次調査 梯子状組合せ木製品出土状況(東から)
- 図版第112 (1)第 3 次調査 SX301(南から) (2)第 3 次調査 SX301(南西から)
- 図版第113 (1)第 3 次調査 SX301(北東から) (2)第 3 次調査 SD304(南から)
- 図版第114 (1)第 3 次調査 第Ⅲ～Ⅳ期遺構全景(北から)
(2)第 3 次調査 SD302 堰(南東から)

- 図版第115 (1)第3次調査 SD302・SD303分流地点(北東から)
(2)第3次調査 SD302・SD303分流地点(南から)
- 図版第116 (1)第3次調査 SD303 案・鍬形木製品出土状況
(2)第3次調査 SD302 堰の一部
- 図版第117 (1)第3次調査 SD305・SD307(南西から)
(2)第3次調査 第Ⅱ期遺構全景(北から)
- 図版第118 (1)第3次調査 SX302検出状況 (2)第3次調査 トレンチ北壁土層
- 図版第119 第3次調査 出土遺物 土器(1)
- 図版第120 第3次調査 出土遺物 土器(2)
- 図版第121 第3次調査 出土遺物 土器(3)
- 図版第122 第3次調査 出土遺物 土器(4)
- 図版第123 第3次調査 出土遺物 土器(5)
- 図版第124 第3次調査 出土遺物 土器(6)
- 図版第125 第3次調査 出土遺物 木製品(1)
- 図版第126 第3次調査 出土遺物 木製品(2)
- 図版第127 第3次調査 出土遺物 木製品(3)
- 図版第128 第3次調査 出土遺物 木製品(4)
- 図版第129 第3次調査 出土遺物 木製品(5)
- 図版第130 第3次調査 出土遺物 木製品(6)
- 図版第131 第3次調査 出土遺物 木製品(7)
- 図版第132 第3次調査 出土遺物 木製品(8)
- 図版第133 第3次調査 出土遺物 木製品(9)
- 図版第134 第3次調査 出土遺物 木製品(10)
- 図版第135 第3次調査 出土遺物 木製品(11)
- 図版第136 第3次調査 出土遺物 石器

はじめに

古殿遺跡は、京都府中郡峰山町字古殿に所在する。昭和52年に、府立峰山高等学校の工業棟改築工事が行われ、その立会調査の結果、土器の包含層が確認されたことから、急拠、京都府教育委員会によって発掘調査が実施され、遺跡として認識されるに至った。^(注1)

この調査により、古殿遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期および平安時代～鎌倉時代に営まれた集落遺跡であることが確認された。さらに、遺跡の範囲については、同高等学校の敷地全体が想定された。

その後、昭和57年には、同高等学校の校舎増改築が計画され、工事に先立って、当調査研究センターにより、古殿遺跡の第2次調査が行われた。^(注2)この調査でも、第1次調査とほぼ同時期の遺構が検出されるとともに、多量の遺物が出土し、多大な成果を収めている。

今回の調査は、同高等学校の体育館新設に先立つ発掘調査であり、古殿遺跡の第3次調査である。^(注3)当該地は、これまでの調査結果から周知の遺跡であるため、事業者である京都府教育委員会管理課からの依頼を受けて、当調査研究センターが調査を行った。体育館の建設予定地は、かつては校舎の建設されていたところで、その後調査前まではテニスコートおよびクラブボックスとして利用されていた。第1・2次調査地との位置関係では、工業棟(第1次調査地)の南側、浄化槽(第2次調査、第4トレンチ)の西側にあたり、これまでの調査地と近接している。したがって、これらと関連した遺構の検出も予想された。結果は、弥生時代後期～古墳時代後期、平安時代の各時期の溝が検出され、多量の土器・木製品が出土するなど、従来の調査同様、大きな成果を収めることができた。

今回の調査にあたっては、周到な準備をするとともに、下記のとおり、調査組織を決定し、昭和61年8月4日から同年12月2日までの約4か月を費やして、発掘調査を実施した。

発掘調査総括責任者	荒木 昭太郎(事務局長)
発掘調査責任者	中谷 雅治(調査課長)
発掘調査担当者	小山 雅人(主任調査員)
	鍋田 勇(調査員)
発掘調査事務責任者	中西 和之(総務課長)

なお、調査期間、整理期間を通じて、峰山町教育委員会、府立丹後郷土資料館、府立峰山高等学校、同高等学校史学部その他関係諸機関をはじめ、峰山・弥栄町の地元作業員や調査補助員・整理員ほか多くの方々から御協力、御指導を賜った。^(注4)記して謝意を表したい。

(鍋田 勇)

第1章 遺跡と調査経過

第1節 位置と環境

丹後半島は、標高500～600m前後の山々がそびえ、いわゆる丹後山地を形成している。その山間を縫うように、佐濃谷川、川上谷川、野田川、竹野川、福田川、宇川等の河川が流れ、大小の沖積地を形成している。

丹後地方の文化は、これらの河川や沖積地を中心に展開された。中でも竹野川は、丹後山地の主峰高尾山(標高623.2m)、鼓ヶ岳(標高569m)に源を發し、大宮町の三重、谷内地区の間で屈曲した後、中小12本の支流を伴って峰山町、弥栄町、丹後町と北流して日本海に注ぐ、全長31km、流域面積約206.4km²にも及ぶ丹後地方最大の流域面積を誇る。竹野川流域は、歴史的にも各時代で、丹後地方の中心的役割を担ったところである。

古殿遺跡は、竹野川流域で最大の沖積地である峰山盆地に所在し、磯砂山地塊の東、久次岳山系に源を發する小西川流域に形成された沖積地の北側に位置している。

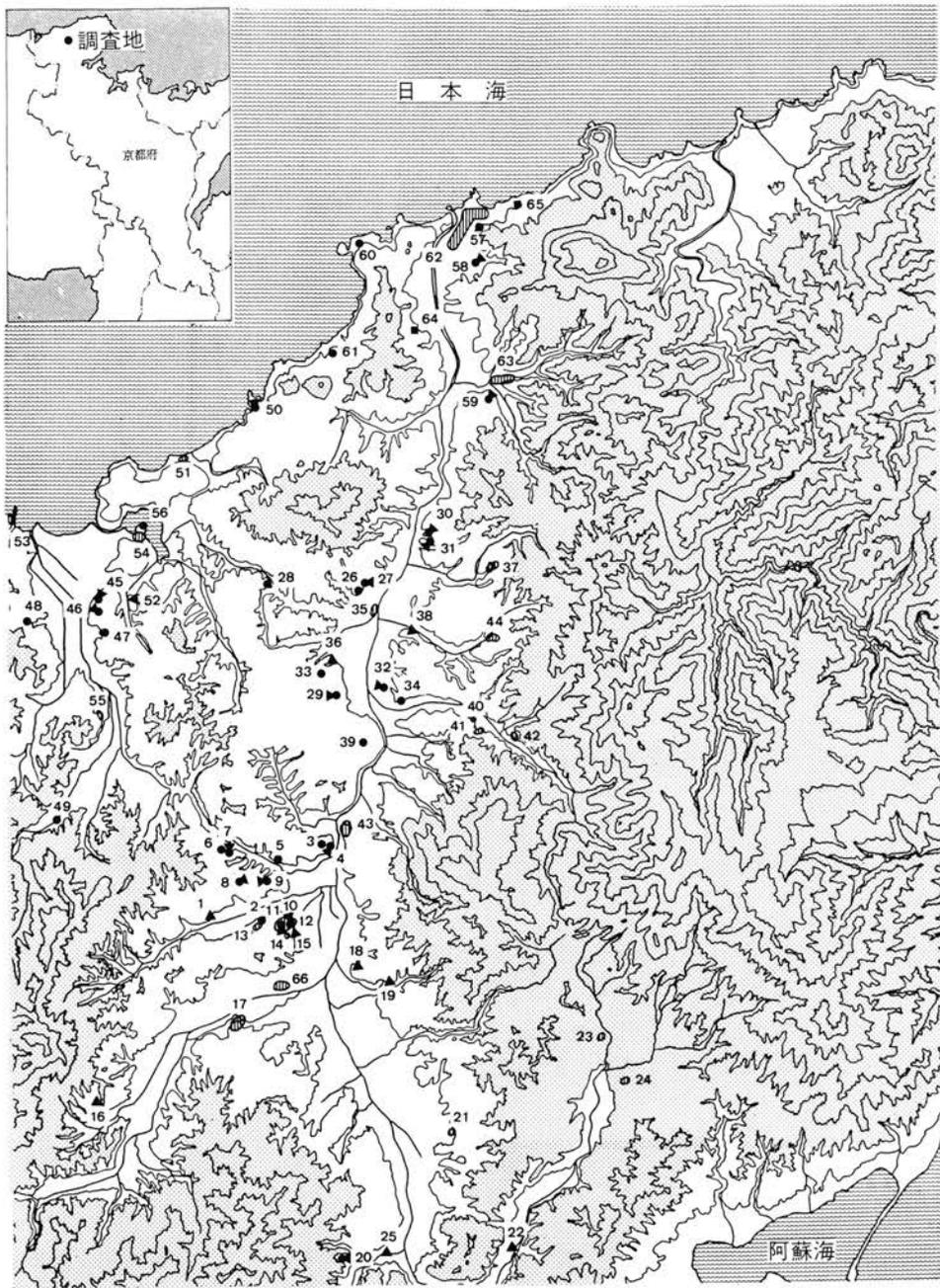
丹後地方の気候は、鈴木秀夫によるとI区(西高東低の気圧配置になると、必ず降水がある地域)として区分されている。「京都地学ガイド」によると、^(注5)9月～3月の空模様として、舞鶴市に雨の降った日が96日、雪の降った日が44日とされている。秋から冬にかけては毎日のように降水、降雪がある。舞鶴市より更に北の山間にあたる峰山町では降水、降雪日数は一段と多くなり、1年の約40%にも及ぶ。また、舞鶴市での過去10年間の年平均降水量は、2,165.7mmを測り、大阪の1,465mmと比べると、約1.5倍になる。

気候環境については、遺跡から出土する古代の花粉化石を分析することなどにより、先史以前からのものも次第に明らかになりつつある。^(注6)

紀元前10,200年前後を境として、寒暖の交替の激しかった晩氷期が終わり、気候が温暖化していく。これによって氷塊が溶解し、海面の水位を急上昇させ、日本海も拡大される。いわゆる縄文海進の時代の始まりである。

丹後地方の縄文遺跡としては、早期段階のものが内陸部で確認されている。それ以降の遺跡は海岸部で多く発見されているため、内陸部から海岸部への人の移動が考えられていた。由良川の自然堤防上にも近年、早期の遺跡が発見され、採集経済に有利な海岸部に近い古砂丘にも古くから生活の場があったことがわかってきた。

縄文海進の時期を経て、縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけては、再び小海退期に入る。北陸地方の日本海側では、年平均気温は-1℃から-2℃、海水準で1mから5mも下がった。沿岸部には低湿な海岸平野が出現し、ここに営まれた遺跡が今海面下に沈んでいる



第1図 古殿遺跡及び周辺遺跡位置図 (1/25,000)

1. 古殿遺跡 2. カジャ古墳 3. 湧田山1号墳 4. 湧田山2号墳 5. 丸山1号墳 6. 大耳尾1号墳 7. 大耳尾2号墳 8. 西谷山1号墳 9. 杉谷山7号墳 10. 八幡山1号墳 11. 八幡山3号墳 12. 扇谷遺跡 13. カジャ遺跡 14. 七尾遺跡 15. 八幡池遺跡 16. 久次古墳群 17. 途中ヶ丘遺跡 18. 荒山遺跡 19. 新町遺跡 20. 光明寺裏山古墳群2号墳 21. 大宮壳神社遺跡 22. 三重遺跡 23. 岩立橋遺跡 24. 延利遺跡 25. 裏陰遺跡 26. 桑田古墳群 27. 小宮谷1号墳 28. にこれ古墳 29. 寺谷5号墳 30. 黒部銚子山古墳 31. 弓木1号墳 32. 丸山古墳 33. オテジ谷1・2号墳 34. 竜淵古墳 35. 鳥取橋遺跡 36. 坂野遺跡 37. かせ谷遺跡 38. 奈具遺跡 39. 柿のさが遺跡 40. フキ岡遺跡 41. 城楽寺遺跡 42. 外村遺跡 43. 下上野遺跡 44. 家谷遺跡 45. 網野銚子山古墳 46. 小銚子古墳 47. 勝山古墳 48. 椎木谷古墳 49. 石プロ古墳 50. 三津古墳 51. 琴引浜遺跡 52. 方谷遺跡 53. 浅茂川遺跡 54. 離遺跡 55. 高橋遺跡 56. 離山古墳 57. 産土山古墳 58. 神明山古墳 59. アマカオカ古墳 60. 馬場ノ内古墳 61. 宮の谷古墳 62. 竹野遺跡 63. 吉永遺跡 64. 大山北古墳群 65. 樹塚古墳 66. 菅遺跡

という。丹後地方でも同様な可能性は高いであろう。

丹後地方の弥生時代前期の遺跡としては、久美浜町函石浜、峰山町管沖波、網野町離、浅茂川、琴引浜、丹後町平、竹野遺跡が著名である。これらの遺跡は、多くが沿岸部にあり、縄文時代の遺物も確認されている。縄文時代晩期から弥生時代前期にかけては、冷涼、湿潤な気候が支配的で、厳しい気候環境下にある丹後地方では、水稻栽培が定着するには、瀬戸内地方や畿内地方より多くの時間を必要としたと考えられる。

このような前期弥生社会においては、水稻栽培のみでは需要を満たせず、縄文時代以来の狩猟や採取によって補完を余儀なくされていたであろう。海退によって広がった海辺では、このような要求に答え得るタンパク源が豊富に採取できるため、生活の場をこの地に求めた集落も少なくなかったであろう。

弥生時代中期、小海退から海進へと転化する中で、海岸部の諸遺跡は廃絶して、竹野川流域では集落遺跡の中心が内陸部へと移行する。大宮町岩立橋、延利、峰山町扇谷、七尾、新町、弥栄町奈具、フキ岡、城楽寺遺跡等の遺跡が見られる。中期においてようやく定着したと考えられる水稻栽培は、鉄器の導入等もあって、集落の分村、拡大等の大きな発展をもたらした。

峰山町扇谷遺跡は、弥生時代前期から中期初めにかけて短期間に営まれた大環濠集落である。多量の土器、玉類、ガラス塊などが出土している^(注7)。谷を挟んで扇谷遺跡南側に位置する七尾遺跡では、前期の方形台状墓が見ついている。また、峰山町途中ヶ丘遺跡は、前期から後期にかけての一大拠点集落である。畿内第1・第3・第5様式に併行する多量の土器が出土し、第2・第4様式のものもわずかにある^(注8)。断続的に営まれた集落で、社会の変動に即して分村、移住したと考えられている。同様に、弥生時代全般にわたる遺物が確認されている遺跡としては、弥栄町鳥取橋遺跡がある。弥生時代も後期になると遺跡は急激な増加を見せる。

弥生時代の峰山町の集落は、前期では竹野川支流の鱒留川沿岸に、経済的基盤を有する途中ヶ丘遺跡が成立する。続く中期初頭には、途中ヶ丘遺跡に代わるかのように高地性集落の扇谷遺跡が生まれる。中期中様で再び途中ヶ丘が活況を呈するが、中期後葉で再び縮小し、弥生時代後期を迎える。

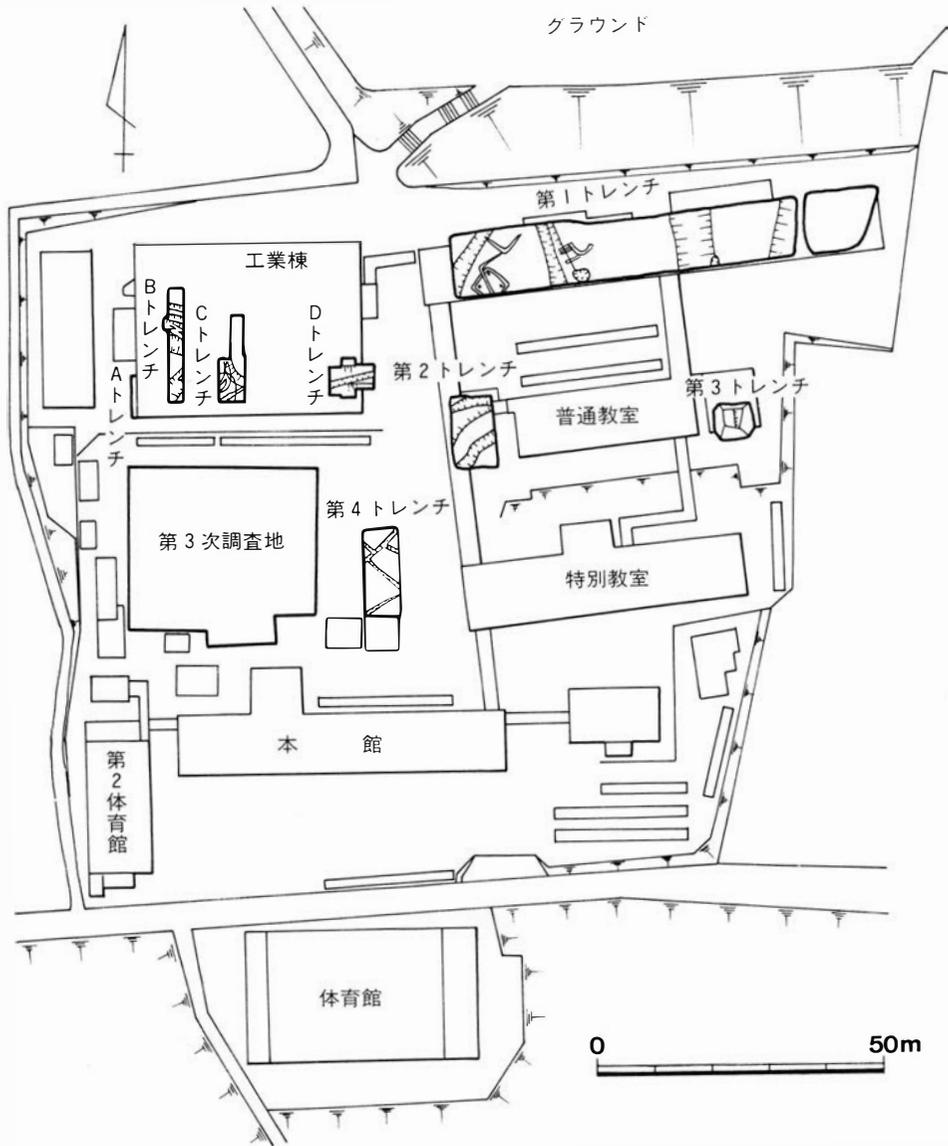
竹野川流域における、古殿遺跡と同時代の弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡としては、大宮町大宮売神社、裏陰、三重小学校校庭、峰山町新町、荒山、八幡池、宮谷、弥栄町坂野、丹後町吉永等の遺跡が知られている。これらの遺跡には、後期の繁栄に比べて古墳時代前期には急激に規模が縮小するタイプ(八幡池、荒山、延利、岩立橋等)と、後期から古墳時代前期へと引き続き繁栄するタイプ(大宮売、裏陰、三重小学校校庭、吉永等)がある。

(藤原 敏晃)

第2節 調査の経過

今回の調査地は、体育館の新設に伴うものであるため、比較的まとまった面積があること、また、過去の二次にわたる調査から、遺構の検出される可能性が高いこと、などの理由から、当初から調査可能範囲内において全面発掘を行った。

調査地の地区割は、第3図のように、調査地全体を4mの方眼に区分けした後、東西を



第2図 第1～3次調査トレンチ配置図

第1次調査：A～Dトレンチ 第2次調査：第1～4トレンチ



第3図 調査地地区割図

西から東へ1～9地区、南北を北から南へA～I地区とし、それぞれの組合せを各地区の名称とした。遺物の取り上げは、この地区によっている。なお、南北のラインは、現在建設されている校舎を基準としたために、磁北に対して西へ1°傾いている。

調査は、まず重機による表土の除去から開始した。調査地は、高等学校の造成によって、すでに旧地形をとどめてはいないが、周りの地形観察から、谷筋にあたることが予想され、遺構面も深いものと思われた。そこで、はじめに調査地と近接している第2次調査の第4トレンチにおける遺構面を表土除去の目安とし、地表下約1mまで全体を掘り下げた。また、調査地の西側には、土層の観察もかねて、深さ約2mの排水溝を設定した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- ①当地では、テニスコートの造成時に地表下0.4mまで整地が行われている。
- ②さらに、それ以前には校舎が建築されていたため、地表下1mまでは、コンクリートの基礎によって、ところどころで攪乱がみられる。
- ③排水溝の南側では、調査地の西側に位置する尾根の延長である地山が露出した。また、北側では大きな溝状に落ち込んでいる。
- ④地表下約1mまでは、黒色粘質土層が厚く堆積し、その間には淡赤褐色細礫層が薄くほぼ水平に堆積している。

⑤この黒色粘質土内には、古墳時代から鎌倉時代までの土器が混在している。

これらのことから、今回の調査地は、その大部分がかつては谷であり、中世にいたって現在の地表面近くまで埋没したことが判明した。以上は、ほぼ当初の予想どおりの結果であった。しかし、この面においては、遺物は含まれるものの、遺構の検出には至らなかった。そのため、再び重機を使い、調査地東側の下層調査を行った。その結果、さらに、約0.5m下層(L=36.8m)で古墳時代前期の土器が、約1m下層(L=36.2m)で、弥生時代後期の土器がまとまって出土し、これらの土器は面的に広がり、何らかの遺構に伴うことが予想された。したがって、現在の面から下層に二枚の遺構面があると想定して、まず、調査地全域を再び約0.5m掘り下げ、二枚の遺構面のうち上層にあたる遺構の検出を行った。

この上層の遺構面では、第Ⅲ～Ⅴ期・平安時代の遺構を検出した。平安時代の遺構については、結果的には、さらに上層での検出が可能であったといえるが、実際は、第Ⅲ～Ⅴ期の遺構とともに検出を行った。この遺構面では、今回の調査中最も多量の遺物、特に木製品がおびただしく出土し、粘質の土壌とあいまって調査は難渋をきわめた。

第Ⅲ～Ⅴ期遺構の調査後は、調査地のなかでも遺構の密度の高いC～F・4～8地区に範囲を限定して、下層の遺構調査を行った。この下層の遺構面では、第Ⅱ期の遺構を検出することができた。

(鍋田 勇)

第2章 過去の調査

古殿遺跡では、京都府教育委員会が昭和52年度に第1次調査を実施し、当調査研究センターが57年度に第2次調査を行っている。

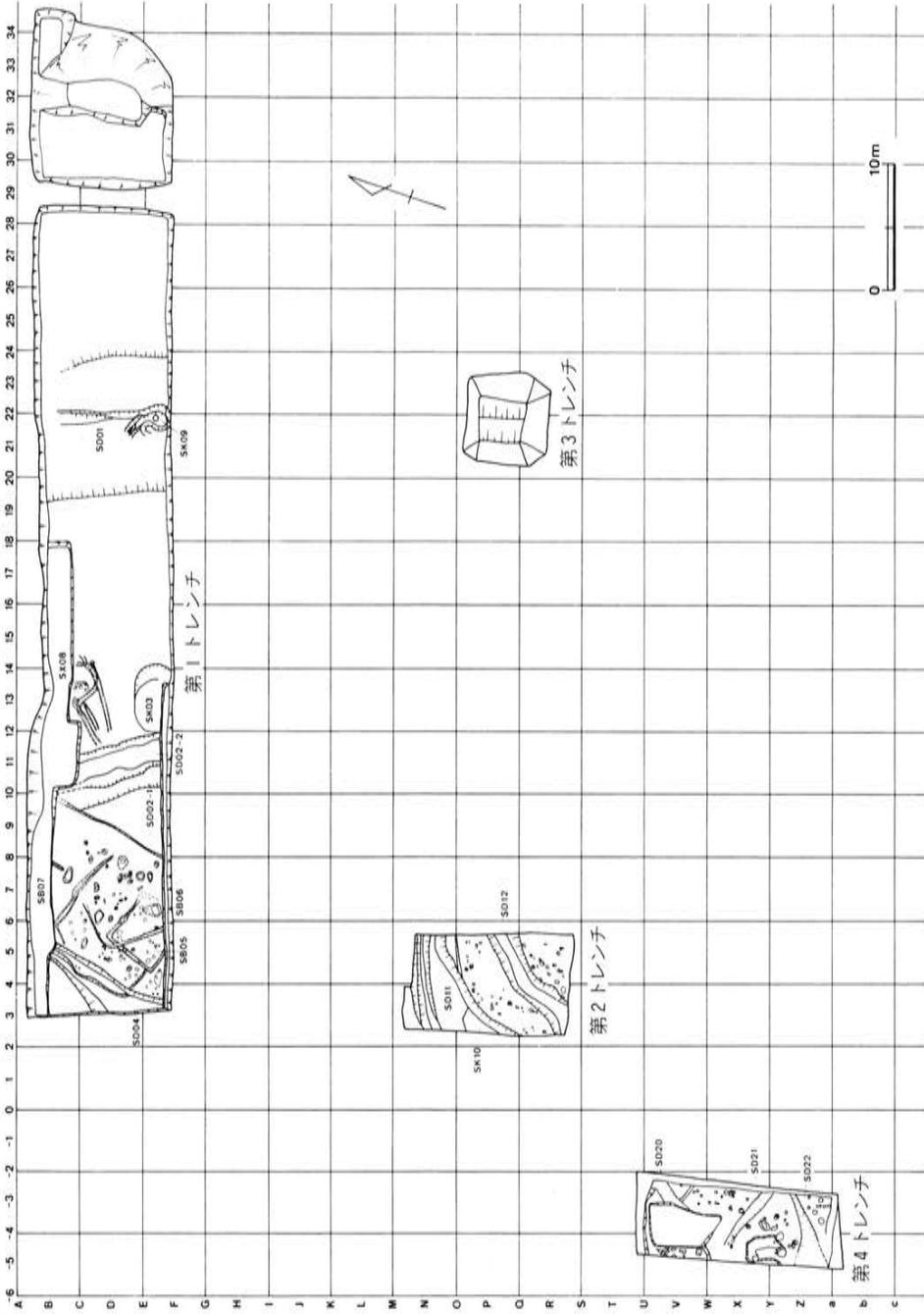
第1次調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落と、平安時代・鎌倉時代の遺構とが複合する遺跡であることが確認された。遺跡の範囲は、小西川沖積地より一段高い府立峰山高等学校敷地全体が想定され、弥生時代末から古墳時代開始期にこの集落が最も盛行していたことも明らかになっている。

第2次調査は、京都府教育委員会が旧校舎の老朽化と生徒数の増加のため、校舎の増改築工事を計画したことにより実施された調査である。増築の計画された位置は、昭和52年度に工業課の実習棟が建設された東にあたり、現存の普通教室の東西両側と、その北側の旧木造校舎の跡地である。この地は、第1次調査の結果、弥生時代終末期に居住区になっていたことが推定された地域にあっていた。以下、第2次調査の成果について述べる。

第1節 第2次調査の経過（第4図）

発掘調査は、昭和57年6月21日の現地での協議を受けて着手準備に入り、7月5日から現地調査を開始した。当初、昭和57年7月1日から同年9月30日までを調査の予定期間としたが、途中、調査地区が追加されたことや、予想以上の遺物が出土したこともあって、最終的には10月30日までを費やすこととなった。

第2次調査地は、第1次調査地の東及び東南部に位置し、校舎建設予定地内に合計4か所の調査トレンチ(約1,200m²)を設けた。普通教室の北側に設けた南北12.0m・東西77.0mの調査区を第1トレンチ、普通教室の西側に設けた南北13.0m・東西8.0mの調査区を第2トレンチ、同じく東に設けた南北6.0m・東西7.0mの調査区を第3トレンチ、この普通教室の南西で設けた南北15.0m・東西6.5mの調査区を第4トレンチとした。調査は、第1次調査の成果から、遺構面がかなりの攪乱をうけているものと判断し、まず重機によって包含層上面までの整地層の取り除きから始めた。その結果、第1トレンチの西部では、現地表下0.3mから黒褐色の遺物包含層がほぼ確実に遺存しており、東半部では攪乱のはげしいことが確認された。そのため、まず第1トレンチ東半部及び第3トレンチの調査を先行させ、次に第1トレンチ西半部、その後第2トレンチを調査することにした。各トレンチの遺構面は、現地表面からそれぞれの深さで確認したが、全体として地形は、西北から東南へと下がる。第1トレンチでは、2条の丘陵端部を切り土しており、両側の谷地形が自然に



第4図 第2次調査地区割図

堆積していったある段階で人工的に盛り土し、平坦地をいくつかのブロックに分けて造成している状況が観察できた。断ち割りによる下層の確認調査では、上流からの自然堆積層が谷を埋めている状況を確認した。第2トレンチ調査中に、浄化槽埋設予定地が調査区域に追加された。この調査区を第4トレンチと命名し、継続して調査を行った。第4トレンチでは、調査区内外の安全を図るために掘削前に鉄製パイルを打ち込む工法を採用した。

(戸原 和人)

第2節 第2次調査検出遺構

(1) 層位 (第4・5図)

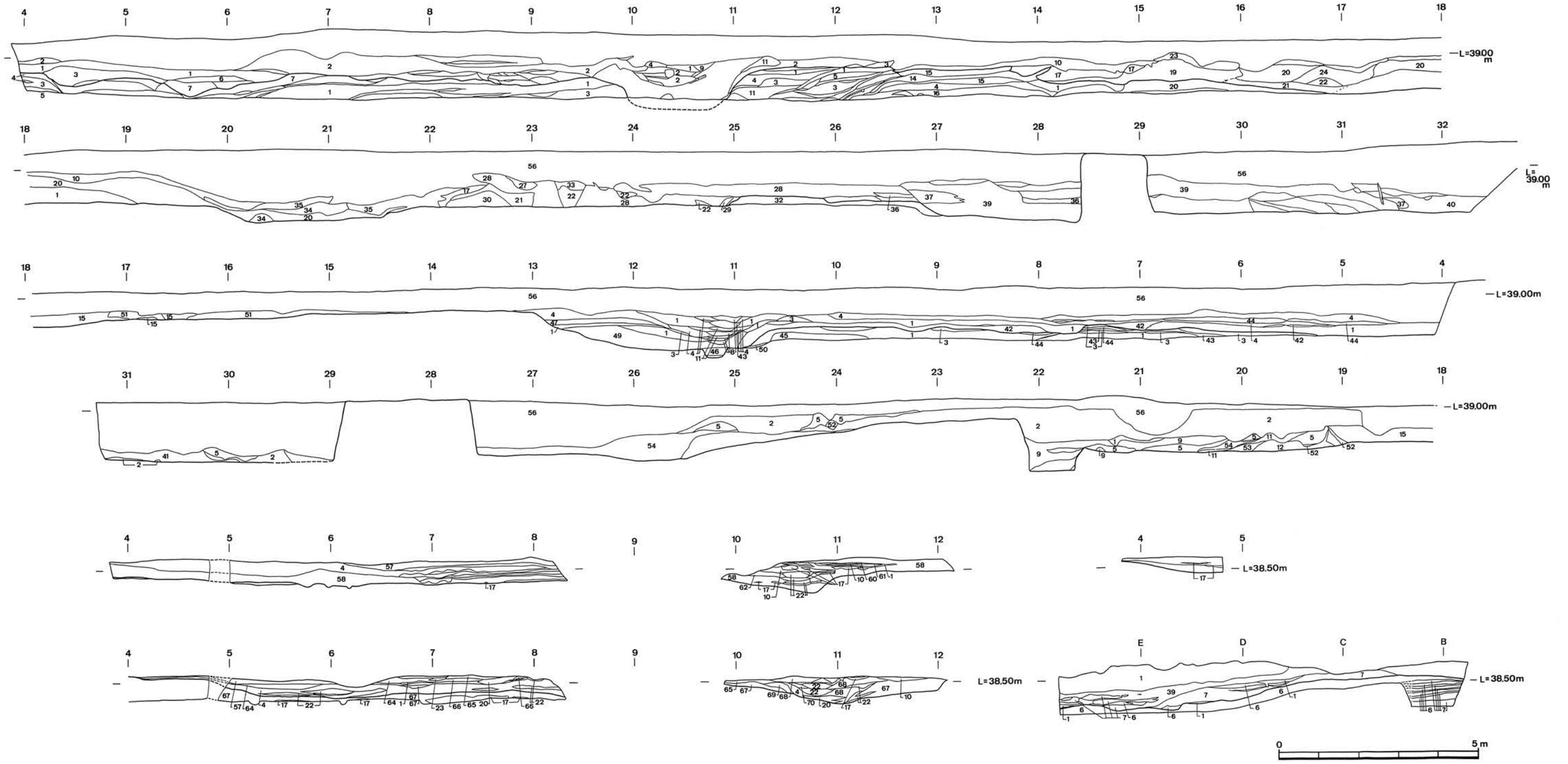
第2次調査によって検出された遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期のもの、平安時代後期のものである。これらの遺構は、調査によって確認された時期が全く別の場合であっても、それぞれの時期を決定した遺物包含層の土質が同一のものであることがしばしばであった。この状況は、第1トレンチで最も顕著に現れており、谷堆積のより下流にあたる第2トレンチでも同様の様相を呈していた。このことは、先に述べたように、この地が北の山魁から南流する谷川の沖積作用により形成された扇状地形であるために生じた必然的な結果であると考えられる。第2・4トレンチでは、遺構面が比較的フラットであったため、遺構形成後、埋没までの期間は比較的堆積地層の攪乱が少ない。

調査によって確認した層位は、第1トレンチでは、約80層に分層された。

このうち、主なものについて下層から見ると、溝SD04では、暗灰色シルトと灰褐色砂の互層よりおおむね弥生時代の後期中葉の遺物が出土している。次の黒色粘土に砂を少し含む層では後期後葉の遺物、次の暗褐色土と灰褐色砂の互層でも前記同様の遺物が出土している。黒色粘土砂混層では布留式土器が出土している。黒色粘土に砂を多く含む層では、布留式土器と庄内併行期の特徴をもつ土器が出土している。灰褐色砂層では庄内併行期の土器、黒色粘土層では庄内併行期の土器と布留式土器を、最上層の褐色砂層では弥生後期から庄内併行期の土器をそれぞれ出土している。

SD02では、下層から順に、黒色粘土層で庄内併行期、乳灰色砂層で同じく庄内併行期、暗灰色土と灰褐色砂の互層・黒色粘土に砂を少し含む層・黒色粘土に砂を多く含む層・黒灰色シルト層・黒灰色粘土層・黄褐色砂層・褐色砂層の各層からは布留式土器が出土している。

SK03では、下層から、黒色粘土層から弥生後期中葉、黄褐色砂層から庄内併行期、黒灰色土層・黒灰色シルト層・黒灰色粘土層から庄内併行期の土器と布留式土器が出土している。



第5図 第1トレンチ土層断面図

付表1 第2次調査 層位名・番号対照表(第5・9~11区)

番号	層位名(層)	番号	層位名(層)
1	黒色粘土	42	暗灰褐色砂(細砂)
2	暗灰色土	43	灰褐色粘質土
3	茶褐色砂	44	灰褐色細砂(最下層)
4	黒灰色シルト	45	黒褐色細砂
5	灰褐色砂(灰褐色細砂)	46	灰色シルト
6	灰褐色砂土-暗褐色シルト互層	47	暗灰色土下層
7	暗灰色シルト-灰褐色砂土互層	48	盛土
8	白黄砂	49	褐色砂層
9	暗褐色粘土	50	乳灰色砂
10	黒褐色粘質土	51	淡灰色砂
11	黄褐色砂(黄褐色細砂)	52	赤褐色砂
12	暗灰色砂	53	暗灰色粘質土
13	暗青灰色粘土	54	黒褐色シルト
14	黄灰色粘土	55	赤褐色粘質土(鉄分を多く含む)
15	黄灰色砂(山砂)	56	表土
16	黄褐色粘土	57	暗褐色土
17	砂土	58	黒色粘質土砂礫
18	青灰色礫	59	黒茶色粘質土一砂互層
19	灰色粘土	60	茶色粘土
20	礫(黄褐色)	61	砂含む灰色粘土
21	青灰色粘土	62	砂塊を含む黒灰色粘質土
22	砂礫	63	黒色土一礫土互層
23	黄褐色土	64	暗黒褐色粘土一礫土互層
24	青灰色土	65	黒褐色粘土一礫土互層
25	黄茶色土	66	黒褐色粘土層細砂混じり
26	赤褐色礫	67	黒灰色粘質土礫混じり
27	茶灰色粘土	68	黒灰色粘質土砂混じり
28	黒青灰色粘質土	69	黒灰色粘質土多礫混じり
29	黒青灰色土	70	黒灰色粘質土多砂混じり
30	黄灰色粘質土礫混じり	71	灰色砂質土
31	乳白色粘土	72	乳白色砂
32	灰色粘質土礫混じり	73	黒褐色粘土砂混じり
33	褐色粘土礫混じり	74	褐色粘質土・青灰色粘質土ブロック混じり
34	黒灰色砂	75	灰白色細砂
35	粘質土	76	暗褐色シルト
36	赤砂	77	灰色粗砂
37	細砂	78	白灰色細砂
38	地山	79	青灰色細砂
39	黒色粘質土	80	黄褐色砂
40	緑色粘土	81	灰色細砂
41	黒灰色粘土(二次堆積)		

第2トレンチでは、SD10で下層から、また乳灰色砂層・暗灰色シルト・黒色粘土の各層から布留式土器が出土している。同じくSK11の黒色粘土・黄褐色砂層でも布留式土器が出土している。SD12では、暗灰色土・黒色粘土に砂を少し含む層・黒色粘土の各層から弥生時代後期中葉の土器が出土している。また、SD22の暗灰色シルトと黒色粘土の互層からは弥生時代後期後葉から庄内併行期の土器が出土している。

(2) 第1トレンチ検出遺構(第4図)

既存の普通教室とグラウンドの間で旧木造校舎の跡地にあたり、幅10m・長さ81mの校舎建設が予定された地である。第2次調査中最も面積の大きい調査区であり、南北11m・東西76mの調査トレンチを設定した。

検出した遺構は、平安時代に埋没した旧河道(SD01)と土塚状遺構(SK09)、古墳時代前期に埋没した旧河道(SD02)及びその周辺施設(SX08等)と、同時代と考えられる住居跡(SB05～07)などである。調査で出土した遺物も、第2次調査全体の過半数を占めている。

旧河道SD01・土塚SK09

19～22ライン上で検出した旧河道及び土塚状遺構である。現在、北側にグラウンドが造成されており旧地形をみることができないが、少なくとも本トレンチ内だけでも3か所の谷状地形を認めることができる。この遺構は、その内、中央部の谷地形にあたる。

SD01は、検出時の規模で幅7m・深さ0.75mの規模を有し、断面逆台形を示す。現状では14ラインあたりから緩やかに東に向かって下がり、19ラインを境に急に深く落ち込む。東の肩は、北の断面では攪乱部が多く不明瞭であるが、南の断面で土塚SK09を境に、急勾配で立ち上がる状況を確認した。トレンチ幅9mにわたり検出した。

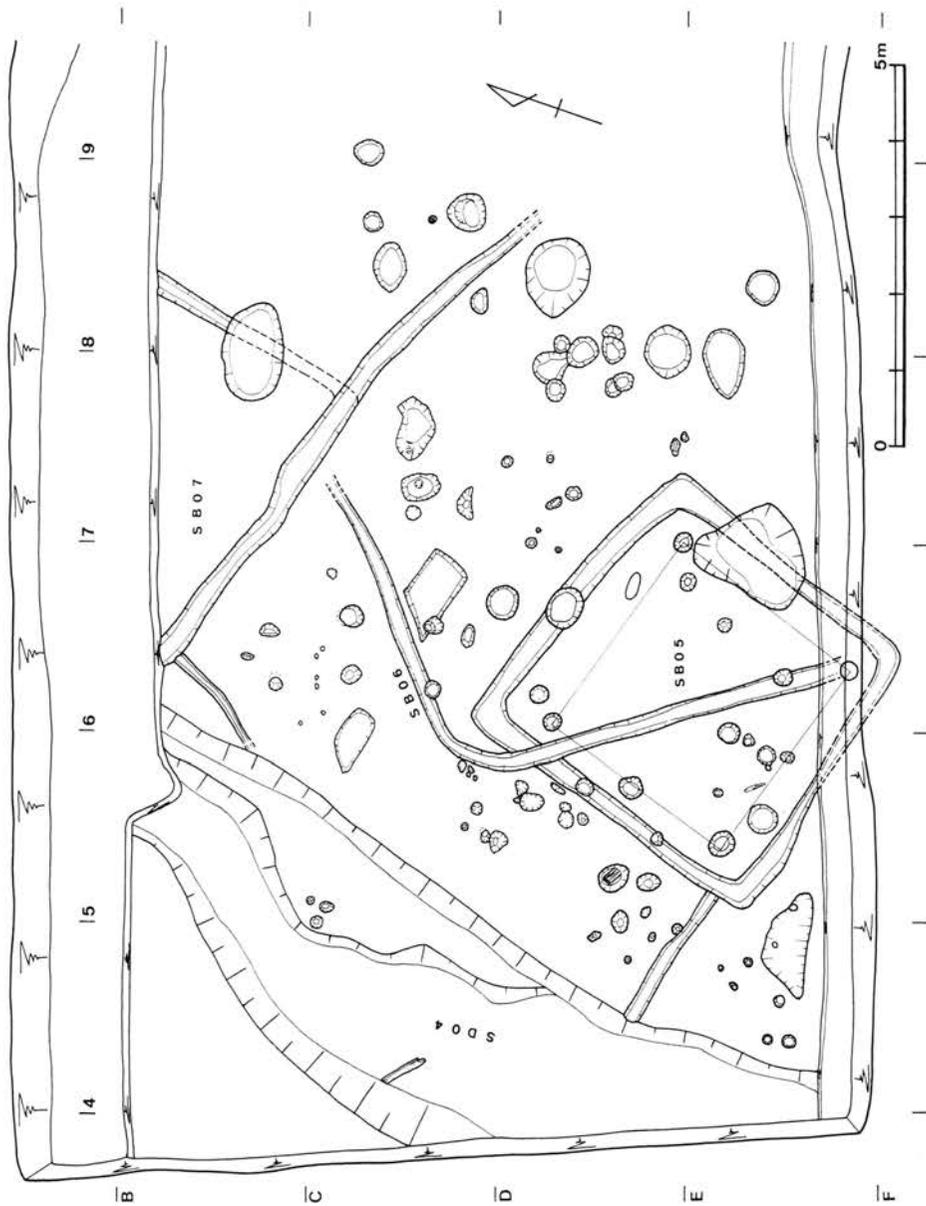
SK09は、SD01内の落ち込みで、検出規模は、直径1.3～1.5mを河底から深さ0.5mで、河道の肩部から1.3m掘り下げた井戸状の遺構である。SD01から水の引き込み溝が幅0.7mで検出されている。いずれの遺構も黄褐色礫層や黄灰色砂層(ベースの山砂)を基盤層とし、灰褐色砂層・暗褐色粘土により埋まっている。

両遺構からは、糸切り底の丹後系黒色土器が数点出土したため、この遺構の埋没時期はおおむね平安時代後期と考えておきたい。

旧河道SD02-1・2 (第7図)

SD02-1は、SD02-2が埋没した後の氾濫で、蛇行しながら暗灰褐色砂層を押し流して埋没した河道であることから1本の遺構として扱った。

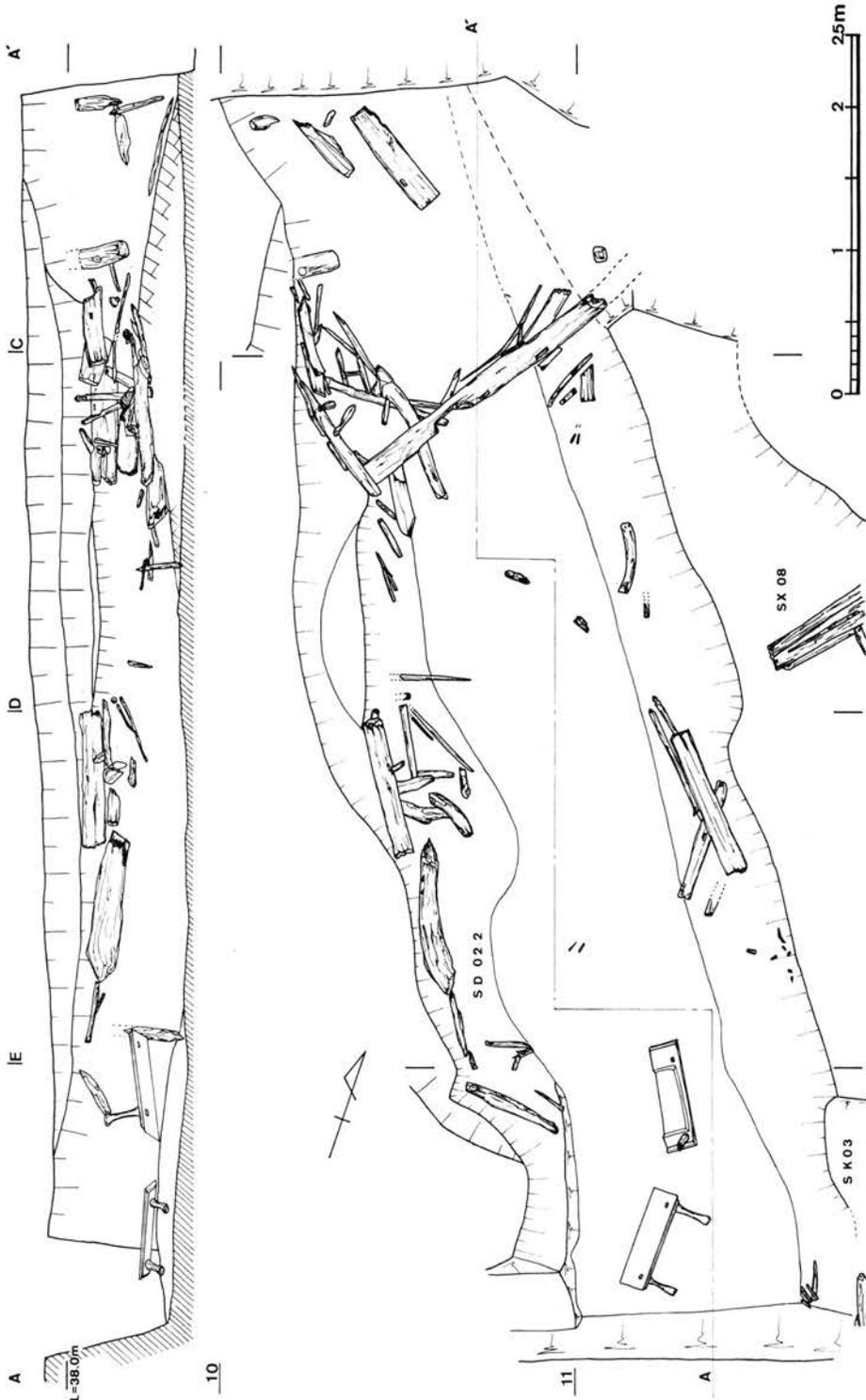
その流路は、8～10ラインで検出した、北東から南西に向かって流れる河道の最終形態であり、その規模は、検出時で幅3.5～4.0m・深さ0.1～0.3mを測る。断面形はごく浅い逆



第6図 第1トレンチ西部検出遺構実測図

台形状を示す。その範囲は、遺構形成時の状況からも特定し難いもので、おおむね暗灰褐色砂の範囲とその堆積の方向により推定した。この氾濫による流れ堆積は、第1トレンチでは住居跡SB05～07を覆っており、第2トレンチでは全域に及ぶ。すなわち、古墳時代前期の遺構面全体を覆っていることを確認した。

以上のことから、旧河道SD02-1は、古殿遺跡の古墳時代集落の終焉を示す遺構という



第7図 旧河道 SD02 実測図

ことができる。

SD02-2は、8～15ラインで検出した南流する古墳時代前期の河道である。SD02-1の右岸までをも含めると最大幅11m以上を測り、生活面での断面で約5～6mを測る。古墳時代前期の段階で護岸等に人の手が加えられ、比較的安定した状況を呈している。河底は、北断面で検出面から1.5m、南断面で1.2mを測り、上流の北断面でより広く深い。これは、後で述べる堰の構築によってもたらされた河道の変貌によるものである。断面の形状は、上方でなだらかに開くU字状を呈する。第2次調査中で最も多量の遺物が出土した遺構で、古墳時代初頭から遺物が投げ込まれはじめ、古墳時代前期には護岸工事と併せて堰が設けられている。

堰は河道の上流よりで検出した遺構である。まず上流から下流に向けて斜めに杭を打ち込み、その上流に土砂を積み上げたのち、盛土上に高床建物の転用柱材を流路に直交させて埋置している。その上部両岸には、上流で杭と板材を用いたていねいな護岸施設を施し、下流では丸太材や杭を用いて土留めの護岸を施している。堰の上部中央には、水量調整のためのくり込みが前記柱材に施されている。この堰の構築によって従来の平らな河底面が改変を受けることとなった。すなわち、堰の下流で滝壺状の深みが決られ、さらに下流では水が浮き上がるために河底がうねりをもって盛り上がっている。

SK03は、SD02-2の東岸南よりに堆積した土器溜りである。その範囲は極めて不明瞭であったが、南北2.5m・東西5.0mを測る。遺物は数層に分けて取り上げた。この遺構は、遺物の構成が層位によって時期差を指摘できるものと思われる。

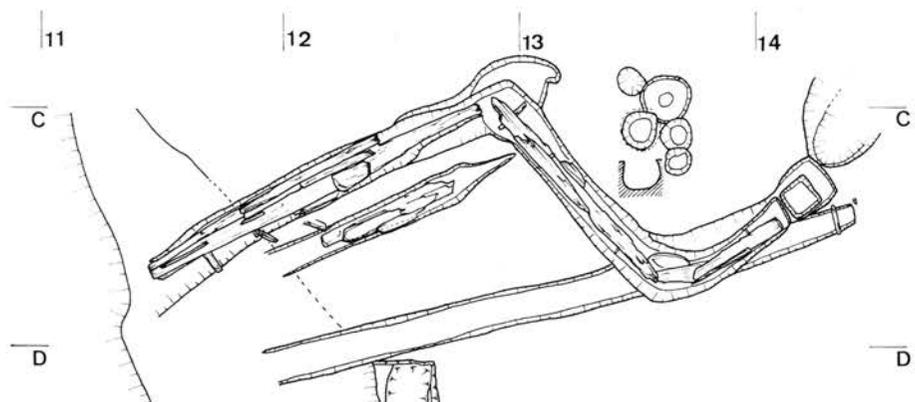
SD04 (第6図)

6ライン以西、第1トレンチ西端で検出した北東から南西に流れる河道である。検出幅1.7～3.0m・深さ0.6mを測り、断面V字状を呈する。遺構を埋めた土層の内、黒色粘土層と褐色砂層には包含する遺物の構成に逆転がみられる。これは、下層の褐色砂層が抉られた上に黒色粘土層が落ち込み、さらにその上に上流の褐色砂層が堆積したことによる。

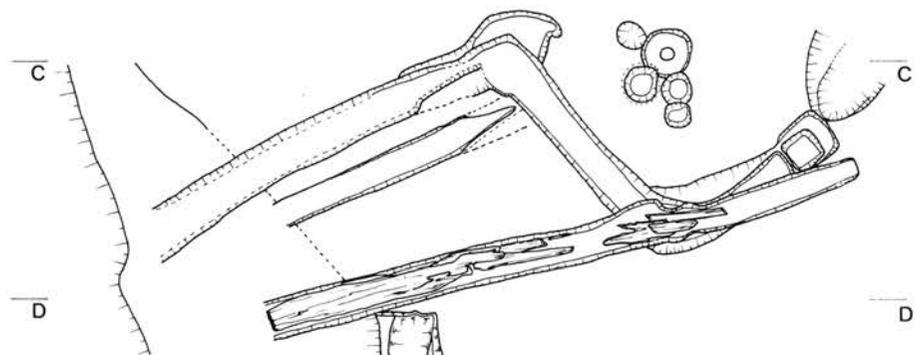
SB05～SB07 (第6図)

第1トレンチ西端からSD02までの平坦地内には、多数のピット群とともに、幅0.2～0.4mの細長い溝が、何本も切り合いをもちながら検出された。これらの溝とピット群は分類されて、3基の竪穴式住居跡と判断するにいたったが、不明な点も多い。

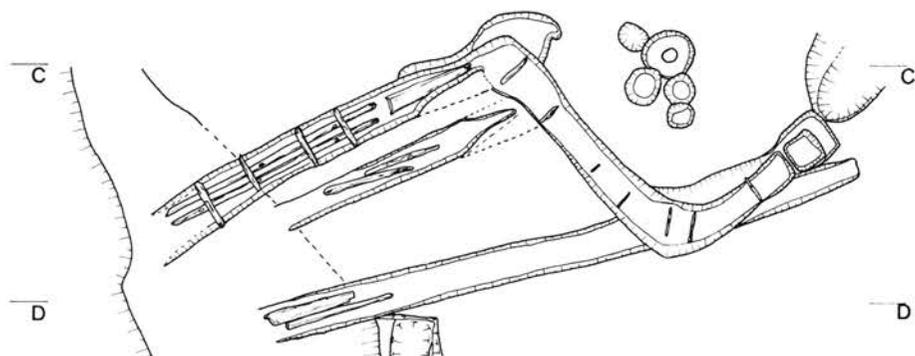
SB05は、SD04に並行する一辺をもつ幅0.3mの溝によって区画された、4.5m×4.2mの建物遺構である。一般的な竪穴式住居跡の平面形態をとるが、棟を支える間柱が検出されたことから、平地式の壁構造をもつ建物ではないかと考えられる。



1・2期施設上面実測図



3期施設上面実測図



各施設下面実測図



第8図 暗渠施設 SX08 変遷図

SB06・07はSB05廃絶後に建設されたものでL字状の溝を確認した。SB07はSB06以降の建て替えと考えられるが、SD04との切り合い関係を明らかにすることはできなかった。

SX08 (第8図)

検出当初、竪穴式住居跡の周壁溝と思われた溝状遺構は、調査の進行に伴って、三時期にわたる暗渠の排水施設であることが判明した。この施設は、幅0.4m・深さ0.2m程度の溝を穿ったのち、それぞれ針葉樹の板材や角材を組み合わせて木樋をつくり、周囲を粘土で巻いて漏水を防いでいる。Ⅰ期の水路は注水口の水溜めから2m下流で北に折れ曲がり、さらに2.5m下流でもう一度西に折れる延長8.5mの構築である。2回目の屈曲部の下流ではくり抜きの木樋を用いるなど、三時期中最もいいに構築されている。Ⅱ期では二回折れ曲がり、Ⅰ期の水路と同様の構造で7mを測る。Ⅲ期の水路は、最終的な改修で、Ⅰ・Ⅱ期の上面に、直線的に構築されており6.5mを測る。これらの水路の中には泥土の堆積が認められ、排水機能を失うごとに改修が行われたものと推察される。また、排水施設の流入口では、長さ10cm程度の杭を打ち込み、50cm×50cmの二段に掘り窪めた水溜め状の施設を確認した。さらに、その西では幅0.9mの溝状遺構を確認している。また、この施設の北よりには、直径40cm程度の袋状土壇などのピット群数基が穿たれているが、排水施設との関係は明らかでない。

(3) 第2トレンチ検出遺構

SD11 (第9図)

L・Mラインで検出した東から西へ流れる旧河道である。幅2.3～7.8m・深さ0.8～1.5mを測り、断面V字型を呈する。溝は、上流の東で浅く狭い。下流にあたる西では急に深くなり幅も広がる。

SK10 (第9図)

SD11の南岸に堆積した土器溜りである。その範囲は、極めて不明瞭であったが、南北1.5m・東西2.5mを測る。

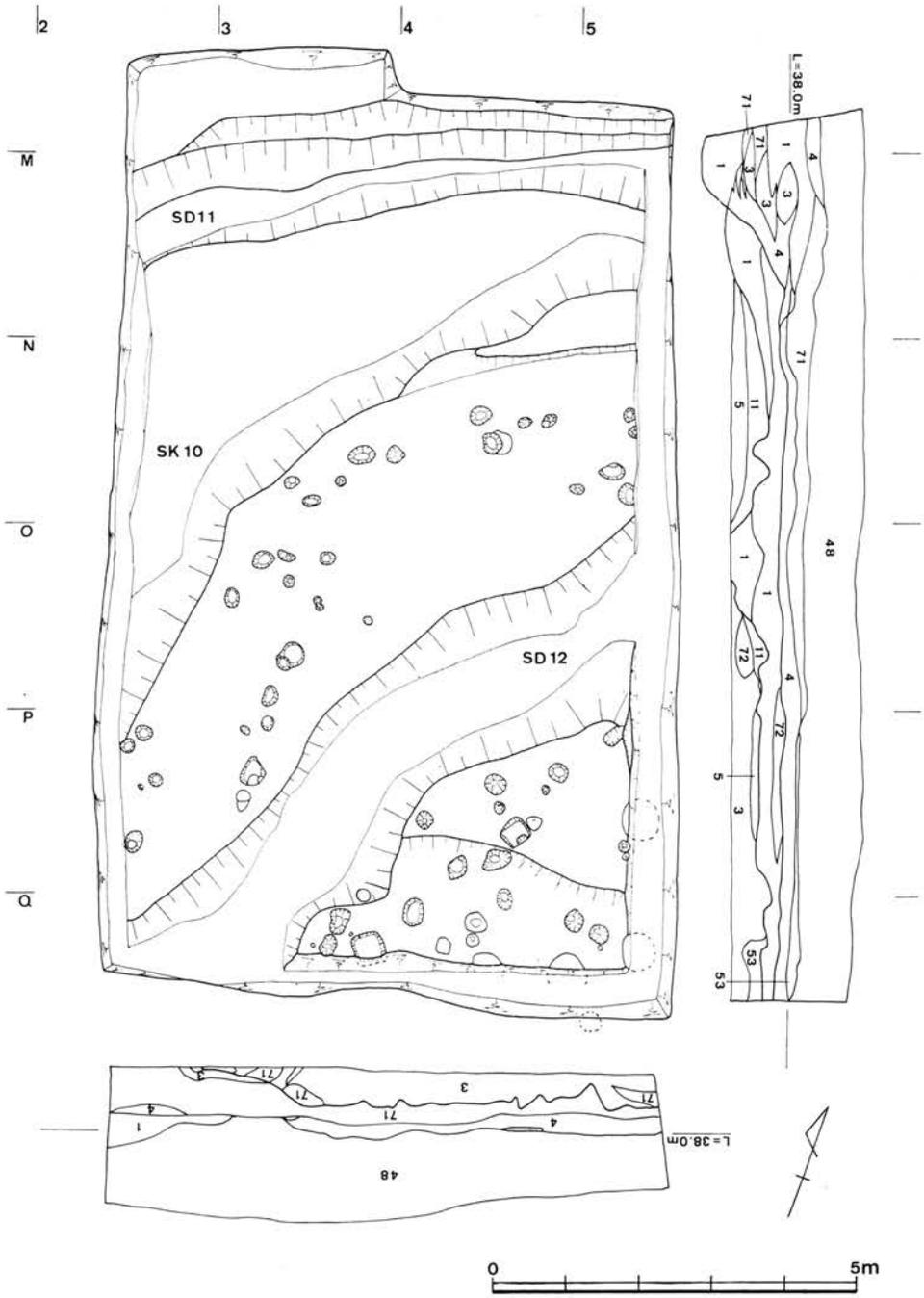
SD12 (第9図)

O～Qラインで検出した北東から南西へ流れる旧河道である。幅2～2.5m・深さ0.4mを測り、断面逆台形を呈する。SD11より古い層位を示している。

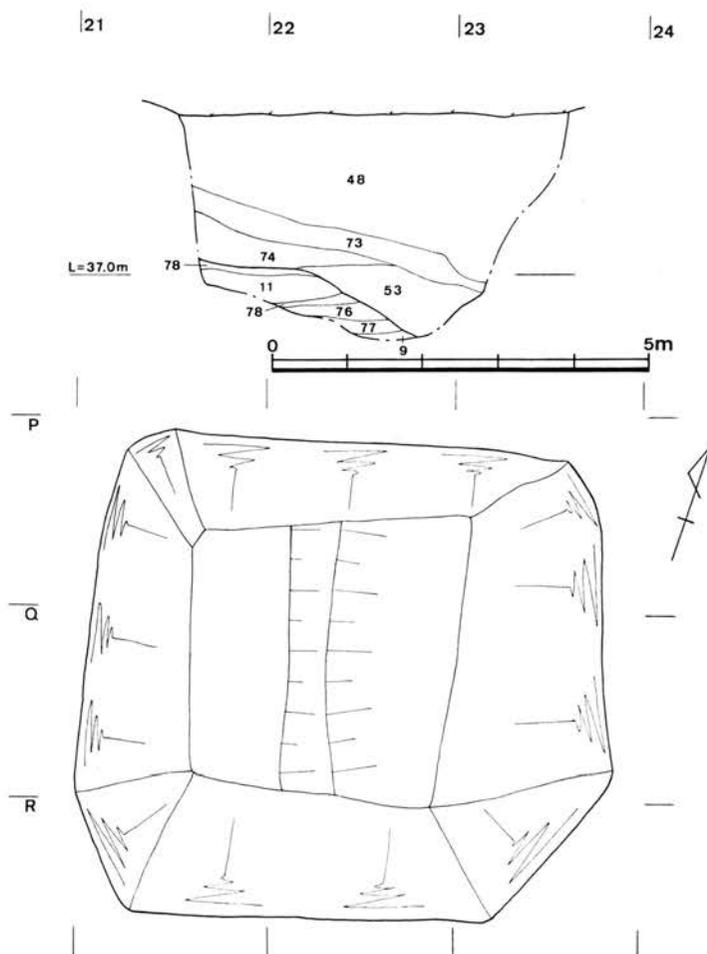
なお、第2トレンチ南半部では、第1トレンチのそれより一回り大きめのピット群を検出している。

(4) 第3トレンチ検出遺構 (第10図)

現地地表下3.2mで、東に向かって傾斜する地形の肩部を検出した。堆積層の中から、布



第9図 第2トレンチ実測図



第10図 第3トレンチ実測図

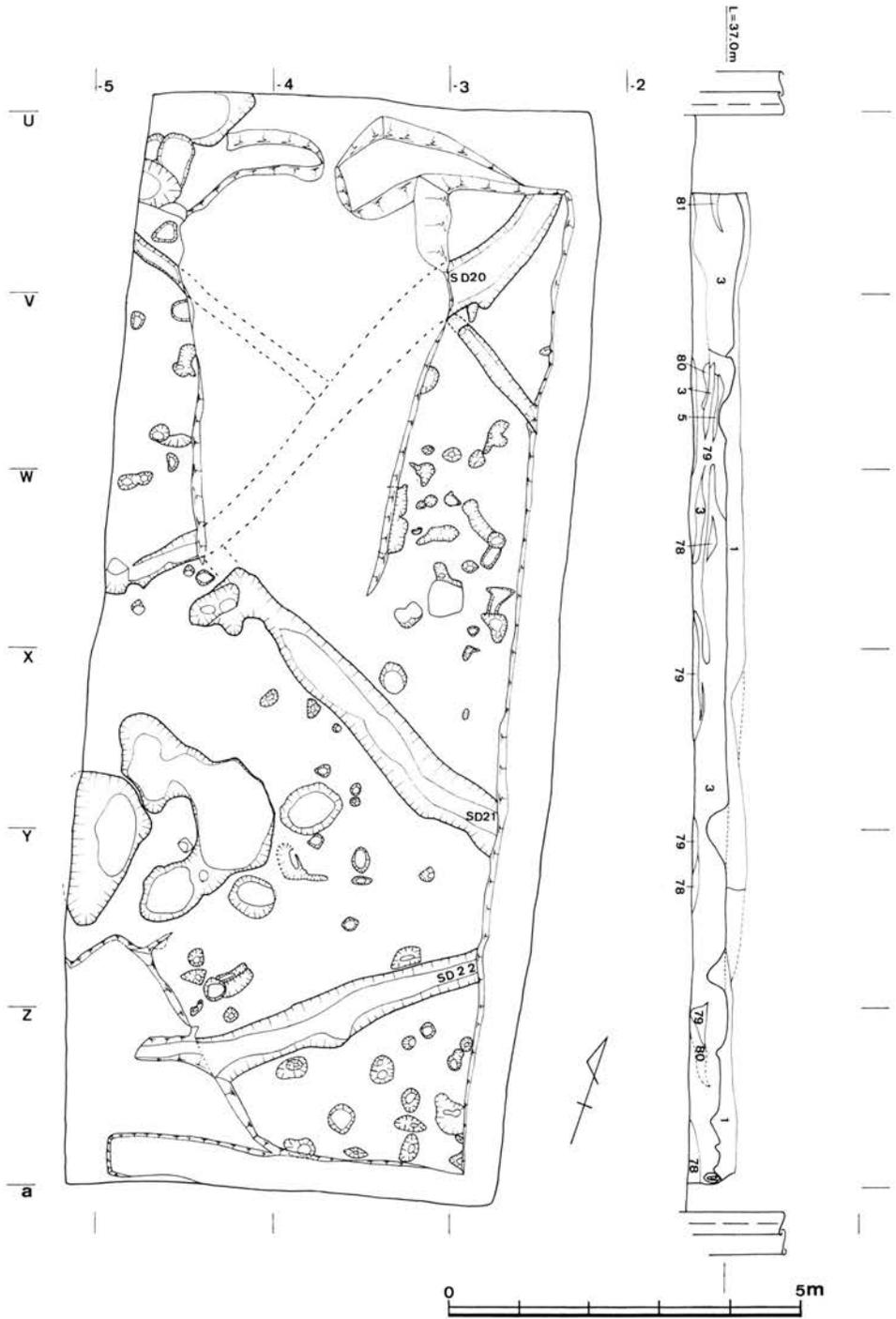
留式の高杯脚部が出土した。第1トレンチで検出したSD01もしくは、25～26ラインで検出した東へ向かって下がる地形の延長と考えられる。

(5) 第4トレンチ検出遺構 (第11図)

第1次調査地の南に設けたトレンチである。第1次調査のDトレンチで南に向かって大きく落ち込み、第2トレンチでは、SD11が南面に向かって下がっているため、第4トレンチの遺構面は相当深いものと予想された。しかし、現地表から1.0m程度の深さで包含層が確認され、平坦な面を検出した。

SD20・SD21・SD22

幅0.7m・深さ0.3m程度の溝で、集落内を縦横に流れる用・排水路であろうか。第1～3トレンチに比して、出土遺物が古い様相を呈している。



第11図 第4トレンチ実測図

SD20は、幅0.5～0.8m・深さ約0.3mを測り、途中で攪乱を受けながらも8.0mにわたり検出した。SD21はSD20と直交する溝で、幅0.7m・深さ0.3mを測り、5.5mにわたり検出した。SD22はSD20と並行する溝で、幅0.5～0.8m・深さ0.25mを測り、5.0mにわたり検出した。このほかにもSD20・SD22に直交する溝が2条検出されており、幅0.2～0.25m・深さ0.25mを測る(SD23・24)。(戸原 和人)

第3節 第2次調査出土遺物 土器

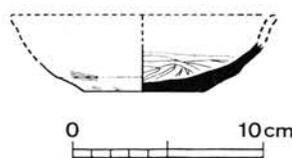
出土した土器は、弥生時代後期から古墳時代前期のものが大半を占めるため、これらの土器を中心に分類を行った。時期区分については、この地域に共通する型式名が成立していないので、便宜的に畿内の時期区分に従うこととする。すなわち、弥生時代・庄内併行期・布留式期の表現を使用する。これらの遺物のほかには、溝SD02-2から縄文土器、第1トレンチ包含層から古墳時代の須恵器杯身・甕頸部片、溝SD01内から、平安時代後期の黒色土器がそれぞれ出土している。

そのうち、黒色土器は、糸切りの平底で、底部から内湾して立ち上がる。口縁端部を欠くが、内外面にヘラミガキ調整が認められる(第12図)。

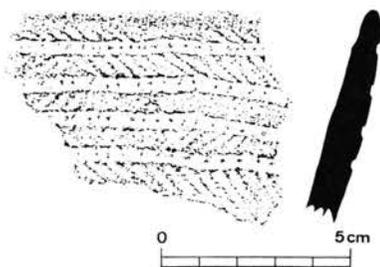
出土した縄文土器は、口縁部を含む破片である。溝SD02-2の最下層に上流からの流れ込みと考えられる状況で検出したが、それほど摩滅は受けていない。北白川下層式の羽状縄文土器である(第13図)。

(1) 土器型式名の設定(弥生時代後期から古墳時代前期の土器)

出土した土器は、その形態・機能から、供膳に使用される鉢・杯・高杯・器台、貯蔵及び供膳に使用されると考えられる壺、煮沸及び貯蔵、さらに棺に使用する目的で製作されたと考えられる甕と、小型で、供膳・貯蔵・及び祭祀の目的で製作されたと考えられるいくつかの器種に分類さ



第12図 黒色土器

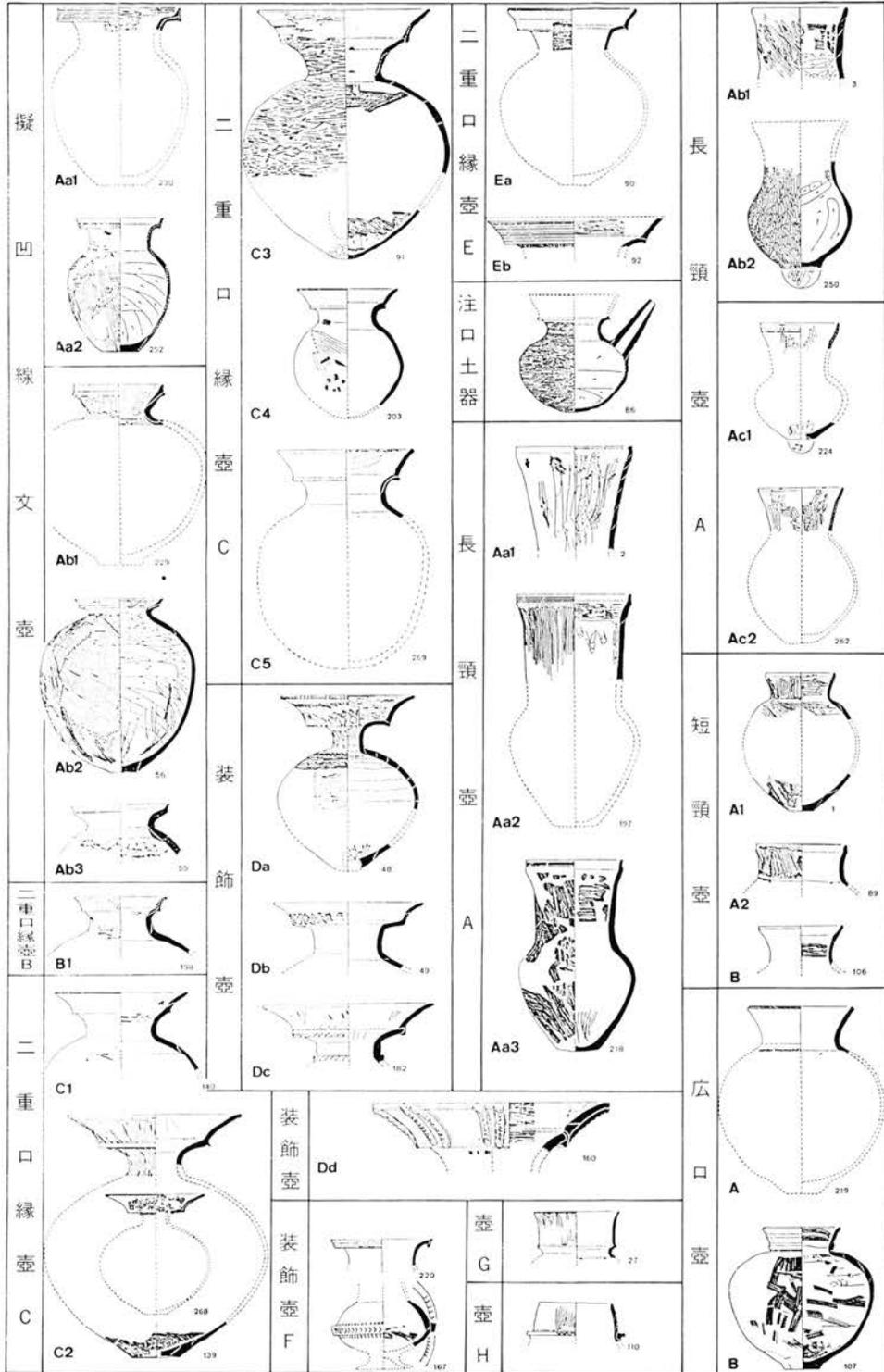


第13図 羽状縄文土器

れる。

壺は、その形態及び製作上の手法・技法により、擬凹線文壺(A・二重口縁壺(B・C・E・G)・装飾壺(D・F・H)・二重口縁注口壺・長頸壺(A)・短頸壺(A・B)・広口壺(A・B)・台付無頸壺の8種類に大別される。

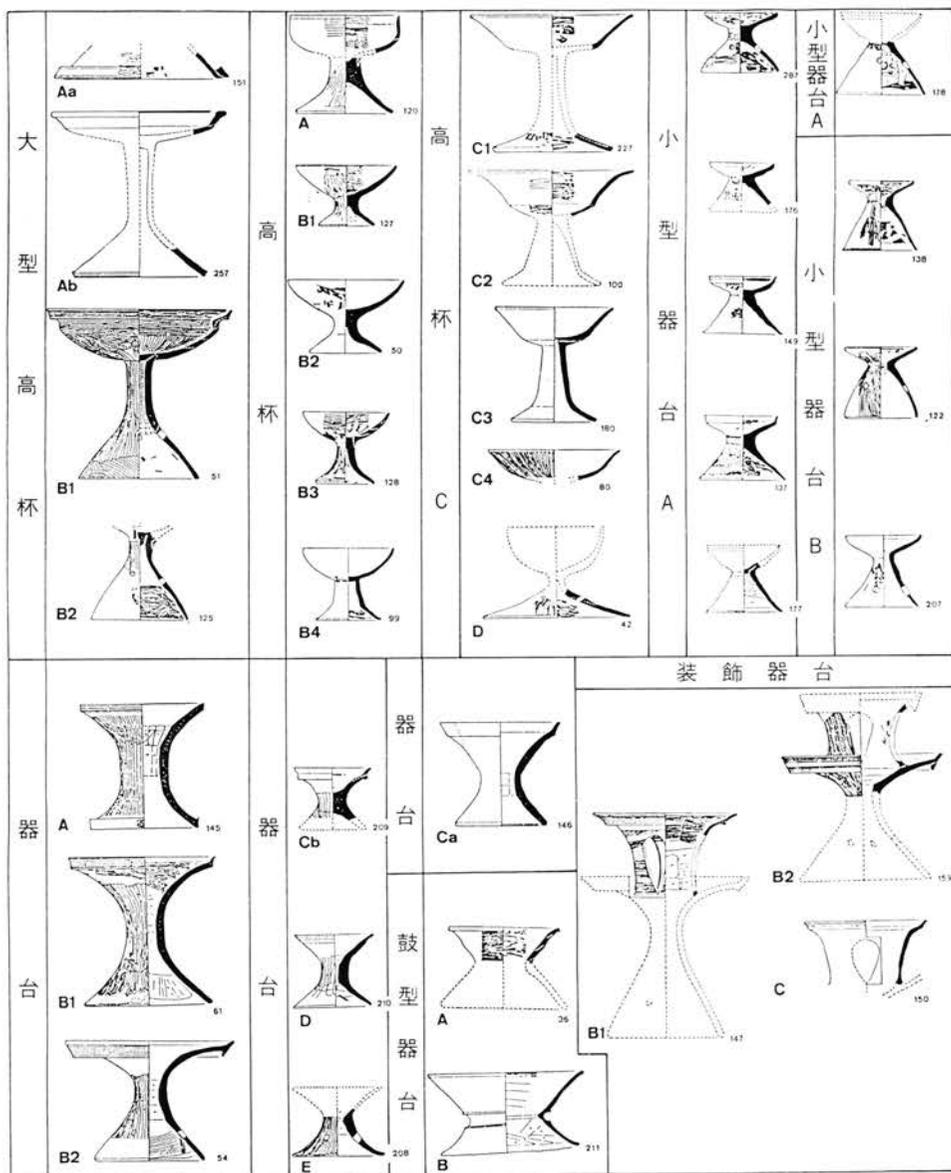
甕は、口縁部形態及び製作手法により、擬凹線



第14図 古殿遺跡出土土器型式分類表 (1)

鉢	A1		142	有孔鉢	A1		60	小型鉢	A1		135	台付鉢	A		124			
	A2		243		A2		97		A2		172		D		129			
	A3		25		A3		214		B1		45		B		242			
	B2		75		B1		40		B2		122		C		95			
	C1		76		B2		47		C		222		A		62			
	C2		41		C		53		把手付鉢		259							
C3		78	杯	鉢	D		29	台付鉢	E		158	把手付大型鉢	A		62			
B6		192			B6		165											
低脚杯		148	小型平底		235	小型丸底土器 C	C1		131	小型無頸壺	A		227	蓋型土器	A		251	
小型丸底土器 E	E1		226	C2			187	B			154	B			247			
	E2		152	C3			213	紐付穴鉢			195	小型底			215	型		120
	E3		156	台付無頸壺			132	ミニ器台			174	壺			136	土		181
	E4		188	鐺型土製品			217	ユア			136	台付鉢			216	器		194
	E5		189	鉢	鉢		鉢		200		鉢		196		鉢		200	器
	E6		212			鉢		206	鉢		206	鉢		206	器		123	

第16図 古殿遺跡出土土器型式分類表 (3)



第17図 古殿遺跡出土土器型式分類表 (4)

文甕(A)・複合口縁甕(B・C・E・H)・「く」字口縁甕(D・E・G・I)・長胴甕(A・B)・布留甕(F)の5種類に大別される。

鉢は、口縁部の形態及び製作手法により、擬凹線文鉢・「ナデ」口縁鉢・直口鉢・無頸鉢・二重口縁鉢の5種類に大別され、さらに、底部に穿孔のある有孔鉢、把手付鉢、底部に脚台の付く台付鉢に組み合わせられる。また、その大きさにより二分されるものがある。

鉢の形態をとるもののうち、明らかに土師器の範疇で捉えられ、その様相の明らかなものを杯として分類した。

高杯は、弥生時代後期から山陰地方及びこの地方で独自に発達した大型のA・B類、弥生時代からの一般的な形態のA・B類、畿内からの影響のもとに発達した庄内・布留式影響のC・D類などに大別される。

器台は、筒状の円筒部に上下がラッパ状に開く器形の土器である。一般に壺や鉢などの供膳土器を乗せるものと考えられる。また、小型のものは、それぞれ小型の器種を乗せたと考えられる。高杯同様、弥生時代後期から山陰地方及びこの地方で独自に発達したA～E類、鼓型器台A・B類と、畿内からの影響のもとに発達した庄内・布留式影響の小型品(A・B類)などに大別される。小型の器台については、時期的にその変遷を捉えることができていないので細分をひかえた。今後の課題としておきたい。

蓋についても、時期的にその変遷を捉えることができていないので小型器台同様、細分をひかえた。今後の課題としておきたい。

この他、小型丸底土器・小型無頸壺などがある。

以下、各器種ごとに分類の概要について述べたい。

擬凹線文壺は、その形態により2類に分類される。すなわち、やや太目の頸部にあまり肩の張らない胴部で平底をしたa類と、短く細目の頸部から短く立ち上がる口縁に肩の張った胴部で、小さな平底のb類とである。それぞれは、口縁部の発達に伴ってさらにいくつかに細分される。いずれの土器も器壁と口縁部内面を磨き上げることと、口縁部に擬凹線文を施すという手法で共通している。

二重口縁壺は、形態や製作上の手法が実に様々である。それが時期的・地域的な視点で細分することが不可能であったため、形態により大きく6類に分類した。

壺B・Cは、口縁部を強く横ナデし、屈曲した二重口縁Bから、しだいに口縁部が発達し、庄内併行期(C1～C2)を経て布留式期(C3～C5)の壺へ発展すると考えて位置づけた。

壺Dは、二重口縁壺の中で、口縁部や肩部を中心にあらゆる装飾を施したものを一括しており、細分は、系列性をもっていない。壺Ebとしたものは、擬凹線文を持ち壺Cと様相が違うものであり、別の分類とした。

壺Eとしたものは、前後の時期に係累のたどれるものがない器種であり、地域的な移動(搬入)の結果、存在する土器と考え、ここにまとめた。

装飾壺Fと二重口縁壺および注口土器は、山陰地方を中心とした分布をもつ土器で、これもまた搬入された土器と考えることができる。

壺Hは、全体の形状のよくわからない土器である。あるいは山陰地方の甕形土器の口縁であるかもしれない。

長頸壺は、弥生時代の系譜を引くもので、その形態により3類に分類した。a類は、平底で肩の張る胴部と、円筒状の頸部の先端で上方もしくは、内側に強くつまみ屈曲させ、端部を平に仕上げるもの(a1)と、端部を摘み上げた後、4～5条の擬凹線を施すもの(a2・a3)とがある。擬凹線を施すものの中には調整としてヘラ磨きを施すもの(a2)と、ハケ調整を施すもの(a3)がある。b類は、前記の壺に比べ、胴部の球形化が進んで頸部の立ち上がりが少なくなり、擬凹線を施すもの(b2)でも1～2条となる。c類では、胴部の球形化が更に進み、頸部は拡がり気味になる。

短頸壺は、平底で体部中央に最大腹径をもつ胴部と、短く立ち上がり端部を摘み上げる口頸部とからなる。b類としたものは、口縁端部の沈線の状況などから、あるいは長頸壺とした方がいいかもしれない。

広口壺は、頸部から斜め上方に立ち上がる口縁(a)と、平底で肩の張る胴部から二段に屈曲して立ち上がる口縁をもつもの(b)とに分類される。

擬凹線文甕は、口縁部の形態によって3類に分類した。すなわち、頸部から口縁部にむけ拡張して端部に面をなすa・b類と、頸部から屈曲した後に、粘土紐を引き上げて複合口縁を形成し、端部外面に擬凹線を施すc類とである。c類は、a・b類の発展した延長上にあると考えられるが、複合口縁としたことにより、このつぎに成立するナデ甕、さらに二重口縁甕に発展する画期とすることを認めたい。a類は、上下に拡張し、その上部がより強く拡張し、断面形が三角形になるものをbとした。それぞれは、口縁部の発達に伴って、さらにいくつかに分けられる。いずれの土器も、器壁を頸部まで削り込み器壁を薄く仕上げるが、C3・C4の段階で体部外面や、口縁部内面をヘラ磨きするものが現われる。

口縁部を強く横ナデするナデ甕(甕B1・B2)は、庄内期に並行する時期の甕と考えられるもので、前記甕Acの口縁端部を強く横ナデすることによって、上方に摘み上げた形状となる。Ac4の段階で体部外面や口縁部内面をヘラ磨きする手法は、この段階まで残り、底部も尖底ぎみになるが平底を残す。

二重口縁甕は、いわゆる山陰系甕といわれる甕で、庄内期から布留式期にかけ盛行する器種である。C1段階は、庄内期として捉え、C2段階を布留古式、C3・C4段階を布留式

中段階と考えた。

このほかに甕E・Hがある。甕F・Haは、吉備系の甕で搬入品と考えられる。甕Hbとしたものは、山陰系の大型甕で、棺としての機能を有しており、壺に分類することもできる。

「く」字口縁甕は、伝統的な器種で、平底の底部にあまり肩の張らない体部と頸部から「く」字に屈曲し、斜め上方に立ち上がる口縁とからなる。D1は、口縁部を上方に摘み上げ、体部外面にヘラ磨きを施す。この手法上の特徴は、壺Ea・甕B2・F1・Iに共通するもので、いずれも庄内期の特徴を示す。D2は、平底で、内面にヘラ削りを施すが、頸部内面にハケ調整を行うのを特徴とする。D3は、尖底ぎみの底部に内面ヘラ削り、外面ハケ調整の後、体部から肩部にかけてヘラ削りを施すのを特徴とする。

甕F1は、倒卵形の体部と斜め上方に開き端部を摘み上げる口縁部とからなる。体部内面は、横方向のヘラ削りで、頸部に一部ハケ調整の跡を残し、体部外面は、縦ハケの後肩部にハケを施す。口縁の特徴は、庄内式の影響が認められる。

甕Iは、腹径の張った胴部と、大きく屈曲し、口縁部内面を強くナデる特徴を有する。他地域からの搬入品である。あるいは播磨系の製品かもしれない。

このほかの「く」字口縁甕としては、長胴甕A・Bがある。Aは、粗い成形で、調整も口縁部と体部外面に簡単なナデを施すのに留めている。内底面に有機質の焦げ付が付着しており、煮沸器として使用したことが窺える。Bは、口縁部をやや摘み上げ体部外面に粗いヘラ磨きを施す。

布留甕は、甕F1を除く、F2～4を当てる。F2は、布留古相、F3は、中相、F4は布留式の範疇で捉えておく。

鉢は、その形態及び機能によって、鉢・有孔鉢・小型鉢・台付鉢・把手付鉢の5類に分類した。鉢A・B・Cは、擬凹線文をもつものをA、端部を摘み上げるものをB、口縁を強く横ナデするものをCとした。有孔鉢は、口径に比して器高の浅いものをA、口径に比して器高の深いものをB、口径に比して器高が深く口縁部を外方に屈曲させ、内面を強くナデるものをCとした。小型鉢は、底部平底で直口のものをA、底部丸底もしくは尖底のものをB、底部平底で口縁端部を摘み上げるものをCとした。台付鉢は、直口のものをA、「く」字口縁のものをD、口縁部擬凹線文のものをB、口縁部二重口縁のものをCとした。

杯には、二重口縁の杯と、低い脚を持つ低脚杯とがある。いずれも布留式期のものに位置づけられる。

大型高杯は、山陰地方の影響を受けながら、この地方独自に発達した形態を示す。A類は、弥生後期前葉から中葉にかけて発達した器形で、Aaは、古相を示す。B類は、後期後葉に発達した器形で、その口縁端部の形態・手法は、壺B2、甕Ab2、鉢A2、器台B1

に共通する。高杯A・Bは、弥生の伝統の中で発展した器種、C1・2・Dは、庄内式期のもの、C3・4は、布留式期のものとして分類した。

器台は、厚手の器壁で、筒状の円筒部に裾部端面を上部に引き上げ、端面に波状文を施したものをA類、筒部がくびれ脚部に比して受け部が大きく開くものをB類、受け部が屈曲して端部をナデるものをC類、筒部が円筒形で上下に均等に開くものをD類、中央部から上下に大きく開くものをE類とした。B類は、口縁端面の発達により細分し、C類は、筒部の技法の違いにより細分した。装飾器台は、口縁部形態差を器種の発達と捉え、器台B1→B2→C類の分類に従った。

(2) 第1トレンチ出土土器(図版第1～15)

溝SD04は、10層に分け遺物を取り上げた。最下層アハシ・ハカサゴド層出土土器は、壺A1・長頸壺Aa1・Ab1, 甕Aa2・Ab2・Ac1・Ac2・Ac3・Ac4・B1・B2・D2・G, 鉢C2, 有孔鉢B1・B2, 台付鉢, 器台B1によって構成される。次に、コネサド層出土土器は、甕Ac2・D・Iを主体とする。アカ・ハカサゴド層出土土器は、二重口縁壺G, 甕Ac1・D1・D2, 鉢A2・A3, 有孔鉢B1・器台Aによって構成される。コネサド層出土土器は、二重口縁壺B1, 甕C1, 鉢Dなどによって構成され、壺B1, 甕C1により下層との土器型式の変化に画期が認められる。コネサタド層出土土器は、鉢C2, 有孔鉢B1, 高杯Dにより構成され、高杯Dによって畿内庄内期との並行関係が窺える。サド下層出土土器は、有孔鉢A3などによる。サド層出土土器には、甕D1, 小型鉢B1などがある。ハカサド層出土土器には、甕Ac3, 有孔鉢B2などがある。コネド層出土土器は、装飾壺Da・Db, 杯, 有孔鉢C, 大型高杯B1, 高杯B2, 器台B2, 把手付大型鉢Aなどによって構成される。カサド層からは、擬凹線文壺Ab2・壺Ab3, 甕Ac2・Ac4, 有孔鉢A1, 器台B1によって構成される標識的な遺物が出土した。第2章第2節の遺構のところでも述べたように、それより下位のコネド層との逆転がみられる。

溝SD02-2は、16層に分け遺物を取り上げた。最下層サシド層出土土器は、二重口縁壺Ea1・Ea2, 甕Ac3・B1・C1・C2, 鉢B2・C1・C3, 大型高杯Aa・C3・C4, 器台B1, 鼓型器台B類によって構成される。高杯Aaの弥生後期, 二重口縁壺Ea1・Ea2の庄内並行期, 高杯C3・C4の布留式と遺物の混在が認められる。コネド層出土土器は、注口土器・甕C3などで構成され、注口土器の庄内期と、甕C3の布留式期との混在が認められる。ニハサド層出土土器は、二重口縁壺C3・Ea・Eb, 短頸壺A2, 甕C2・E, 有孔鉢A2・B2, 台付鉢C, 高杯B1・B4・C2・D, 鼓型器台B類, 蓋によって構成される。全体に庄内並行期の様相を呈する。アハシ・ハカサゴド層出土土器は、二重口縁壺B1, 壺H, 短頸壺B, 広口壺

B類, 甕Aa1・C2・C3・D1・D3・G, 長胴甕B類, 高杯Ac, 小型器台B類, 蓋などによって構成される。コネサド層出土土器は, 裝飾壺F, 台付鉢D, 大型高杯B2, 高杯B1・B3, 小型器台A類, 蓋によって構成されている。サシゴド層出土土器は, 甕C1, 小型無頸壺, 小型丸底土器C1, 小型鉢A1, 台付鉢A2, 小型器台A類, ミニチュア土器などによって構成される。サド層からは小型器台B類が出土している。コネサド層出土土器は, 壺C2, 器台A・Ca, 裝飾器台B1によって構成されている。器台Aは, 弥生時代の特徴を示し, 器台Caは, 古墳時代の特徴を示している。また, 壺C3と裝飾器台は, その形態・手法から, 庄内併行期の特徴を持つものとして捉えることができる。コネサド層出土土器は, 壺C1・C3, 鉢A1によって構成される。壺は庄内併行期の特徴を示し, 鉢は弥生後期の様相を呈する。コネサド層出土土器は, 甕C2を中心とする, 山陰系の二重口縁壺で, 在地系のもの, 鳥取県千代川流域からの搬入品によって構成される。布留式の古相を示す。コハネド・コハシド・コハイドの各層は, 混在しながらも概ね布留式期の土器によって構成される。オカサド層下面からは, 甕F2が出土しており, 布留式の古相を示しており, オカサド層出土土器は, 裝飾壺Dd, 器台B2によって構成される。カサド層からは, 甕C4が出土しており, 布留式期でも中葉の様相を示している。

土坑SK03では, 4層に分け遺物を取り上げた。最下層コネド層出土土器は, 裝飾壺F1, 甕Ac1・Ab2, 長胴甕A, 小型鉢A2・B2, 大型高杯Ab, ミニチュア器台などによって構成される。甕Ab2, 大型高杯Abなどによって弥生時代後期の時期が想定できる。

第1トレンチ包含層では, 9層に分け遺物を取り上げた。オカサド・コハド・サド上・コネド・コハシド・コハネド・コネサド・ハカサド・コネサドの各層からは, 弥生・庄内・布留の各時期の遺物が混在して出土した。

(3) 第2トレンチ出土土器(図版第16・17)

溝SD11は, 7層に分け遺物を取り上げた。最下層のサド層出土土器は, 二重口縁壺B1, 長頸壺Aa2, 甕Ac1・F1, ミニチュア土器によって構成される。二重口縁壺B1, 甕F1の構成により, 庄内期の古相の段階を想定できる。「サド下」層からは, 二重口縁壺C4が出土しており, 布留式古相を示す。アハシド層出土土器は, 二重口縁壺C4・G, 甕Ha, ミニチュア土器によって構成される。二重口縁壺C4により布留式古相を示す。オカサド層からは, 小型丸底土器のC3が出土している。

溝SD12は, 3層に分け遺物を取り上げた。最下層のアハド層出土土器は, 長頸壺Aa3で, 弥生時代後期の様相を呈する。コネサド層出土土器は, 広口壺A1, 裝飾壺F1, 小型鉢Cで構成される。アハシド層出土土器は, 甕Ac2, 大型高杯Ab, 高杯C1によって構成

される。この内、高杯C1は、上面の出土である。高杯C1を除くと、全体として弥生後期中葉頃の時期が想定される。

土器溜りSK11は、溝SD11との区分が不明瞭で、出土した土器も同期のものが大半を占めた。コネサド層からは、器台Cb, D, 小型丸底土器E6などが混在して出土した。

(4) 第4トレンチ出土土器(図版第18~22)

溝SD20は、1層で遺物を取り上げた。コネサド層出土土器は、長頸壺Acl, 甕C1, 高杯Ab, 器台B1によって構成される。甕C1により庄内期が想定される。

溝SD21は、2層として遺物を取り上げた。下層のコネド層出土土器は、擬凹線文壺Aa1・Ab1, 甕Aa1・Ab1・Acl・E・G, 鉢A2, 器台B1, 蓋, 小型平底土器, 小型丸底土器, 小型無頸壺などによって構成される。全体の器種構成により、弥生時代後期に比定される。コネサド層からは、台付鉢Bが出土している。

溝SD22は、1層で遺物を取り上げた。コネド層出土土器は、壺Aa2, 長頸壺Ab2, 鉢, 台付鉢, 把手付鉢, 高杯Ab, 蓋, などによって構成される。全体の器種構成により、弥生時代後期に比定される。この他、ピット群からは弥生時代後期の土器が、包含層からは庄内併行期から布留式期にかけての土器が混在して出土している。(戸原 和人)

第4節 第2次調査出土遺物 木製品

(1) 出土木製品の集計

第2次調査で出土した木製品は、登録したものだけでも992点にのぼり、その他の小片も含めると1,000点を越える。第1次調査でも300点を越える木製品が出土しており、古殿遺跡の出土品の中に占める木製品の割合がいかに多いかがわかる。

ここで扱う木製品は保存状態もよく、制作当時の状態をよく留めているが、その材質が有機質であり、千数百年を土中で過ごしているため、内部の腐食はずいぶん進行している。これらのことを考慮して、木製品については出土後ただちに洗浄作業を行い、現地で水槽をつくって保管することとした。現地調査が終了した後まず、木製品の整理からとりかかった。

(2) 第1トレンチ出土木製品

第1トレンチで出土した木製品のなかには、重機掘削の段階から出土したのも多くある。全体地区割りの前に出土したものについては、SD02-2の西肩を境にして、西地区と東地区で取り上げた。そのため、東地区の中にはSD02-2上層の遺物が多く含まれた結果

付表2 第2次調査出土遺物 木製品集計表

	1トレ西	1トレ東	SD02	SD04	SD08	SD11	SD12	2トレ	4トレ	不明	合計	品目別 頻度数	
工 具?	1		木釘 1			刷毛柄 ? 1					4	0.4%	
農 具?	1	鎌柄 1	鋤柄 鎌柄 1	1		杵 鎌? 1					7	0.7%	
紡織具	組具 2		糸車 ? 2	1		組具 ? 3		棹 組具 1	6		16	1.6%	
武 器			楯 1			刀柄 1		刀柄 1		刀柄 1	4	0.7%	
服飾具									下駄 1		1	0.1%	
容 器		? 1	案 蓋盤 4	2 ? 1	槽 1	蓋 1	盤 案 2		盤 ? 2		19	1.9%	
食事具	杓子 ? 3	? 1	杓子 3			播粉 杓子 2		? 4		杓子 1	21	2.1%	
土 木 建築材	板部材 材 3	板部材 材 1	板部材 材 2	9 2 3 3 1 98	部材 1	板部材 材 2	板部材 材 4	? 1	板部材 材 4	板部材 材 1	部材 礎板 1	272	27.4%
部 材	半加工品 3	箱その他 3	箱その他 3	1 14 4		その他 半加工品 11		その他 ? 2	4	— 他 1	51	5.1%	
雑 具	火板 火鑽 4	火杵 火琴? 1	? 2	? 1		火杵 ? 1		? 1		? 1	16	1.6%	
不 明	63	81	161		39	57		91	7	82	581	58.4%	
合 計	93	106	315	4	65	133	1	166	12	97	992		
遺構別 頻度数	9.4%	10.7%	31.7%	0.4%	6.6%	13.4%	0.1%	16.7%	1.2%	9.8%	100%		

となっている。この調査区で出土した木器は、土器同様、各調査区中最も多い。中でも、SD02からの出土は315点で、出土木器全体の約32%にのぼる。特徴的な遺物としては、堰遺構に転用された高床建物の柱材や案・盤などの什器類がある。中でも、四脚の案はこの遺跡を特徴づける遺物として特筆すべきものである。次に、東地区で取り上げたものが106点と多く、全体の約11%、西地区では93点で約9%、SD08では65点で約7%となる。第1トレンチ全体では583点で、出土木製品全体の約59%を占めている。

これを製品別に見ると、土木建築材が最も多く、全体で163点あり、16%を占めている。次に部材、雑具、食事具、容器、紡織具、農具、工具の順となる。

(3) 第2トレンチ出土木製品

第2トレンチでは包含層出土の木製品が最も多く、次いで溝SD11からの出土となる。包含層出土の木製品の多くは、第1トレンチSD02-1の下流での堆積とも考えられる様相を呈している。中でも大型の盤は、上流からの流れ堆積の砂層内から出土した。紡織具としたものは流された状況を呈しておらず、一か所にまとまって出土したため、一括品として扱った。この調査区で出土した木器のうち、特徴のあるものとしては、刀装具(柄部)が上げられる。本品は、調査区の東南隅の包含層からの出土品で、埋納施設等は一切確認されておらず、遺構との関わりで検討できるものではないが、古墳出土の木製刀装具の多くが腐食のため原形が不明であることを考えれば、貴重な資料といえる。

(4) 第4トレンチ出土木製品

この調査区から出土した木製品の特徴としては、柱穴内に埋置された礎板がある。調査域が狭く、周辺の遺構の性格が明らかでないが、少なくとも建築物が配されていたことが窺える。また、包含層から出土した下駄は、今回の調査中、唯一の平安時代の木器である。

以上、全体で出土した木製品を器種別にみると、小片であったり破損のため分類不可能なものが581点と最も多く、全木製品の半数以上を占めている。次いで、土木・建築材に分類されるものが多く、272点で全体の27%を占める。さらに、部材が51点となり、一点のみで全体の形状や機能が明らかにできないものが圧倒的に多い。しかし、器種分類できた製品の中にはその完成度がきわめて高く、当時の木工技術や文化を知る上において重要なものが少なくない。以下、分類した製品を器種ごとに報告したい。



第18図 案A1復原図

(5) 出土木製品

案

案は膳・卓の意味でテーブルとしての機能を有する。製作技法により、組もの(A)と刳物(B)の2種に大別される。案Aでは四脚のもの(A1)と二脚(A3)のもののが確認されており、このほか、三脚案(A2)が想定される。案Bでは二脚(B3)のものが確認されている。

案A1は、古墳時代前期の溝SD02からの出土である(図版第29, 002)。堰遺構の下流で天板が二枚に割れ、一方が上流側で一脚を上にした状態で、もう一方は二脚を下にし、それぞれが長軸を流れの方向にした状態で最

下面より検出された。層位的には中央部の砂層内にあたり、この遺構の中において最下層とすることはできない。

長方形の天板と四本の蹄脚からなり、両者は柄組で接合されている。天板の周縁は外反して立ち上がる曲面をもつ。底面の中央部には長方形の切り込みを施し、天板が湾曲するのを防いでいる。脚は一本を欠損する。天板との結合のために削り出された柄は、四方胴付で楔止め等の痕跡はない。断面形態は、上位で隅丸長方形、中位で楕円形の三角形、下位で長楕円形を呈する。全体の形状は、短側面側から見た場合、脚が外反するよう見え、長側面側では、脚中位では細く括れる。

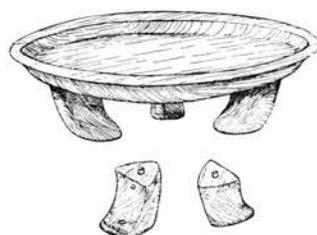
案A2については、前記の案A1(002)付近で脚が一本出土しており(図版第29, 002-5)、これと接合する天板としては、006もしくはこれと同様の断面を呈する円形の状態のものが想定される。^(注9)

脚は、断面楕円の三角形状を呈し、002の脚接合状況から考えて、^(注10) 平らな面を内側にして天板と接合されると考えられる。天板との接合には径0.6cmのダボが用いられ、脚部内側から目釘によって固定している。本品の特徴は、総木口取という材の木取りにある。すなわち、木材の年輪の方向に直交して縦材の木取りを行った後、断面三角形の各面に木口が現れるように削り出して木目を表面に表わす技法である。この木取りは力学的には大変弱く、他の製品ではこのような木取りをしたものは認められない。

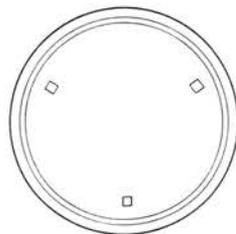
天板と考えられる製品は溝SD11から出土している(図版第30, 006)。柾目の木取りで、木目に沿った両辺を欠損している。本来、円形か楕円状の方形であったと考えられる。周縁は、残存する両木口面の観察によると、底部から大きく外反して端部に至り、周縁に幅をもった面を形成している。いわゆる「盆」の形態をとる。また、両木口底面には、周縁から内側に向かって半円形の浅い切り込みを施している。本品では脚との接合部は確認していない。

案A3は、溝SD02から出土しており(図版第30, 005)、二脚を欠く。

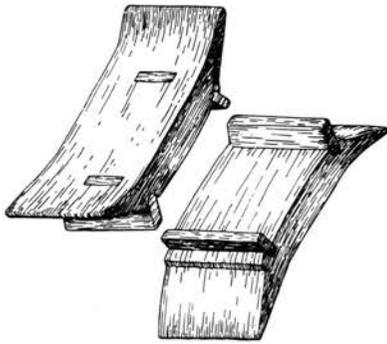
天板は長方形で、上面中央がやや深く削り込まれており、周縁で浅くなる。底部は、長辺に沿って底面がやや湾曲して立ち上がり、段をもって立ち上がったのち斜め



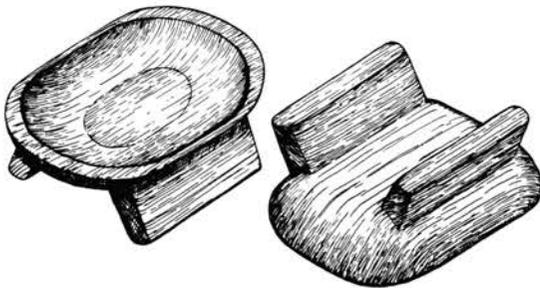
第19図 案A2復原図



第20図 三脚案
(広州漢墓5036号墓出土)



第21図 案 A3 復原図



第22図 案 B3 復原図

上方に開く。底部段のやや内側で、木目に直交した受け柄が両側に穿たれており、さらにその中央には通柄が開けられている。この構造から本来、板状の脚が着装されていたものと考えられる。

案B3は、溝SD02内の堰遺構の下位から出土しており(図版第30, 004), 半分を欠損する。木表を上面とする木取りで、脚は年輪の弧に沿った開きを持つ板造りである。脚付きの鉢(皿)ともいうべき形態をとり、楕円形を呈する。杯部上面は、中央がやや深く抉り込まれており、周縁で浅くなる。杯部外面は、周縁に沿って底部から湾曲して立ち上がり、端部を丸くおさめている。木口部付近では工具による削り痕を留める。

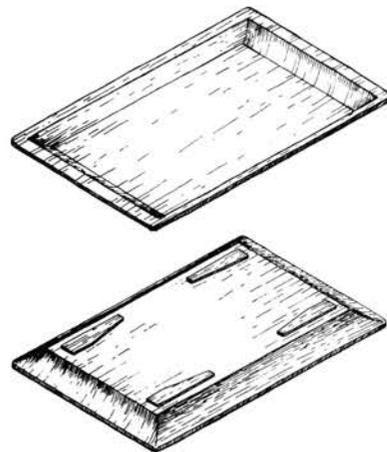
この製品は、中央部で木目に沿って破損した後、破面寄り3か所に方形の孔を穿ち、樹皮によって2~3

回緊縛した後、孔よりやや小さめの方形の楔を打ち込むことによって、両者をかたく締めて修復している。

盤

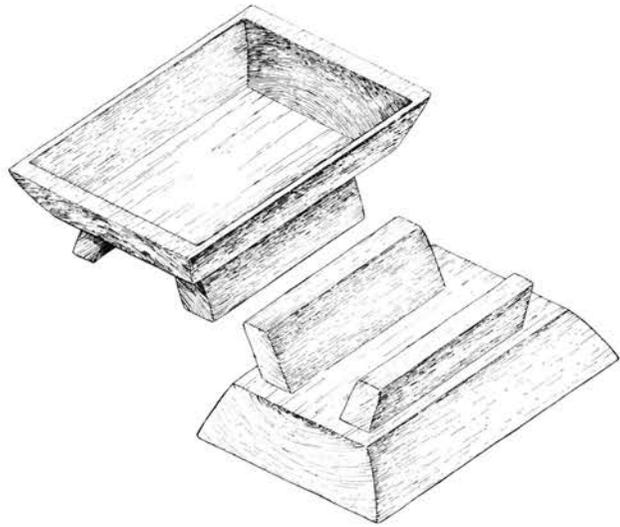
盤は、盆の形で供膳の道具と考えられる。すべて削り物である。大型で精巧な造りのもの(A)と、小型でやや粗い造りのもの(B)とに分けられる。盤Bは、さらに四脚盤(B1)と二脚盤(B2)に細分される。盤Aは、加工の仕上げが極めていいねいで、器表面が平滑に仕上げられているのに対し、盤Bでは外面や内面木口部などに荒削りの痕をそのまま留めている。

盤Aは、第2トレンチ包含層よりの出土で(図版第29, 001), 第1トレンチで検出した溝SD02-1からの流れ込みと考えられる。木目に沿って1/2欠損している。木裏を上面とする木取りで、側面は底部から138°で年輪の傾きに沿って外反しながら



第23図 盤 A 復原図

ら立ち上がり、側面の強度を確保している。木口面は、底部から152°で大きく外反しながら立ち上がる。四周には、上面と直交する細い縁をもたせている。上面からの削り込みは、側面・木口面とも直線的に施している。底部外面には、四隅に平面台形状の脚を削り出しているが、欠損のため脚高は不明である。また、側面の中位に二次的な削り込みが認められるが、用途は不明である。



第24図 盤 B2 復原図

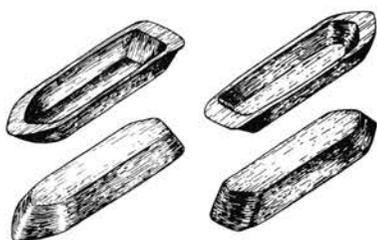
盤 B1は、溝SD10よりの出土である(図版第31, 009)。長側面が木目に並行して破損しているほか、木口面が木目に直交して切断されている。おそらく、鉄製工具(鋸カ?)による切断と考えられる。木表を上面とする木取りである。側面は、底部から127°で直線的に立ち上がったのち、上方に屈曲して周縁部に至る。木口は、底部から113°で直線的に立ち上がり周縁部に至る。底部には、長側面に並行して長方形の二脚を削り出したのち、これを中央部で削り込み四脚としている。脚部は、基部で欠損しており、全容を窺うことはできない。

盤 B2は、溝SD02よりの出土である(図版第31, 008)。長側面が木目に並行して破損しているが、木口面の一部が周辺から出土し接合している。木表を上面とする木取りで、側面は、底部から120°、木口は、底部から115°でそれぞれ直線的に立ち上がる形状となる。底部には、長側面に並行して長方形の二脚を削り出しているが、基部で欠損しており全容を窺うことはできない。

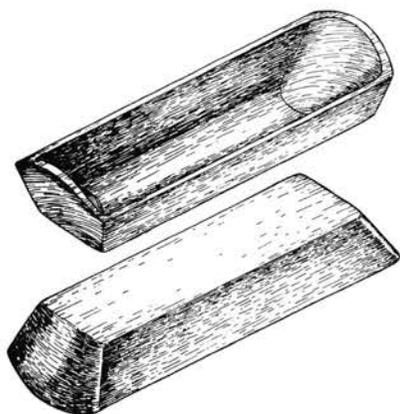
槽

容器の一つである。液体や個体などを盛る機能を有する。今回の調査では3点出土しており、すべて削り物である。内外面を薄く削り出して船の形に似せたもの(A)と、木口に角度を持たせて直線的に削り出して触先としたもの(B)、両木口を側面と直交させ内面を緩やかな曲面で削り込んだもの(C)に分類される。

槽 Aは、溝SD04からの出土で、破片2点がある(図版第30, 007)。器壁の厚さが0.6cm



第25図 槽 B 復原図



第26図 槽 C 復原図

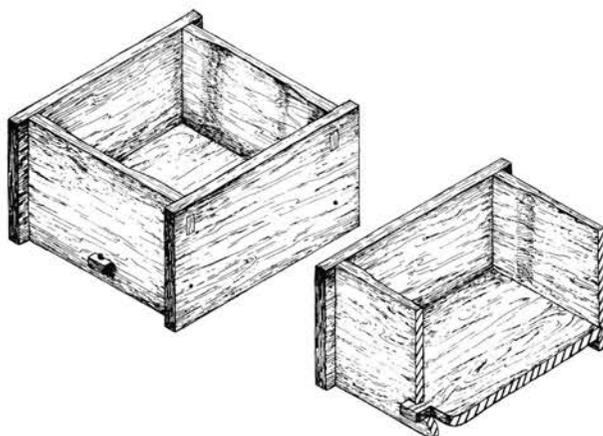
程度の小片であるため、全体の形状を窺うことはできないが、極めて薄く削り出していることから精製品であると考えられる。

槽 B は、第 2 トレンチ包含層からの出土である(図版第 31, 010)。長側面が木目に並行して破損している。いわゆる船型を呈する形態をとる。木表を上面とする木取りで、舳先にあたる木口は、底部から 139° で直線的に立ち上がり、段をもって屈曲したのち周縁に至る。鱧にあたる木口部では、緩やかに内湾しながら立ち上がる。上面には外面と同じ曲面で長さ 24 cm ・幅 6.0 cm の削り込みを深さ 2.4 cm 穿っている。内底面は、舳先部で少し凹むほかは平ら^(註1)である。

槽 C は、第 2 トレンチ包含層からの出土である(図版第 32, 011)。長側面が木目に並行して破損している。木表を上面とする木取りで、側面は、底部から 11° で直線的に立ち上がる。木口は、底部から 130° で直線的に立ち上がり、上縁部では緩やかな曲面をもって中央が高まる形状となる。上面には外面と同ラインで削り込みを施している。内底面は船底状を呈する。外面や内面木口部には、盤 B と同様に荒削りの痕をそのまま留めている。

箱

容器の一つである。組物で、液体や個体などを盛る機能を有するが、ここではその構造から個体を入れる製品と考えておきたい。使用用途としては、升等の計量容器の可能性を指摘しておきたい。第 2 次調査では、第 2 トレンチ包含層から小口板が出土している(図版第 32, 012)。本品には板目材が使用されている。内



第27図 箱 復原図

面の下位には、底板を受けるための受け枘が穿たれており、さらにその中央には通枘が開けられている。側面の上位には側板との結合のための出枘を削り出しており、右側面下位にはダボが認められる。内面には底板から上部で板面を削り込んでいる。これは、容積の調整をしたものと考えられる。

円板

桶底や蓋などの用途が考えられる。大型で周縁に稜をもつもの(A)と、小型で周縁の断面が三角形になるもの(B)とが出土している。

円板Aは、暗渠(SX08)からの出土で(図版第32, 013)、この施設で転用材として使用されていたものである。磨耗のため、長軸部分が製作時の面を留めているかどうかは明らかでない。周縁部のほとんどを失っているため不明な点が多いが、残存部から多角形(9角)に成形されていたと考えられ、直径54cm程度に復原される。表面には木目方向にていねいな削り調整を施したのち、黒漆を生地に直接塗装している。単独で使用されたか、組具の部材の一部であったかは不明である。

円板Bは、第1トレンチ包含層から出土している(図版第32, 014・015)。柾目材を使用しており、木目にそって1/2を欠損しているものと、別に小片が一点出土している。平面は、ほぼ円形の板造りで、周縁部を幅2.2cmにわたり断面三角形に削り出す。^(注12)

杓・杓子

杓子には、身部と柄部の境で段のつくもの(A)と、つかないもの(B)とがあり、飯や汁(液体)をついだり攪はんするときに用いられる道具である。杓では柄の部分が出土している。また、これの未製品と考えられるものも出土している。杓子Aは、さらに身部が長く柄部の細いもの(A1)と、身部が広く柄部の太いもの(A2)とに細分される。杓子Bは、その大きさから大(B1)・中(B2)・小(B3)に細分することができる。

これらの機能としては、杓子Aが飯などの盛りに、杓子Bが攪はんにそれぞれ適した形態と考えられる。

杓柄は、第2トレンチ包含層からの出土である(図版第33, 016)。心去り材を用い、野球のバットに似た形態となる。杓側の先端部には、突起が削り出されており、杓部との接合の柄と考えられる。製品として完成したものかどうかは不明である。

杓子Aは、3点出土している(図版第33, 018・021・022)。いずれも、第1トレンチ包含層の出土で、住居域周辺に集中している。A1には身部が焼失したものもある(022)が、完形品を観察すると、先端部がよく磨耗している。A2は、柄部を欠損しており全体を窺うことはできないが、A1より厚手である。身部の先端は、木目に沿って破損しているが、本来は平らであり、ハケの柄とも考えられる。

杓子Bは、6点出土している(図版第33, 017・019・020・023・024・027)。第1・第2トレンチの溝及び包含層からの出土で、この製品には保存状態の悪いものが多いが、024では先端部の磨耗が激しいことが観察される。これらの製品の大きさの違いは、使用する相手の容器の大きさに対応するものか、または使用する作業の違いによるものかの、いずれかによるものと考えられる。

雑具(発火具)

火をおこすときに用いられる道具である。発火具は、火鑽板(火鑽臼)と火鑽杵とによって構成される。火鑽板に残る火鑽臼(発火部)の径をみると1.1~1.2cmを測り、火鑽杵033の発火部の径1.0cmとよく一致する。火鑽板は、側面に1.5~3.0cm毎に細い切り込みを施し、その頂部平面の少し内側にわずかな窪みを施していたと考えられる。側面の細い切り込みは、杵の回転による摩擦の際、温度を上げる役割を果たすのと、擦り切りによって生じるオガクズを一か所に流しだす役割をもっている^(注13)。

火鑽杵には心去り材を用い、径1.0cm程度の棒状に加工したものである。身部に摩耗した痕跡が認められるものの、回転のために紐などを使用したかどうかは不明である。この第2次調査では、火鑽板4点、火切杵4点が第1トレンチ包含層から出土している(図版第34, 028~035)。

紡織具

糸を紡いだり布を織るための道具である。紡錘車は、第2次調査では確認していない。棒は、糸がもつれないように巻くための道具である。布を織る道具としては、開口具(綜統・中筒)・緯越具・緯打具・経巻具・布巻具等によって構成される。第2次調査では、機織具としての製品は確認していないが、弥生時代以来の原始機として使用することが可能な製品をいくつか確認できる(図版第35・36)。図版第35の037以外の製品は、第2トレンチで一か所からまとまって出土したもので、一連の作業に使用されていたものと判断される。036は、上端を二次的に切断されていると考えられ、中央に径1mmの四孔を穿っている。これを中心に下端で反転した復原値が約24cmを測る。機能は不明である。038は、棒で上下幅38.5cmを測り、糸の一巻きが77cmとなる。第1次調査でも同形態の棒が出土している。この製品では、上下幅35.4cmを測り、糸の一巻きが70.8cmとなり、古殿遺跡では二種類の棒が使用されていたことがわかる。039~042は、いずれも端部が欠損しており、全体を窺うことができないが、042では37cm以上あったことがわかる。これらの使用用途としては紡錘車の軸、綜統、緯越具などが考えられる。037は、第1トレンチの住居区域から出土したもので、21cmを測る。使用された機能は明らかでないが、その形態によって一応紡織具の範疇に置いておく。

043～048は、いずれも両端にくびれを作っていることを形態上の特徴とするが、長さによって、A群：52～57cm(043～045)とB群：43～45cm(046～048)の二群に大別される(049は鎌柄と確認された)。さらに、断面形により1類：半円形(044・046)、2類：板状(047)、3類：棒状(043・045・048)の3類に分類される。A群とB群は、長さによって規制されており、それぞれの群は、断面形態の違った製品の組み合わせによって構成されている。1類は、比較的ていねいに仕上げられている。二本を用いて平面側に布を挟み、組み合わせれば布巻具として使用することが可能である。2類は、板状の形態から中筒として使用するのに適している。3類には簡単な加工のものが多く、中筒に使用するには不相当と考えられる。経巻具に使用することが可能であろう。この他にも全体の規模の分からないものが多数出土している。大形で全体の形状が明らかなものには、全長69cmのもの(104)と87cmのもの(105)があるが、紡織具とは考え難い。^(注14)

農具

鍬・鋤の柄・杵・鎌柄などが出土している(図版第36・37・38)。第1トレンチ溝SD02と第2トレンチ溝SD10からそれぞれ出土した鍬は2点あり、芋本氏分類によるⅢ形式の範疇に入るもので、畿内周辺部の特徴を有している。^(注15)破片であるため全体の形状は不明であるが、柄の着装部に舟形の突起を持ち、中位が細くくびれる形態となる(066・067)。

鋤の柄は、心去り材を使用し、径2.3cm・長さ10.5cmを測る。握部中央には0.5cm×1.5cmの柄を穿ち、柄部との接合を行っている。また、握部には使用による摩滅を留めている。杵は、2点出土しているがいずれも全体の形状を窺うことはできない。063は、心持材を使用しており、先端部には使用による摩滅痕を留める。握部の形状は不明である。064は、先端部のみの残存で、途中から切断されている。刃材を使用しており、063より大振りである。鎌柄は、第1トレンチ溝SD02内の上層からの出土である(049)。当初、紡織具の範疇に分類したが、有頭の基部に穿たれた幅4mm・長さ4cmの柄穴から鎌の柄であると判断した。^(注16)

土木・建築材

建物の部材や、護岸・暗渠施設等に使用された部材・転用材も含め、数多くの木材が出土している(図版第39～48)。^(注17)その出土量は木製品全体の27.4%で3割近くを占める。

暗渠施設に使用された木樋は、各種の部材から構成されている(013・069～081)。079は、最上位に位置する水溜め状遺構の注ぎ口に打ち込まれた杭である。対になるものは検出していないが、杭の上部に柄穴を穿ち桜の樹皮が通っていたことから、堰状の施設の一部であったと推察される。上部を欠損するが心去り材を使用し、粗い削り出しによって先端部を造り出している。溝に直交する方向で0.6cm×2.6cmの柄が開く。

081は一木の木樋に使用された部材で、一木の削り抜きによって断面「コ」字状に製作されている。これと連続して組まれた木樋の部材が069～071である。中でも070・071は建築部材の転用品で、初期に使用された建築材の構造をよく留めている製品である。070は、基部から13cm、56cm、101cmの位置にそれぞれ枒を穿ち、さらに125cmのところでは約45°に片流れの切り落としを施している。071もほぼ同様で、基部から14cm、62cm、106cmの位置にそれぞれ枒を穿ち、さらに122cmで約45°に片流れの切り落としを施している。これらの製品は、建物の側柱などの用途が考えられる。そうであれば、枒孔は棧木を通すためのものと考えられる。

084は、溝SD02に横架し、堰の部材に使用されていたものである。高床建物の柱材を転用したもので、初期に使用された建築材としての構造をよく留めている製品である。中位で正確に半截され、上半部が半円形、下半部が円形の断面となる。この構造から下半部が床下、上半部が壁面となることがわかる。すなわち、半截によりできた床の受け部には束柱が乗り、その上に床が貼られる構造となる。上半部の側柱になる部分には東部から55cm、110cm、154cmにそれぞれ半截面に平行した受け枒を穿っている。また、東部から下に約1.2mで腐朽が著しくなっており、土中に埋設された部分をこのあたりに求めることができるならば、高床の高さを考える上で重要である。

082・083は、建物の部材としての用途が考えられる。082は、叉珠として使用することが可能である。有頭部のくびれ部を片面のみ挟み、先端部をやや膨らませている部分は、棟木に当てがい緊縛するのに、都合よく製作されているといえる。心持材を使用しており、径8.4cm・残存長17cmを測る。また、083は、棟持ち柱としての用途が想起できる。頂部の二又は、棟木を受けるのに都合よく切断されており、その角度は柱の軸に対して各々約45°となる。この角度が屋根の勾配と関係しているものと考えれば、建物の復原を行う上で示唆的である。心持材を使用しており、径10cm・残存長72cmを測る。木の表面には樹皮をそのまま留めている。

085～088は、礎板である。085は、第1トレンチの柱穴の底に埋置されたもので、板面には柱の当たりが明瞭に残っている。086・087は、第4トレンチの柱穴の底に埋置されたもので、同様に板面に柱の当たりが明瞭に残っている。088は、溝SD22から出土したものであるが、前例同様、板面に柱の圧痕を留めていたことから、礎板として使用されていたものと判断した。

図版第43～45は、板材である。溝SD02と溝SD11からの出土が大半で、大量に一括投棄された状態で出土した。089・102は、同一の形態を示す。幅狭の板の片側の隅を斜めに切り取り、089では端部に1か所、102では80cmの間隔で2か所に枒を穿っている。094も含

め、建物の妻部屋根付近での使用が考えられる。

089・102は、同一の規模を示す長さ76cm・幅15～20cmを測る大形の板材である。089では、木口の一方に14cmの間隔で2孔を、側面に沿って60cmの間隔で2孔をそれぞれ穿っている。側面の穴の間隔は、高床柱のそれに近く、板壁材として使用された可能性もある。

096～098は、厚手の辺材を使用し、板の片側隅を深く内反りに切り取る。いずれも粗い加工痕を留める。

このほかに、板の破材に方形の柄穴を一定の間隔で穿つもの(114)や、2孔一対で穿つもの(115)などがあるが、破材のため全体の形状等を窺うことはできない。

103は、溝SD02の堰の上流右岸の護岸のために打ち込まれた杭である。上部を有頭状に造り出しており、堰の構造に関わるものかもしれない。心去り材を使用し、全体に粗い造りである。このほかにもいくつか杭が出土しているが、いずれも他の木製品同様、鉄製工具によるとみられる加工痕を留める。

089・102は、同一の形態を留める。細く削り出した先端部の平らな面に柄を穿ち、先端部を丸く収める。保存状態のよい109で見ると、上部の柄に対して直交する柄を設けていることがわかる。いずれも心去り材を使用し、粗い造りである。

103は、木針の形態を示す。下端を細く尖らせ、上部が太くなる。上部のやや下段に方形の柄を穿つ。心去り材を使用し、比較的ていねいな造りである。本来の木針よりかなり大形で、用途は不明である。

武器

本来、戦闘の目的に使用されるものであるが、ここでは儀器との判別は保留している。盾と考えられるものや刀装具(一般工具の柄などもふくめた)と考えられる柄などが出土している。

127は、溝SD02からの出土で、盾と考えられる製品の一部である。厚さ1cmの板目材を使用し、木表を表面とした木取りである。断面は、木目に沿って緩やかにカーブを描いており、この製品が弧状に製作されていたことがわかる。側面は、下端の一辺のみの残存で他の三辺は破損しているため、全体の形状を窺うことはできないが、残存する端部の縁には2列の釘穴が残り、幅2cm程度の棧木を打ち付けていたことがわかる。表面には中央で3cm幅の間をおいて上下2段に径1mm程度で、裏まで貫通した穿孔の列を施している。また、上端部では7cm以上の幅で穿孔を施さない部分が見られる。穿孔は、1段目で径1mmの穴を17列、2段目では16列をそれぞれ7条留めている。これら7条の穿孔列は、波状に流れており、文様を施したものと解釈される。表面には鉄製工具によるていねいな仕

上げ加工が施されており、彩色などは認められないことから、白木の生地の上に紐などを綴ることによって文様を表現したものと考えられる。残存長40cm・幅17cmを測る。^(注18)

128は、第2トレンチ・5Q地区の包含層中から出土した刀柄装具である。残存している^(注19)のが、柄部佩表の約1/2程度であるため全体の形状を理解し難いが、製品の保存状態は良好である。柄間・柄縁を一木で作る。柄間は白木で、断面倒卵形に復原される。背側が直線的に、腹側で中央部が細く、両端が広くなると考えられる。柄部には4.3cmの間隔で径2mmの目釘孔を穿つ。柄縁は断面倒卵形で、日本刀の鐔にあたる部分が幅1.8cmで柄側に大きく外反し、関にあたる部分が幅1.0cmで小さく鐔部側に開き、広端面が向かい合わせの形となる。両者の間は幅0.4cmで一段低くなり、この三区間には木肌に直接黒漆を施している。

柄部内面には茎を装着するための溝が穿たれ、その上下幅は、柄縁部で2.3cm、柄間部で1.4cmを測る。背・腹部は半截したままの状態であり、茎の溝を穿った後、再び2材を合わせたと考えられる。全体に極めてていねいな造りで、特に、柄縁部には端部に面取りを施している。残存長11cm・残存幅5.9cmを測る。

129は、溝SD02から出土した柄装具と考えられる製品である。心去り材を使用する。柄縁と考えられる部分をラッパ状に開き、端面の長軸に沿って縦方向の溝を施す。柄縁部で0.9cm、柄間部で0.4cmの孔を貫通させており、この部分が茎を差し込むための孔と考えられる。使用した製品の器種は不明である。残存長5.5cm・残存幅4.4cmを測る。

130は、溝SD11から出土した柄装具と考えられる製品である。心去り材を使用し、柄頭・柄間を一木で作る。柄頭・柄間とも断面長方形で、柄頭は、やや丸みをもったコブ状を呈する。柄間には茎を装着する溝は施されておらず、あるいは木剣のようなものであったのかもしれない。残存長13.8cm・残存幅4.0cmを測る。

このほかに、刀形の木製品と考えられるものが出土している。109は、第1トレンチD10地区より出土した。溝SD02の最終埋没面からの出土で、古殿遺跡廃絶時の遺物と考えられる。この製品は、心去り材を使用し、全体に粗い造りである。柄部を細く削り出し柄頭は丸く収める。刀身部は、断面六角形で先端部は粗く削り出す。

このほかに、全体の形状が復原できるにもかかわらず、その用途が不明のものがある。125は、腐朽が著しいが旧状をよく留めている。幅12.3cm・厚さ2cm・長さ58cmの板材を用い、一方を幅9cmと細くする。関の部分は、広幅部側に削り込む。平面には2列の孔列を施す。この孔列は、互いにずらし、平面に対し斜めに穿孔している。平面状態から、琴の部材とも考えられ、孔列が共鳴箱の装着のためのものであろうという解釈もできるが、弦をゆわえる突起が認められないため断定できない。

135は、中央の突起を反転して幅22cm・高6.8cmに復原できる。平面には底辺に平行する線と、下辺中央から側辺に向かって斜め上方の直線を黒漆で描く。側辺は、端部を細く削り、上辺は中央へ窪み、2コブの突起を施している。

服飾具(下駄)

第2次調査では、唯一の平安時代の木製遺物である。第4トレンチ包含層中より出土した。前歯と台部側面の一部を欠損する。木裏を上面とした木取りで、一木造りのいわゆる連歯下駄である。台部は、平面小判形に近く、前幅よりも後幅がやや狭くなる。鼻緒孔は、前壺が台の中央で開き、後壺が後歯の内側に開く。歯は、下辺幅を広くし、全体を丸く仕上げ平面楕円形となる。これらの特徴は、木器集成図録の分類によるCIVd型式に分類でき^(注20)る。全体に極めてていねいな造りである。長さ24cm・幅9cm・高さ10.4cmを測る。

(戸原 和人)

第5節 第2次調査出土遺物 石器・石製品・土製品・その他

(1) 石器・石製品

出土した石器・石製品は、その機能・形態から大きく工具、装飾品とその他に分類できる。工具に分類したものには、扁平片刃石斧・同未製品・敲石・砥石・磨き石と考えられるもの、台状石としたものなどがある。装身具には管玉の未製品が出土している。そのほかに、石器製作のための原石である石核や、製作途中に生じたと考えられる剥片が出土しており、中に刃部の加工が認められ削器と考えられるものもある。

付表3 第2次調査出土遺物 石器種類別集計表

項目	種類	材質別点数	小計	計	%
工 具	扁平片刃石斧 未製品	砂岩1	1	30	65
		安山岩1・砂岩2	3		
	敲石	安山岩5・砂岩5・花崗岩1	11		
	砥石	泥岩5・砂岩2・花崗岩1	8		
	磨き石(?)	浮石(アブライト)6	6		
	台状石	花崗岩1	1		
装身具	管玉	碧玉1	1	1	2
そ の 他	石核 剥片 削器(?)	碧玉2・水晶2・石英1	5	15	33
		瑪瑙1・碧玉3・泥岩2・チャート2・他1	9		
		碧玉1	1		
合 計		砂岩10・安山岩6・花崗岩3・浮石6・泥岩7・碧玉7・水晶2・石英1・瑪瑙1・チャート2・その他1	46	100	

これを出土点数でみると、工具に分類されたものが30点で全体の65%を占め、装身具が1点で2%、その他に分類されたものが15点で33%を占める。

出土した石器・石製品の詳細は、観察表及び集計表に譲るが、以下の点が指摘できる。^(注21)

1. 古殿遺跡の集落が盛行する弥生時代後期から古墳時代前期にかけては、一般的に鉄器が普及する時期で、第2次調査で出土した石製工具のうち扁平片刃石斧などが残る理由については検討を要すると考えられる。
2. 石核に碧玉・水晶、剥片に瑪瑙などが出土していることは、古殿遺跡で玉生産が行われていたことを傍証する資料であるといえる。
3. 出土した軽石(アブライト)は、磨き石としたが、その使用法については疑問も多い。

(2) 土製品

土製品には、他の素材の製品を模造して製作したものや、それ自体で製品とするものがある。模造の土製品としては、第2トレンチ・ピット内出土の鐸型土製品及び第1トレンチ包含層出土の勾玉形土製品がある。

鐸型土製品(図版第17, 217)は、断面正円形の中実で、鈕部分が印章学でいう「有孔蒼鈕」の形をとり、一般的な鐸型土製品と比べて、特異な形態をしている。製作技法としては、粘土塊を手づくねで鐸部に形成し、別作りの扁平な鈕部を接合する簡単なものである。鐸部側面には、ハケ目と靱圧痕をとどめる。鐸部断面が正円形であるという特徴から考えると、その出自として漢墓出土の銅鈴のようなものを想定したい。^(注22)

勾玉形土製品は、「C」形を呈し、手づくねで成形した後、全体をナデ調整し、穿孔する簡単なものである。形式的には古相を呈し、出土した包含層の布留式の時期によく合う。

この他、包含層中から土玉が数点出土している。

(3) その他の遺物

第1トレンチ溝SD02-2中から、瓢・栃・桃種子・桜樹皮などが出土している。このうち、瓢・栃・桃種子は、いずれも食用に供せられたものと思われる。特に、桃種子には種核を取り出すための挟り孔が穿たれている(図版第108)。(戸原 和人・中塚 等)

第3章 地形と層位

第1節 地形

古殿遺跡の位置している小西川流域は、南北を山に遮られ、東西に細長くのびる小規模な平野を形成している。小西川は、西から東へ流れ、やがて丹後地域を南から北へ貫流する竹野川へと合流し、平野部も竹野川流域の広い沖積平野へと変わっていく。

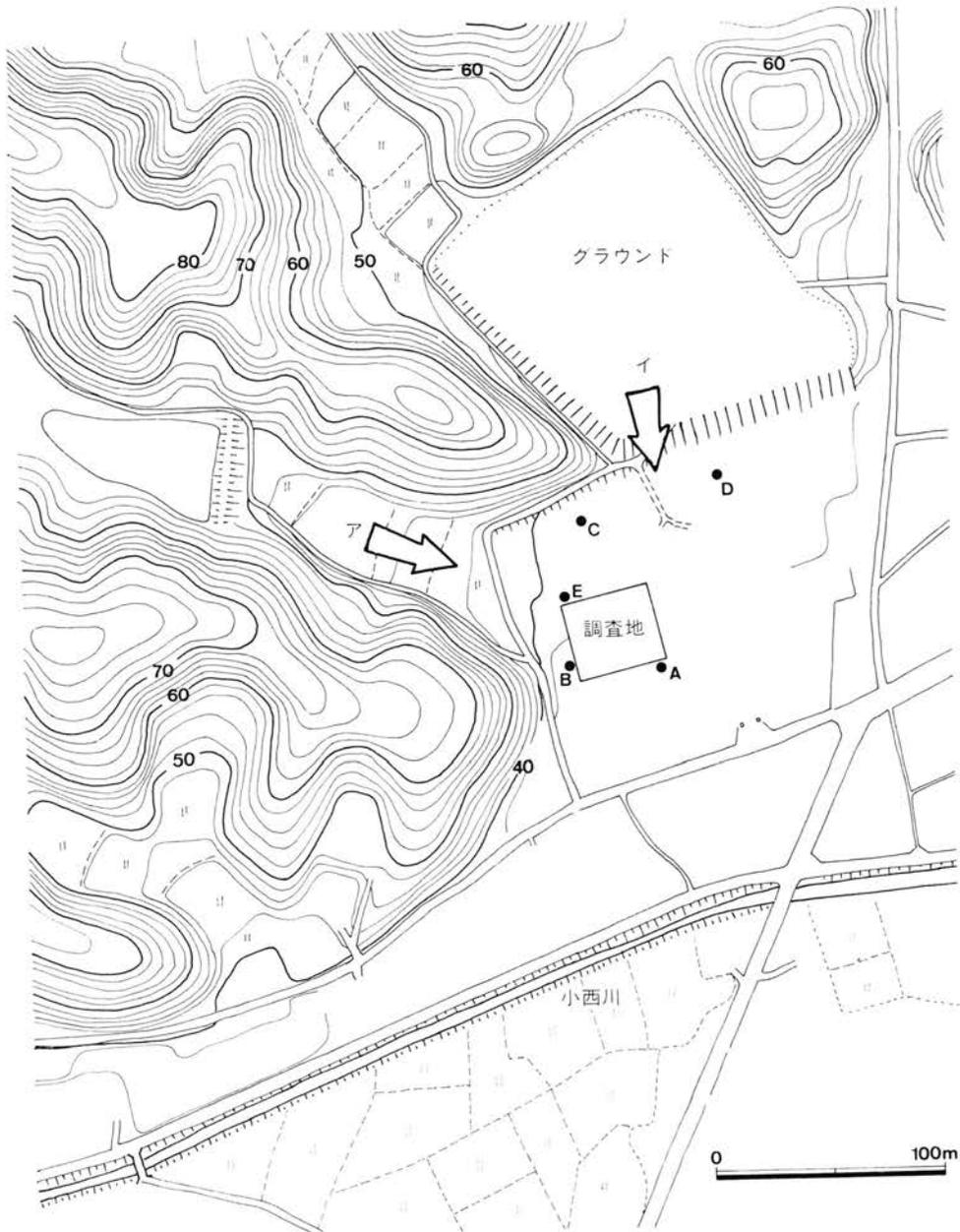
この小西川流域は、面積は狭いながらも、現在は繁華街であり、町の中心的役割を担っている地域である。古代においても、この流域を挟む山塊には、多くの古墳が築造されており、その重要性については、すでに記した通りである。

古殿遺跡は、小西川の北岸に位置し、北西から南東へのびている尾根の先端部近くに立地している。そのため、集落の背後となる北側及び西側は、数条の尾根が迫り、尾根とその間の谷の出口とに囲まれている。また、集落の南側及び東側では、集落がやや高所であり、小西川流域を広範囲にわたって見おろすことが可能である。換言すれば、古殿遺跡は、小西川の氾濫の影響をあまり受けない、南東へ開けた微高地に立地しているといえよう。

今回の調査地は、周辺の地形観察からみて、北西から南東へのびる谷の出口付近にあたり、谷筋の延長部であることが予想された。

体育館建設に伴う事前の地質調査によると、^(注23)第28図のA地点において、この地域で一般に地山とされる風化花崗岩の確認されるのは、地表下9mである。B地点においては、西側の尾根の延長である地山面が地表下すぐで確認されているので、B-A間においては、約12°の角度で地山面が傾斜しているものと考えられる。また、B地点とC地点の中間にあたるE地点では、地山面まで約6mである。さらに、第1次調査及び第2次調査では、C・D地点にて地山が確認されている。したがって、今回の調査地は、B・C・D地点からA地点に向かって地山面が傾斜する地形をしており、その後、アおよびイの谷から流れ込んだ土砂が堆積して形成されたものと理解できる。土砂は黒色粘質土が大部分を占め、部分的に淡赤褐色細礫・砂などが流れ込んでいる。なお、当初は、アの谷からの土砂の流入が主であると思われたが、弥生時代から古墳時代に限れば、イの谷から流れ込んだ土砂が堆積したことが、検出した遺構から明らかとなった。また、土砂の堆積は、ほとんどが水平に近い状態であった。

要約すると、今回の調査地は、弥生時代以前の長期間にわたり谷の大部分が埋没し、その後、黒色粘質土・砂・細礫などが複雑に入り組みながらも、北東から南西方向へ、全体としてほぼ水平に土砂が堆積して現在の地形が形成されたといえよう。(鍋田 勇)



第28図 調査地周辺地形図

第2節 層位

調査地に厚く堆積した土層のうち、今回調査の対象としたのは、地表下約2.8mまでの遺物包含層である。それより下層については、遺物を認めることができず、遺構の存在する可能性もないと判断した。基本的な層位は、第29図に示すように、Ⅰ～Ⅳ層に分けるこ

とができる。

＜第Ⅰ層＞ 鎌倉時代～現代の遺物を包含する層である。第Ⅰ層の下層では褐色砂質土層が広範囲に広がり、黒色土器片を含むが、遺物の出土量は少ない。第Ⅰ層の上層部分は、旧校舎建設時の基礎工事、および、その後のテニスコート造成時の整地によって、削平を受けたものと考えられる。この層では、遺構面は確認できていない。

＜第Ⅱ層＞ 古墳時代前期～平安時代の遺物を包含する層である。暗褐色砂質土層および褐色砂質土層が安定して広がり、部分的に淡赤褐色細礫層が見られる。遺物は、土師器・須恵器の碎片のみであり、出土量も少ない。SD301の遺構ベースとなる層である。

＜第Ⅲ層＞ 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を包含する層である。調査地の東側でやや高いものの、全体としてはほぼ水平に堆積した黒色粘質土層であり、調査地の西側を除く全面で、安定して存在している。薄い帯状の淡赤褐色細礫・砂層が部分的に複雑に広がっている。SD302・SD303・SD304・SD305・SD306・SD307の遺構ベースとなる層である。土器、木器とも多量に出土している。第Ⅲ層の上面に形成されたSX301は布留式の土器を含む木器溜りで、この面では調査地のほぼ全面で木器が出土した。また、調査地の北西部では、土器の出土層位により、さらに3層に分層することができる。

＜第Ⅳ層＞ 遺物を包含しない黒色ないし暗褐色粘質土層である。第Ⅲ層に比べると、粘質の度合が大きく、淡赤褐色細礫層・砂層の広がりが少ない。また、広葉樹と思われる朽ちた自然木を多量に含んでいる。SD303・SD308・SD309・SD310・SX302の遺構ベースとなる層である。

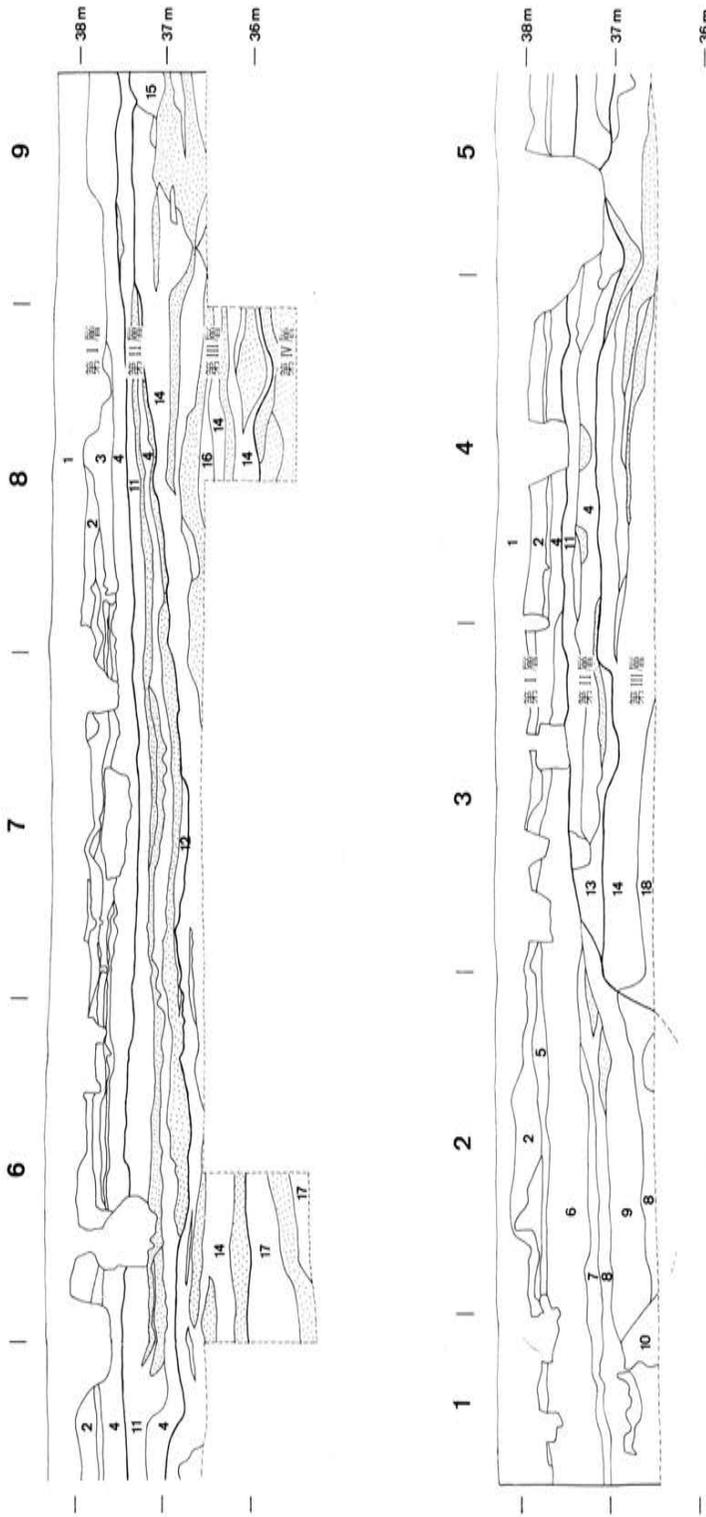
第Ⅳ層以下については、地表下6～9mの地山(風化花崗岩)まで、第28図のア・イの谷から流れ込んだ土砂が堆積している。A地点では、地表下2.4mから下へ暗青灰礫混じり砂、暗青灰砂質シルト、暗茶腐食シルト、緑青灰砂混じり粘土、風化花崗岩と堆積しており、風化花崗岩までの各層は含水の度合が大きく、現在でも多量の地下水のあることがわかる。

これらの層のうち、第Ⅳ層は土器を含まない層であることから、遺物・遺構とも存在しないと判断し、今回は調査を行っていない。

さて、今回の調査地は第1次調査地の南側に当たり、近接した位置にあることから基本的な層位は今回確認した層位と一致している。両者を比較してみると次のことが理解でき

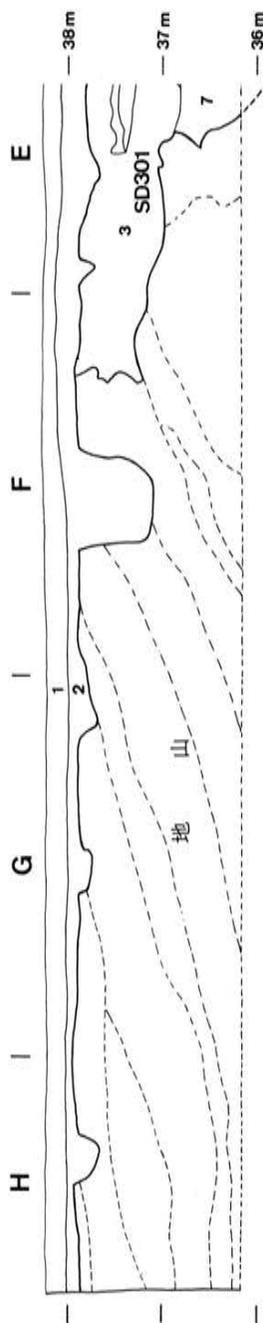
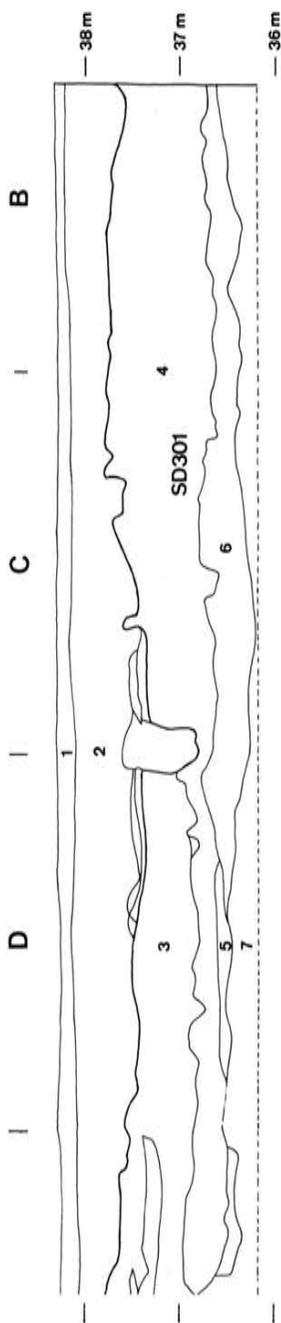


第29図 基本層位概念図



第30図 調査地北壁土層断面図

1. 淡黄灰色砂質土層
2. 暗茶灰色砂質土層
3. 暗茶灰色・明茶灰色粘土粘層
4. 褐色砂質土層
5. 暗灰褐色・淡灰褐色粘土粘層
6. 暗褐色砂質土層
7. 黒褐色粘質土層
8. 黒褐色砂質土層
9. 黒色砂質土層
10. 青灰色粘質土層
11. 暗褐色砂質土層
12. 淡灰褐色粗砂層
13. 暗灰褐色砂質土層
14. 黒色粘質土層
15. 黒褐色粗砂層
16. 黒灰色粘質土層
17. 黒色乃至黒褐色粘質土層
18. 灰褐色砂質土層 (スクリーントーンは淡赤褐色細砂層)



第31圖 調査地西壁土層断面図

- 1. 淡黄灰色砂質土層
- 2. 暗茶灰色砂質土層
- 3. 黑褐色砂質土層
- 4. 黑色粘質土層
- 5. 黑灰色砂質土層
- 6. 黑褐色砂質土層
- 7. 黑灰色粘質土層

る。まず、第1次調査のB・C・Dトレンチで確認されたSD10はC・Dトレンチでは、南側の肩が確認されていない。これは、SD10の北側の肩である地山がそのまま大きく落ち込み、谷を形成しているためであること。C・DトレンチのI～V層は、その谷に堆積した土層であること。そして、このI～V層は、今回の調査地へ続いていること、等である。

遺物の包含関係から第1次調査のI～V層と今回の基本層位を対応させると付表4のようになる。(鍋田 勇)

付表4 第1次調査・第3次調査基本層位対応表

第1次調査 (Cトレンチ)	包含する土器	第3次調査
(黄褐色砂層・灰褐色土層他)		→ 第 I 層
I層 黒灰色土層	平安時代	→ 第 II 層
II層 黒色土と砂の縞層	布留式	→ 第 III 層上面
III層 黒色粘質土層		→ 第 III 層
(IV層 暗褐色砂層)	弥生終末期	→ 第 III 層最下層
V層 黒色粘質土層 (砂粒含む)	なし	→ 第 IV 層

第4章 遺 構

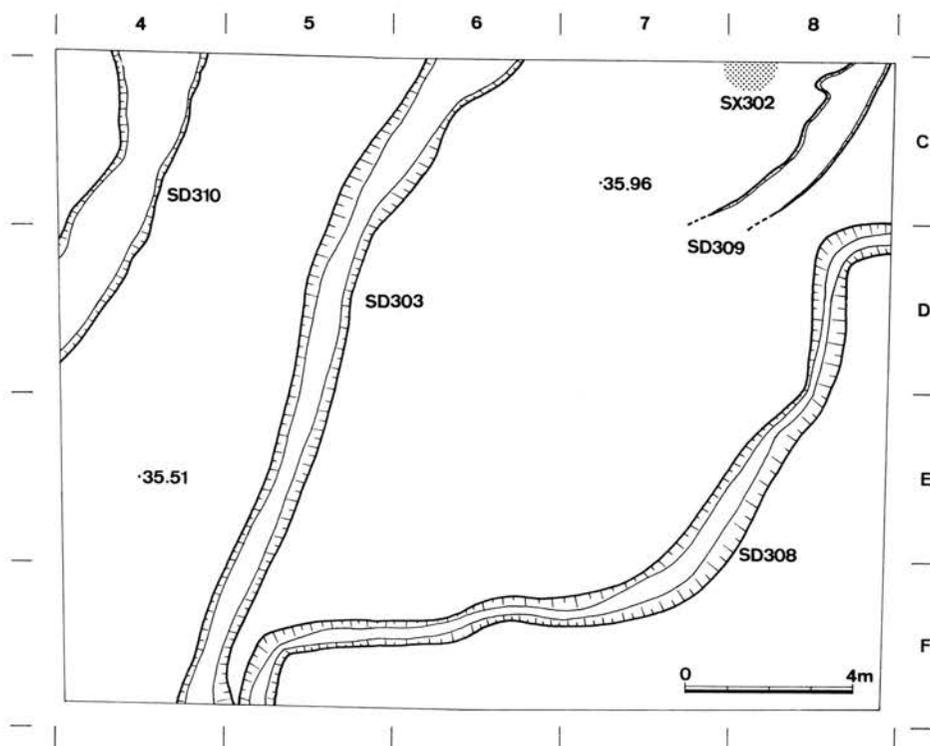
今回の調査で検出した遺構は、前述したように、遺構のベースとなる層位、および出土した遺物によって、おおむね4期に大別することができる。ここでは、第2次調査で検出された一時期古い遺構を第I期に設定し、全体を5期区分とし、以下、順に解説を行う。なお、今回の第3次調査で検出した遺構の名称(番号)について、すでに別途、紹介しているが、^(注24)第1～2次調査との混乱を避けるため、番号を300番台にすべて変更した。

第1節 第II期の遺構

基本層位の第IV層をベースとする遺構である。検出した遺構は、4本の溝のほか、性格の明確な遺構ではないものの土器溜りがある。これらの遺構は、出土遺物などから、弥生時代後期に形成されたものと考えられる。

溝SD303

SD303は、C6地区からF4地区にかけて検出した溝である。第I期から第III期まで存続



第32図 第I・II期遺構平面図

する。断面形は、ゆるやかなU字形を呈するが、堆積状況は、複雑であり、必ずしも一様ではない。埋土は、弥生土器の多く出土したC6・D5地区では淡赤褐色細礫を主とし、暗灰色粘質土が混じる。土器は、SD303下層土器群として取り上げた。壺・甕・鉢が出土している。

溝SD308

SD308は、D8地区からF5地区にかけて検出した溝である。西側から流れ込み、南西方向へと向きを変え、さらに南側へと流れる。途中で溝の規模はあまり変わらずに安定している。溝の断面は、ゆるやかなU字形を呈している。幅0.7～1.2m・深さ15～25cmを測る。人為的に掘削された溝と思われる。遺物は出土していない。

溝SD309

SD309は、C8地区においてわずかに検出した溝である。北東から南西へ流れ、途中で消滅する。幅0.7～1.3m・深さ10～12cmを測る。埋土は淡赤褐色細礫である。器台のほか、少量の土器が出土している。

溝SD310

SD310は、C4・D4地区において検出した溝である。北側から南へ流れ込み、途中から南西方向へやや向きを変える。溝の断面形は、底辺の短いいわゆる逆台形状を呈する。幅1.2～2.2m・深さ15～25cmを測る。遺物は土器のみであり、C4地区の北側でまとまって出土した。器種は、壺・甕のみである。

土器溜りSX302

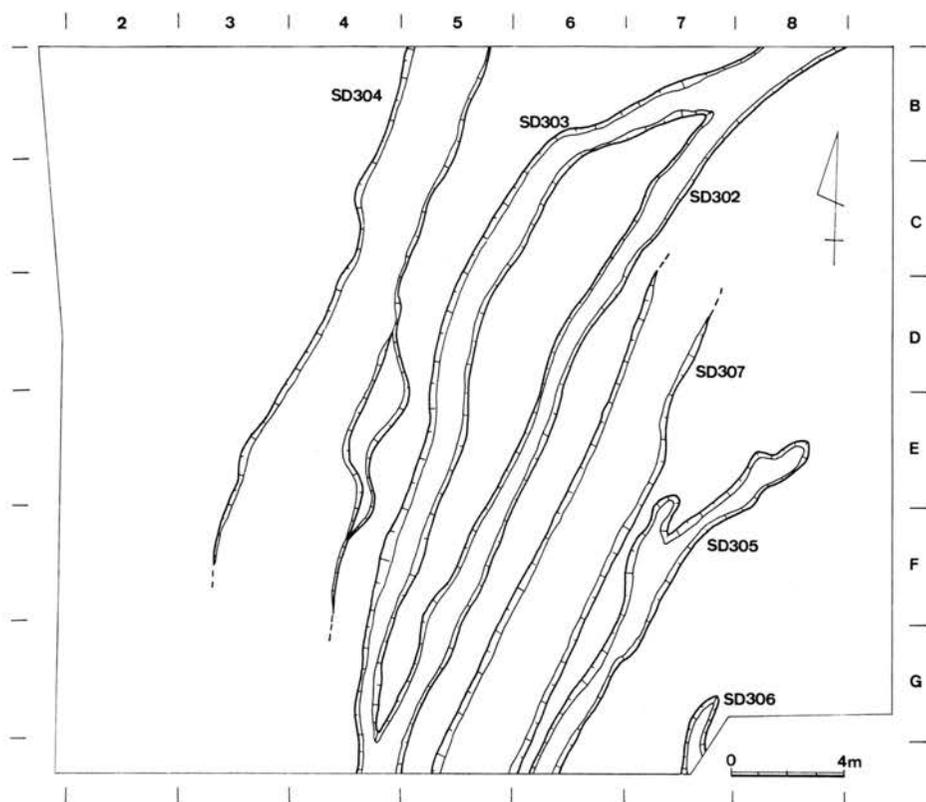
SX302は、B8・C8地区で検出した。土塚などの明確な遺構ではないが、黒色粘質土上で、直径約1mの範囲内に土器が密集して出土したものである。層位的にみれば、第Ⅲ層最下層に位置づけられる。土器は、完形の状態で残っていたものではなく、ほとんどが碎片であった。時期的には、弥生時代後期末に比定される。壺・甕・鉢・器台が出土した。出土土器のうち、甕の割合が圧倒的に多いのが特徴である。第1次調査で検出されたSX11と同様の性格をもつと考えられる。(鍋田 勇)

第2節 第Ⅲ～Ⅴ期の遺構

基本層位の第Ⅲ層をベースとする遺構である。検出した遺構は、溝及び木器溜りである。これらの遺構は、古墳時代の初頭～前期に形成されたものと考えられ、古殿遺跡の集落としての最盛期にあたる時期である。なお、Ⅲ期は弥生時代から古墳時代の境目であるが、ここでは畿内という庄内期に並行すると考えられる。

溝SD302

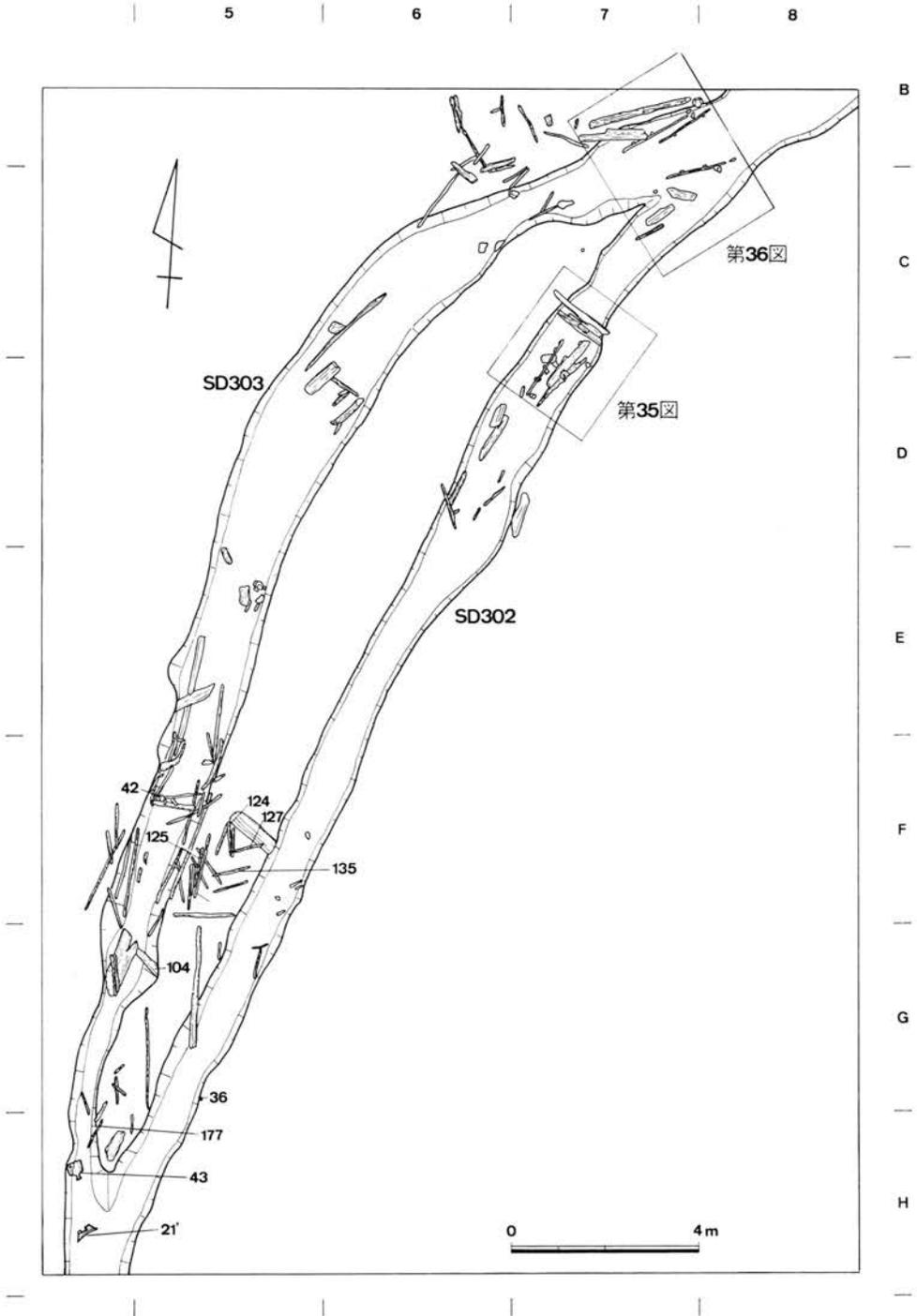
SD302は、B8地区からG4地区にかけて検出した溝である。B7地区でSD303から分流



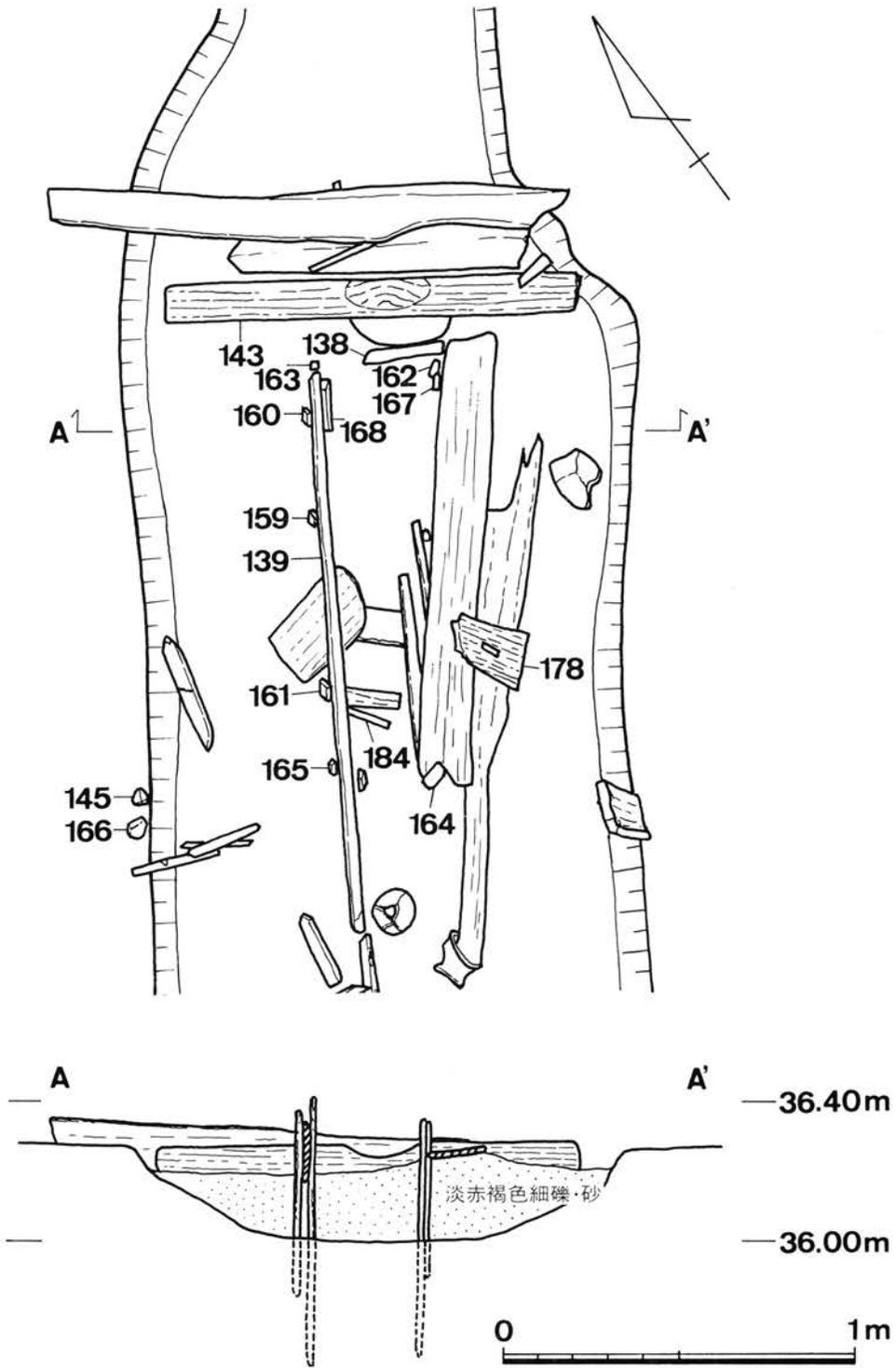
第33図 第Ⅲ～Ⅴ期遺構平面図

し、再び、G4地区でSD303へ合流する。分流後はやや直線的に南西方向へ流れ込んでいる。溝の深さは、検出面から20～30cmと浅く、断面形は底の幅がやや広く、ゆるやかに立ち上がる逆台形状を呈している。幅0.8～1.6mを測る。埋土は淡赤褐色細礫・黄褐色砂である。幅、深さとも途中あまり変化がなく、安定した溝といえる。出土遺物には土器・木製品があり、これらから古墳時代の初頭と考えられる。溝の形態や後述する堰の存在によって、すでに溝として機能していたSD303から水を引くことを目的に人為的に掘削された水路と推定される。

SD302では、分流地点より約4m下流地点のC7地区に堰および堰に付随する施設が構築されていた。堰は、上流側から、長さ148cm・幅20cmの板材、次に長さ86cm・幅22cmの板材、そして長さ117cm・幅13cmの丸木の半截をSD302に直交する形で構築している。ふたつの板材は、下流方向へ倒れ込んだ状態で検出されたが、板材の間には杭が倒れた状態で出土しており、本来は、溝に対して垂直に置かれ、杭によって固定されていたものと推定される。丸木の半截は、丸みを持つ方を上面とし、溝の両肩の黒色粘質土に埋め込んで頑丈に固定されている。上面のほぼ中央部は、幅22cm・深さ2cmにわたり浅く切り込まれている。



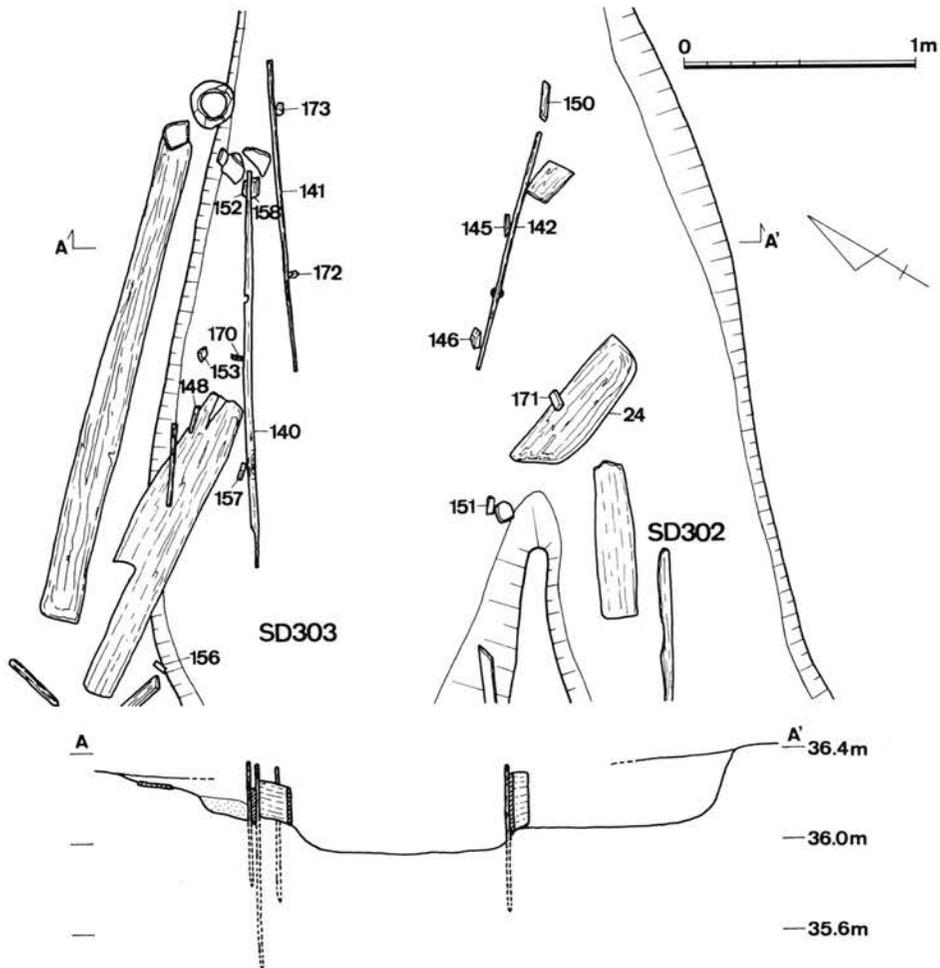
第34図 S D302・S D303遺物出土状況



第35図 S D302 堰 掘 大 図

この切り込みは、溝の水量調節を行う役割を持つと推定される。古殿遺跡では、第2次調査で検出したSD02-2にも堰が造られている。

堰に付随する施設は、堰の下流側に接して構築されている。溝の両側に、溝と平行して板材を垂直に立て、それぞれの板材を杭によって固定した施設である。溝の西側(上流から下流をみて、溝の右岸)は遺存状況が良好であり、長さ146cm・幅16cmの板材を、上流側4本、下流側3本の合計7本の杭を使用して両側から挟み込むようにして固定している。さらに、板材の上流側には、二個の小穴が穿ってあるため、紐状のもので板と杭とくくりつけて、より強固にしていた可能性もある。溝の東側(左岸)は、板材が溝の外側へ倒れた状態であったが、基本的な構造は、西側と同様である。ただ、東側では板材を二枚重ねた状態で利用していた点のみ異なっている。両側の板材間の長さは、約34cmを測る。

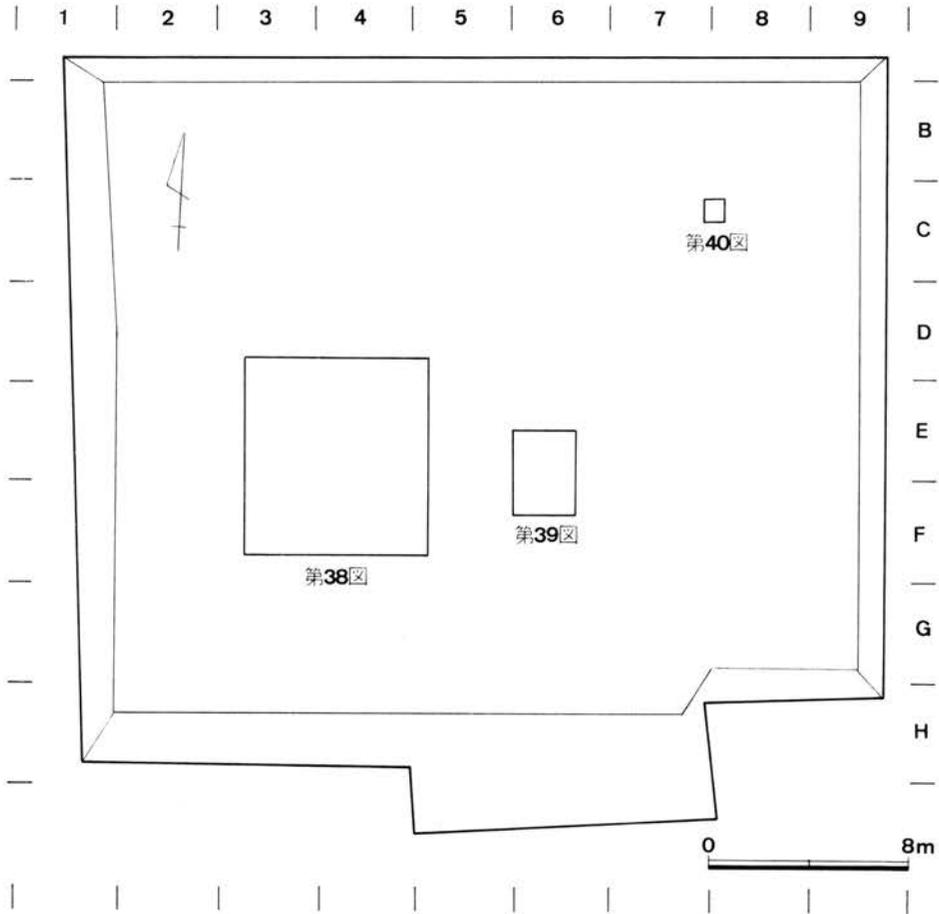


第36図 S D302・S D303分岐点拡大図

板材を固定している杭は、いずれも黒色粘質土に深く打ち込まれている。板材は、溝の肩に接していないため、杭のみで固定されているが、出土した状態では、板材の両側とも淡赤褐色細礫・砂がびっしりと詰まっていた。この埋土からは、古墳時代初頭の土器が出土している。この堰に付随した施設の機能については不明である。

溝SD303

SD303は、第Ⅰ期から第Ⅲ期まで存続する溝で、B8地区からG4地区にかけて検出した。北東から南西方向へわずかに曲線を描きながら流れる溝である。今回検出した溝のうち、最も多量の土器・木製品が出土している。途中(B7地区)よりSD302が分流し、再び、G4地区にて合流している。分流地点では、SD303へ主に水流を導くように板を杭で固定した施設が造られている。この施設は、前述した堰に付随する不明遺構と、構造上は同一のものである。すなわち、板材を垂直に立て、杭を板の両側から挟み込むように打ち込んで固定している。確認できたのは、合計3か所で、1か所はSD303の左岸、SD302との分岐点



第37図 第Ⅲ～Ⅴ期出土遺物位置関係図

にSD302へ水の流れるのを遮るように築かれ、他の2か所はSD303の右岸に重なりあうように築かれている。

溝状遺構SD304

SD304は、B5地区からF3～4地区にかけて検出した溝状の遺構である。北東から南西への流れをもつ。B5地区で幅2.6m・深さ約20cmを測るが、途中から幅が広く、浅くなりやがて消滅する。溝の断面形は底が広く、平らであり、やや鋭角に肩が立ち上がる。埋土は淡赤褐色細礫・砂である。

木器溜りSX301

SX301は、E3・E4・F3・F4地区にかけて検出した木器溜りであり、おびただしい数の木製品が折り重なって出土したものである。この地区はSD304の消滅する場所に当たり、ま



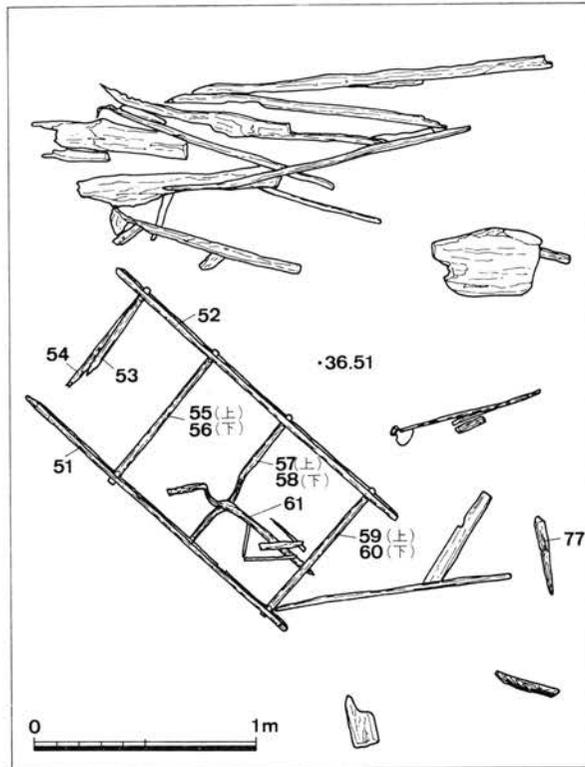
第38図 第V期 SX301 検出状況

たSD304の埋土は、淡赤褐色細礫と砂で、この上層では、黒色粘質土及び黒褐色粘質土がSX301と同様に堆積している。したがって、SX301は、SD304の埋没直後に形成されたと考えられる。

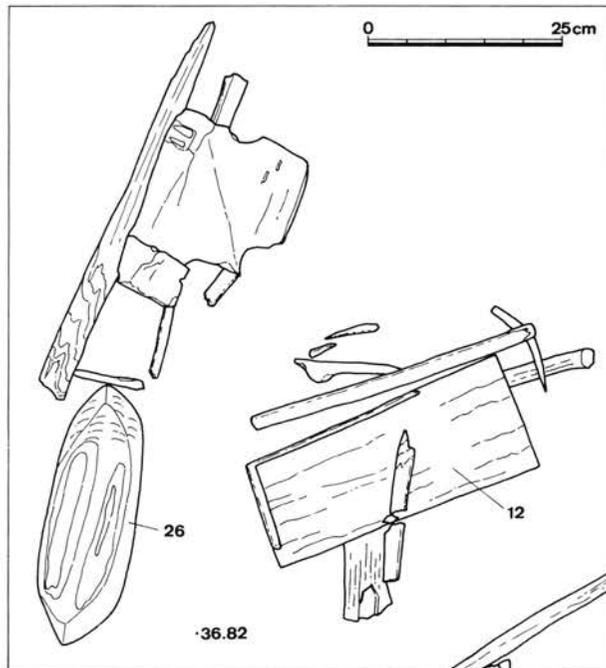
木器の中には、建築材と思われる柱材・棒材が多く、家屋の倒壊したようにもみられたが、明確な遺構は確認できなかった。もともと建物自体は、北側の地盤の安定した場所に構築されており、洪水等によってこの位置まで押し流されてきたものと推定される。木器は、建築材のほか、箱形木製品・羽子板状木製品・有頭棒等が出土している。また、木器に混じって布留式の土器が出土している。

溝SD305

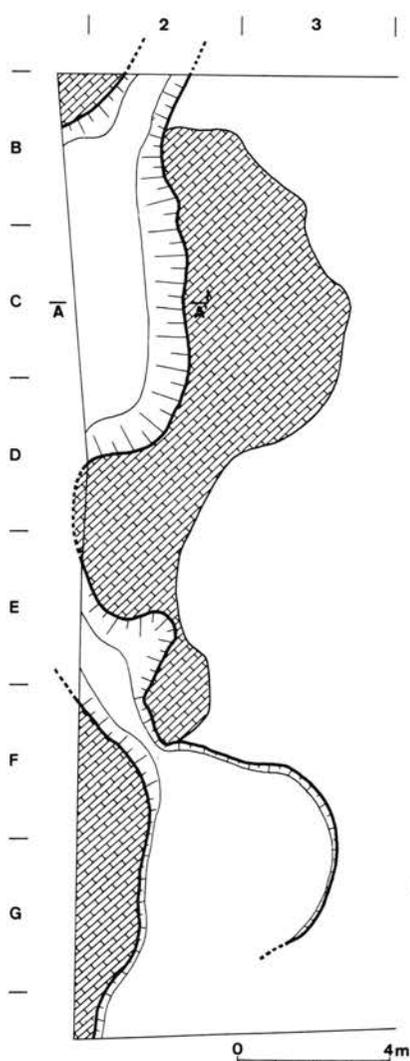
SD305は、E8地区からG6地区にかけて検出した北東から南西への流れをもつ溝である。埋土は淡赤褐色細礫である。幅0.6～1.8m・深さ15～20cmを測る。土器の出土量は少ないが、弥生時代末から古墳時代後期までの土器が出土しているため、一部攪乱を受けたか、第Ⅱ層から切り込んでいる可能性もある。



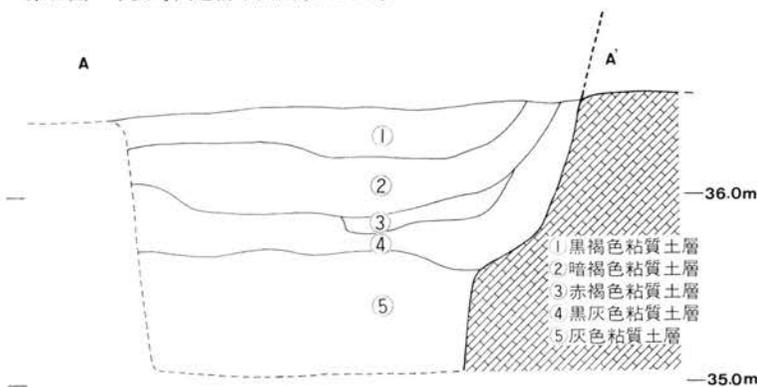
第39図 第V期梯子状木製品出土状況



第40図 第V期舟・箱形木製品出土状況



第41図 平安時代遺構平面図(S D301)



第42図 S D301 断面図

溝SD306

SD306は、調査地南端のG7地区でわずかに検出した溝である。幅0.7m・深さ約10cmを測る。遺物は出土していないが、検出した層位から古墳時代の溝と思われる。

溝状遺構SD307

SD307は、D7地区からG5地区にかけて検出した北東から南西への流れをもつ溝状の遺構である。埋土は淡赤褐色細礫である。幅は2.5~3.3m・深さ8~12cmと非常に浅い。SD306と同様、遺物は出土していないが、検出した層位から古墳時代の溝と思われる。(鍋田 勇)

第3節 平安時代の遺構

基本層位の第Ⅱ層をベースとする遺構である。検出した遺構は、溝状遺構のみである。出土遺物から、平安時代に形成されたものと考えられる。

溝状遺構SD301

調査地の西側で検出した溝状遺構である。北側のB2地区からD2地区にかけて地山を深く抉っており、人為的に削られたと考えられる。しかし、南側のG2地区は非常に浅く、北側とは様相が異なる。北側では溝の東側の肩が確認できていない

ため、溝の幅は不明である。遺物はC2地区の下層でまとまって出土した。弥生時代末~平安時代の土器が出土している。

(鍋田 勇)

第5章 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、土器・土製品・木製品・石器・植物遺体であり、量的には、土器および木製品が出土遺物全体の99%以上を占めている。なかでも木製品については、「木製品の宝庫」と呼ばれるほどの出土量の豊富さと質の高さを兼ね備えており、古殿遺跡最大の特徴となっている。また、土器については、特に弥生時代後期から古墳時代前期までの比較的良好な資料を得ることができた。以下、各遺物についての解説を行う。

第1節 土 器

第4章で述べたように、今回検出した遺構は、第Ⅰ～Ⅴ期と平安時代に大きく区分される。第Ⅰ～Ⅴ期の土器として把握したものは、今回最も出土量の多かった弥生時代後期から古墳時代前期の土器群である。今回の調査で唯一確認した平安時代の遺構SD301出土土器は、第Ⅰ～Ⅴ期とは時期的には大きな隔りがある。

(1) 第Ⅱ～Ⅴ期の土器

第Ⅰ～Ⅴ期の土器については、第2章で掲載した第2次調査の器種分類に従った。

以下、各遺構および包含層出土土器について解説を行う。

SD309出土土器(図版第54)

擬凹線文壺Ab3, 甕Ac2, 鉢C, 有孔鉢B・C, 台付鉢, 大型高杯B2, 器台B1が出土している。1は、壺Ab3である。やや球形の体部から筒状の頸部をもち、口縁部がゆるく外反する複合口縁を呈するもので、口縁部には1条の擬凹線文が施されている。2・3は、甕Ac2である。頸部から大きく外反した後、屈曲して斜め上方に立ち上がる口縁部を持ち、2～3条の擬凹線文を施す。4は、大型高杯B2である。杯部下端以下を欠損している。口縁部が大きく外方に開く特徴を持つ。5は、小型鉢Cである。平底の底部と口縁端部外面をつまみ上げるのを特徴とする。6は、有孔鉢Cに分類される。わずかに外反する口縁部をもつ。7は、台付鉢の形態で、体部下半を欠損する。口縁部から体部にかけて、縦位に把手をつける。8は有孔鉢B2である。上半を欠損する。9は、器台B1である。これらの土器によって構成される時期は、Ⅱ期である。

SD310出土土器(図版第54)

擬凹線文を施すものとしては、壺Aa1, 甕Ac1・Ac4, 鉢A3が出土している。10は、壺Aa1である。筒状の長い頸部は、この個体独自の特徴と考えられる。11は、甕Ac1である。

体部下半を欠損する。13は、甕Ac4である。肩の張らない体部と大きく開いた複合口縁が特徴で、擬凹線文がナデ消される段階のものである。12は、鉢A3である。複合口縁で、外面の擬凹線文が失われている。甕Ac4, 鉢A3により、Ⅱ期の時期と考えられる。

SD305出土土器(図版第54)

短頸壺B, 二重口縁壺C4, 甕Ac1・C2, 台付鉢, 小型器台Aが出土している。14は, 短頸壺Bである。体部以下を欠損する。15・16は, 甕C2である。18は, 二重口縁壺C4である。19は, 小型器台Aに分類される脚, 20は, 台付鉢Cの脚と考えられる。甕Ac1などⅡ期の遺物が混在して出土しているが, 二重口縁壺C4, 甕C2により, Ⅳ期と考えられる。

SX302出土土器(図版第55)

短頸壺A1, 擬凹線文壺Ab3, 甕Ab2・Ac2・B1・C3・D1・F4, 鉢D類, 高杯A類, 器台B1などが出土している。

21・22・24は, 短頸壺A1である。頸部外面をへら磨きするもの(21)と, ナデ調整のもの(22・24)がある。23は, 擬凹線文壺Ab3である。短い頸部から大きく外反し, 端部をつまみ上げる口縁を持つ。外面に3条の擬凹線文を施す。甕は, 第Ⅱ期から第Ⅴ期までのものが混在して出土している。

45は, 高杯Aに, 46は, 鉢D類に分類されるが, いずれも第Ⅰ期という古相を示す。44は, 器台B1である。

SX302出土の土器は, 以上のような構成である。時期的には第Ⅴ期という最も新しい様相を示す甕F4・C3が数点で, 次に第Ⅲ期の甕B類がある。最も多く出土したのは, 第Ⅱ期の短頸壺A1, 甕Ac2であり, 最も古相を示す第Ⅰ期の甕Ab2も数点出土している。甕F4・C3を上層からの混入と考えることができるならば, SX302は, 第Ⅱ期を中心に, 第Ⅲ期にかけての時期のものと推定することができる。

SD303下層出土土器(図版第56)

SD303は, 弥生時代終末から古墳時代初頭を経て古墳時代前期まで活用された溝であり, 47~74を下層の土器群として, 75~129を上層の土器群として区別した。

二重口縁壺B類, 長頸壺Ac1, 装飾壺Dc, 小型壺Ab, 甕Aa1・Ac1・Ac2・C1~C3・D1・D2, 有孔鉢A1・B2・C, 大型高杯B1, 器台C6のほか, ミニチュア土器など, 各種の土器が出土している。47は, 二重口縁壺B類の範疇で考えられる壺で, 肩の張った胴部と二重口縁からなる。口縁の形態は, いわゆる山陰系二重口縁のものではなく, 在地で発達した「ナデ」甕に系譜を引くものであろう。48は, 長頸壺Ac1に分類される。大きく外方に開き, 口縁の発達した特徴を持つ。49は, 装飾壺Dcである。個体によって施文法

がさまざまで、凸帯上面への施文時に、頸部に同様の施文を行っている。51は、小型の擬凹線文壺である。口縁の形態によってAb類に分類できる。甕は、第Ⅱ期に分類されるA類、第Ⅲ・Ⅳ期に分類されるC類が混在して出土している。52は、甕Ac1、53は、甕Aa1、54は、甕Ac2、55は、甕C3、56は、甕C2、57は、甕C1、59は、甕D2、60・61は、甕D1にそれぞれ分類される。

62・64は、大型高杯B1である。杯部と脚部にわかれて出土しているが、同一個体かもしれない。63は、器台Cb、65は、器台B1に分類される。66は、有孔鉢B2、67は、有孔鉢A1、68は、有孔鉢Cにそれぞれ分類される。

ミニチュア土器には祭祀的な意味があると考えられ、形態によって、台付鉢(69・71)、甕(73)、鉢(72・74)にそれぞれ分類される。

なお、SD303下層として取り上げた土器の一群は、第Ⅱ期から第Ⅲ期と想定される遺物である。

SD303上層出土土器(図版第57)

壺Ab3、短頸壺A1・A2・B、広口壺A、二重口縁壺B・C4、甕Aa1・Aa2・Ab2・B2・C1・C2・D1・D2、台付鉢、小型鉢、有孔鉢A3・B2、高杯B1・B3・C2・D、器台B1、小型器台A・B、鼓型器台B、蓋、ミニチュア土器などが出土している。

76は、擬凹線文壺Ab3に分類される。75は、短頸壺A1、78・79は、短頸壺A2、77は、短頸壺Bにそれぞれ分類される。80・81は、広口壺A類に分類される。口縁部内面をヘラ磨きする80と、ハケ調整する81がある。二重口縁壺には、B類に分類される83と、C3に分類される84・85がある。いずれも、第Ⅲ期に位置づけられる器種である。83は、口縁部内面や頸部外面にハケ調整を施すのを特徴とし、84・85は、内面の頸部から上半に横位のヘラ磨きを施す。85では、外面全体を同様に磨き、ハケ調整を一部に施す。84は、頸部を縦位に磨く特徴を持っている。頸部の形態が山陰地方でときおり出土するものに類似しており、あるいは搬入品であるかもしれない。86は、甕Aa1、87は、甕Aa2、88は、甕Ab2にそれぞれ分類される。89・90は、甕B2に分類される。91・95は、甕C1、92～94は、甕C2にそれぞれ分類される。このうち、92・94は、在地系の土器と考えられる。96～99は、B2類、100は、D1に分類される。出土した高杯のうち、器種分類の可能なものとして高杯C2(101)、B1(104)、B3(103)、D(102・108)がある。これらの土器は、いずれも第Ⅲ期に位置づけられる。

109・110は、器台B1に分類される。111は、小型器台A類、112～116は、小型器台B類、117は、器台Dにそれぞれ分類される。134・135は、鼓型器台B類である。119・129は、有孔鉢A3、126～128は、有孔鉢B2類に分類される。このほかに、蓋(130・131)、小型鉢

(120)、台付鉢(121~125)、ミニチュア土器(132・133)がある。

SD303上層から出土した土器群は、第Ⅲ・Ⅳ期を主体とするものである。

SD302出土土器(図版第59・60)

直口壺、短頸壺A1、二重口縁壺B類、甕Ac2・B1・C1・C3・D2・D3・F3、長胴甕B、鉢A3、有孔鉢B1、台付鉢、小型鉢、大型高杯Ab・B1・C2、小型器台A、ミニチュア土器が出土している。

136は、直口壺である。138・139は、短頸壺A1に分類される。137は、二重口縁壺B類である。143は、甕Ac2、140・142は、甕B1にそれぞれ分類される。144~149は、甕C類で、145は、甕C1、148は、甕C2、その他は甕C3に分類される。これらの甕のうち、144~147・149は、在地系の甕と考えられる。151・163は、長胴甕B類に分類される。152・153・155・156は、甕B類に分類され、150・153は、甕D2に、152・155・156は、甕D3にそれぞれ分類される。157~159は、甕F3に分類される。161は、甕C1に分類される。160・164は、有孔鉢B1、154は、有孔鉢Cにそれぞれ分類される。この他、台付鉢の脚部(165~167)が出土している。168・169は、大型高杯で、169は、Ab、168は、B1に分類される。このほかに、高杯B1(171)、高杯B2(172)と考えられる脚部が出土している。173・174は、小型器台である。小型器台A(174)、小型器台B(173)に分類できる。

その他、小型鉢(162)・ミニチュア土器(175~177)が出土している。

SD302で出土した土器の一群は、第Ⅲ~Ⅴ期と想定される遺物である。

SD304出土土器(図版第61・62)

二重口縁壺C4、甕C1・C2・D3・F3、鉢B2、小型鉢B1、有孔鉢B2、台付鉢、高杯が出土した。

178は、二重口縁壺C4である。179・180・182・183・185~187は、甕C2、181・184・188は、甕C1にそれぞれ分類される。189~193・195は、甕D3、194は、甕C4、196・197は、甕F3にそれぞれ分類される。198は、小型丸底土器E2に分類される。202は、鉢B2である。203は、小型鉢である。201は、有孔鉢B2と考えられる。このほかには、台付鉢脚部(204・205)が出土している。高杯は、いずれも脚部のみの出土であり、全体の形状を窺うことはできないが、高杯C3・C4類(215~217)と考えられるものや、高杯D類(207・209)などがある。器台では、小型器台B類(211)が確認される。

SD304で出土した土器は、第Ⅳ期を主体とし、第Ⅴ期のものも若干含まれている。

SX301出土土器(図版第63)

SX301では、多量の木製品に混じって布留式の土器群が出土している。

広口壺A類、二重口縁壺C4、小型丸底土器、甕F3・F4、低脚杯、高杯が出土した。

235は、広口壺A類に分類される。ほぼ球形の体部に頸部から上方に外反する口縁部を持つ。内外面ともハケ調整を施す。236は、二重口縁壺C4である。やや肩の張った体部と、端部をつまみ上げる二重口縁からなる。体部外面は、ハケ調整を施し、肩部で横位のハケ調整を施している。245は、小型丸底土器で、体部下位に穿孔を施し、頸部外面にはヘラによる刺突を行っている。237は、甕F4、238～244は、甕F3に分類される。246～249は、高杯である。249は、B類、247・248は、C類、246は、D類にそれぞれ分類される。250は、低脚杯である。

SX301から出土した土器群は、第V期に比定される。

第III層b地点出土土器(図版第64・65)

第III層b地点出土土器は、B8地区を中心に、第III層の中層(L=36.5m付近)でまとまって出土した土器群である。

二重口縁壺Ea, 装飾壺Dc, 壺G, 甕C1・C3, 高杯C3, 器台D, などが出土している。おおむね、第III期の様相を呈する。

第III層a地点出土土器(図版第66)

第III層a地点出土土器は、B8地区を中心に、第III層の上層(L=36.8m付近)でまとまって出土した土器群である。

二重口縁壺C5, 籠目壺, 小型丸底土器C2, 甕C1, 長胴甕B, 高杯C2・D, 杯, 台付鉢, 有孔鉢などが出土している。第III層a地点出土土器は、第III～V期にわたるものであるが、第III期が主体をなしている。

包含層出土土器(図版第65・67・68)

各地区で出土した土器であり、層位的には、第III層下層(280～292)・第III層中層(307～337)・第III層上層(338～346)に区別できる。

(第III層下層出土土器)

長頸壺Aa2, 擬凹線文壺Aa, 小型壺Ab, 小型無頸壺・同蓋, 甕Ab2・Ac2, 鉢A3, 台付鉢D, 小型器台A類, 蓋, 手焙り型土器が出土している。292は、手焙り型土器である。覆い部の前面と体部との接合部の一部が遺存している。第I期から第III期の遺物によって構成される。

(第III層中層出土土器)

広口壺A, 短頸壺A1, 二重口縁壺B・C5, 装飾壺Dc, 甕J・C2・C3・E, 小型鉢, 高杯, 器台Ca, 鼓型器台B類, 手焙り型土器, ミニチュア土器が出土している。この層から出土した土器は、器種が多様で、その保存状態も良好なものがたいへん多い。特徴的な遺物としては、甕Jとした316・317がある。「く」字口縁と、あまり肩の張らない体部からなる

器形である。タタキ調整を施す特徴を持っているので、他の甕と分けて甕Jとした。その他の特徴のある遺物としては、手焙り形土器(335)がある。覆部がほぼ完存しているが、体部は破損しているため全体形は不明である。鉢形の体部は、口縁部のところで最大径を測り、そこから覆部へスムーズにつながっている。覆部の前面には帯状の粘土を取り付けて面を作り、3列の竹管文を施している。覆部および体部の外面には3つの突帯が巡るが、上部2つの突帯は、覆部前面の装飾部と接続する。覆部および体部の内面にはハケ調整、外面にはハケの後でいねいなミガキ調整を施している。丹後地域においては手焙り形土器^(注25)の出土は少なく、大宮町裏陰遺跡C1区包含層から1点出土しているのみである。

これらの土器は、第Ⅱ期から第Ⅴ期にかけて混在しているが、量的には第Ⅲ期が主体をしめる。第Ⅳ期・第Ⅴ期の遺物は、それぞれ数点しか出土していない。

(第Ⅲ層上層出土土器)

甕F3、鉢C3、低脚杯、高杯D、小型丸底土器E2、小型器台A類が出土している。これらの土器は、第Ⅳ期・第Ⅴ期が中心となる。

(2) 平安時代の土器

平安時代の土器は、SD301から出土した。これ以降、鎌倉時代までの遺物は包含層内より出土しているが、碎片のみであり、遺物の量もわずかである。

SD301出土土器(図版第62)

SD301では、弥生時代から平安時代までの遺物が出土している。これらの遺物のほとんどは、SD301の下層からまとまって出土したものである。218～228は、弥生時代～古墳時代の土器で第Ⅲ層からの混入と思われる。230は、糸切り底をもつ土師器碗である。平高台の底部から内湾気味に体部が立ち上がる。口径13.8cm・器高5.1cmを測る。231・233は糸切り底をもつ土師器皿である。231は、口径9.0cm・器高2.1cmを測る。229・234は、糸切り底をもつ須恵器碗で、いずれも体部外面に墨書がみられる。229は、破損のため一文字の下半分しか残っておらず、また、墨書も薄いことから文字は判読できない。234は、底部から口縁部にむけて「今西」と記されている。(戸原 和人・鍋田 勇)

第2節 木製品

(1) 整理の方法

出土した木製品の整理を進めるにあたっては、以下のことに留意した。

1. 木製品は、その材質が脆弱であるため、幾度も移動することは危険であり、実測と写真撮影を随時行った。

2. 分類及び実測は、遺構・層位ごとに行うのではなく、まず、全製品の中から製品のすぐれたもの、完成度の高いものから順に台帳記入を行い、その後抽出した遺物について実測と写真撮影を行う。製品の分類については、この台帳によって行う。そのため、この台帳には、所定の項目のほか製品の法量やそのスケッチも記入することとした。これは、すべての個体について実測することが不可能な場合有効な措置である。

3. 分類は、形態によって行うことを原則とするが、明らかに機能のわかるものや出土の状態により関連すると考えられるものについては一群として扱った。

4. 実測については、全体の形状がわかるものが少ないため、その復原に留意し、それぞれの大きさによって縮小した。

5. 木取りについては、当時の木工技術を知るための手がかりともなるので、断面図に表現するよう努めたが、実測を行わなかったものについては果たせなかった。

6. 実測の表現については、製品に残る加工痕と使用痕を主に行ったが、製品によっては木目を表現することでより特徴を示すものもあり、このような製品には木目を表現した。

7. 実測後、保存処理を行うためのデータとして、(1)針葉樹と広葉樹の分類、(2)心持材と辺材(板目材・柾目材の分類も含む)の分類、(3)それぞれの保存状態(良・普通・不良)の3分類の分類を行った。この作業は、2で行った作業の続きとしてすべて台帳に記入した。なお、第2次調査で出土した木製品については、主なものを抽出して材質鑑定を委託した(付載)。

第2次調査で出土した木製品は、遺構別の出土量でみると溝SD02がもっとも多く、次いでSD10、SD04の順となる。また、第3次調査では、SX301及びSD303からの出土量がもっとも多い。その他、これらの遺構周辺の包含層からの出土量も極めて多く、この遺跡の埋没状況の一端を窺うことができる。以下、出土した木製品の状況について述べたい。

(戸原 和人・鍋田 勇)

(2) 木製品

出土した木製品は、総数1,000点以上におよび、このうち何らかの加工痕をもつものは約800点を数える。この項目では、これら加工痕をもつ木製品のうちから遺構に伴うもの、

用途の特定できるもの、特殊な形態をもつもの等、合計186点について個々の特徴を記す。

工具(図版第69)

1・2は、手斧柄である。いずれも袋状鉄斧を装着し、横斧になるものと推定される。木の枝分かれした部分を利用し、幹の部分上台部、枝の部分握り部としている。2の鉄斧装着部は、長さ3.8cm・幅3.5cm・厚さ1.8cmを測る。1は、台部の長さ12.8cm・幅3.2cm・厚さ3.0cmを測る。2は、台部の長さ15.8cm・幅4.2cm・厚さ2.6cmを測る。1の材質は、広葉樹で、2は針葉樹と思われる。1・2ともB8地区から出土した。3は、斧形の木製品であり、非常に硬い広葉樹を加工したものである。縦断面は、二等辺三角形を呈し、刃先は扁平である。根元の方は、握り部を取り付けるためU字状に扶られている。全長13.2cm・幅4.1cm・根元の厚さ2.7cmを測る。I5地区から出土した。

農具(図版第69)

4・5は、舟形突起をもつ広鋏である。4は、突起部付近のみ残存している。柄を装着する孔は、長径3.3cm・短径2.9cmの楕円形を呈する。柄の装着角度は、約74°である。現存長13.1cm・最大幅12.5cm・厚さ0.8~3.4cmを測る。G6地区から出土した。5は、突起の脇に小孔の穿たれた痕跡を持つ。表面には使用時についたと思われる多くの傷が観察される。柄との装着角度は約58°である。現存長15.3cm・最大幅23.0cm・厚さ0.8~3.6cmを測る。B5地区から出土した。31・32は槌の子である。いずれも心持ち丸太を加工したもので、両木口面を削り落とし、中央部に浅いV字状の溝を巡らす。ともに材種は、広葉樹である。31は、断面がほぼ円形を呈する。全長14.5cm・直径10.4cmを測る。SD303から出土した。32は、断面が楕円形を呈する。全長17.6cm・短径6.1cm・長径8.1cmを測る。C8地区から出土した。

容器(図版第69~71)

6は、木裏面を上面とする横木取りの盤である。内面は、浅く、ゆるやかに削り抜かれている。遺存状態は悪い。現存長43.9cm・現存幅11.8cm・高さ4.9cmを測る。B6地区から出土した。7は、柾目の板材を削り抜いた長方形の盤である。底は、一部しか残存していないが、非常に薄く仕上げられている。長辺、短辺とも斜めに立ち上がる。現存長45.0cm・幅11.9cm・高さ4.9cmを測る。D6地区から出土した。24は、木裏面を上面とする大型の横木取りの盤である。遺存状態は悪く、底板の半分と側板の一部しか残っていない。裏面には、削り出した低い脚部が円周の部分にそって一対作られている。現存長72.3cm・現存幅26.0cm・現存高9.5cmを測る。B7地区から出土した。8は、丸太の2つの割材を用い、木心をはずし、木裏面を上面にする横木取りの盤である。長辺と平行にほぼ半分に分れたものと思われる。長辺は約60°の角度で斜めに立ち上がり、約1.5cm内外の厚みを

もつ。2つの短辺は、それぞれ若干形態が違い、一方は長さ5cmの切り欠きをもち、もう一方は長辺側から中央に向かってゆるやかに低くなっている。底は、2.3cm内外の厚さをもつ。全体にしっかりしたつくりで仕上げもていねいである。全長66.2cm・現存幅13.5cm・高さ5.3cmを測る。C8地区から出土した。9は、2つ割の丸太を用い、木表面を上面とする横木取りの槽である。内部を深く削り抜き、底・側板とも薄くていねいに仕上げている。約1/2弱が残存している。平面形は、楕円形を呈し、側板は約60°の角度で立ち上がる。推定長径47cm・短径30cmで、底部推定長径31cm・短径14cmを測る。SD303から出土した。10は、木裏面を上面にする横木取りの容器である。完形品と思われるが、全体につくりが粗く、製作途中の未完成品のようである。短辺の一方はなく、内部の仕切りがその代わりにしている。全長24.6cm・幅13.5cm・高さ4.1cmを測る。B7地区から出土した。11および12は、組合せの箱形木製品である。12は、底板と側板に長辺4か所、短辺3か所の孔をそれぞれ穿ち、樹皮を3〜4重に巻いて固定している。また、樹皮で固定した後、孔と樹皮の隙間には小さな木片をつめて補強している。側板は、長辺・短辺とも一方のみ残っているが、いずれも焼け焦げており、深さは不明である。底板も長辺の一方を破損している。長さ34.9cm・現存幅15.5cm・現存の深さ3.9cmを測る。C8地区から出土した。11は、12と構造は同じであり、12の長辺の一部の可能性ある。現存長26.9cm・現存幅4.6cm・厚さ1.4cmを測る。B7地区から出土した。13は、柎による組合せをもつ木製品である。箱の一部かと考えられる。底・側板とも柎目の板材を用いる。底板は、焼け焦げた跡が残り、原形はとどめていないが、もとは長方形であったと思われる。底板の短辺には柎がひとつ作られ、側板と組み合わせられている。柎は、側板を突き抜け、木釘で底板と側板を固定している。また、もう一か所、側板から底板へ木釘が打ち込まれている。底板は、現存長28.1cm・現存幅22.1cm・厚さ1.6cmを測り、側板は、現存長17.4cm・現存幅3.4cm・厚さ1.4cmを測る。SX301から出土した。

14は、割材を削り抜いた楕円形の鉢の一部と思われる。底は、平底で平滑面をなし、口縁部が斜めに立ち上がる。端部上面は、やや平坦で、外縁状を呈する。現存長19.2cm・現存幅6.6cm・高さ4.4cmを測る。G6地区から出土した。15は、柎目の割板材を加工した盆である。表面の周囲に幅約3cmの縁を残し、内部を浅くていねいにくり抜いている。直径25.0〜27.0cm・厚さ1.0〜1.9cmを測る。G4地区から出土した。16は、柎目の割板材を加工した薄手のもので、盆あるいは蓋と考えられる。本来は円形であったと思われ、周囲にはわずかな高まりであるが、幅1.5cmの縁帯部が設けられている。現存長26.6cm・現存幅5.6cm・厚さ0.8〜1.0cmを測る。F4地区から出土した。17は、板目の割板材を加工したもので、一部しか残らず全形は不明だが、大きな蓋の可能性ある。ほぼ中央部に8mm×

4mmの小さな穴がひとつ穿たれている。現存長30.6cm・現存幅4.1cm・厚さ0.6cmを測る。F4地区から出土した。18・19・20は、板目の割板材を円形に加工した蓋である。18は、周辺部を斜めにカットしており、実測図の面を下側にする蓋と考えられる。推定直径10.5cm・厚さ1.0cmを測る。E4地区から出土した。19は、一部周辺の角を面取りしている。推定直径21.0cm・厚さ1.1cmを測る。B5地区から出土した。20の片面の縁は、浅く削り込まれており、容器との接着面になると思われる。広めのはつり面をとどめているが、全体にていねいなつくりである。直径18.2cm・厚さ1.0cmを測る。C6地区から出土した。

案(図版第72)

21は、心をはずし、木表面を上面とする横木取りの案である。高い脚部が四隅に配置され、上面は緩く湾曲する。両短辺には1cm幅の縁帯部がある。台板の裏側の中央部には栗形に穿った窪みがあり、その中より直径2mmの小さな孔が穿たれ、上面まで貫通している。上面にはその横にもうひとつ孔が穿たれているが、裏までは貫通していない。完形品ではあるが、縦方向に2つに割れており、SD303とSD302との分流点および合流点から別々に出土した。全長35.8cm・幅15.6cm・高さ9.6~13.1cmを測る。22は、心をはずした2つ割の丸太を用い、木裏面を上面とする横木取りの案で、形態は、21と類似している。四隅に配置された脚部のうち、2脚を一部破損しているが、ほぼ完形品である。上面の平面形は、長方形で、両短辺には2cm内外の縁帯部があり、両短辺に向けて緩やかに立ち上がる。全長22.2cm・幅9.0~10.2cm・高さ4.2~6.5cmを測る。E8地区から出土した。23は、木表面を上面とする横木取りの案である。約1/2が残存している。長辺に平行して1対の脚部を有する。材種は広葉樹である。現存長14.9cm・幅20.5cm・高さ5.7cmを測る。SD303から出土した。

祭祀具(図版第73)

25は、鎌の模造木製品である。長さ13.1cm・幅2.2cm・厚さ0.7cmと小型品であるが、仕上げはていねいで精巧なつくりである。SD303から出土した。26は、心をはずした2つ割の丸太を用い、木裏面を上面にあてる横木取りの舟形木製品である。完形品で遺存状態も良好である。外面は、はつり面をよくとどめているが、全体にていねいな仕上げである。内面は、刀子状のもので削り抜いており、外面に比べ粗いつくりとなっている。船首には左右から穿たれ、貫通した0.6cm×0.3cmの孔がある。船首は、船尾に比べて1.2cm高い。全長36.1cm・幅11.2cm・高さ5.5~7.7cm・底の厚さ1.2~1.5cmを測る。C8地区から出土した。27は、心をはずした2つ割の丸太を用い、木裏面を上面にあてる横木取りの舟形木製品である。長辺方向に沿って割れており、約半分しか遺存していないが、平面形は琵琶形をしており、尖った方が船首になると思われる。内外面ともゆるやかな曲線で構成さ

れ、底から船首に向かってはなめらかに立ち上がり、船尾に向かっては急に立ち上がる。船尾近くの外面に一部焼け焦げた跡がある。内外面とも仕上げは非常にいいである。現存長50.2cm・現存幅16.2cm・高さ8.0cmを測る。C6地区から出土した。

発火具(図版第74)

28・29・30は、割板材から割り出した棒状の火鑽臼である。28・29は、板目、30は、柾目である。28は、両方の長辺に臼部を切り込んでいる。一方は10孔あり、すべて使用され内部が焼け焦げている。他方は6孔のうち5孔が使用されている。孔径は、0.9~1.1cmを測り、一部貫通しているものもある。現存長30.3cm・幅3.5cm・厚さ2.0cmを測る。B5地区から出土した。29は、使用された火鑽孔が1孔と、未使用のV字の切り込みがある。孔径は0.9cmを測る。現存長30.4cm・幅2.2~2.7cm・厚さ1.1cmを測る。出土地は不明である。30は、2孔の火鑽孔があり、どちらも使用されている。現存長27.4cm・幅2.5cm・厚さ1.8cmを測る。B2地区から出土した。

組具(図版第74)

33は、ひとつの柾目の割板材を2本の棒状に加工し、端部近くに穿った長方形の柄穴に木片を通して組み合わせたものである。2本の棒材には、端部に左右対称となる突起がそれぞれ作られている。全体に仕上げはいいである。木片は、一端が破損しているため、全長は不明で、用途もよくわからない。柄穴の大きさは、ともに2.5cm×1.0cmで、棒材の現存長28.7cm・幅3.9~5.4cm・厚さ2.9cmを測る。E4地区から出土した。34は、割板材を加工した柄穴をもつ棒状の木製品で、柄穴には小さな木片を通してある。棒材の一方の長辺には切り欠きが入れられ、33とやや類似した形態をとる。木片は、両端を破損しており、全長は不明であるが、現存長3.9cm・幅2.5cm・厚さ0.9cmを測る。棒材の全長26.1cm・幅2.8~5.0cm・厚さ3.3cmを測る。SD304から出土した。33・34ともに用途は不明である。

機織具(図版第77)

67~70は、ちきりと考えられる木製品である。35は、板目の割板材を加工した木製品である。半円形の頭部と断面形が長方形の差し込み部からなる。先端は、45°の角度で切り落とされ、中央部のやや先端よりには1.9cm×1.7cmの柄穴が穿たれている。他の木製品と組み合わせ、止め具のような役割をしたものと考えられる。全長24.5cm・幅4.5~7.7cm・厚さ1.3~2.6cmを測る。SD303から出土した。67は、両端近くに切り込みを入れたもので、切り込みと反対側は面取りされ、平滑になっている。全長70.2cm・幅2.7cm・厚さ2.2cmを測る。出土地は、不明である。68は、板目の割板材を加工したもので、両端を左右対称に有頭状に作り出している。全長68.1cm・幅3.3~6.0cm・厚さ3.2cmを測る。C8地区か

ら出土した。69は、一端は破損しているが、両端とも有頭状を呈すると思われる。断面形は、台形で、2角をカットして成形している。現存長53.8cm・幅2.9cm・厚さ1.5cmを測る。B7地区から出土した。70は、板目の割板材を加工したもので、やや他と形態を異にし、両端の大きさ・形が違っている。はつり面を明瞭に留める。全長53.0cm・幅2.6~6.2cm・厚さ1.7cmを測る。B7地区から出土した。

棒状木製品(図版第74・77~79)

(柄) 62~66は、農具ほかの柄と思われる木製品である。62は、その断面形が円形を呈し、両端を丸く収める木製品である。全長106.7cm・直径3.0cmを測る。C6地区から出土した。63は、柾目の割板材を加工したものである。断面形は、ほぼ円形を呈する。現存長91.2cm・直径2.8cmを測る。SD304から出土した。64は、やや細目の棒材である。現存長87.5cm・直径1.7~2.2cmを測る。E4地区から出土した。65は、柾目の割板材を加工したものである。断面形は、楕円および隅丸形状を呈する。一部焼け焦げている。現存長75.8cm・直径2.6~2.9cmを測る。C8地区から出土した。66は、断面形が円形を呈し、先端部は段がつき、細くなっている。もう一方の端部は四方から面取りがなされ、断面形が長方形になっている。両端とも何かに差し込んであったものかもしれない。全長54.3cm・直径1.6~2.2cmを測る。A4地区から出土した。

(有頭棒) 71は、板目の割板材を加工したものである。一方の端部隅を斜めに切り欠き、その反対側に切り込みを入れている。長辺の一方のほぼ中央には、3か所小さなくぼみがあり、他方にはゆるやかなくぼみが1か所ある。全長42.5cm・幅2.8cm・厚さ1.5cmを測る。材は、針葉樹である。F6地区から出土した。72は、両端の内側約2cmのところを削り込み、両端とも有頭状に仕上げたものである。全長17.9cm・直径2.8~3.4cmを測る。SX301から出土した。74は、柾目の割板材を加工したものである。先端を残し、長辺の両側を切り込んで有頭状にしている。有頭棒の中では細い部類に入る。現存長38.3cm・幅2.0cm・厚さ1.3cmを測る。材は、針葉樹である。D4地区から出土した。75は、幅の広い頭部をもつ有頭棒である。頭部は、破損のため、約半分しか遺存していない。全長38.8cm・幅2.0~3.5cm・厚さ1.9cmを測る。F7地区から出土した。76は、一端の内側を浅く削り込んで有頭とし、先端へ向けて細くしたものである。削り込んだ部分で毛を縛り、筆として使われた可能性もある。全長22.1cm・直径1.2~2.8cmを測る。SX301から出土した。77は、一端の内側をわずかに削り込み有頭とし、他方は尖頭にしている。全長35.9cm・直径2.6cmを測る。F6地区から出土した。79は、丸い頭部をもつ有頭棒である。現存長38.6cm・幅2.2cm・厚さ2.0cmを測る。F5地区から出土した。81は、一端を削り残して有頭状にしたものである。頭部の断面形は、楕円を呈し、棒部とは斜めに取りついて

いる。全長74.3cm・幅1.5～3.2cm・厚さ1.9～2.6cmを測る。F4地区から出土した。85は、板目の割板材を加工した有頭棒である。先端部の約3分の1は両側から抉られ、断面形がレール状を呈する。全長177.3cm・幅5.7cm・厚さ5.0cmを測る。SX301から出土した。93は、割板材を加工した有頭棒である。頭はやや不定形であり、先は欠損している。現存長37.6cm・厚さ3.1～3.5cmを測る。I5地区から出土した。材は、針葉樹である。86・87・88・89・90は、心持ちの有頭棒である。86・87は、ほぼ完形、88は、先端部を欠損し、89および90は、先端部のみ遺存している。材種は、いずれも広葉樹である。86は、全長約193cm・幅4.6cm・厚さ3.0cmを測る。87は、全長194cm・幅3.6cm・厚さ2.6cmを測る。88は、現存長194cm・幅4.4cm・厚さ2.7cmである。89は、現存長18.9cm・幅4.5cm・厚さ2.2cmを測る。90は、現存長17.6cm・幅3.8cm・厚さ2.6cmを測る。いずれもSX301から出土した。94は、一端のみを有頭状にしたもので、遺存状態はやや悪い。全長57.0cm・幅3.5cm・厚さ2.8cmを測る。98は、板目の割板材を加工した平たい棒である。端部のやや下に浅い切り込みを入れ、有頭とする。現存長99.0cm・幅3.3cm・厚さ1.9cmを測る。D4地区から出土した。

(筥) 40は、板目の割板材を加工したものである。非常に薄く、両端とも斜めに切り落とされている。土器の施文等に使用したのではないかと考えられる。全長17.8cm・幅1.6cm・厚さ0.3cmを測る。B8地区から出土した。

(その他) 38は、先端を尖らせ、頭部を二段の有頭状にしている。先端は、一部破損している。現存長15.6cm・幅1.6～2.6cm・厚さ1.4cmを測る。出土地区は、不明である。39は、先端を丸くした棒状の木製品である。もう一端の方は、刀子でまわりに切り込みを入れてから折って切り離されている。全長17.9cm・直径1.8～2.1cmを測る。SX301から出土した。73は、先端に向かってやや細くなる箸状の木製品である。全長27.5cm・幅0.9cm・厚さ0.7cmを測る。SX301から出土した。78は、針状の形態をもつ木製品である。端部には1.0cm×0.7cmの長方形の孔が穿たれている。全長36.7cm・幅1.6～4.0cm・厚さ1.7～2.8cmを測る。B5地区から出土した。80は、割板材を加工した棒状の木製品で、断面形が楕円形の柄の部分と、断面形が扁平で横幅の広い部分とから構成されている。先端は、焼け焦げて破損している。何かをかき混ぜるのに使用したものか。現存長43.5cm・幅2.3～3.7cm・厚さ1.4～1.6cmを測る。E5地区から出土した。82は、中央部のみ幅を広くし、膨らみをもたせた棒状の木製品である。完形品であるが、用途は不明である。あるいは杵のように使用したものかもしれない。はつり面を一部とどめる。全長42.9cm・幅4.1～5.6cm・厚さ4.5cmを測る。C7地区から出土した。83は、厚手の割板材を加工したものである。細い部分を柄とすれば、縦槌とも考えられる。全体につくりは粗く、は

つり面をよくとどめている。全長40.8cm・幅2.5~7.3cm・厚さ2.5~5.6cmを測る。F4地区から出土した。92は、柁目の割板材を加工した棒状木製品である。先端を鶏頭状に加工する特異なものである。棒部の断面形は、長方形を呈し、1か所浅い切り込みをもつ。現存長71.1cm・頭部幅7.6cm・頭部厚さ3.6cm、棒部幅2.9cm・棒部厚さ2.1cmを測る。E4地区から出土した。97は、一端を尖らせた檜状の棒材である。全長102.1cm・幅4.1cm・厚さ3.9cmを測る。C6地区から出土した。99は、板目の細長い割板材である。一端は、尖頭状を呈し、かえり状のものが作られている。現存長133.1cm・幅3.5cm・厚さ1.6cmを測る。C6地区から出土した。

小孔をもつ板材(図版第75・78)

43は、ラケット状、44は、羽子板状の木製品である。いずれも、柁目の割板材を加工したもので、板面にはU字状に小孔が穿たれている。用途は、不明である。43は、SD303、44は、SX301からそれぞれ出土した。45は、板目の割板材である。ほぼ、全面が焼け焦げているため原形は不明だが、中心から一部舌状に張り出した部分は、原形をとどめており、平面形は曲線で構成されるものと考えられる。舌状部の根元には直径0.9cmの孔が穿たれている。現存長13.4cm・現存幅13.1cm・厚さ1.7cmを測る。E5地区から出土した。46は、柁目の割板材で、両脇および先端を破損しているが、平面形は将棋の駒のようになるものと推定される。山形をした先端付近には20個の小孔がならべて穿たれ、反対側には4個の孔が端部から削り込まれている。また、中央付近には4個の小孔が不規則に穿たれている。現存長25.2cm・幅15.6cm・厚さ1.5cmを測る。E4地区から出土した。47は、柁目の割板材で、破損が著しく、一部のみ残るにすぎない。一方の短辺から6.3cm離れて、短辺と平行に、直径4mmの孔が1.3cm間隔で4個穿たれている。そのうち、端のひとつだけが裏まで貫通している。もう一方の短辺には、一辺5mmの正方形の孔が2個ならべて穿たれている。両面とも粗いはつり面をとどめる。現存長31.3cm・現存幅2.4~5.6cm・厚さ1.7cmを測る。C8地区から出土した。48は、板目の割板材で、コーナーの一部と思われる。短辺の一方には、「凸」状に切り込みが入れられている。49は、板目の割板材で、0.9cm×0.8cmの孔がコーナー近くに穿たれている。全長26.7cm・現存幅7.2cm・厚さ0.9cmを測る。SD303から出土した。50は、板目のほぼ長方形の割板材である。一方の短辺は、やや弧を描くように削られ、もう一方の短辺近くに直径1cmの孔が穿たれ、その対角線上に、直径4mmの小孔が6mm間隔で3個穿たれている。全長25.4cm・幅8.5cm・厚さ0.5~0.8cmを測る。SD303から出土した。84は、柁目の割板材を加工したものである。端部を破損しているため、原形は不明であるが、一端は幅をやや広くし、細長い孔を5個並べて穿っていたものと思われる。中央には3個の小孔があるが貫通はしていない。現存長42.3cm・現存幅4.4

～5.6cm・厚さ1.9cmを測る。SX302から出土した。

その他(図版第74・75・79)

36は、板目の割板材を加工したもので、ほぼ完形品と思われるが、用途は不明である。全長14.8cm・幅5.1cm・厚さ0.7～2.7cmを測る。F3地区から出土した。37は、板目の割板材を加工したもので、半分近くを破損しており、一部焼け焦げている。現存長12.2cm・現存幅1.0～3.1cm・厚さ0.9cmを測る。C8地区から出土した。41は、柁目の板材を削り抜いたと思われる木製品である。幅の狭い盤かもしれない。現存長22.6cm・幅4.0cm・厚さは1.0～1.7cmを測る。出土地は、不明である。42は、割材を加工し、砲弾形にした木製品である。先端は、一部焼け焦げて破損しているため、この部分に柄が付いて縦樋となることも考えられる。現存長18.2cm・最大直径8.5cmを測る。E5地区から出土した。96は、板目の割板材を加工したものである。中央部の約1/3のところが最大幅となり、両端に向かい幅が狭くなっている。両端とも破損しているため、全長は不明である。片面にのみ長辺と垂直に19条の圧痕が観察され、使用痕と考えられるが、用途は不明である。現存長81.2cm・幅3.2～11.2cm・厚さ1.5cmを測る。F7地区から出土した。101は、断面三角形を呈する体部と、その一隅からのびた柄のような部分とから構成される木製品で、樋かもしれない。全長54.4cm・幅3.0～11.2cm・厚さ3.6～5.8cmを測る。E5地区から出土した。

梯子状組合せ木製品(図版第76)

51～61は、その形態から梯子状の組合せ木製品と呼称しているものである。^(注26) これまでに各部材については出土例があるものの、構造物としては今回が初見である。この木製品は、梯子で言えば、支柱に当たるもの2本、横木にあたるもの2本一組で四組の計8本、その他1本の総合計11本で構成されている。出土時には、第39図のように組合わさった状態であり、原型を保ったまま埋没したものである。53～60は、2本ずつ上下で対になっており、両端が51及び52の柄穴に差し込まれていた。また、61は、先端が59と60の間にはさまっていた。なお、57・58・61は、峰山高等学校の校舎造営時における基礎杭によって破損を受けている。

出土した位置は、明確な遺構内ではなく、古墳時代前期の遺物包含層で、地表下約1.9mの地点である。この層は、広範囲にわたり多量の木製品を含む黒色粘質土(第Ⅲ層)であり、これ以下の層では、遺物の量は際だって減少する傾向を示している。

51・52は、全体の支えとなる支柱に当たる。51は、板目の、52は、柁目の割板材で、長さの割に幅が狭い。51は、一端を破損しているが、52は、完存である。51は、つくりは比較的ていねいであるが、部分的に焼け焦げた跡があり、遺存状態はやや悪い。また、ところどころに小さな傷が入っているのが観察される。52にも不定方向に入った小さな傷が観

察される。いずれにも長方形の柄穴(約3.5cm×5.0cm)が4個穿たれており、柄穴間の長さは、約40cmを測る。さらに、52については、小さな円形の穴(直径約1.9cm)が両端の柄穴のやや内側に1個ずつ計2個穿たれていて、この点のみ51とは異なっている。51は、全長164.9cm・幅7.6~8.3cm・厚さ1.8~2.4cmを測る。52は、現存長149.2cm・幅7.4~8.6cm・厚さ2.2~2.6cmを測る。

53~60は、割板材を加工した棒状の木製品で、基本的な形はすべて共通している。長さ約74cmで、幅・厚さとも約2~3cmを測り、両端は、一方の側面から切り込まれ、先端がわずかに突起状に残されている。ただし、56と58は、中央部の幅が広く、約3cm×1cmの楕円形に近い穴が穿たれている。61は、割板材を加工した棒状木製品である。一端は、校舎の基礎杭によって破損しているが、埋没時には完形品であったと思われる。他と異なり先端が細く扁平である。推定長66.4cm・直径2.9cmを測る。

51・52の柄穴は、2本の横木を合わせた端部よりもかなり大きく、53~60は、柄穴に固定されていない。したがって、51~61を組み合わせた状態でも全体はぐらついており、何かの方法で51・52を固定して使用したものと考えられる。横木が2本のセットであること、61が59と60の間に挟まれていたこと、横木の両端の突起がそれぞれ外側を向いていることなどを考慮すれば、横木の間61以外の何かを挟んで使用したものとと思われる。

この木製品の用途については、53~60が機織具のちきりと考えうることから、織機的一种ではないかと推定したが、53~60を51・52に差し込んだ状態で織ることは不可能であろうと思われ、現在では否定的に考えている。また、この他に農具の大足、運搬用の木ぞりではないかという意見をうかがったが結論をだすまでには至っていない。^(注27)

建築部材(図版第79~82)

(角材) 95は、切り込みをもつ角材である。現存長31.1cm・幅4.3cm・厚さ2.6cmを測る。SX301から出土した。108は、切り欠き、切り込みをもつ角材である。切り込みは、斧による粗削りのままであり、刃の突き刺さった跡が明瞭に残っている。全体にはつり面をとどめた粗いづくりである。現存長53.0cm・幅6.1cm・厚さ4.9cmを測る。E5地区から出土した。109は、端部近くに2か所の切り込みをもち、先端を尖頭状に削りだす角材で、遺存状態はやや悪い。現存長60.0cm・幅5.0cm・厚さ3.6cmを測る。SD303から出土した。110は、大小2個の柄穴を2組、計4個の柄穴をもつ角材である。断面形は、隅丸方形を呈する。柄孔は、端部近くに2cm×2cmの正方形、そのやや内側に5cm×2cmの長方形のものが対称にあげられている。全長66.6cm・幅5.4cm・厚さ3.5cmを測る。F4地区から出土した。114は、切り欠きをもつ板目の割板材である。現存長37.3cm・幅8.4cm・厚さ0.9~2.0cmを測る。E4地区から出土した。117は、柄穴を有する角材である。柄穴の

大きさは5.0cm×3.5cmで、材は現存長20.9cm・幅7.3cm・厚さ6.3cmを測る。SD303から出土した。118は、枅穴を有する細目の角材である。一端は、先端から3cm程細く削られており、この部分は枅と思われる。枅穴の大きさは3.0cm×1.3cmで、材は現存長19.3cm・幅3.5cm・厚さ3.5cmを測る。119は、枅目の割板材を加工した角材である。一方の端部近くに幅8mm・深さ7mmの切り欠きを有する。全長23.8cm・幅2.3cm・厚さ1.9cmを測る。B8地区から出土した。120は、一か所に浅い切り欠きを有する細目の角材である。現存長17.8cm・幅3.9cm・厚さ3.7cmを測る。121・122は、ともに枅目の割板材を加工したやや丸みをもつ角材である。SX301の近接した位置から出土しており、本来は同形・同大のものと考えられる。端部付近に4.0cm×2.5cmの枅穴を有する。遺存状態は悪く、焼け焦げた跡が残る。121は、現存長22.7cm・現存幅6.4cm・厚さ2.6cmを測る。122は、現存長30.2cm・現存幅6.7cm・厚さ2.7cmを測る。材は、針葉樹である。136は、樹皮近くの割材を加工した棒状木製品である。一端は、破損しており、全長は不明である。先端には角状の突起があり、さらに切り込みがある。現存長78.2cm・幅1.7～6.2cm・厚さ4.2cmを測

付表5 規格をもつ角材法量表^(注28) (※は先端から切り込みまでの長さ、単位はcm)

番号	地区	法	量	※	備	考	番号	地区	法	量	※	備	考
123	F 5	現存長	68.6	15.0			130	E 5	現存長	59.4	17.0		
		幅	4.0						幅	3.2			
		厚さ	4.7						厚さ	3.6			
124	F 5	現存長	72.4	16.0			131	E 3	現存長	52.6	15.6	S X 301	
		幅	3.4						幅	4.3			
		厚さ	4.0						厚さ	2.5			
125	F 5	現存長	89.5	18.0			132	E 3	現存長	49.8	15.0	S X 301	
		幅	3.5						幅	3.3			
		厚さ	4.5						厚さ	3.3			
126	F 5	現存長	67.6	20.0	S X 301		133	E 3	現存長	31.6	15.4	S X 301	
		幅	4.6						幅	5.1			
		厚さ	2.6						厚さ	3.9			
127	F 5	現存長	79.5	16.0			134	E 3	現存長	33.5	16.6	S X 301	
		幅	4.5						幅	4.2			
		厚さ	4.6						厚さ	2.4			
128	E 3	現存長	82.4	15.0	S X 301		135	F 5	現存長	86.5	15.0		
		幅	4.1						幅	5.1			
		厚さ	3.2						厚さ	3.0			
129	F 5	現存長	81.1	16.5			91	F 3	現存長	208.7	14.4	S X 301	
		幅	4.0						幅	2.6			
		厚さ	4.0						厚さ	3.1			

る。C5地区から出土した。137は、端部の一隅を斜めに切り落とし、その反対側に切り込みをいれたものである。現存長59.6cm・幅3.8cm・厚さ3.3cmを測る。138は、一方の端部近くに切り込みをもち、反対側に一對の柄状の突起をもつ。全長43.5cm・幅4.4cm・厚さ4.0cmを測る。C7地区から出土した。

(柱) 102・103は、切り欠きをもつ柱である。102は、心持ちの丸太であり、簡単な加工しか施されていない。全長117.1cm・直径9.1cmを測る。F6地区から出土した。103は、厚手の柂目板を加工したものである。全長156.0cm・幅12.2cm・厚さ5.8cmを測る。C5地区から出土した。

(板材) 100は、板目の細長い割板材である。一端から7.5cm離れて、8.5cm×3.0cmの孔が穿たれている。現存長141.9cm・幅5.5cm・厚さ1.3cmを測る。SX301から出土した。104は、板目の割板材である。板のほぼ中央部に一辺3cmの柄穴が1か所穿たれている。全面にはつり面をとどめている。現存長77.8cm・幅17.4cm・厚さ2.4cmを測る。F5地区から出土した。105は、板目の割板材である。2.6cm×1.5cmの柄穴が1か所と、破損面にもう1か所柄穴をもつ。柄穴間の長さは、45.0cmを測る。全体につくりは粗い。現存長70.9cm・幅9.9cm・厚さ3.2cmを測る。B6地区から出土した。106は、板目の割板材である。2.7cm×2.2cm・3.6cm×1.9cm・0.8cm×0.5cmの3つの穴が不規則に穿たれている。また、一方の長辺の中央部にV字状の切り込みが入れられている。全長65.8cm・幅16.0cm・厚さ2.0cmを測る。E5地区から出土した。107は、切り欠き、柄穴をもつ板目の割板材である。柄穴は、板のほぼ中央部に並べて穿たれている。現存長57.3cm・幅10.0cm・厚さ1.8cmを測る。D5地区から出土した。111は、板目の割板材で、厚みがあり、柱材とも考えられる。先端の約半分は切り欠いてあり、続けて切り込みがある。さらに3.0cm×2.5cmの柄穴が中央からややずれて穿たれている。現存長20.0cm・幅10.7cm・厚さ4.1cmを測る。112は、板目の割板材である。両端とも破損しているが、ほぼ中央部に5cm×3cmの柄穴を有する。現存長20.8cm・幅12.5cm・厚さ1.9cmを測る。B7地区で出土した。113は、柂目の割板材である。やや薄手で、板のほぼ中央部に2.4cm×2.5cmの柄穴を有する。全長36.8cm・幅6.7cm・厚さ0.6~1.5cmを測る。B7地区から出土した。115は、板目の割板材である。一方の端辺に柄のような突起をもつ。全長22.0cm・幅14.8cm・厚さ1.8cmを測る。B8地区から出土した。116は、幅の狭い板目の割板材である。両端とも破損している。現存長25.2cm・幅5.3cm・厚さ1.7cmを測る。D6地区から出土した。144は、板目の割板材である。長辺・短辺とも破損しているため、全長・幅とも不明である。大きさ1cm前後の楕円形の柄穴が、2つセットで2か所、計4か所と1.8cm×1.5cmの長方形の柄穴が1か所穿たれている。長方形の柄穴の横には途中まで穿たれた柄穴がある。板の全

付表6 土木部材法量表(単位はcm)

番号	種類	地区	法量	備考	番号	種類	地区	法量	備考
139	板	C7	全長 146.4 幅 15.5 厚さ 2.1	S D302 堰 転用材?	153	板杭	B7	全長 49.2 幅 5.4 厚さ 2.1	S D303
140	板	B7	全長 170.3 幅 13.7 厚さ 3.4	S D303 転用材	154	板杭	B7	全長 53.0 幅 7.7 厚さ 1.3	
141	板	B7	全長 120.6 幅 17.1 厚さ 3.5	S D303 転用材?	155	杭	B7	全長 57.4 幅3.2~4.8 厚さ 3.3	S D303
142	板	B8	全長 107.6 現存幅11.1 厚さ 1.5	S D303 転用材	156	角杭	B7	全長 45.5 幅 2.9 厚さ 2.1	S D303 肩部
143	丸太 半截	C7	全長 117.3 幅 12.7 厚さ 8.5	S D302 堰 転用材	157	板杭	B7	全長 41.9 幅 7.4 厚さ 1.9	S D303
145	丸杭	C7	全長 62.8 直径 8.9 ~9.4	S D302 肩部	158	板杭	B7	全長 45.3 幅 4.9 厚さ 2.1	S D303
146	板杭	B7	全長 57.5 幅5.6~9.8 厚さ 1.8	S D303	159	角杭	C7	全長 45.0 幅 3.5 厚さ 1.7	S D302 堰 転用材
147	板杭	B8	全長 65.4 幅 8.8 厚さ 2.6	S D303	160	板杭	C7	全長 58.6 幅 5.2 厚さ 1.2	S D302 堰 転用材
148	板杭	B7	全長 47.8 幅 8.1 厚さ 2.5	S D303	161	板杭	C7	全長 58.8 幅 4.7 厚さ 1.6	S D302 堰 転用材
149	角杭	B7	全長 79.7 幅 5.2 厚さ 3.7	S D303	162	角杭	C7	全長 73.9 幅 3.8 厚さ 2.3	S D302 堰
150	角杭	B8	全長 93.2 幅 3.4 厚さ 3.2	S D303	163	角杭	C7	全長 80.8 幅 5.3 厚さ 3.3	S D302 堰
151	角杭	B7	全長 77.0 幅 6.9 厚さ 6.0	S D303	164	角杭	C7	全長 82.2 幅 5.4 厚さ 4.1	S D302 堰
152	板杭	B7	全長 51.1 幅 7.6 厚さ 2.0	S D303	165	角杭	C7	全長 81.1 幅 4.8 厚さ 2.8	S D302 堰

番号	種類	地区	法	量	備	考	番号	種類	地区	法	量	備	考	
166	板杭	C 7	全長	67.7	2.5cm× 1.0cmの 柄 穴を有する 転用材		177	矢板	G 4	全長	84.0	5cm×5cm の柄穴を有 する		
			幅	19.8						幅	17.0			
			厚さ	3.2						厚さ	4.7			
167	角杭	C 7	全長	41.4	SD302	堰	178	矢板	C 7	全長	86.5	SD302 堰 7.3cm×3. 4cmの柄穴 を有する		
			幅	3.7					幅	15.7				
			厚さ	2.1					厚さ	2.2				
168	角杭	C 7	全長	38.1	SD302	堰	179	杭	D 6	現存長	47.8			
			幅	2.4					幅	2.4				
			厚さ	2.1					厚さ	2.2				
169	板杭	B 7	全長	36.9	SD303		180	杭	C 7	全長	63.6			
			幅	7.5	転用材				幅	4.5				
			厚さ	1.7					厚さ	2.3				
170	板杭	B 7	全長	35.8	SD303		181	角杭	F 4	全長	56.3			
			幅	5.9					幅	4.7				
			厚さ	1.8					厚さ	1.7				
171	角杭	B 7	全長	38.2	SD302		182	角杭	B 6	全長	56.3			
			幅	4.2					幅	5.9				
			厚さ	1.6					厚さ	3.1				
172	角杭	B 7	全長	49.6	SD303		183	杭	C 6	全長	41.4			
			幅	3.3	転用材				幅	4.2				
			厚さ	2.4					厚さ	2.6				
173	角杭	C 7	全長	62.1	SD302	堰	184	角杭	C 7	全長	32.6			
			幅	3.5	転用材				幅	3.2				
			厚さ	2.4					厚さ	3.6				
174	丸杭	D 4	現存長	50.9			185	板杭	F 6	全長	35.4			
			幅	7.8					幅	4.9				
			厚さ	6.8					厚さ	1.5				
175	丸杭	E 4	現存長	58.5	S X 302		186	角杭	H 4	全長	17.6			
			直径	6.4					幅	3.4				
				~8.2					厚さ	1.8				
176	杭	B 6	全長	70.0										
			幅	6.1										
			厚さ	2.6										

面に、3cm×2cmないし2cm×1.5cm単位のはつり面が明瞭に残っている。現存長81.7cm
・現存幅18.0cm・厚さ1.5~2.0cmを測る。SD303から出土した。

土木部材(図版第83)

(板材) 140は、流れ柱目の板材である。一方の端部近くに、端から1.5cm×2.1cm、
1.6cm×2.2cmの柄穴が穿たれている。板面には、はつり残され高まりになった部分のみ

られ、加工の途中で土木材に転用されたものと考えられる。141は、板目の割板材である。粗いはつり面をとどめている。片面には杭(172)のあたっていた痕跡が残っている。142は、板目の割板材で、10か所の柄穴が穿たれている。SD302とSD303の分流地点で用いられていた木製品であり、小木片が板面に付随している。小木片は、割板材を加工したもので、断面形は半円を呈する。両端の約1cmは中央部よりも細く削られ、段がついている。木片は、板の長辺と垂直に、平らな面を板側に当て、両端を樹皮によって板と固定されていた。この小木片は板の1次使用の際に何らかの意味をもっていただと思われる。小木片の全長6.9cm・幅1.7~2.2cm・厚さ1.4cmを測る。

(柱材) 143は、丸太の半截したものを加工した柱の転用材である。SD302の塚に利用されていたものである。一端は、粗く切断した状態であり、他方は、木裏面に切り欠きを有する。木表面のほぼ中央部には、楕円状に抉った切り込みがある。一部に粗いはつり面をとどめる。裏面の約3分の1は、焼け焦げている。材種は、針葉樹である。

(鍋田 勇)

第3節 その他の遺物

(1) 土製品(図版第65)

土製品は、土錘1点・動物形1点・不明1点の計3点が出土している。347はC4地区、第Ⅲ層の包含層内出土の土錘である。胎土は密であり、ていねいなつくりで、焼成も良好である。暗茶褐色を呈する。全長4.1cm・最大径2.7cmを測る。348はD7地区、第Ⅲ層の最下層から出土した動物形の土製品である。頭部のみ出土で全体の形は不明である。頭部の表現方法は極めて簡略であり、刺突によって両眼を表わすのみである。現存長2.4cm・厚さ1.9cmを測る。349は、F2地区、第Ⅲ層の上層から出土したしゃもじ状の土製品である。やや扁平な受け部と棒状の握り部からなる。つくりは粗く、指押さえの跡が明瞭に残る。現存長14.8cm・幅3.8~7.6cm・厚さ1.8~2.4cmを測る。(鍋田 勇)

(2) 石器類(図版第87)

石器類は、合計6点出土している。磨石2点・磨痕をもつ軽石1点・石ノミ1点・石皿1点・台石1点の内訳である。

1は、磨石である。長さ10.9cm・幅7.4cm・厚さ4cm・重量580gを測る。石鱗形の扁平な自然石を用い、表裏面および側縁全周にこつこつと敲かれたアバタ痕と、滑らかな磨痕をとどめる。使用頻度はかなり高く、磨れて平坦になった表裏面には各2か所の凹みと、側縁部には帯状の面取りを形成している。石材は、花崗岩質砂岩である。2も磨石である。

半割し、残存長10cm・残存幅6.8cm・残存厚4.5cm・重量480gを測る。先端部と片方の側縁に面的な敲打痕と磨痕が形成されている。また、表面部片側にも面的な磨れが認められる。磨面の範囲は滑らかな感触をもつ。石材は、花崗岩質砂岩と思われる。

3は、磨痕をもつ軽石である。形の整った扁平楕円で、長さ6.7cm・幅5cm・厚さ2.8cm、重量20gを測る。表裏面を面的に広く磨った痕跡をもつ。浮子として利用したものと考えられる。

4は、石ノミであろう。長さ12.4cm・幅3.2cm・厚さ2cm・重量120gの大きさである。断面台形の細長い自然礫を用い、片側の先端部にノミ状の刃部が細かな剥離によって作り出されている。長軸に沿う側縁部の2か所で、激しい敲打による潰れ痕のため、両側からやや抉られた痕跡が観察される。表面部も滑らかに磨られた部分と、連続する強い敲打による凹みが併存している。石材は、頁岩である。

5は、石皿である。全体形のほぼ6分の1を欠損している。長軸15.3cm・短軸(残存幅)13.4cm・厚さ4.6cm・重量1,600gを測る。片側の表面全体と側縁の一部に、連続した細かな敲打と、わずかながら磨れによる痕跡をとどめている。表面部は、広い範囲にわたって使用され、滑らかな曲線を描いて凹んでいる。ただ、この面は、ほどよく磨られてもいるが、こつこつと敲かれた敲打痕によって主に形成されたとみる方がより妥当であろう。石材は、磨石と同じく花崗岩質砂岩である。

6は、台石である。長軸18.7cm・短軸10.1cm・厚さ6.5cm・重量1,980gを測る。側縁部は激しく打ち欠かれ、もとの礫表面をとどめていない。一方の表面部に、敲打によるごく浅い凹みが2か所形成され、磨られた痕跡はまったくない。4の石ノミのような工具とともに、何らかの作業を行う際の台として使用されたものであろう。石材は、安山岩と思われる。

なお、図版第87中の破線・実線・一点破線はそれぞれ、敲打痕・磨痕・打撃剥離痕の存在する部位および広がりを示すものである。(黒坪 一樹)

(3) 植物遺体

植物遺体としては、種子・樹皮が出土している。種子は、モモおよびトチと思われるもので、第Ⅲ層内およびSD303からの出土である。樹皮は、木製品12と142(図版第83)で使用されているほか、第Ⅲ層内からも出土している。いずれもサクラの樹皮と思われる。

(鍋田 勇)

第6章 総 括

第1節 出土遺物からみた古殿遺跡

(1) 出土土器の概要

ここでは、各遺構から出土した土器の器種構成を時期的な変遷のなかでまとめたい。

古殿遺跡は、今回で3次にわたる調査を行ったことになる。これまでに、出土した土器は、弥生時代後期中葉から古墳時代前期までのものももっとも多く、出土状況はかならずしもよいとはいえないが、まとまりをもっているといえる。形式的に新しい要素を取り除き、まとまりのある遺構・層位を抽出することで、土器編年作業を行いたい。

出土した遺物のなかでは、第2次調査で検出したSD12・SD22と、SD10・SD20・SK03・SD02-2に含まれる古い様相の土器群が、もっとも古い段階のものであり、弥生時代後期中葉に相当する。

次に、第1次調査で検出したSX11・SE03に含まれる古い様相と考えられる土器群、第2次調査で検出したSD04の下層・SK03の上層・SD10の下層・SD12の上層・SD20の中層・SD12の上層、第3次調査で検出したSD309・SD310・SX302・SD303下層の出土土器によって構成される一群がある。これらは、弥生時代後期後葉に相当する。

第2次調査で検出したSD04の上層・SD02-2下層・SK03の下層、SD10の下層、第3次調査で検出したSD302・SD303の上層出土の土器によって構成される一群がある。これは、畿内という庄内式期に相当する。

第2次調査で検出したSD20の上層・SD02-2の中層・SD10の中層、第3次調査で検出したSD304の出土土器によって構成される一群がある。これは、畿内の布留式前葉に対応する。

第1次調査で検出したSD02、第2次調査で検出したSD02-2上層・SD10上層、第3次調査で検出したSX301の出土土器によって構成される一群がある。これは、畿内の布留式中葉に対応する。

(2) 出土土器の編年

以上の構成によって、古殿遺跡出土の土器は、おおむね5期に編年することができる。

第I期は、畿内第V様式に並行すると考えられる時期で、弥生時代後期中葉に比定できる。

	壺	甕	鉢	高杯	器台
第 I 期					
第 II 期					
第 III 期					
第 IV 期					
第 V 期					

第43圖 土器編年試案

器種の構成としては、擬凹線文壺Aa, 広口壺A, 長頸壺Aa類, 甕Aa・Ab類, 鉢A2, 有孔鉢A2・B2, 小型鉢A2・B2, 台付鉢B, 把手付き鉢, 大型高杯A類, 高杯B類・C1, 器台Aなどによって構成される。壺・甕・有孔鉢など, 貯蔵・煮沸・調理に使用されると考えられる各器種に, 大小いくつかの法量の違いが認められる。また, 甕Ab1は, 北陸の法仏式土器との関係が窺える。

第Ⅱ期は, 弥生時代後期後葉に比定できる。擬凹線文壺Ab類, 長頸壺Ab類, 短頸壺A1, 甕Ac・D・E・G・I, 長胴甕A, 鉢A2, 有孔鉢A2・B2, 小型鉢A2・B1・B2, 台付鉢B, 把手付き大型鉢, 大型高杯B類, 高杯B類, 器台B類, 装飾器台B1などによって構成される。この時期の特徴としては, 壺の器種が増えること, 甕Ac類の一部にヘラ磨きが認められること, 壺・甕・鉢などに施されていた擬凹線文がナデ消されるものが認められることや, 大型高杯のAb類からB類への変化が認められることなどがあげられる。さらに, 丹後・丹波に分布圏をもつ装飾器台が出現することや, 山陰地方との土器交流が指摘できる。

第Ⅲ期は, 近畿地方の土器編年においても, 現在までに確定をみていない時期である。今回, 第Ⅲ期とした時期は, 畿内における庄内式期に並行する時期と考えておきたい。擬凹線文壺が消滅し, かわって二重口縁壺が出現する。二重口縁壺B類・C1~C3・Ea・Eb, 装飾壺Da~Dc・F, 壺G, 注口土器, 長頸壺Ac類, 短頸壺B, 甕B類・C1・D1・E, 長胴甕B, 鉢A3・B2, 有孔鉢A3・C, 小型鉢C, 台付鉢C, 小型丸底土器E1・C1, 高杯D類, 器台B2・Ca・Cb, 小型器台A類と小型器台B類の一部, 装飾器台B1・C, 鼓型器台B類などによって構成される。この時期の特徴としては, まず, 擬凹線文系の土器が消滅することである。ただ, 器台Bに, 装飾器台のみがこの時期まで残ると考えられる。これらの器種も他の器種と同様, 擬凹線文が失われていく。壺・甕B類では, 屈曲する複合口縁部の外面に施されていた擬凹線文にかわって, 強く横ナデすることによって, さらに大きく屈曲した複合口縁を形成することになる。この器種と混在して山陰系の二重口縁土器とともに, 在地系の二重口縁土器が出土している。これらの土器は, 現在までに分類を示すことができていないので, 形態上の特徴を示すにとどめたい。在地系の二重口縁土器は, 山陰系の二重口縁土器に比べ, 頸部から口縁にかけての屈曲が, 内湾気味に立ち上がるのを特徴とし, 屈曲部のつまみ出しも丸みを帯びている。全体に鈍いつくりで, 胎土中の砂粒も粗く多い。また, この時期は, 壺の底部が平底から尖底へと大きく変化をみせる時期でもある。注口土器の出土にみられるように, 山陰地方との交流もさかんになる状況を示している。

第Ⅳ期は, 布留式古段階の時期が想定できる。二重口縁壺C4・装飾壺Dd, 甕C2・E・F2・Hb, 鉢C2・C3, 杯, 低脚杯, 高杯C3, 鼓型器台A類などによって構成される。

この時期の特徴としては、畿内の布留式土器が導入されることと、低脚杯・杯が山陰地方との交流により受け入れられることである。

第Ⅴ期は、布留式中段階の時期と考えられる。二重口縁壺C5，甕C3・C4・F3・F4，小型丸底土器E3～E5，小型器台B類によって構成される。この時期は、在地土器の特徴が失われ、わずかに甕C類のなかに山陰系土器と区別できるものが残る程度で、全体として畿内一辺倒に変わる時期である。

(2) 木製品

今回の調査で出土した木製品は、第1～2次調査同様多種多様にわたるものである。そこで木製品全体を通じて特徴的なことをまとめてみたい。

古殿遺跡の第1次調査においては木製品全体の特色として以下の点が指摘されている。

①祭祀用具としての各種形代の存在が顕著であること、②明らかな未製品がないこと、③2次的な火化による損傷ないし焦面のあるものが多いこと、④農具が少ないこと、⑤食膳具、特に盤・槽・案・鉢等の容器が多いこと、⑥機織具が多いこと、などである。これらのことから、第1次の調査地点は生産の場ではなく、使用の場であること、また、祭祀の様相が濃厚であることと理解されるに至っている。

今回の調査地は、第1次調査地の南側に当たり、出土した木製品の傾向も非常に類似しているが、次の4点について、今回の調査から新たに指摘できる。

①わずかながら工具の出土があること。これは、木製品の生産が古殿の集落内にて行われたことを表わしている。しかし、遺物は、いずれも流れ込んだものであり、集落内における作業的な生産拠点は、今回の調査地よりも北側の住居跡を伴う場所に推定されよう。

②木製品の加工技術水準が高いこと。出土した木製品の多くは加工痕を伴う製品であり、これらの木製品は、その用途に応じて加工の行程が異なっている。簡略な加工しか必要としない杭などの土木材に対して、祭祀具や容器には精巧なつくりのものが多く、はつり面を全くとどめていないといねいな仕上げのものや、木釘・樹皮を接合に使用するものなどから、当時の木工加工の技術水準の高さをうかがうことができる。

③建築材が多いこと。これは、SX301とSD303東側のF4地区出土遺物にみられる特徴であり、柱・板材・角材など住居に使用されたと思われる部材が多く、詳細に検討を加えれば住居そのものの復原も可能となるかもしれない。今回の遺物のなかでは、規格をもつと思われる角材が目されるが、住居内の具体的な使用位置や役割などについては明らかではない。今後の課題といえよう。

④火による2次的損傷を受けたものは、第Ⅲ層上層出土の木製品に限られること。2次

的損傷を受けた木製品の多いことは、第1次調査においてすでに指摘されているが、今回の調査では、SX301を含む第Ⅲ層上層の出土木製品にのみしか確認されなかった。この点は、古殿の集落の消長を考える上で示唆的であり、SX301が布留式の土器を含み、その後の土器が極端に減少することを考えあわせるならば、集落の一時的な廃絶がこの時期にあった可能性が高いといえよう。

以上が今回の調査において認められた木製品の特徴である。

それでは、古殿遺跡におけるこれら多量の木製品の出土はどのように理解されるべきであろうか。木製品が長期間にわたり遺存する可能性は、土器ほかの遺物に比べて極めて低い。そのため、古殿遺跡におけるこれら多量の木製品の出土を単に当時の古殿集落の特異性とみるべきか、あるいは当時の集落における普遍的なあり方とみるべきかは判断し難い。しかし、これまでに丹後地域において木製品の出土した遺跡には、久美浜町橋爪遺跡・大宮町谷内遺跡・同正垣遺跡・岩滝町千原遺跡・同定山遺跡・加悦町須代遺跡などがあるが、いずれも出土量はさほど多くはなく、この点からすると、古殿遺跡のあり方はやはり際立ったものである。また、出土木製品の技術水準の高さもすでに記した通りであり、現在の状況からすれば、古殿の集落を「木の文化」の発達した集落のひとつとして認識することに大過はないであろう。^(注29)

(戸原 和人・鍋田 勇)

第2節 検出遺構からみた古殿遺跡

(1) 第1～2次調査との関連

第3次調査で検出した遺構のうち、第1～2次調査との関連性を指摘できるのは、SD301・SD302・SD303・SD304・SX301・SD308・SX302である。

SD302・SD303 直線距離にして約60m離れているため、同一とは断定できないが、SD202-1と共通した特徴を持つ。①断面の形状がU字状を呈する、②護岸工事が行われている、③堰が設けられている、④古墳時代前期の遺物を含む、などで、いずれも古墳時代のほぼ同時期に土木工事が行われ、整備された水路と考えられる。

SD304・SX301 第1次調査検出のSD02との関連が考えられる。時期的には、SD02とSX301からともに布留式の土器が出土しているのに対し、SD304はやや先行する土器群からなる。この間の時期差は、比較的短いことが予想され、SD304の埋没後、SX301の形成と同じくしてSD02が埋没したものと考えられる。

SD308 距離は離れているが、第2次調査検出のSD12と位置関係において、つながることから、SD12の延長である可能性が考えられる。

SX302 性格の類似したものに第1次調査検出のSX11がある。共通する点として、①水平に堆積した黒色粘質土層上に、土器が集中して出土している、②明確な遺構を伴わない、③出土した土器は弥生時代末に比定できる、④出土した土器の器種構成では、甕が圧倒的に多い、等をあげることができる。異なる点としては、①SX11は、SD10の直上に存在しているのに対し、SX302は、SD303の横に位置しており、関連する他の遺構との位置関係が異なる、②SX11では、完形の土器が多いのに対し、SX302では少ない。③SX302は、土製品を含まない、等がある。

SX11は、完形の土器と土製品がセットをなす一場性の出土状況から、祭祀の様相の濃厚な遺構として捉えられているが、この点に関しては、SX302は共通性を持たず、様相を異にするといえる。しかし、SX302は出土状況から、自然の堆積によるものではなく、一括廃棄されたものであること、完形品よりもむしろ破砕された土器の集まりであることに何らかの意味を持つと思われること、の2点からみて、SX11とは若干性格は異なるものの、やはりSX302についても祭祀の様相をもった遺構と考えられよう。

SD301 時期的に共通するものとして、第1次調査検出のSD06をあげることができる。いずれも糸切りの須恵器碗を含むが、黒色土器は含まない。位置関係においてもSD301をSD06の延長と考えても無理はなく、一連のものかもしれない。

(2) 遺構からみた古殿遺跡

第1～3次調査で検出した遺構から古殿遺跡の特徴及び今後の問題となる点を取り上げまとめてみたい。

- ①弥生時代後期にこの地で集落が営まれ始める。
- ②集落の最盛期にあたる弥生時代～古墳時代の住居跡が、わずかしか検出されていない。
- ③各時代において、集落内に多くの溝が形成されている。
- ④古墳時代後期以降平安時代まで遺構が断絶している。

①についてであるが、丹後地域においては、多数の弥生時代の遺跡が確認されている。なかでも、弥生時代後期の畿内第V様式併行の土器が出土する遺跡はその数が多い。そのうち、弥生時代後期から始まる代表的な遺跡には、網野町岡城山遺跡・丹後町大山遺跡・大宮町谷内遺跡・同裏陰遺跡・同正垣遺跡・岩滝町千原遺跡などがある。古殿遺跡を含め、この時期に集落の急増する要因や、各集落間の交流関係などの検討が今後必要といえよう。

②についてみると、古殿遺跡で検出された住居跡は、第2次調査第1トレンチ西側のSB05～SB07の三棟のみであり、問題点も多い。他の遺構・遺物の存在から、古殿の集落の規模はかなり大きなものと予想されるが、住居跡からの裏付けは現段階では不可能であり、

集落構成の復原の問題も含め、今後の課題といえる。

③の溝についてであるが、古殿遺跡で検出された溝は、A. 明らかに人為的に掘削された溝、B. 自然にできた流路、の二つに大別することができる。Aは、更に(a)土木工事を伴うもの、(b)伴わないもの、に区別される。A(a)に属するのは、第2次調査検出のSD02-2・SD08、今回のSD302・SD303、A(b)には、第2次調査検出のSD20・21・22、今回のSD308があり、その他の溝はBに属する。

古殿遺跡において、遺構の変遷を考えるうえで最も重要な意味をもつのは、A(a)に属する溝であろう。①で記したように、集落の始まりは弥生時代後期と考えられ、A(b)に属する溝がすでに集落内を貫流する水路として整えられていたことがうかがえる。その後、古墳時代の初頭に至って、SD303は再整備され、SD302が新たに掘削されるなど、それまでの素掘りの簡略な水路から、堰を設け、護岸を行い、より技術水準の高度な水路へと発展していった。つまり、水路にみられるこの発展過程は、この集落における弥生時代的な集落から脱皮する過程の一現象としておさえることが可能と思われる。

さて、上記の溝については、集落内を流れる水路としたが、具体的な機能として、日常生活利用する生活用水の摂取、北側の谷から流れ込む雨水や湧き水の制御、の2点が考えられる。1点目に関しては、特にこれらの水路にはいわゆる農業用水路としての性格が乏しいという意味を含めている。それは、現在、古殿遺跡として認識されている範囲が微高地に位置し、わずかな規模の耕作地しか想定できないため、この範囲内は限定した意味での集落(居住区域)と考えてよいと思われる。古殿遺跡では多量の木製品が出土しながら、農具が非常に少ないのも、居住区域と農耕地を分けて考えることで理解される。つまり、現在の遺跡範囲内は、居住区域としての性格が強く、その中の水路は生活用水として利用された。また、近接する地域、特に遺跡の南側にあたる小西川流域に耕作地が存在し、集落内で製作された農具類は、耕作地近辺に運び込まれたのではないだろうか。さらに、耕作地における耕作技術の向上が集落内の水路整備に反映されたことも想像に難くない。

2点目に関しては、やはり集落の立地に起因している。集落の北側にある二つの谷からは、常時水の流れ込みがあったと思われる。現在でも、調査地内では地下水が豊富であり、木製品が冠水状態であることをみても、それは十分に理解できよう。この水を統制、制御することは、集落の維持に不可欠の問題であったと考えられる。

④について述べると、古墳時代の前期に集落の最盛期を迎える古殿遺跡も、以後は細々と断続的に集落が営まれるにすぎない。すでに記したように、第Ⅲ層上面出土木製品における2次の損傷は、古殿集落の廃絶時のものと考えることが可能であるが、集落の終焉が内的な要因による自然消滅的なものか、あるいは外的な要因によるものかは判断できない。

この要因については、①の点と同じく、丹後地域全体の社会情勢に関わる問題であると思われる。丹後地域の古墳時代を考えるうえで今後の重要な課題のひとつといえよう。

(鍋田 勇)

第3節 小 結—遺構の編年—

(第Ⅰ期)

第2次調査地で検出した溝SD12・20・22、土壇SK03がある。溝が第2トレンチと第4トレンチの付近に集中しており、土器溜りが第1トレンチの中央部で検出されている。SD12・20・22は、この谷地形にむかって北東から南西に流れる溝である。また、SD12とSD20は、同一軸線上に流れており、一本の溝と考えることが可能である。さらに、第3次調査で検出したSD308は、遺物が出土していないものの、この溝の延長上の一支流の可能性はある。第2次調査検出の土壇SK03は、これらの上流に形成された遺構であるが、前記の溝の延長部を第1トレンチ内では検出していないので、お互いの関係は不明である。SD12の周辺では、この時期のピットを両岸で検出しているもので、この溝は、集落を巡る環濠とは考えられない。おそらく、集落内を流れる溝であろう。古殿遺跡の集落は、この時期に成立したと考えられる。

(第Ⅱ期)

第1次調査検出のSX11と、第2次調査検出の土壇SK03上層、第3次調査検出のSX302に土器が投棄される。第2次調査検出の溝SD12・22、第3次調査検出のSD309・310は、この時期に完全に埋没している。また、第1次調査検出の井戸SE03・第2次調査検出のSD04・SD10、第3次調査検出のSD303に土器が投棄され始める。第2次調査検出の溝SD20では、中層が堆積する。この時期の特徴は、弥生時代の遺構の多くが廃絶し、継続するものは、第1次調査検出の井戸SE03と、第2次調査検出のSD20、第3次調査検出のSD303である。弥生時代終末になると、集落内では一定のブロックごとに平坦面を形成しており、区画を認めることができる。例えば、第1次調査のBトレンチのSD04に並行する住居跡SB05・07が建てられること、第2次調査の第4トレンチの溝SD20・22、N59°Wと、これに直行する溝SD21が形成されることなどである。

(第Ⅲ期)

第1次調査のBトレンチ井戸SE03・溝SD04、第2次調査の溝SD04、第3次調査のSD303は、この時期に完全に埋没している。また、第2次調査の溝SD20・SD10では、中層が堆積する。第2次調査の溝SD02-2、第3次調査の溝SD302・304に土器が投棄され始める。この時期には、第2次調査の溝SD02-2、第3次調査の溝SD302・303などで、流路の護岸

など大規模な施設の拡充がみられる。第2次調査検出の木樋や、溝SD02-2の堰などもこの時期に設置される。

(第Ⅳ期)

第2次調査の溝SD20、第3次調査の溝SD302は、この時期に埋没している。第2次調査の溝SD02-2・SD10、第3次調査の溝SD304などでは、この時期の遺物を含んでいる。第3次調査の第Ⅲ層b地点及び第2次調査区において、面的な遺物の堆積が認められる。

(第Ⅴ期)

第2次調査の溝SD02-2・SD10、第3次調査の溝SD304は、この時期に完全に埋没する。第3次調査のSX301は、溝SD304の埋没後に形成される。出土土器からみて、集落内の流路がこの時期に完全に機能しなくなることが窺われる。多くの木製品も同様に廃棄されており、集落の終焉を思わせる。

(戸原 和人・鍋田 勇)

	畿内との併行 関係	第Ⅴ様式		庄内式		布留式	
		(中葉)	(後葉)	／	／(前葉)	(中葉)	
		I	II	III	IV	V	
第1次調査	S X 11	-----					
	S E 03		-----				
	S D 04		-----				
	DトレⅡ層				-----		
	S D 02				-----		
第2次調査	S K 03	-----					
	S D 12	-----					
	S D 21	-----					
	S D 22	-----					
	S D 20	-----					
	S D 04	-----					
	S D 02-2		-----				
	S D 10	-----					
第3次調査	S X 302	-----					
	S D 309	-----					
	S D 310	-----					
	S D 303下層		-----				
	S D 303上層		-----				
	S D 302		-----				
	S D 304			-----			
	Ⅲ層(b)			-----			
	S X 301				-----		
	Ⅲ層(a)				-----		

- 注1 平良泰久他「古殿遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1978
- 注2 戸原和人「古殿遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 注3 第3次調査の概要については、昨年度に紹介済みである。
鍋田 勇「峰山町古殿遺跡の第3次調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注4 調査に参加、及び協力をしていただいたのは、以下の方々である。(敬称略)
- 第2次調査
安達佳明・青地佐都子・今西礼子・兎本恵美・江田恵美子・大谷健二・小川健太郎・小川志津香・小倉美奈子・加藤由美・金子康治・柏原恭子・小山裕美・小山みのり・北川ともえ・雲出美智子・佐藤敏子・下戸 聡・白石由香・柴田 悟・田中達也・田中康夫・谷口ゆかり・田村晶子・竹中 優・団村 香・寺升初代・豊島英昭・中島美代子・中塚 等・中村康子・西岡ひろみ・長谷川陶子・花田 宏・早川和子・藤井理絵・藤中貴子・堀 啓子・宮本純二
- 第3次調査
藤本効三・森岡貴博・中西弘美・岡田義宏・曾根田康博・石嶋祐子・室田雅子・曾根田真智子・森本尚子・田中由美・吉岡晋也・大西明彦・内海丘人・奥野広記・堀 忠夫・番場隆一・河端正直・藤村忠治・中村明治・葛原千代・金田慶伊・石川英子・山福寅次郎・上田忠志・田家 忠・松村重明・坪倉勇一・新治文枝・古川ナヲ・中村松枝・北村よ志・中村しづ江・入江三郎・森 勝治・山福 同・田中 正・吉岡 博・中村豊野・碓井紀代子・森本須都子・藤原佳子・能勢鈴美・清水彰子・西津しのぶ・吉岡早苗・増田真子・下岡美佐子・和田正子・山本弥生・丹新千晶・田中由美・赤司 紫・小滝初代・伊澤ひとみ・藤原章子・倉本まり子・松田浩二・森美知子・古川とも子・山尾 撰・栗田富子・伊勢田恵美子・野々垣照美
また、調査の実施及び本書の作成にあたっては、下記の方々や機関から御教示・御協力を賜った(敬称略)。
安藤信策・岡田晃治・奥村清一郎・置田雅昭・小林行雄・佐原 眞・沢田正昭・釋 龍雄・田中光浩・都出比呂志・角山幸洋・坪倉利正・波江庸二・細見啓三・町田 章・原口正三
(五十音順)
京都府教育庁指導部管理課・峰山町教育委員会・京都府立峰山高等学校
なお、調査期間を通じて、峰山町教育委員会安田 章氏には、たいへんお世話になった。記して謝意を表したい。
- 注5 地学団体研究会京都支部『京都地学ガイド』法律文化社
- 注6 安田喜憲『環境考古学事始』日本放送出版協会
- 注7 坪倉利正他『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会 1977
- 注8 田中光浩他『扇谷遺跡発掘調査報告書』(峰山町文化財調査報告 第10集 峰山町教育委員会) 1984
- 注9 中国社会科学院考古研究所・広州市文物管理委員会・広州市博物館編『広州漢墓』1981.12 上巻第6章 東漢後期墓葬 第三節 随葬器物 一、陶器(28) 案(図250) 陶案 408~409頁
- 注10 002 案の脚接合法により、脚の側面の内、平面でクサビを打った面が内側になると考えられる。
- 注11 楽浪漢墓出土の靴底に形態の近似したものが認められる。使用例の一つとして参考にしたい。
「洛浪彩饗塚」『古蹟調査報告』第1 朝鮮古蹟研究会 1934年12月(朝鮮考古資料集成 補巻1 所収) 56頁 第27図
- 注12 桶底の復原例として、1次調査の注で報告されたものがある。

- 平良泰久他「古殿遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会) 1978 142頁第61図
- 注13 発火具の構造・機能については、京都府立山城郷土資料館が昭和62年度夏期におこなった体験学習での経験がたいへん参考になった。
- 注14 紡織具の分類については東大阪市竹内晶子氏の分類に従った。また、整理作業にあたっては貴重な助言をえた。
金関 恕・佐原 眞編『弥生文化の研究』5 道具と技術Ⅰ 1985 178～183頁
- 注15 農具の分類については、奈良国立文化財研究所黒崎 直氏の分類に従った。注14文献77～84頁
- 注16 鎌柄の判断については、奈良国立文化財研究所町田 章氏の助言を得た。
- 注17 建築部材の分類については、奈良国立文化財研究所細見啓三氏の助言を得た。
- 注18 盾については、芋本氏の復原を参考にし、町田 章氏の助言を得た。
金関 恕・佐原 眞編『弥生文化の研究』9 弥生人の世界 1986 98～103頁
- 注19 刀装具の分類については小林行雄氏・置田雅昭氏の助言をえた。
置田雅昭「古墳時代の木製刀把装具」『天理大学学报』第145号 天理大学学術研究会 33～63頁
- 注20 町田 章他『木器集成図録』近畿古代篇 奈良国立文化財研究所資料第27冊 1985
- 注21 石器の材質鑑定については京都府立山城郷土資料館橋本清一氏の鑑定による。
- 注22 国内出土の銅鐸では福岡県今宿五郎江遺跡出土の小型銅鐸が形態的には近似している。丹後地方出土の銅鐸型土製品などからは古殿遺跡出土銅鐸型土製品の系譜を考えられる資料はない。
注9文献『広州漢墓』上巻 第三章 西漢中期墓葬 第二節 随葬器物 二、銅器(図140) 237頁 下巻 図版64 12 などは鈕の形態が異なるほかはほぼ同じ形態といえる。
- 注23 地質調査の結果については、株式会社総合技術コンサルタント技術員森島秀樹氏のご好意により、資料を活用させていただいた。
- 注24 注3に同じ
- 注25 杉原和雄他『裏陰遺跡発掘調査概報』(大宮町文化財調査報告 第1集 大宮町教育委員会) 1979
- 注26 鍋田 勇「古殿遺跡出土の梯子状組合せ木製品」(『京都府埋蔵文化財情報』第23号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注27 この木製品については、安藤信策・角山幸洋・水野正好・向坂鋼二・大崎哲人各氏から御教示を得た。特に安藤・角山両氏には、発掘調査現地にて御指導いただいた。記して謝意を表する。
- 注28 角材のうち、端部を有頭状に削り、端部近くに切り込みを有するなど、端部の形態が非常に類似しているものを取り上げた。先端から切り込みまでの長さは、平均約16cmを測るが、いずれも他端は破損し、その形態及び全長は不明である。家屋を構成する部材ではないかと思われる。
- 注29 昭和63年2月4日に発掘調査成果の発表された奈良県橿原市の四条古墳及び同天理市の小墓古墳では、ともに周濠内から笠形・盾形・鳥形・鸞形(四条古墳)、笠形・大刀形・矛形(小墓古墳)等で、古墳祭祀にかかわる多量の木製品が出土し注目を集めた。「木の文化」という視点からすれば、ある意味で特別に作られたこれらの木製品に対して、古殿遺跡の木製品は集落内からの出土品であり、日常生活における木のあり方を理解する上で貴重な資料といえよう。

＜付載＞ 古殿遺跡出土木製品の樹種

島地 謙・林 昭三

古殿遺跡(京都府中郡峰山町、古墳時代前期集落跡)で、1982年8月から11月にかけて発掘された木質遺物のうち、製品名の比較的是っきりしたもの158点を選んで、樹種の識別をおこなった。なるべく遺物の形状を損なわぬように、木口、柾目、板目の3断面から切片をとり、アルコールシリーズで脱水、ビオライトでマウントした永久プレパラートとして顕微鏡観察に供した。試料のうち、腐朽が進行し、軟化のはげしいものは、常法によるセロイジン包埋をした後に、マイクロームで切片を作成した。また微小部分の顕微鏡的特徴を確認するため、一部の試料については蛍光顕微鏡による観察を併用した。特に劣化の進んだ分野壁孔の型を決定するのに有効であった。樹種識別の結果は付表9(木製品観察表)に示した。また製品別に樹種の出現頻度をまとめて別表1に示した。製品名には用途のはっきりしたものはその名称により区分したが、その他のものについては形状あるいは出土状況により分類したため、製品名としての統一はされていない。たとえば形状によりヘラ状製品と分類して生活用具の中にまとめたが、同じ形状で建築用と見られるものは組材として分類されている。また箸状製品も形状は紡織具ときわめて類似しているが、紡織具と判定できないものを箸状製品とした。したがって用途や形状によって一応の分類をしたものを、さらに土木建築用品、生活用品とまとめたものの、正確には今後の調査を待たねばならない。

観察総数158点のうちスギが134点84.8%という高率を占めていることは古殿遺跡でのきわめて大きい特徴であり、既報の試掘調査資料の結果(京都府教育委員会・埋蔵文化財発掘調査概報、1978、pp. 144～160)とも一致している。暗渠転用材にクリが、また棒状製品や農耕具にカシ類が数パーセント認められたが、すべての製品にこのように多くスギが使用されているのは驚異的である。上記のように出土木材すべてについて樹種の鑑定をおこなったものではないので断定はできないが、一般に農耕具にはカシ類が、食膳具などの生活用品にはケヤキなどのニレ科の木材がもっと使用されているのが普通であり、これらの樹種がもっと高率で出現しても当然と考えられるにもかかわらず、スギが異常に多く認められたことは、材料として多量に供給されるスギ材が豊富にあったことを示唆しているのではないだろうか。なお棒状小型製品としてムクロジが1点認められたが、この製品は特殊な用途に供されたものではないかと考えられる。

識別された各樹種の顕微鏡の特徴は以下のとおりであり、識別拠点となった特徴を示す顕微鏡写真を付した。顕微鏡写真の説明は、写真番号、樹種名、試料番号、断面、倍率の順に記した。

二葉松 (*Pinus* sp. *Diproxylon* PINACEAE マツ科)

早材から晩材への移行は急で、大型の垂直樹脂道があり、晩材幅は広い(写真1)。放射組織の上下両縁には放射仮道管があり、内壁は鋸歯状に突出する(写真2)。分野壁孔は典型的な窓状である。放射組織は単列で、水平樹脂道を含むものは紡錘型になる(写真3)。

日本産二葉松にはアカマツとクロマツがあるが、材の組織から両者を識別できないので、上記の特徴のあるものは二葉松とした。

スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don TAXODIACEAE スギ科)

早材から晩材への移行は急で、両者の境界から晩材にかけて樹脂細胞がほぼ接線方向に散在する(写真4・5)。樹脂細胞は柾目や板目ではストランドとして現れる(写真6・7・8)。放射組織は柔細胞のみからなり、分野は典型的なスギ型で(写真7)、単列のみである(写真8・9)。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc. FAGACEAE ブナ科)

環孔材で孔圏は広く、そこでは道管は単独で分布するが、孔圏外では道管は急激にその大きさを減じ、薄壁で角張った形になり、集合して火炎状に分布する(写真10・11)。道管は単穿孔で、道管の周囲を仮道管と柔細胞が鞘状に囲んでいる(写真12・13)。放射組織は平伏細胞のみからなる同性で(写真12)、すべて単列である(写真13・14)。

クヌギ (*Quercus acutissima* Carr. FAGACEAE ブナ科)

典型的な環孔材で、孔圏では1～数列の道管が単独で分布するが、この試料では年輪幅が狭いため1列しか認められない。孔圏外では、厚壁の小道管が放射方向に分布する(写真15)。道管は単穿孔で、放射組織は同性である(写真16)。放射組織はきわめて広いものと単列のものがあり、中間的なものはない(写真17)。

コナラ (*Quercus serrata* Thunb. FAGACEAE ブナ科)

環孔材で、孔圏は1～3列の道管がほぼ単独に分布し、孔圏外の小道管は薄壁で火炎状に分布する(写真18)。道管は単穿孔で、放射組織は同性である(写真19)。広放射組織があ

る(写真20)。

カシ類 (*Quercus* sp. *Cyclobalanopsis* アカガシ亜属 FAGACEAE ブナ科)

放射孔材で、道管の大きさは年輪界とは関係なく、年輪の中央で最大径となることもある(写真21)。軸方向柔細胞が1~3細胞幅で道管と関係なく木口面では接線方向に分布する(写真21・22・25)。道管は単穿孔で、道管と放射柔細胞の間には柵状の壁孔がある(写真23)。放射組織は同性で(写真23・25)、単列のものと広いものがあり、広放射組織にはしばしば木繊維を含む(写真24)。

ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn. SAPINDACEAE ムクロジ科)

環孔材で孔圏には2~3列の道管が配列し、孔圏外では、2~3個複合するものがある(写真26)。柔細胞は孔圏に近い部分では、鞘状ないし翼状に、孔圏外では帯状に分布する(写真26)。道管は単穿孔で、らせん肥厚が認められる(写真27)。放射組織は同性で、2~3列の幅がある(写真28)。

ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino ULMACEAE ニレ科)

環孔材で孔圏の道管は大きい、この試料は小さく孔圏を含まないので観察されない。孔圏外の道管は多角形で多数集まって接線状ないし斜線状の集団管孔を形成する(写真29)。この小道管の側壁にはらせん肥厚が認められる(写真30・31)。放射組織は異性で、6~7細胞幅があって紡錘形をなし、上下縁辺の方形細胞に結晶を含むことがある(写真31)。

ネジキ (*Lyonia elliptica* Okuyama ERICACEAE ツツジ科)

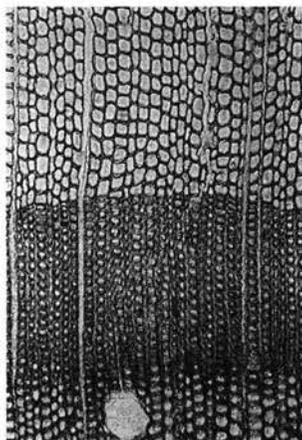
肉眼で認められないほどの小さい道管が均等に分布する散孔材で、2~3個が複合することもある(写真32)。道管の穿孔は階段状で、放射組織は異性(写真33)。1~3列の幅を有し、単列部は針状を呈する(写真34)。

カエデ属 (*Acer* sp. ACERACEAE カエデ科)

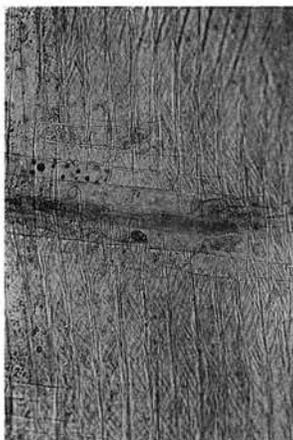
道管は平等に散在し、直径の移行はゆるやかで、単独のものと2~3個が放射方向に複合したものとがある。柔細胞は年輪界に沿ったターミナル柔組織のほか接線状に不規則に配列しているものもある。放射組織は、単列のものと4~6細胞幅のものと2種類がある(写真35・36)。試料が小さく、木口面しか観察できなかったが、上記の特徴を有するのはカエデ属のうちのイタヤカエデやウリハダカエデなどである。しかし種名まで確定できないので、ここではカエデ属とした。

別表1 製品別樹種出現頻度

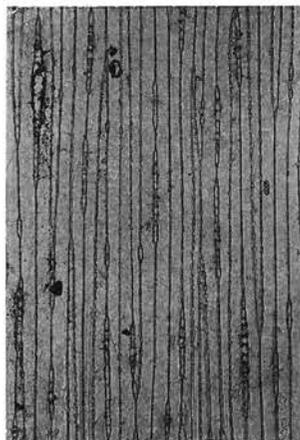
製品名	二葉松	スギ	クリ	クスギ	コナラ	カシ類	ムクロジ	ケヤキ	ネジキ	カエデ属	計
土木建築用品	3	75	8	1	1	5	1	0	0	0	94
柱材(建築用)		1	1								2
基板(〃)		2									2
板材(〃)		10				1					11
大型板材(〃)		5									5
大型納穴板材(〃)		2									2
加工板材(〃)	1	1									2
大型組材(〃)		2									2
小型組材(〃)		2									2
棒状組材(〃)		2									2
大型棒状製品(〃)		1									1
板状破材		9				1					10
組材		4									4
小型組材		7									7
大型有頭棒		1									1
棒状小型製品		2					1				3
尖頭棒		11				2					13
棒状破材		4				1					5
土木用杭	2	2	1	1	1						7
暗渠転用材		7	6								13
生活用品	0	58	0	0	0	2	0	1	1	0	62
農耕具		1				2			1		4
紡織具		6									6
紡織具(有頭棒)		12									12
中型有頭棒		1									1
発火具		4									4
へら状製品		10									10
案		8									8
盤		6									6
槽		1						1			2
箱木口板		2									2
桶底		3									3
箸状製品		2									2
バット状製品		1									1
げた(平安時代)		1									1
武器	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2
刀の柄		1								1	2
計	3	134	8	1	1	7	1	1	1	1	158
%	1.9	84.8	5.1	0.6	0.6	4.4	0.6	0.6	0.6	0.6	100



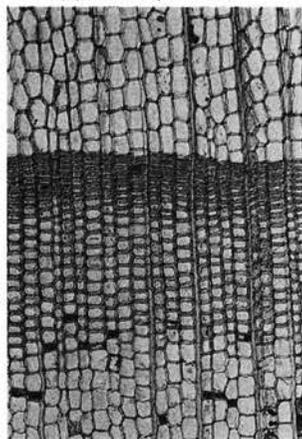
1. 二葉松 No.43 木口 ×65



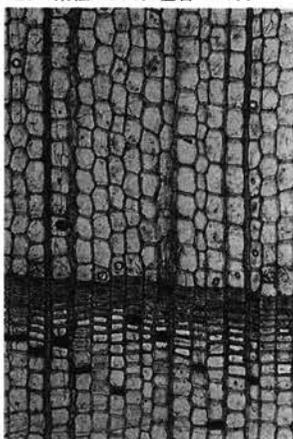
2. 二葉松 No.140 柁目 ×130



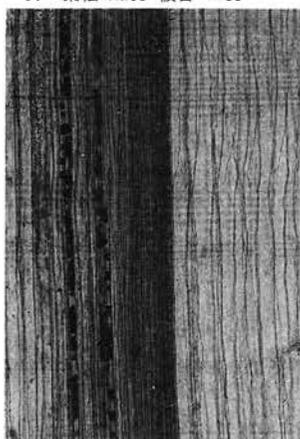
3. 二葉松 No.59 板目 ×65



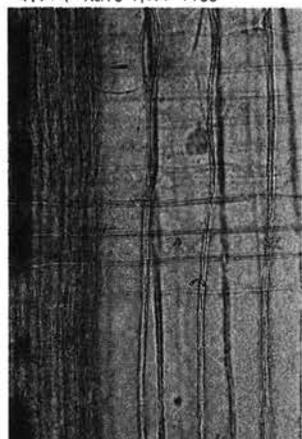
4. スギ No.16 木口 ×65



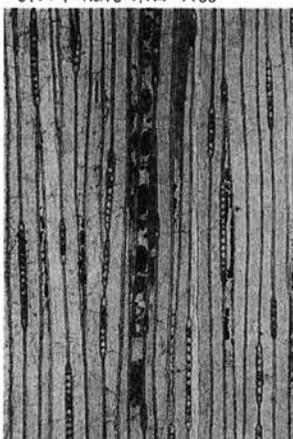
5. スギ No.18 木口 ×65



6. スギ No.2 柁目 ×65



7. スギ No.4 柁目 ×260



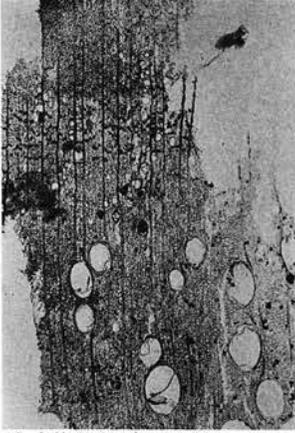
8. スギ No.8 板目 ×65



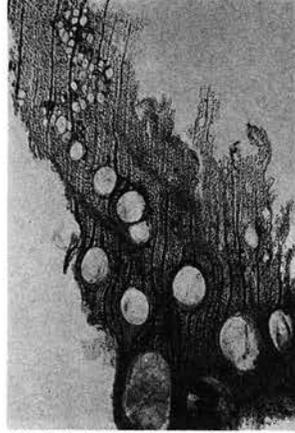
9. スギ No.64 板目 ×65

木製品顕微鏡写真 (1)

(No. は付表9 第2次調査出土木製品観察表のW番号に相当する。)



10. クリ No.21 木口 ×25



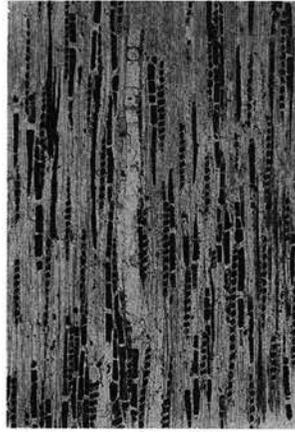
11. クリ No.144 木口 ×25



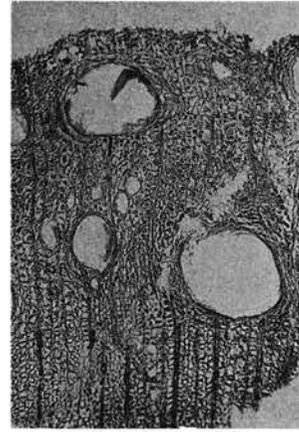
12. クリ No.152 柱目 ×65



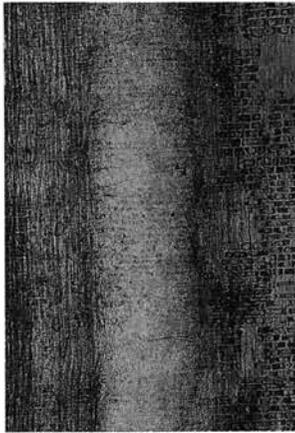
13. クリ No.136 板目 ×65



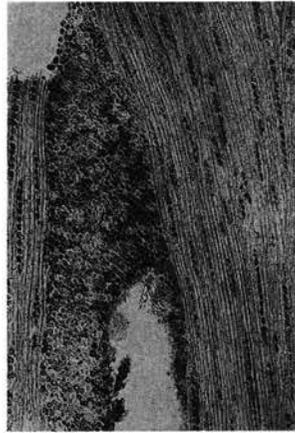
14. クリ No.21 板目 ×65



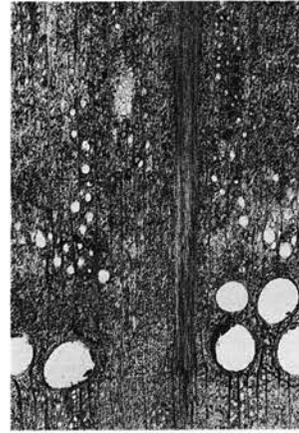
15. クヌギ No.58 木口 ×65



16. クヌギ No.58 柱目 ×65



17. クヌギ No.58 板目 ×65



18. コナラ No.94 木口 ×25

木製品顕微鏡写真 (2)

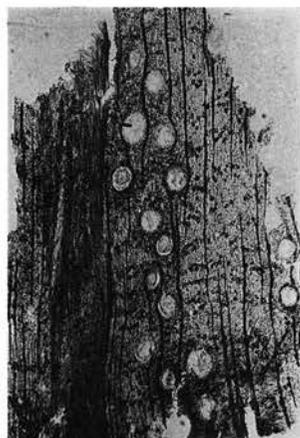
(No. は付表9 第2次調査出土木製品観察表のW番号に相当する。)



19.コナラ No.94 柾目 ×65



20.コナラ No.94 板目 ×65



21.カシ類 No.73 木口 ×25



22.カシ類 No.181 木口 ×65



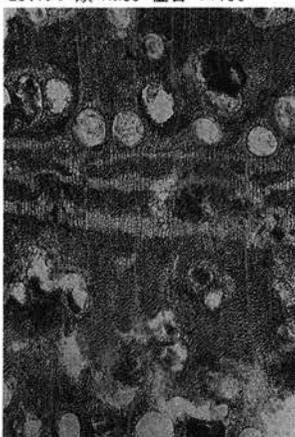
23.カシ類 No.35 柾目 ×130



24.カシ類 No.110 板目 ×65



25.カシ類 No.110 柾目 ×65



26.ムクロジ No.107 木口 ×25



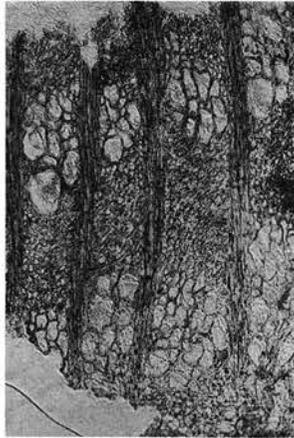
27.ムクロジ No.107 柾目 ×260

木製品顕微鏡写真 (3)

(No. は付表9 第2次調査出土木製品観察表のW番号に相当する。)



28. ムクロジ No.107 板目 ×65



29. ケヤキ No.40 木口 ×65



30. ケヤキ No.40 柁目 ×65



31. ケヤキ No.40 板目 ×65



32. ネジキ No.46 木口 ×65



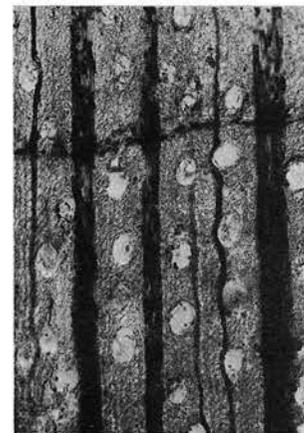
33. ネジキ No.46 柁目 ×130



34. ネジキ No.46 板目 ×65



35. カエデ属 No.174 木口 ×25



36. カエデ属 No.174 木口 ×65

木製品顕微鏡写真 (4)

(No. は付表9 第2次調査出土木製品観察表のW番号に相当する。)

＜付載＞ 古殿遺跡花粉分析

徳丸 始 朗

1. はじめに

京都府埋蔵文化財調査研究センターが昭和57年7月1日より実施した古殿遺跡の発掘調査に際し、当時の自然環境を推定するために花粉分析をおこなった。

試料の土壌は調査員が採取した9試料で、採取地点・土質・時代は次のとおりである。

試料番号	採 取 地 点	土 質	時 代
1	SD02 北 面 1	黒 色 粘 土 層	古 墳 前 期
2	〃 2	黒 色 粘 土 層	古 墳 初 期
3	〃 3	黄 灰 色 砂 質 土	弥 生 後 期
4	SD02 南 面 1	黒色粘土層(砂多含層)	古 墳
5	〃 2	黒色粘質層(シルト層)	古 墳
6	〃 3	黄褐色砂質土(地山)	弥 生
7	SD02C-10 布留式出土層	灰褐色粘質土	古 墳 前 期
8	南 布 留 式 下	黒色粘土層(砂少含層)	弥 生 後 期
9	B-5 5 様 式 出 土 層	黒 色 粘 土 層	弥 生 後 期

(以後試料は試料番号で記す。)

2. 方 法

試料約200gを次の要領で処理しプレパラートを作成した。

ピロリン酸ナトリウム液に24時間浸して泥化→傾斜法による水洗(2カ月)→振動法による植物性遺物の濃縮→塩化亜鉛の飽和溶液による比重分離→水洗→氷酢酸処理→混酸(無水酢酸9:濃硫酸1)に浸し80°Cで1分間湯煎→氷酢酸処理→水洗→プレパラート作成。検鏡は400倍でおこない、必要に応じて600倍・1,000倍を用いた。1試料について樹木花粉(AP)数が400をこえるまで検出花粉を同定し、属・種ごとに整理する。それらを樹木花粉(AP)、草本花粉(NAP)別に分け百分率で表示した。

3. 結 果

9試料中1試料は、花粉の検出が悪く百分率表示ができなかった。他の8試料ではAPが400以上計数でき、AP・NAPごとに百分率で表した。中には不明のものもあり、また同定のまぎらわしい不確実のものも多かったが、これらはすべて除外し確実なものについてのみ計数表示した。

結果は第1表・第2表のとおりである。またAPの検出された全花粉に対する割合(%)は次のようになる。

試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
AP/AP+NAP	77.0%	70.9	86.1	69.4	—	77.0	88.2	44.9	80.8

各試料について検出花粉状況を要約してみる。

(1) 樹木花粉(AP)

試料1

ハンノキ属が66.7%ときわめて多く、次いでクルミ属8.3%、モミ・トウヒ属6.6%となっている。コナラ属は5.3%と少ない。

試料2

ハンノキ属が68.9%と多く、コナラ属8.5%、クリ・シイノキ属5.5%がこれに次ぐ。

試料3

コナラ属が32.1%と多く、ハンノキ属25.5%、モミ・トウヒ属8.1%となっている。

試料4

マツ属25.0%、スギ23.7%、コナラ属15.2%、クリ・シイノキ属13.4%となっている。

試料5

検出量が少ないものの、その中で比較的多くみられたものは、コナラ属・クリ・シイノキ属・スギである。

試料6

ハンノキ属の67.9%が最も多く、クルミ属の9.1%、マツ属の5.5%がこれに次ぐ。

試料7

ハンノキ属が40.7%で最も多く、次いでコナラ属の17.5%、スギの12.2%となっている。

試料8

コナラ属が28.4%、スギ20.9%、クリ・シイノキ属19.9%、ハンノキ属12.0%、マツ属11.7%となっている。

試料9

クリ・シイノキ属19.6%、コナラ属19.3%、スギ18.3%、マツ属14.0%、ハンノキ属11.9%となっている。

(2) 草本花粉(NAP)

試料1

キク科33.4%、アリノトウグサ23.4%と多く、大型イネ科は17%である。

試料2

アリノトウグサ57.4%と多く、次いでキク科16.9%、タデ科9.6%となっている。大型イネ科はわずか1.5%である。

試料3

ウリ科25.7%、大型イネ科12.2%、キク科12.2%となっている。

試料4

大型イネ科が最も多く27.7%を占め、次いでヨモギ10.5%、カナムグラ9.1%、タデ科・アブラナ科8.6%となっている。

試料5

大型イネ科とタデ科が比較的多い。

試料6

タデ科の48.1%が最も多く、キク科が16.0%でこれに次ぐ。大型イネ科は5.4%である。

試料7

ヨモギが22.5%で多く、セリ15.5%、ウリ科12.7%となっている。大型イネ科は4.2%である。

試料8

大型イネ科が28.9%で最も多く、アカザ科の25.6%、ヨモギの16.0%がこれに次ぐ。

試料9

大型イネ科が25.4%と多く、ヨモギの23.8%がこれに次いで多い。

4. 考 察

分析結果の示す数値は絶対的なものでなくおおよその傾向を示しているにすぎない。したがって採取場所により同時代の試料でも異なった値を示すものであるが一般的傾向を推定するには差し支えない。この観点にたつて考察を進めてみよう。

(1) 森林形態の変遷

本調査では試料1～3と試料4～6の2組が同一地点において鉛直方向に弥生時代後期より古墳時代前期までの異なる時代の土壌を採取しているので、これらの結果を中心に検討を加えていくことにする。

検出された花粉化石を次の2要素に大別してみよう。すなわちシイノキ属・アカガシ亜属・タブノキ属・ヤマモモ属などの照葉樹林要素と、これらの森林が何らかの原因で破壊されたあとに二次的に生育してくる不安定な二次林構成のマツ属・コナラ亜属・ハンノキ属などの二次林要素に分けてみると次表のようになる。

2 要素の割合

試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9
照葉樹林要素	4.2	9.1	19.0	33.3	—	5.8	19.8	50.3	46.5
二次林要素	95.3	90.9	81.0	66.7	—	94.2	80.2	49.7	53.6

全樹木花粉中の割合

試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9
照葉樹林要素	3.1	7.6	13.1	19.5	—	4.7	14.9	36.3	30.2
二次林要素	72.0	75.9	55.9	39.1	—	77.0	60.5	35.3	35.0

試料1～3では明らかに弥生時代後期(試料3)から古墳時代前期(試料1)にかけて照葉樹林要素が減少し、二次林要素が増加していることをうかがい知ることができる。一方、試料4～6では反対に弥生時代(試料6)の方が古墳時代(試料4)より照葉樹林の占める割合が少なく、二次林要素の占める割合が多くなっている。これは試料6が地山の土壌であり、試料3の弥生時代後期以前のもので、二次林要素であるハンノキ属・マツ属による森林形態であったが、やがて照葉樹林におきかわり、さらに人工破壊などによって森林が荒廃し、古墳時代になって再び二次林が形成されてきたとみることもできよう。試料5のデータがあればもう少しははっきりするのであろうが、検出花粉数が少ないのでこれ以上のことはいえない。

試料7の古墳時代前期では、二次林要素が照葉樹林要素よりはるかに多く、試料8・9の弥生時代後期では照葉樹林要素と二次林要素がほぼ同じ割合を示している。この3試料は同一地点を垂直に採取しているのではないが、採取場所が近くであるという点から考えると弥生時代後期より古墳時代前期にかけて同じように照葉樹林が二次林へ移行していく過程を示しているといえよう。

以上より、本遺跡周辺では弥生時代後期より古墳時代前期にかけてアカガシ亜属などを主体とする照葉樹林が何らかの原因で次第に衰退しそれにかわってハンノキ属などを主体とする二次林が増加してきたと考えられる。

(2) スギについて

昭和52年に実施された古殿遺跡調査において木製品の大部分がスギであった。それを裏付けるかのようにスギ花粉がDトレンチⅡ層(古墳時代)では樹木花粉中25.2%、DトレンチSD02(古墳時代)では、17.1%と高率を示している。ところが本調査で、古墳時代試料のスギ花粉検出量をみても試料4の23.7%、試料7の12.2%が52年度と同じような割合で検出されているが試料1・2においては、3.2%・3.9%と低い。そこでスギ花粉のマツ花

粉に対する比を求めてみたのが次表である。

(昭和52年度調査)

試料	DトレンチII層	DトレンチSD02
スギ/マツ	2.89	1.18

(昭和57年度調査)

試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9
スギ/マツ	1.88	6.5	0.97	0.95	—	0.46	1.71	1.78	1.31

52年度は古墳時代の試料だけで時代による比較は出来ないが、本調査で検討してみると弥生時代から古墳時代にかけて比の値が大きくなる傾向がみられる。すなわち試料1～3では弥生時代の0.97が、古墳時代には1.88または6.5となっている。また試料4～6では0.46から0.95と同じ傾向を示す。同様に試料7の古墳時代は試料9の弥生時代にくらべてわずかではあるが大きい。この傾向からスギは弥生時代から古墳時代にかけて増加したと考えられる。

次に52年度の数値は、本調査の試料1・7と同程度であり、古墳時代におけるスギの優位を示すものであろう。本調査の試料4は他の古墳時代試料にくらべ小さい値を示しているが、52年度のSD02のそれよりわずかに小さいだけで、ほとんど同程度とみてもよからう。

弥生時代から古墳時代にかけて照葉樹林が衰退し二次林が増加してくる中で、マツが次第にふえていき、そのマツに対するスギの割合が増加する傾向がみられるのはスギのふえていくことを示していると考えられる。

(3) 栽培植物(草本)について

試料1・3・4・8・9では大型イネ科がかなり検出されている。これらがすべてイネであるとは断定できないが、イネと思われる花粉も多く、この周辺で広くイネ栽培が行われていたと考えられる。これらの試料は弥生時代後期(試料3・8・9)・古墳時代(試料1・4)であり、弥生時代から古墳時代にかけて稲作がおこなわれていたとみてもよいであろう。

ところが試料2では大型イネ科がきわめて少なく、反対に原野や湿地に生育するアリノトウグサがきわめて多い。これは弥生時代から古墳時代へ移る一時期に何らかの原因で稲作が一時的に中断されこの付近が荒れた状態になったのではなかろうか。アリノトウグサの異常に高い数値がそれを示しているようである。

ウリ科花粉が比較的多く検出されている。特に試料7ではヒョウタンの種子が出土していることから、検出された花粉はこれらのものであろうと思われる。家庭生活用具や食料

としてのウリ栽培がおこなわれていたと考えてもよいであろう。

その他ソバが全試料から検出されているし、ハスが試料3・4でみられる。弥生・古墳時代にソバ・ハスの存在を示すものであろう。

(4) 雑草について

試料が溝の側壁や溝中の堆積土であることから、湿地性雑草や土手・道端にみられるものが多い。カヤツリグサ科・ガマなどは明らかに湿地性雑草であり、タデ科・セリ科・ナデシコ科・アブラナ科・キク科・ギシギシ・スイバのように水田の畦や畑地の周辺に生育するものも多くみられる。ヨモギ・カナムグラ・ミチヤナギ・オキナグサ・アカザ科のように日当りのよい原野や畑地に生育するものもあり、これらから周辺には明るい水田や畑地が存在していたであろうと考えられる。

第1表 古殿遺跡花粉分析表
(樹木花粉)

(%)

別	試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9
モミ・トウヒ属		6.6	3.3	8.1	4.4	○	1.4	2.3	1.4	9.6
ツガ属		0.9			0.2		0.2	0.4	0.2	0.6
マツ属		1.7	0.6	6.8	25.0	○	5.5	7.2	11.7	14.0
スギ		3.2	3.9	6.5	23.7	○	2.5	12.2	20.9	18.3
コウヤマキ属		0.9	1.2		0.6		0.9	0.7	0.2	0.4
イチョウ属		1.7	0.9	0.7	1.3		0.7	0.6	0.2	0.7
コナラ亜属		3.6	6.4	23.6	9.5	○	3.6	12.6	12.2	9.1
アカガシ亜属		1.7	2.1	8.5	5.7	○	0.2	4.9	16.2	10.2
クリ・シイノキ属		0.4	5.5	3.7	13.4	○	4.1	9.4	19.9	19.6
クルミ科		8.3	3.0	3.7	1.9		9.1	3.0	0.7	0.6
ハンノキ属		66.7	68.9	25.5	4.6	○	67.9	40.7	12.0	11.9
タブノキ属		0.6		0.7			0.2	0.2		
クマシデ属		2.3	1.5	6.1	1.5		0.2	1.9	1.4	0.7
ヤマモモ属		0.4		0.2	0.4		0.2	0.4	0.2	0.4
ヤナギ科		0.4	0.6	1.1	0.6		0.2	0.2	0.5	1.1
モクレン科		0.6	0.3							
シラカンバ属			0.3		0.6		0.5		0.2	
サクラ属			0.6	0.4	0.4	○		0.2		0.4
ハシバミ属			0.6	1.3	0.2		0.9	0.6	1.2	0.7
カエデ属			0.3	0.9			0.5	0.6	0.2	0.6
ニレ・ケヤキ属				2.2	5.0		0.5	1.5	0.7	1.1
モチノキ属				0.2	0.2		0.7	0.4		
ツツジ属					0.6					
アオイ科					0.2					

(註) ○印は検出されたものを表わす。

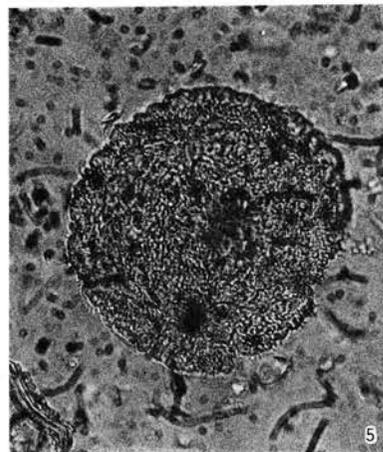
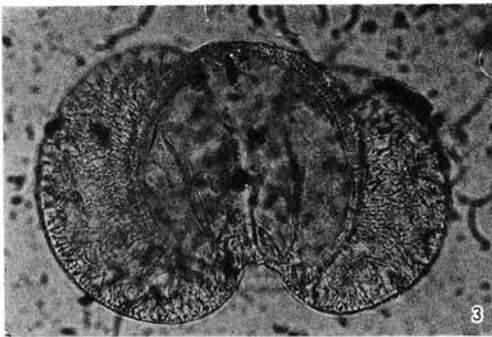
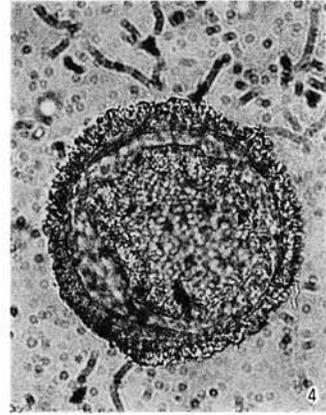
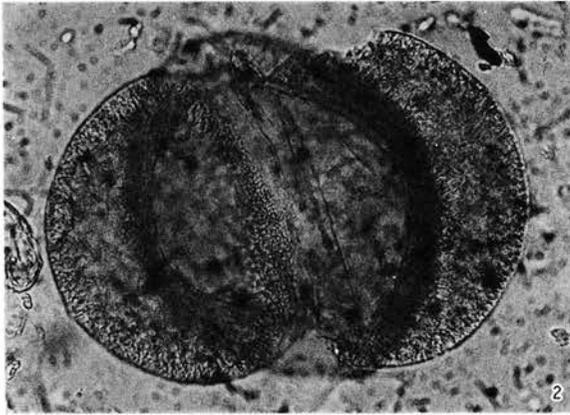
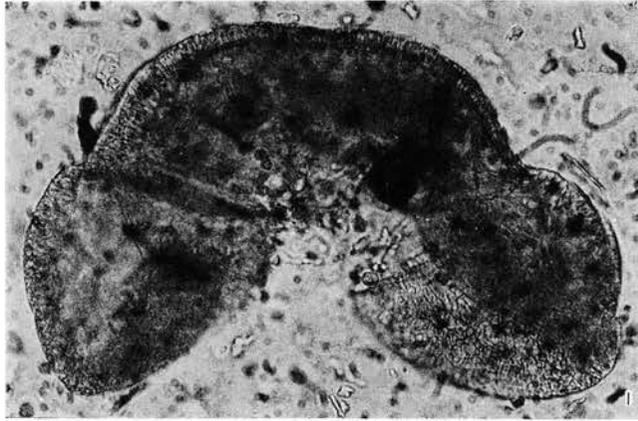
第2表 古殿遺跡花粉分析表
(草本花粉)

(%)

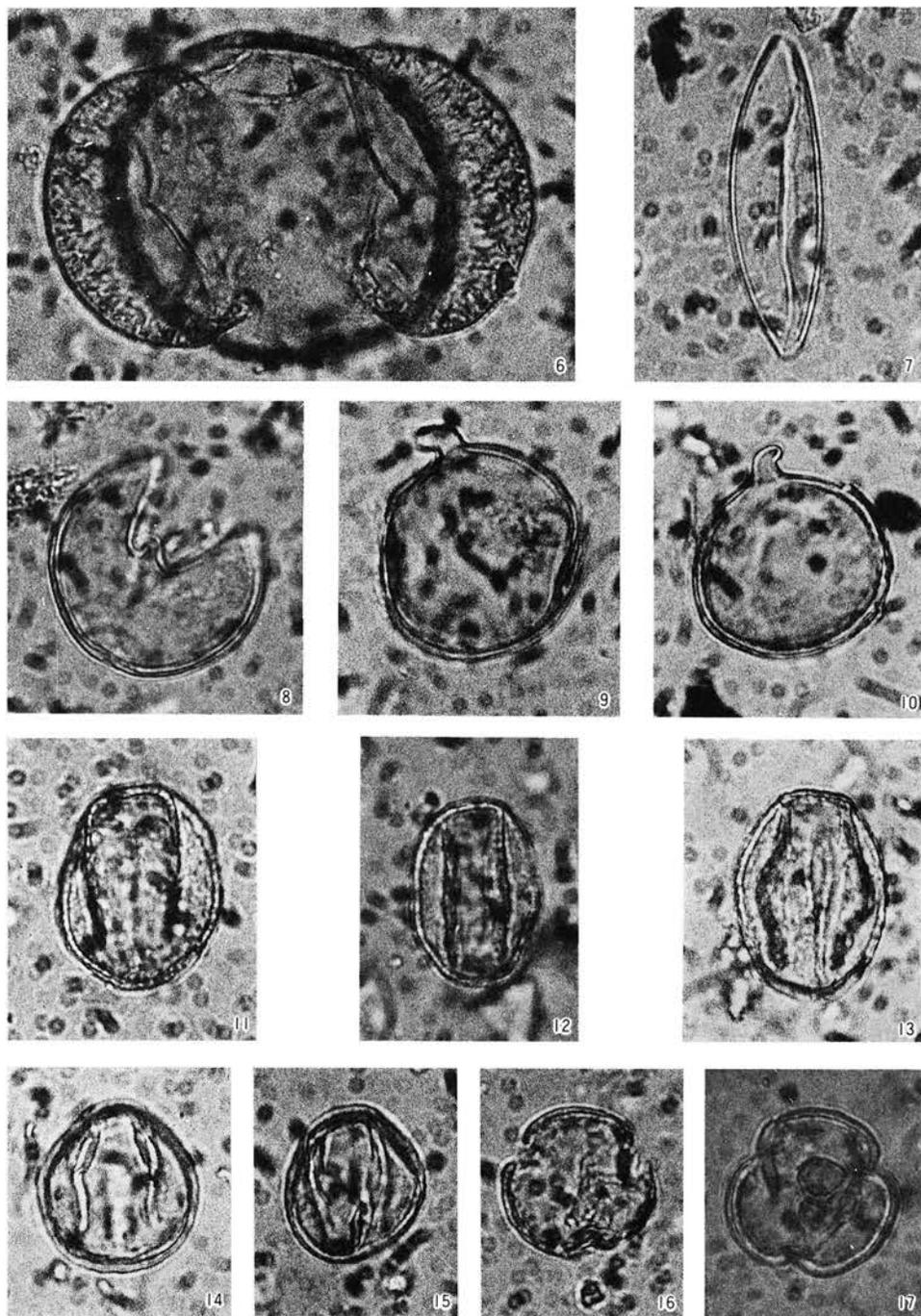
別	試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9
イネ科(大型)		17.0	1.5	12.2	27.7	○	5.4	4.2	28.9	25.4
ク(小型)		5.0	0.7	9.5	4.8	○	4.6	9.9	11.1	9.5
カヤツリグサ科		4.3			0.5		3.8	8.5		4.8
ソバ		0.7	4.4	1.3	1.4	○	0.8	1.4	0.2	
ウリ科		2.1	2.2	25.7	4.8		3.8	12.7	5.3	4.8
タデ科		1.4	9.6	10.8	8.6		48.1	5.6		3.1
ギシギシ					1.4			1.4	4.0	
スイバ									0.8	
ミチヤナギ									0.4	
オキナグサ科		0.7	1.5	1.3	3.4	○	1.5		0.6	2.4
セリ科		2.1	2.9	6.8	2.4		1.5	15.5	2.5	6.3
ヨモギ		6.4	1.5	5.4	10.5	○	1.5	22.5	16.0	23.8
アリノウグサ		23.4	57.4	5.4	0.5		7.6	2.8		
キク科		33.4	16.9	12.2	1.4		16.0	7.1	0.6	7.1
アカザ科		2.8	0.7	1.3	8.2	○	0.8	5.6	25.6	4.0
アブラナ科		0.7	0.7	2.7	8.6	○	4.6	2.8	2.3	4.8
ハス				5.4	0.5					
ナデシコ科					4.3				0.9	
ガマ					1.9					
カナムグラ					9.1				0.8	4.0
アケビ						○				

(註) ○印は検出されたものを表わす。

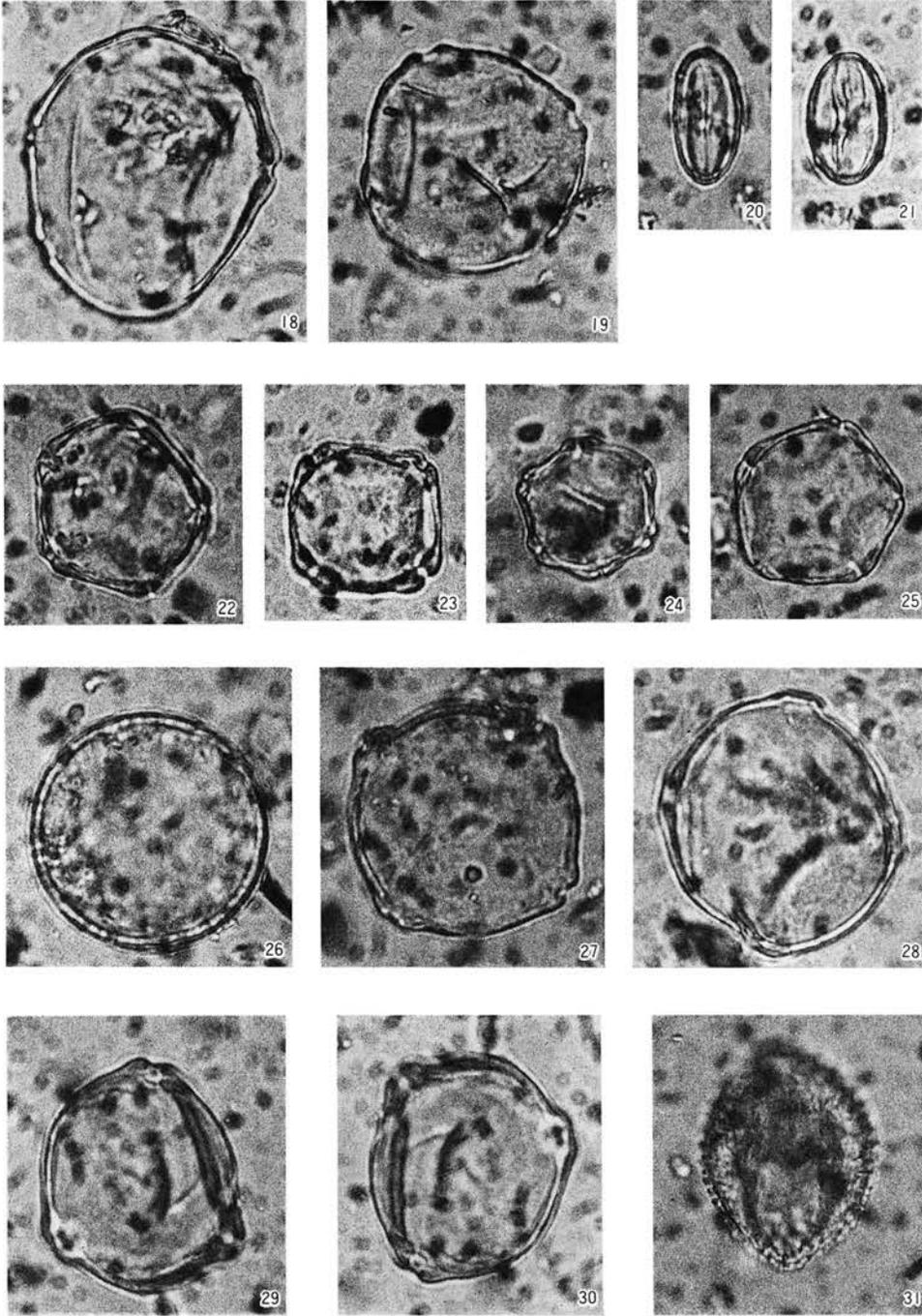
イネ科の大型は48ミクロン以上のもので、小型はそれ以下の大きさである。



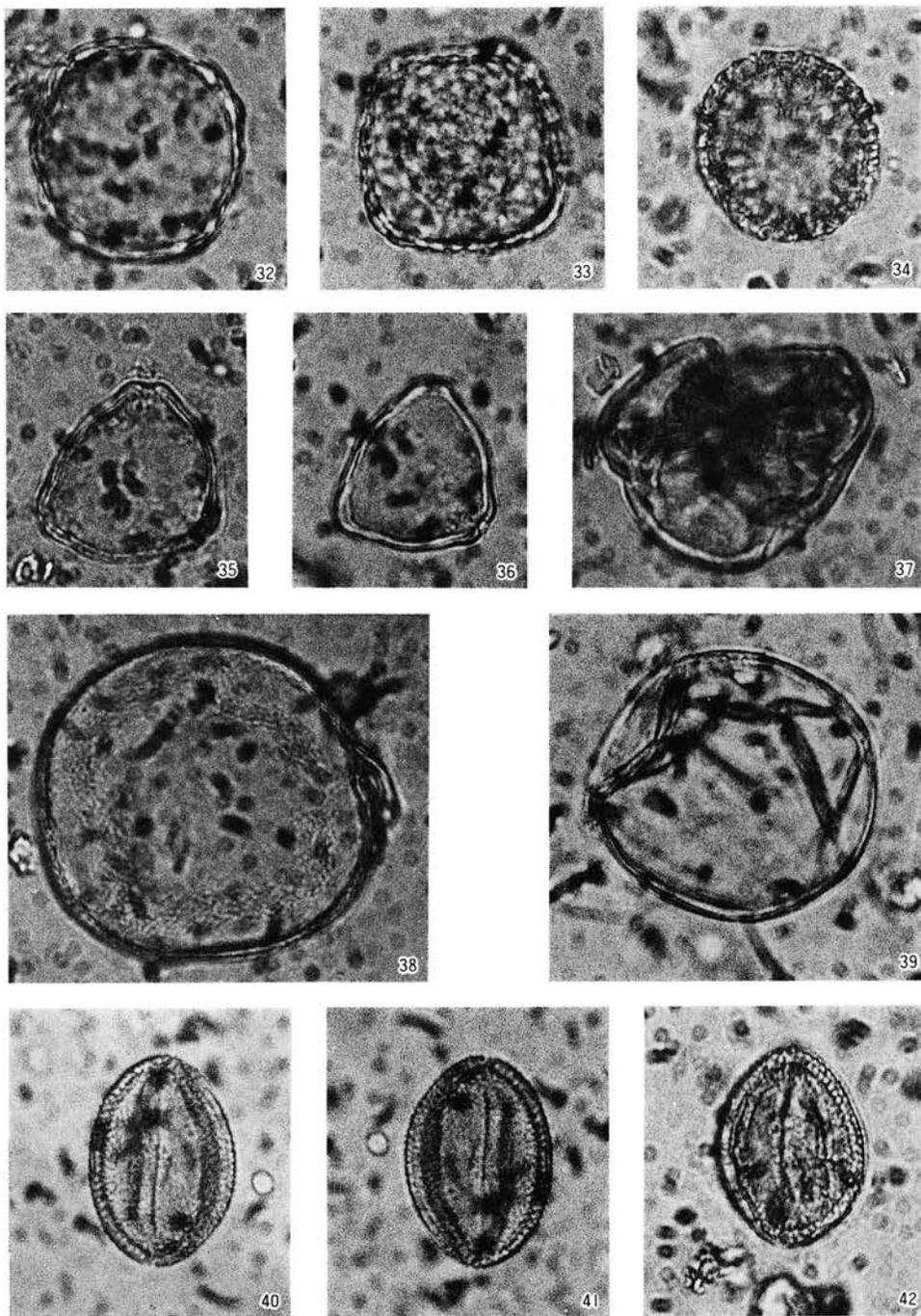
花粉分析 (1)



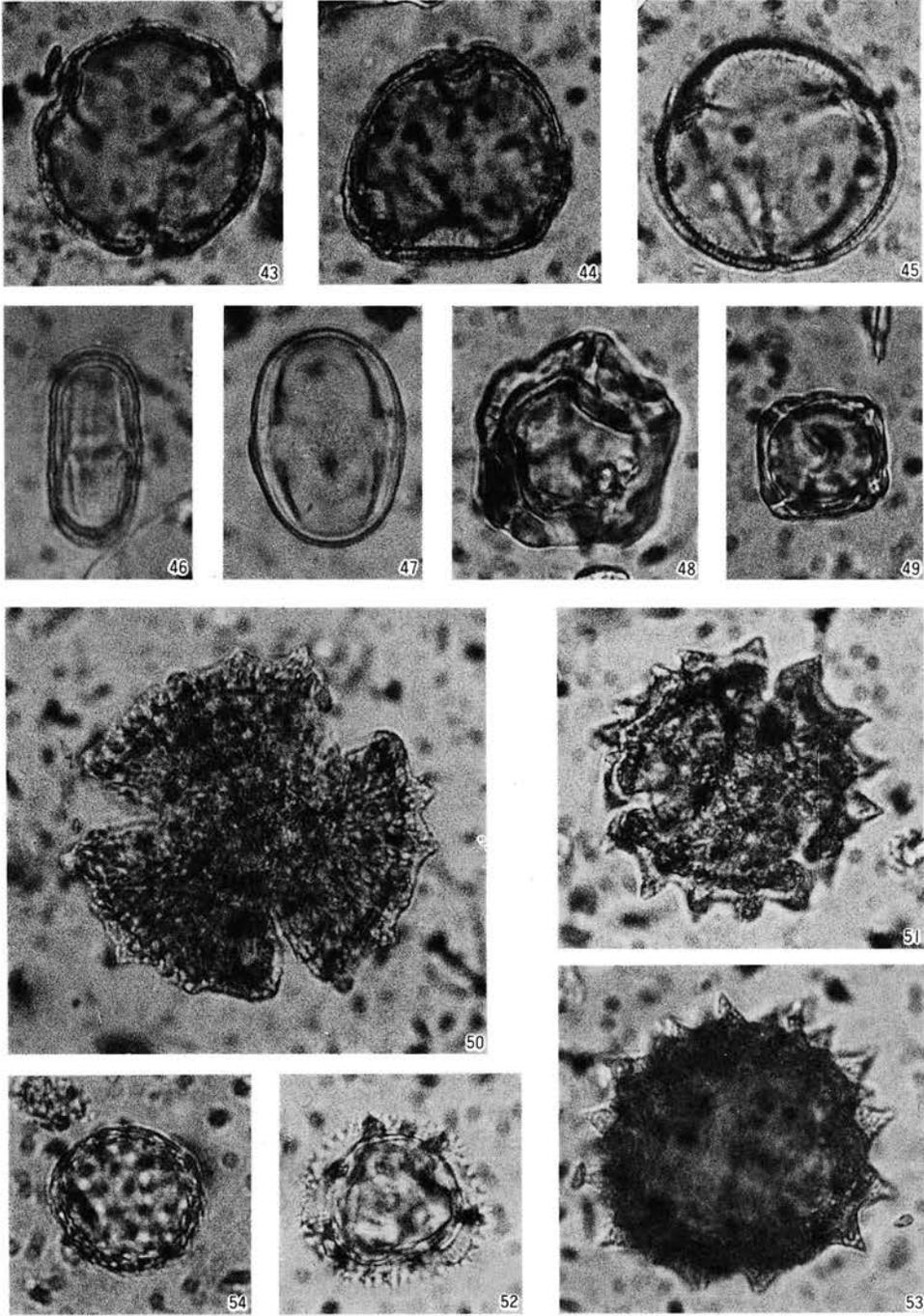
花 粉 分 析 (2)



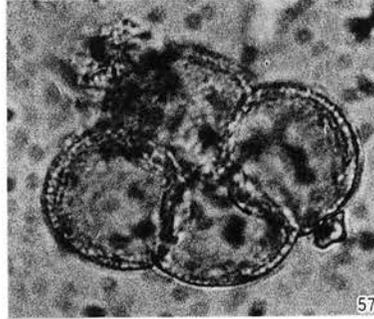
花粉分析 (3)



花 粉 分 析 (4)



花 粉 分 析 (5)



花 粉 分 析 (6)

- | | | | | | |
|--------|----------|--------|---------|--------|-------|
| 1, 2 | モミ属 | 3 | トウヒ属 | 4, 5 | ツガ属 |
| 6 | マツ属 | 7 | イチョウ属 | 8~10 | スギ |
| 11~13 | コナラ亜属 | 14~17 | アカガシ亜属 | 18, 19 | クルミ科 |
| 20, 21 | シイノキ属 | 22~25 | ハンノキ属 | 26 | タブノキ属 |
| 27, 28 | クマシデ属 | 29, 30 | シラカンバ属 | 31 | ヤナギ科 |
| 32, 33 | ニレ, ケヤキ属 | 34 | モチノキ属 | 35, 36 | ハシバミ属 |
| 37 | ツツジ属 | 38, 39 | イネ科 | 40~42 | ソバ |
| 43, 44 | ウリ科 | 45 | ギシギシ | 46 | セリ科 |
| 47 | ミチヤナギ属 | 48, 49 | アリノトウグサ | 50~53 | キク科 |
| 54 | アカザ科 | 55, 56 | アブラナ科 | 57 | ガマ |
| 58, 59 | ヨモギ | | | | |

1~5. ×500, 6~59. ×1,000

付表7 古殿遺跡第2次調査層名略号

黒	コ	暗	ア	シルト	シ	互層	ゴ
灰	ハ	乳	ニ	石英	イ	攪乱	ラン
茶	チ	砂	サ	雲母	ウ	断ち割り	タチ
褐	カ	砂多	サタ	礫	レ	セクション	セク
赤	セ	砂少	サス	上層	上ソ	土	ド
黄	オ	粘	ネ	下層	下ソ		
白	ロ	粘質	ネス	上面	上		
青	セイ			下面	下		

付表8 第2次調査出土土器器種分類表

番号	器種	時期	出土地点(層位)	番号	器種	時期	出土地点(層位)
1	短頸壺A ₁	Ⅱ	溝SD04 (アハシ・ハカ サゴド)	37	甕C ₁	Ⅲ	溝SD04 (コネサド)
2	長頸壺Aa ₁	Ⅰ		38	二重口縁壺B ₁	Ⅲ	
3	長頸壺Ab ₁	Ⅱ		39	鉢D	Ⅳ	
4	甕Ac ₃	Ⅰ		40	有孔鉢B ₁	Ⅰ	溝SD04 (コネサタド)
5	甕Ac ₄	Ⅱ		41	鉢C ₂	Ⅳ	
6	甕B ₁	Ⅲ		42	高杯D	Ⅲ	
7・8	甕Aa ₂	Ⅰ		43	有孔鉢A ₃	Ⅲ	溝SD04 (サド下ソ)
9・10	甕Ac ₂	Ⅱ		44	甕D ₁	Ⅲ	溝SD04 (サド)
11	甕Ac ₂	Ⅱ		45	小型鉢B ₁	Ⅲ	
12	甕G	Ⅱ		46	甕Ac ₃	Ⅱ	溝SD04 (ハカサド)
13	甕D ₂	Ⅱ		47	有孔鉢B ₂	Ⅱ	
14	高杯B ₁	Ⅱ		48	裝飾壺Da	Ⅲ	溝SD04 (コネド)
15	鉢C ₂	Ⅳ		49	裝飾壺Db	Ⅲ	
16・17	台	—		50	高杯B ₂	—	
18・20・21	有孔鉢B ₁	Ⅰ		51	大型高杯B ₁	Ⅱ	
19	鉢B ₂	Ⅱ	52	杯	Ⅳ		
22・23	器台B ₁	Ⅱ	53	有孔鉢C	Ⅲ		
24	甕Ac ₂	Ⅱ	54	器台B ₂	Ⅲ		
25	甕D	—	溝SD04 (コネサスド)	55	擬凹線文壺Ab ₃	Ⅱ	溝SD04 (カサド)
26	甕I	Ⅱ		56	擬凹線文壺Ab ₂	Ⅱ	
27	壺G	Ⅲ	57	甕Ac ₂	Ⅱ		
28	甕D ₂	Ⅱ	58	甕Ac ₄	Ⅱ		
29	甕D ₁	Ⅲ	59	甕	—		
30	甕Ac ₁	Ⅱ	60	有孔鉢A ₁	Ⅰ		
31・32	有孔鉢B ₁	Ⅰ	61	器台B ₁	Ⅱ		
33・34	鉢A ₂	Ⅱ	溝SD04 (コネド)	62	把手付大型鉢A	Ⅱ	
35	鉢A ₁	Ⅰ					
36	鼓型器台A類	Ⅳ					

番号	器種	時期	出土地点(層位)	番号	器種	時期	出土地点(層位)	
63	二重口縁壺Ea1	Ⅲ	溝SD02-2 (サシド)	119	甕C3	V	溝SD02-2 (アハシ・ハカ サゴド)	
64	二重口縁壺Ea2	Ⅲ		120	高杯A	I		
65	二重口縁壺底部	—		121	高杯脚	—		
66・67・68	甕C2	Ⅳ		122	小型器台B類	—		
69・72				123	蓋	—		
70	甕C3	V		124	裝飾壺F	Ⅲ		
71	甕C1	Ⅲ		125	大型高杯B2	Ⅱ		
73	甕Ac3	Ⅱ		126	小型器台A類	—		
74	甕B1	Ⅲ		127	高杯B1	Ⅱ		
75・77	鉢B2	Ⅲ		128	高杯B3	Ⅲ		
76	鉢C1	Ⅲ		129	台付鉢D	I		
78	鉢C3	Ⅳ		130	蓋	—		
79	高杯C3	Ⅳ		溝SD02-2 (サシゴド)	131	小型丸底C1		Ⅲ
80	高杯C4	Ⅳ			132	台付無頸壺		—
81	高杯Aa	I			133	甕C1		Ⅲ
82~84	鼓型器台B類	Ⅲ	134		台付鉢A	—		
85	器台B1	Ⅱ	135		小型鉢A1	I		
86	注口土器	Ⅲ	136		ミニ甕	—		
87・88	甕C3	V	137		小型器台A類	—		
89	短頸壺A2	Ⅱ	溝SD02-2 (ニハサド)	138	小型器台B類	—	溝SD02-2 (サド)	
90	二重口縁壺Ea	Ⅲ		139	二重口縁壺C2	Ⅲ	溝SD02-2 (コネサド)	
91	二重口縁壺C3	Ⅲ		140	二重口縁壺C1	Ⅲ	溝SD02-2 (コネサタド)	
92	二重口縁壺Eb	Ⅲ			141	二重口縁壺C3		Ⅲ
93	甕E	Ⅲ			142	鉢A1		I
94	甕C2	Ⅳ		143・144	甕C2	Ⅳ	溝SD02-2 (コネサスド)	
95	台付鉢C	Ⅲ			145	器台A	I	溝SD02-2 (コネサド)
96	有孔鉢B2	Ⅱ		146	器台Ca	Ⅲ		
97	有孔鉢A2	Ⅱ		147	裝飾器台B1	Ⅱ		
98	高杯B1	Ⅱ		148	低脚杯	Ⅳ	溝SD02-2 (コハシド)	
99	高杯B4	Ⅲ	149	小型器台A類	—			
100	高杯C2	Ⅲ		150	裝飾器台C	Ⅲ	溝SD02-2 (1~4層)	
101	高杯D	Ⅲ	151	大型高杯Aa	I			
102~104	鼓型器台B類	Ⅲ	152	小型丸底E2	V	溝SD02-2 (コハネド)		
105	蓋	—		153	高杯C4		Ⅳ	
106	短頸壺B	Ⅲ	154	小型無頸壺	—	溝SD02-2 (包含層)		
107	広口壺B類	Ⅲ		155・156	小型丸底E3		V	
108・109	壺B1	Ⅲ		157	壺G		Ⅲ	溝SD02-2 (コハイド)
110	壺(H)	—	158		台付鉢E	Ⅱ		
111	甕Aa1	I	溝SD02-2 (アハシ・ハカ サゴド)	159	裝飾器台B2	Ⅲ	溝SD02-2 (コハネド)	
112	甕D1	Ⅲ		160	二重口縁壺Dd	Ⅳ	溝SD02-2 (オカサド)	
113・114	甕G	Ⅱ						
115	甕D3	Ⅱ						
116	長胴甕B	Ⅲ						
117・118	甕C2	Ⅲ						

番 号	器 種	時期	出土地点(層位)	番 号	器 種	時期	出土地点(層位)
161	甕F ₂	Ⅳ	溝SD02-2 (オカサド下ソ)	198	二重口縁壺B ₁	Ⅲ	第1トレンチ包 含層 (サド)
162	甕F ₂	Ⅳ	溝SD02-2 (カサド)	199	甕Ac ₁	Ⅱ	
163	甕C ₄	Ⅴ		200	ミニ鉢	—	
164	高杯脚	—		201	甕F ₁	Ⅲ	
165	杯	Ⅳ	溝SD02-2 (包含層)	202	壺C ₄	Ⅳ	溝SD10 (サド下)
166	器台B ₂	Ⅲ	溝SD02-2 (オカサド)	203	二重口縁壺C ₄	Ⅳ	溝SD10 (アハシド)
167	裝飾壺F	Ⅲ	土塚SK03 (コネド)	204	二重口縁壺G	Ⅲ	
168	甕Ac ₁	Ⅱ		205	甕Ha	Ⅳ	
169	長胴甕A	Ⅱ		206	ミニ鉢	—	
170	大型高杯Ab	Ⅰ		207	小型器台B類	Ⅴ	第2トレンチ包 含層(コハシド)
171	甕Ab ₂	Ⅰ		208	器台E	—	第2トレンチ包 含層 (コネド)
172	小型鉢A ₂	Ⅱ		209	器台Cb	Ⅳ	土塚SK11 (コネサド)
173	小型鉢B ₂	Ⅱ		210	器台D	—	
174	ミニ器台	—	211	鼓型器台B	Ⅲ		
			212	小型丸底E ₆	Ⅴ		
175	裝飾器台C	Ⅲ	土塚SK03 (オカサド)	213	小型丸底C ₃	Ⅴ	溝SD10 (オカサド)
176	小型器台A類	—	土塚SK03 (ランド)	214	有孔鉢A ₃	Ⅲ	第2トレンチ (コネド)
177・178	小型器台A類	—	土塚SK03 (コハド)	215	ミニ壺	—	
179	甕Hb	Ⅳ		216	ミニ台付鉢	—	
180	高杯C ₃	Ⅳ	土塚SK03 (サ上ソ)	217	鐸型土製品	Ⅱ	第2トレンチ・ ピット
181	蓋	—	土塚SK03 (包含層)	218	長頸壺Aa ₃	Ⅰ	溝SD12 (アハド)
182	裝飾壺Dc	Ⅲ	第1トレンチ包 含層	219	広口壺A類	Ⅰ	溝SD12 (コネサド)
183	甕B ₁	Ⅲ	第1トレンチ包 含層 (コネド)	220	裝飾壺F	Ⅲ	
184	甕C ₄	Ⅴ		221	甕Ac ₂	Ⅱ	
185	甕Ac ₄	Ⅱ		222	大型高杯Ab	Ⅰ	溝SD12 (アハシド)
186	甕F ₄	Ⅴ	第1トレンチ包 含層 (コハド)	223	小型鉢C	Ⅲ	
187	小型丸底C ₂	Ⅳ	第1トレンチ包 含層(コハシド)	224	長頸壺Ac ₁	Ⅲ	溝SD20 (コネサド)
188	小型丸底E ₄	Ⅴ	第1トレンチ包 含層(コハネド)	225	甕C ₁	Ⅲ	
189	小型丸底E ₅	Ⅴ	第1トレンチ包 含層(コハサド)	226	甕	—	
190・191	甕F ₃	Ⅴ	第1トレンチ包 含層(コハネド)	227	高杯C ₁	Ⅰ	
192	鉢B ₆	Ⅴ	第1トレンチ包 含層 (コネサタド)	228	器台B ₁	Ⅱ	
193	杯	Ⅳ	第1トレンチ包 含層(コハネド)	229	擬凹線文壺Ab ₁	Ⅱ	溝SD21 (コネド)
194	蓋	—	第1トレンチ包 含層(ハカサド)	230	擬凹線文甕Aa ₁	Ⅰ	
195	ミニ鉢	—	第1トレンチ包 含層(コハシド)	231	甕E	Ⅲ	
196	ミニ台付鉢	—		232~234	甕G	Ⅱ	
197	長頸壺Aa ₂	Ⅰ		235	小型平底	Ⅱ	
				236	小型丸底E ₁	Ⅲ	
				237	小型無頸壺A	—	
				238	甕Ac ₁	Ⅱ	
				239	甕Ab ₂	Ⅰ	

番号	器種	時期	出土地点(層位)	番号	器種	時期	出土地点(層位)
240	甕Aa ₁	I		264	甕	—	第4トレンチ・ピット(コネド)
241	甕Ab ₂	I		265	甕Ab ₂	I	
242	台付鉢B	II	溝SD21 (コネサド)	266	大型高杯Aa	I	
				267	高杯C ₁	I	
243・244	鉢A ₂	II	溝SD21 (コネド)	268	二重口縁壺C ₂	III	第4トレンチ (アハシ・コネゴド)
245	高杯	—					
246	器台B ₁	II					
247	蓋	—					
248・249	器台B ₁	II					
250・251	長頸壺Ab ₂	II	溝SD22 (コネド)	270	甕Ac ₁	II	第4トレンチ・ピット(コネド)
252	擬凹線文壺Aa ₂	I		271	二重口縁壺Ea	III	
				272・273	甕Ac ₁	II	
253	甕	—	溝SD22 (タチワリ)	274	甕B ₁	III	第4トレンチ・ピット (コネサド)
254	甕	—	溝SD22 (コネド)	275	甕B ₁	III	
255	鉢	—					
256	脚	—					
257・258	高杯Ab	I					
259	把手付鉢	I					
260	鉢	—	溝SD21 (コネド)	276・277	甕B ₁	III	第4トレンチ・ピット(コネド)
261	蓋	—	溝SD22 (コネド)	278・279	台付鉢C	III	
262	長頸壺Ac ₂	III		280・281	甕G	II	
263	長頸壺	—		282	甕(※弥生中期)	—	
				283	台付鉢B	II	
				284	高杯A	I	
				285	器台B ₁	II	
				286	高杯Ab	I	
				287	小型器台A類	—	

付表 9 第 2 次 調査 出土 木 製品 観 察 表

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
001	W-179 N 3 SD11 コハシド	87.5 23.0 6.0		約 1/2 破損。側面に二次的な削り込み。底面から、側面で138°木口面で152°の角度をもって外反しながら立ち上がる。端部は上面で広く側面にわずかな面をもつ。内面の削り込みは、側面でわずかに反りをもち、木口で直線的に仕上げる。底部には平面台形状の低脚を四隅に削り出して作る。	一木造り。木裏を上面にし長側面の強度を確保している。全体に平滑で丁寧な仕上げ。底部裏面がやや粗い仕上げになる。	①木取 心去り材 ②材質 スギ ③年輪数 126 ④ク密度5.4/cm
002	W-176 E10 SD02 ロオサド	73.0 42.2 31.5 天板 73.0 42.2 3.5 脚 1 31.5 7.0 3.7 脚 2 29.6 6.2 3.1 脚 3 30.8 7.1 4.2		柄組四脚式の案で一脚を欠く。天板は中央で二枚に破損していたが本来一枚板。短側面(木口)は底部より外反して斜め外方に立ち上がり屈曲して上面に至る。長側面は短側面より外反度が少ない。底面中央に40cm×36.5cmの削り込みを深さ1cm 施す。削り込みは木口で内湾し長側面で直線的に加工する。天板の四隅付近には約2.5cm角の柄穴を上面まで通す。脚は断面の形状が上位で隅丸長方形中位で楕円の三角形、下位で長楕円形を呈する特異なもので底端から2cmにわずかに削り出した面がめぐる。全体の形状は大肢骨に似、蹄脚をおもわせる。柄は概ね四方胴付となりクサビ止めは用いない。	天板は辺材を用い木表を上面とした一木造りで裏面の抉り加工は天板の反りを防ぐ工夫。脚も辺材を用いるとともにたいへん丁寧な造りで手斧などの粗い加工痕は留めていない。鉋使用による仕上げ加工か。木目を強調する意匠である。	①心去り材 ②スギ ③122 ④12/cm ①心去り材 ②スギ ③37本 ④10/cm ①心去り材 ②スギ ③44本 ④10/cm ①心去り材 ②スギ ③38本 ④11/cm
002 -5	W-175 E10 SD02 ロオサド	(9.5) 5.5 5.4		上端の接合部で欠損のため脚高は不明。横断面楕円の三角形。一面は平坦な面により成形され、他の二面は丸く湾曲する。立面の正面は中位でややすぼまり上位に開く。右側面では底部から右上方に内湾ぎみに立ち上がる曲線を描く。平坦な裏面では底面から8mmに面をもち屈曲してカーブを描く。	総木口の木取りを用い、木目を強調する意匠。上部接合にダボを用い目釘止めを施す。全体の仕上げは極めて丁寧。	①心去り材 ②スギ ③75本 ④11/cm
004	W-168 C11 SD02 オハサド	37.0 (17.0) 7.0		1/2欠損。一木造の二脚案。平面小判型で側面皿状を呈する。木目の縦方向に二脚を削り出す。脚は65°で内側に立ち上がる。杯部は深さ4cmに丸く扶る。	木口部外面に鉄製工具による加工痕を留める。破損後樹皮により補修。	①心去り材 ②スギ ③56本 ④5/cm

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
005	W-166 D10 SD02 コネサド	39.2 (12.1) 3.0		柄組二脚式の案で脚を欠く。天板は底部から側面に122°木口に152°でゆるやかにカーブを描いて外方に開く。上面は中央で最も凹み周囲で浅くなる皿状の抉りを施す。底部には左右に幅1.2cmの止め受けを切りその中央に1.2cm×5.8cmの通しを開ける。	柄組にすることで3より強度を持たせている。柄切りなどに鉄製工具の使用を窺わせる。	①柁目材 ②スギ ③69本 ④5/cm
006	W-016 L 3 SD11 ハカサド	32.4 (15.5) 1.4		木目にそって両端を破損。木口側面は底部から119°で大きく外反しながら立ち上がる。底部には木口側にそれぞれ半円形の削り込みを施す。	底部に鉄製工具の加工痕を留める。	①柁目材 ②スギ ③59本④4/cm 組に転用
007	W-030 B 5 SD04 アハシ・ハカサゴド	(28.1) (2.8) (0.8)		槽の破片。船型の先端部付近で全体の形状を窺うことはできない。一木で成形したものとおもわれる。	腐食のため観察不能。	①心去り材 ②スギ ③— ④—
007	W-062 B 5 SD04	(24.5) (3.5) (4.5)		槽の破片。船型の先端部付近で全体の形状を窺うことはできない。一木で成形したものとおもわれる。	腐食のため観察不能。	①心去り材 ②スギ ③— ④—
008	W-180 D11 SD02 オカサド	46.0 (30.5) 8.0		両脚及び台部1/2欠損。一木造の二脚盤。平面は長方形、側面は台形を呈する。木目の縦方向に二脚を削り出す。	細かく丁寧に成形される。	①心去り材 ②スギ ③123本 ④11/cm
009	W-167 — SD11 カシド	(32.4) 15.7 (8.0)		約1/3を切断と破損により欠損。底面より側面で127°、木口面で122°で上方に立ち上がる側面と、4cm×13.5cmの四脚からなる。	各面は鉄製工具による加工痕を留める。木口側破断面は鉄器による。	①心去り材 ②スギ ③29本 ④3/cm
010	W-049 L 4 — コハシド	(28.3) (5.0) 8.0		木目に沿って1/2を破損。船型の形状を呈し内底面は平底。先端部は底部より139°で立ち上がる。	上記の加工法によるものとみられる。	①心去り材 ②スギ ③18本 ④4/cm
011	W-189 5~7 — コハネド	56.0 (11.0) (8.5)		腐食により1/2を欠損。底面より側面で118°、木口で130°で上方に立ち上がる。木口上面が円弧状、内底面が船底状を呈する。	保存状態が悪く観察困難であるが各面に鉄製工具による加工痕を留める。	①心去り材 ②スギ ③26本 ④4/cm
012	W-025 E11 SD02 コハシ・ハカサゴド	30.2 18.7 2.7		箱組の木口板。底位内面に止め柄受けを切り、その中央に2.7cm×0.8cmの通し柄をあげる。側面上位には左右の同位に柄を造りだす。側面下位にはダボを留める。	内面に鉄製工具による抉り込みを施す。	①板目材 ②スギ ③28本 ④9/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
013	W-111 — SX08 —	(45.4) (16.4) 0.8		周縁の一部を残し欠損。長側面は旧状か破損か不明。周縁は直線的な二辺が144°で稜をもち多角形となる。復原により九角形となる。	鉄製工具による表面調整の後、表面には黒漆を全面に施す。	①板目材 ②スギ ③— ④—
014	W-019 D10 SD02 コネサスド	25.0 (10.6) 1.4		1/2欠損。直径24cmの円板で、外縁より22mmで片面に段をもち断面三角形に縁を整える。周縁の弧は正円を呈さない。	ロクロ挽きではないと考えられる。	①柁目材 ②スギカ ③22本 ④5/cm
015	W-074 E12 SD02 コネサスド	17.0 3.0 0.9		小片であるため全体の形状は不明であるが上記円板と同様の形状と考えられる。直径約34cmに復原される。	周縁の弧は正円形を示さない。	①柁目材 ②スギ ③— ④—
016	W-007 N 4 — コハシド	43.0 φ1.9		いわゆるバット状で柄頭は太く、グリップ部が細く削り出され先端部に向かって太くなる。先端部中央には小さな柄状の突起があり桶部との接合を容易にしている。	7～8面に丁寧に削り仕上げている。	①心去り材 ②スギ ③17本 ④11/cm
017	W-005 L 4 SD11 アハシ・ハ カサゴド	41.0 2.7 1.7		完形。円筒状の柄部と板状の杓子部とからなる。柄部と杓子部の境は明瞭でない(Aタイプ)。先端部に磨耗痕。	柄の一部に鉄工具による削り痕を留める。	①柁目材 ②スギ ③— ④—
018	W-012 D 6 — コハネシド	37.8 3.4 2.3		完形。やや扁平な柄部と板状の杓子部とからなる。柄部と杓子部の境に明瞭な段をもつ(Bタイプ)。先端部に磨耗痕。	鉄製工具による加工痕。	①板目材 ②スギ ③5本 ④3/cm
019	W-038 M 4 — アハシド	35.4 2.8 1.5		完形。円筒状の柄部と板状の杓子部とからなる。柄部と杓子部の境は明瞭でない(Aタイプ)。	板材を面取りし柄部で八角形に仕上げられる。	①板目材 ②スギ ③— ④—
020	W-113 M 3 SD11 アハシド	(29.2) 2.7 1.0		柄部を欠損。円筒状の柄部と板状の杓子部とからなる。柄部と杓子部の境は明瞭でない(Aタイプ)。	詳細は不明。	①柁目材 ②スギ ③6本 ④3/cm
021	W-003 E 6 — コハド	26.7 4.3 1.9		ヘラ状を呈する。断面が方形の柄により幅の広い扁平なヘラ部が続く。ヘラ部先端をV字状に深く削り込む。柄部及びヘラ部先端が磨耗している。	丁寧な仕上げ。削り込み方向が柄方向へ一定している。	①板目材 ②スギ ③10本 ④4/cm
022	W-026 E 4 — コハネド	29.1 3.2 1.5		ヘラ状を呈する。断面が楕円形の柄により幅広い扁平なヘラ部が続く。ヘラ部先端は焼失しコゲ痕がある。柄部に使用痕。	丁寧な仕上げ。削り込み方向・刃先の進入角度が一定する。	①板目材 ②スギカ ③11本 ④6/cm

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
023	W-013 — SD02 コカネド	31.0 2.2 1.4		ヘラ状を呈する。断面が円形の柄に同幅の扁平なヘラ部が続く。ヘラ部の片面はほぼ平らであり、もう一方の面は摩滅が著しい。	詳細は不明。	① 梃目材 ② スギ ③ 9本 ④ 4/cm
024	W-078 C10 SD02 アカシド	(39.0) 3.0 1.3		ヘラ状を呈する。断面が楕円形の柄に扁平なヘラ部が続く。ヘラ部先端は摩滅が著しい。柄部の使用痕が顕著。	削り込み方向・角度が不定で表面仕上げは粗い。	① 板目材 ② スギ ③ 6本 ④ 5/cm
025	W-184 C10 SD02 アハシ・ハ カサゴド	41.5 3.5 3.3		断面が方形の棒状で両木口を直立に削り落とす。長側面の一面は木目沿いに平滑な面をみせるが他面では長辺方向の荒い削りがみられる。一部未加工部が残る。	未製品である。先ず木目に沿って棒材を断ち割り大まかに木取り後各部を仕上げる。削り込み方向は柄側からヘラ側に向けられ、ヘラ部基部に逆方向の削りがみられる。	① 板目材 ② スギ ③ 20本 ④ 8/cm
026	W-183 L4・5 SD11 ハカサド	38.5 1.8 1.3		未製品と思われる。断面が楕円形の柄に同幅の未成形のヘラ部が続く。ヘラ部先端は欠損。	柄部を成形し終わった状態である。削り込み方向・角度は不定で未成形のヘラ部に木目に沿って断ち割った痕である平坦面が残る。	① 板目材 ② スギ ③ 3本 ④ 4/cm
027	W-182 不 明	34.5 2.4 1.2		ヘラ状を呈する。断面が楕円形の柄部に同幅の扁平なヘラ部が続く。ヘラ部先端を鈍角に尖らせ、柄は先細りする。中半部で折れている。	削り込みが不定でやや荒い。	① 板目材 ② スギカ ③ 5本 ④ 5/cm
028	W-084 — E 7 アハシド	15.8 2.0 1.3		断面が長方形の棒状で使用発火点が2か所、未使用発火点が2か所残存。使用発火点は径1.1cm、深さ0.7cmを測るが使用発火点で焼損。	詳細は不明。	① 梃目材 ② スギ ③ 6本 ④ 2/cm
029	W-117 — E 5 コハネド	13.0 2.5 1.2		断面が長方形の棒状で4か所の発火点がある。うち1か所は径1.1cm、他3か所は発火点の一部が残存。両木口は欠損。	詳細は不明。	① 心去り材 ② スギ ③ 7本 ④ 2/cm
030	W-037 — E 5 アハシド	23.6 3.3 1.3		断面が長方形の棒状で4か所の発火点がある。各々径1.2cm、1.25cm、1.0cmを測り他一か所は不明。両木口は欠損。	詳細は不明。	① 心去り材 ② スギカ ③ 6本 ④ 5/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
031	W-271 E 6 — コハネド	20.1 2.7 1.5		断面が方形の棒状で4か所の発火点が残存。両木口は欠損。	一部に削り痕が残るが詳細は不明。	①心去り材 ②スギ ③6本 ④4/cm
032	W-120 F 4 — コハネド	28.4 φ1.8		断面が円形の棒状で両木口を欠損。使用痕は認められない。	ほぼ同一方向の連続的削りを施す。	①心去り材 ②スギ ③4本 ④6/cm
033	W-048 L 3 SD11 ハカサド	30.6 φ1.0		断面が円形の棒状で先端が丸く摩滅し焦げている。柄端部は欠損。	削り込み方向・角度がほぼ一定である。木口付近に長さ2cmを測る抉りが残るが用途は不明。	①心去り材 ②スギ ③5本 ④5/cm
034	W-124 F 4 — コハネド	28.7 1.0 0.9		断面が円形の棒状で木口の一方を丸く削りもう一方は欠損。	ほぼ同一方向の連続的削りが施される。	①心去り材 ②スギ ③5本 ④5/cm
035	W-141 D11 — コネサスド	18.3 φ1.8		断面が円形の棒状で先端が丸く摩滅し焦げている。柄端部は欠損。柄部に使用痕。	使用による摩滅が激しい。	①心去り材 ②スギ ③5本 ④5/cm
036	W-071 2トレ — コネド	17.5 2.8 0.5		断面が隅丸長方形の板状で両木口を触先状に尖らす。中央端部寄りに4か所穿孔されており、紐を通して組具として使用されたと思われる。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギ ③— ④—
037	W-011 5~7 — コハネド	20.6 2.5 1.0		断面が長方形の板状で両木口を丸く削る。両木口付近にくびれ部を持ち中央に1.3cm×1.1cmの柄穴が穿たれる。	詳細は不明。	①柎目材 ②スギ ③4本 ④4/cm
038	W-015 O 3 — コネサスド	38.2 (19.5) 1.8		断面が円形の2本の棒材の中央に柄穴を穿ち、断面が楕円形の1本の棒材で接続する道具であるが、うち1本は欠損。	2本の棒材の中央に貫通する柄穴は渡し材とほぼ同幅である。渡し材は中央をやや細く削り込む。	①心去り材 ②スギ ③8本 ④4/cm
039	W-101 O 3 — コネサスド	32.8 φ1.1		1本の稜のあるほぼ楕円形の断面を持つ棒状で先端を丸く削る。木口は欠損。	削り込み方向はほぼ一定しているが削り込み角が不定で表面が凹凸している。	①心去り材 ②スギ ③9本 ④9/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
040	W-102 O 3 — コネサスト	16.5 1.2 1.0		W-099 (図版第35 041) と同一個体か？	削り込みが不定で表面が凹凸している。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④7/cm
041	W-099 O 3 — コネサスト	29.0 φ1.0		断面が楕円形の棒状で先端を鋭く尖らせる。木口は欠損。	削り込み角が不定で表面が凹凸している。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④7/cm
042	W-104 O 3 — コネサスト	37.0 φ1.1		断面が隅丸方形の棒状で両木口は欠損。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギ ③6本 ④6/cm
043	W-045 D 5 — —	(57.0) 2.5 2.0		断面が菱形の棒状で両木口を直立に削り落とす。両端部付近に挟りがあり片側の挟り部に糸引き痕。また中央に縄縛り痕。	連続的削りを施し丁寧な仕上げ。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④3/cm
044	W-089 — SD02 —	54.2 3.2 2.0		断面が隅丸方形の棒状で両木口を柄状に削る。	両木口に向け削り込み丁寧な仕上げ。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④4/cm
045	W-069 M 4 — —	52.0 2.6 2.2		断面が五角形の棒状で両端にくびれがあり先端部を楔状に削る。くびれ部は縄ズレで摩滅している。中央部に浅い挟りがある。	先にくびれ部を削り込んだ後中央を成形する。中央は削り込み角がやや不定。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④3/cm
046	W-041 M 4 SD11 アハシド	44.7 3.3 2.0		断面半円形の棒状で、両端にくびれがあり、先端部を丸くおさめる。	くびれ部を5回程度で削り込む。	①心去り材 ②スギ ③20本 ④5/cm
047	W-057 2トレ — —	43.3 3.4 0.9		断面が長方形の板状で両端にくびれがあり先端を楔状に削る。くびれ部に縄ズレ痕はない。	かなり扁平に削り込んでおり、くびれ部は木口方向に削る。	①板目材 ②スギ ③12本 ④12/cm
048	W-188 M 4 SD11 アハシ・ハ カサゴド	43.0 2.8 1.8		断面が隅丸方形の棒状で両端にくびれがある。両端部は摩滅。	端部付近は木口方向に成形しているが詳細は不明。	①板目材 ②スギ ③13本 ④9/cm
049	W-053 E12 — コネサスト	41.3 3.5 1.8		断面が長方形の棒状で両木口を直立に削り落とす。両端部付近に段を付け幅を広げている。縄ズレ痕が残る。	詳細は不明。	①板目材 ②スギ ③6本 ④3/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
050	W-072 E11 SD02 コハシ・ハ カサゴド	(57.9) 2.5 1.7		断面が隅丸方形の棒状で端部にくびれがあり、先端を面取りして鈍角に尖らせる。もう一方は欠損。くびれ部に縄ズレ。	端部付近は木口方向に削り込みくびれ部を成形する。木口を面取り後断面を方形に成形したと考えられる。	①板目材 ②スギカ ③5本 ④3/cm
051	W-066 C11 — コネサスド	(53.5) 2.9 2.2		断面が楕円形の棒状で端部にくびれがあり、先端を直立させる。もう一方は欠損。中央に抉りがある。	削り込み方向が長辺方向と平行でなく削り込み角も不定で仕上げも荒い。中央の抉りは二次的なものである。	①板目材 ②スギカ ③9本 ④4/cm
052	W-065 C11 — コネサスド	50.7 2.6 2.0		断面が六角形の棒状で端部にくびれがあり木口を直立に削る。もう一方は欠損。中央部に抉りがある。	削り込み方向・角度とも不定で仕上げが荒い。中央の抉りは二次的なものと思われる。	①心去り材 ②スギカ ③28本 ④13/cm
053	W-044 E 4 — —	(41.5) 4.2 3.0		断面が台形の棒状で端部にくびれがあり先端を面取りして丸くおさめる。もう一方は欠損。くびれ部に縄ズレ痕。	表面仕上げは非常に荒く断続的削りが全面に残る。端部のくびれは木口の方から、またその逆と二方向より削られる。	①心去り材 ②スギ ③25本 ④11/cm
054	W-010 — SD02 ハカサド	(40.3) 2.6 1.9		断面が台形の棒状で端部にくびれがあり先端を直立に削る。もう一方は欠損。	ほぼ同一方向の断続的削り込みが全面に施される。	①心去り材 ②スギ ③6本 ④3/cm
055	W-054 M 5 — アハシ・ハ カサゴド	(32.0) 2.5 2.0		断面が台形の棒状で端部にくびれがあり先端を丸くおさめる。もう一方は欠損。	木口方向へのくびれ成形後ほぼ同一方向の連続的削りを全面に施す。	①心去り材 ②スギ ③12本 ④6/cm
056	W-187 M 4 SD11 アハシ・ハ カサゴド	(28.5) 2.9 1.5		断面が半円形の棒状で端部にくびれがあり、木口を直立させる。もう一方は欠損。	ほぼ同一方向の連続的削りを施す。	①心去り材 ②スギカ ③8本 ④6/cm
057	W-186 L・M SD11 アハシ・ハ カサゴド	(28.8) 2.9 1.4		断面が長方形の板状で端部にくびれがある。くびれ部は摩滅しており、もう一方は欠損。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギカ ③10本 ④9/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
058	W-185 L・M SD11 アハシ・ハ カサゴド	(24.1) 2.0 1.8		断面が方形の棒状で端部をやや広げ 扁平に削る。もう一方は欠損。	端部の拡幅部は木 口から中央に向か って削り込む。	①心去り材 ②スギカ ③8本 ④5/cm
059	W-031 D11 SD02 —	(15.0) 2.7 2.0		断面が半円形の棒状で木口の一方を 丸く削り落としもう一方は欠損。端 部付近にくびれをつくり縄ズレ痕が 顕著に残る。欠損部に焼け痕。	丁寧な仕上げ。	①心去り材 ②スギ ③23本 ④6/cm
060	W-014 L 4 SD11 ハシド	15.5 φ1.2		断面円形の棒状で先端部を削り、く びれ部を形成する。	約10面程度に削り、 丁寧な仕上げ。	①心去り材 ②スギ ③10本 ④5/cm
061	W-023 — SD02 コカネド	(26.2) 3.6 2.6		断面が隅丸方形の棒状で、端部を広 げ先端を楔状に削る。もう一方は欠 損。	詳細は不明。	①板目材 ②スギ ③10本 ④5/cm
062	W-100 D12 — コネサスド	31.0 2.0 2.0		断面が隅丸方形の棒状で端部にくび れがあり、木口を直立させる。もう 一方は欠損。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギ ③15本 ④9/cm
063	W-046 L4・5 SD11 ハカサド	45.0 φ7.0		丸太材の表面を削り先端を尖らせる。 もう一方の木口を丸く仕上げる。尖 端は欠損。	詳細は不明。	①心持ち材 ②ネジキ ③18本 ④6/cm
064	W-073 L・M3・4・5 SD11 ニハサド	12.5 9.5 7.3		断面が楕円形の円柱状で使用面を丁 寧に丸く削る。もう一方は荒く切断 される。	詳細は不明。	①心去り材 ②カン類 ③16本 ④2~4/cm
065	W-028 D10・11 SD02 オカサド	12.2 φ3.3		円柱状で両端部を丸くおさめる。中 央に1.6cm×0.7cmの柄穴を穿つ。 表面には使用痕が顕著に認められる。	削り込み方向・角 度がほぼ一定であ る。	①心去り材 ②スギ ③13本 ④5/cm
066	W-118 M 3 SD11 アカシド	14.5 6.9 3.0		鋳刃の一部で厚さ1.1cmの舟型突起 が残る。	詳細は不明。	①板目材 ②カン類カ ③5本 ④4/cm
067	W-181 — SD02 オカサド	(20.0) (17.0) 3.0		鋳刃の一部で厚さ3cmの舟型突起が 残る。柄孔の一部が残存し推定径 3.4cm、着柄角72°を測る。	舟型突起側面は刃 から柄に向け削り、 刃は端部に向け削 り成形する。	①板目材 ②カン類 ③9本 ④2/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
068	W-416 E11 SD02 アハシ・ハ カサゴド	165.0 13.0 7.0		断面が三角形の棒状で両木口に面を持つ。中央部に挟りがあり、端部付近に柵穴が1か所ある。元来四角柱であったと思われる。	長側面のうち片側は丁寧な仕上げだがもう一方は仕上げが悪い。	①心去り材 ②スギ ③31本 ④3/cm
069	W-171 — SX08 —	(242.0) 19.2 3.3		板材である。裏面に蓋受け材の痕が4条残る。	詳細は不明。	①板目材 ②スギカ ③7本 ④3/cm
070	W-169 — SX08 —	242.9 6.0 3.7		断面が長方形の棒状で両木口を削り落とす。柵穴が等間隔に3か所(1.8cm×2.5cm, 1.6cm×2.5cm, 1.8cm×1.8cm)あけられる。	一面に工具のあたり痕が残るが他面はおおむね仕上がりが良。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④3/cm
071	W-170 — SX08 —	248.8 6.4 3.6		断面が長方形の棒状で一方の木口を直立に、もう一方を45°に削り落とす。柵穴が等間隔に3か所(1.0cm×1.6cm, 1.2cm×2.1cm, 1.0cm×1.3cm)あけられる。中半部にコゲ痕。建築材からの転用と思われる。	3か所ある柵はいずれもその周辺を円周状に削り広げている。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④3/cm
072	W-192 — SX08 —	50.0 5.4 3.2		断面が長方形の厚板状で両木口を直立に削り落とす。暗渠支持材のあたり痕が2条残る。そのうち1条は暗渠支持材を敷設する際浮き石を除去せず行ったため、圧痕に砂粒がくいつこんでいる。	詳細は不明。	①心去り材 ②クリ ③8本 ④3/cm
073	W-136 — SX08 —	50.1 6.0 3.7		断面が長方形の厚板状で両木口を直立に削り落とす。片側は一方の隅を幅1cm・長さ2cmにわたって削り込んでおり、またφ4mmの木釘穴が1か所あけられている。暗渠支持材のあたり痕が2条残る。	同一方向の幅広い削り痕が残るが詳細は不明。	①心去り材 ②クリ ③9本 ④2/cm
074	W-152 — SX08 —	50.7 4.9 3.2		断面が方形の厚板状で両木口を荒く削り落とす。端部の片側にφ5mmの木釘穴が残る。暗渠支持材のあたり痕が2条残る。	詳細は不明。	①心去り材 ②クリカ ③7本 ④3/cm
075	W-191 — SX08 —	52.3 6.5 3.5		断面が長方形の厚板状で木口の片側に突起を設けているが転用前の使用痕と思われる。もう一方は暗渠設置の際荒く切断したものと思われる。暗渠支持材のあたり痕が2条残る。	詳細は不明。	①心去り材 ②クリ ③26本 ④6/cm

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
076	W-190 — SX08 —	60.5 6.5 2.5		断面が菱形の厚板状で両木口を丸く削り落とす。端部片側にφ1.2cmの柄穴が残る。暗渠支持材のあたり痕は明確に認められない。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④3/cm
077	W-154 — SX08 —	70.7 9.0 3.1		断面が長方形の厚板状で両木口を荒く削り落とす。両面にけずり痕が顕著に認められる。	全面に断続的な幅広い削り痕が残る。	①板目材 ②スギカ ③16本 ④6/cm
078	W-131 — SX08 —	39.1 10.0 2.4		断面が台形の板状で木口をノミで仕上げる。もう一方は欠損。また長側面の一方は欠損。	同一方向の断続的な削り痕が残る。	①板目材 ②スギ ③4本 ④2/cm
079	W-092 — SX08 —	19.2 (4.0) 3.5		断面が五角形の棒状で端部の片側を尖らせる。もう一方は荒く削り落とす。3.0cm×1.1cmの柄穴をあける。	尖端に向け削り込む。	①心去り材 ②スギ ③6本 ④2/cm
080	W-193 — SX08 —	37.5 4.0 3.0		断面が長方形の厚板状で両木口を荒く削り落とす。暗渠支持材のあたり痕が1条残る。	詳細は不明。	①心去り材 ②クリ ③7本 ④4/cm
081	W-172 — SX08 —	132.0 18.0 3.5		断面がコの字状を呈する。両木口は風化している。端部付近にコテ状のもので半円形の凹みを焼き付けている。	外側面に細かな削りが残る。	①心去り材 ②スギ ③35本 ④5/cm
082	W-122 E11 SD02 アハシ・ハ カサゴド	16.6 φ7.2		断面が円形の棒状で両木口を丸く削り落とす。中央部に挟りが施され縄ズレが残る。	中央の挟りは両肩から中心に向かって削り込む。	①心持ち材 ②広葉樹 (クリカ) ③10本 ④5/cm
083	W-468 D10 SD02 カサド	70.0 φ9.0		自然木を利用した柱材である。二又に分かれる幹の木口を直立に削り落とす。樹皮がかなり残り、中央に幅12cmにわたり縄ズレ痕が残る。	二又に分かれた一方の木口から中央に向かって断続的な削り込みが残る。	①心持ち材 ②クリ ③5本 ④2/cm
084	W-173 — SD02 —	(304.0) φ16.8		断面の半分が円形、あと半分が半円形の棒状で自然木を利用した柱材である。中央部に幅30cmの挟りがある。断面が半円形の部分には計6個の柄穴が穿たれ各々(短辺×長辺×深さ)2.7cm×8.0cm×1.6cm, 2.4cm×11.2cm×2.2cm, 2.4cm×7.6cm×2.4cm, 2.8cm×11.6cm×2.5cm, 3.3cm×12.3cm×2.4cmを測る。	中央部の挟りは両肩から中心に向け削り込む。	①心持ち材 ②スギ ③40本 ④3/cm

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
085	W-250	39.0		断面が長方形の板材を使用し、両端は荒く削り出している。中央に $\phi 8\text{cm}$ と $\phi 6\text{cm}$ の柱のあたり痕が残る。	荒く割ったままの使用。	①板目材 ②スギカ ③17本 ④3/cm
	E11	18.5				
	SD02	3.0				
	アハシ・ハカサゴド					
086	W-149	32.8		断面が長方形の板状で両木口を直立に削り落とす。中央に $\phi 5\text{cm}$ の柱のあたり痕が残る。	荒く割ったままの使用。	①板目材 ②スギ ③19本 ④3/cm
	X-5	16.8				
	P 8	3.6				
	コネド					
087	W-150	27.7		断面が長方形の板状で両木口を直立に削り落とす。中央に $\phi 8.6\text{cm}$ の柱のあたり痕が残る。	表面を木口から中央に向け断続的に削り込む。	①板目材 ②スギ ③25本 ④2/cm
	X-4	18.3				
	P 9	5.8				
	コネド					
088	W-143	27.0		断面が長方形の板状で両木口を直立に削り落とす。中央に $\phi 3.7\text{cm}$ の柱のあたり痕が不明瞭に残る。	同一方向へ断続的に削り込む。	①板目材 ②スギカ ③14本 ④5/cm
	Z-4	15.3				
	SD22	3.2				
	コネド					
089	W-148	(152.0)		断面が長方形の板状で一方の木口を内湾しながら狭め、もう一方を柄状に残し削り落とす。柄穴が2個ある。	内湾する端部はノミによる切断である。	①板目材 ②スギカ ③4本 ④4/cm
	M 3	9.0				
	SD11	2.0				
	アハシ・ハカサゴド					
090	W-151	150.0		断面が長方形の板状で両木口を荒く削り落とす。端部付近に $1.8\text{cm} \times 2.3\text{cm}$ (縄ズレがあり角が磨耗)、 $1.2\text{cm} \times 6.5\text{cm}$ 、もう一方に $1.0\text{cm} \times 5.0\text{cm}$ 、中央に $3.5\text{cm} \times 0.6\text{cm}$ 、 $2.5\text{cm} \times 0.7\text{cm}$ の柄穴が残る。	長側面端部を斜めに削り、同様な材と縄などでつなぎ合わせて使用したと思われる。	①板目材 ②スギ ③116本 ④6/cm
	C10・11	38.0				
	—	2.0				
	アハシ・チカサゴド					
091	W-165	152.4		断面が長方形の板状で両木口を直立に削り落とす。中央端部よりに $4.5\text{cm} \times 2.2\text{cm}$ の柄穴があるが縁辺部が欠損している。	ほぼ同一方向の断続的な削り込みを施す。柄穴の周辺は一部逆方向の削りがある。	①板目材 ②スギ ③8本 ④3/cm
	D10	(28.4)				
	—	4.1				
	アハシ・ハカサゴド					
092	W-205	96.0		断面が長方形の板状で両木口を直立に削り落とす。中央縁辺部に $1.0\text{cm} \times 2.3\text{cm}$ の柄穴がある。また、穿孔されている側の長辺を内湾気味に削ることから、同様の板材を結び合わせて使用したものと思われる。	全面に同一方向の削り痕が美しく残る。鉄刃使用と思われる。	①板目材 ②スギ ③31本 ④5/cm
	—	29.0				
	SD02	1.0				
	アハド					
093	W-155	(107.1)		断面が長方形の板状で一方の木口が直立に削り落とされているが、摩滅している。もう一方は欠損。端部に柄穴が2か所残る。	詳細は不明。	①板目材 ②スギ ③22本 ④3/cm
	—	15.0				
	SX08	2.4				
	—					

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
094	W-161 L 5 SD11 ロハサド	(81.0) 12.0 1.0		断面が長方形の板状で中央に長さ28cm、深さ6.5cmの抉りを持つ。両端部に向けて内湾し先端を短く削り落とす。	同一方向の断続的削りを施す。抉りは肩部より中央に向け削る。	①板目材 ②スギカ ③7本 ④6/cm
095	W-105 M 4 — コハシド	(75.0) 15.8 2.1		断面が長方形の板状で木口の一方を直立に削るか端部を欠損、もう一方は欠損。端部付近に柄穴(1.8cm×1.9cm)を一か所貫通させる。	詳細は不明。	①板目材 ②スギカ ③6本 ④4/cm
096	W-106 D 7 — —	(84.6) 13.7 2.3		断面が長方形の板状で、両端部を柄状に残して削り落とす。	ほぼ同一方向の断続的削りを施し柄状部は木口に向け削る。	①板目材 ②スギカ ③20本 ④4/cm
097	W-097 D10 — コネサスト	35.0 13.8 3.5		断面が長方形の棒状で木口の一方を板状に拡幅させ直立に削り、もう一方をなだらかに狭め直立に削り落とす。	木口から中央に向け断続的削りを施す。仕上げは荒い。	①心去り材 ②スギカ ③20本 ④4/cm
098	W-253 1トレ — —	(48.0) 12.7 5.6		断面が台形の厚板状で一方の端部を柄状に残して削り落とす。もう一方は中央部より緩やかに幅を狭め端部を荒く削り落とす。	一面はほぼ同一方向に削るがもう一面では不定位の削りを施す。	①心去り材 ②スギカ ③17本 ④3/cm
099	W-134 M 4 SD11 アハシド	56.3 14.1 1.8		断面がかまぼこ状の板材で一方の端部を丸く削り、もう一方を荒く削り落とす。	詳細は不明。	①板目材 ②スギ ③10本 ④7/cm
100	W-119 — SD02 ロハサド	(63.0) 15.5 3.0		断面がU字状の削り物である。木口の一方を底面より40°の角度で削り、もう一方は欠損。端部付近の上面に深さ8mmの抉りがあり、横木との接合を行ったと思われる。	端部付近上部の抉りに肩から中央に向け削り込む。裏面はほぼ同一方向の削りを施し木口は底部から上部に向け削り丁寧に仕上げる。	①心去り材 ②スギ ③48本 ④8/cm
101	W-164 A・B10 — アハシ・ハカサゴド	93.0 16.8 3.0		断面が長方形の板状で、木口の一方を直立に削り、もう一方は端部付近より緩やかに幅を狭めて削り落とす。	ほぼ同一方向に削り込まれているが一部反対方向に削る。	①板目材 ②スギカ ③16本 ④2/cm
102	W-158 L 3 SD11 ロハサド	98.6 11.4 1.2		断面が長方形の板状で端部縁辺部に1.5cm×0.5cmの柄穴を穿ちそこより幅を直線的に狭める。両木口とも欠損。	端部付近は木口に向け削り込む。	①板目材 ②スギカ ③4本 ④3/cm

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
103	W-087 C10 SD02 ロハサド	71.5 5.5 4.5		断面は台形の棒状で端部の一方は尖らせ、もう一方はくびれ端部を丸くおさめる。	削り方向は一定しているが削り角が不定かつ断続的である。	①心去り材 ②スギ ③15本 ④4/cm
104	W-068 — SD11 —	69.0 4.3 3.3		断面は方形の棒状で両端部付近をくびれさせ木口を直立に削り落とす。くびれ部に縄ズレ痕。	丁寧な仕上げ。	①心去り材 ②スギ ③12本 ④4/cm
105	W-086 E11 SD02 アハシ・ハ カサゴド	87.3 3.3 3.2		断面半円形の棒状で両端部付近をくびれさせる。完形品。	丁寧な仕上げ。	①心去り材 ②スギ ③8本 ④3/cm
106	W-067 M2 SD11 ハシ・ハサ ゴド	49.1 4.9 3.7		断面が円形の棒状で木口の一方は丸く削りもう一方は欠損。端部付近に2.3cm×2.3cmの柄穴を貫通させ中央部に柄穴と直角の方向にφ5mmの孔を貫通させる。	同一方向の断続的削りが施される。	①心去り材 ②スギ ③11本 ④4/cm
107	W-039 D10・11 SD02 アハシ・ハ カサゴド	(31.0) 3.8 3.6		断面が円形の棒状で直線的に幅を狭める。幅の広い側の木口は丸く摩滅しており付近に1.1cm×0.9cmの柄穴を穿つ。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④3/cm
108	W-162 — SD02 —	100.6 4.8 3.8		断面が円形の棒状で木口の一方は丸く削りもう一方を尖らせる。丸い木口の中に2.6cm×1.3cmの柄穴を穿つ。	両端部付近とも木口に向け削り中央は削り角・方向とも一定である。	①心去り材 ②スギ ③14本 ④5/cm
109	W-095 D10 — コネサド	108.0 8.2 4.2		断面が長方形の棒状で木口の一方の幅を狭め丸くおさめる。もう一方は欠損。中央付近に長さ5.5cm・深さ0.5cmの半月状の切り込み(焼きゴテによる)がある。	端部付近は木口に向け、それより内側は中央に向け削る。	①心去り材 ②スギ ③22本 ④6/cm
110	W-027 B5 SD04 アハシ・ハ カサゴド	(25.0) 5.6 2.3		断面が台形の厚板状で両木口は欠損。厚みが均一でない。また断ち割りの平坦面が残る。	同一方向に向け削り込まれており、より大きな部材の未加工品片か?	①心去り材 ②スギ ③14本 ④4/cm
111	W-001 L4 SD11 —	(19.5) 3.0 2.0		断面が方形の棒状で端部の一方に幅1.2cmの柄穴の一部が残るが欠損。もう一方は直立に削り落とす。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギ ③9本 ④5/cm
112	W-142 M3 SD11 ロハサ・ハ シゴド	(17.1) 5.7 3.0		断面が長方形の厚板状で両木口とも欠損。中央端部寄りに柄穴の肩を僅かに残す。断面が正方形の柱材が縦位に割れたように思われる。	平坦な面をつくり丁寧な仕上げ。	①心去り材 ②スギ ③12本 ④4/cm

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
113	W-029 D10 SD02 コネサド	27.5 3.7 3.4		断面が方形の棒状で端部付近から幅を広げ直立に削り落とす。拡張部に1.1cm×2.7cmの柄穴を穿つ。もう一方の木口は欠損。一面に焼け痕。	丁寧な仕上げである。	①心去り材 ②スギ ③6本 ④3/cm
114	W-091 — SD02 —	(83.6) 5.3 2.3		断面が長方形の厚板状で両木口とも欠損。中央端部寄りに2.0cm×1.5cm, 1.2cm×1.7cmの柄穴が2か所残る。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギカ ③17本 ④8/cm
115	W-063 M 4 — アハシ・ハ カサゴド	(54.2) 10.2 1.7		断面が長方形の板状で木口の一方を直立に削り落としもう一方は欠損。中央に2か所、端部寄りに2か所の柄穴がありそれぞれ0.9cm×1.7cm, 1.1cm×1.8cm, 0.9cm×1.5cm, 1.2cm×1.7cmを測る。	詳細は不明。	①板目材 ②スギカ ③27本 ④6/cm
116	W-116 M 4 — コハン・サ ゴド	(44.7) 8.6 2.5		断面が長方形の厚板状で両木口に幅の広い(5.7cm, 6.1cm)柄穴を持つが欠損している。	同一方向の幅広い削りがわずかに残る。	①板目材 ②スギ ③6本 ④2/cm
117	W-055 C11 SD02 コネサド	39.6 5.8 2.0		断面が長方形の厚板状で木口の一方を平面から見て35°に削り落とし、もう一方は欠損。中央にφ2mmの釘穴が3か所直線的に並ぶ。また1.4cm×1.2cmの柄穴が貫通する。	平坦な面を持ち丁寧な仕上げである。	①板目材 ②スギカ ③4本 ④3/cm
118	W-082 L・M5 SD11 ハシド	15.5 7.2 2.0		断面が長方形の厚板状で木口の一方を直立に荒く削り落としもう一方は欠損。中央端部寄りに1.5cm×2.2cmの柄穴を穿つ。全面に焼け痕。	削り角, 方向とも一定で丁寧な仕上げである。	①板目材 ②スギ ③9本 ④6/cm
119	W-064 E11 SD02 アハシ・ハ カサゴド	(49.9) 8.9 7.1		断面が六角形の棒状で端部の一部を両面から削り込み楔状に尖らせる。もう一方は欠損。	木口付近は同一方向の端部へ向かう削りが施されている。	①心去り材 ②スギ ③8本 ④3/cm
120	W-021 B10 SD02 ハカサド	38.8 6.5 4.8		断面が方形の棒状で直線的に幅を狭め一端を尖らせる。もう一方は欠損。	尖端部に向け断続的に削り込まれるが一部自然面が残る。	①心去り材 ②クリ ③13本 ④3/cm
121	W-085 — — —	(38.3) φ4.0		断面四角形の棒状で先端を尖らせる。もう一方は欠損。	鉄製工具による削りと考えられる。	①心去り材 ②スギ ③9本 ④3/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
122	W-058 2トレ — —	25.8 4.1 3.6		断面が円形の棒状で直線的に幅を狭め一端を尖らせる。もう一方は木口を丸く削る。	先端部に向け断続的に削り込まれるが削り方向がやや不定。	①心去り材 ②クスギ ③3本 ④3/cm
123	W-043 N 2 — アハシド	33.9 7.1 6.0		断面が円形の棒状で樹皮部分を残す。中央より幅を狭め一端を尖らせる。もう一方は直立に削る。	先端部に向け4面の面取りをし連続的に削り込む。	①心去り材 ②二葉松 ③10本 ④4/cm
124	W-059 N 1 — —	36.4 φ6.8		断面が円形の棒状で中央より幅を狭め一端を尖らせる。もう一方は木口を丸く削る。	先端部に向け4面の面取りをし断続的に削り込む。	①心持ち材 ②二葉松 ③13本 ④3/cm
125	W-077 E 13 — コネサスド	58.0 12.5 2.0		断面が長方形の厚板状で木口の一方を直立に削り、もう一方は段をつけ幅を狭め、木口を直立に削る。約60°の角度でφ4mmの穴を二列にそれぞれ9個、8個ずつ直線的に並べる。9個穿孔する列の端部付近に鋸釘が打ち付けられていたらしい穴が1か所ありサビが浮いている。	長辺方向の端部付近は端部に向けて削る。	①板目材 ②樹種不明 ③— ④—
126	W-140 B 10 SD02 アハシ・ハ カサゴド	(24.6) 11.7 2.0		断面が長方形の厚板状で木口の一方を直立に削る。もう一方は欠損。端部付近に長径3mmの釘穴(?)が2か所残る。	詳細は不明。	①板目材 ②二葉松 ③27本 ④5/cm
127	W-156 D 11 SD02 サド	36.6 13.7 1.1		断面が長方形の板状で木口の一方を直立に削る。もう一方は欠損。表面にはほぼ等間隔にφ1mmの穴が100個弱穿たれる。また木口に近い横2列の穴はφ3~4mmと他より大きい。	表面及び長側面にヤリガンナ成形痕が残る。	①板目材 ②スギ ③5本 ④5/cm
128	W-174 Q 5 — コネド	(11.0) 6.0 1.7		断面倒卵形で把縁部に広端部を向かい合わせた形態である。	きわめて丁寧なつくり。	①心去り材 ②カエデ属 ③— ④—
129	W-275 C・D — コハネド	(5.9) 4.5 2.9		断面が楕円形の棒状で木口の一方を拡幅させ丸く削る。もう一方は欠損。長軸方向に1.2cm×0.4cmの柄穴が貫通する。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギ ③17本 ④6/cm
130	W-080 L 3 SD11 ロハサド	(14.0) 4.1 2.2		断面が長方形の棒状で端部の一方は幅を拡げ木口を丸く削る。もう一方は欠損。	拡幅部は木口から中央に向け削り込まれる。	①心去り材 ②スギ ③25本 ④8/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
131	W-128 E11 SD02 アハシ・ハ カサゴド	54.5 8.2 1.2		断面が長方形の板状で木口の一方を直立に削りもう一方を荒く削り落とす。また全体に短辺方向へ反っている。	木口付近は端部に向け同一方向に削り込む。	①板目材 ②スギ ③5本 ④4/cm
132	W-252 — SD02 —	51.7 22.2 3.2		断面が長方形の板状で木口の一方を直立に削るがもう一方は欠損。全体に凹凸が激しい。一面に焼け痕。	直立に削る木口へ向けやや不定方向の荒い削りが施される。	①板目材 ②スギ ③11本 ④4/cm
133	W-153 C10 SD02 ニハサド	38.1 6.2 1.7		断面が長方形の板状で両木口を丸く削る。中央に幅1.2cm・深さ0.3cmの溝を削り込む。	端部は木口方向に削り込まれ、中央の溝は両肩部より掘り込まれる。	①柁目材 ②スギ ③19本 ④4/cm
134	W-060 B10 SD02 アハシ・ハ カサゴド	31.6 7.7 1.9		断面が長方形の板状で木口の一方は直立に削られるがもう一方は柄状に幅を狭め欠損。組材の一部か。	長辺方向の端部付近に深さ4mmの段差を全長にわたりにつくる。	①板目材 ②スギ ③6本 ④5/cm
135	W-022 D11 SD02 —	18.8 6.8 1.1		断面が長方形の板状で平面形は三日月形を呈する。木口の一方は面取りをして削り落としもう一方は欠損。中央にM形の突出がある。また焼き火箸によるとと思われる線刻が施されており漆による文様が描かれていたと思われる。	周囲は丁寧に面取りされており仕上がりが美しい。装飾品の破片か？	①板目材 ②スギ ③13本 ④3/cm
136	W-108 M4 — コハシ・サ ゴド	15.2 7.1 1.0		断面が長方形の板状で木口の一方を50°に削り落としもう一方は欠損。片側にのみ削り痕が顕著に残る。	一面は不定位の削りが全面施されている。	①板目材 ②スギ ③17本 ④5/cm
137	W-081 — SD02 —	17.2 16.3 2.7		断面が長方形の板状で木口の一方をほぼ直立に削りもう一方を頂角70°に削り落とす。	平坦な面をつくり丁寧な仕上げ。	①板目材 ②スギ ③34本 ④5/cm
138	W-130 M4 — コハシ・サ ゴド	(25.0) 7.3 2.8		断面が長方形の厚板状で木口の一方を荒く削り落としもう一方は欠損。両面に削り痕が顕著にみられる。	同一方向に幅の広い断続的削りが全面施される。	①板目材 ②スギ ③14本 ④4/cm
139	W-002 — D11 コハネシド	(24.1) 12.0 3.4		断面がかまぼこ状の板材で木口の一方を荒く削り落としもう一方は丸く削る。弧状面に削り痕が顕著に残る。	弧状面は全面同一方向の削り。より長大な板材の端部を二次的に使用したものである。	①板目材 ②スギ ③— ④—

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
140	W-004 D11 — コハネシド	11.5 8.6 3.6		断面が三角形の板状で両木口を直立に削りノミ痕が顕著に残る。端部付近に幅4.3cm、長さ1.4cmにわたり突出部を削り出す。	全面にノミによる削り痕が顕著にみられる。	①板目材 ②スギ ③25本 ④7/cm
141	W-278 D 6 — カネド	15.2 7.5 2.6		断面が長方形の板状で端部の一方を直立に削りもう一方を荒く削り落とす。端部付近で幅を拡げ縄ズレ痕を残す。また中央に幅3mm、深さ2mmの溝が残る。	中央を木目走行方向と直角に抉る。仕上げは悪い。	①板目材 ②スギカ ③18本 ④5/cm
142	W-274 E 7 — アチカド	14.7 5.4 4.9		断面が隅丸方形の厚板状で木口の一方を荒く削り中央より約1/2幅を狭めて端部へと続く。もう一方は丸く削り落とす。	他の組材との接合面を丁寧に面取りしているが他は成形が悪い。	①板目材 ②スギカ ③15本 ④4/cm
143	W-121 C10 SD02 カサド	16.5 7.7 2.9		断面が隅丸長方形の厚板状で木口の一方は楔状に削り落としておりもう一方は欠損。	木口面の加工が丁寧である。鉄器使用か?	①板目材 ②スギ ③12本 ④6/cm
144	W-277 D10・11 SD02 ニハサド	34.0 8.5 5.5		断面が方形の棒状で木口の一方は直立に削りもう一方は欠損。中央を大きく抉る。	全面を鉄器による荒い削りにより成形。	①心去り材 ②樹種不明 ③14本 ④3/cm
145	W-287 L 3 SD10 —	15.4 13.0 6.3		断面が台形の厚板状で木口の一方を直立に削りもう一方を荒く削り落とす。一面はノミのあたり痕が多量に残る。	仕上げが非常に荒い。他の木製品を製作する際生じた木取り片か。	①柱目材 ②樹種不明 ③48本 ④4/cm
146	W-295 D 6 — —	11.0 8.1 5.4		断面が扇状の丸太材片で木口の一方は荒く削り落とすがもう一方は欠損し焼け痕が残る。	表皮をはがしたのみの成形。	①心去り材 ②樹種不明 ③24本 ④6/cm
147	W-264 B 7 — コハネシド	45.4 2.3 2.0		断面が隅丸方形の棒状で木口の一方をなだらかに尖らせもう一方は欠損。	尖端部に向け荒い断続的削りを施す。	①心去り材 ②スギカ ③7本 ④4/cm
148	W-256 D10 SD02 ハカサド	40.2 2.2 1.2		断面が菱形の棒状で木口の一方を50°に削り落としもう一方は欠損。	ほぼ同一方向に連続的削りを施しているが仕上がりは悪い。	①心去り材 ②スギカ ③5本 ④5/cm
149	W-259 E 4 — コネド	(39.2) 1.4 1.2		断面が隅丸方形の棒状で木口の一方を剣状に削り上げもう一方は欠損。	剣状の端部に向かい同一方向に削り込んでいるが削り角が不定。	①心去り材 ②スギカ ③5本 ④5/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
150	W-255 M 5 — コハシド	33.9 1.9 1.2		断面が長方形の棒状で木口の一方を40°に削り落としもう一方の幅を広げ丸くおさめる。全体に弓状に反っている。	削り角・方向とも一定で平坦な面をつくり丁寧な仕上げ。	①心去り材 ②スギカ ③10本 ④10/cm
151	W-257 L4・5 SD11 ハシ・サゴド	(29.8) 1.9 1.2		断面が台形の棒状で一方の端部に向かって直線的に幅を狭め、木口を楔状に削る。もう一方は柄状突起を削り残す。中央に細い凹みが多量に残る。	柄状部からもう一方の端部に向け断続的に削る。	①心去り材 ②スギカ ③4本 ④4/cm
152	W-260 E 6 — コネサスト	25.6 1.4 1.2		断面が台形の棒状で一方の端部に向かって削り出し、楔状に仕上げる。	尖端部は片方に削り出す。	①心去り材 ②スギカ ③10本 ④9/cm
153	W-115 B10 SD02 アハシ・ハカサゴド	25.9 1.8 1.3		断面が隅丸方形の棒状で木口の一方を剣状に尖らせもう一方は欠損。全面に焼け痕。	尖端部は木口に向け削り込む。	①心去り材 ②スギ ③8本 ④7/cm
154	W-289 1トレ — —	35.5 2.6 1.9		断面が長方形の棒状で木口の一方を丸く削る。またこちら側を握ったか、あるいは柄に差し込んだか摩滅してやや径を減らす。もう一方は欠損。	丁寧な仕上げである。	①心去り材 ②スギ ③7本 ④5/cm
155	W-288 D11 SD02 1~4層	26.7 2.8 1.7		断面が楕円形の棒状で木口の一方を荒く削り落としもう一方は欠損。	表面は荒く削り込まれ仕上がりは悪い。	①心去り材 ②スギ ③8本 ④5/cm
156	W-284 M・L4 SD11 ロハサド	20.5 2.5 2.2		断面が円形の棒状で木口の両方を荒く削り落としている。	表面は断続的に削られ仕上がりは悪い。	①心去り材 ②スギ ③8本 ④5/cm
157	W-269 M 4 SD10 アハシド	31.3 2.0 1.5		断面が菱形の棒状で木口の一方を丸く削りもう一方は欠損。一面に長軸と直角の方向に削り痕が多く残る。	鉄器によると思われる丁寧な成形である。	①心去り材 ②スギ ③19本 ④11/cm
158	W-266 M 4 — アハシド	(28.3) 2.5 2.0		断面が隅丸方形の棒状で木口の一方を丸く削りもう一方は欠損。端部周辺に焼け痕。	詳細は不明。	①心去り材 ②スギカ ③6本 ④4/cm

図版 番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
159	W-265 L 3 SD11 ロハサド	(26.2) 2.4 1.2		断面が三角形の板状で木口の一方を 両側方から尖らせているが先端は欠 損。もう一方は欠損。両面に小さな 凹み(石粒の圧痕による)が残る。	先端は木口に向け 削り込まれる。	①心去り材 ②スギカ ③10本 ④6/cm
160	W-263 M 3 SD11 アハシ・ハ カサゴド	20.7 1.5 1.3		断面が丸から四角形で、棒状に削り 出し、一方は欠損する。	中央を丸く、端部 を四角に削る。	①心去り材 ②スギカ ③5本 ④4/cm
161	W-160 O 2 — ハカシ・サ ゴド	47.5 5.0 3.0		断面が台形の厚板状で両木口を荒く 削り落とす。	仕上げは悪い。	①心去り材 ②スギカ ③19本 ④9/cm
162	W-098 — SD02 —	(56.4) φ2.9		断面が円形の棒状で両木口とも欠損 しているが先端部片であると思われ る。	先端部と思われる 方向へ断続的に削 り込まれる。	①心去り材 ②スギカ ③6本 ④4/cm
163	W-096 — SD02 —	61.5 2.8 2.2		断面が円形の棒状で一方の木口を欠 損する。	比較的丁寧に仕上 げている。	①心去り材 ②スギカ ③ — ④ —
164	W-093 E11 — アハシ・ハ カサゴド	(61.7) 2.3 1.1		断面が長方形の棒状で木口の一方を 楔状に鋭く削り込み、もう一方は欠 損。	四周を丁寧に平坦 な面に仕上げ木口 は先端に向け削る。	①心去り材 ②スギ ③ — ④ —
165	W-159 L 2 SD11 ロハサド	(71.5) 4.4 3.0		断面が長方形の板状で木口の一方を 楔状に削り落としもう一方は欠損。 長辺縁辺部の一方はほとんど欠損。 一面に削り痕が顕著に残る。	楔状木口は先端に 向け削られ全体に 木口方向に断続的 に削られる。	①心去り材 ②スギカ ③ — ④ —
166	W-103 E10 SD02 オカサド	(82.8) 5.0 3.0		断面が長方形の板状で木口の一方を 45°に削りもう一方は直立に削り落 とす。一面は全長にわたって幅8mm の木目に沿った剝離がみられる。	先端部は木目方向 に削り込まれるが もう一方の木口は 中央に向け削られ る事から二次使用 のため切断された と思われ、丁寧に 仕上げである。	①心去り材 ②スギカ ③4本 ④2/cm
167	W-133 D 7 — コハネド	(101.0) 7.6 4.4		断面が長方形の棒状で端部の一方を なだらかに尖らせる。もう一方は欠 損しており口に焦げ痕が残る。	先端部は木口方向 に削り込まれるが もう一方は木口に 向かうもの、その 逆のもの、と2方 向に分かれる。	①心去り材 ②スギカ ③29本 ④5/cm

図版番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	形 態	技 法	備 考
168	W-163 D10・11 SD02 ニハサド	(131.1) φ3.2		断面が五角形の棒状で木口の一方を楔状に削りもう一方を直立に削り落とす。	端部は木口方向に削り込み全体に丁寧な仕上げである。	①心去り材 ②スギカ ③9本 ④4/cm
169	W-157 C10・11 — アハシ・ハカサゴド	114.0 3.4 2.4		断面が長方形の棒状で木口の一方を尖らせもう一方を直立に削り落とす。中央が湾曲している。	平坦な面を造り丁寧な仕上げであるが先端部は不定位の細かい削り。	①心去り材 ②スギカ ③14本 ④9/cm
170	W-147 X-5 — コネド	台24.5 (9.0) (1.5) 歯15.5 3.8 9.5		(台部) 平面形は楕円形であるが前部を欠損。裏面はかまぼこ状に膨らんでおり、前部の方が厚みは薄い。鼻緒はφ1.3mmの穴にはほぼ同径の楔を共に差し込み固定したと思われる。(歯部) 木口が楕円形で立面を台形とし接地部に向かって薄くなる。後歯のみ残存。	裏面の端部は木口方向に削り込む。他の詳細は不明である。側面に幅4mmの平滑な磨き面が残る。	①心去り材 ②スギ ③52本 ④7/cm

写 真 番 号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	備 考	写 真 番 号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	全長 全幅 全高	備 考
P-102 8	W-008 E-5 — コハシド	32.5 2.0 1.0		①板目材 ②スギ ③— ④—	P-104 26・27	W-107 M-4	27.0 4.2		①柁目材 ②ムクロジ ③— ④—
P-102 5	W-018 M-4 — アハシド	15.5 6.5 3.5		①板目材 ②スギ ③— ④—	P-104 25	W-110 B-10 SD02 アハシ・ア カサゴド	29.5 11.0 2.4		①板目材 ②カシ類 ③— ④—
P-104 23	W-035 M-4 SD10 アハシ・ハ カサゴド	27.5 18.1 2.0		①心去り材 ②カシ類 ③— ④—	P-103 11	W-144 — SX08 —	16.2 4.1 2.6		①心去り材 ②クリ ③— ④—
P-105 29~31	W-040 L・M3 SD10 アハシド	17.6 4.6 0.8		①柁目材 ②ケヤキ ③— ④—					
P-103 18	W-094 M-2	47.0 φ8.0		①心持ち材 ②コナラ ③— ④—					
P-104 19・20	— アハシ・コ ネゴド								

付表 10 第2次調査出土遺物観察表(玉類・石器)

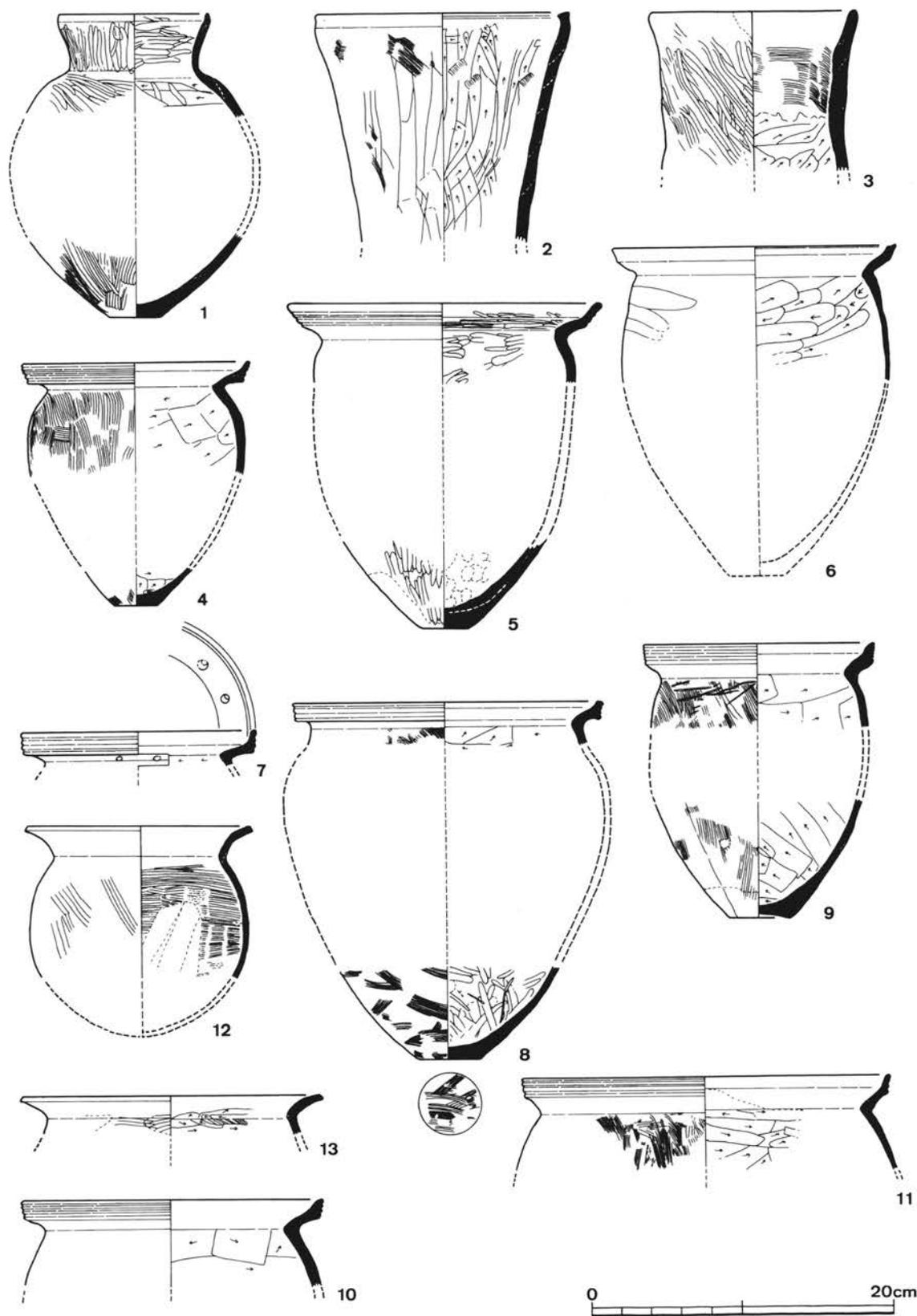
図版番号 製品名	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
管 玉 1	S-26 D11 SD02 カサド	1.7 φ0.5 1.0g		碧玉	未製品。円筒部を7面に渡り研磨している段階の半製品である。この段階では未穿孔である。	
石 核 2	S-20 Q5 — ハサド	3.2 2.0 1.3 10.0g		碧玉 明赤褐色 ～乳灰色	原石(コア)。玉生産に使用されるため集落内に持ち運ばれたもの。原石を打ち割った段階のもので自然面は留めていない。	
石 核 3	S-25 D11 SD02 カサド	4.5 3.0 2.7 51.0g		碧玉	原石(コア)。玉生産に使用されるため集落内に持ち運ばれたもの。長軸の側面に2条の擦切痕がみられる。暗緑色で一部に自然面を残している。	
石 核 4	S-21 D3 SD04 コネサド	2.2 1.6 0.8 3.0g		水晶 (石英) 透明度が 高い	原石(コア)。玉生産に使用されるため集落内に持ち運ばれたもの。原石を打ち割った段階のもので自然面は留めていない。	
石 核 5	S-24 M2 SD11 ニハサド	2.2 1.8 1.2 8.0g		水晶 (石英) 極めて透 明度が高い	原石(コア)。玉生産に使用されるため集落内に持ち運ばれたもの。原石を打ち欠いた段階のもので、打ち欠いた時の打点の方向やフィシャーが顕著に認められる。	
石 核 6	S-22 C9 SD02 コネサド	2.1 1.5 1.0 4.0g		石英 レキ? 薄茶色を 帯びる	表面の風化が進んでいる。河川からの表探か。	
剥 片 7	S-23 E4 — コネサド	3.7 2.75 1.6 15.0g		瑪瑙 (= メノウ)	原石(コア)。玉生産に使用されるため集落内に持ち運ばれたもの。原石を打ち割った段階のもので剥離痕や打撃痕を明瞭に留める。	
打製石斧 未製品 8	S-01 D4 SD04 コネド	(7.0) 6.4 1.6 119.0g		砂岩 極細粒砂	頂部が欠損し、下半部の1/2が残存する。一部磨製の打製石斧である。自然面を残し、刃部は使用による剥離がみられる。扁平な河原等の石を利用し、周縁に調整を加え、さらに磨き整形をしたように思われる。磨きは全面に及んでいない。	
打製石斧 未製品 9	S-02 — SD12 サド	7.5 5.4 1.5 62.0g		石英安山 岩	ほぼ完形。頂部から刃部にむかって広がる撥形を呈する。両面とも初期の剥離面を残し、周縁をやや細く調整剥離しているが、全体には粗い作りである。刃部は摩滅し、鈍角を呈する。下半部及び剥離による稜の部分に認められる摩滅は、製品の使用によるものと考えられる。	
打製石斧 10	S-04 N4 — コハシド	8.1 (2.3) 1.8 32.0g		砂岩 極細粒砂	蛤刃石斧か? 側縁に平行して節理している。原形は撥形か? 敲打剥離が細かく調整されている。刃部は両刃に成形している。全体に摩滅が著しく、軟質である。	
磨製扁平 片刃石斧 11	S-03 C4 SD04 アハシ・ハ カサゴド	(5.8) 7.2 1.45 128.0g		砂岩 細粒砂	刃部下半部のみ残存。製作時における磨きは、残存する各面とも、刃部に対して平行する方向に施している。刃部端裏面では、斜め方向の磨きを施している。刃部端は全体に摩滅し、裏面には使用のための破損が認められる。	

図版番号 製品名	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
砥 石 12	S-05 C11 SD02 コネサタド	(8.1) 4.2 2.7 98.0 g	砂質泥岩 砂は極砂 粒砂質で ある。	角礫の平面を砥石として使用したもの。5面に使用面がある。各面には鋭利なものを研いだと思われる溝が顕著に残っている。		
砥 石 13	S-06 M5 SD11 コネサスド	(7.8) (6.0) 3.1 219.0 g	砂岩 細粒～極 細粒砂	残存面3面に使用痕が顕著である。平面の裏表中央にアバタ状の凹みがあり、砥石として使用したことが考えられる。		
砥 石 14	S-07 O3 — コネサスド	(5.4) 2.1 2.6 50.0 g	花崗岩質 アブライ ト	両端欠損。断面4角形で、4面とも縦方向の使用痕が顕著に認められる。使用頻度が高く、使用時の中央付近と考えられる部分は、各面が摩滅して全体が細くなっている。		
砥 石 15	S-27 N5 — コネサド	4.7 4.8 1.8 47.0 g	砂質泥岩 ～砂質砂 岩	平面台形状、厚さ1.8cmの扁平な石である。使用面の摩滅は比較的少ない。		
敲 石 16	S-13 E5 — コハイド	7.3 4.7 3.5 205.0 g	安山岩 溶岩?	楕円形の河原石を利用。包含している鉱物質が風化して軽石状になっている。全体に擦痕が認められる。側面の摩滅は特に顕著で、長軸に対して斜め方向の擦痕が残る。		
磨き石? 17	S-18 C7 — コハイド	4.2 3.6 3.1 12.0 g	浮岩 (軽石= パミス)	使用用途は不明。全体に磨かれており、卵形を呈する。短軸方向に3条の切り目が認められる。		
擦 石 18	S-10 L3 SD11 ハカサド	8.4 5.5 3.1 232.0 g	凝灰質砂 岩?	扁平で楕円形の河原石を利用。表面中央に右下がりと右上がりの擦痕が顕著で、全体に磨耗が顕著である。		
敲 石 19	S-08 E11 — コネサスド	13.2 4.5 3.3 379.0 g	安山岩 溶岩?	長楕円形の河原石を利用。先端は上下とも磨耗が著しく、打撃痕と考えられる。側面は手擦れのためか平滑で、たいへん握りやすい状態になっている。		
敲 石 20	S-12 D5 — —	10.6 3.2 2.3 110.0 g	砂岩?	河原石を利用。原石打割用のハンマーストーン。下位両側面にコッコツと敲かれたアバタ状の敲打痕を留める。先端部の貝殻状剝離痕は先端部で強い打撃により生じたものである。		
敲 石 21	S-11 N3 — アハシド	(6.8) 7.5 3.4 265.0 g	安山岩 溶岩?	扁平で楕円形の河原石を利用。1/2破損。敲打痕が全周にわたり、向かって右側面には顕著な敲打痕が認められる。その他の部分では比較的軽微。		
敲 石 22	S-9 B10～11 SD02 タチワリ	13.0 5.2 4.5 504.0 g	凝灰質砂 岩?	長楕円の河原石を利用。先端は上下とも磨耗が著しい。側面は平滑で、表面中央が凹んでおり、磨耗痕が顕著である。		
敲 石 23	S-14 N3 — コネサド	15.8 10.8 5.0 1,570 g	安山岩	扁平で楕円形の河原石を利用。上下端部は、強い敲打痕を顕著に残し、断面が平らになっている。平面裏表中央には、コッコツ敲かれたアバタ痕を留める。周縁部には摩滅痕が認められる。		

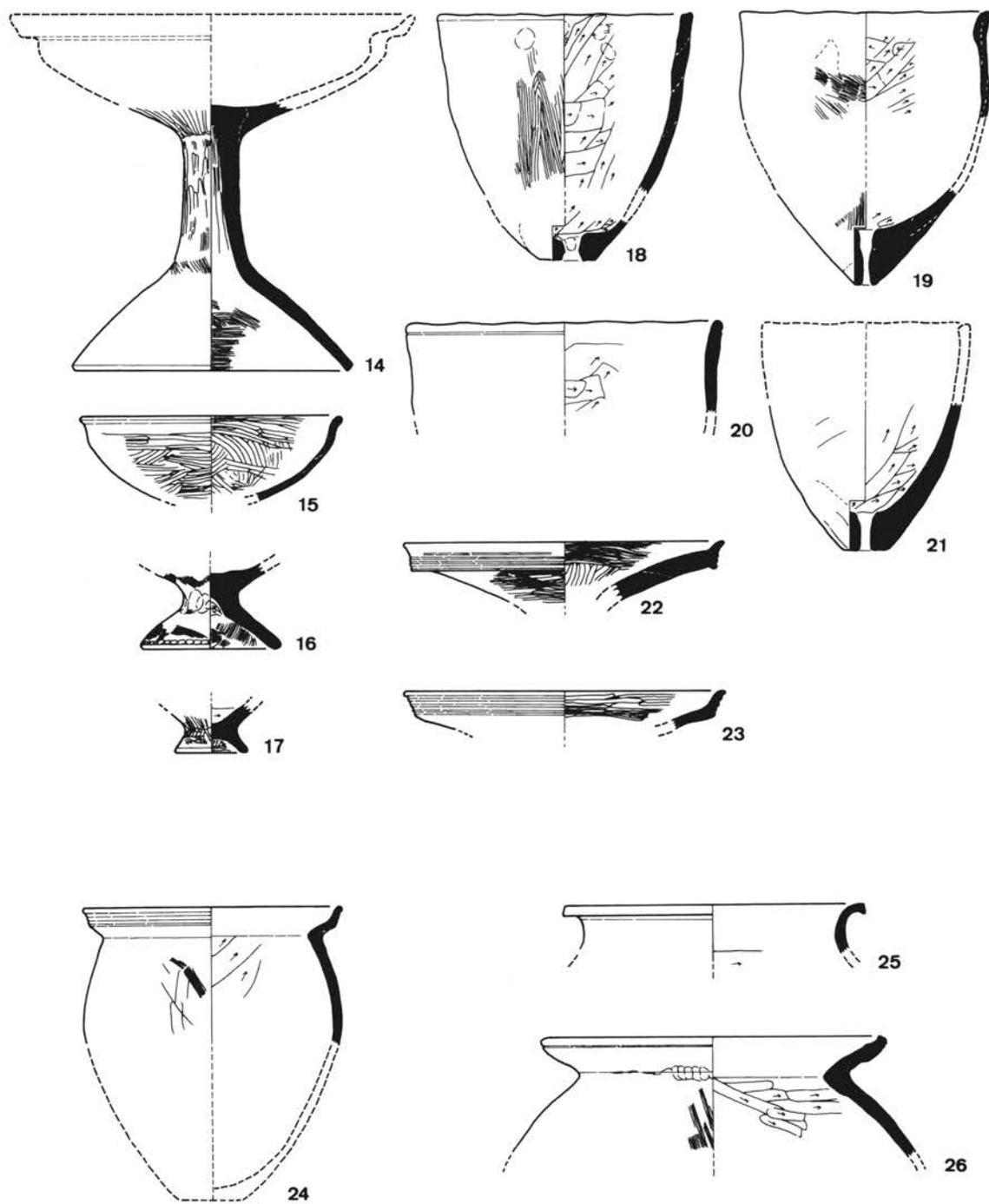
図版番号 製品名	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
24 敲石?	S-229 E9・10 — コネサド	14.8 7.2 6.1 917.0g		砂岩	長胴で、先端から下方にかけてやや広がる台形を呈する。全面に擦り痕が顕著に認められ、表裏面に打撃痕が認められる。	
25 台石	S-15 M4 SD11 アハン・サゴド	13.2 12.0 4.0 958.0g		花崗岩	風化した露頭の石を利用。平面台形状、厚さ4cm程度の平らな石で、表面が摩滅している。周縁は未加工である。	
26 剥片	S-32 L・M5 SD11 ニハサド	6.4 2.8 1.9 36.0g		碧玉	原石(コア)。玉生産に使用されるため集落内に持ち運ばれたもの。原石を打ち割った段階のもので自然面は留めていない。	
27 剥片	S-36 L・M5 SD11 ニハサド	2.3 1.9 0.7			剥片(フレイク)である。原石を打ち割った段階のもので剥離痕や打撃痕を明瞭に留める。	
28 剥片	S-37 L・M5 SD11 ニハサド	2.5 1.7 0.9 2.0g		碧玉	剥片(フレイク)である。原石を打ち割った段階のもので剥離痕や打撃痕を明瞭に留める。	
29 剥片	S-67 — SD12 アハド	4.8 2.3 1.6 11.0g		凝灰質泥岩	剥片(フレイク)である。原石を打ち割った段階のもので剥離痕や打撃痕を明瞭に留める。	
30 剥片	S-63 D5 — コネサタド	2.8 3.5 0.4		碧玉?	剥片(フレイク)である。原石を打ち割った段階のもので剥離痕や打撃痕を明瞭に留める。	
31 剥片	S-35 L・M5 SD11 ニハサド	3.1 2.9 0.8 10.0g		チャート? or 酸性岩	剥片(フレイク)である。原石を打ち割った段階のもので剥離痕や打撃痕を明瞭に留める。	
32 削器?	S-227 Q4 — コネサタド	5.2 3.5 0.8 13.0g		碧玉	やや大型の剥片を利用し一部に刃をつけて削器として利用したものか。調整は刃部のみに限られている。	
33 磨き石	S-16 C6 — コハイド	5.2 5.3 4.1 18.0g		浮岩 (軽石= パミス)	遺跡の周辺地域に露頭があるためか、数多く出土している。使用用途は不明。短軸方向に長さ3.5cm・幅3.0mmの鋭い切り目が認められる。	
34 磨き石	S-17 M4 SD11 タチワリ	8.0 5.0 3.3 21.0g		浮岩 (軽石= パミス)	使用用途は不明。面取りで全体の形を整えている。表と裏に3条の切り目が認められる。	
35 磨き石	S-19 D7 — コハイド	4.8 4.2 4.0 18.0g		浮岩 (軽石= パミス)	使用用途は不明。面取り成形した中央の短軸方向に2条の切り目が認められる。	

図版番号 製品名	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法 量 cm	長さ 幅 厚 重量	石 材	特 徴	備 考
一 砥 石	S-28 N 5 — コネサド		4.8 3.4 1.5 34.0 g	砂質泥岩	断面四角形で、その内二面が使用面。他の二面は破損面である。使用頻度は高く、摩滅は著しい。	
一 砥 石	S-29 B10 SD02 アハシ・ ハカサゴド		7.2 4.4 1.1 26.0 g	砂質泥岩 砂は極細 粒砂質	使用面に対して縦方向に破断面をもつ。元の厚さ4.0cmの砥石の表裏二面を留める。使用頻度は比較的低い。	
一 砥 石	S-30 D10 SD02 ニハサド		3.6 2.9 0.7 10.0 g	泥岩	使用面に対して縦方向に破断面をもつ。使用面一面が残り、鋭利な刃線痕状の窪みが認められる。	
一 砥 石	S-33 L・M 5 SD11 ニハサド		8.0 4.3 3.5 137.0 g	砂岩 細粒砂	両端欠損。断面四角形で、四面とも縦方向使用痕が顕著に認められる。使用頻度が高く、中央付近が摩滅しており全体が細くなっている。	
— —	S-38 L・M 5 SD11 ニハサド		3.8 1.0 1.0 0.8 g	チャート ? or 酸 性岩	剥片(フレーク)である。原石を打ち割った段階のもので剥離痕や打撃痕を明瞭に留める。	
一 敲 石	S-46		8.6 4.3 4.1 223.0 g	安山岩	扁平で楕円形の河原石を利用。約2/3破損。包含している鉱物質が風化して軽石状になっている。	軟質
一 敲 石	S-49 C 4 — コネド		7.5 5.8 3.5 140.0 g	花崗岩	扁平で楕円形の河原石を使用。約2/3破損。使用面が一部に残る。使用面の摩滅が著しい。	硬質
一 磨 き 石	S-55 M・L 4 — ロハサ・ アハシゴド		4.2 3.1 3.2 9.0 g	浮岩 軽石 アブライ ト	使用用途は不明。全体に磨かれており、卵形の2/3を破損。	
一 磨 き 石	S-58 O~R SD12 アハシド		4.2 3.5 1.6 5.0 g	軽石 アブライ ト	使用用途は不明。扁平で楕円形に磨かれており、一部破損。	
一 剥 片	S-66 — SD12 アハド		6.2 3.8 2.0 41.0 g	砂質泥岩	剥片(フレーク)である。原石を打ち割った段階のもので剥離痕や打撃痕を明瞭に留める。	
一 敲 石 ?	S-228 M 4 — コネサド			砂岩	円筒形の河原石を使用。下半部を破損。先端部に使用面が残る。使用面の摩滅が著しい。	

圖 版

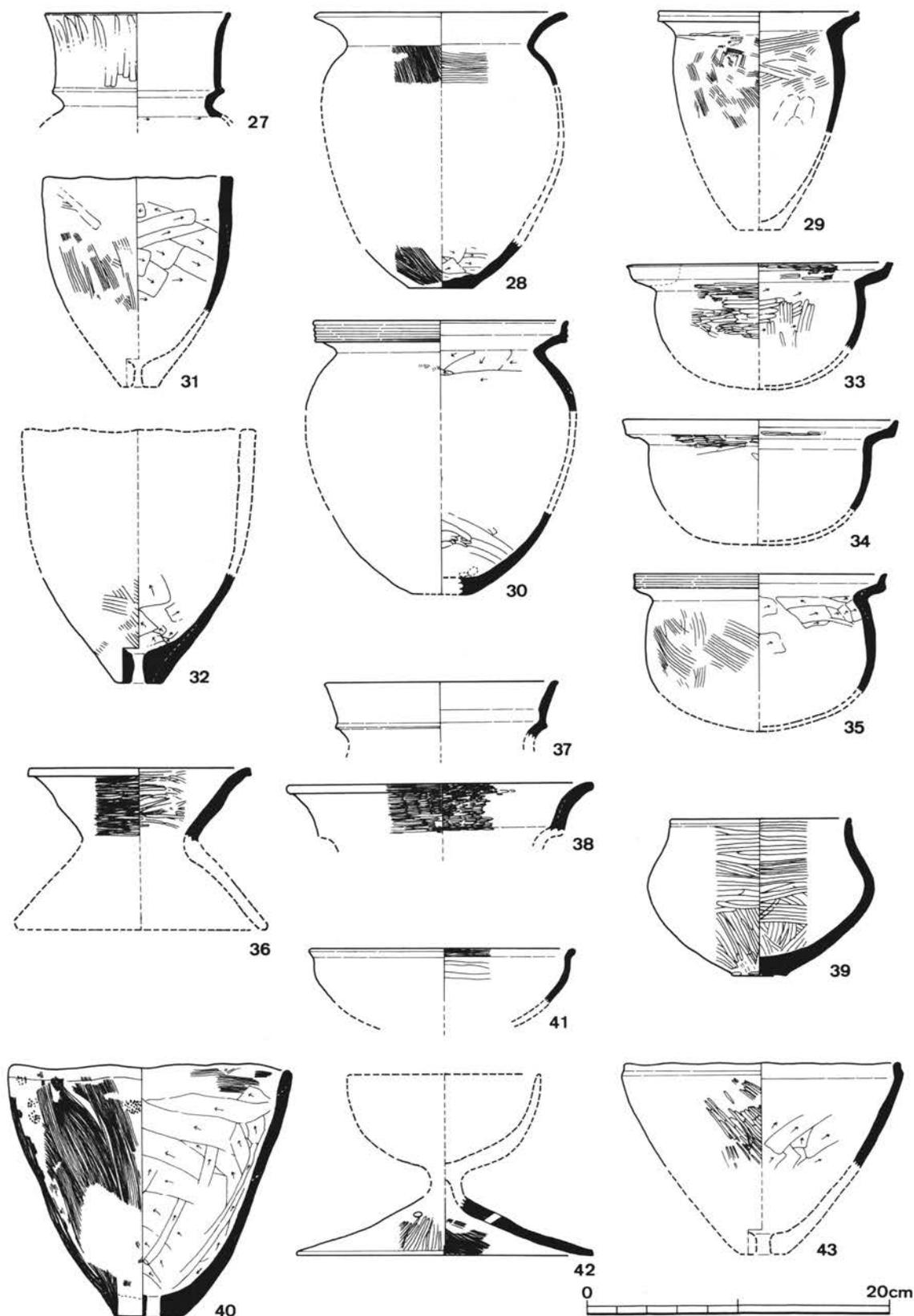


第2次調査溝S D04出土土器実測図(1)

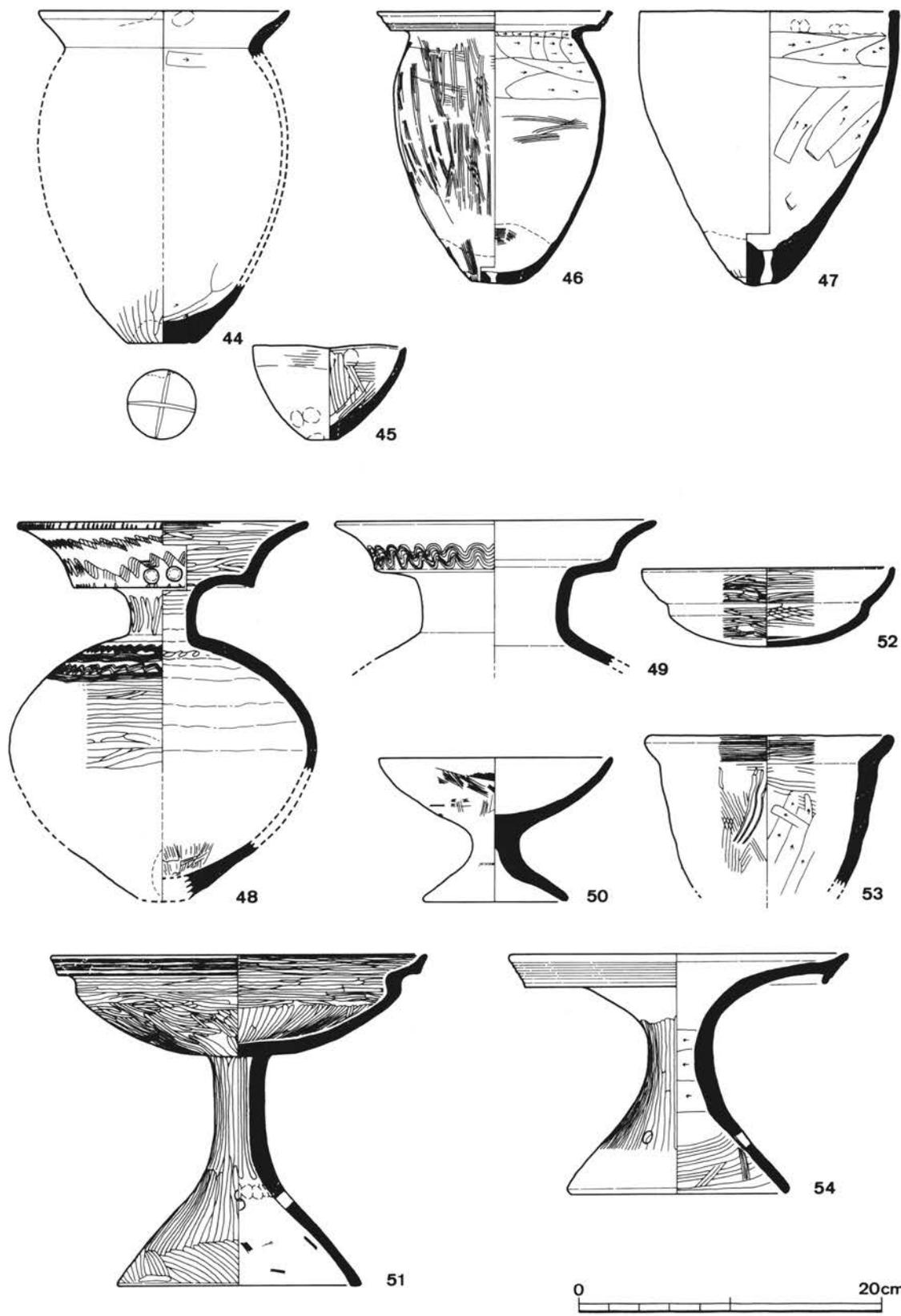


第2次調査溝 S D04出土土器実測図(2)

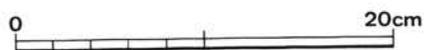
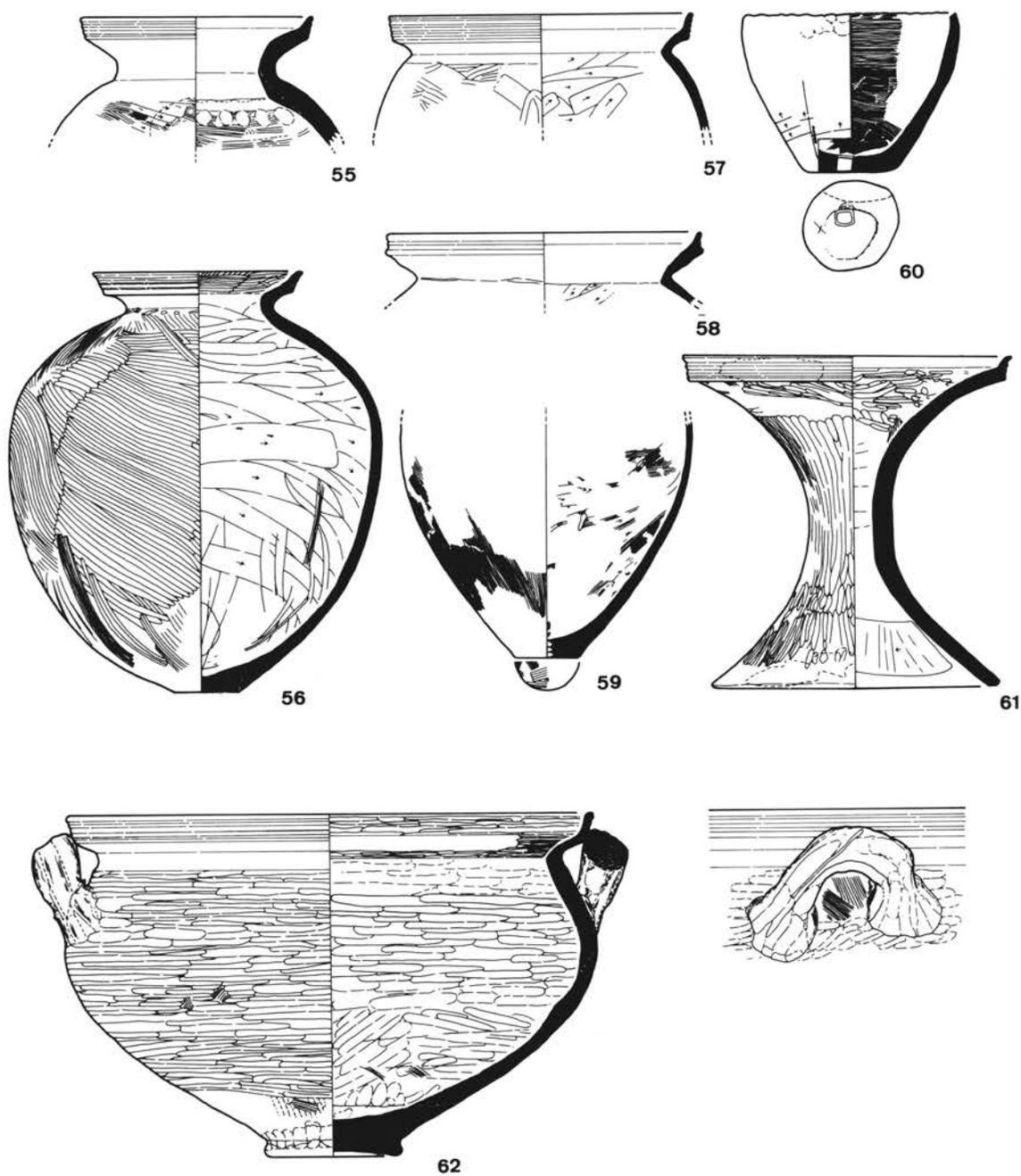
0 20cm

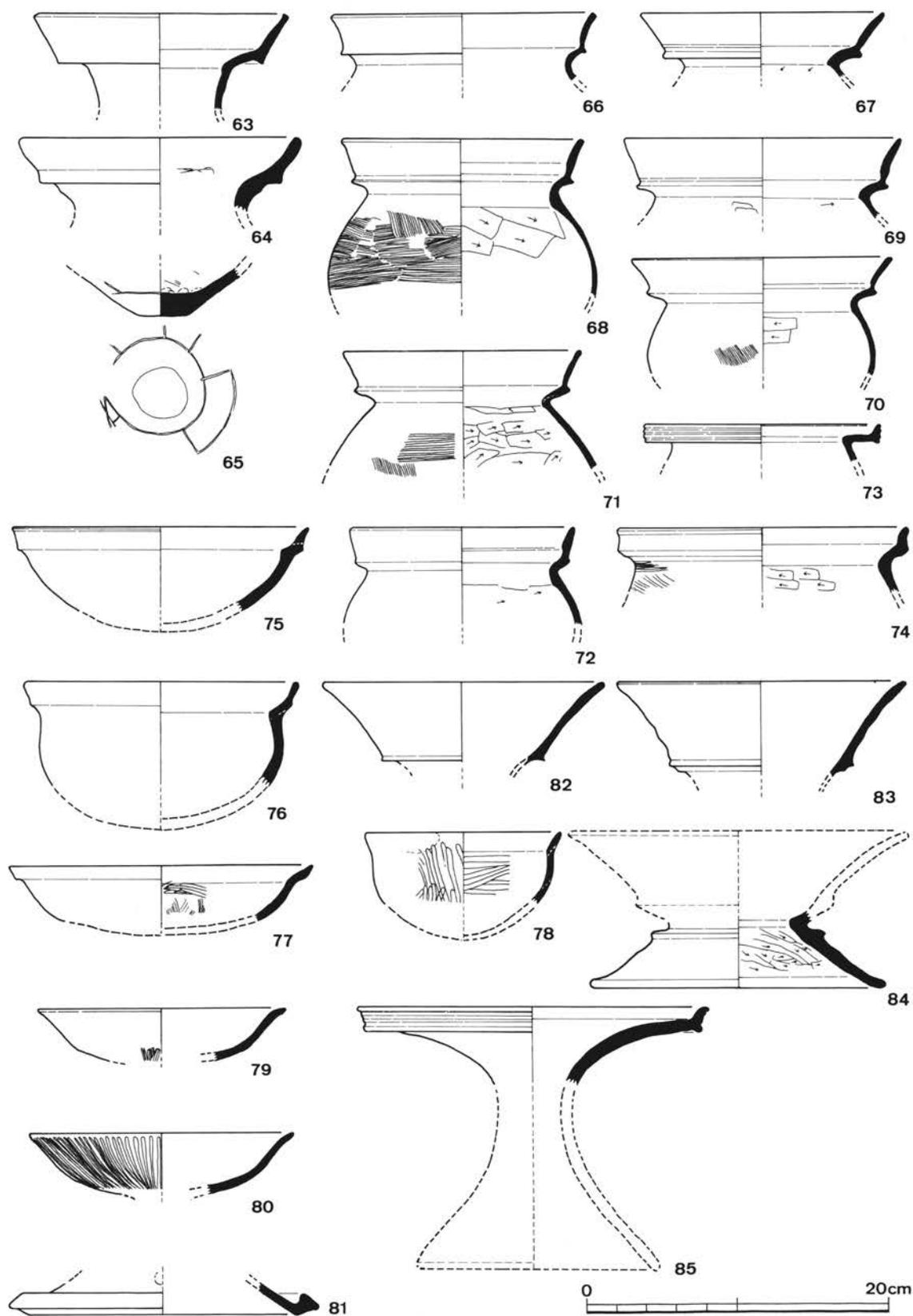


第2次調査溝S D04出土土器実測図(3)

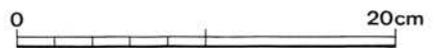
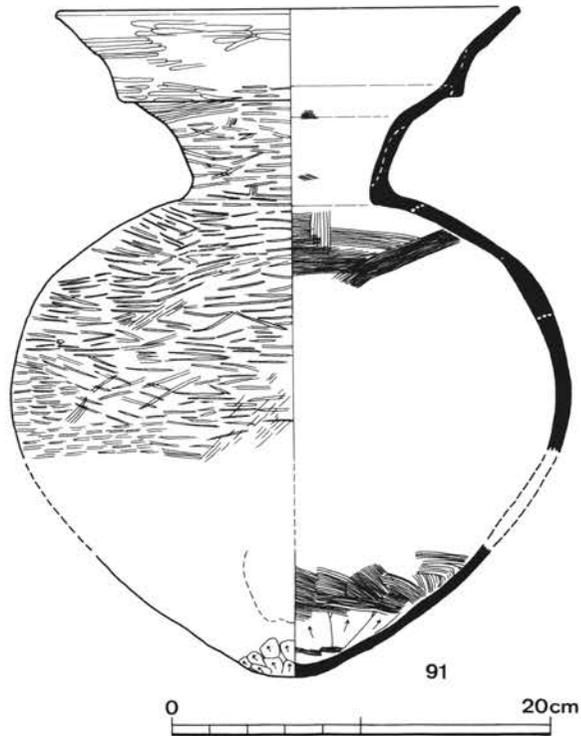
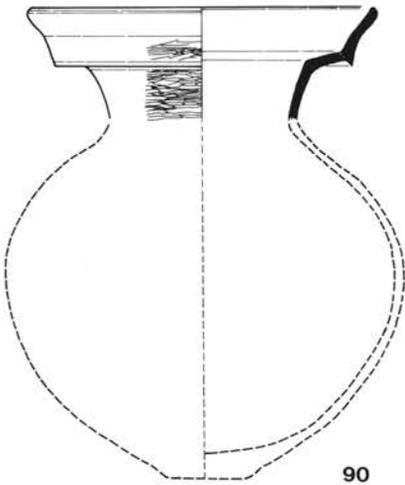
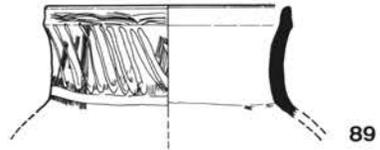
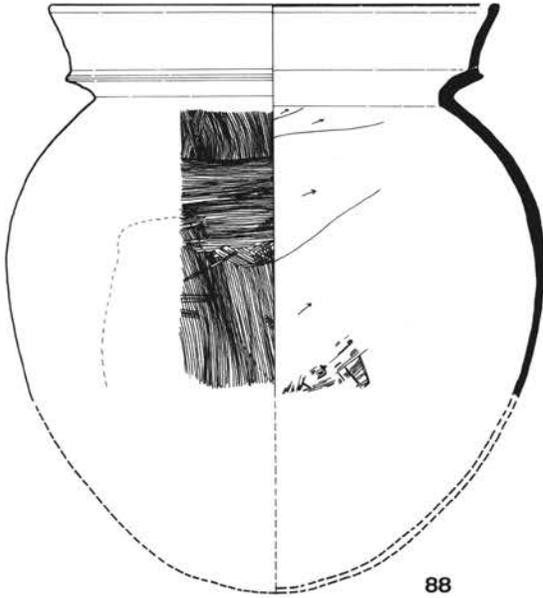
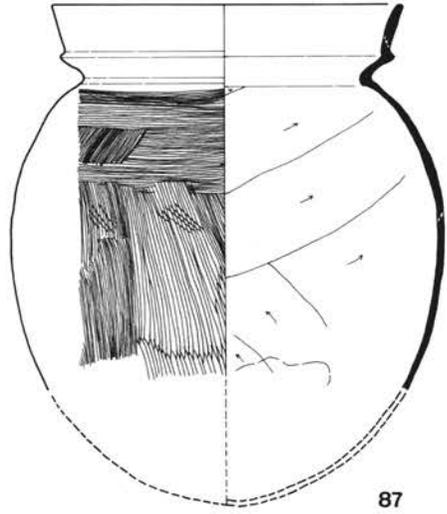
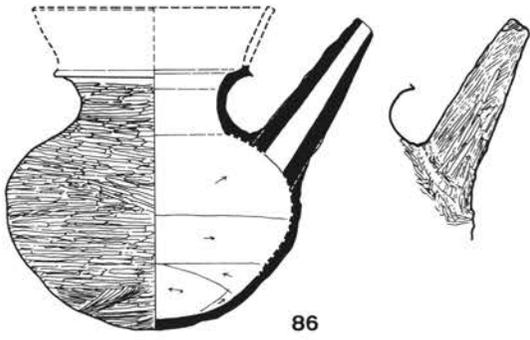


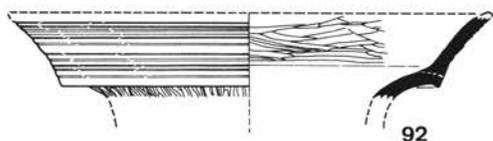
第2次調査溝S D04出土土器実測図(4)



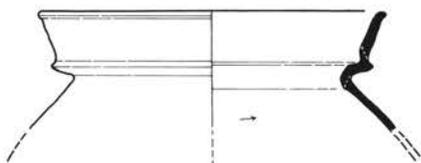


第2次調査溝S D02-2出土土器実測図(1)

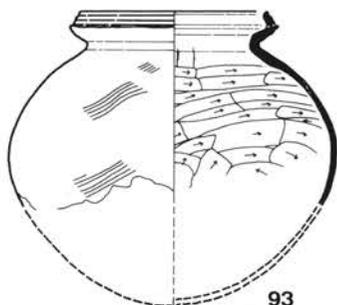




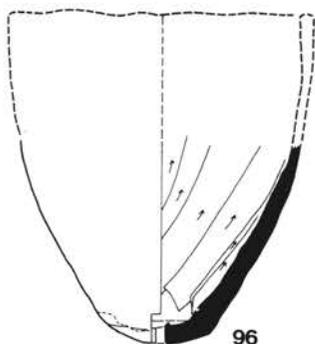
92



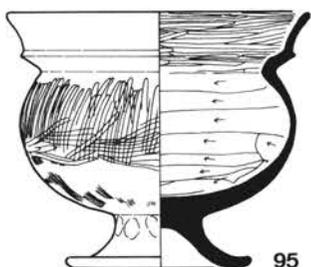
94



93



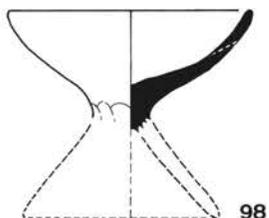
96



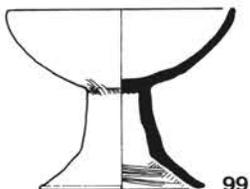
95



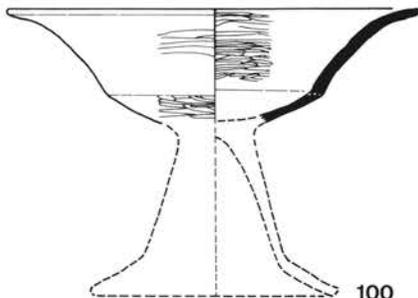
97



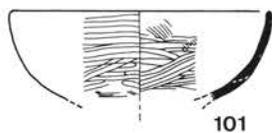
98



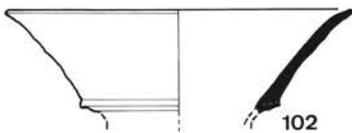
99



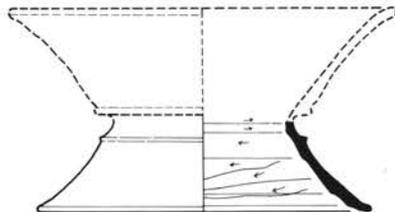
100



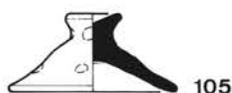
101



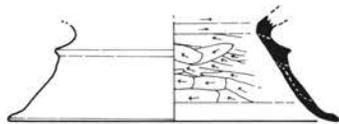
102



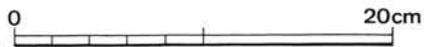
103



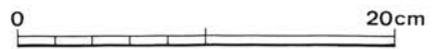
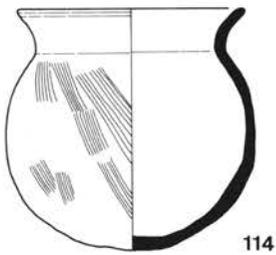
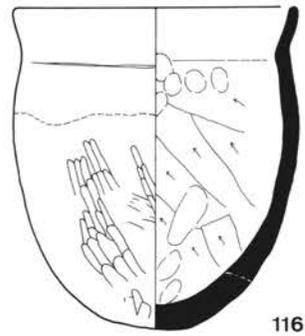
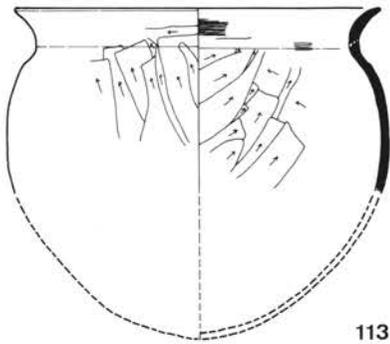
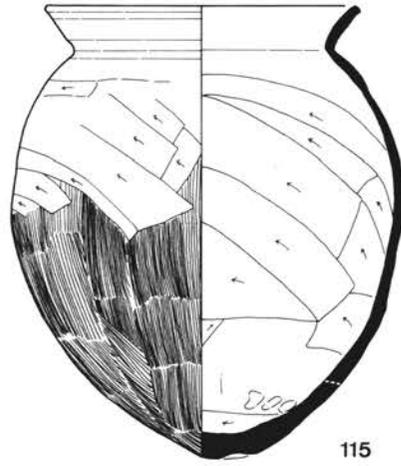
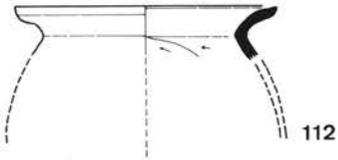
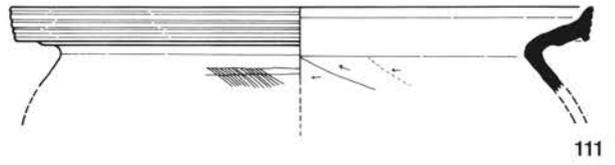
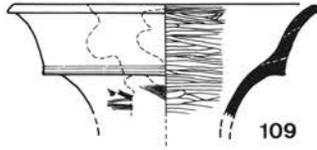
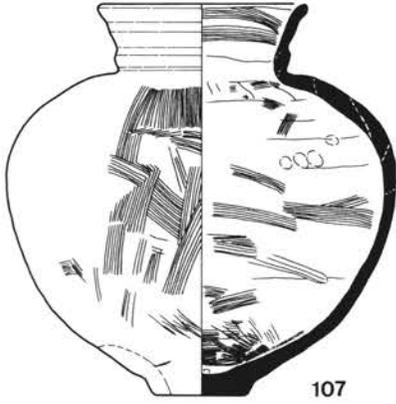
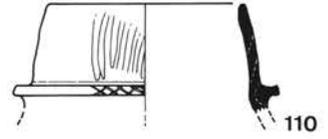
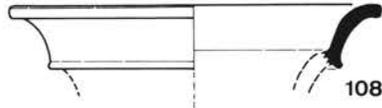
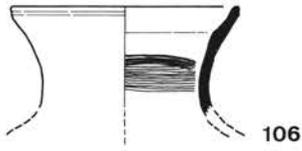
105



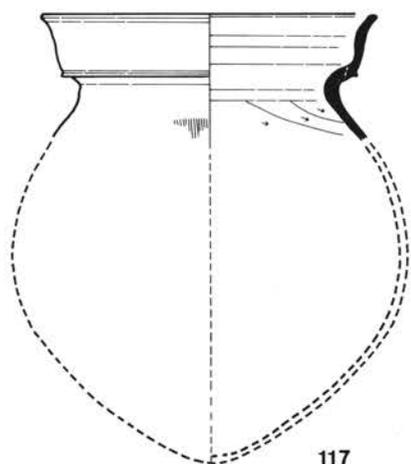
104



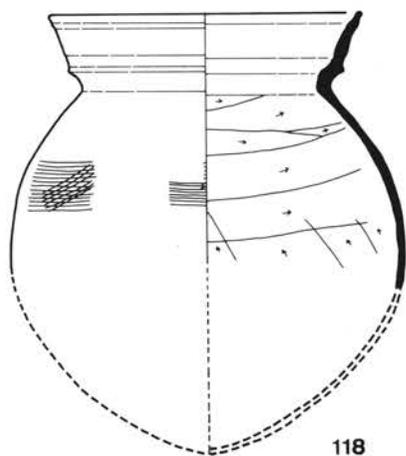
第2次調査溝S D02-2出土土器実測図(3)



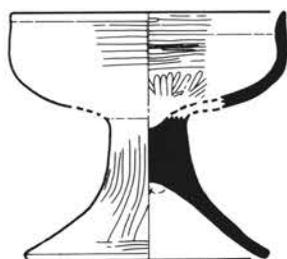
第2次調査溝 S D02-2出土土器実測図(4)



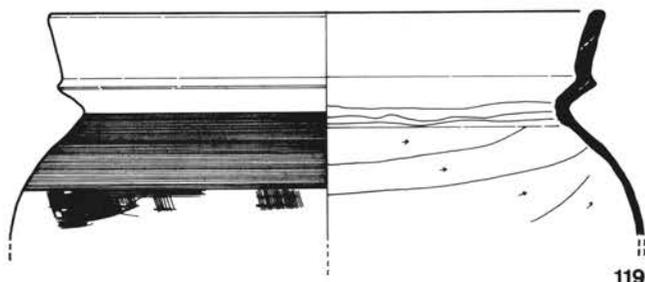
117



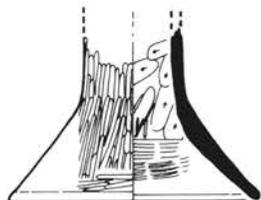
118



120



119



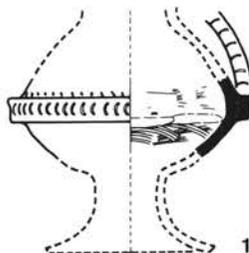
121



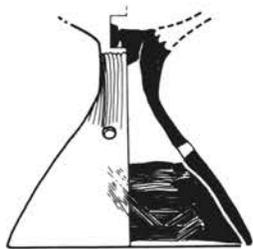
122



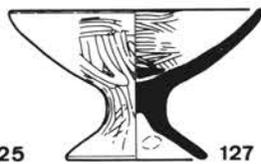
123



124



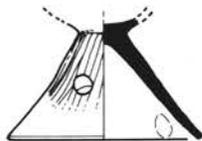
125



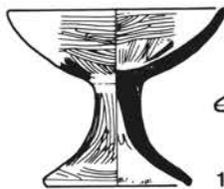
127



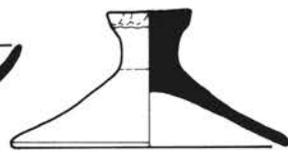
129



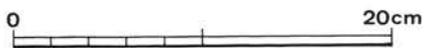
126



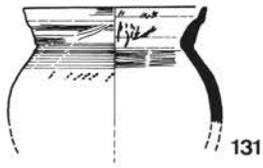
128



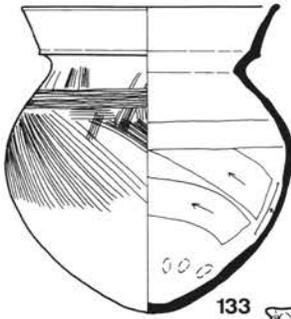
130



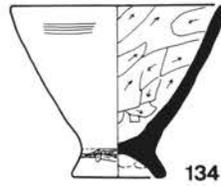
第2次調査溝S D02-2出土土器実測図(5)



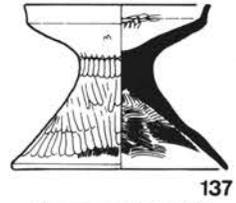
131



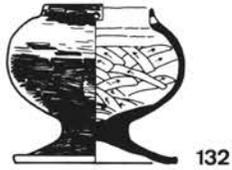
133



134



137



132



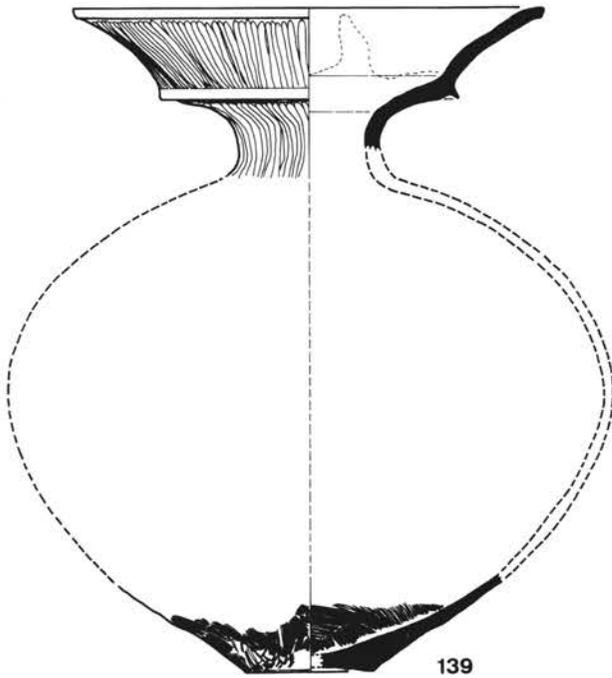
136



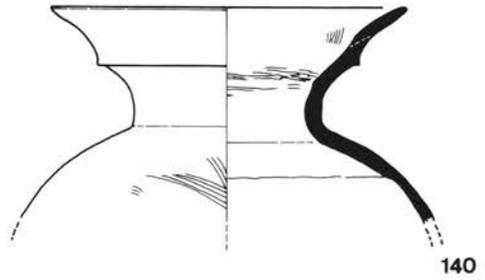
135



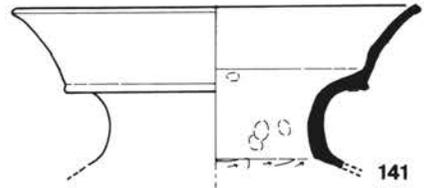
138



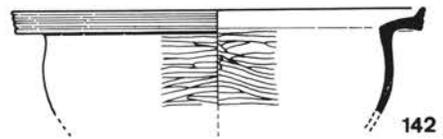
139



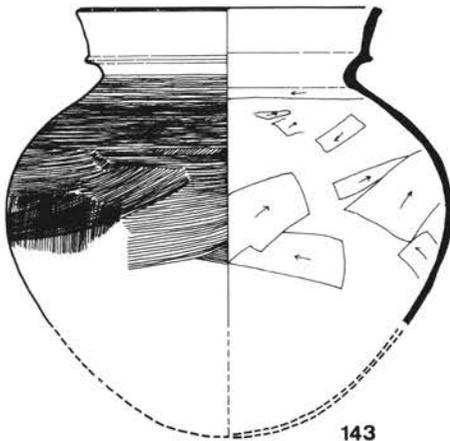
140



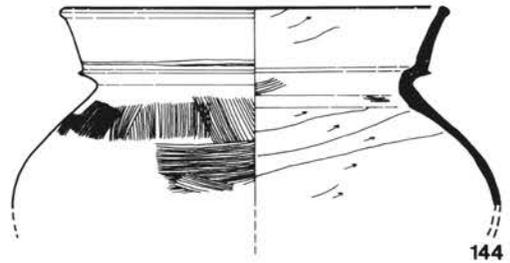
141



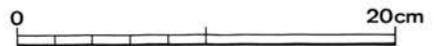
142



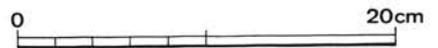
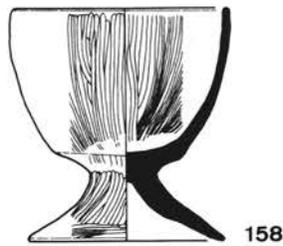
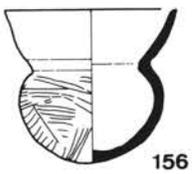
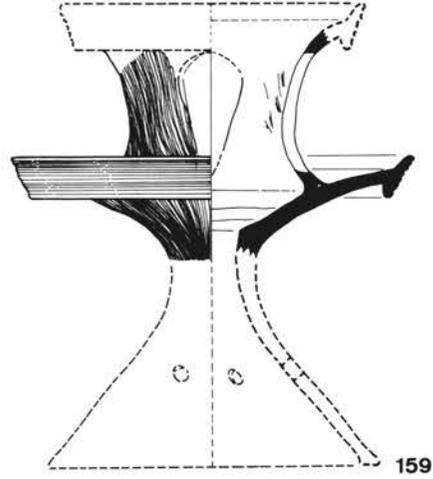
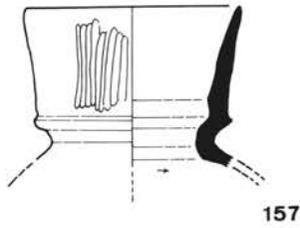
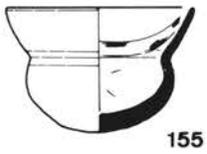
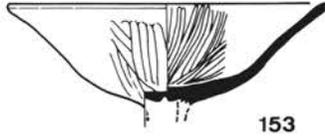
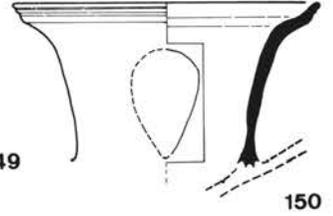
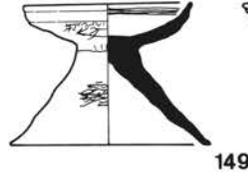
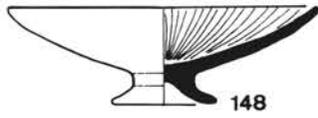
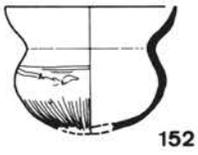
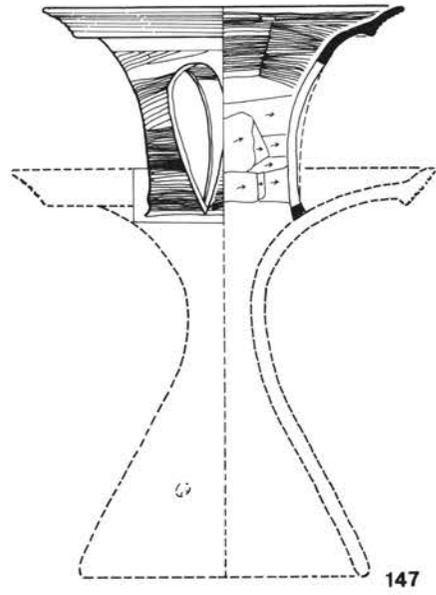
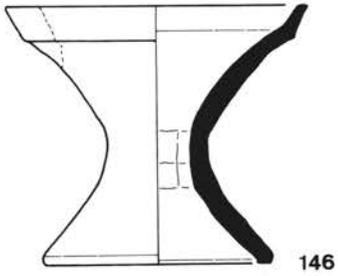
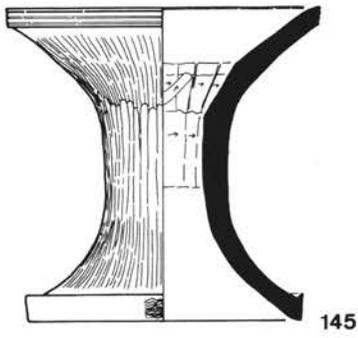
143



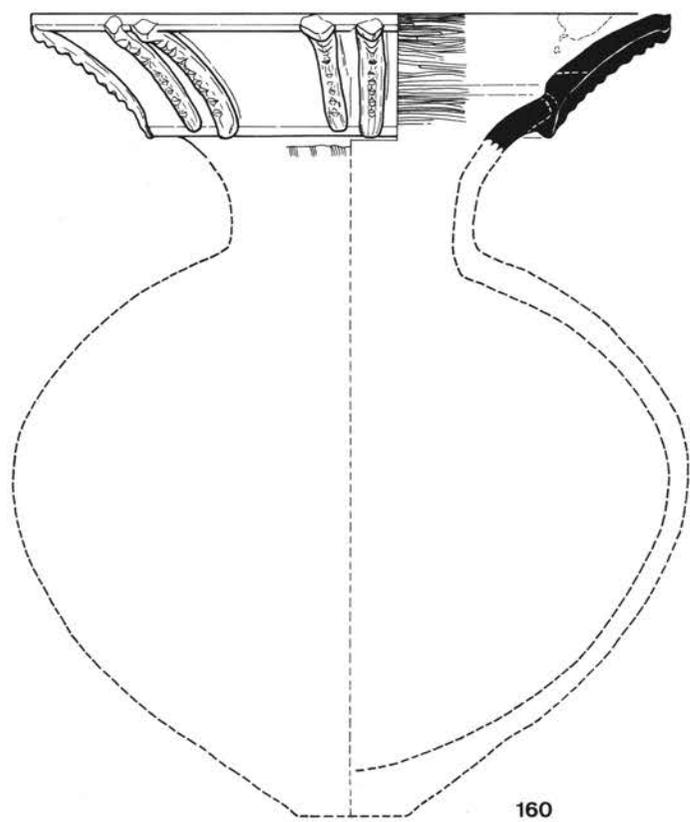
144



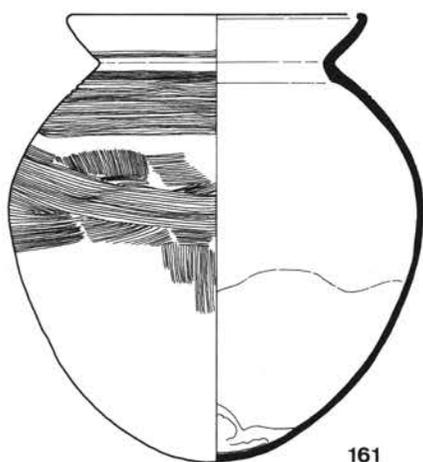
第2次調査溝S D02-2出土土器実測図(6)



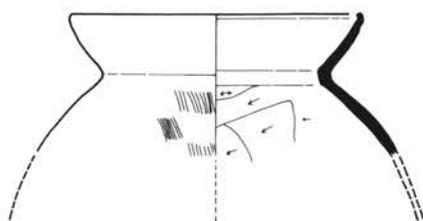
第2次調査溝 S D02-2出土土器実測図(7)



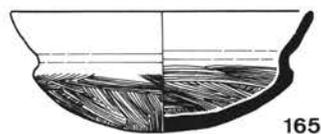
160



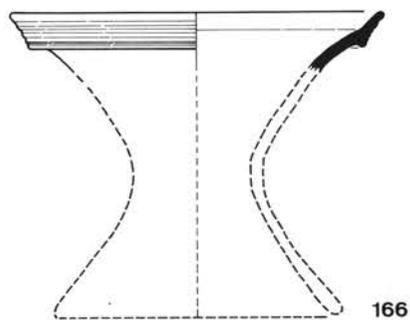
161



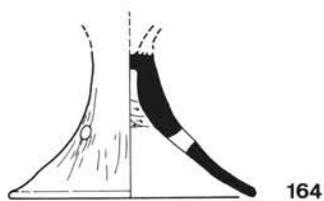
162



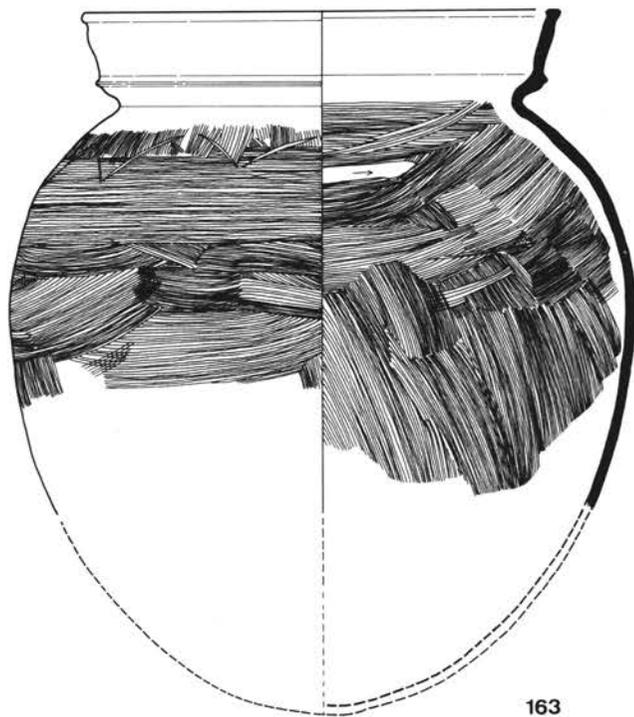
165



166



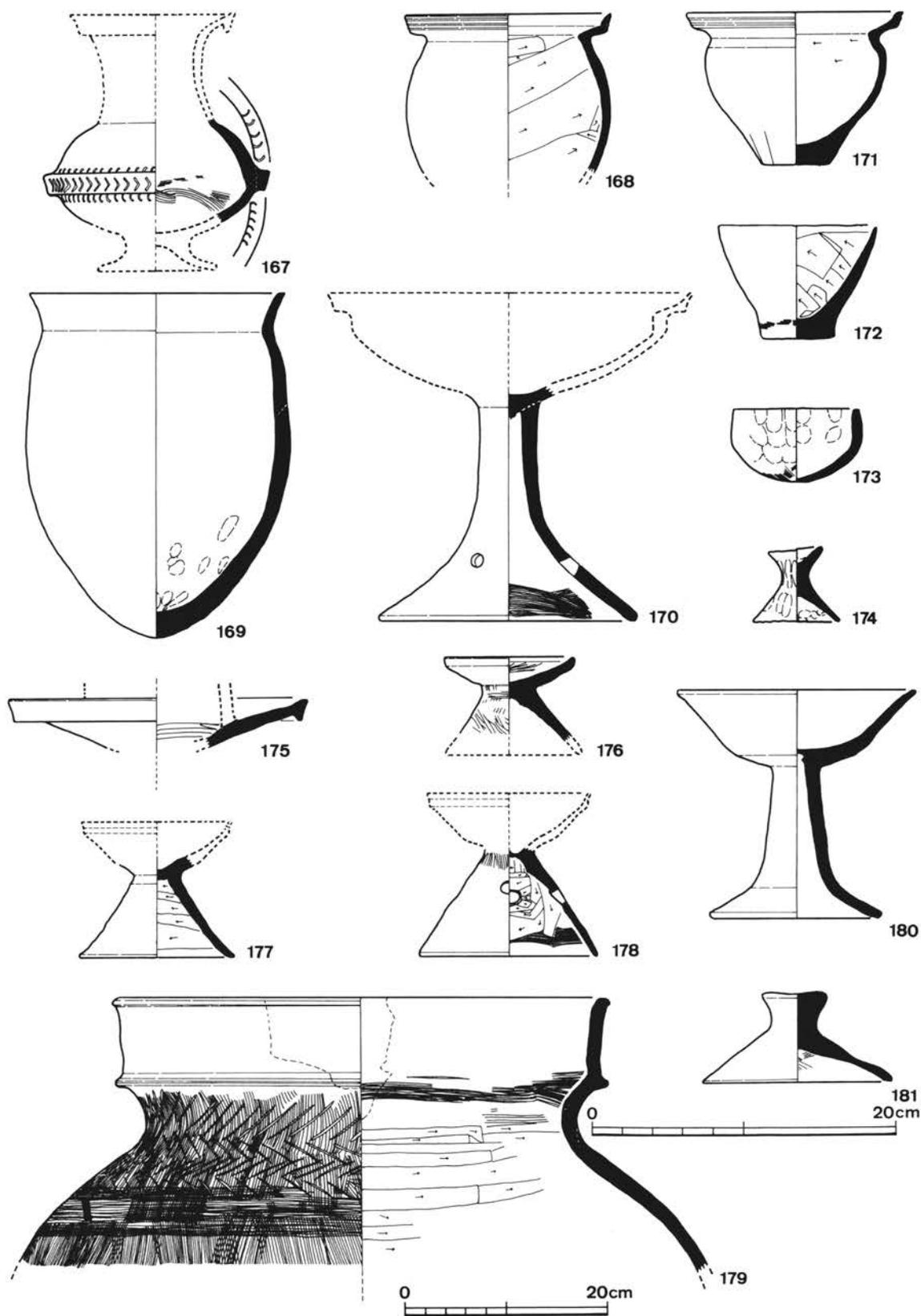
164



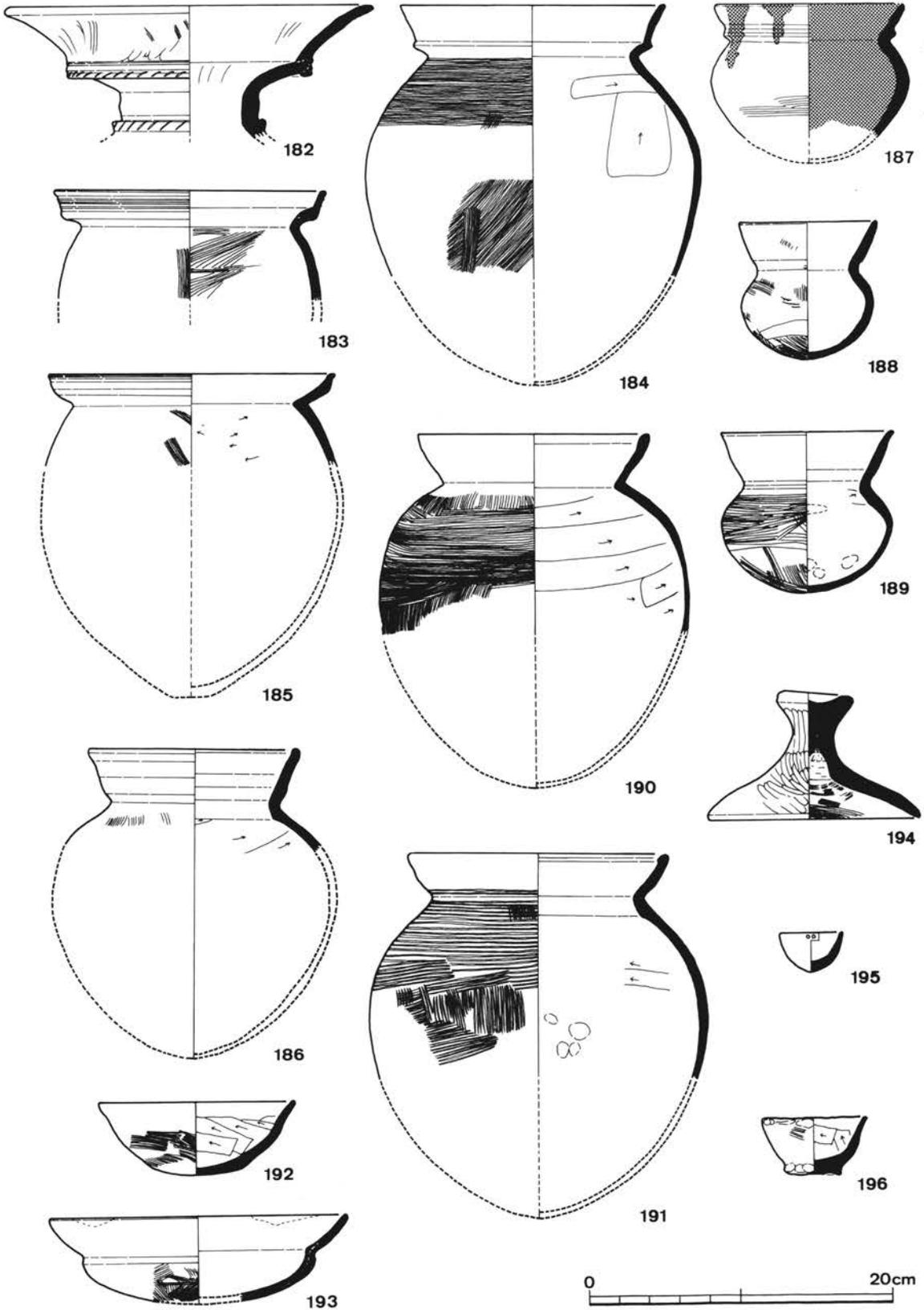
163



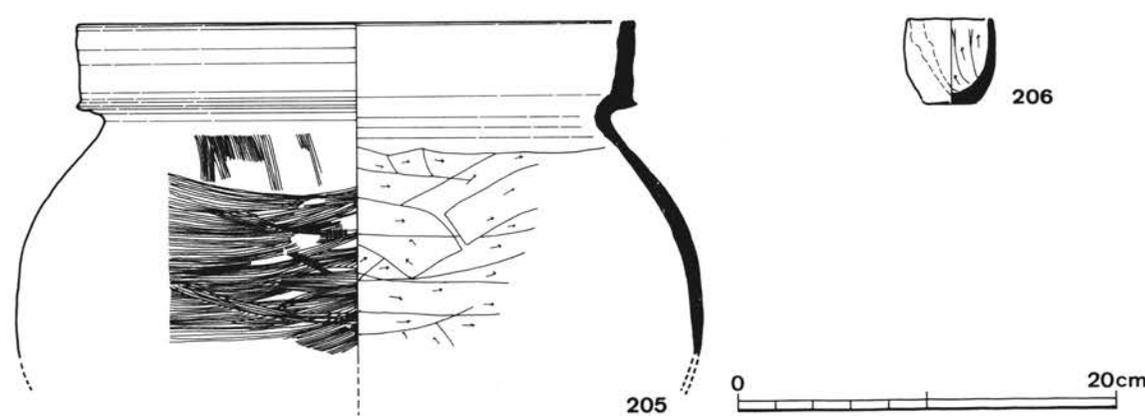
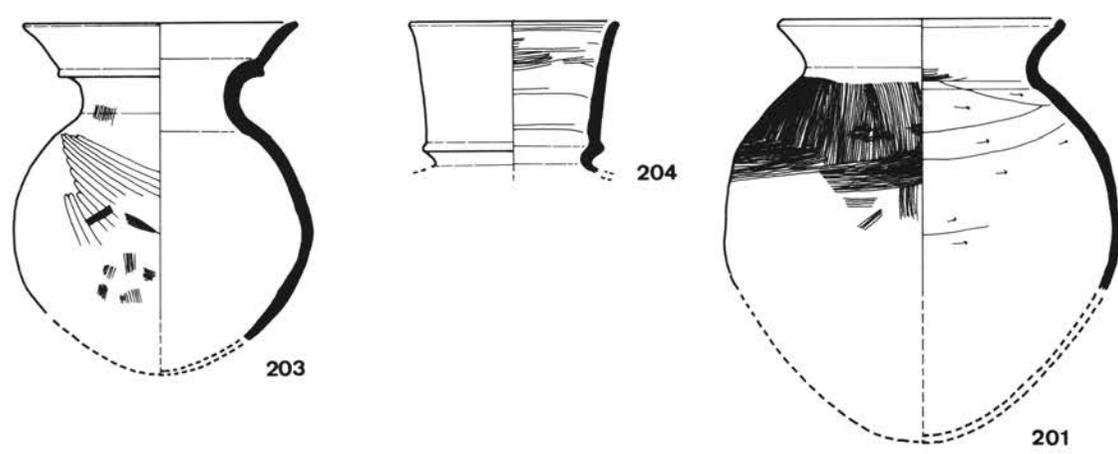
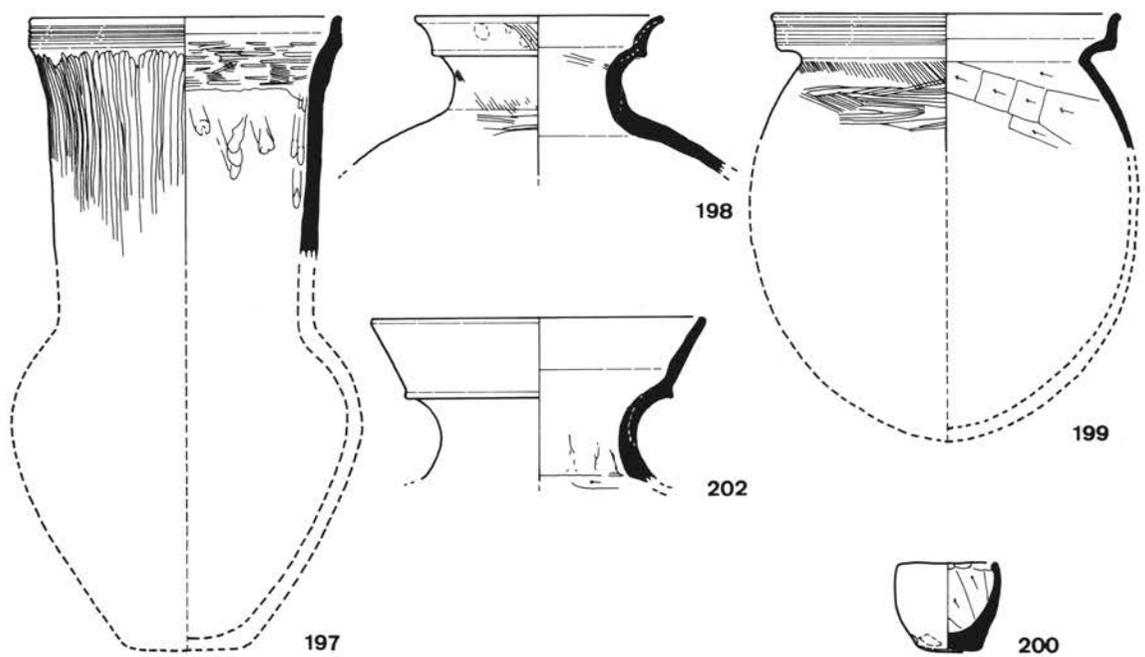
第2次調査溝S D02-2出土土器実測図(8)



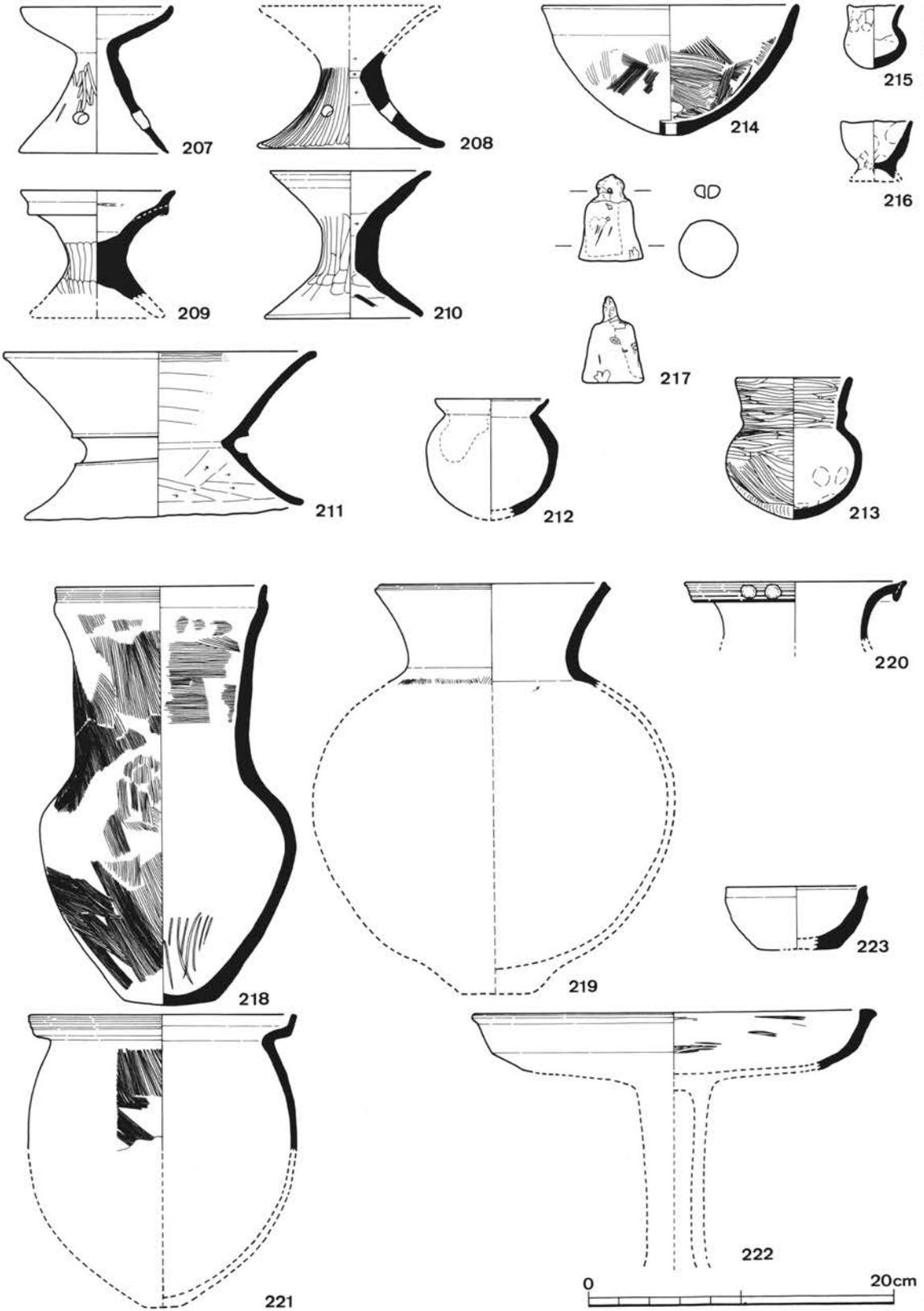
第2次調査土坑SK03 1トレンチ包含層出土土器実測図(1)



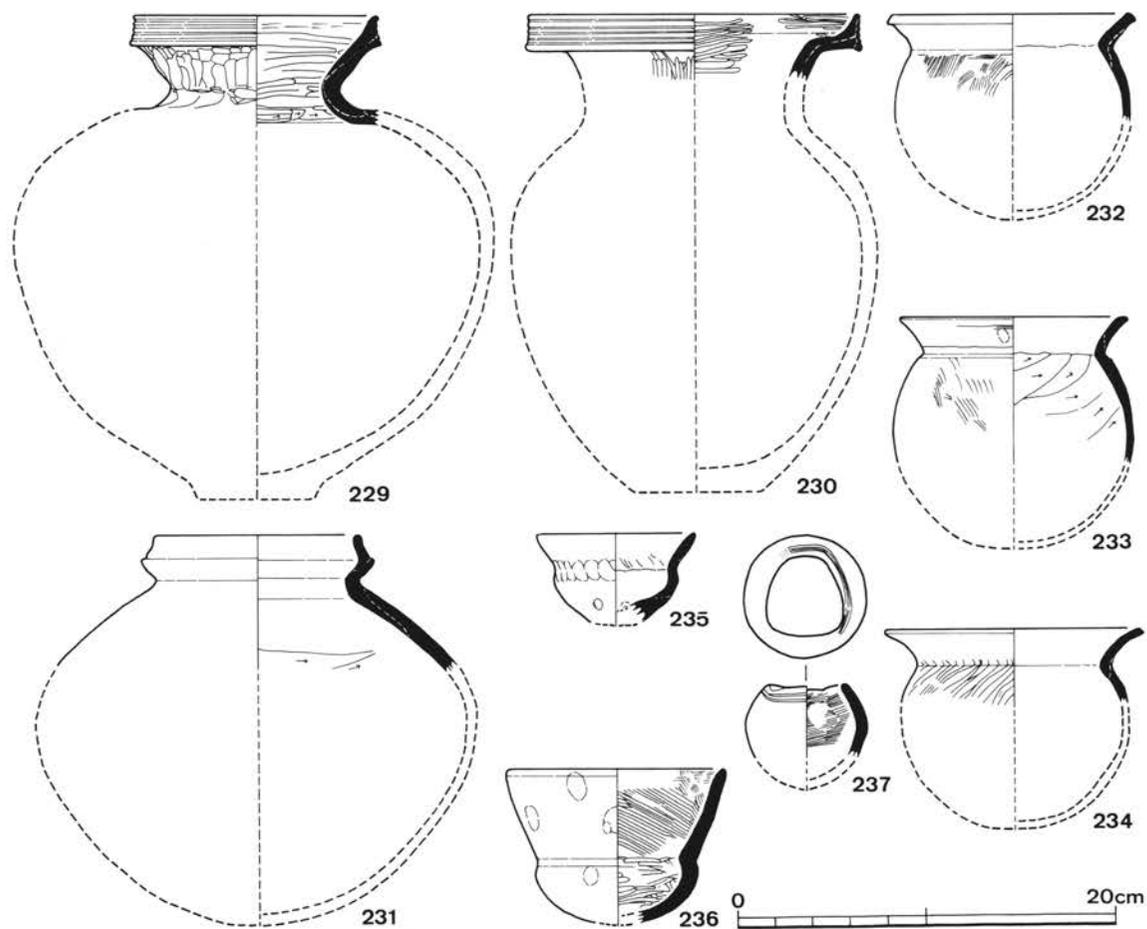
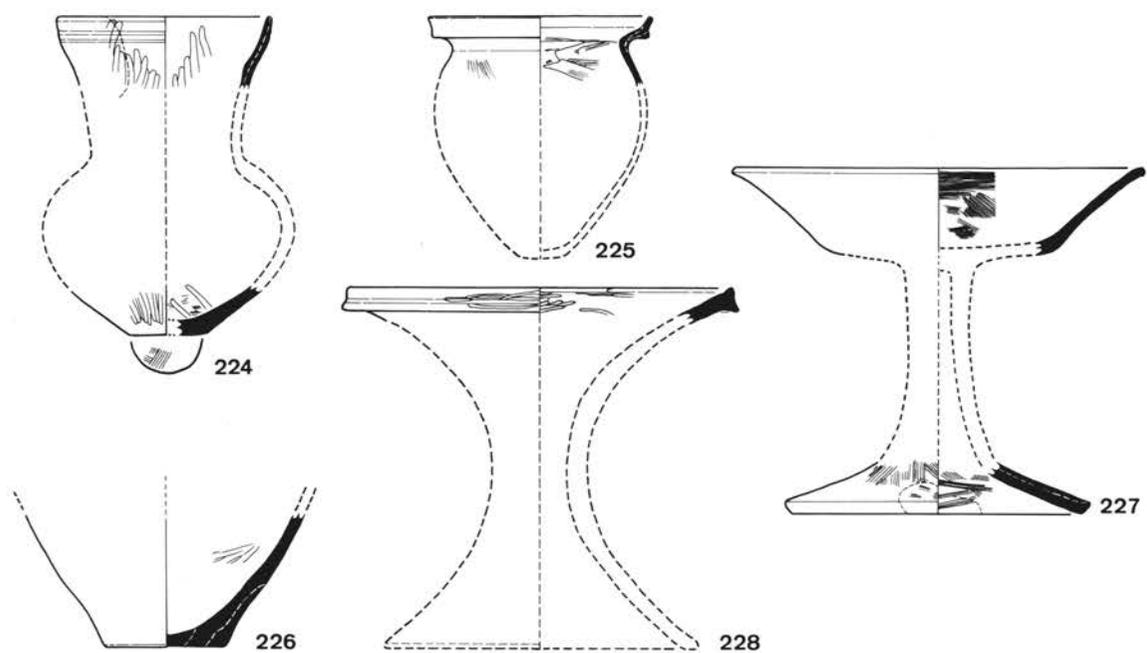
第2次調査土坑SK03 1 トレンチ包含層出土土器実測図(2)



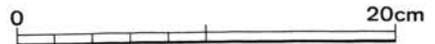
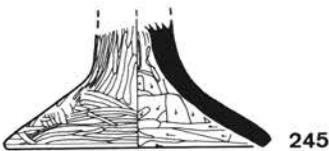
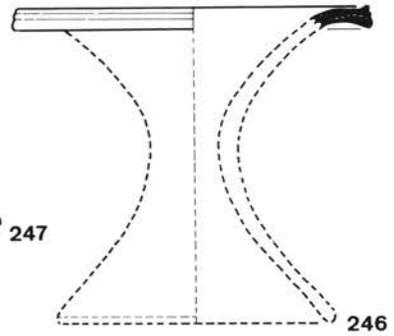
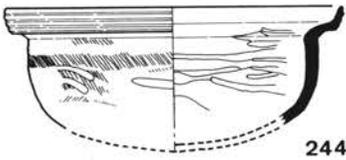
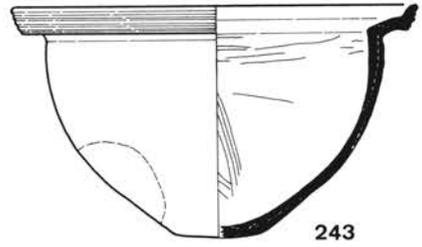
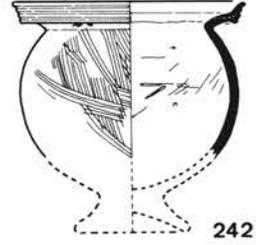
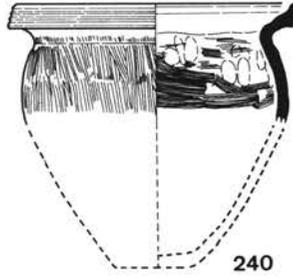
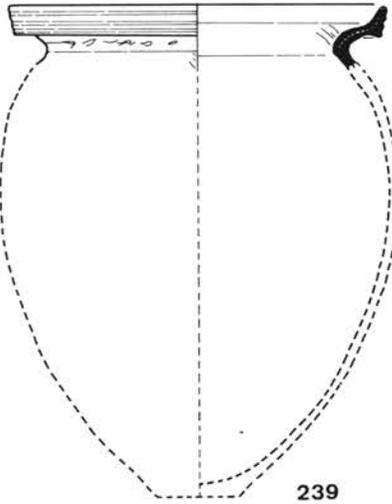
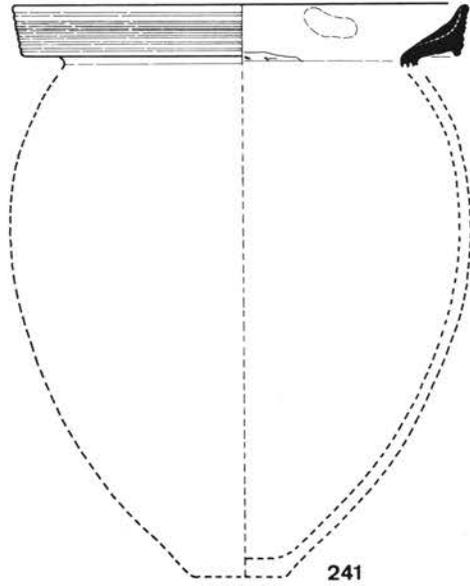
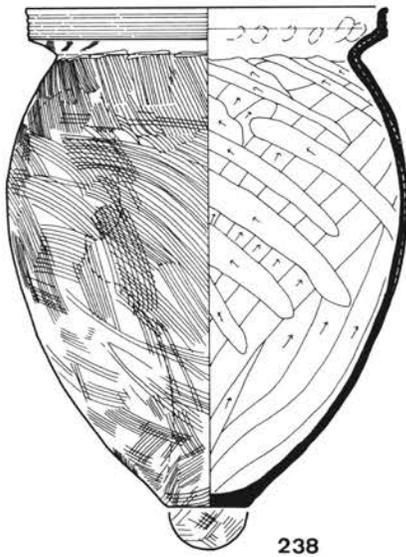
第2次調査溝 S D10出土土器実測図(1)



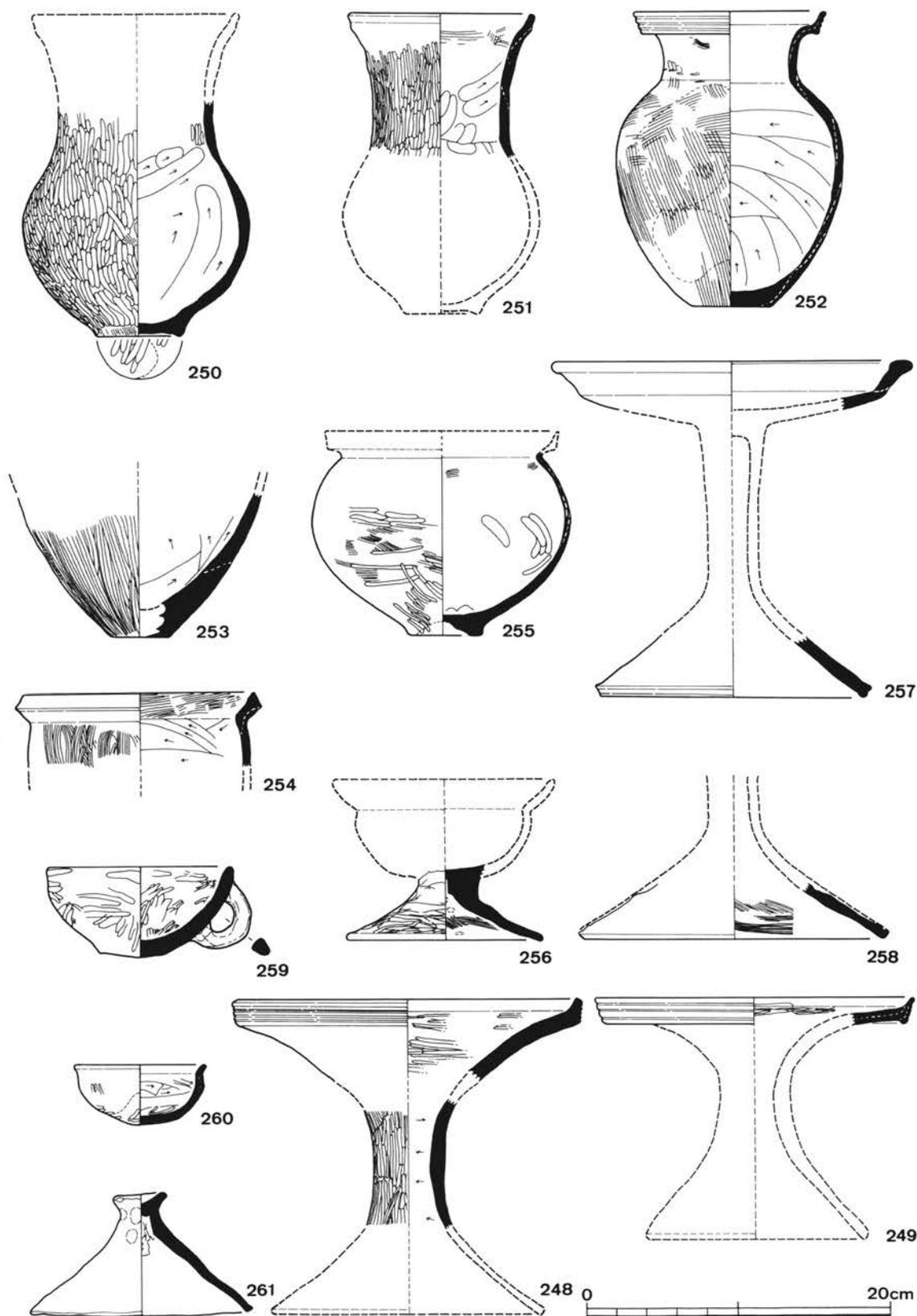
第2次調査溝S D10・12, 土壇S K11出土土器実測図(2)



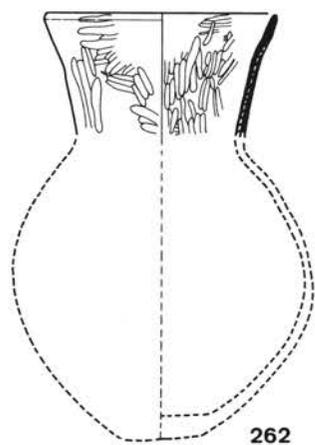
第2次調査溝S D20・21出土土器実測図



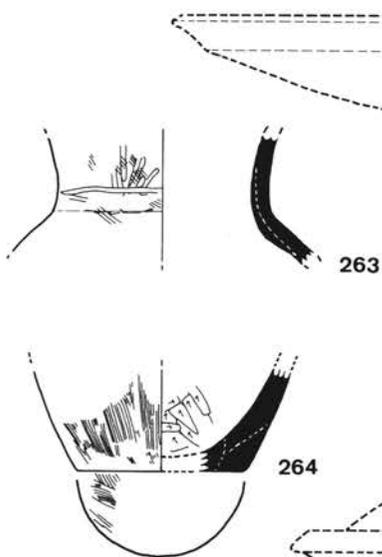
第2次調査溝S D21出土土器実測図



第2次調査溝 S D21・22出土土器実測図



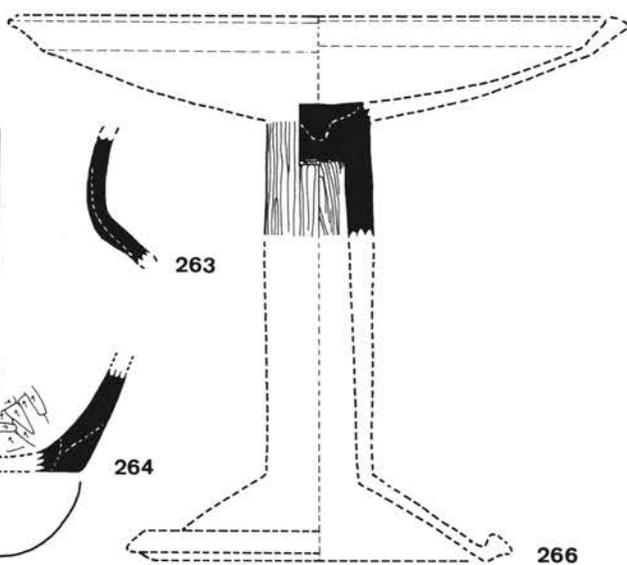
262



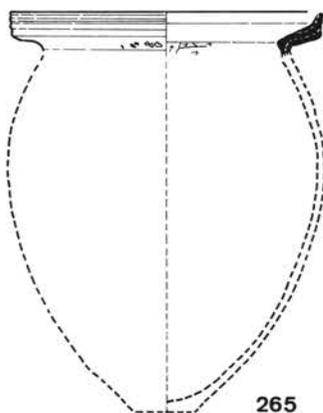
263



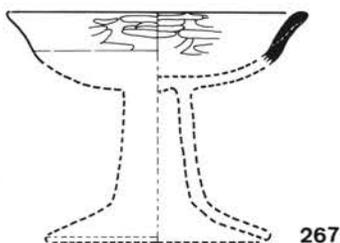
264



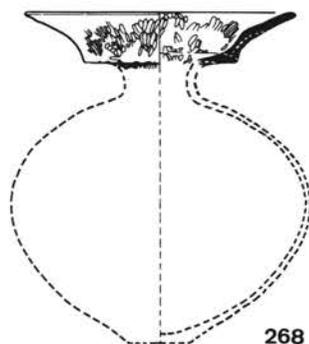
266



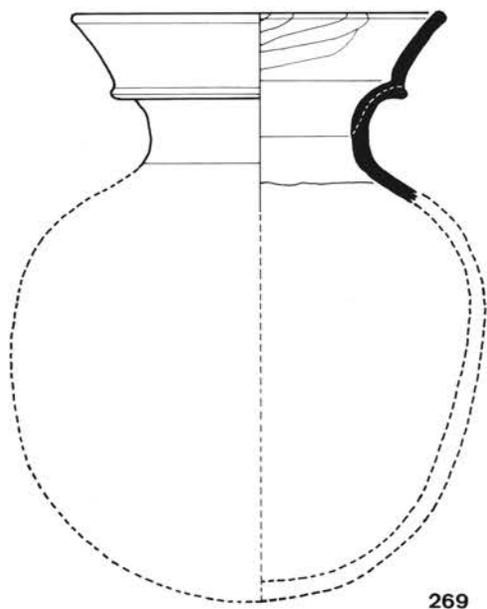
265



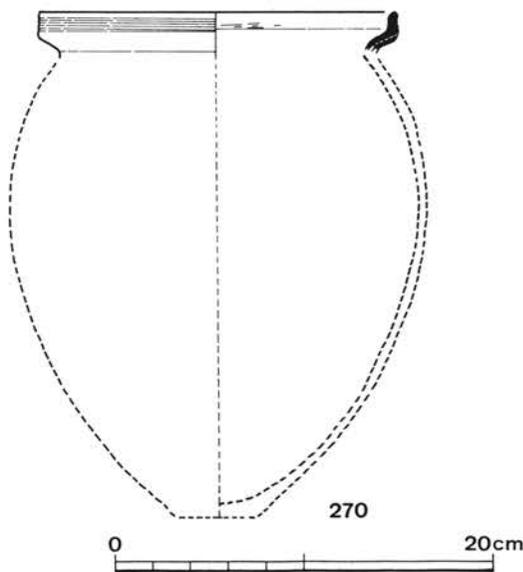
267



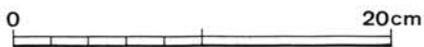
268



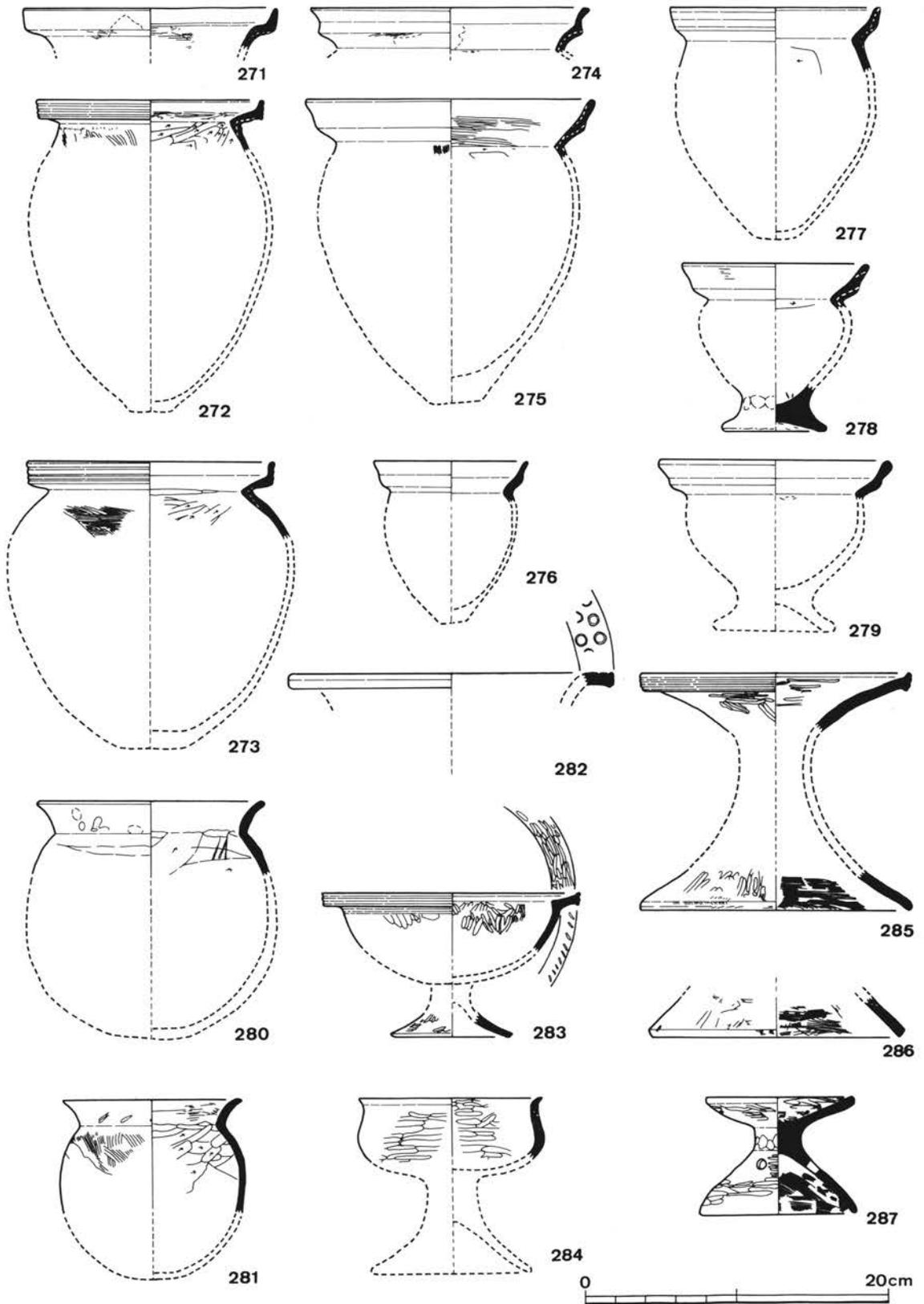
269



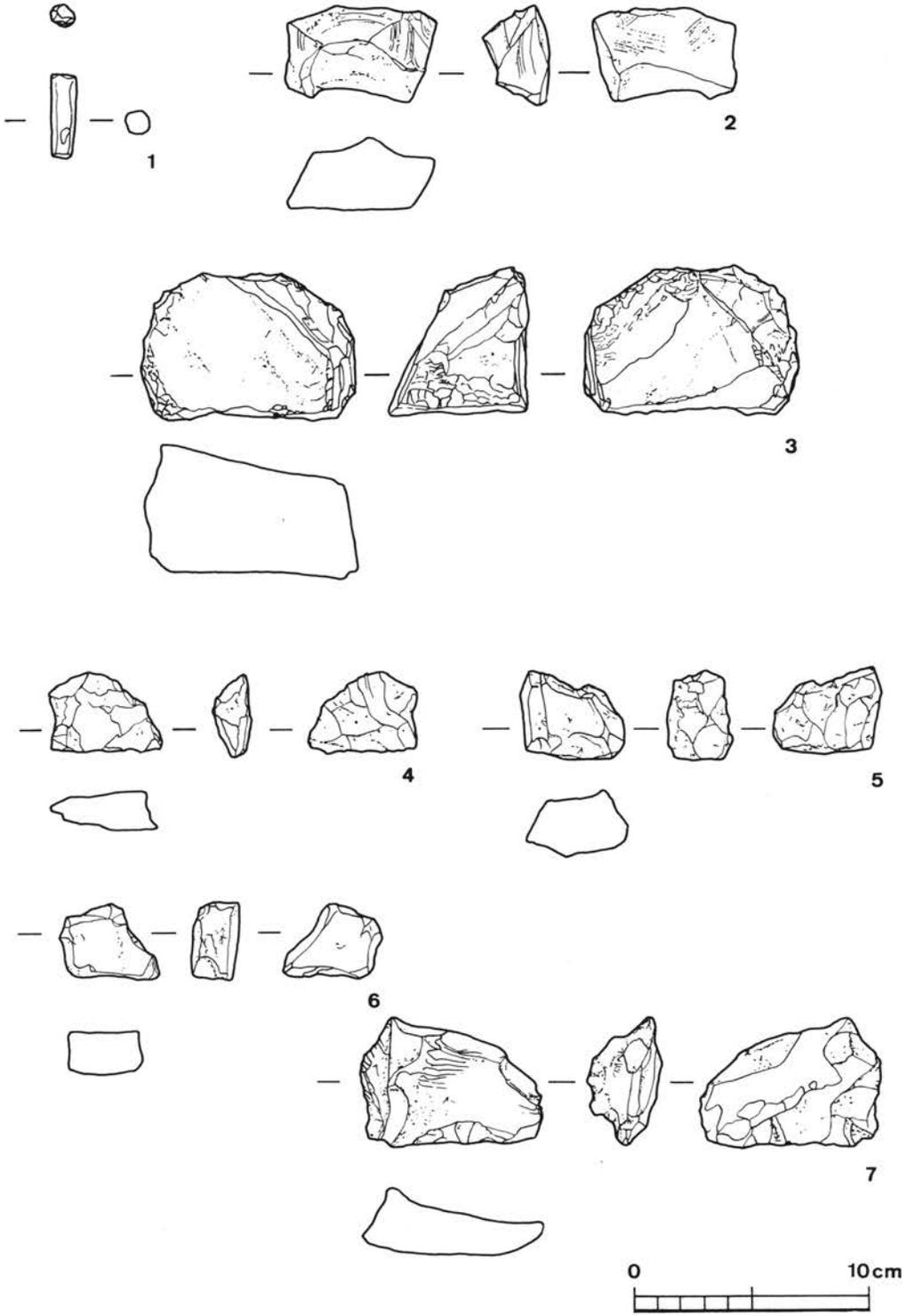
270



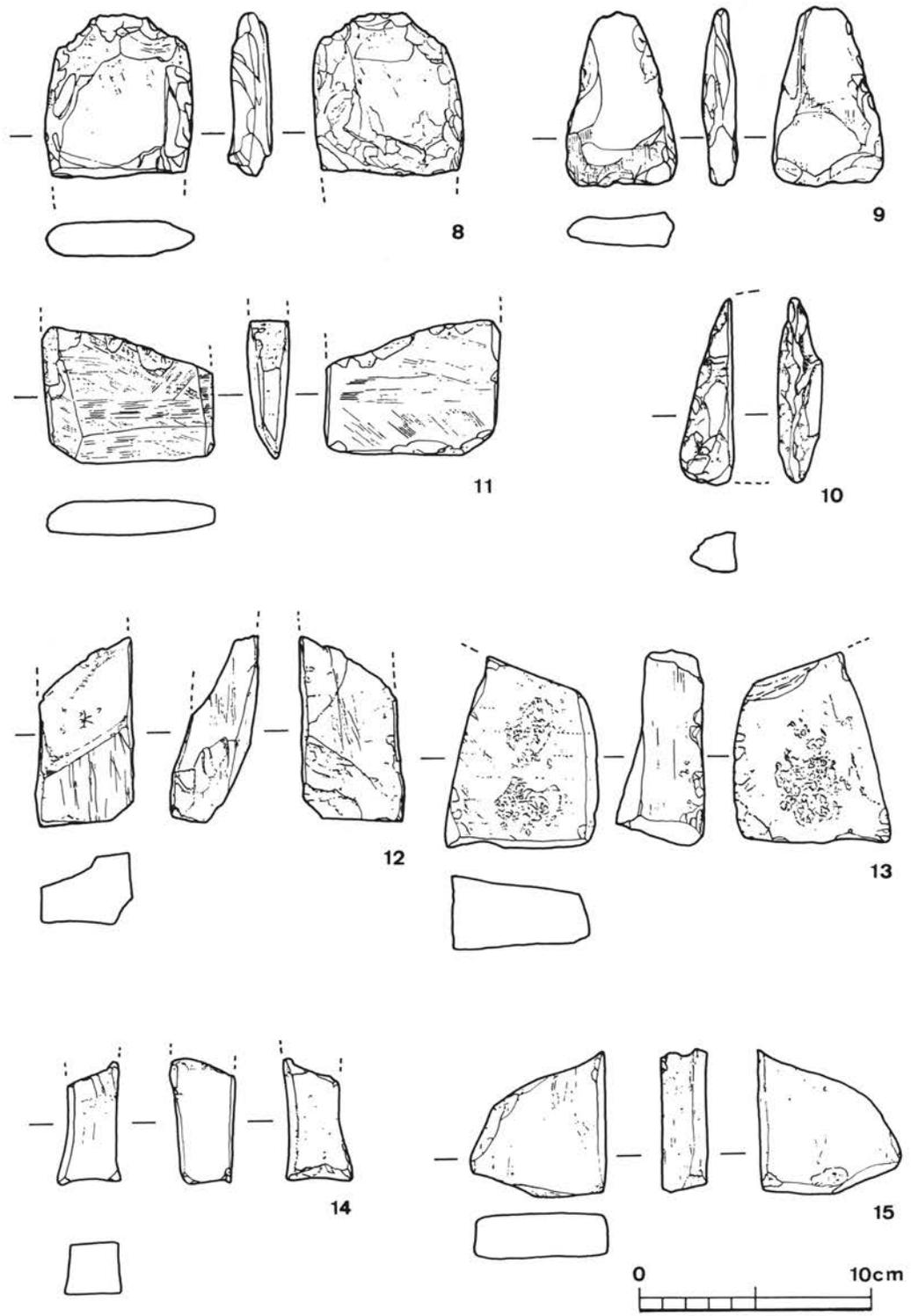
第2次調査4トレンチピット出土土器実測図(1)



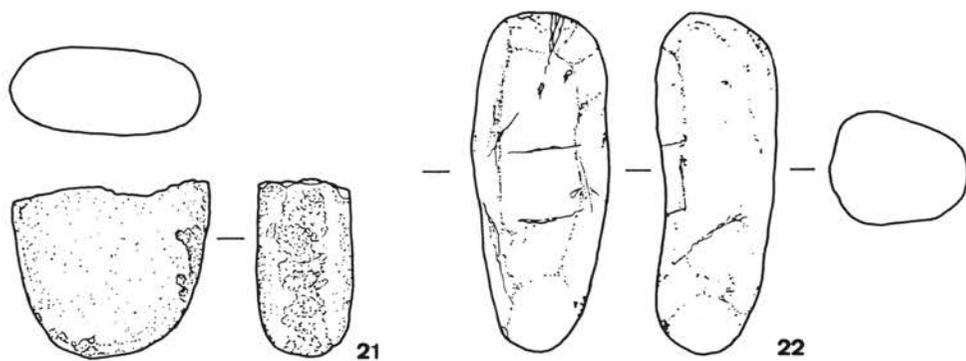
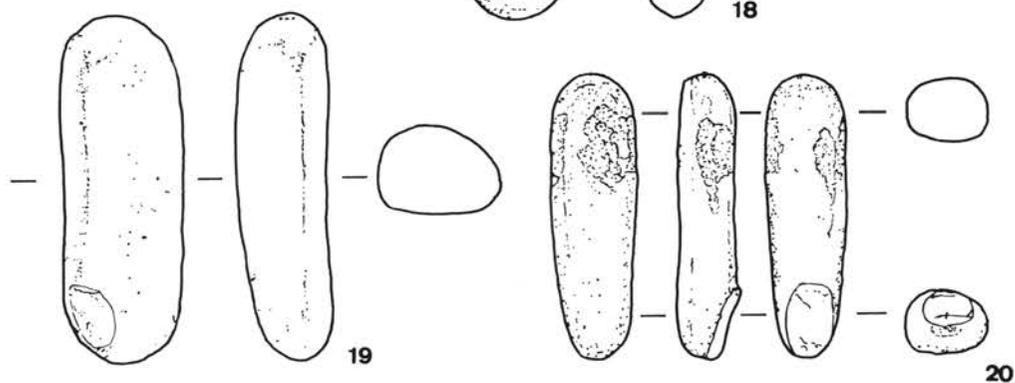
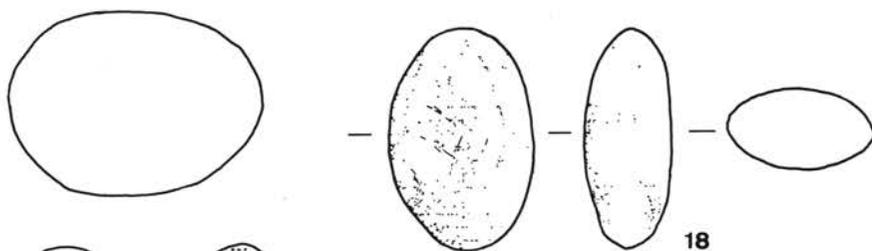
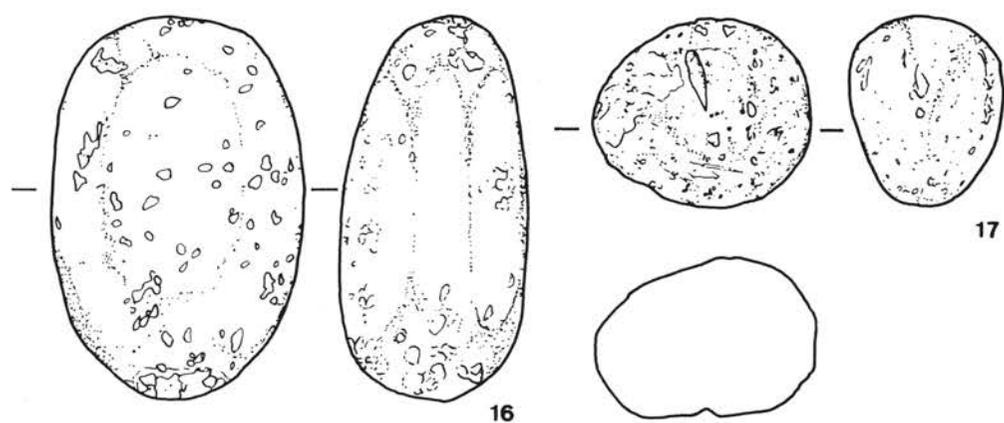
第2次調査4トレンチピット出土土器実測図(2)



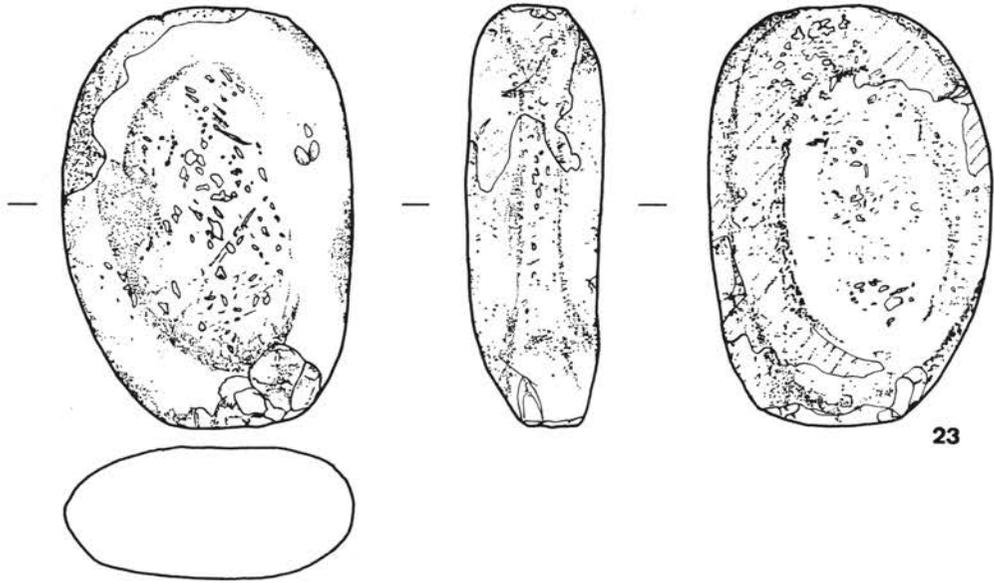
第2次調査石製品実測図(1)



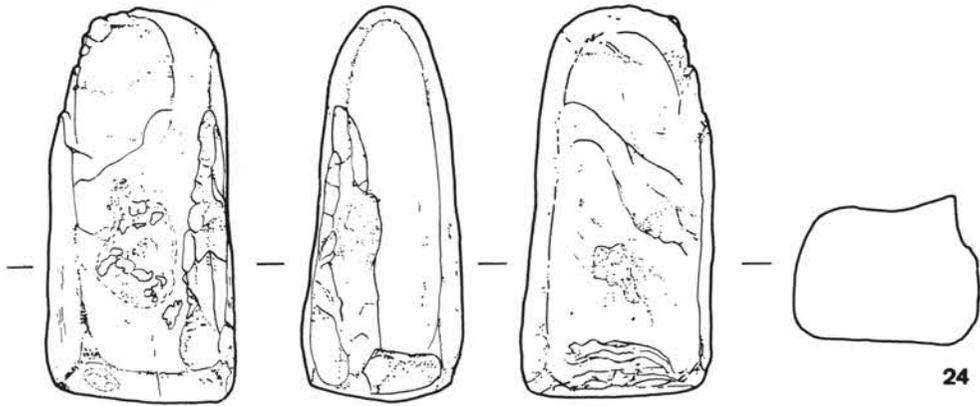
第2次調査石製品実測図(2)



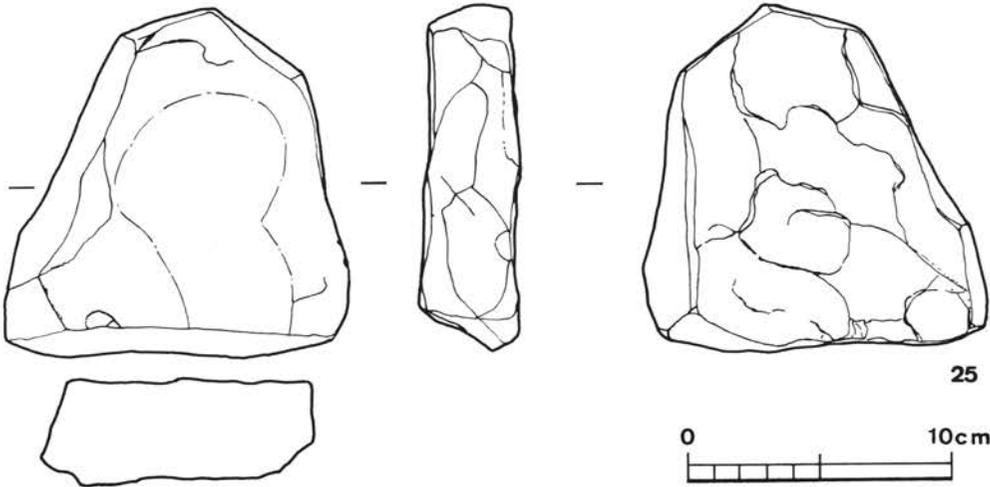
第2次調査石製品実測図(3)



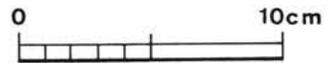
23



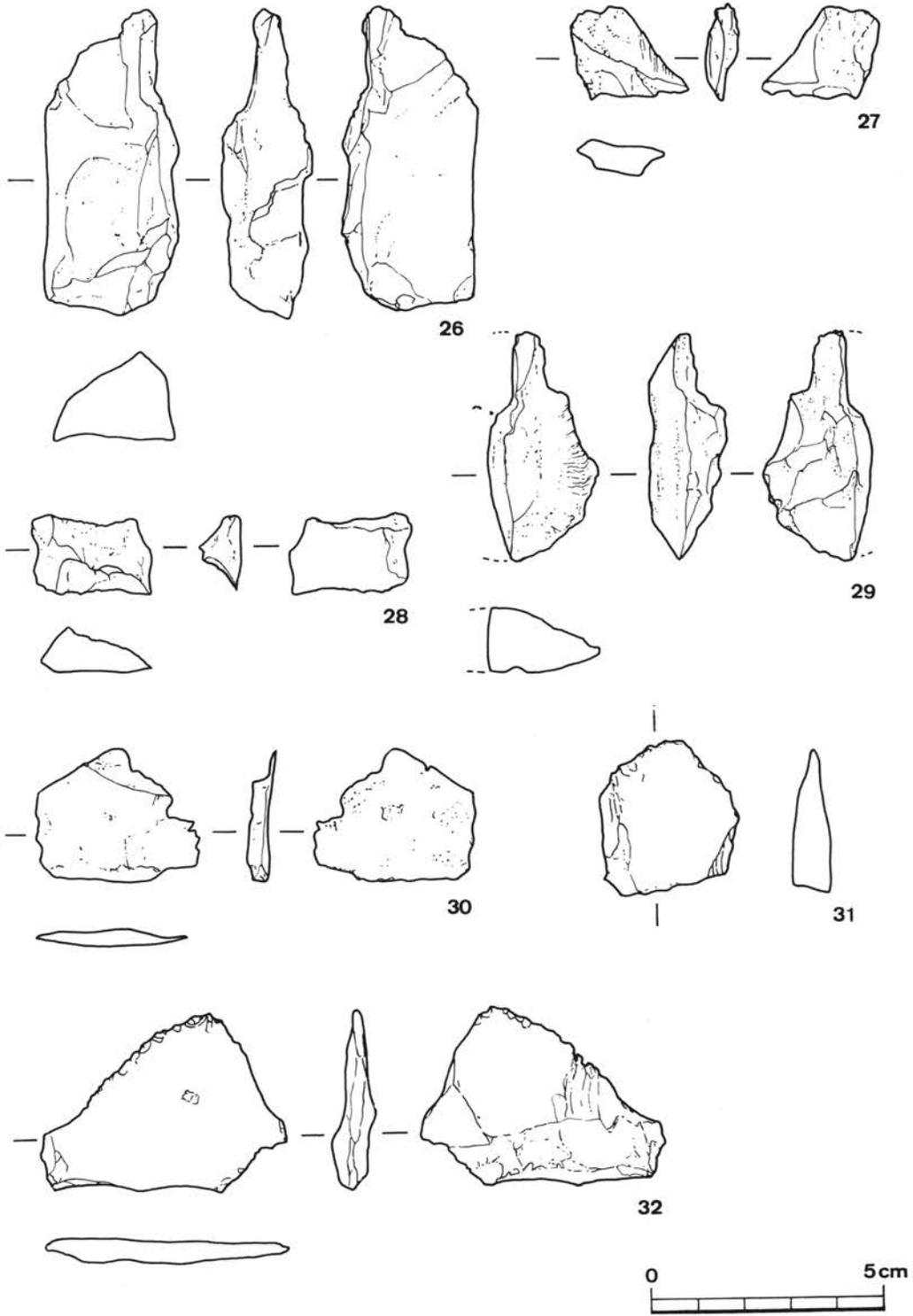
24



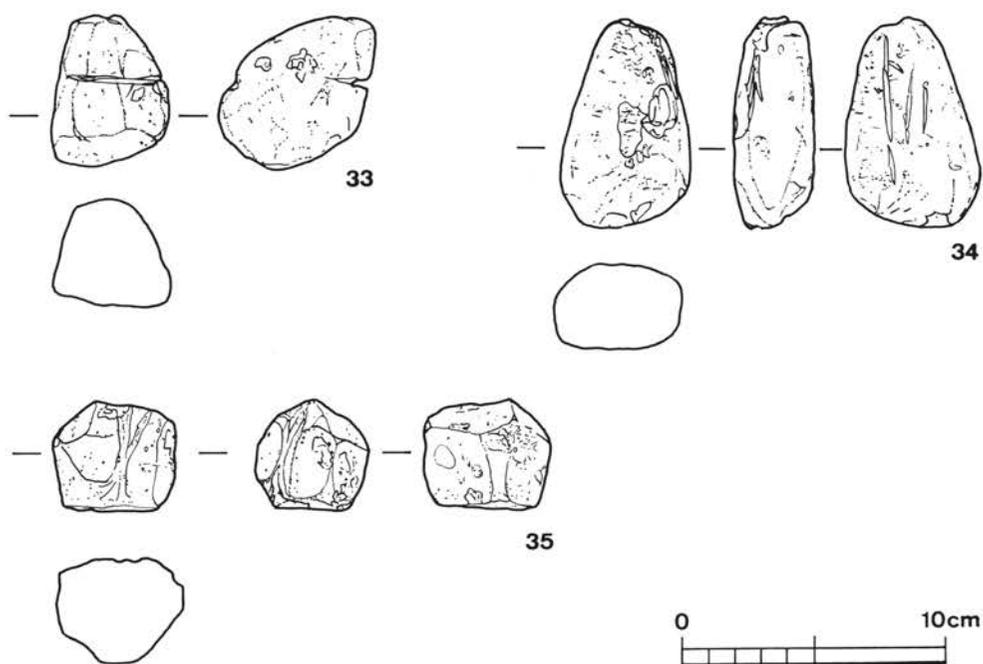
25



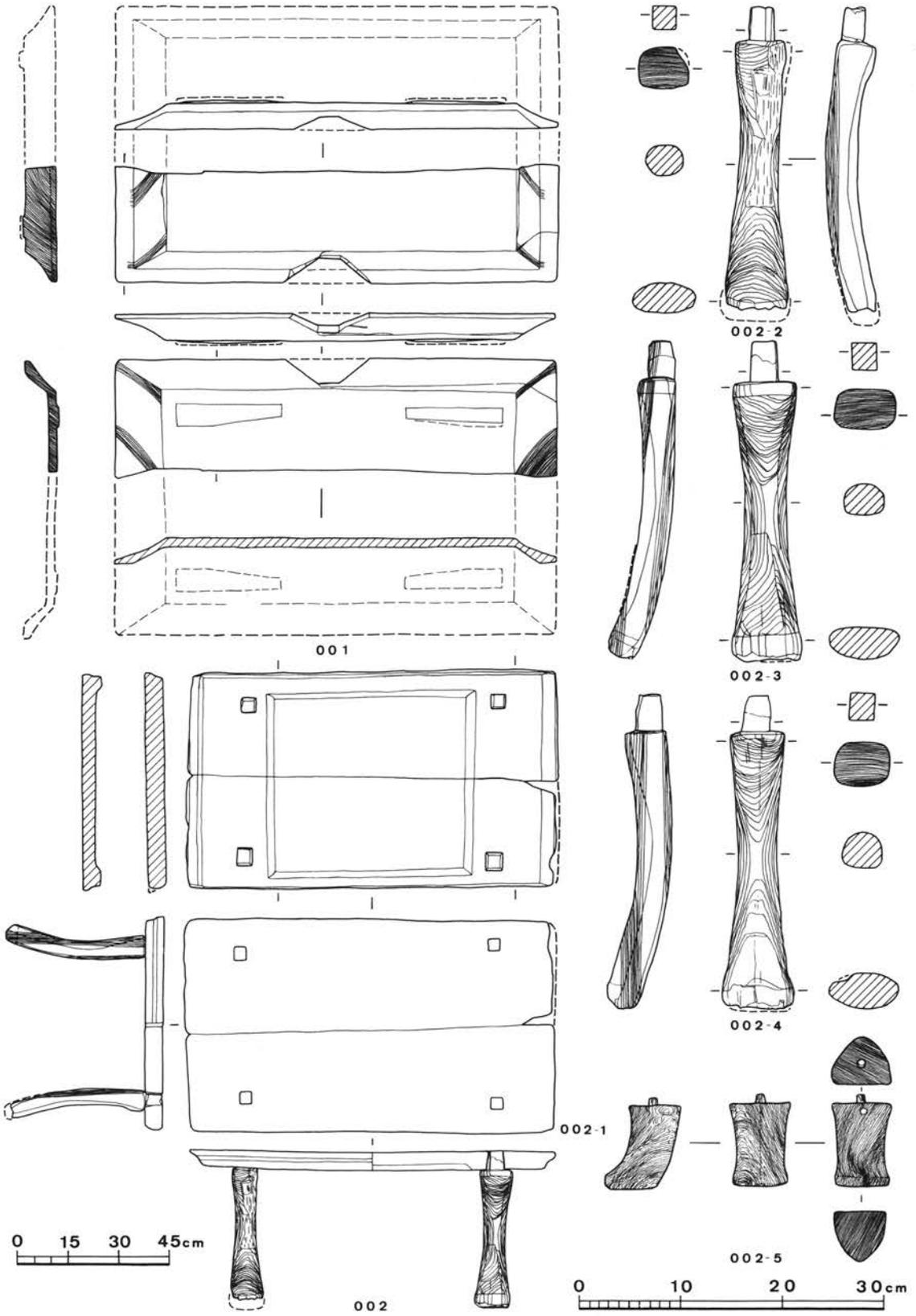
第2次調査石製品実測図(4)



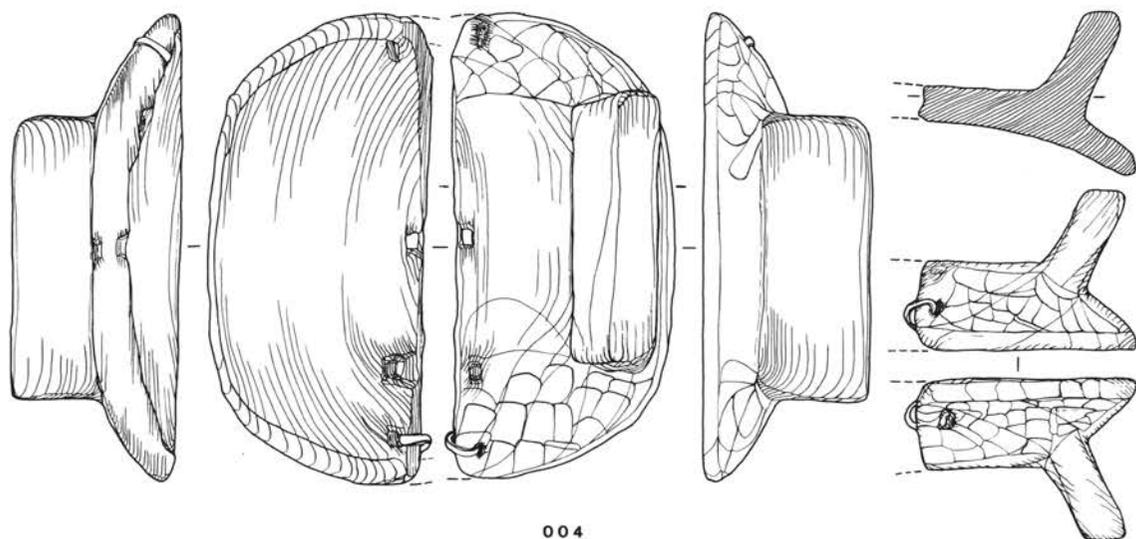
第2次調査石製品実測図(5)



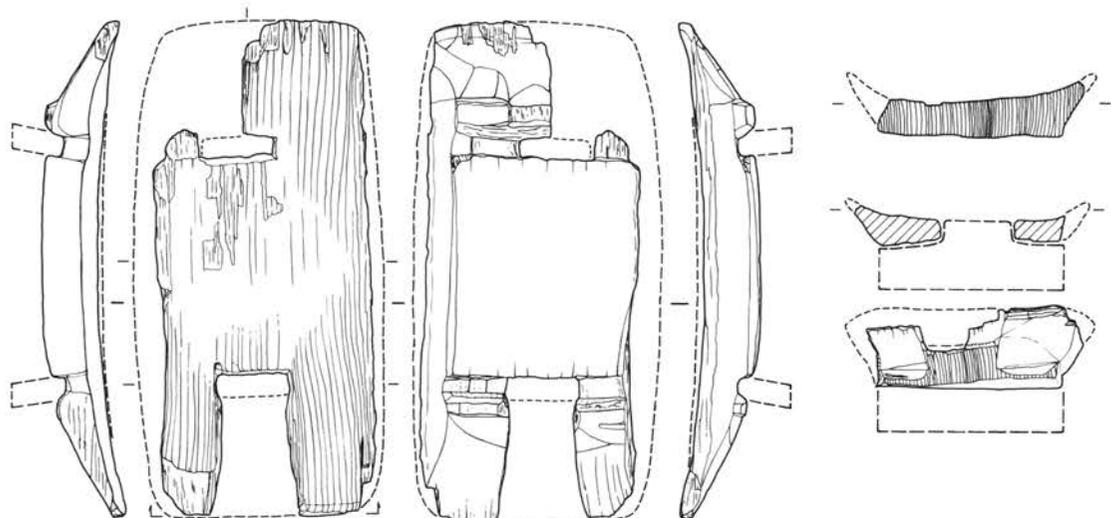
第2次調査石製品実測図(6)



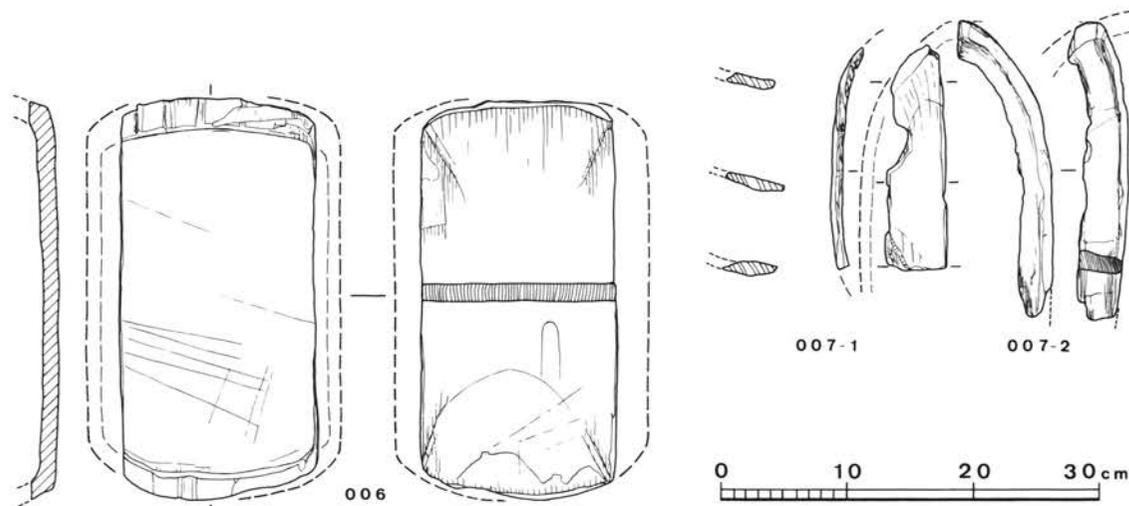
第2次調査木製品実測図(1) (案・脚)



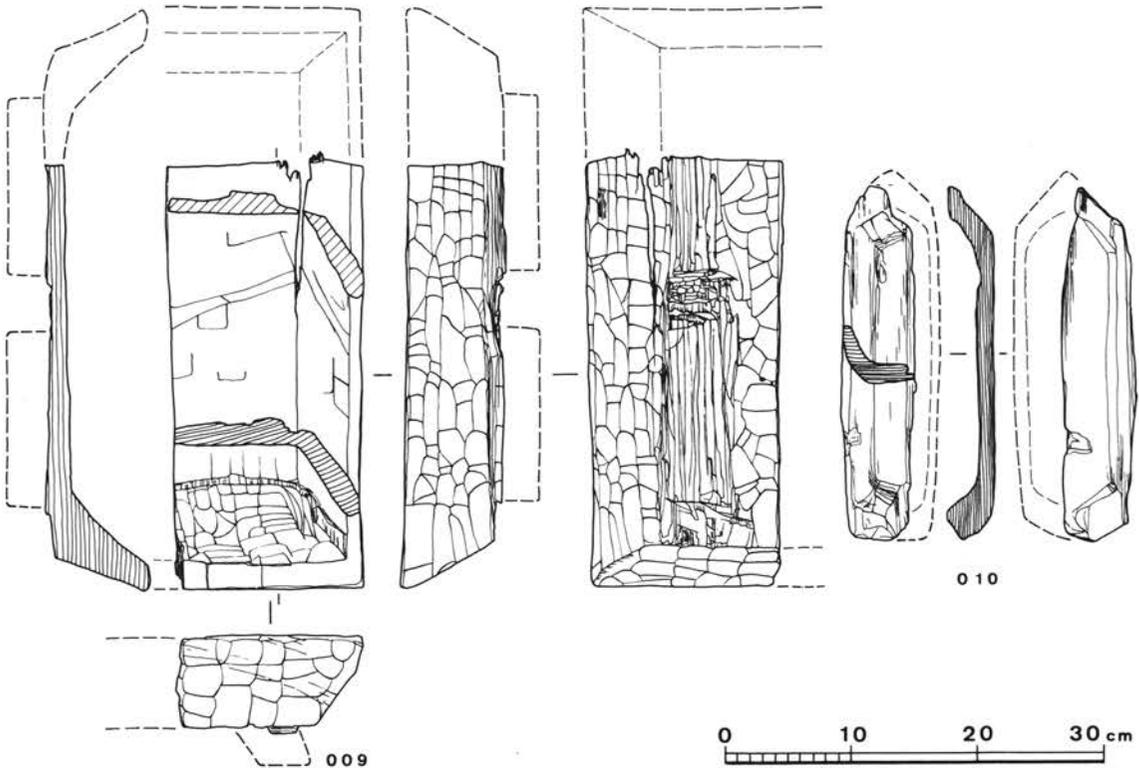
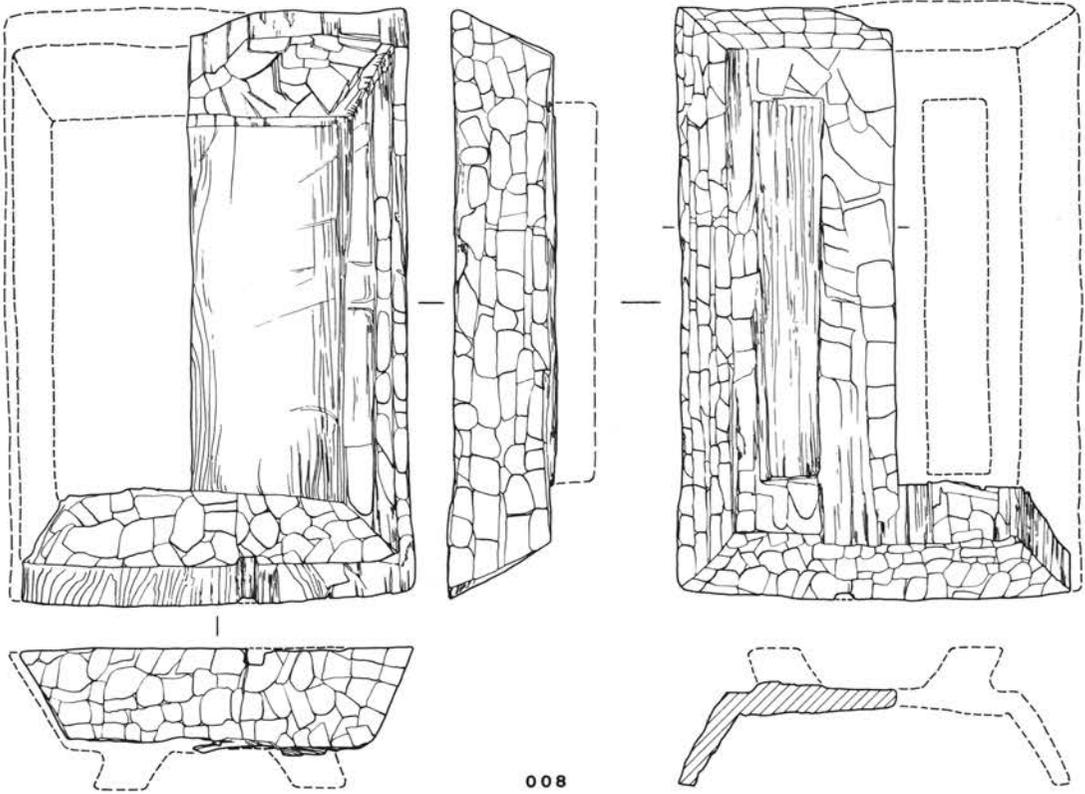
004



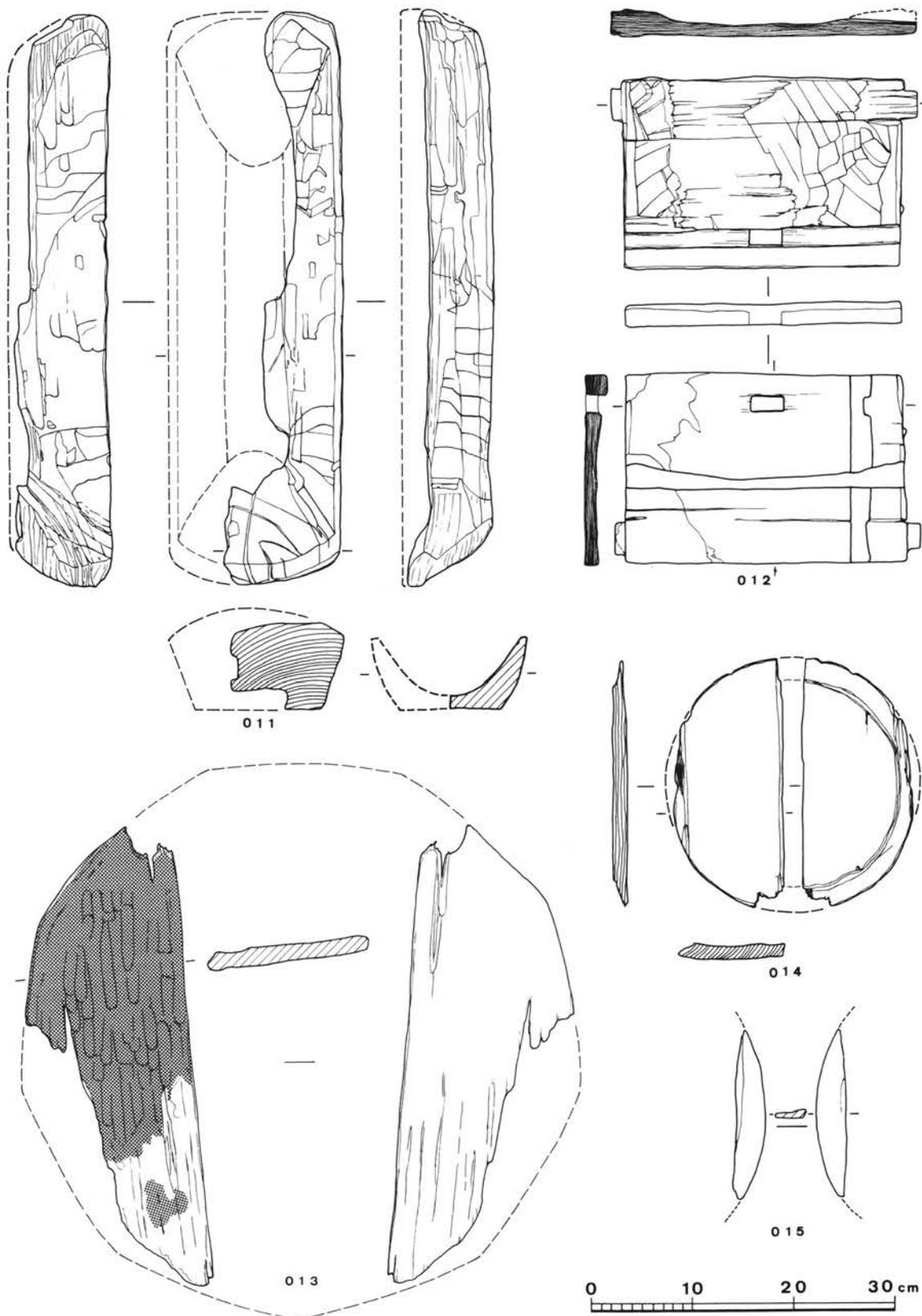
005



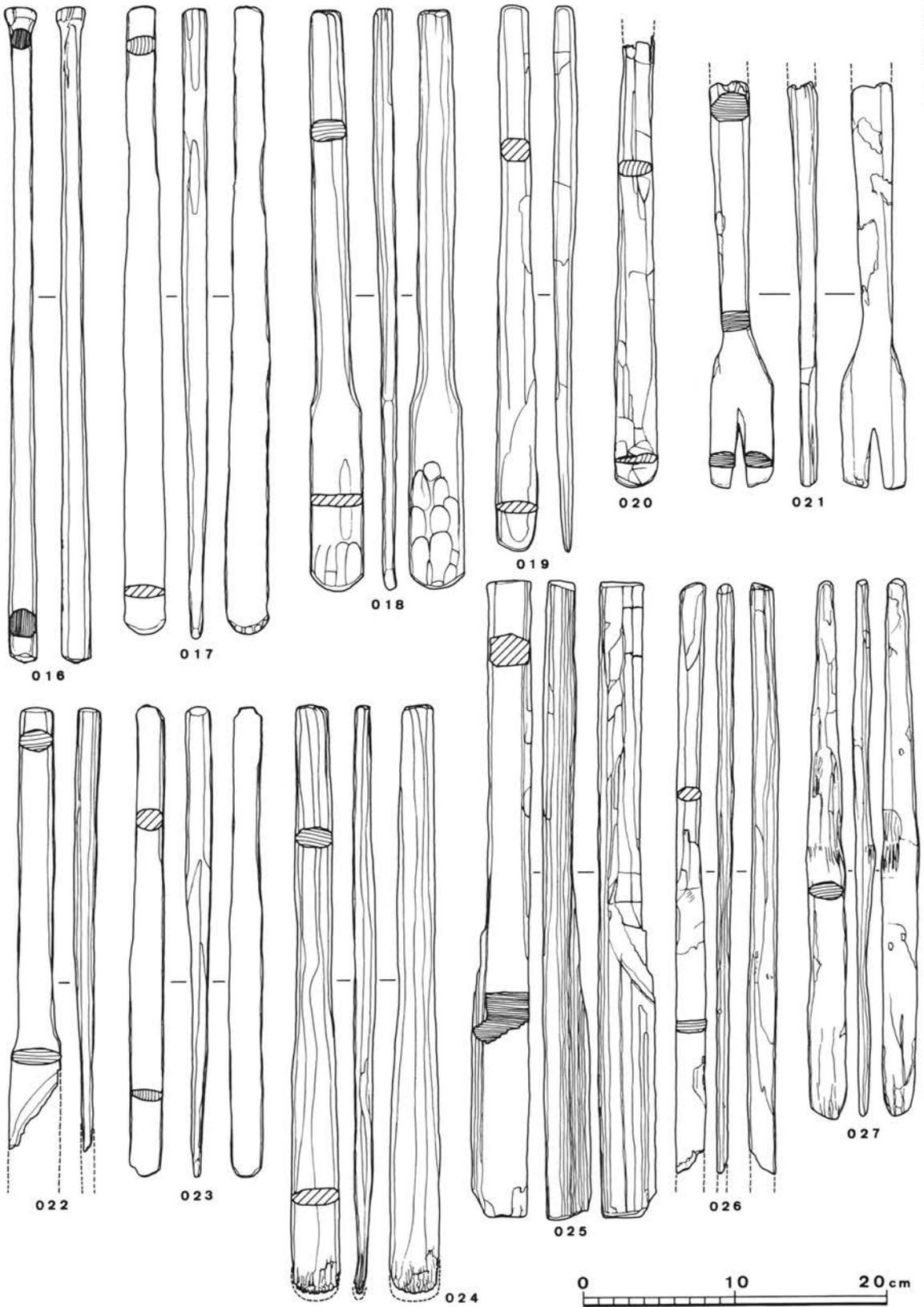
第2次調査木製品実測図(2) (案・槽)



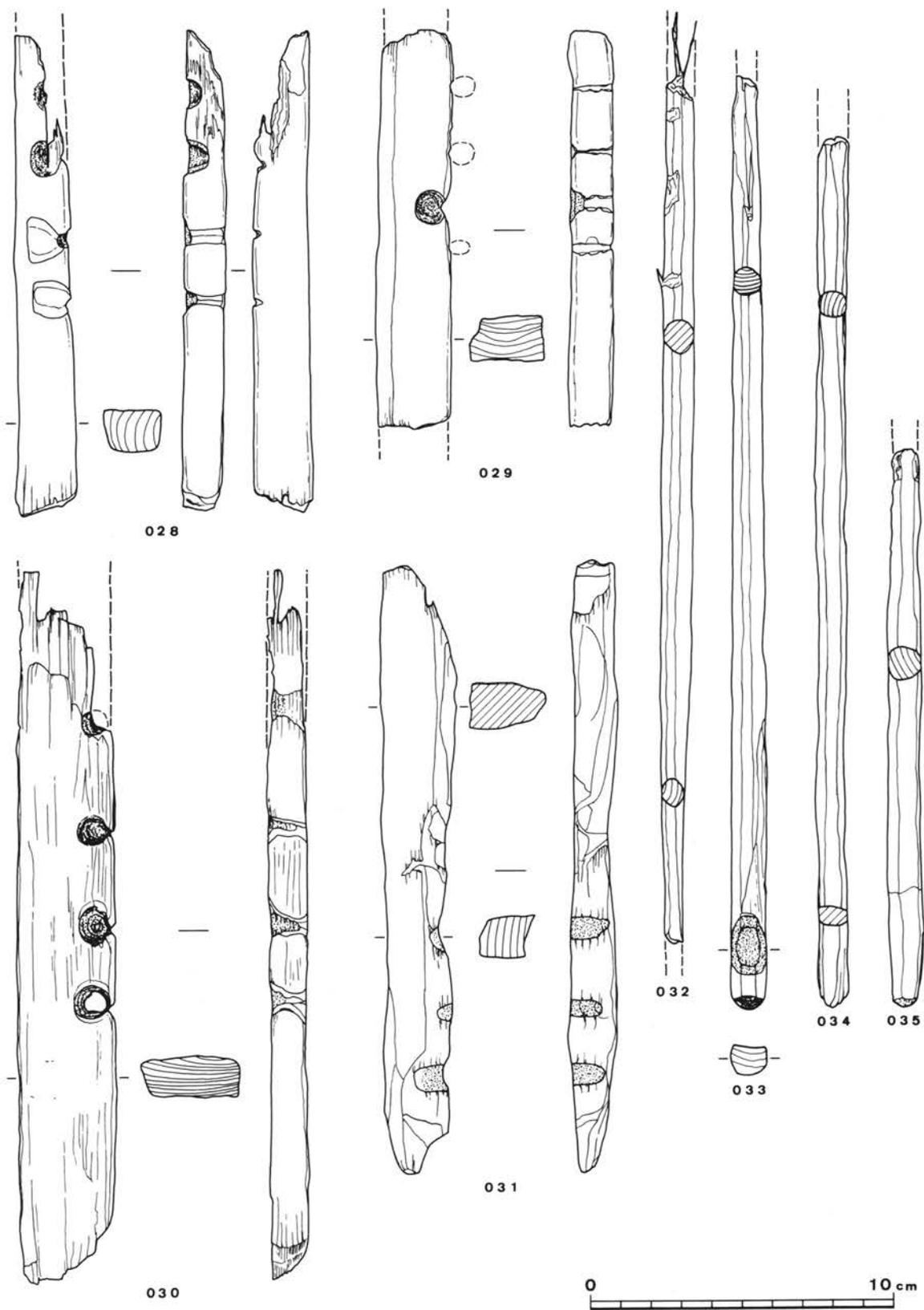
第2次調査木製品実測図(3) (盤・槽)



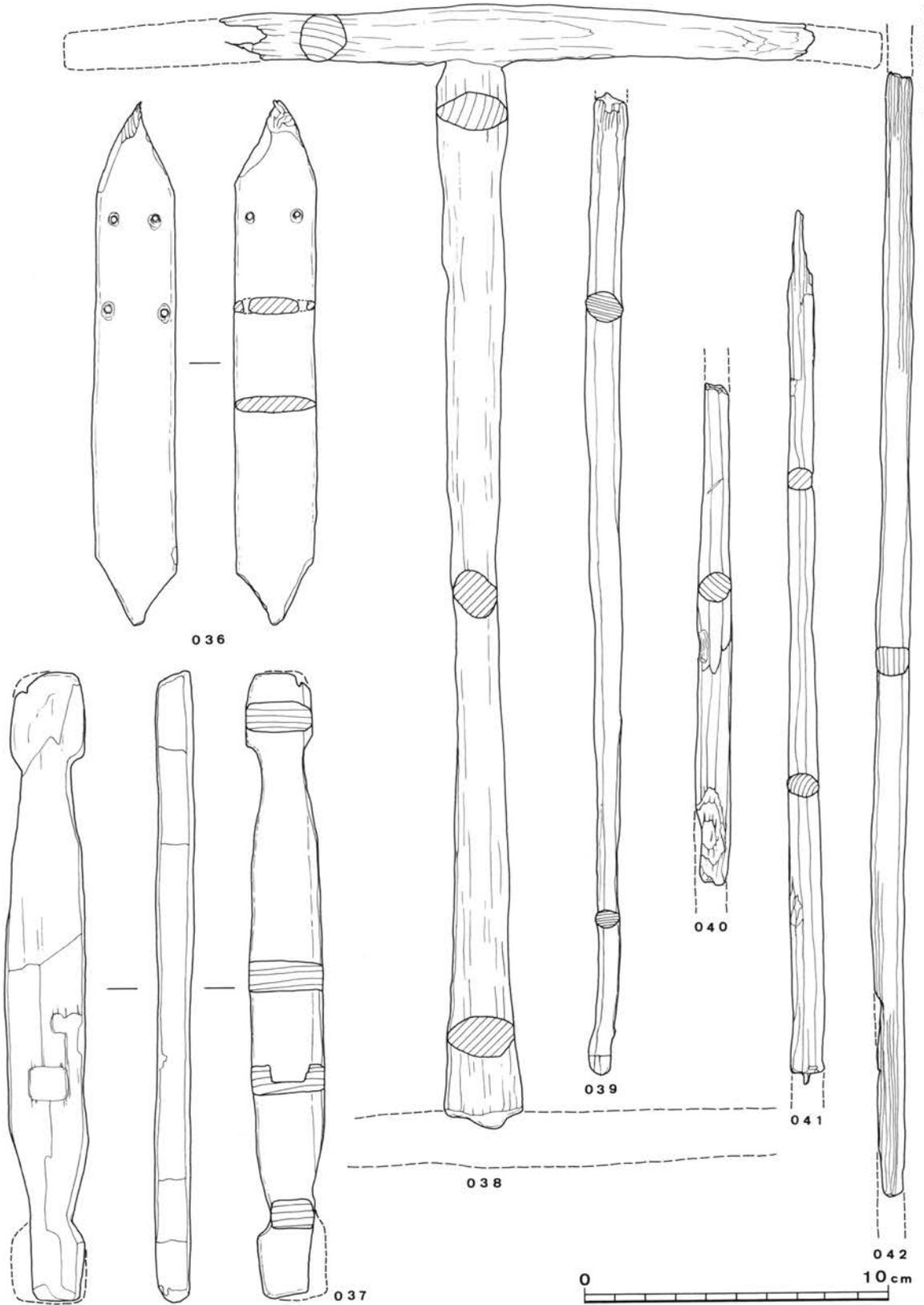
第2次調査木製品実測図(4) (槽・箱・桶底)



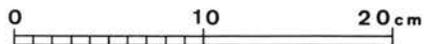
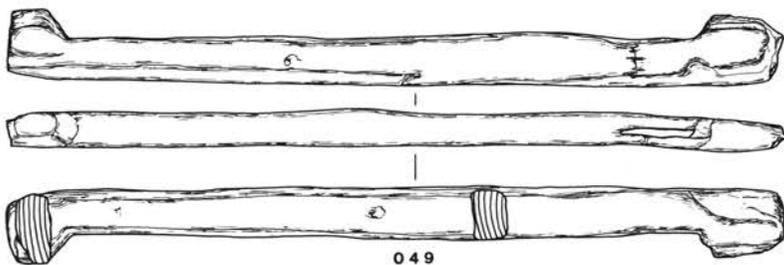
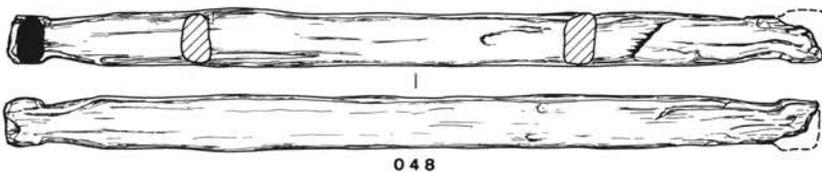
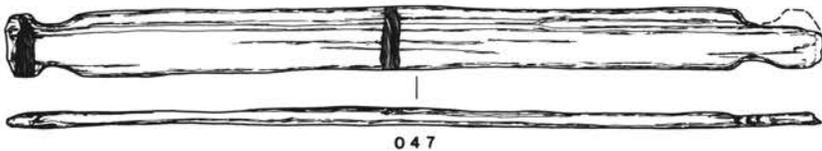
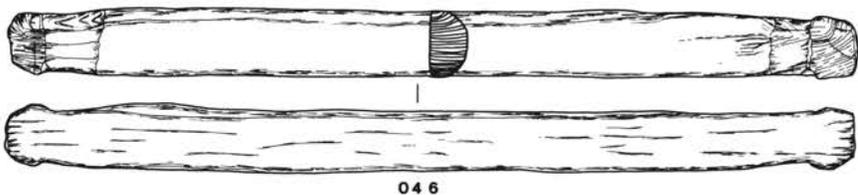
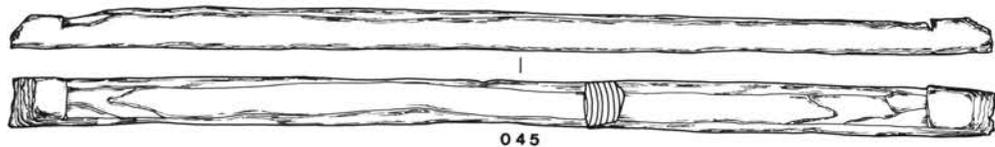
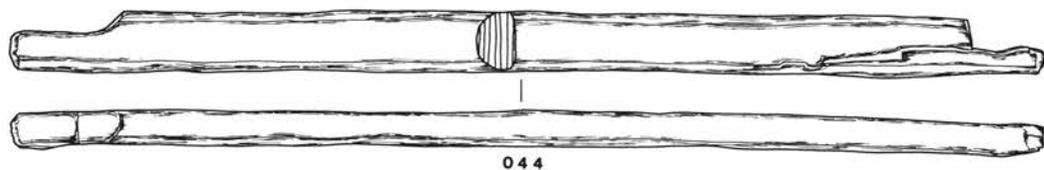
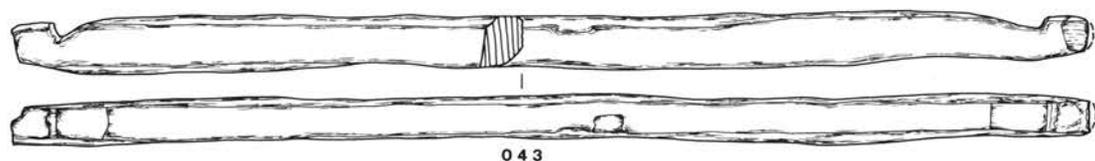
第2次調査木製品実測図(5) (杓柄・杓子)



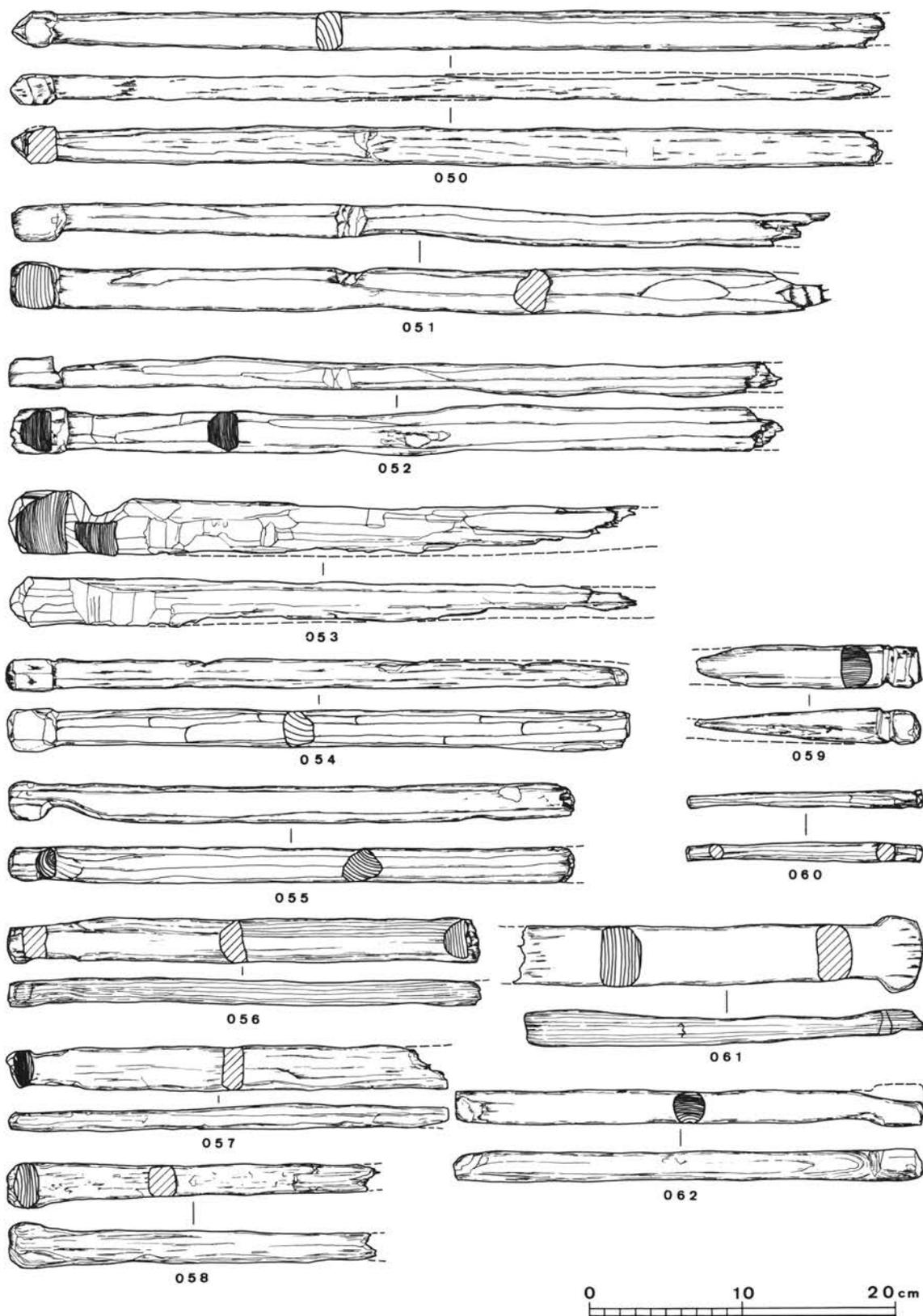
第2次調査木製品実測図(6) (火鑽臼・火鑽杵)



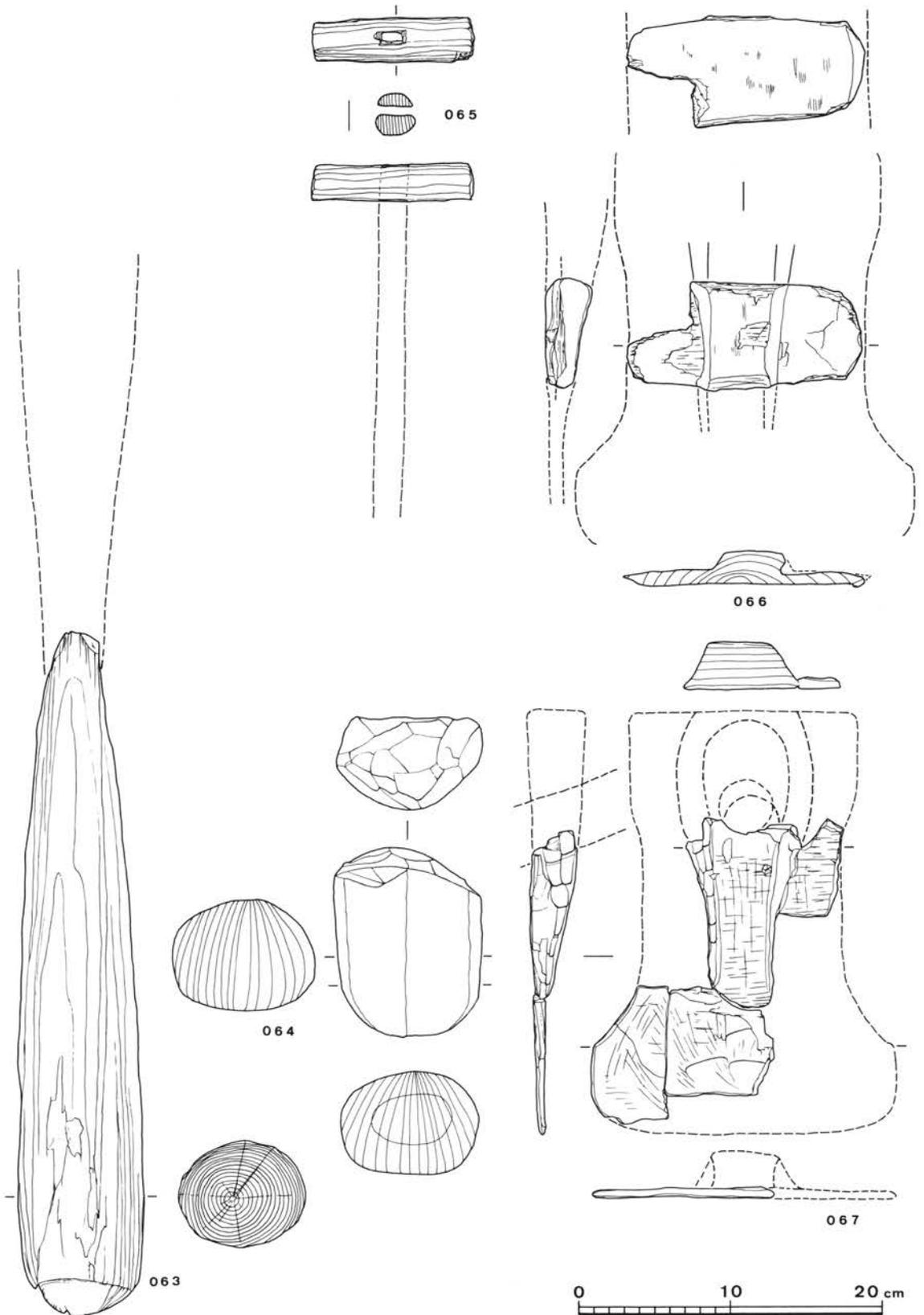
第2次調査木製品実測図(7) 紡織具 (棒)



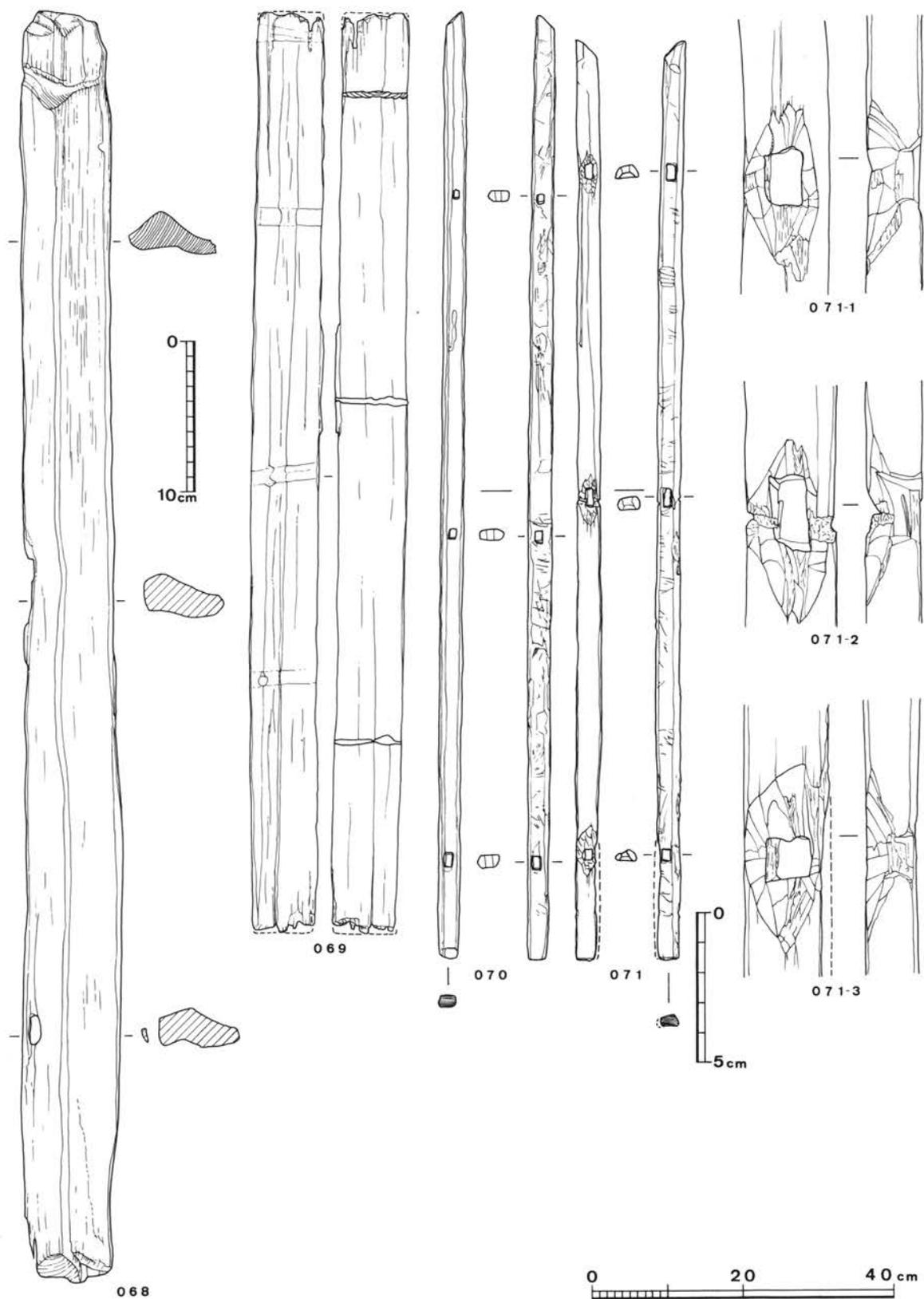
第2次調査木製品実測図(8) 紡織具(有頭棒), 農具(鎌柄)



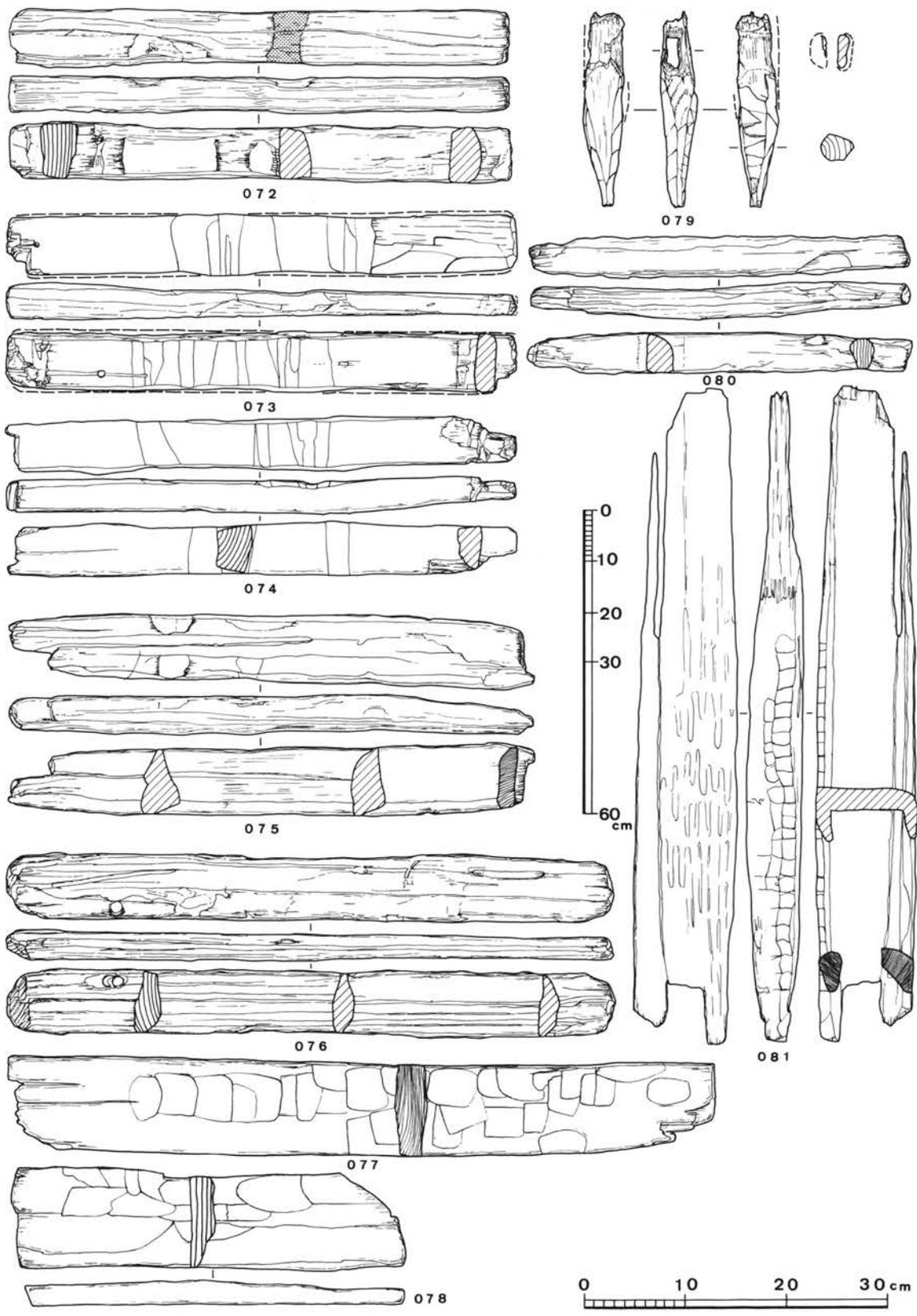
第2次調査木製品実測図(9) (有頭棒・刷毛柄)



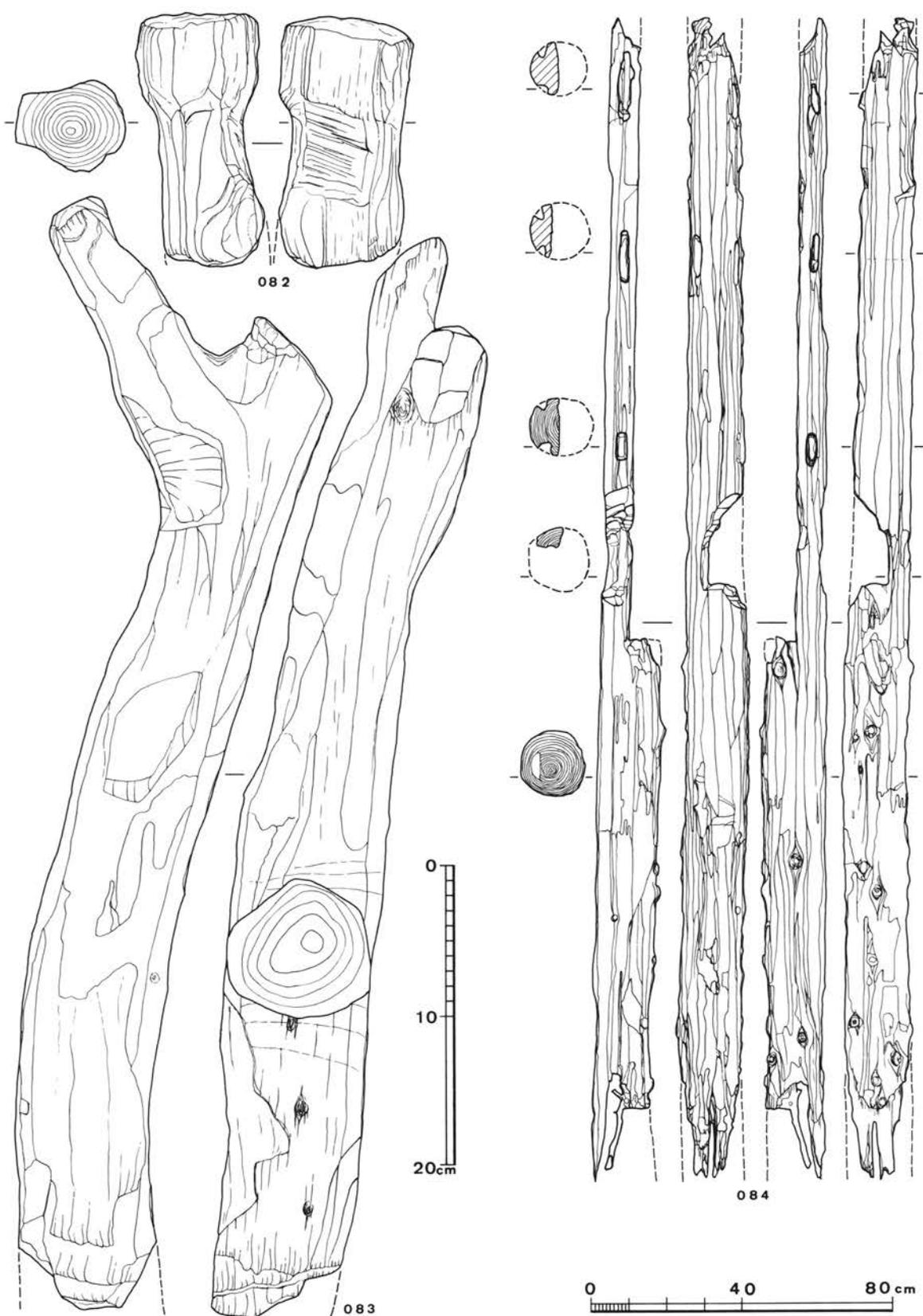
第2次調査木製品実測図(10) 農具(鋤柄・鋤先・杵)



第2次調査木製品実測図(11) 土木建築材



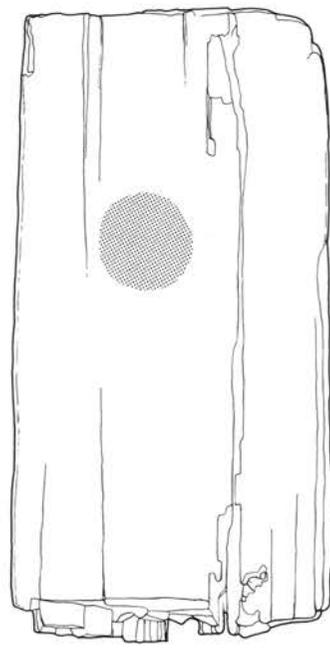
第2次調査木製品実測図(12) 暗渠材



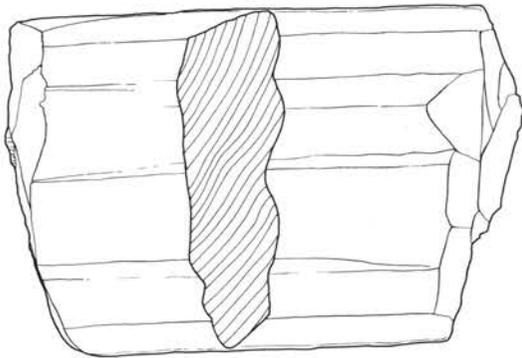
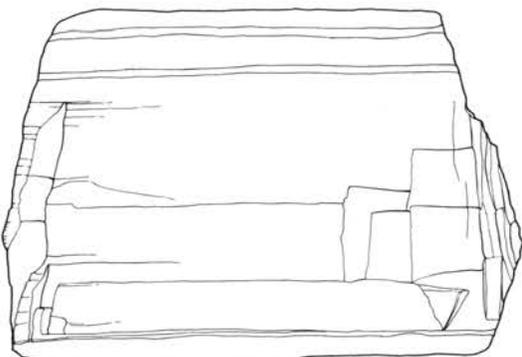
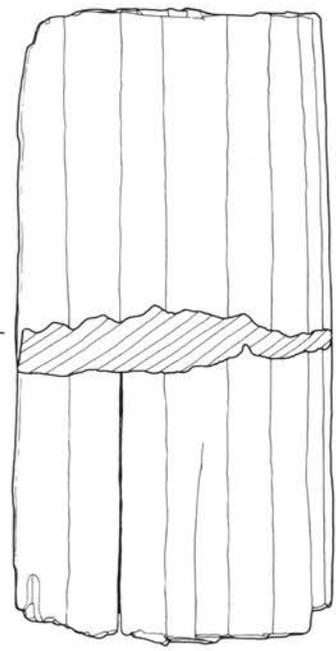
第2次調査木製品実測図(13) 土木建築材



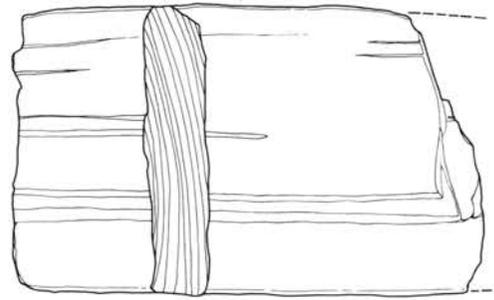
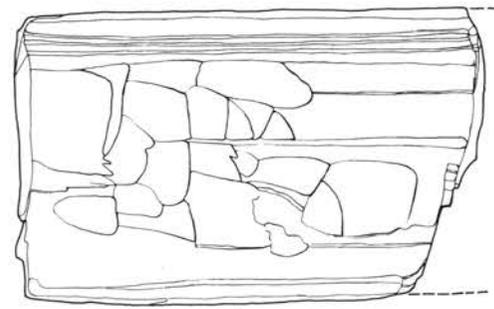
085



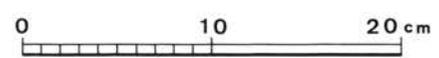
086



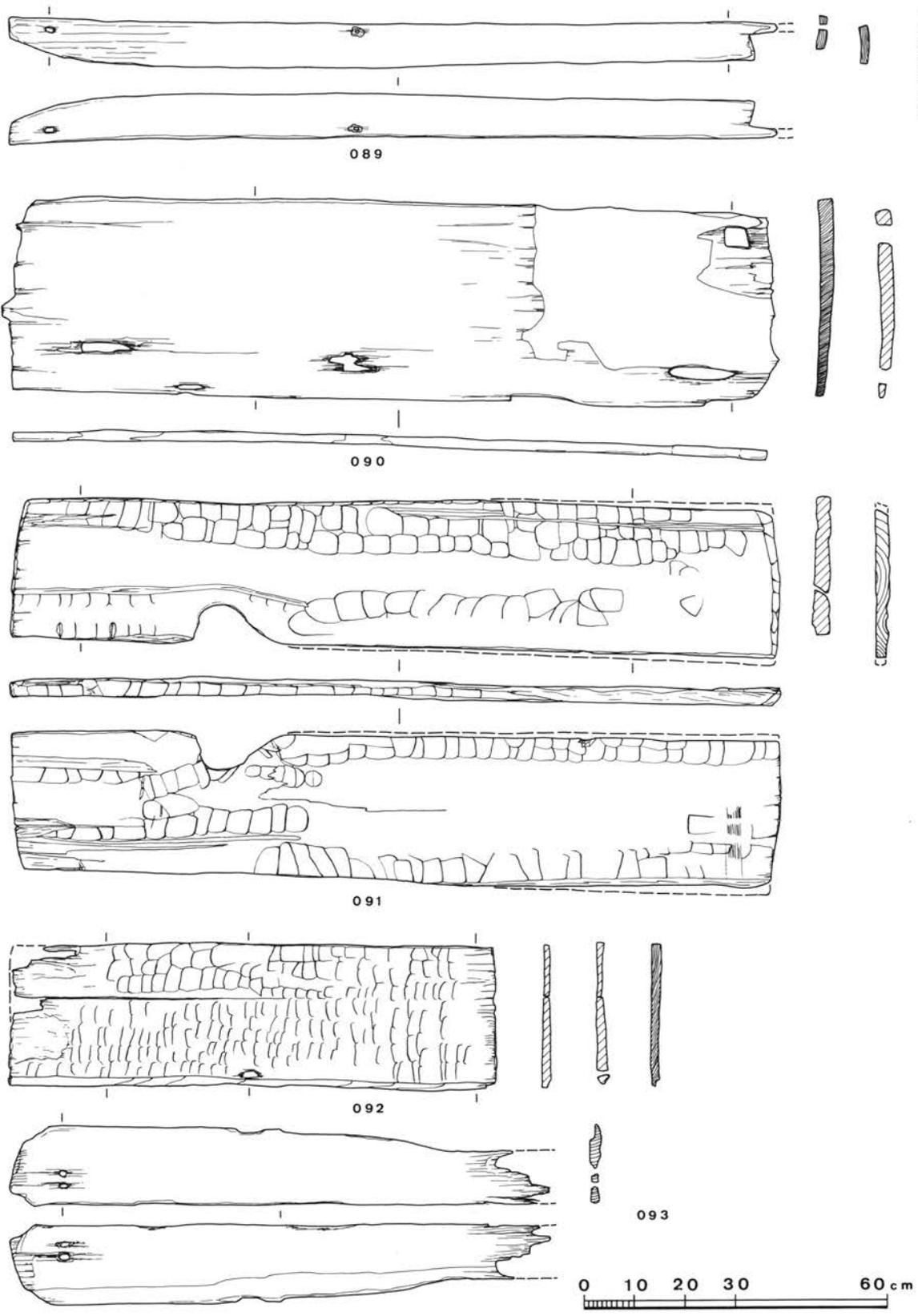
087



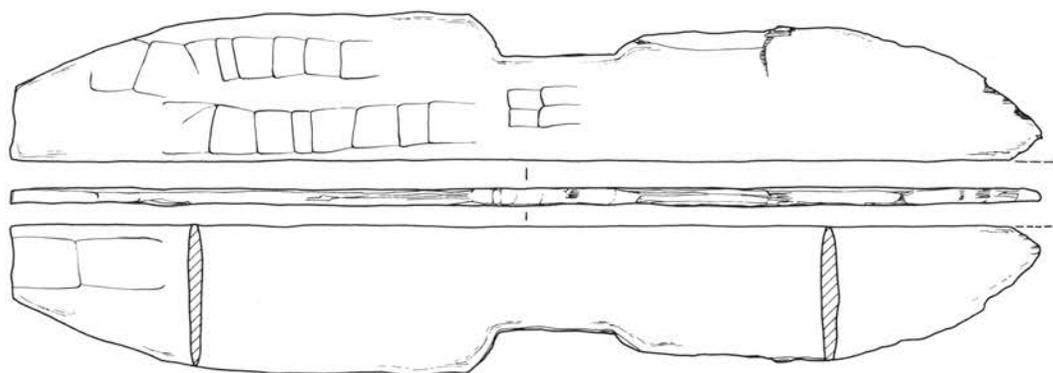
088



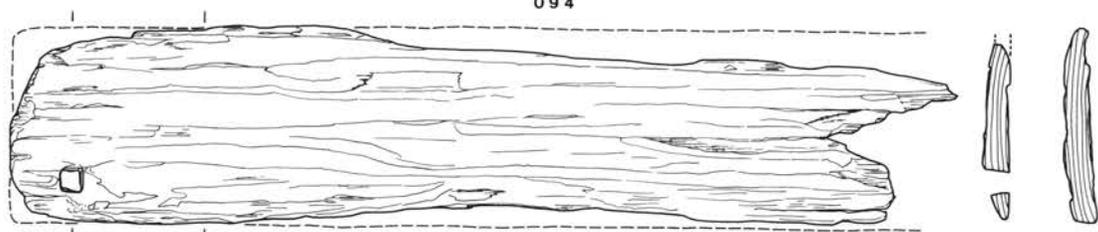
第2次調査木製品実測図(14) 土木建築材(礎板)



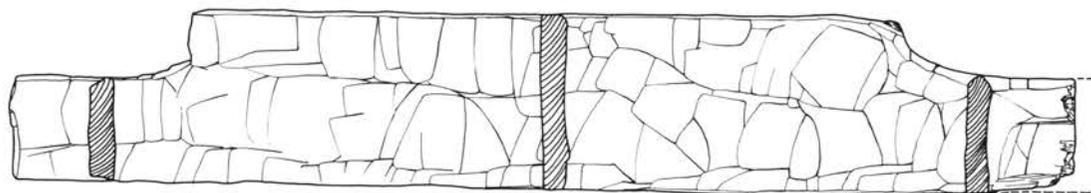
第2次調査木製品実測図(15) 土木建築材(擁壁材) 転用材



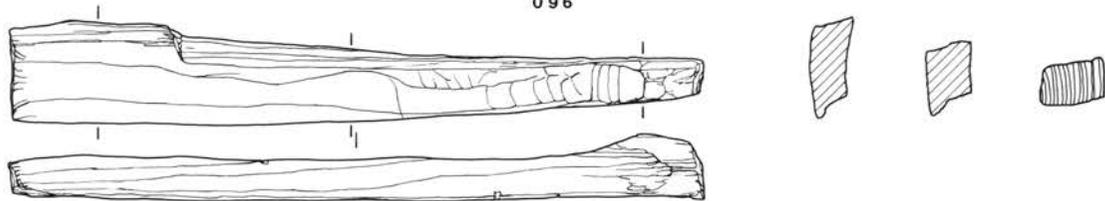
094



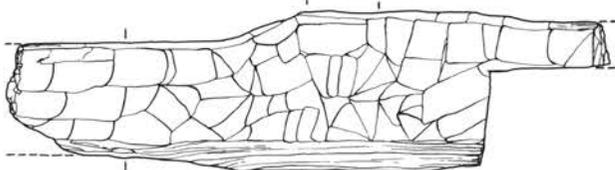
095



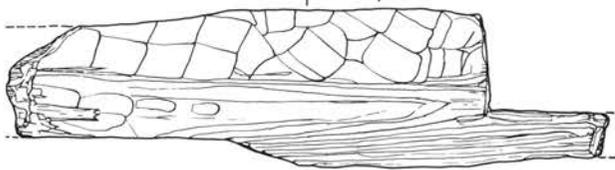
096



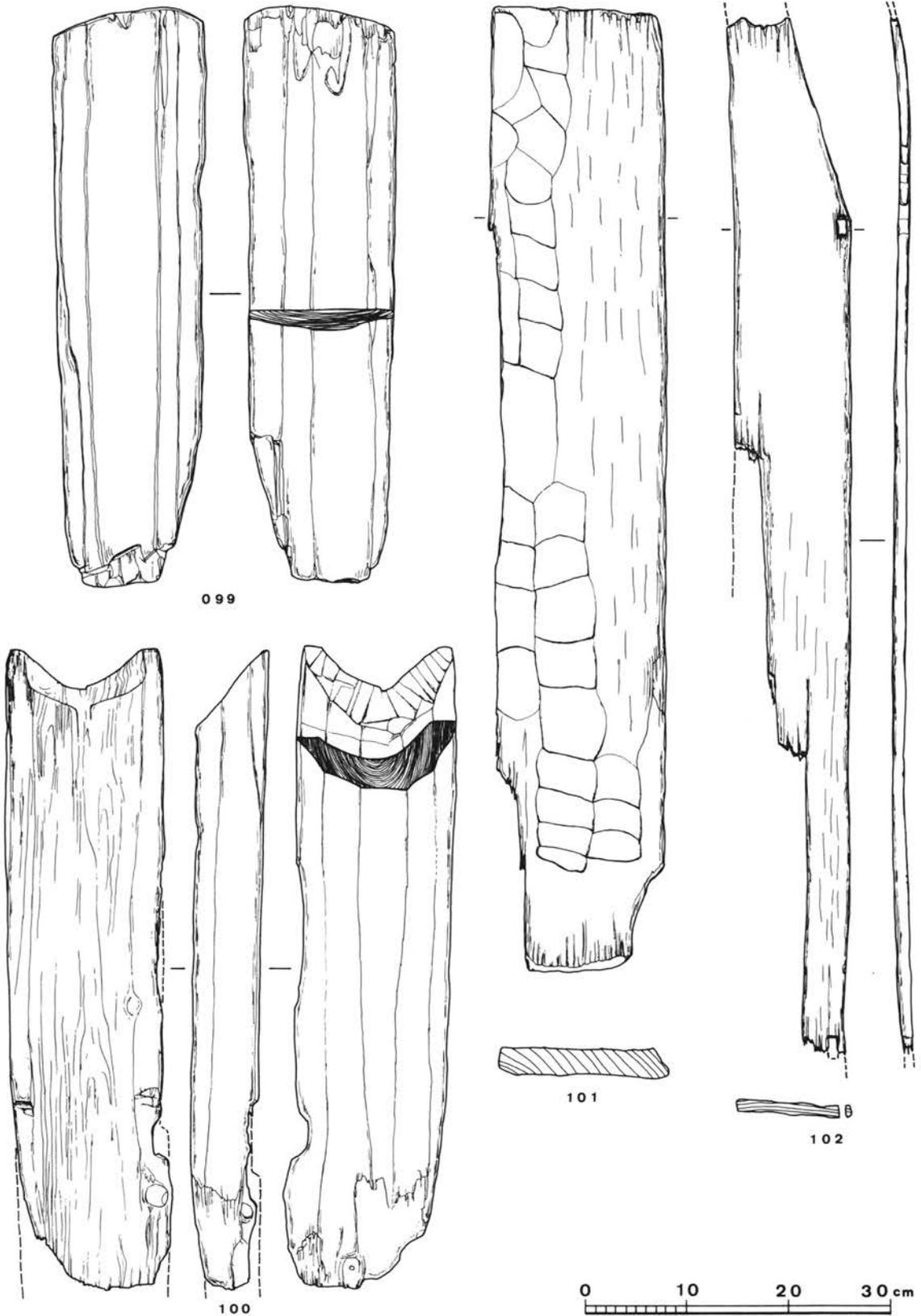
097



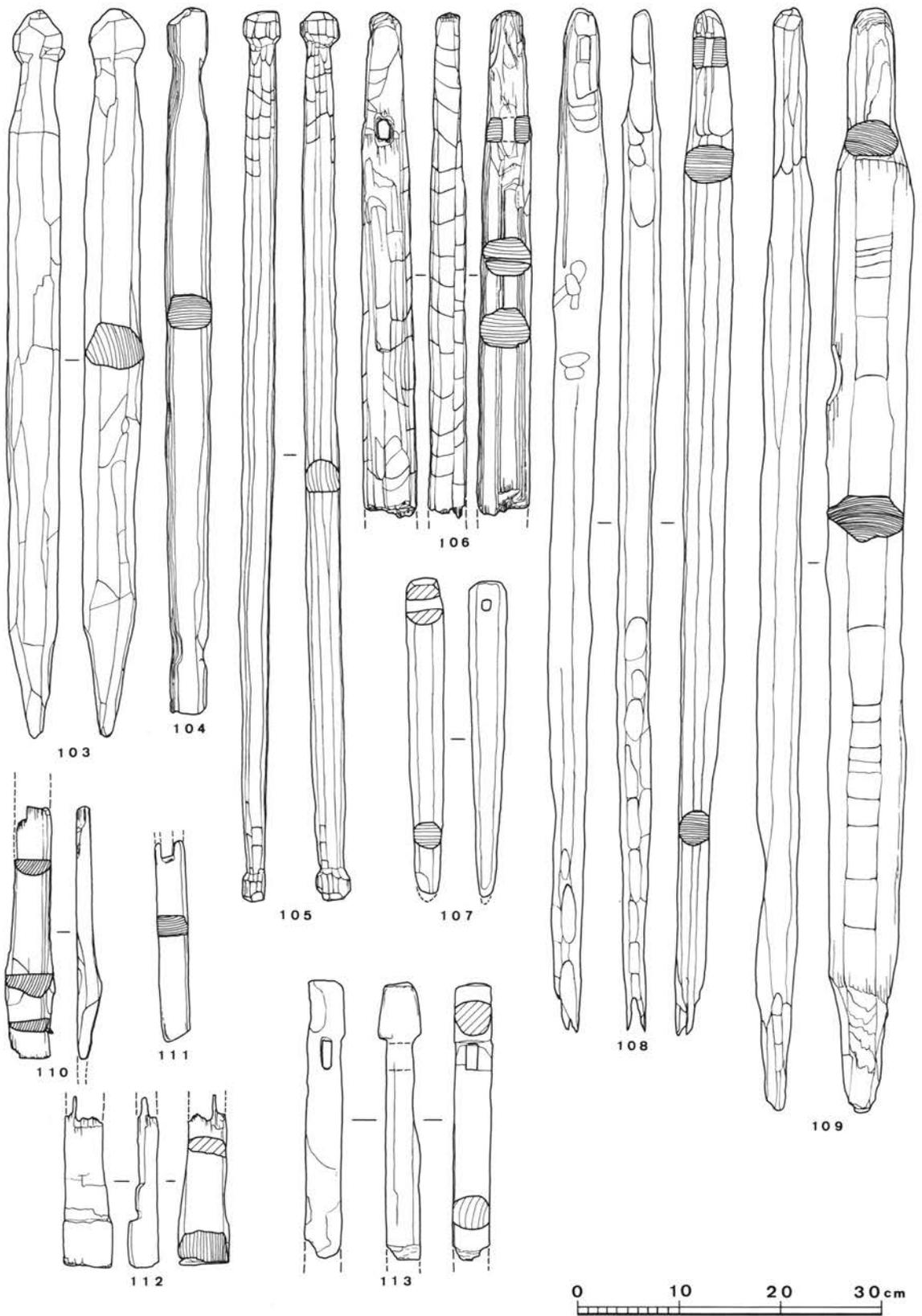
098



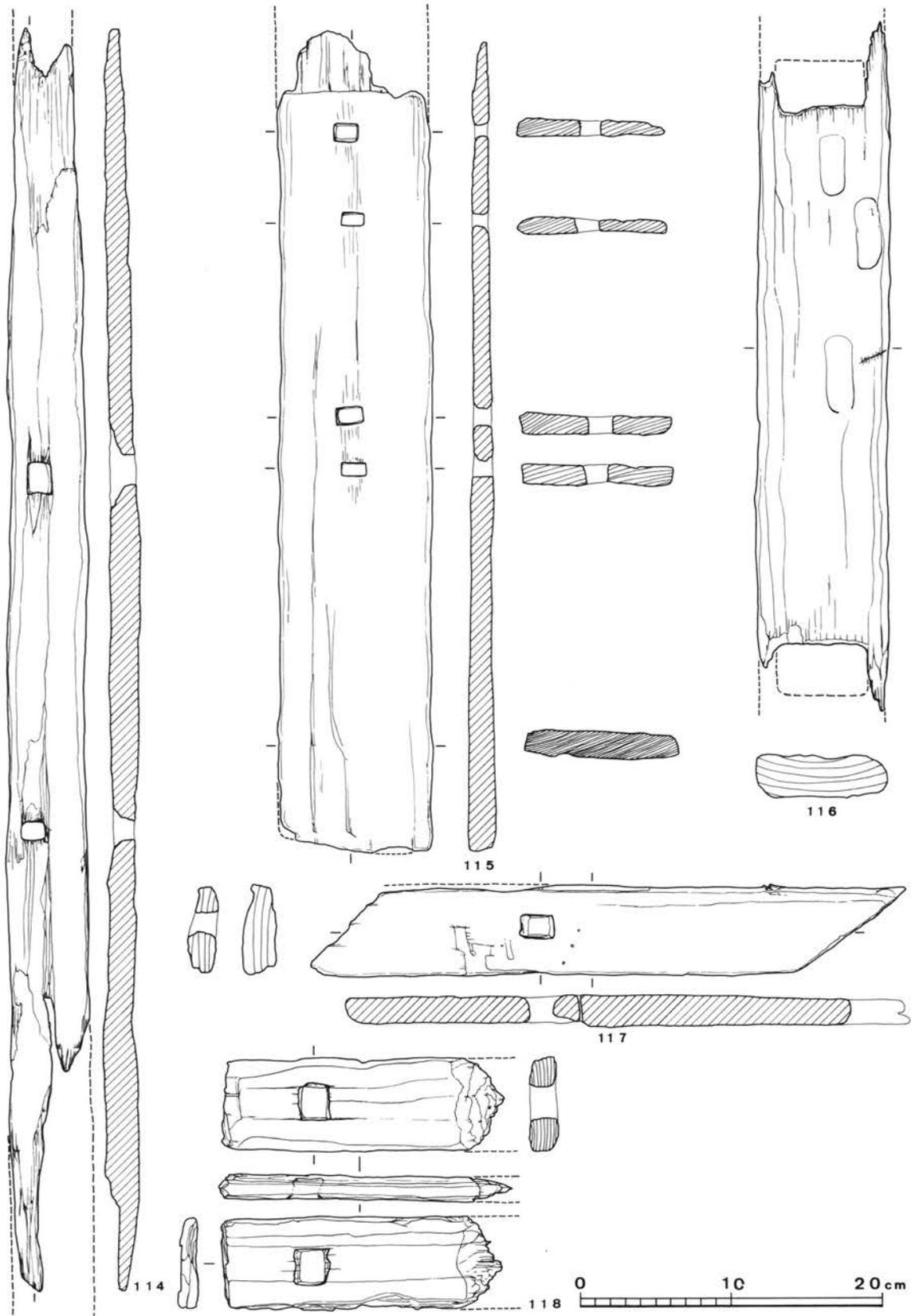
第2次調査木製品実測図(16) 建築材



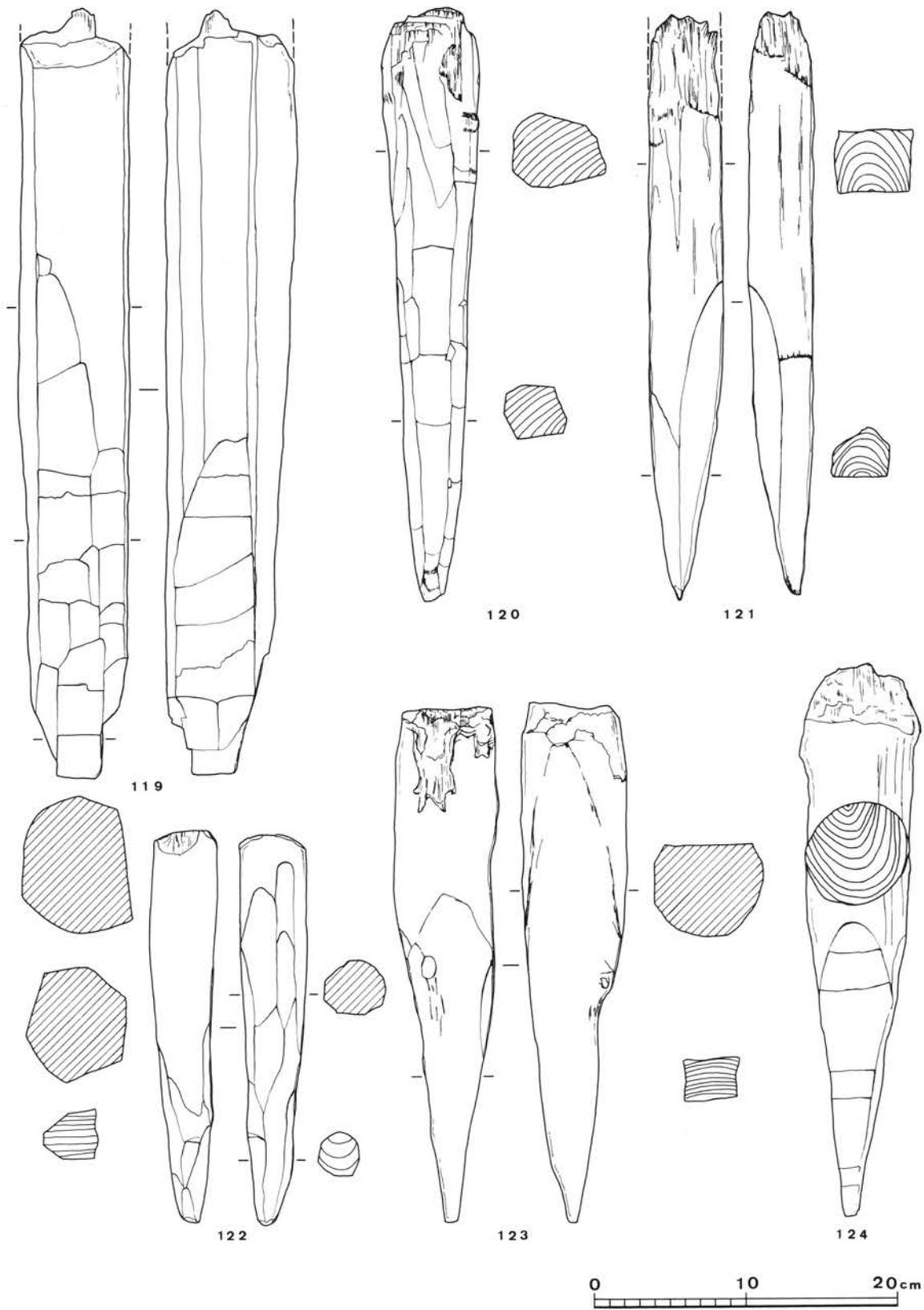
第2次調査木製品実測図(17) 建築材



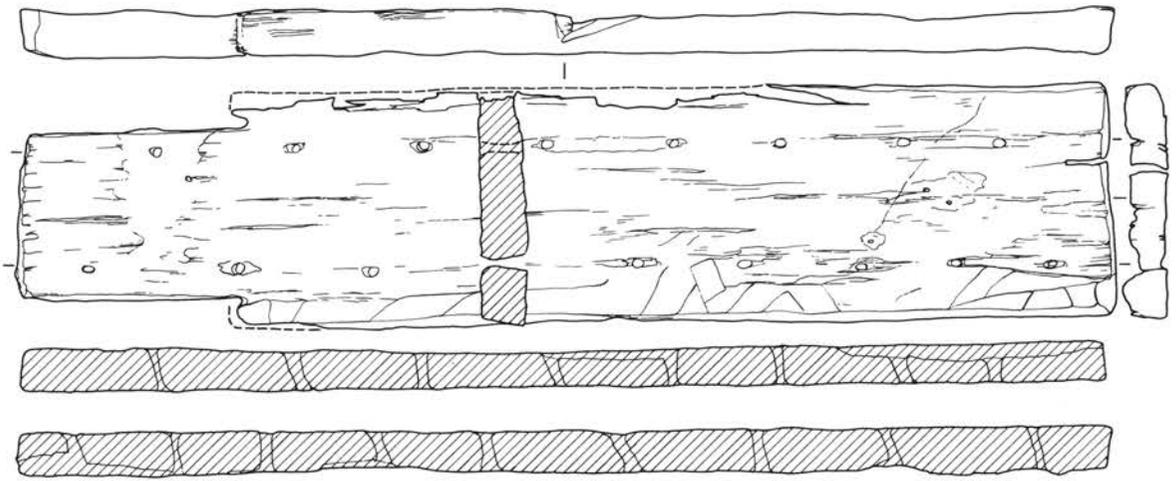
第2次調査木製品実測図(18) 土木建築材他



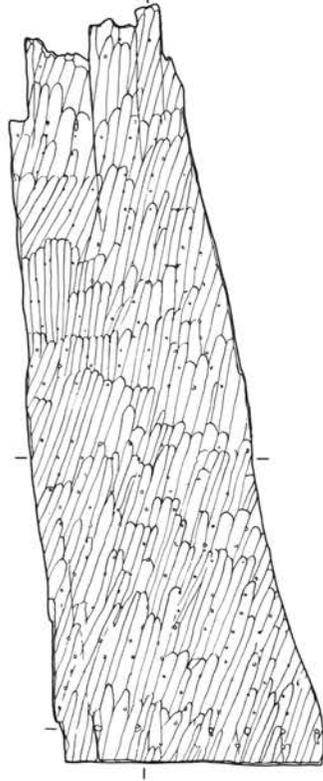
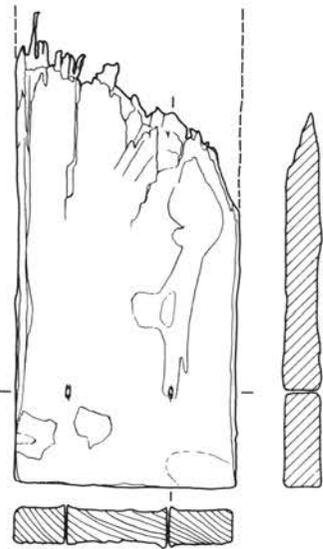
第2次調査木製品実測図(19) 土木建築材(組材)



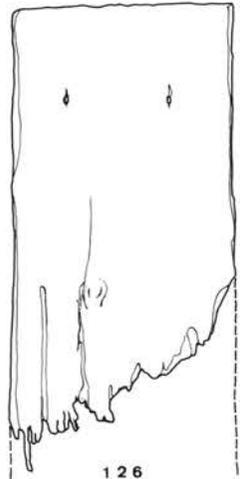
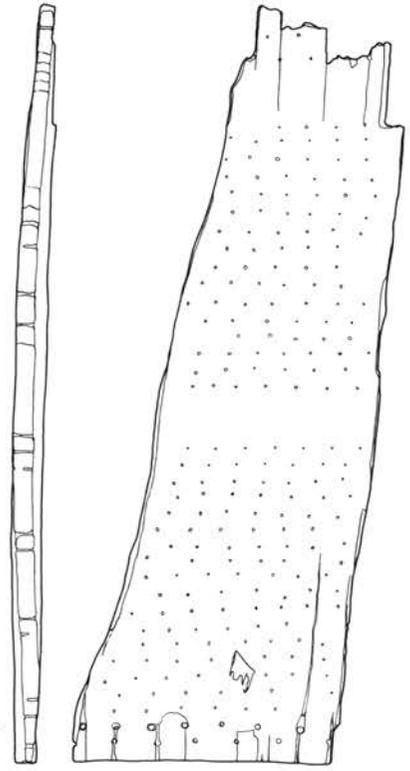
第2次調査木製品実測図(20) 土木建築材(杭)



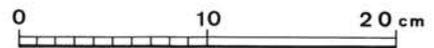
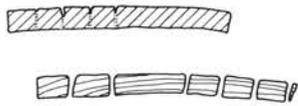
125



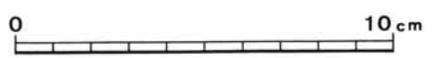
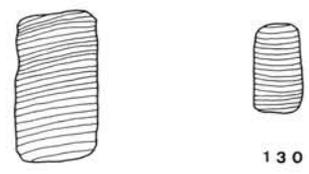
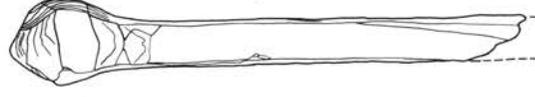
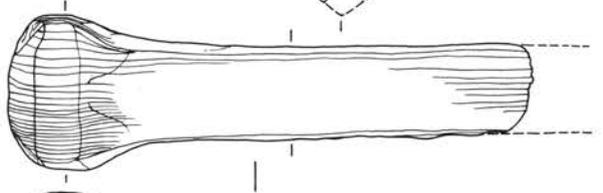
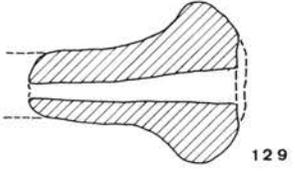
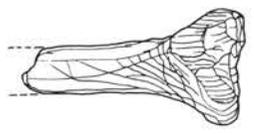
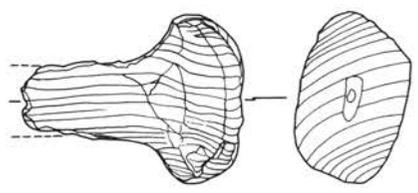
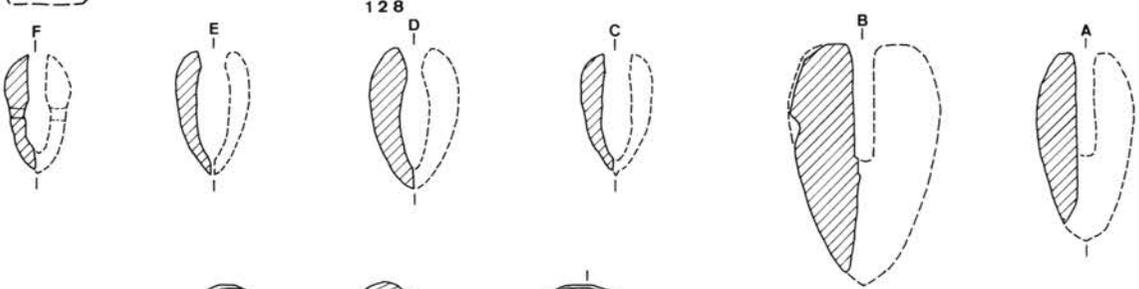
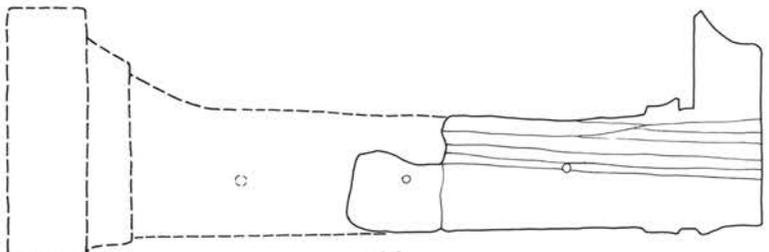
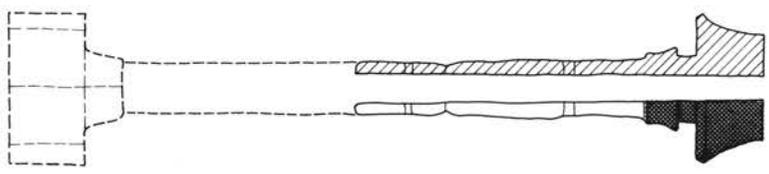
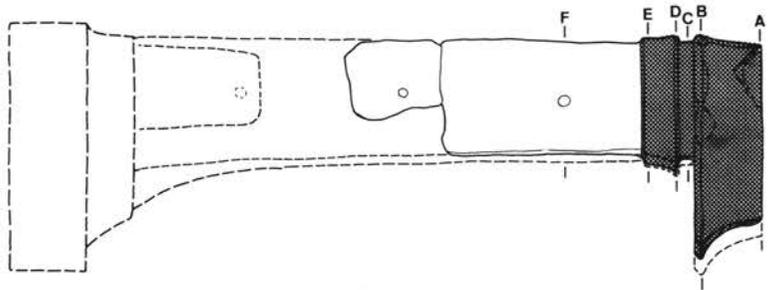
127



126



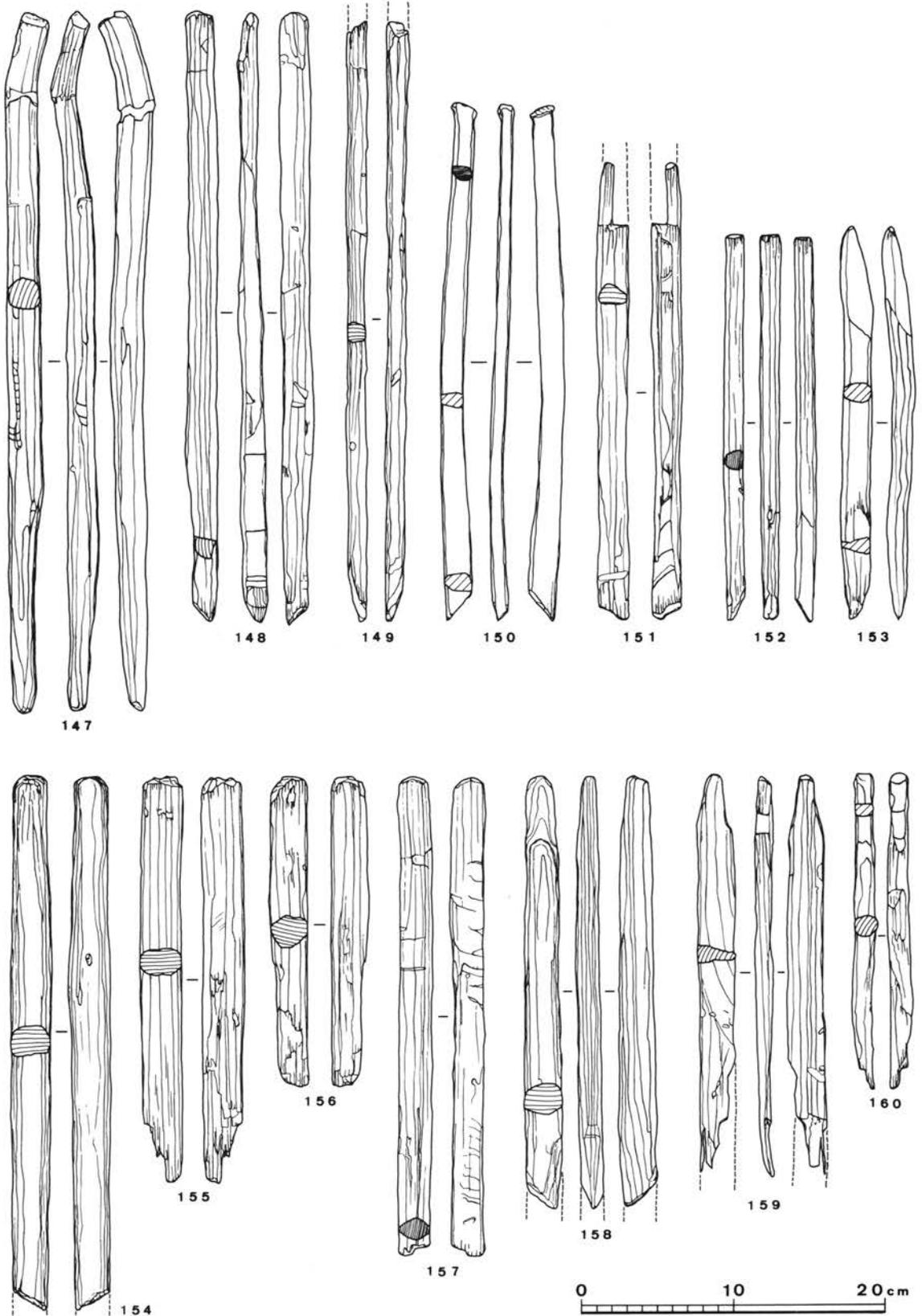
第2次調査木製品実測図(21) 武器(楯)他



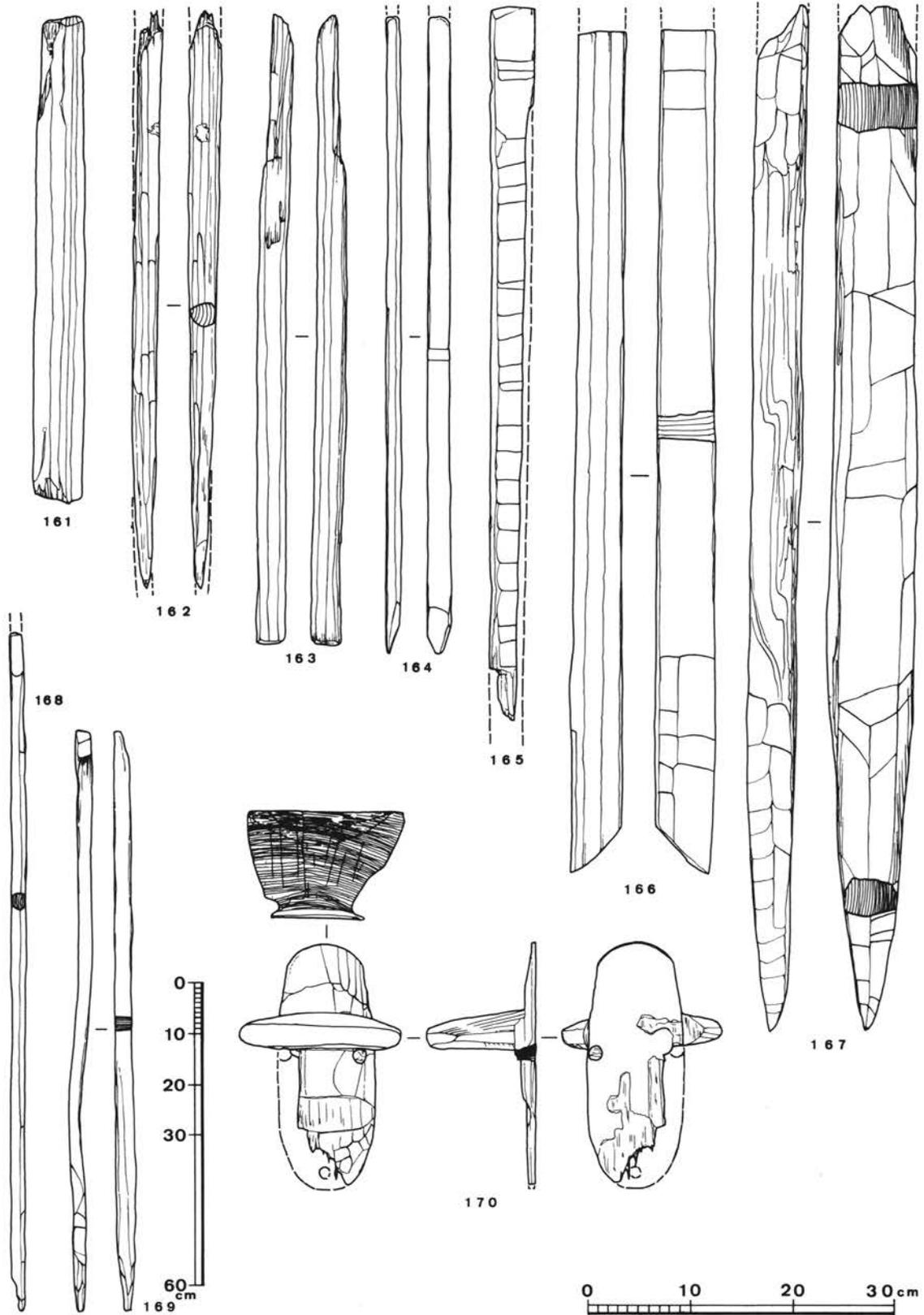
第2次調査木製品実測図(2) 武器(柄)他



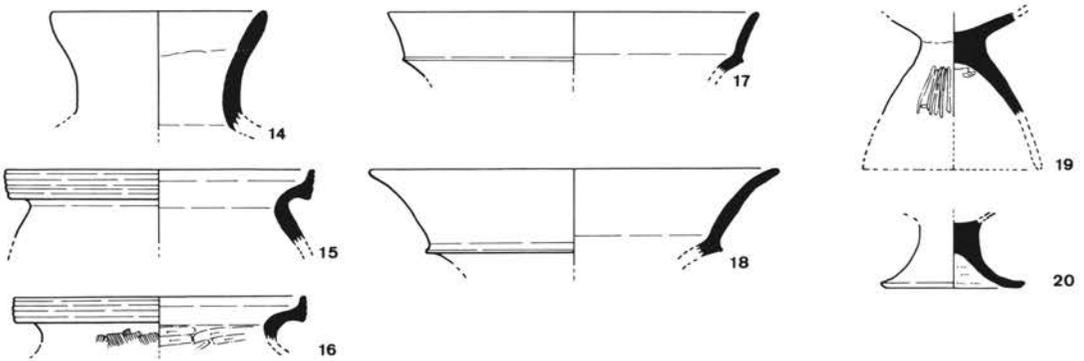
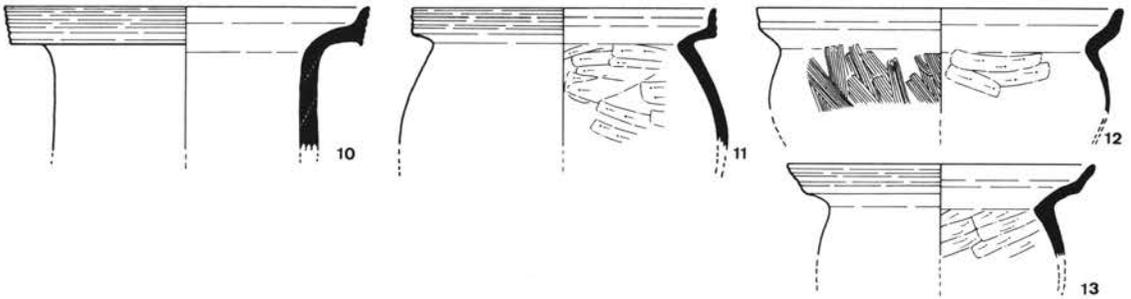
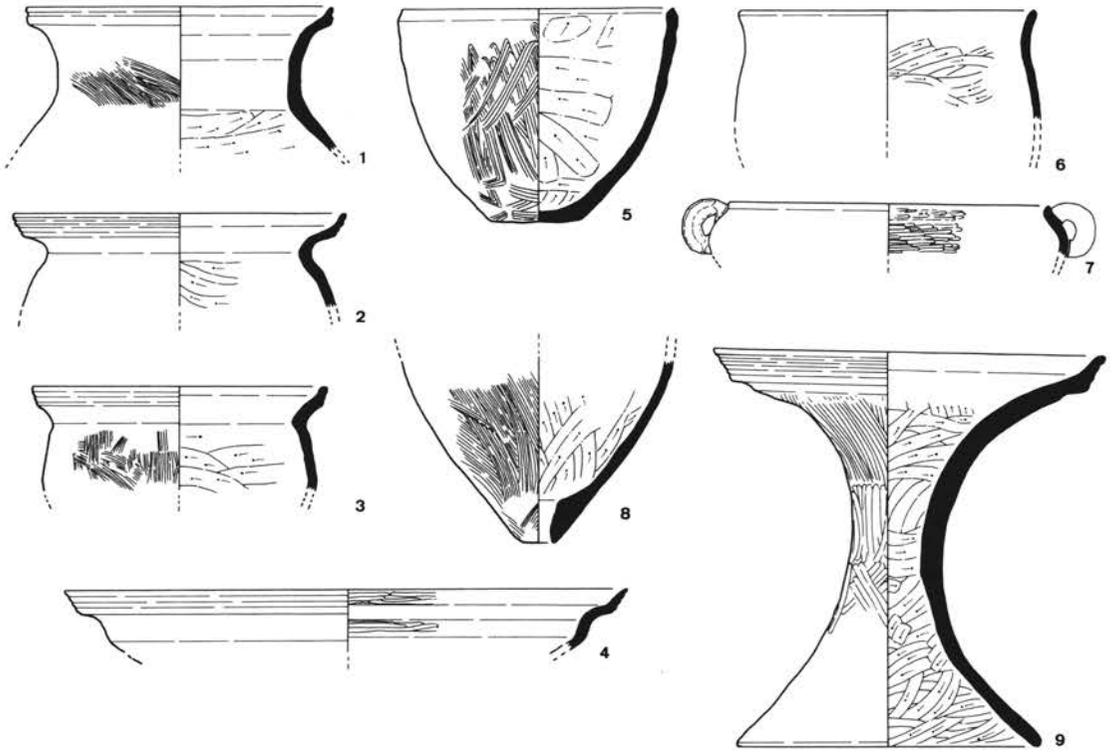
第2次調査木製品実測図(23) 不明木製品



第2次調査木製品実測図(24) 不明木製品

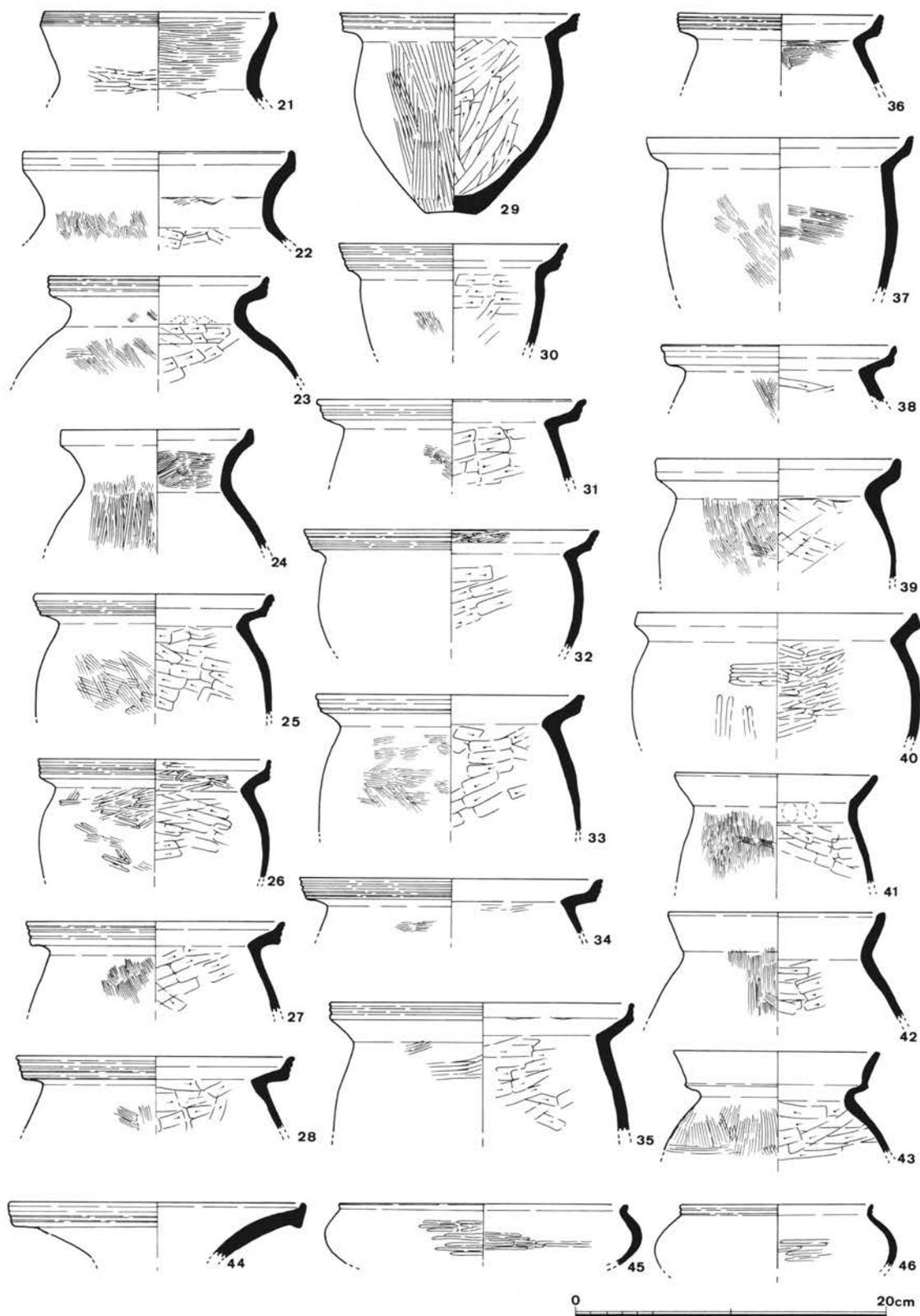


第2次調査木製品実測図(25) 不明木製品・下駄

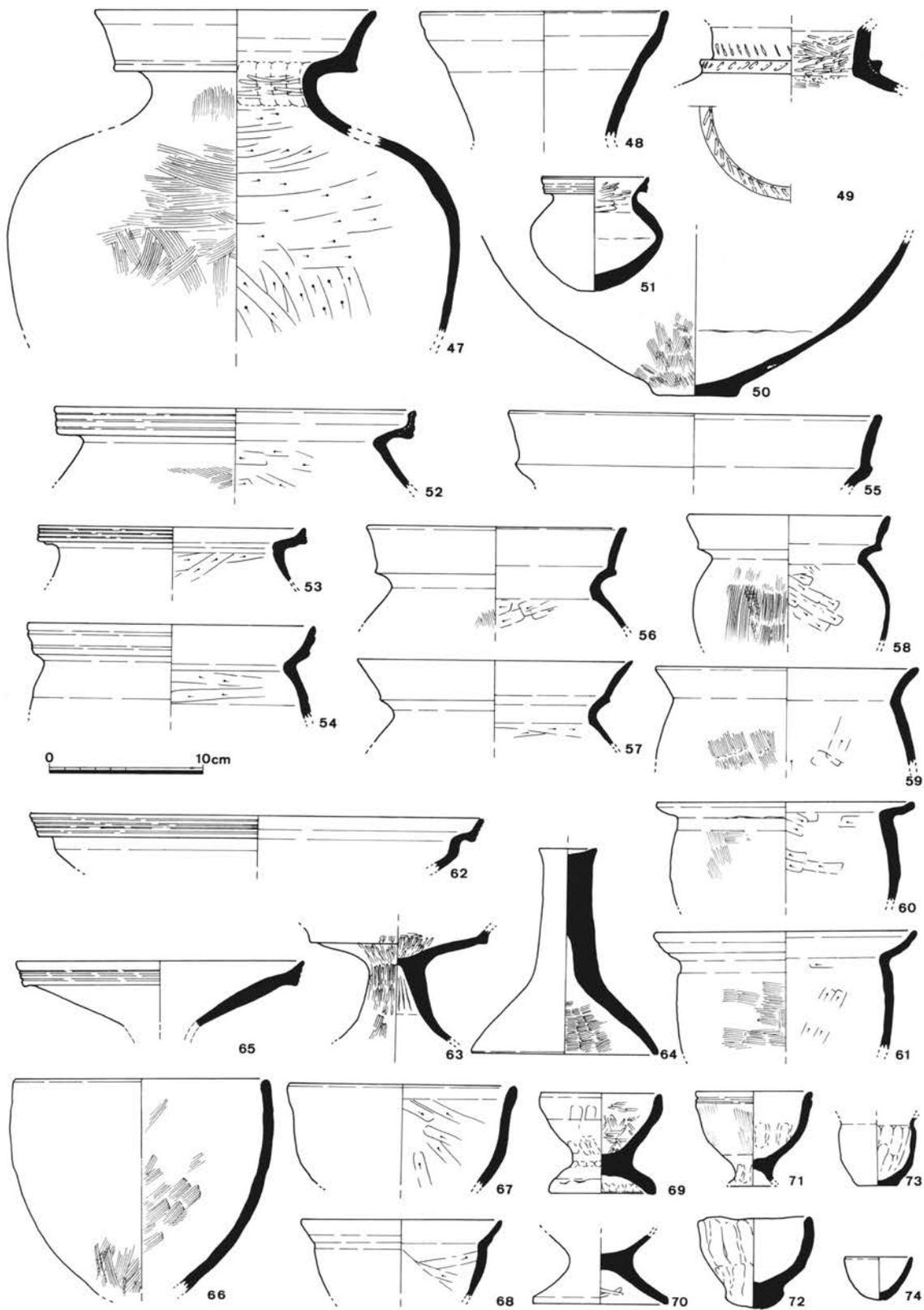


0 20cm

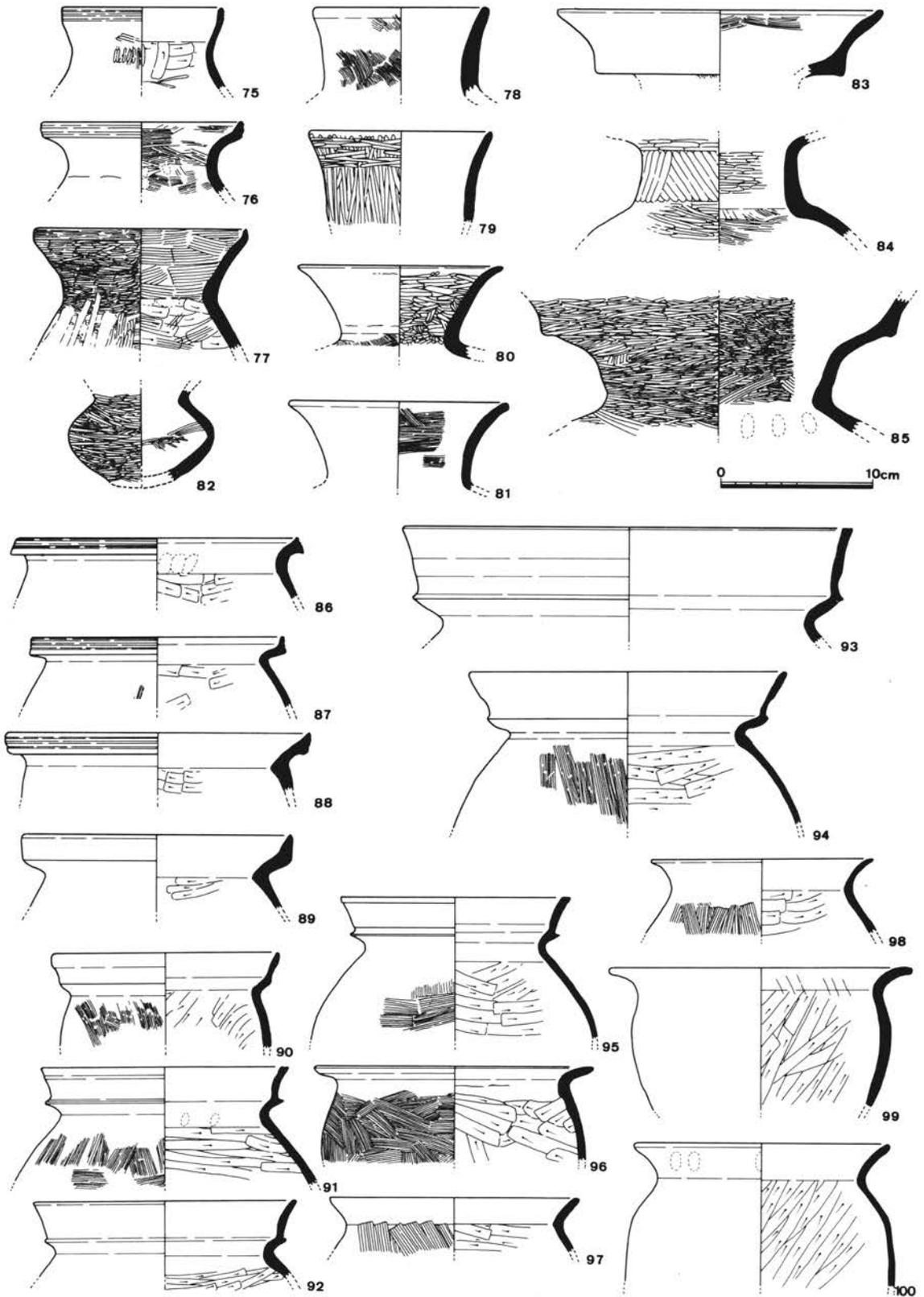
第3次調査土器実測図(1) S D 309(上段)・S D 310(中段)・S D 305(下段) (S=1/4)



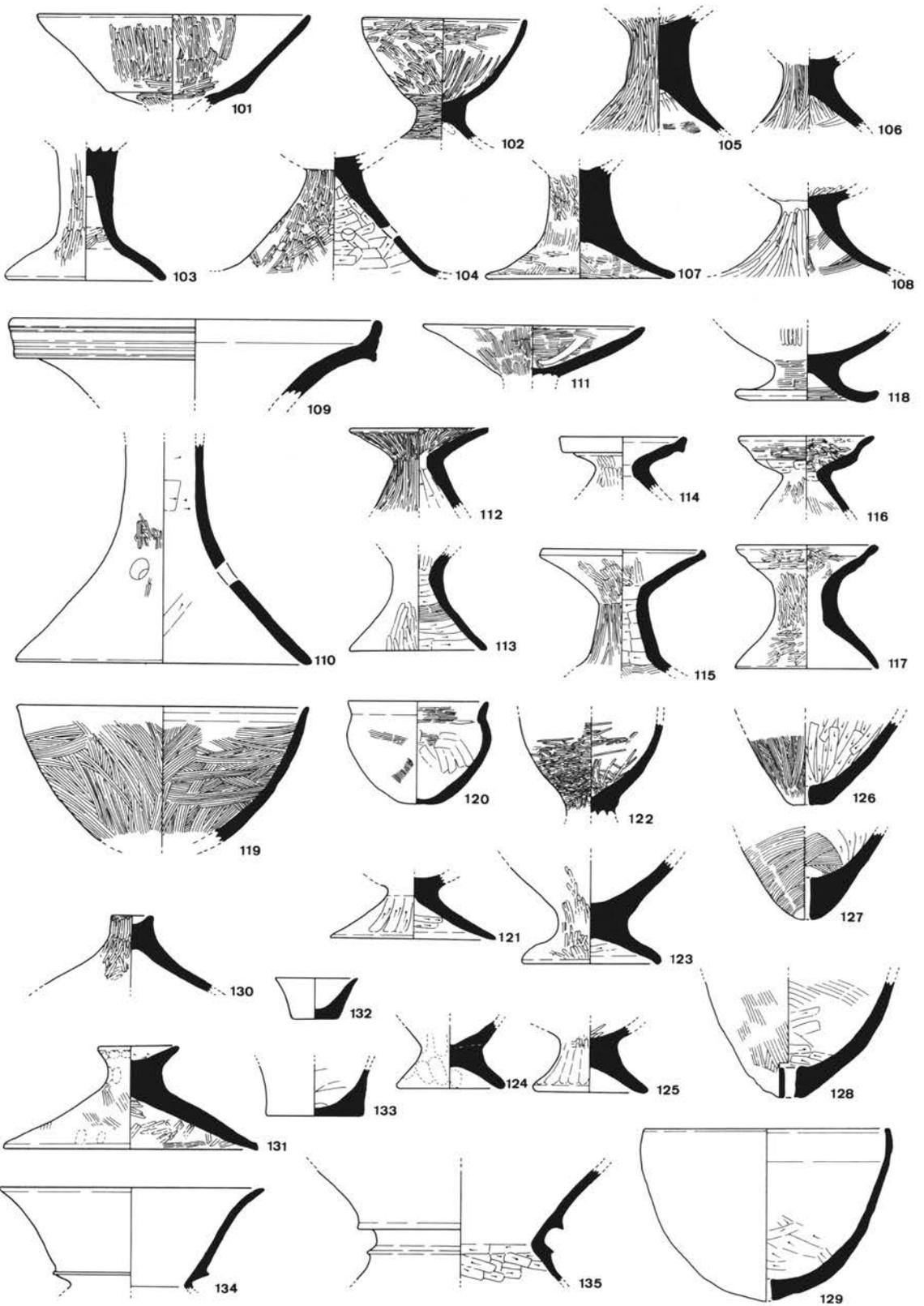
第3次調査土器実測図(2) S X302 (S=1/4)



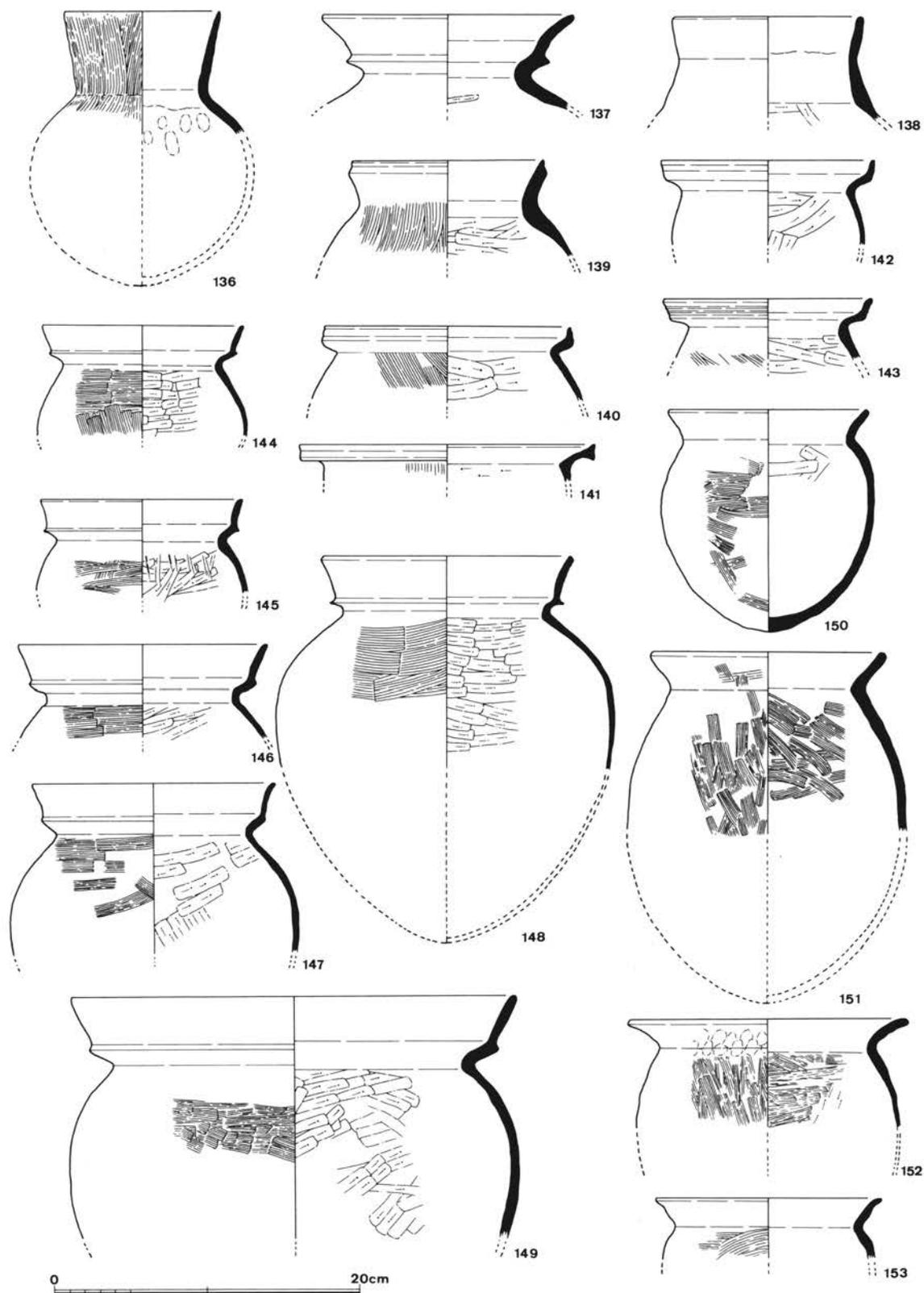
第3次調査土器実測図(3) S D303 (S=1/4)



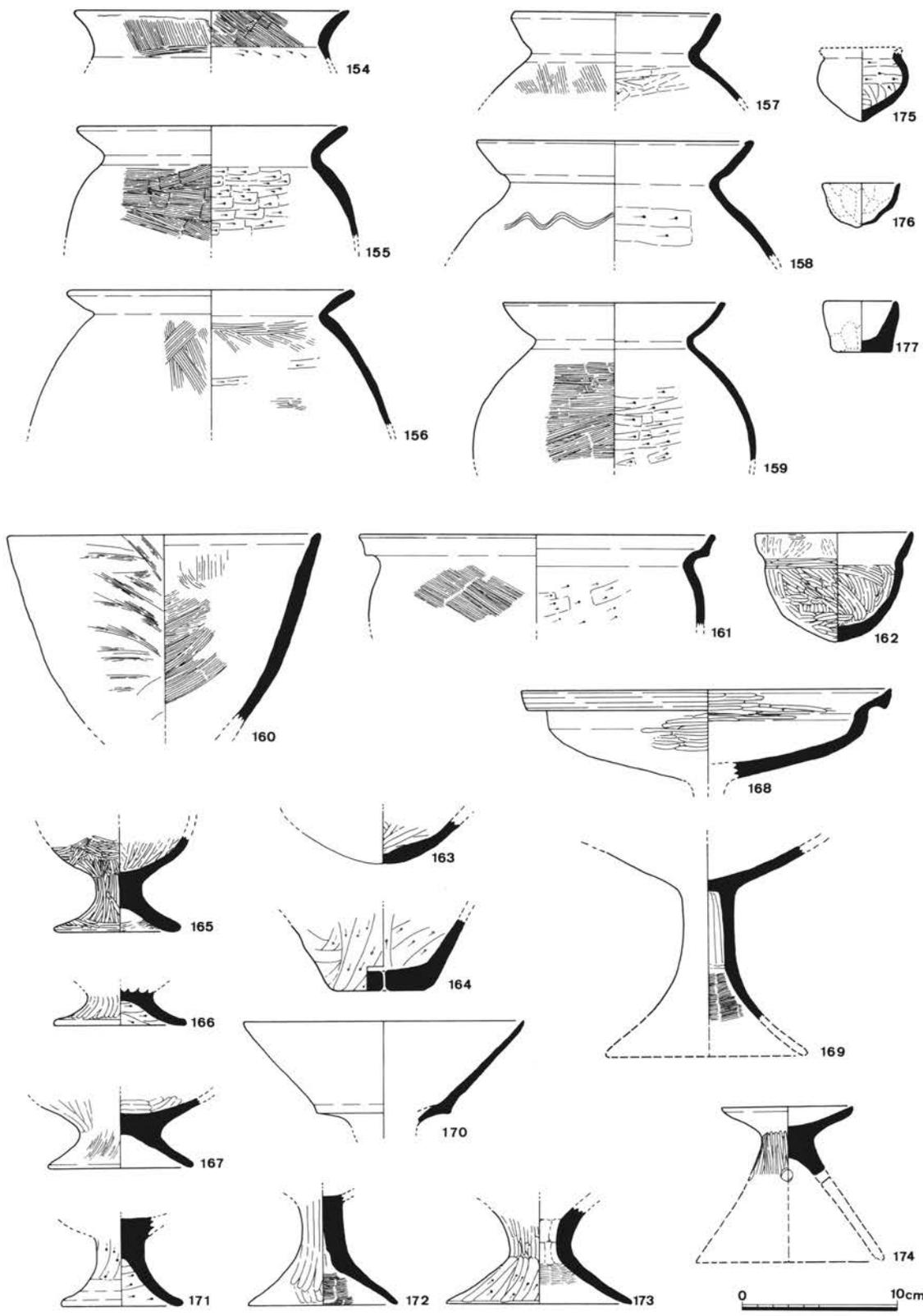
第3次調査土器実測図(4) S D303 (S=1/4)



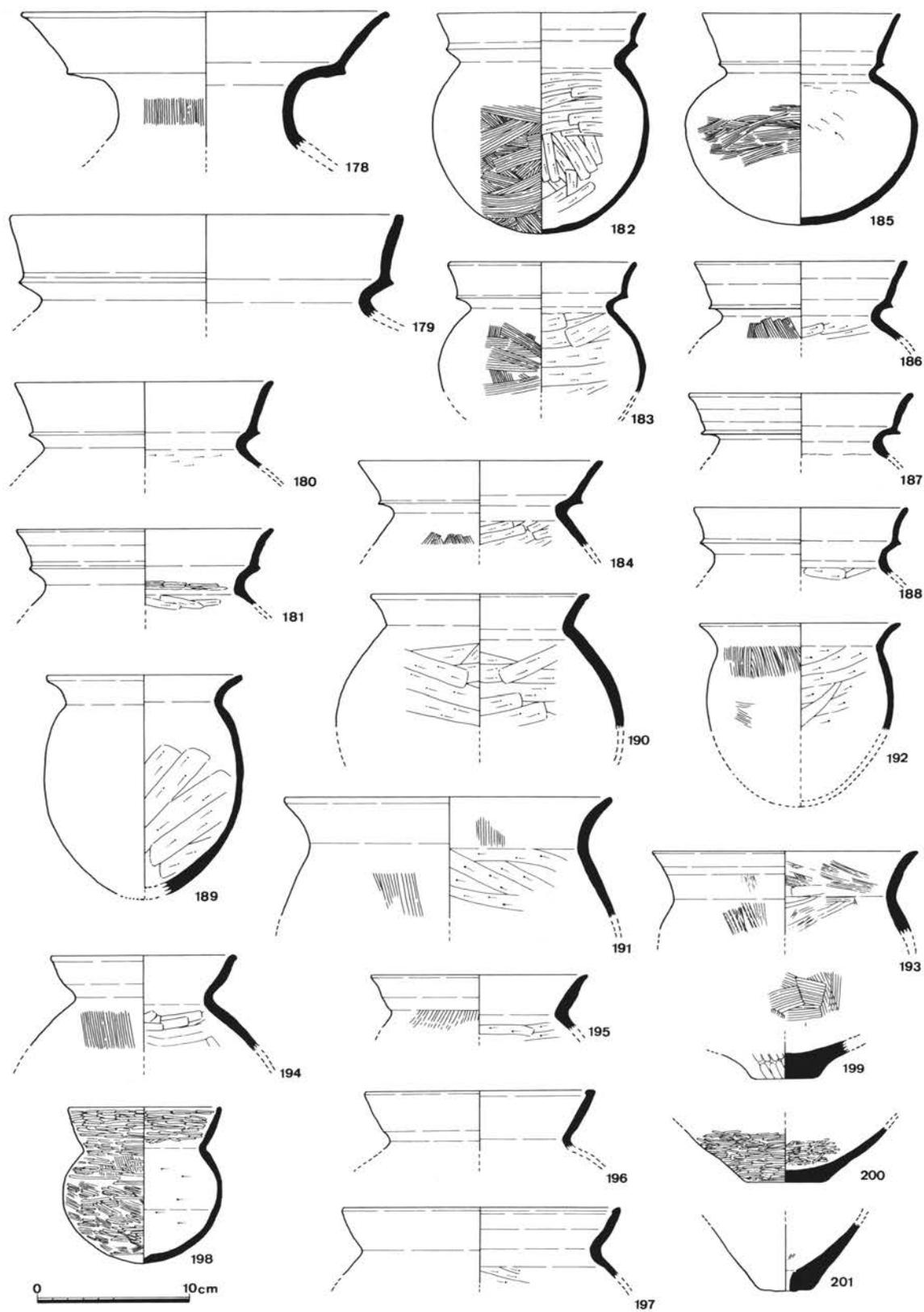
第3次調査土器実測図(5) S D 303 (S=1/4)



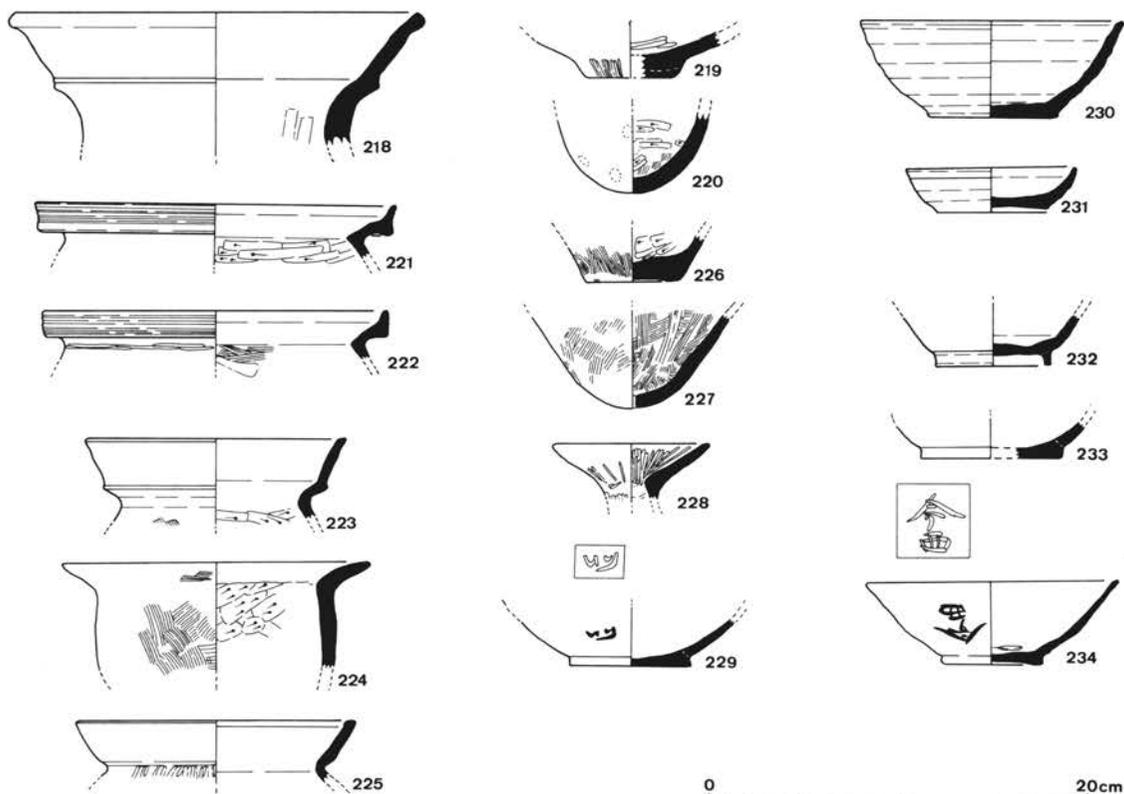
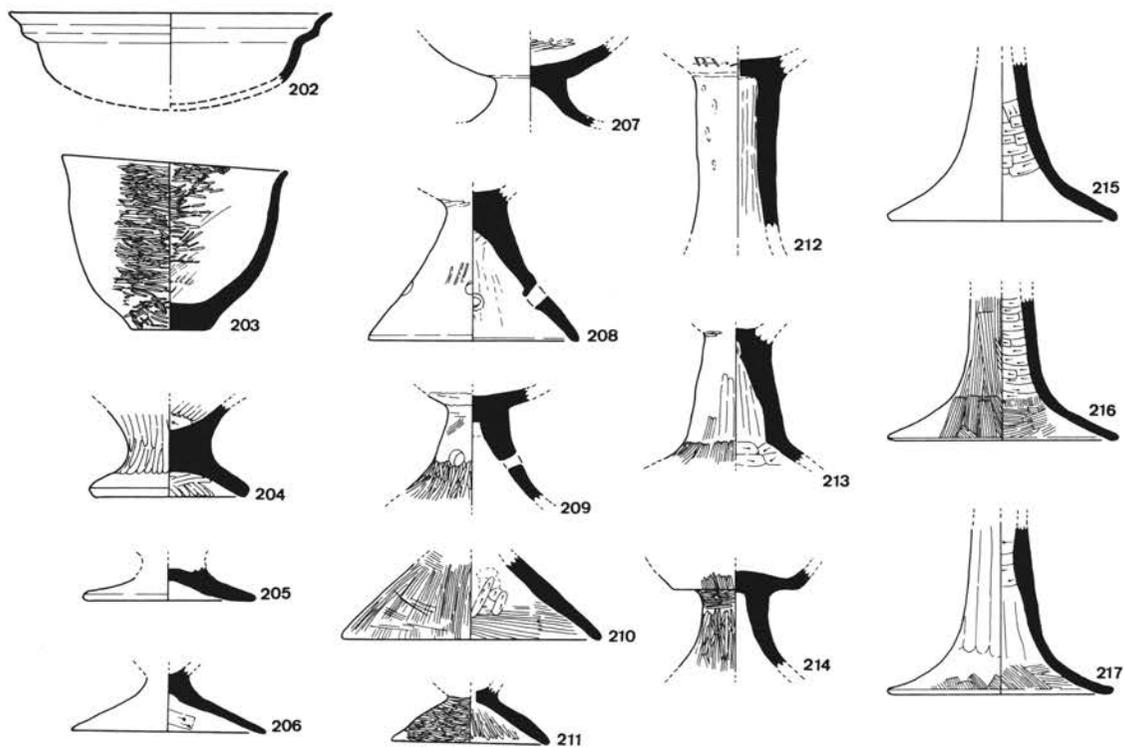
第3次調査土器実測図(6) S D302 (S=1/4)



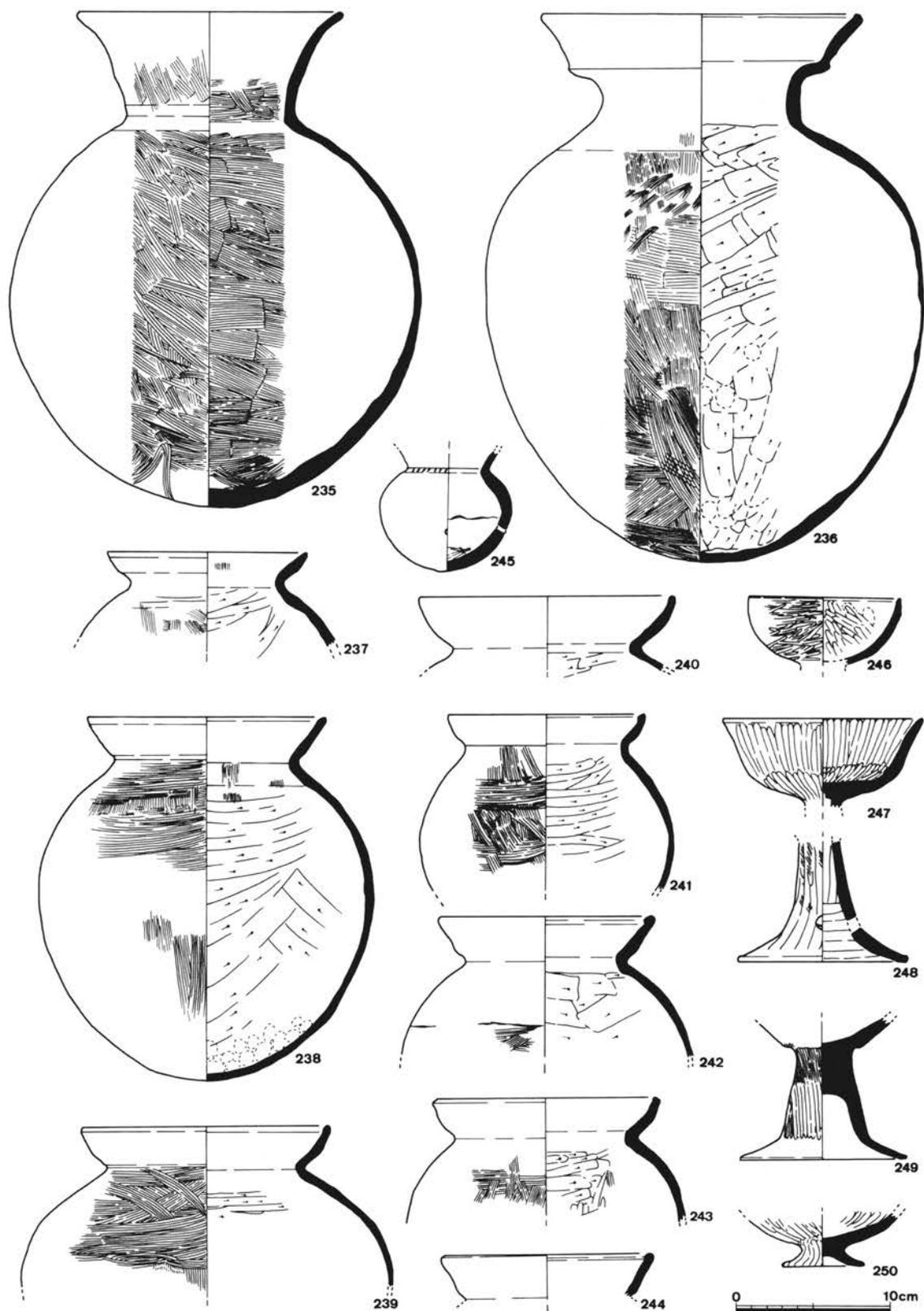
第3次調査土器実測図(7) S D302 (S=1/4)



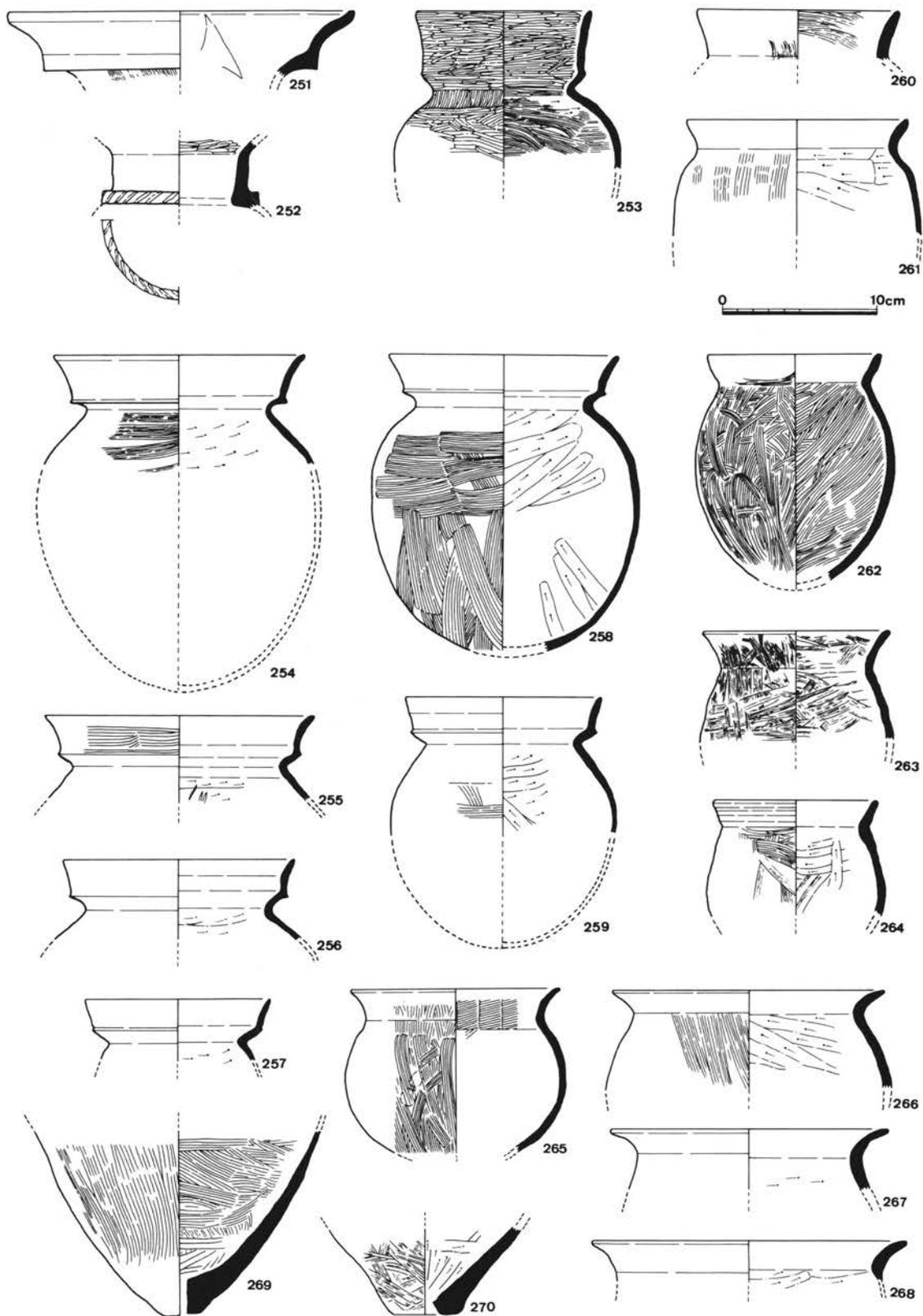
第3次調査土器実測図(8) S D304 (S=1/4)



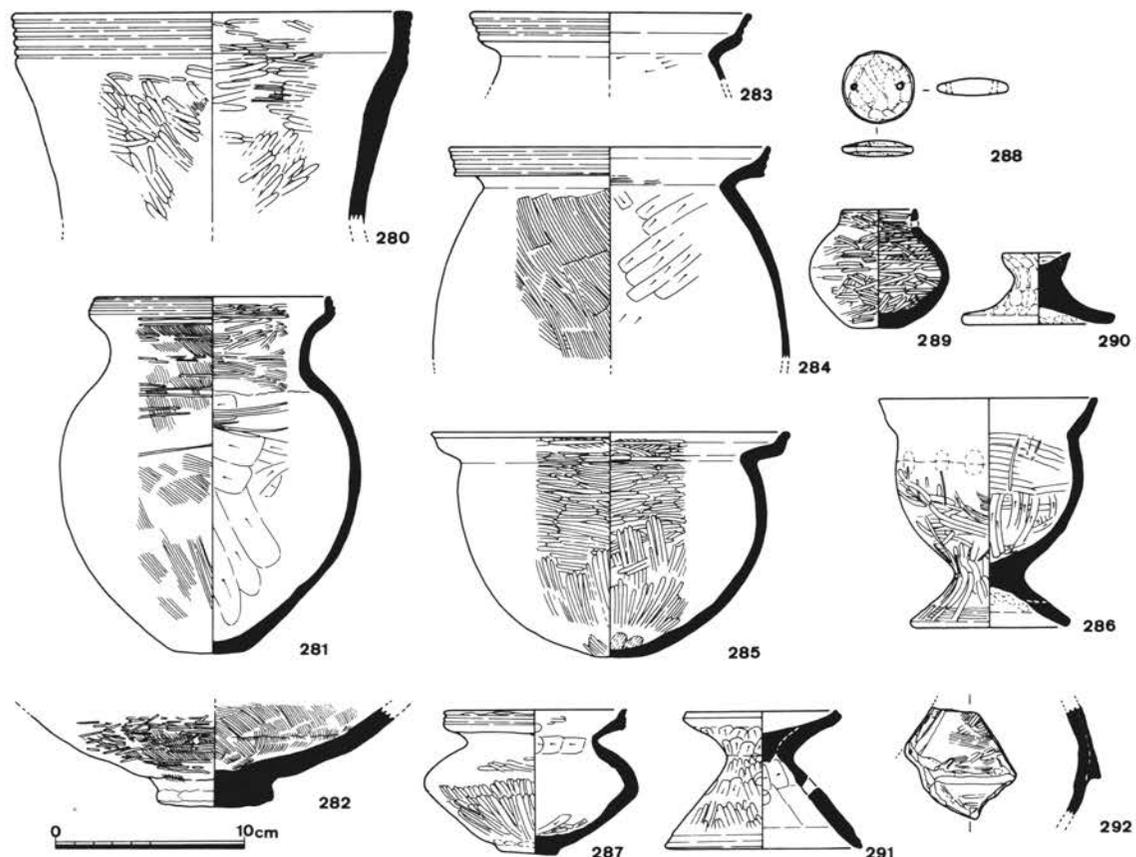
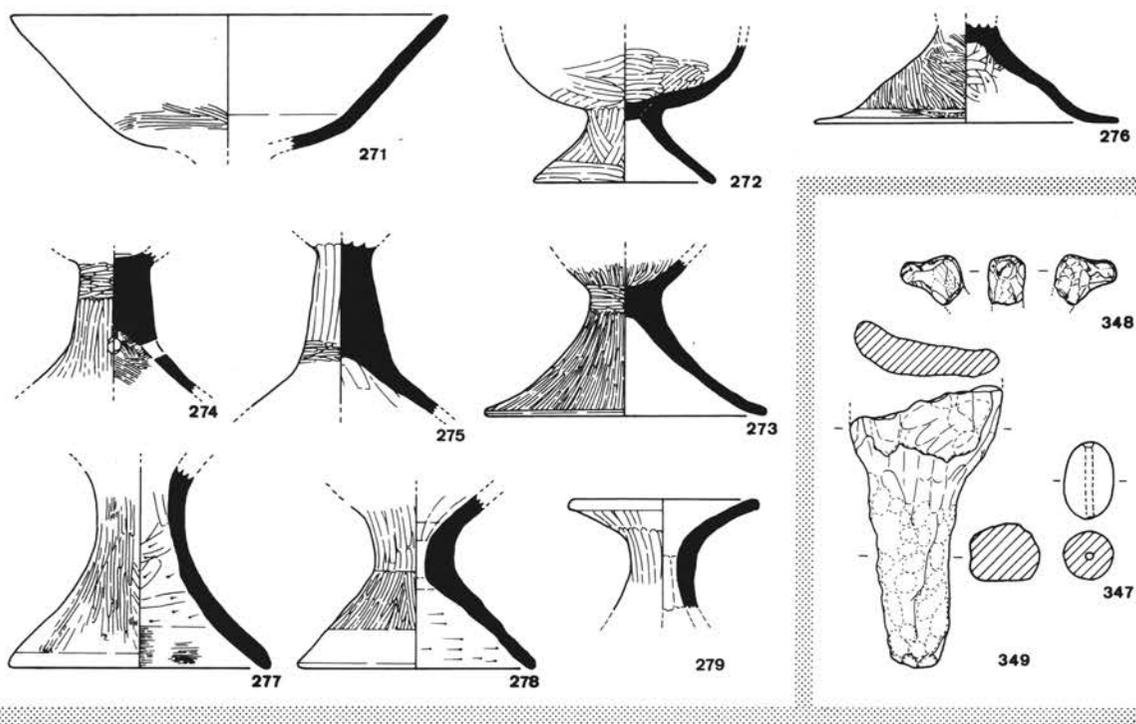
第3次調査土器実測図(9) S D304(上段)・S D301(下段) (S=1/4)



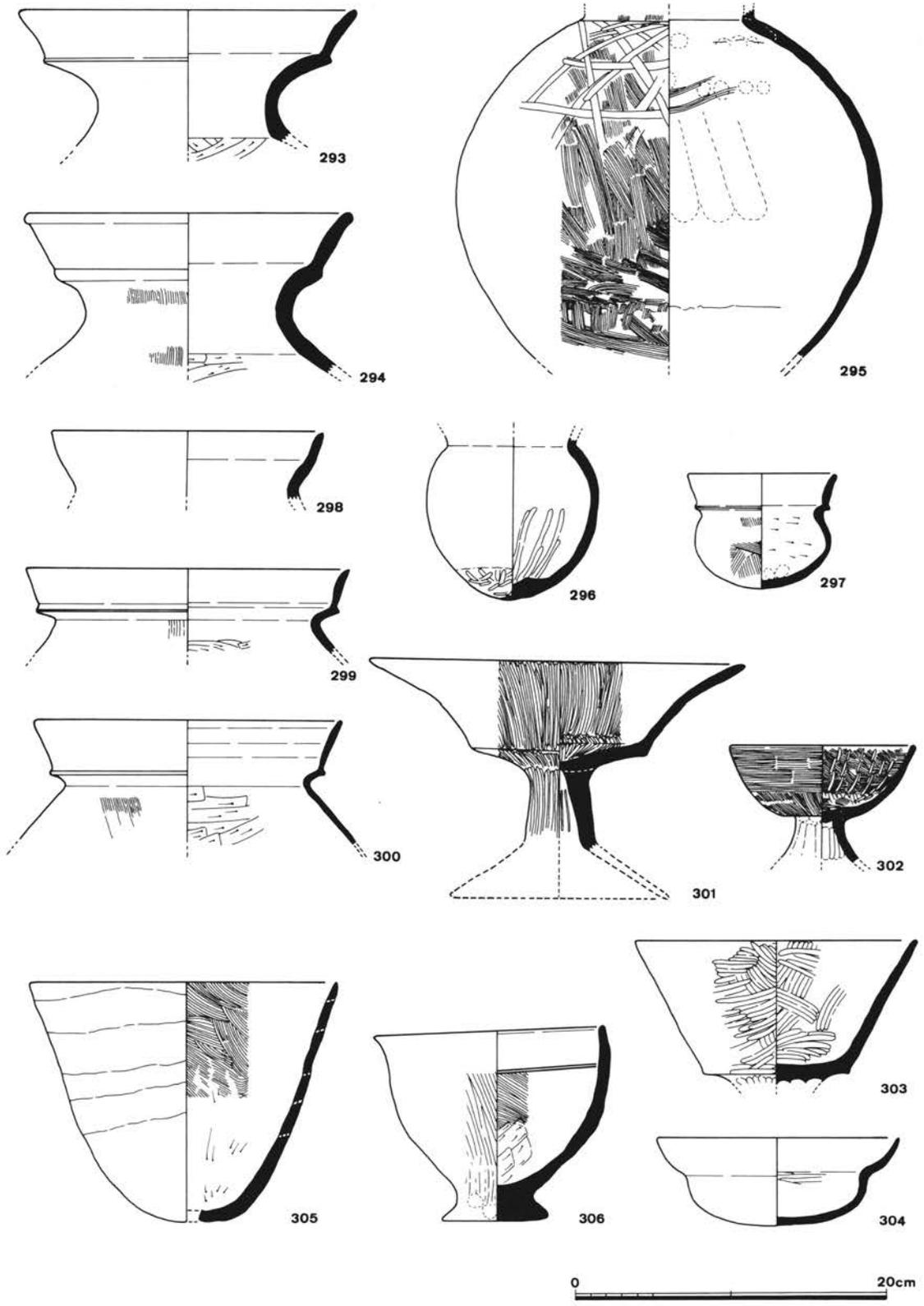
第3次調査土器実測図(10) S X301 (S=1/4)



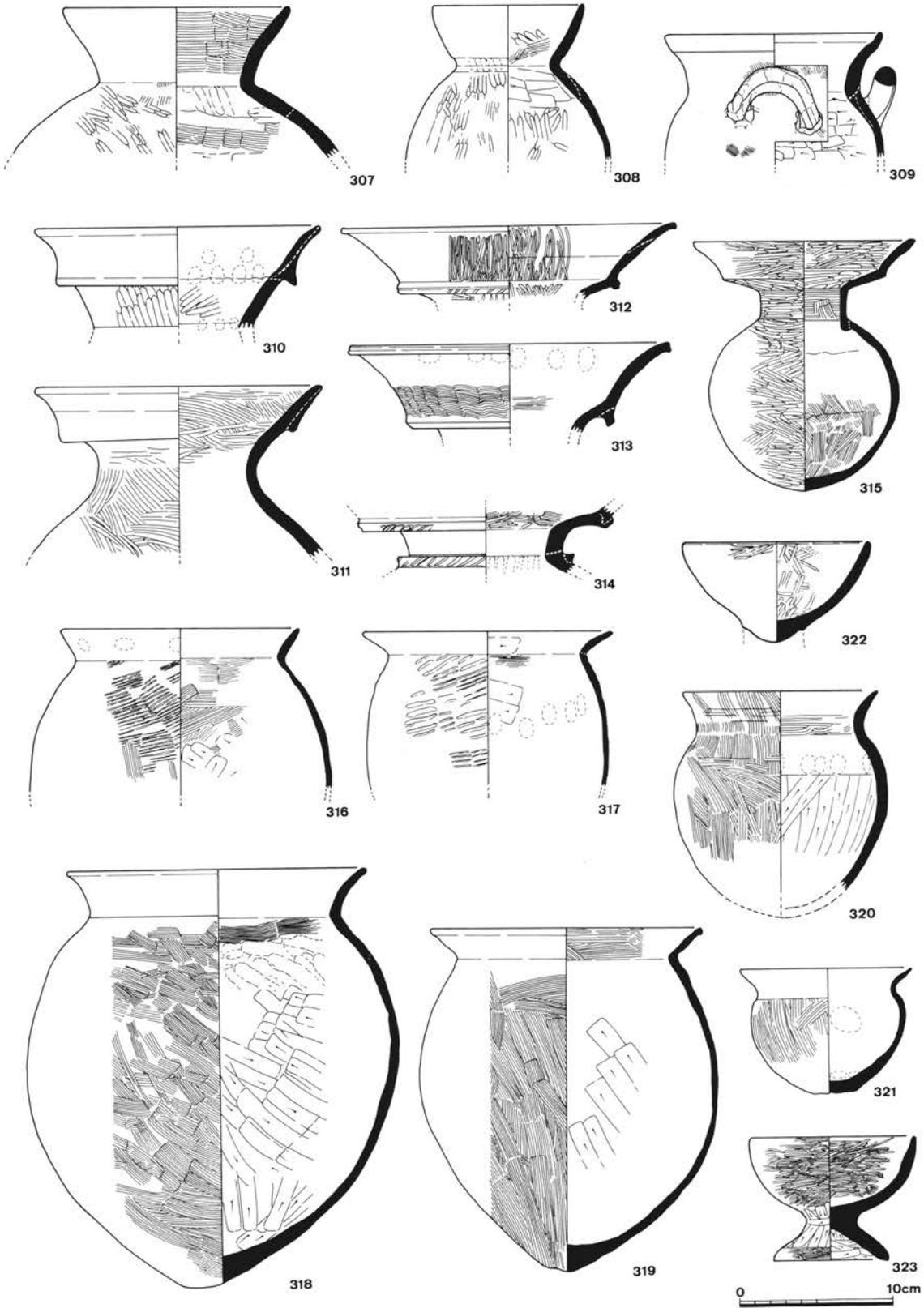
第3次調査土器実測図(11) 第三層(b地点) (S=1/4)



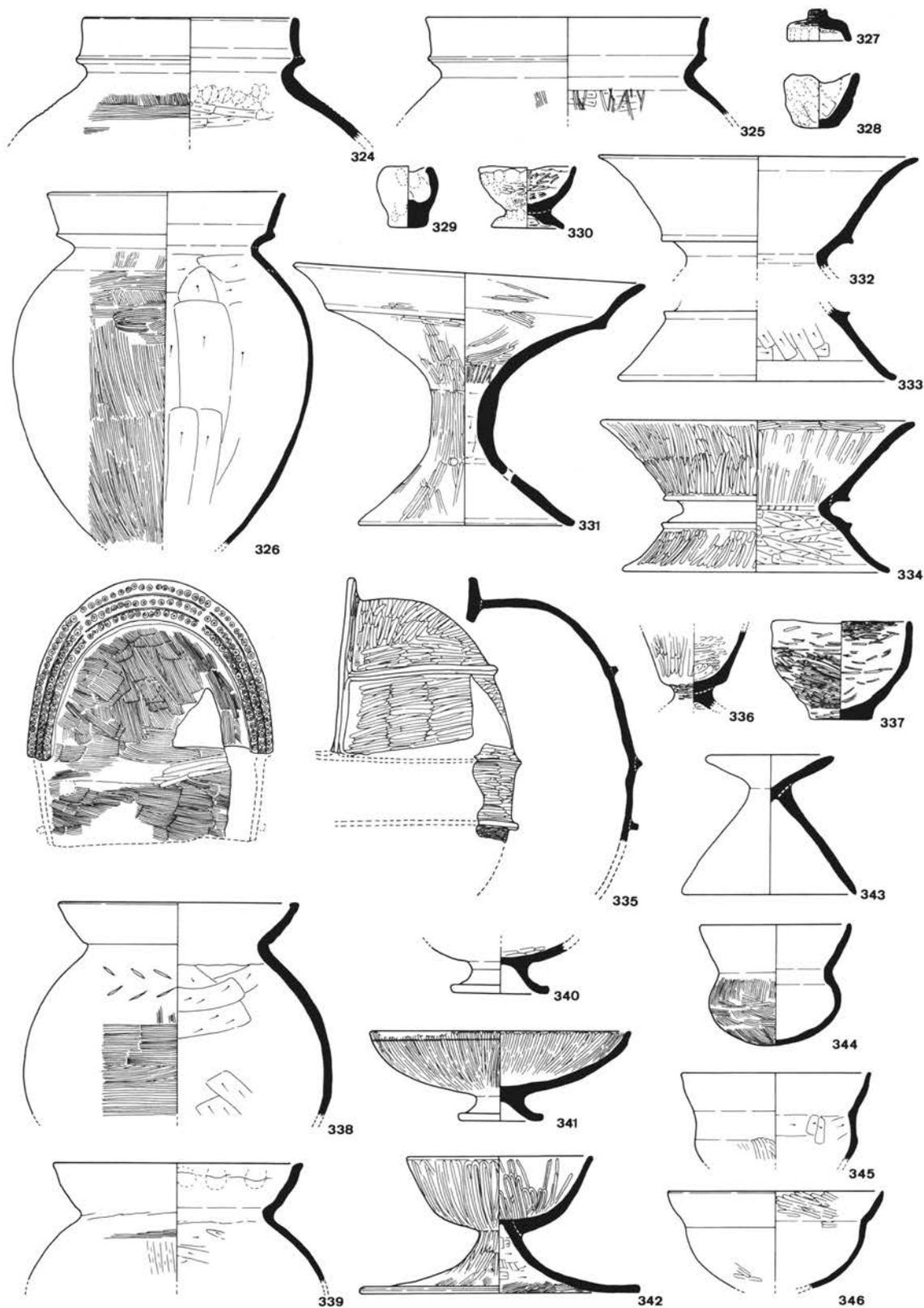
第3次調査土器実測図(12) 第Ⅲ層 (b地点) (上段 271~279) (S=1/4)
 各地区包含層 (下段 280~292)
 土製品 (346~349)



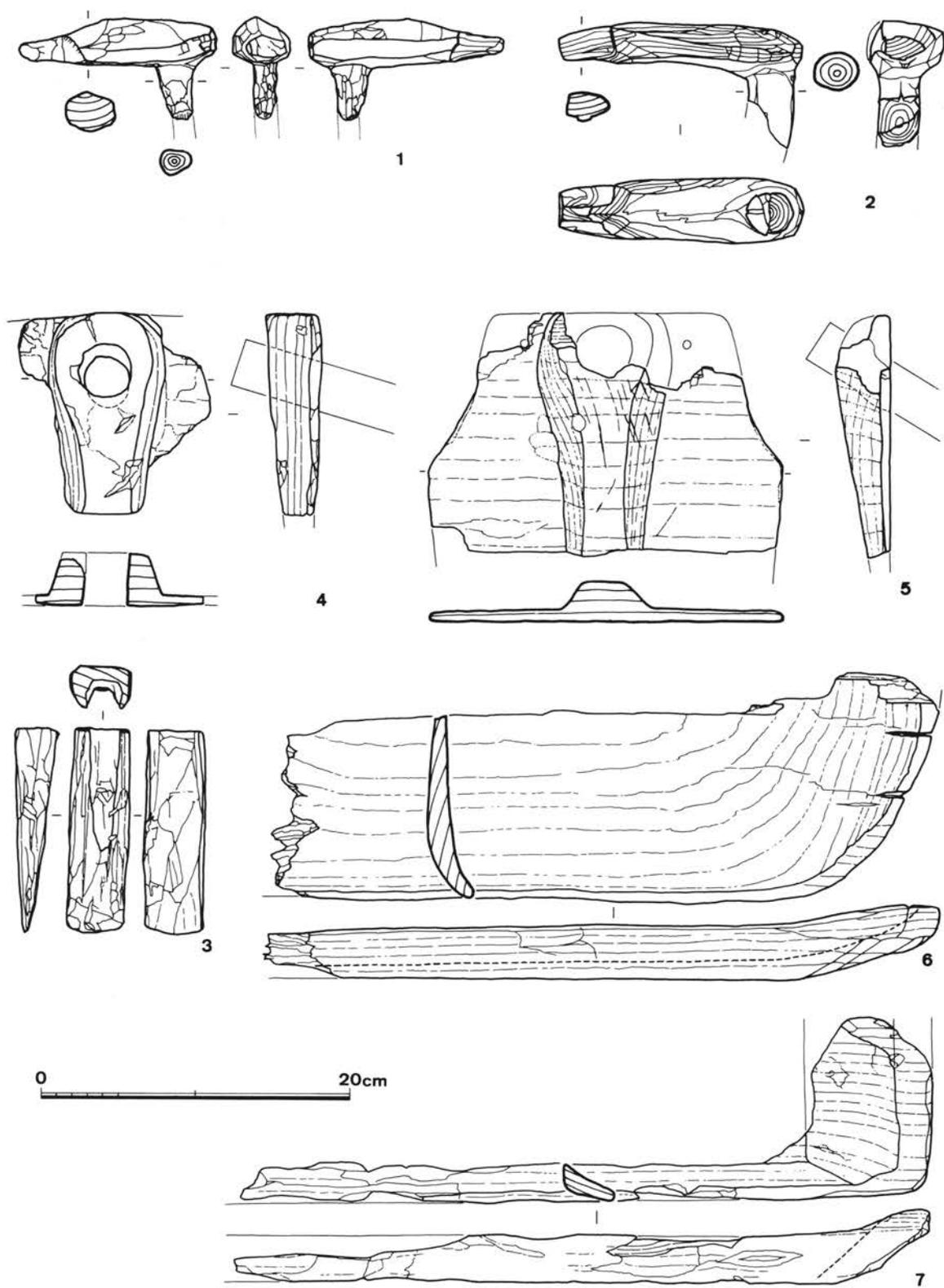
第3次調査土器実測図(13) 第三層(a地点) (S=1/4)



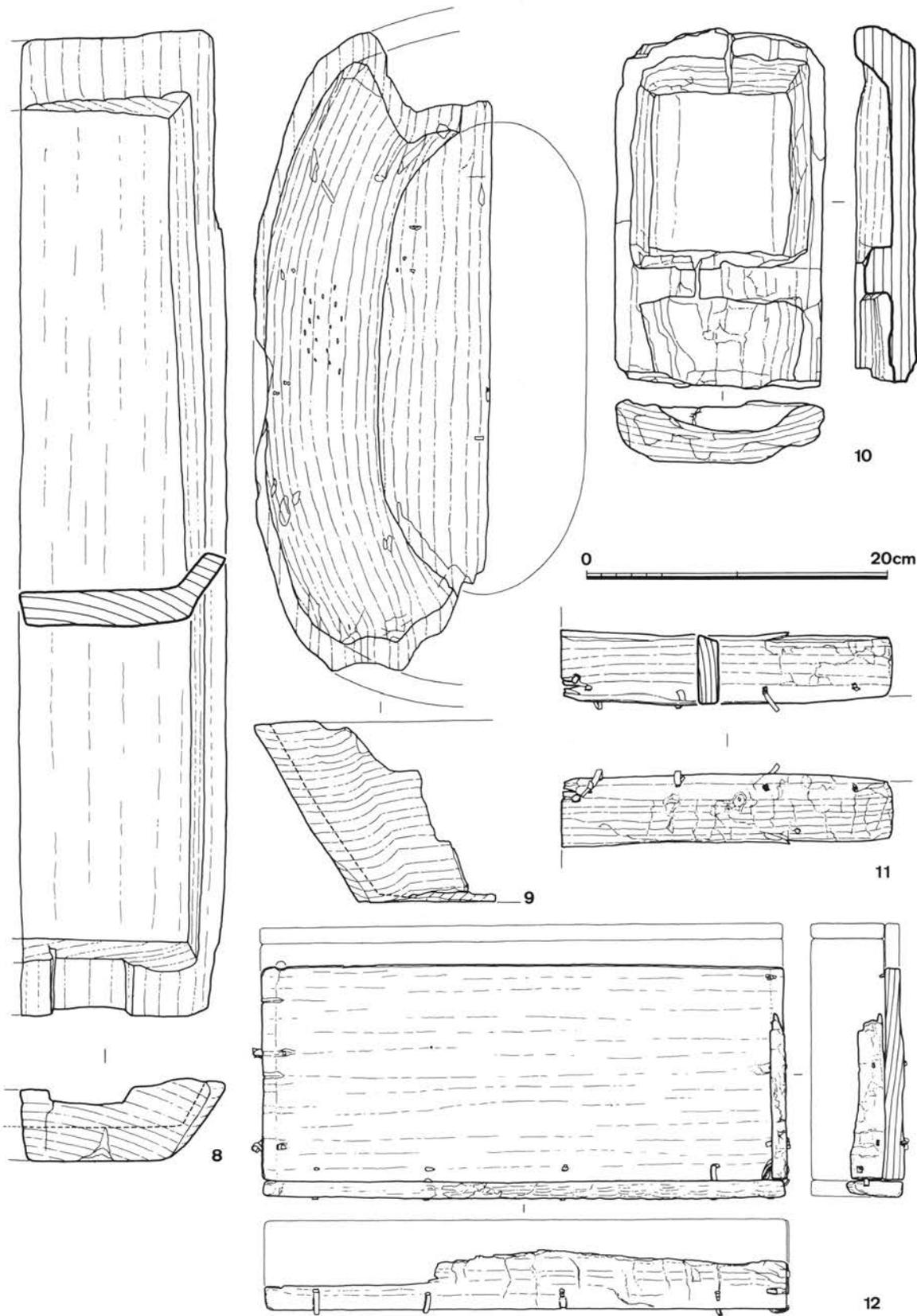
第3次調査土器実測図(14) 各地区包含層 (S=1/4)



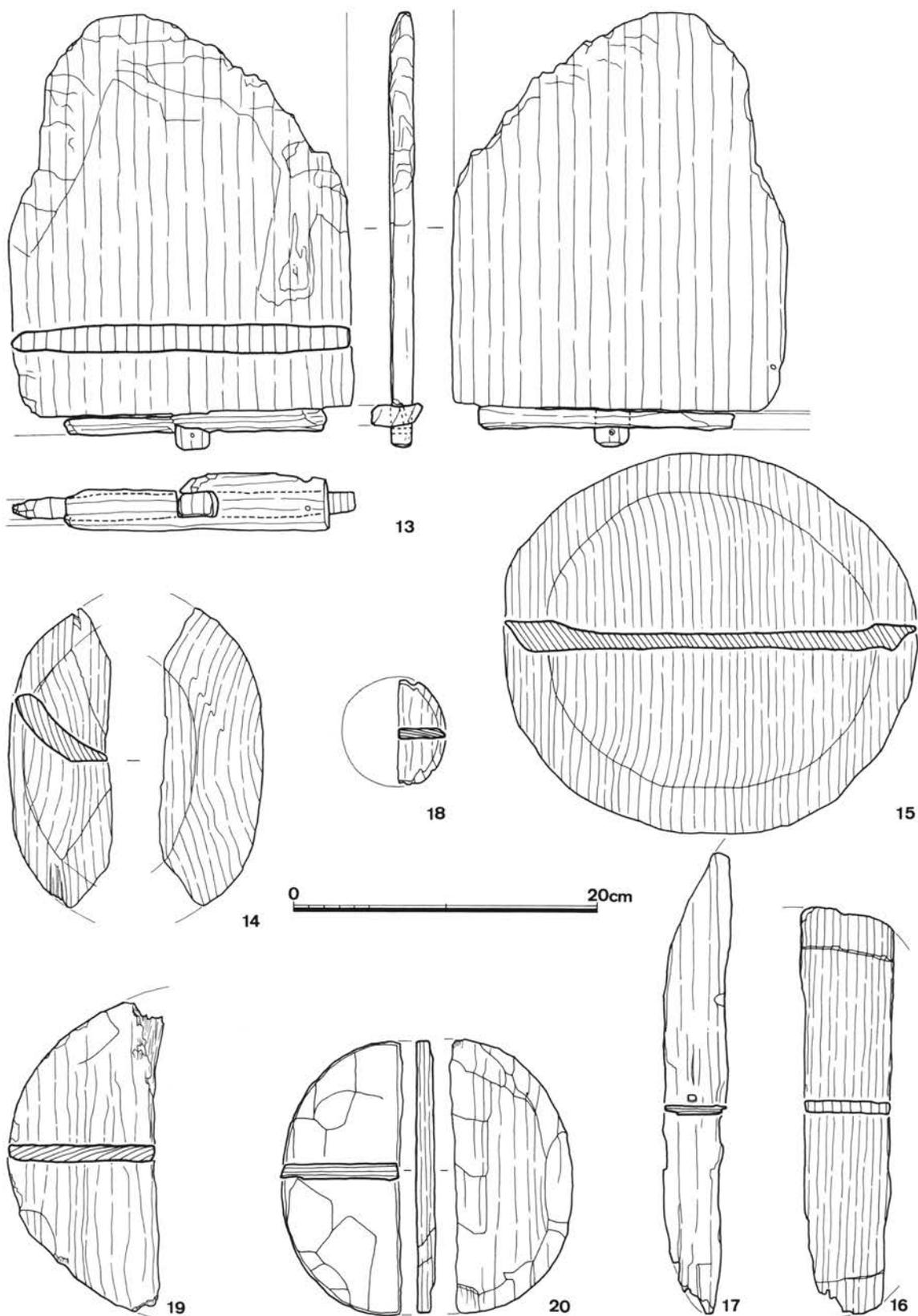
第3次調査土器実測図(15) 各地区包含層 (S=1/4)



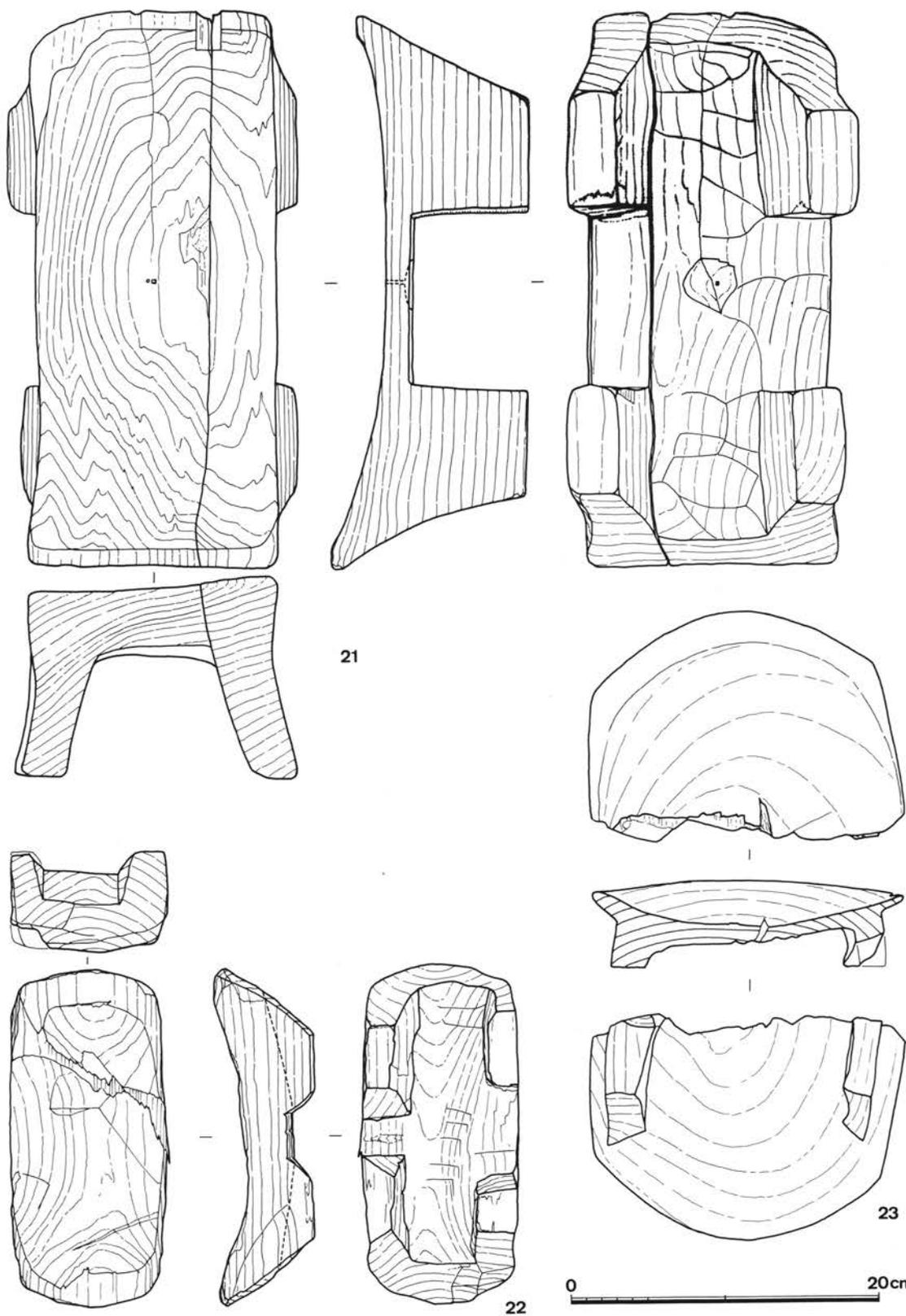
第3次調査木製品実測図(1)



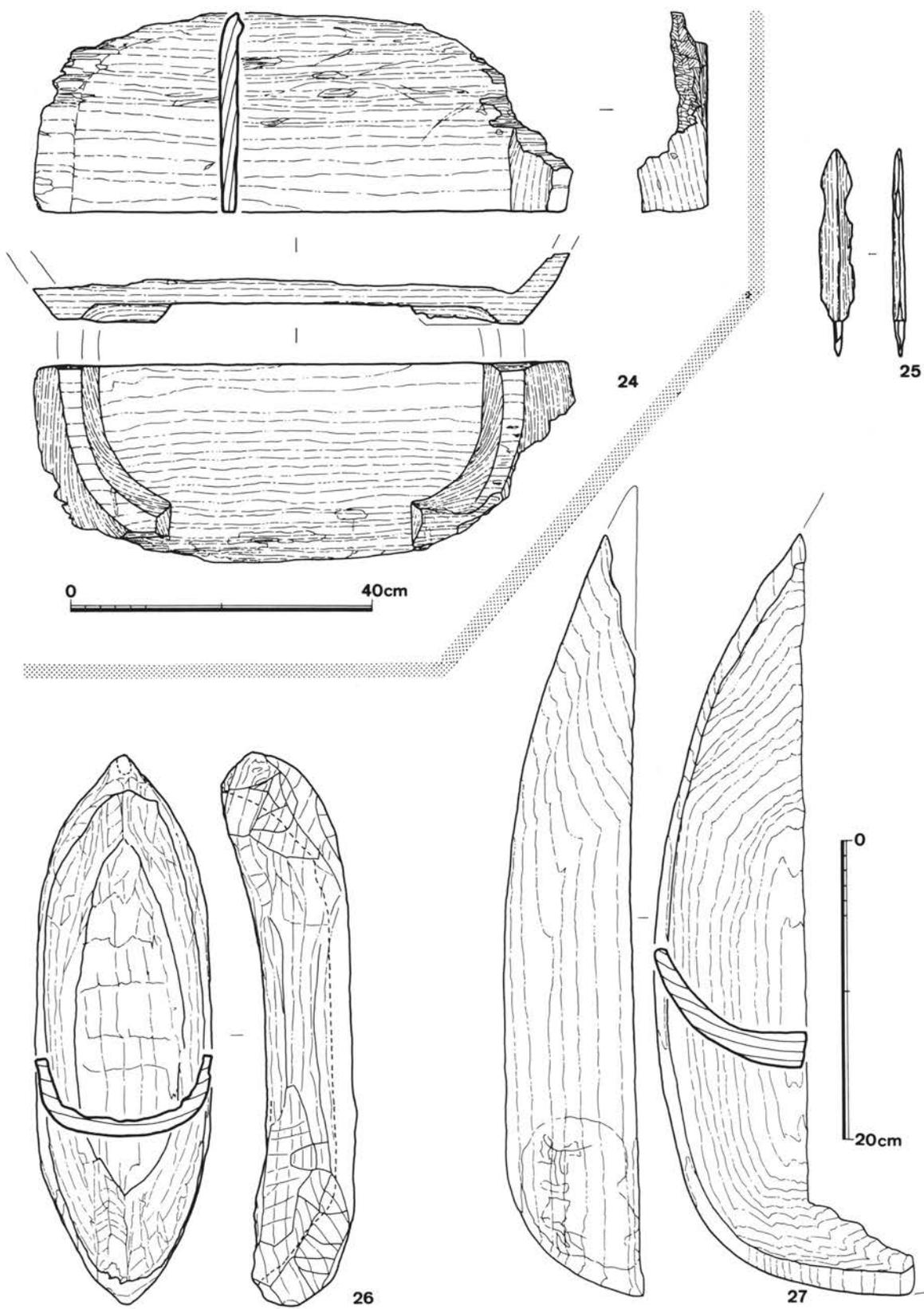
第3次調査木製品実測図(2)



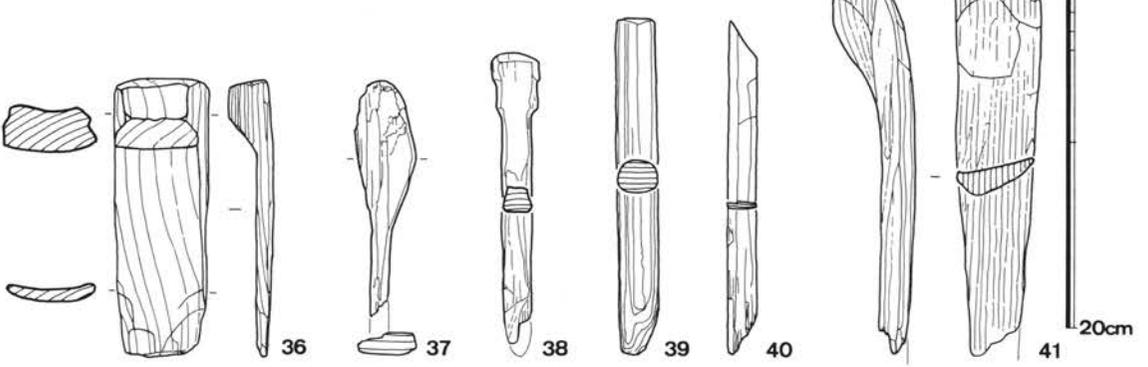
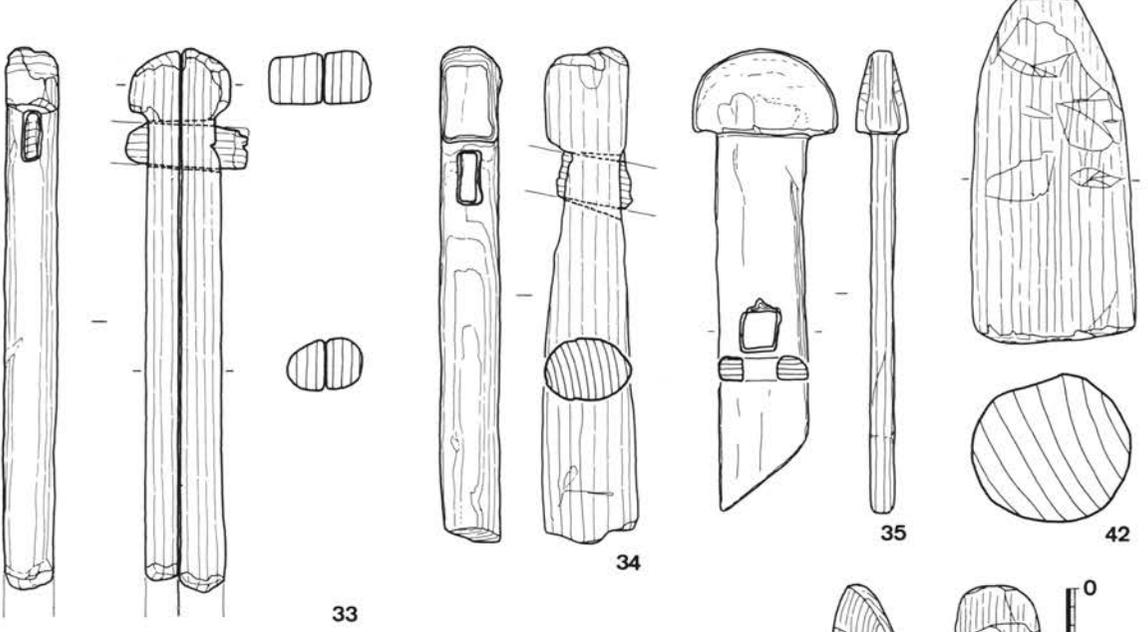
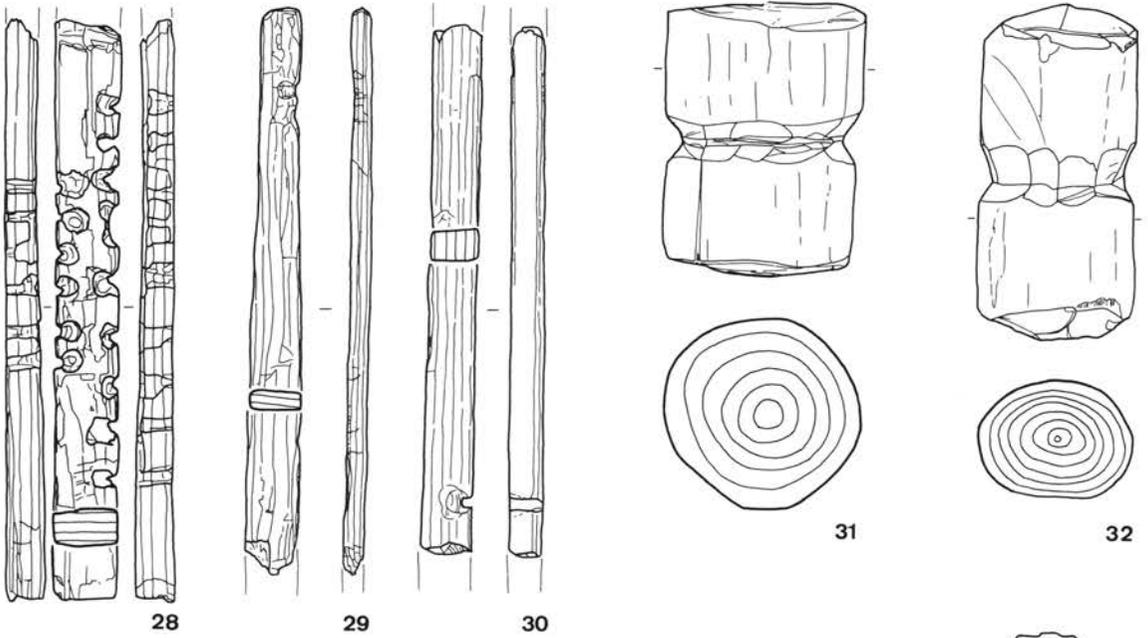
第3次調査木製品実測図(3)



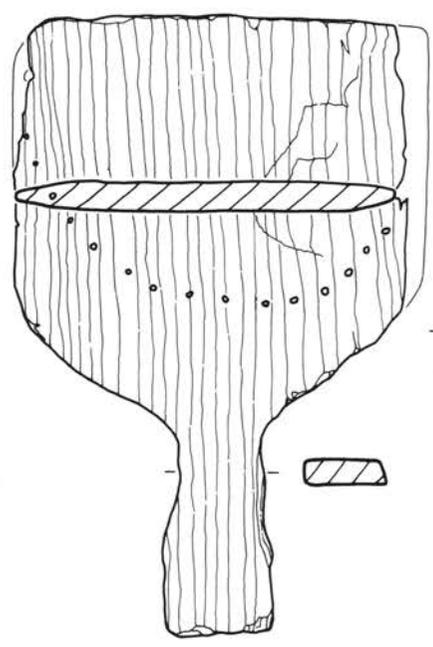
第3次調査木製品実測図(4)



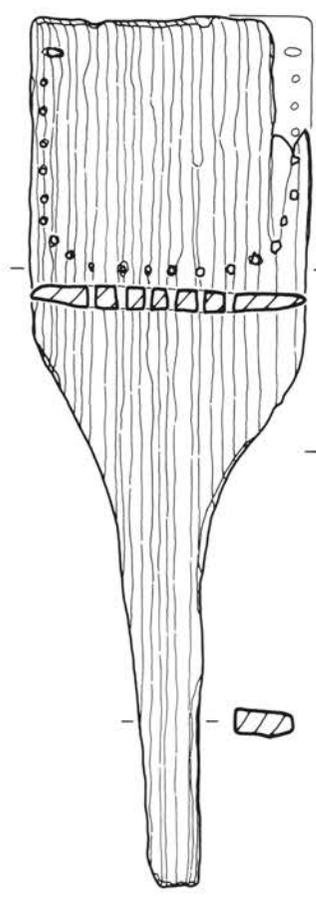
第3次調査木製品実測図(5)



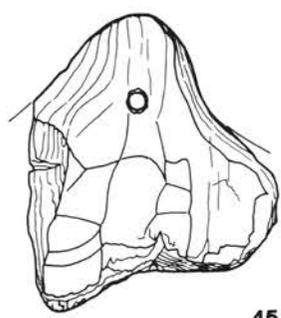
第3次調査木製品実測図(6)



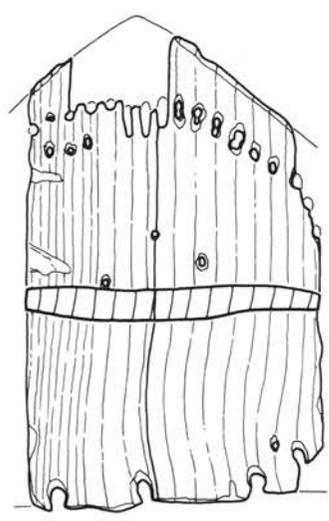
43



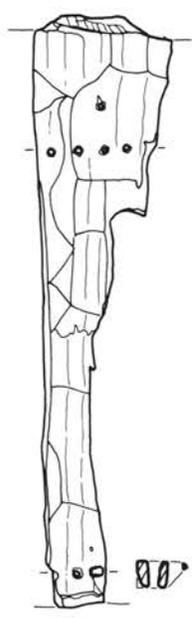
44



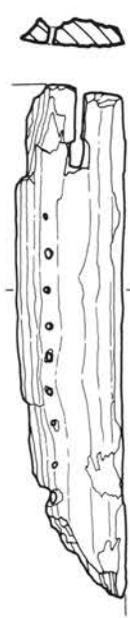
45



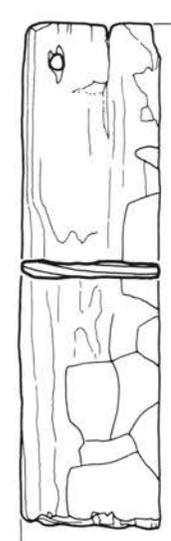
46



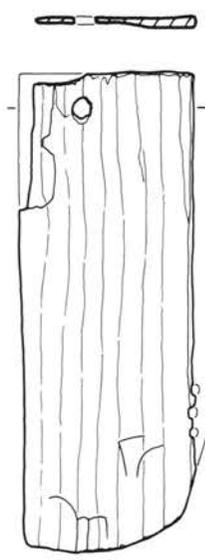
47



48

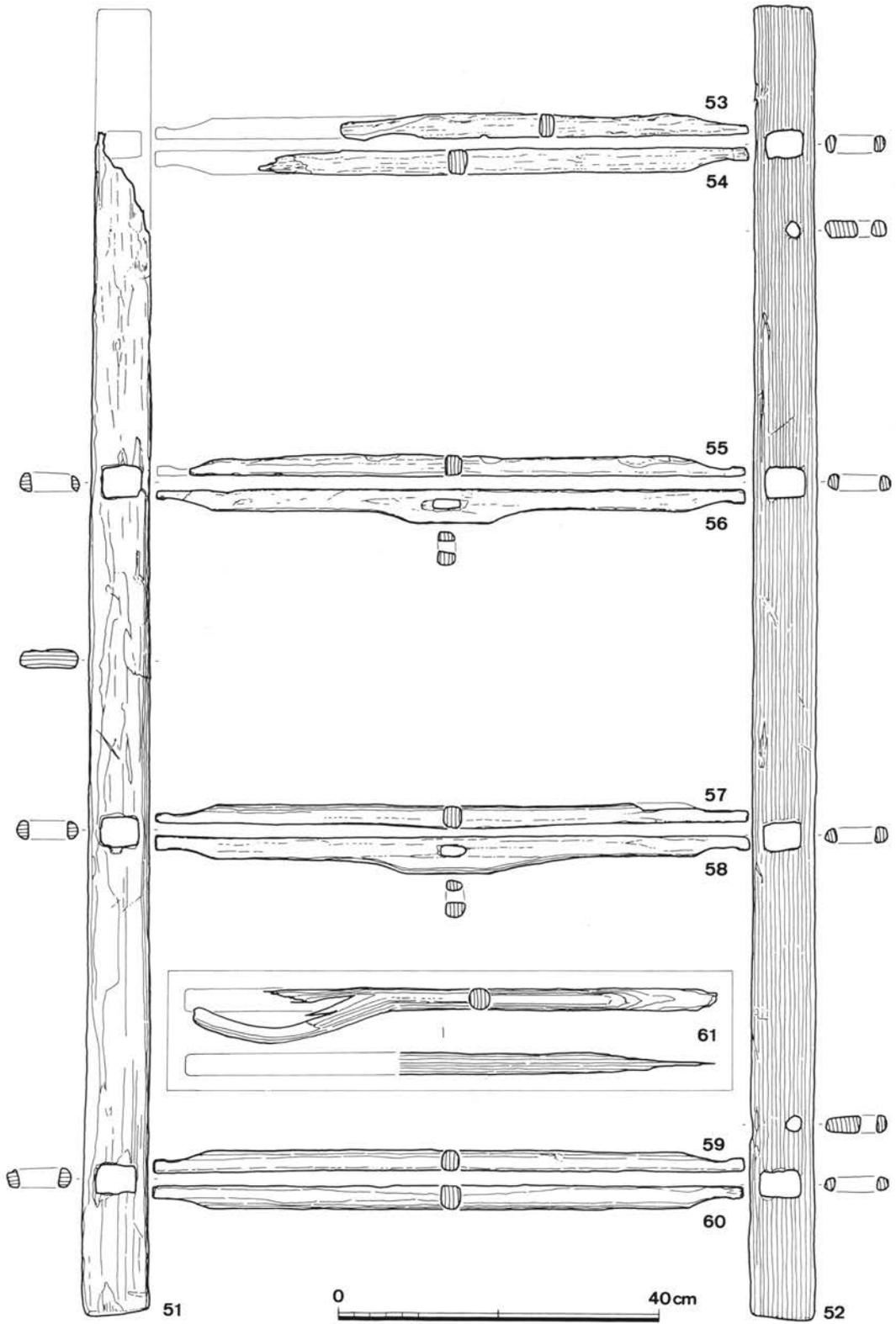


49

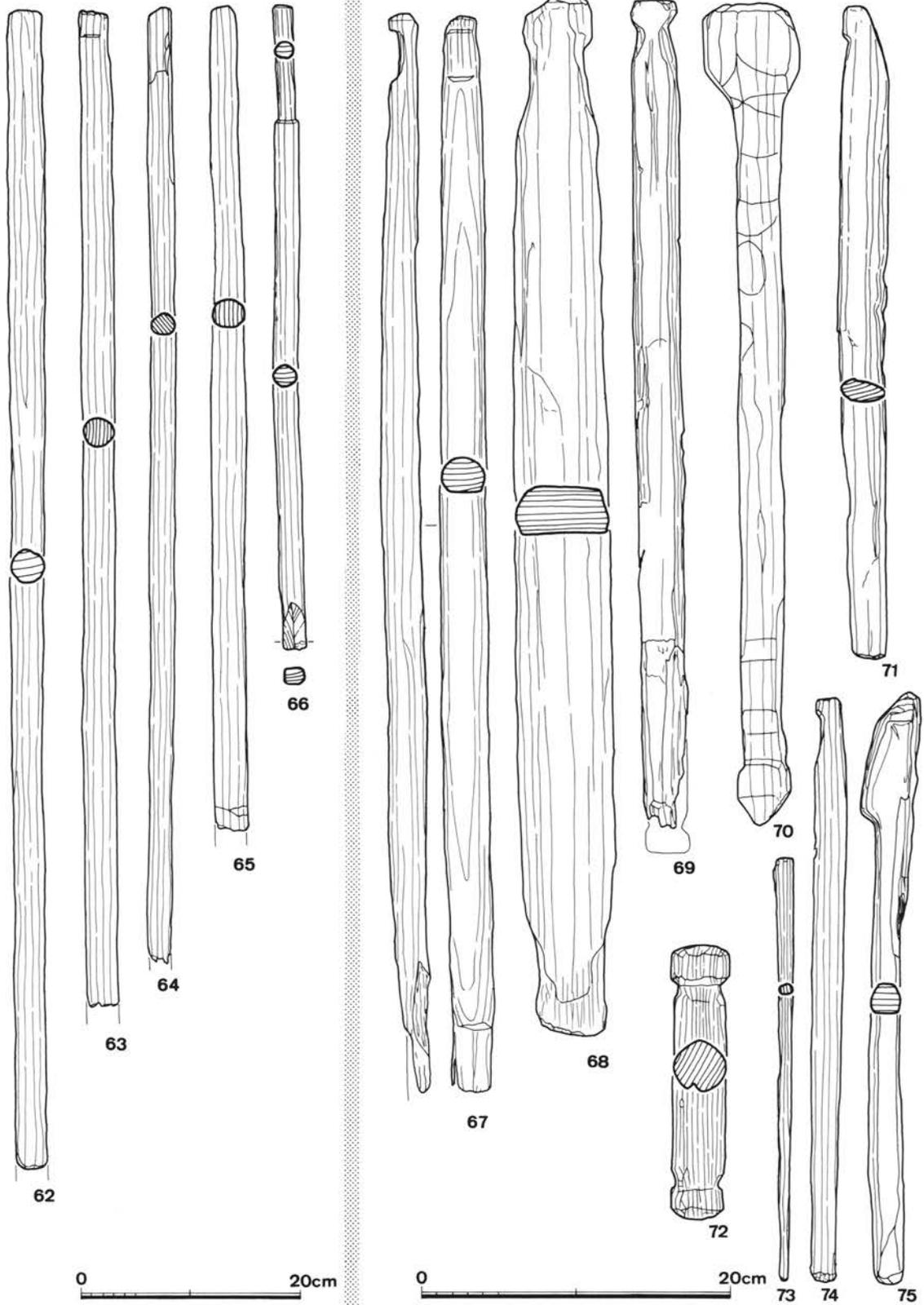


50

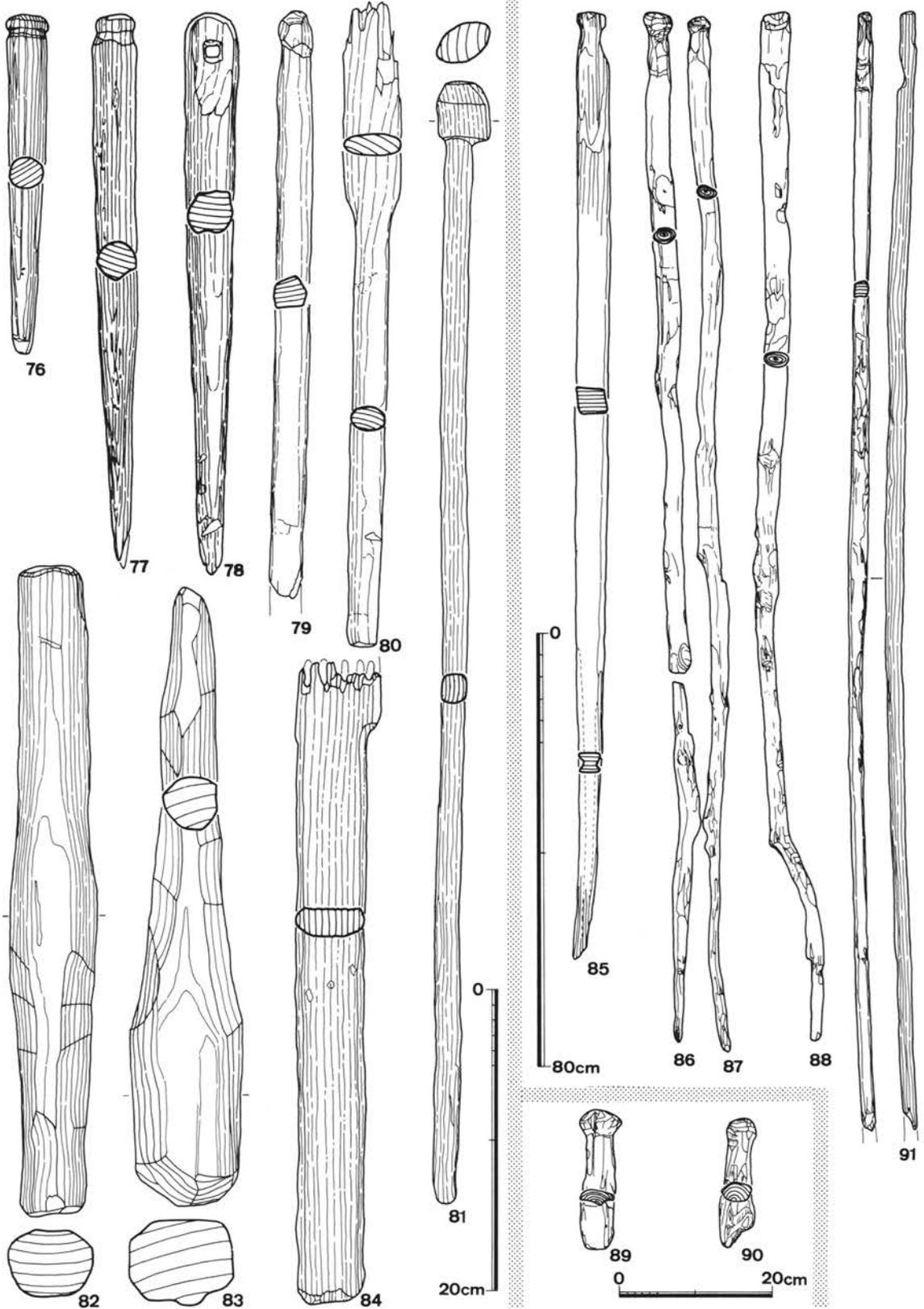




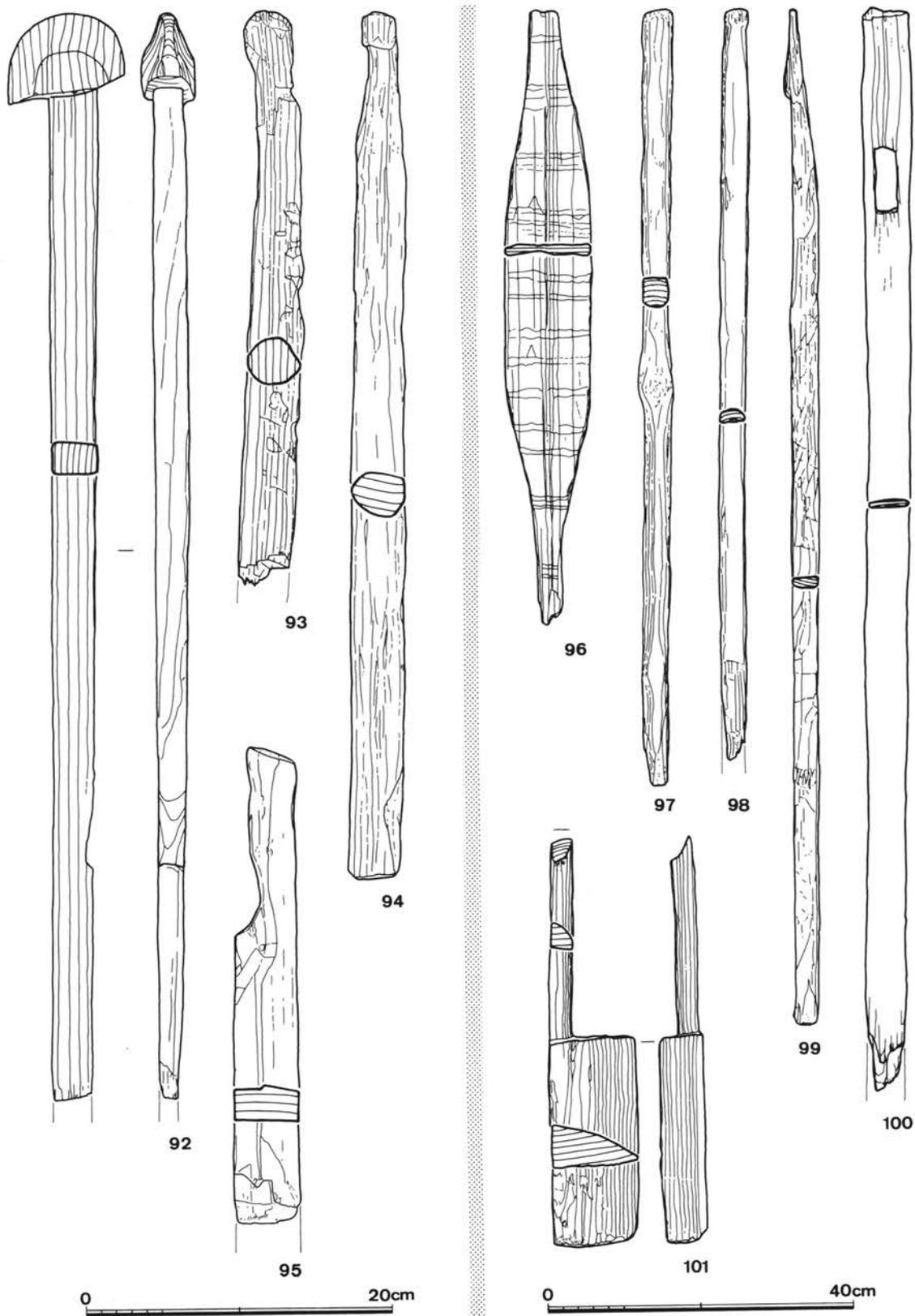
第3次調査木製品実測図(8)



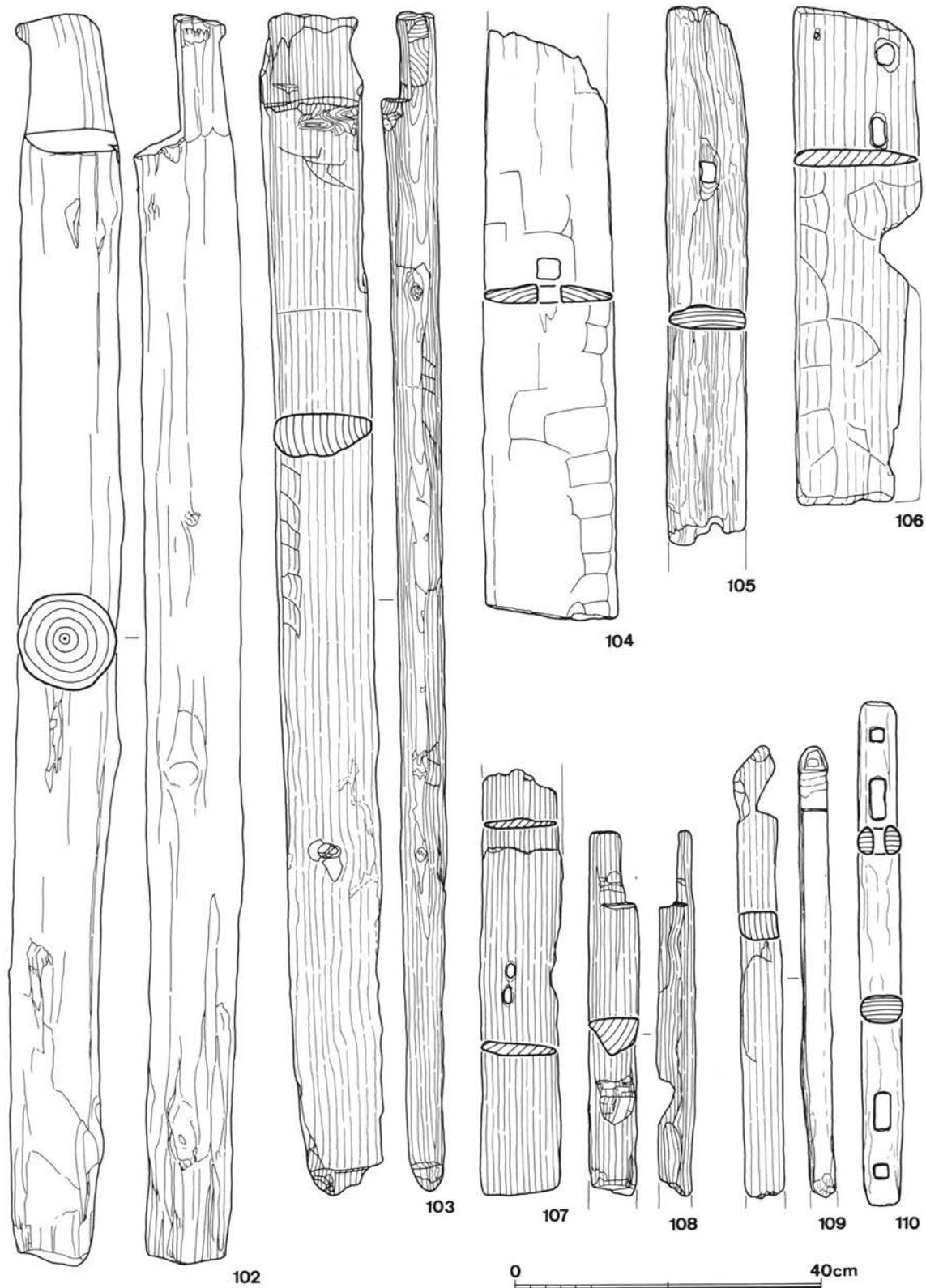
第3次調査木製品実測図(9)

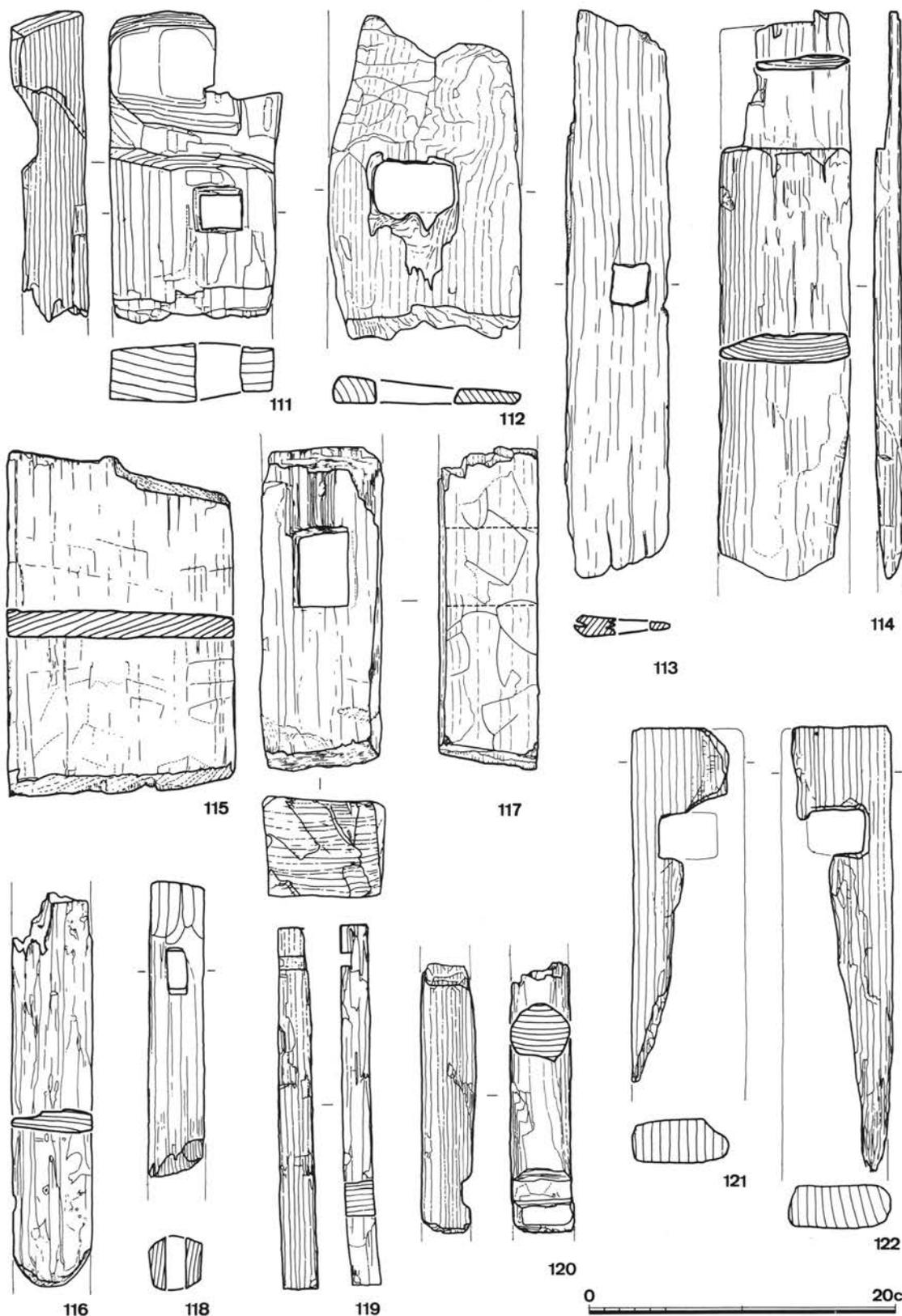


第3次調査木製品実測図(10)

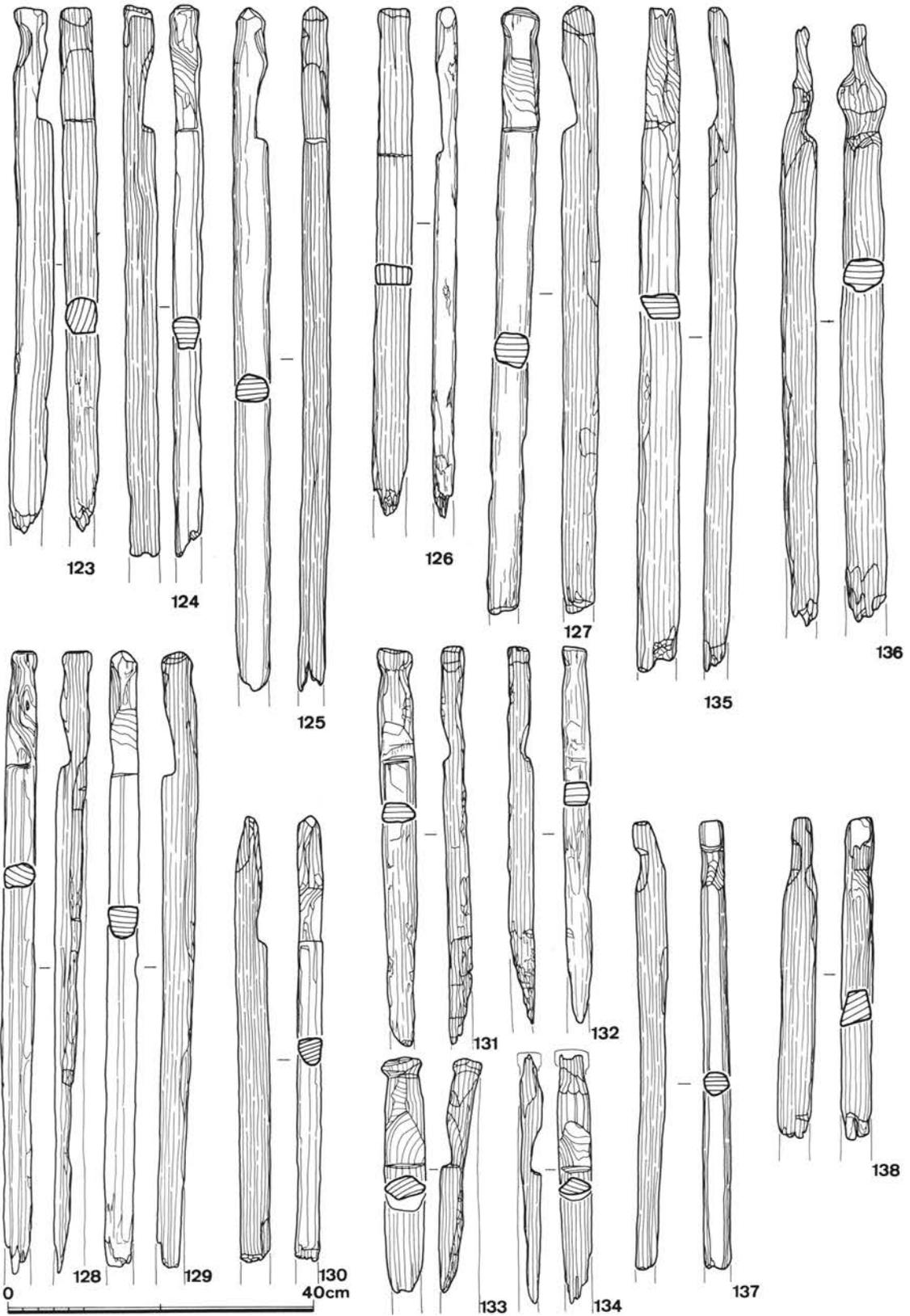


第3次調査木製品実測図(11)





第3次調査木製品実測図(13)



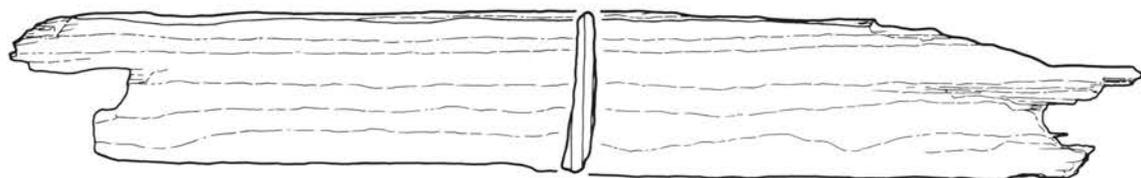
第3次調査木製品実測図(14)



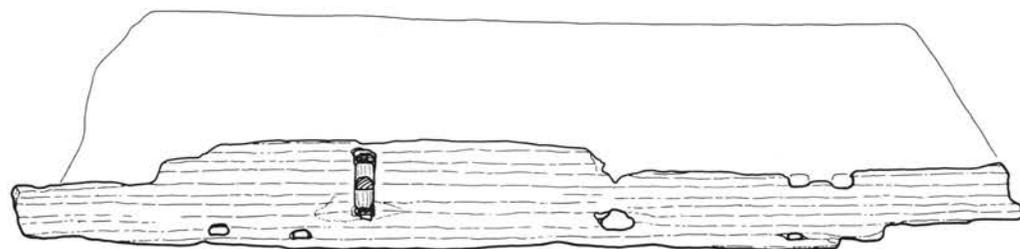
139



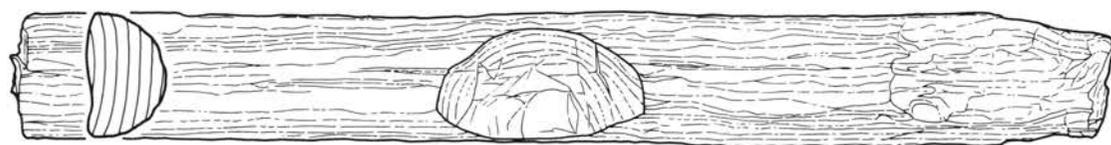
140



141



142

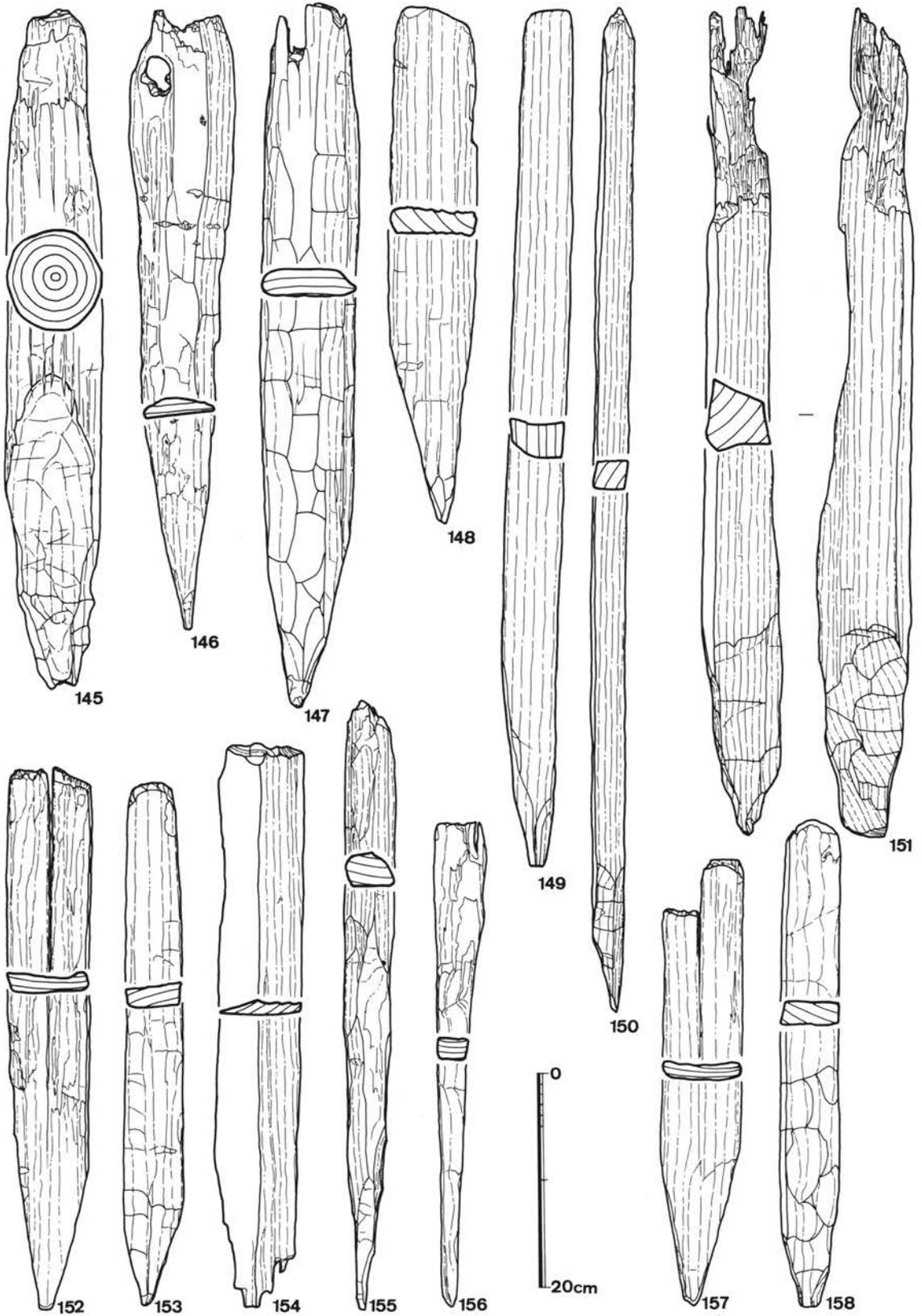


143

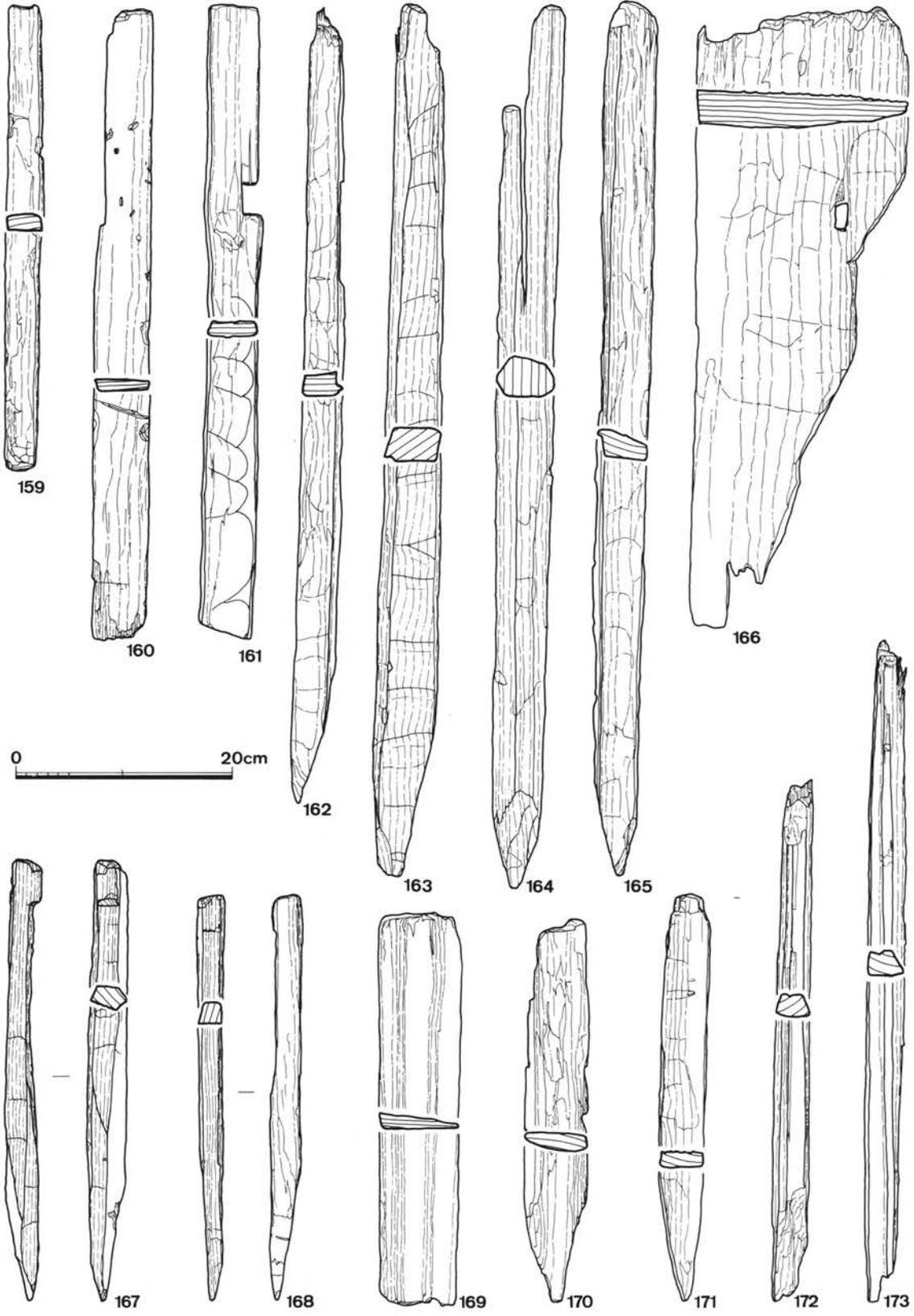


144

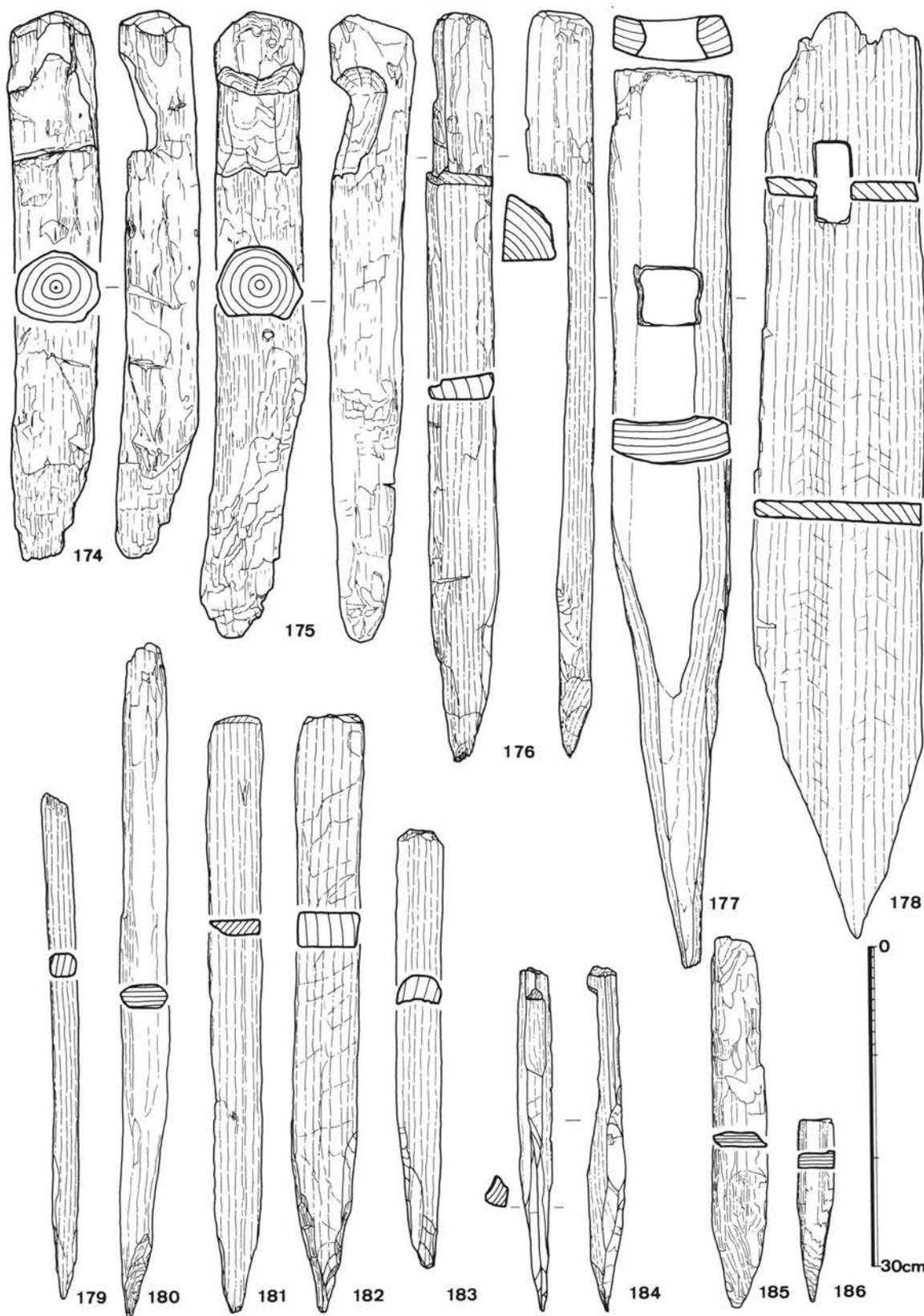




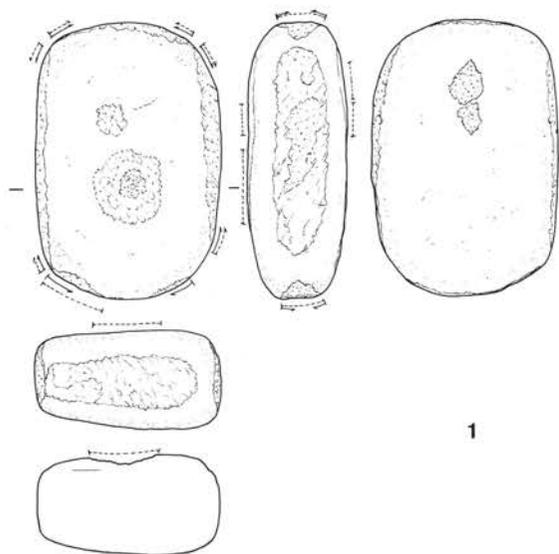
第3次調査木製品実測図(16)



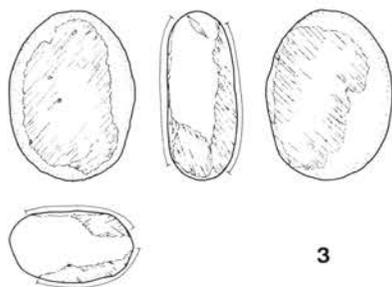
第3次調査木製品実測図(17)



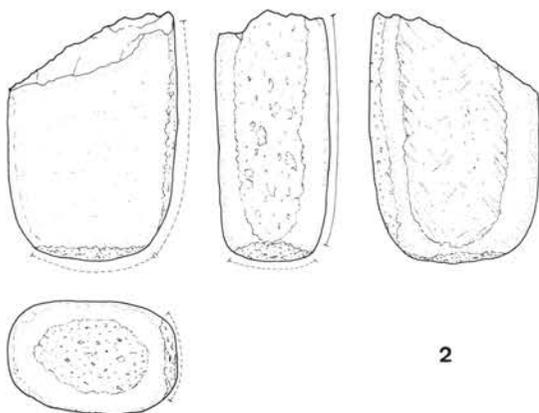
第3次調査木製品実測図(18)



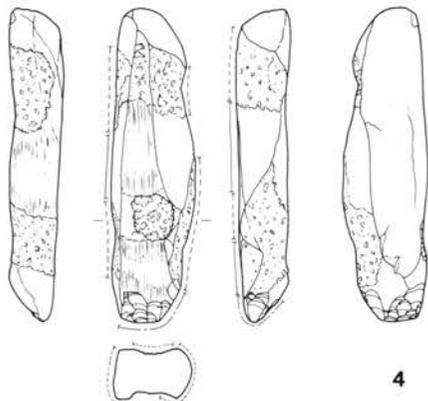
1



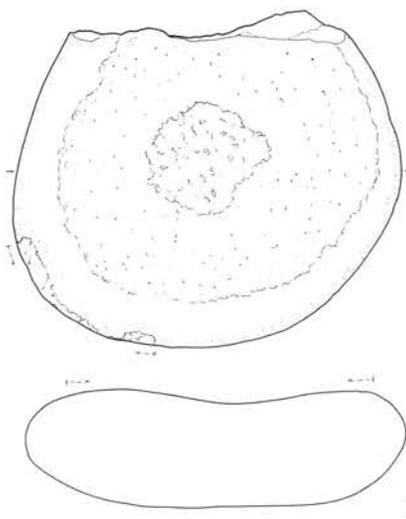
3



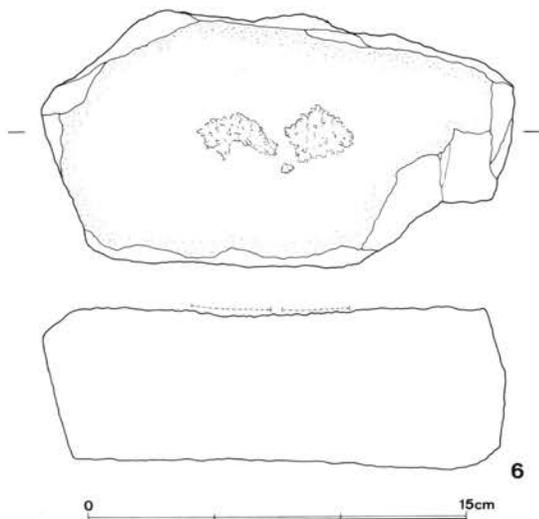
2



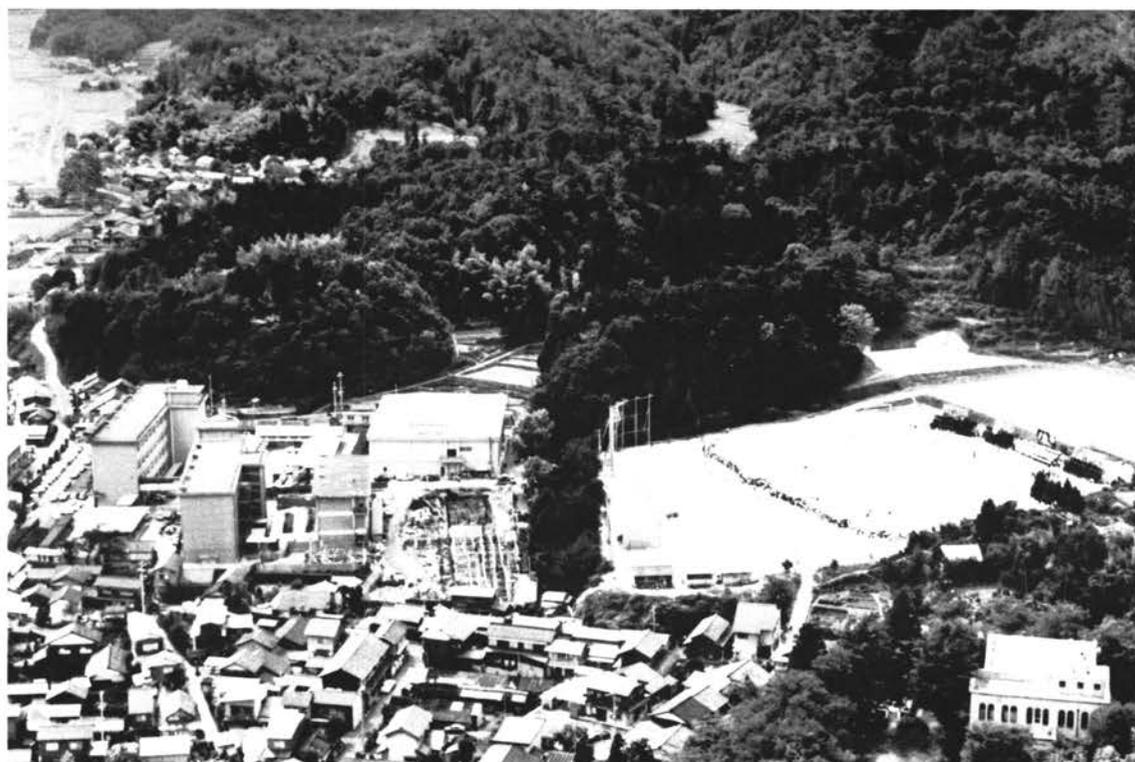
4



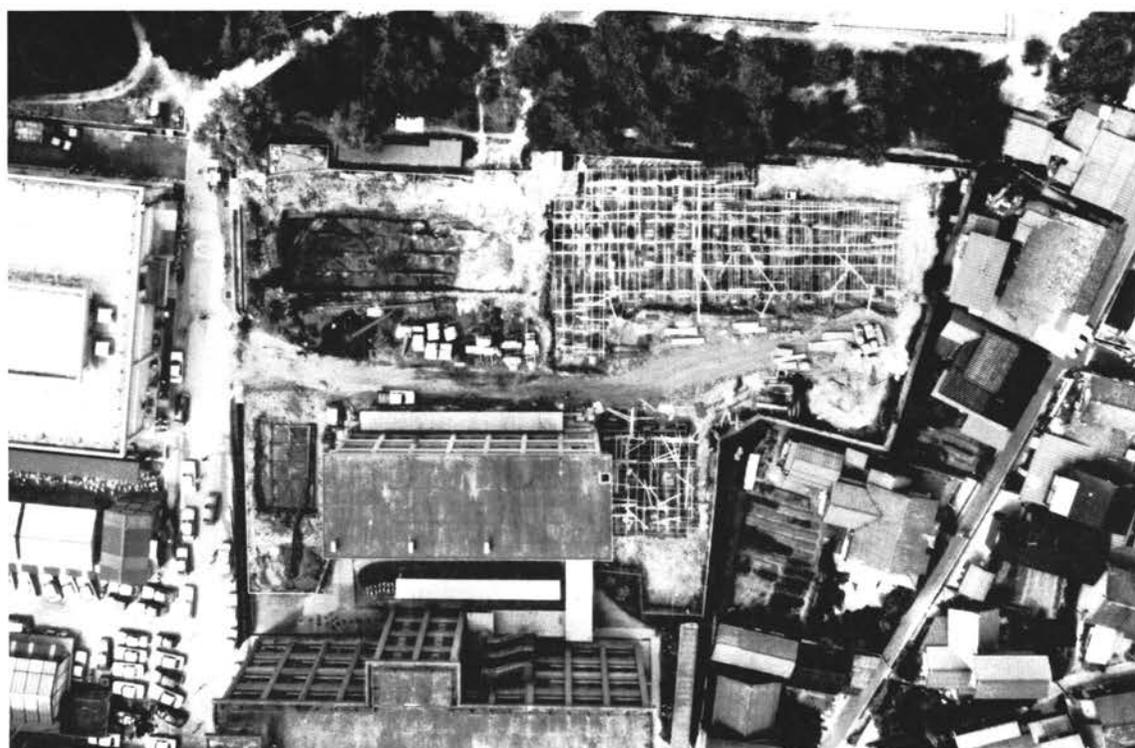
5



6



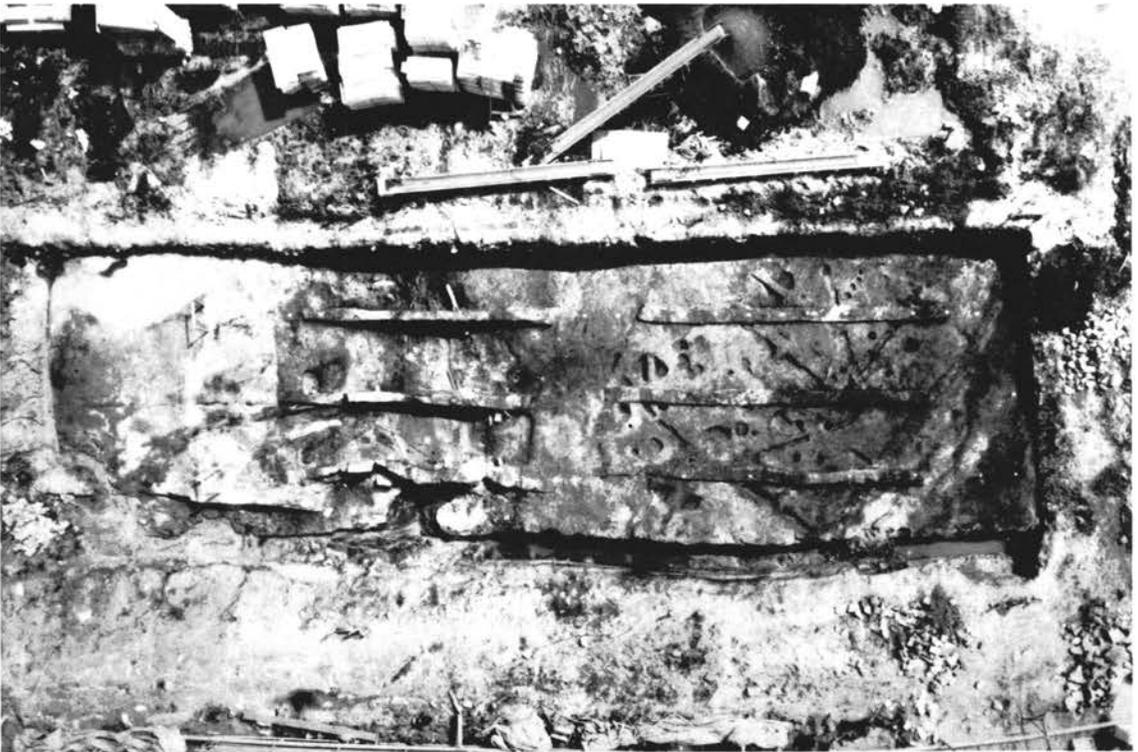
(1) 第2次調査 調査地遠景(東から)



(2) 第2次調査 第1・2トレンチ全景



(1) 第2次調査 第1・2トレンチ遠景 (南から)



(2) 第2次調査 第1トレンチ西半部



(1) 第2次調査 第1トレンチ全景 (西から)



(2) 第2次調査 第1トレンチ西半部遺構検出状況 (西から)



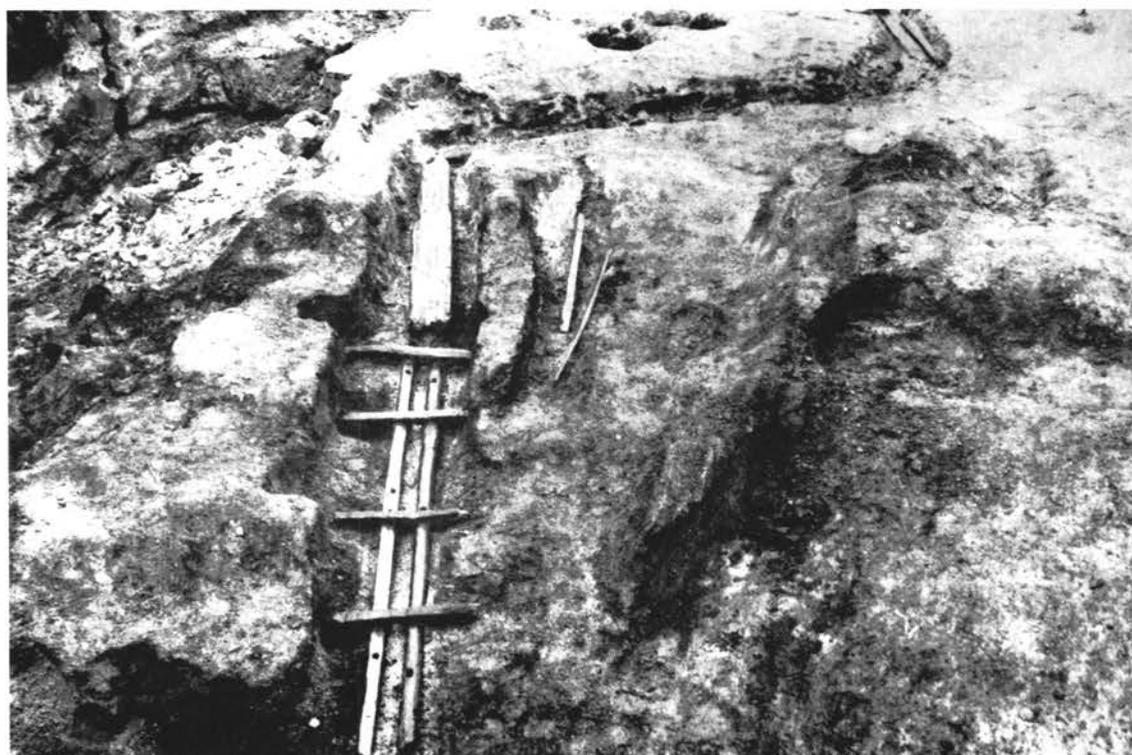
(1) 第2次調査 溝 S D02-2堰遺構検出状況 (北から)



(2) 第2次調査 溝 S D02-2護岸施設検出状況 (東から)



(1) 第2次調査 暗渠遺構 S X09検出状況-1 (西から)



(2) 第2次調査 暗渠遺構 S X09検出状況-2 (西から)



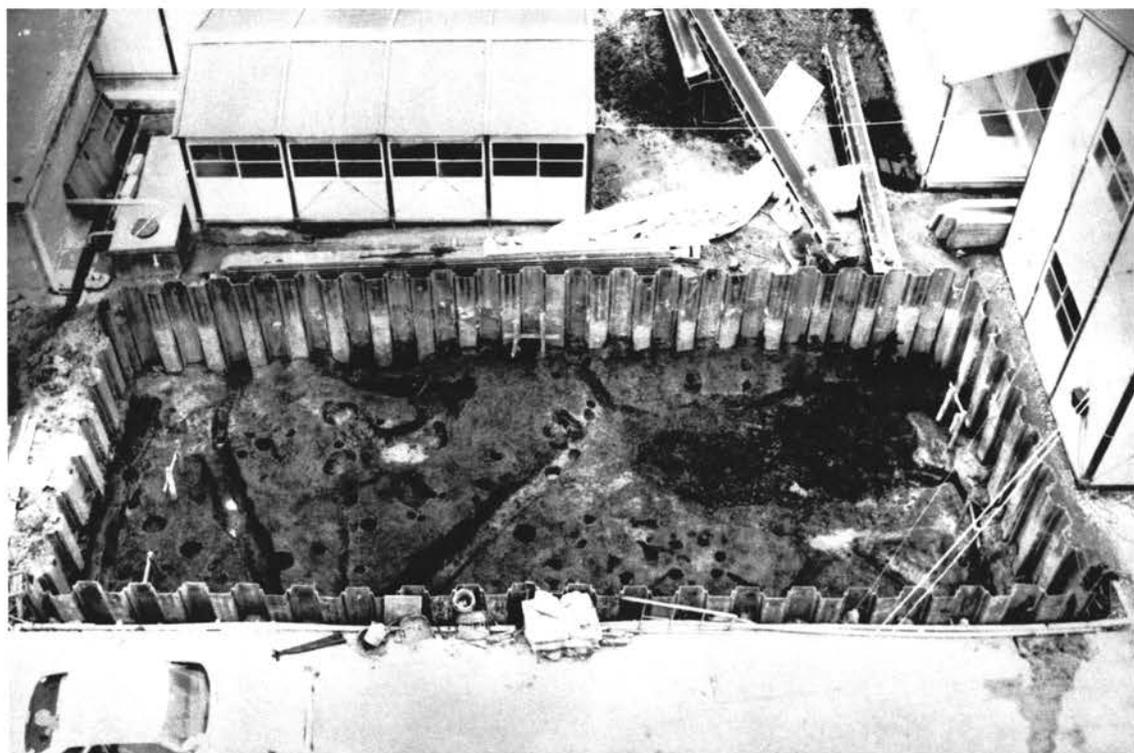
(1) 第2次調査 土器溜り S K03検出状況 (東から)



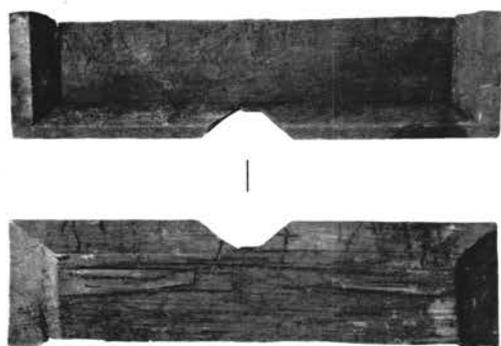
(2) 第2次調査 溝 S D04遺物出土状況 (西から)



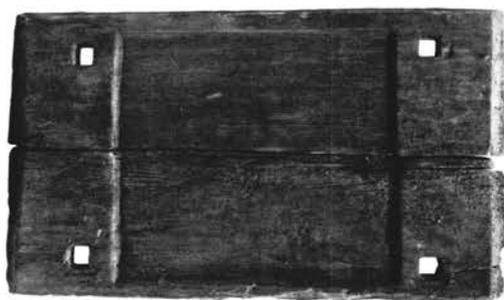
(1) 第2次調査 第2トレンチ遺構検出状況(東から)



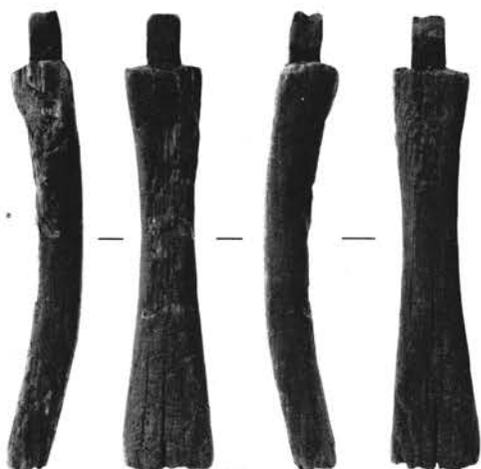
(2) 第2次調査 第4トレンチ遺構検出状況(東から)



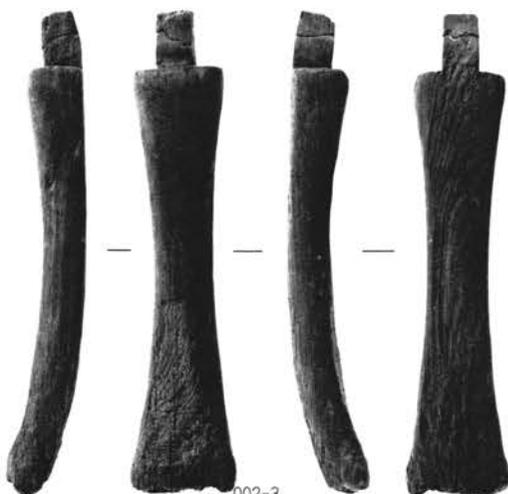
001



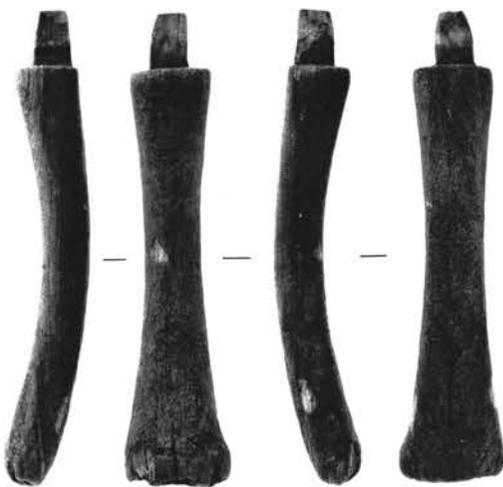
002



002-2



002-3

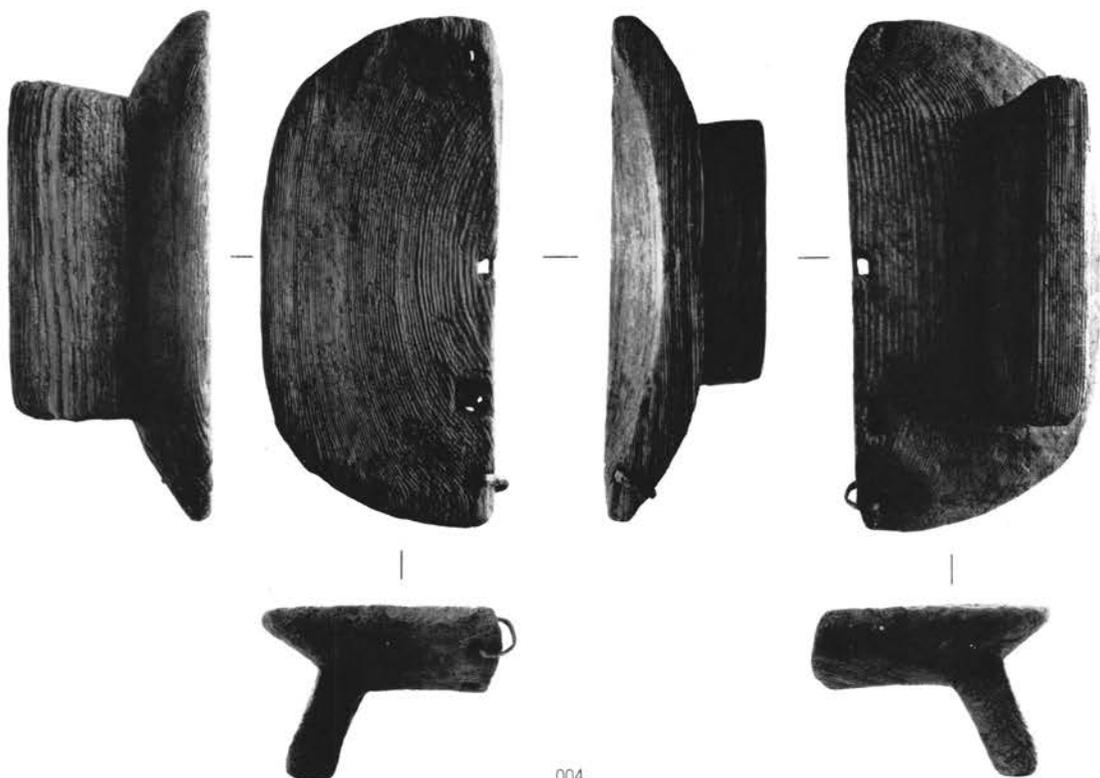


002-4

第2次調査 出土遺物 木製品(1)



第2次調査 出土遺物 木製品(2)



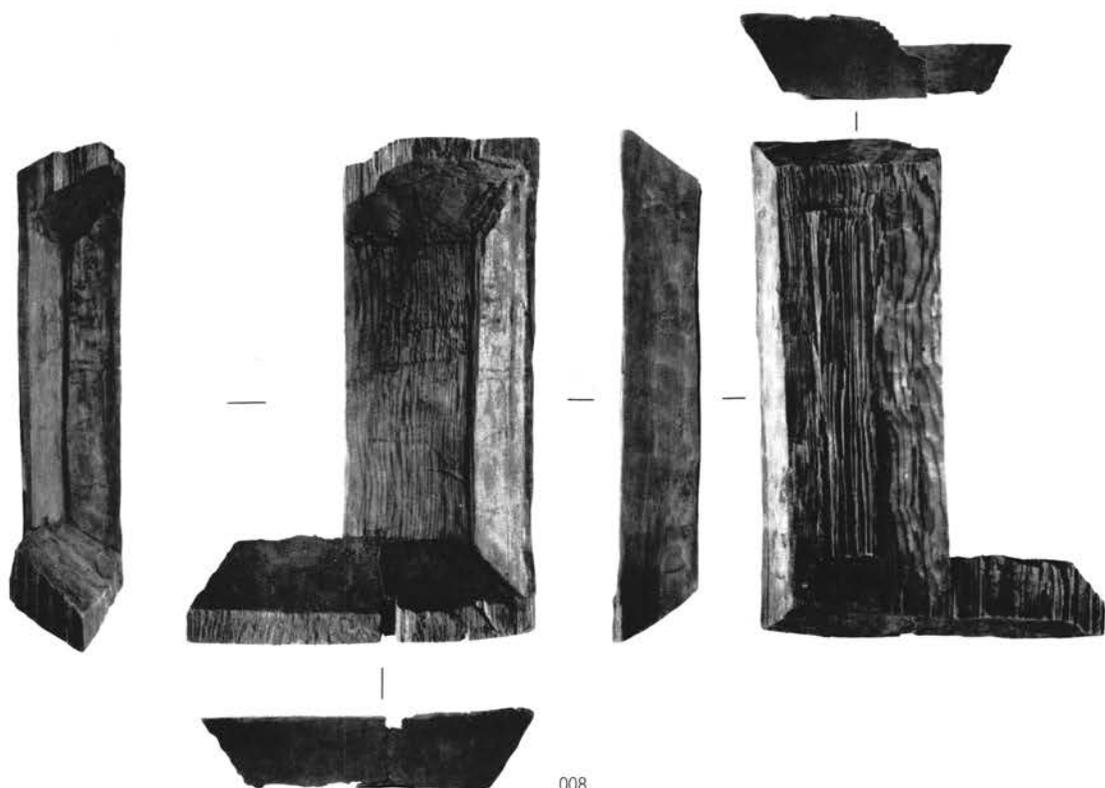
004



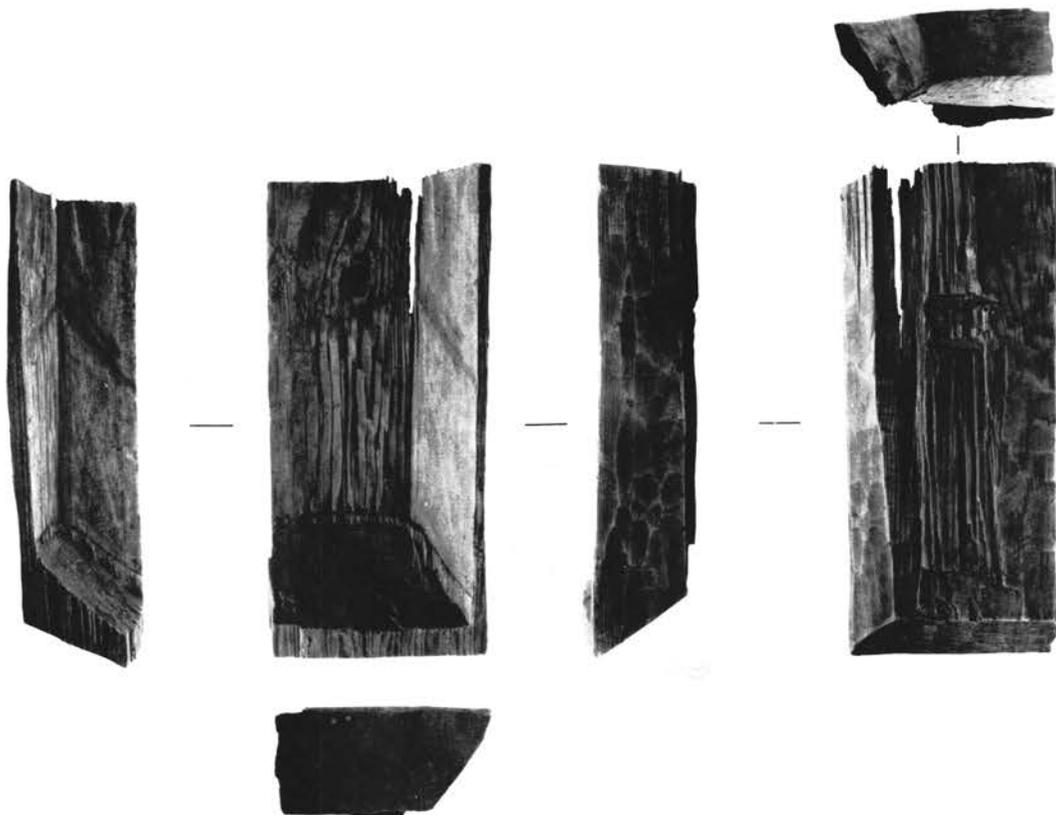
005



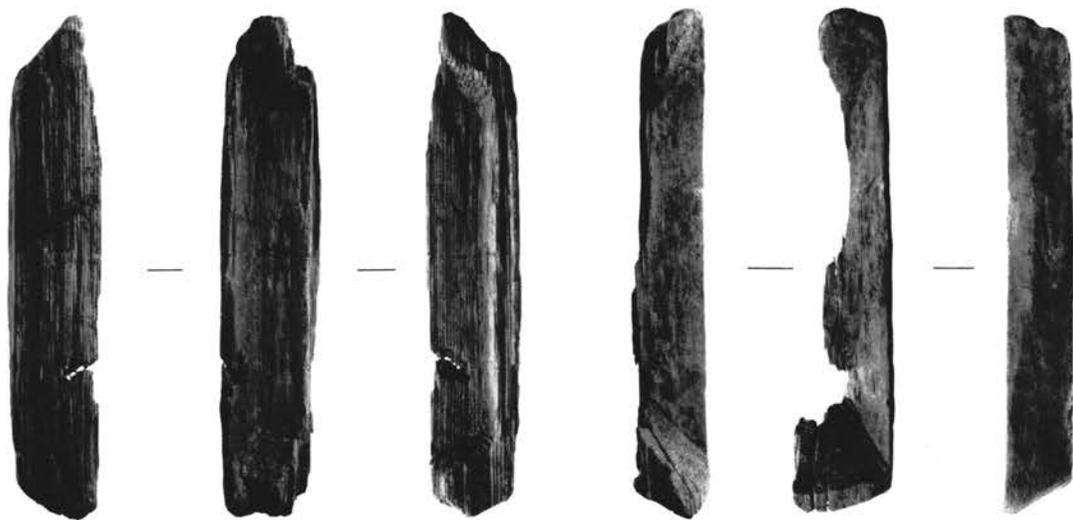
006



008

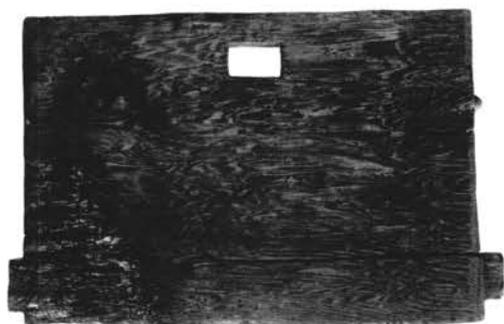
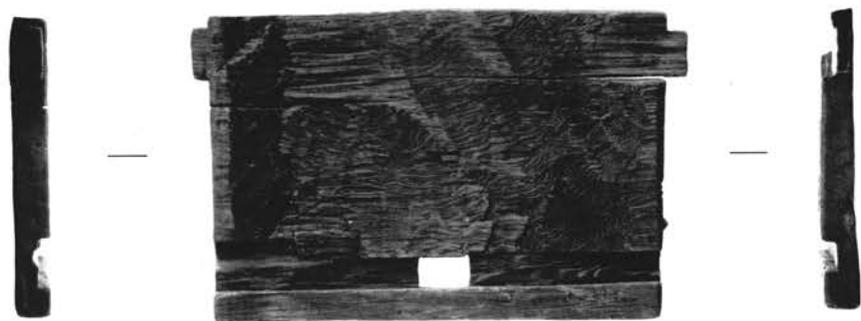


009



010

011



012

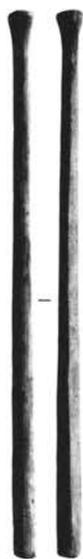


013



014

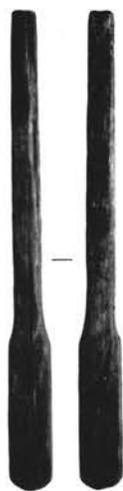




016



017



018



019



020



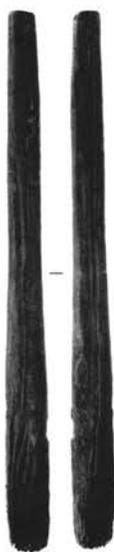
021



022



023



024



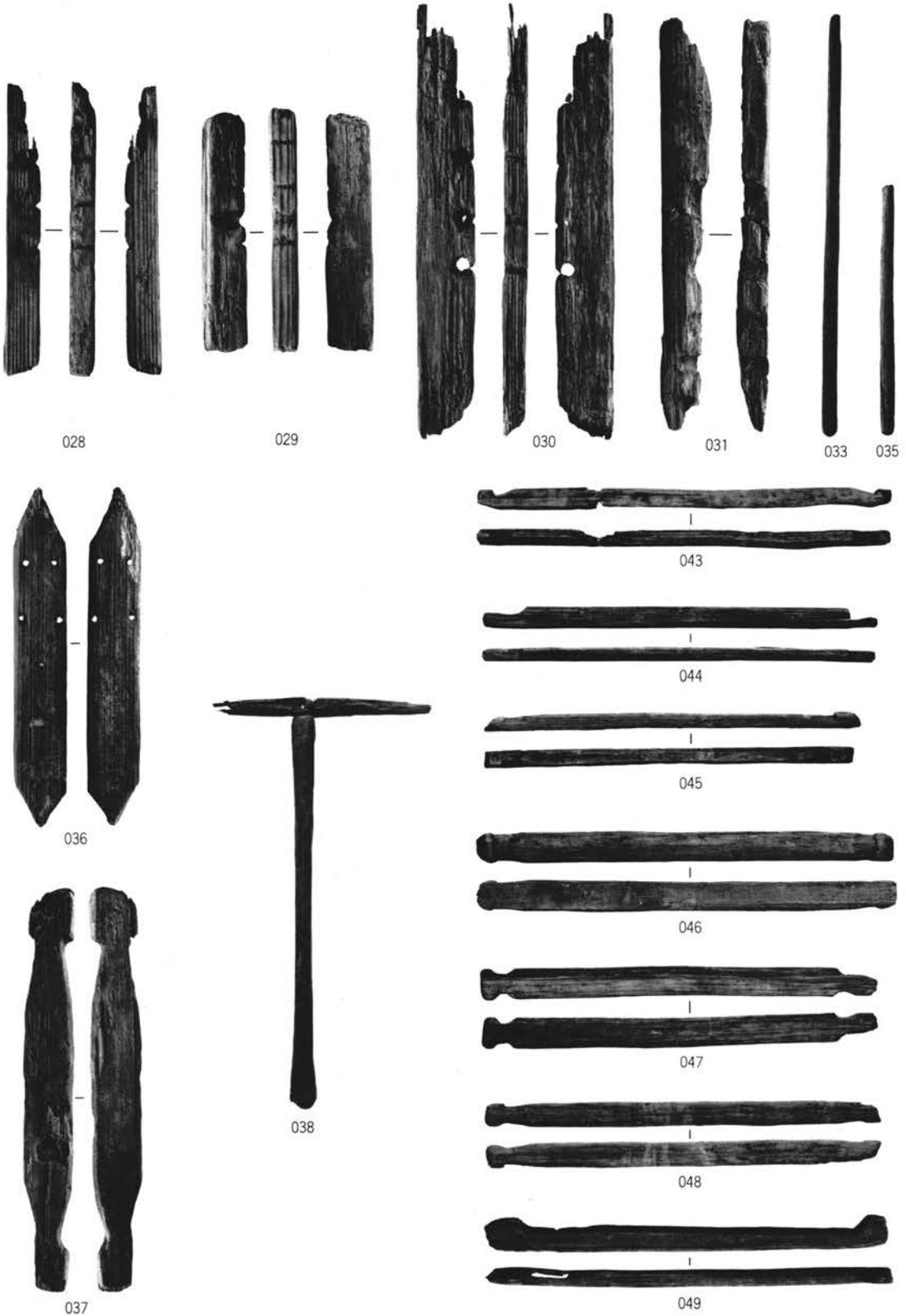
025



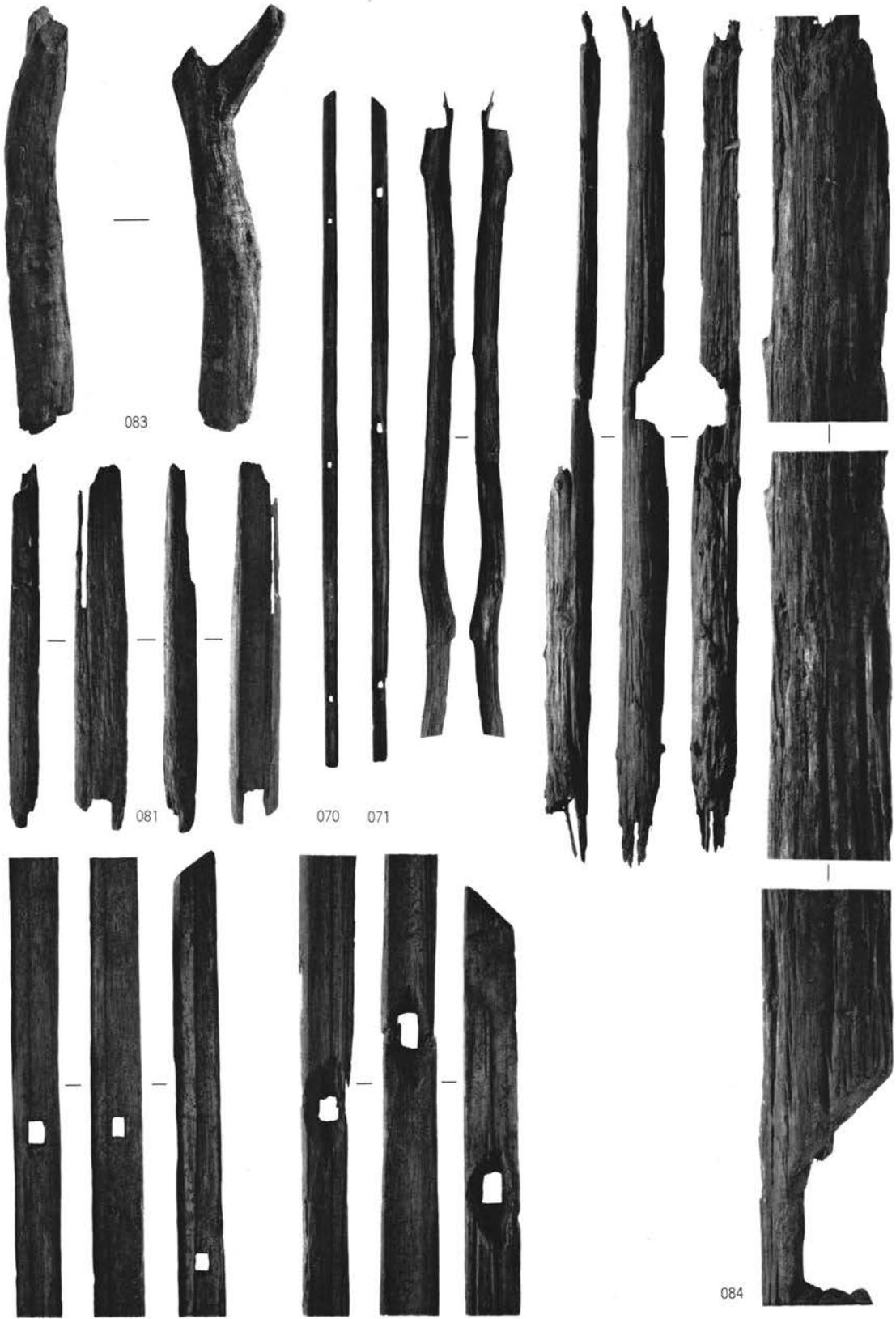
026



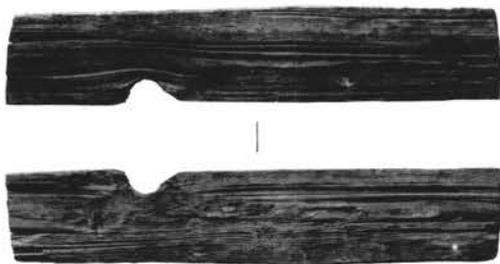
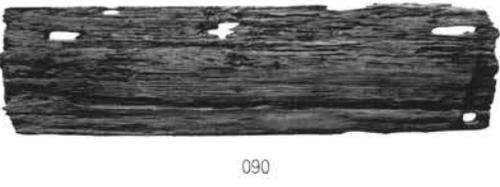
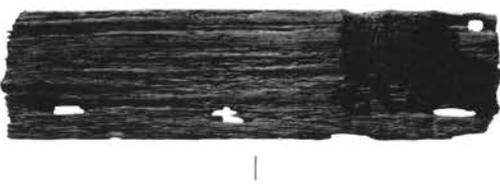
027

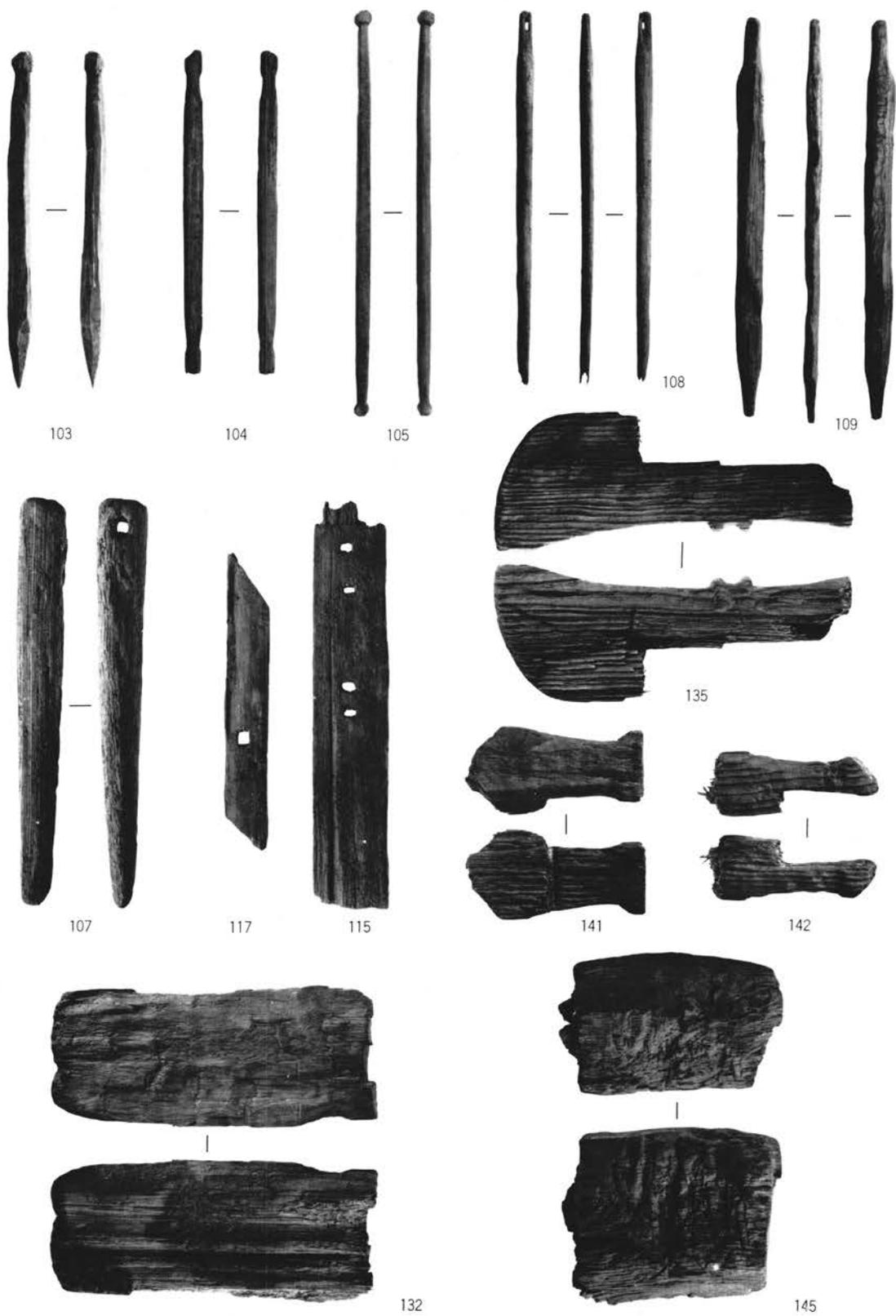


第2次調査 出土遺物 木製品(8)



第2次調査 出土遺物 木製品(9)

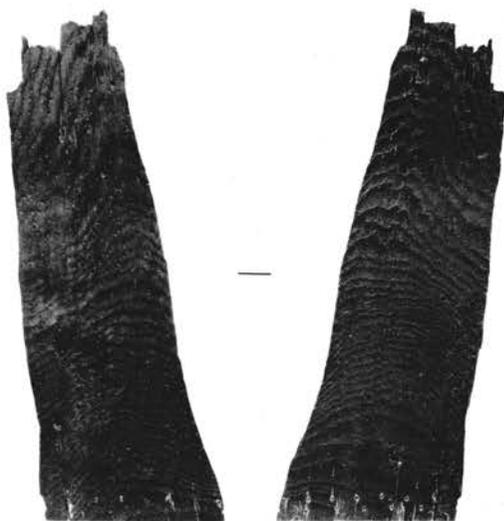




第2次調査 出土遺物 木製品(11)



125



127



|



|



128



|



065



066



129



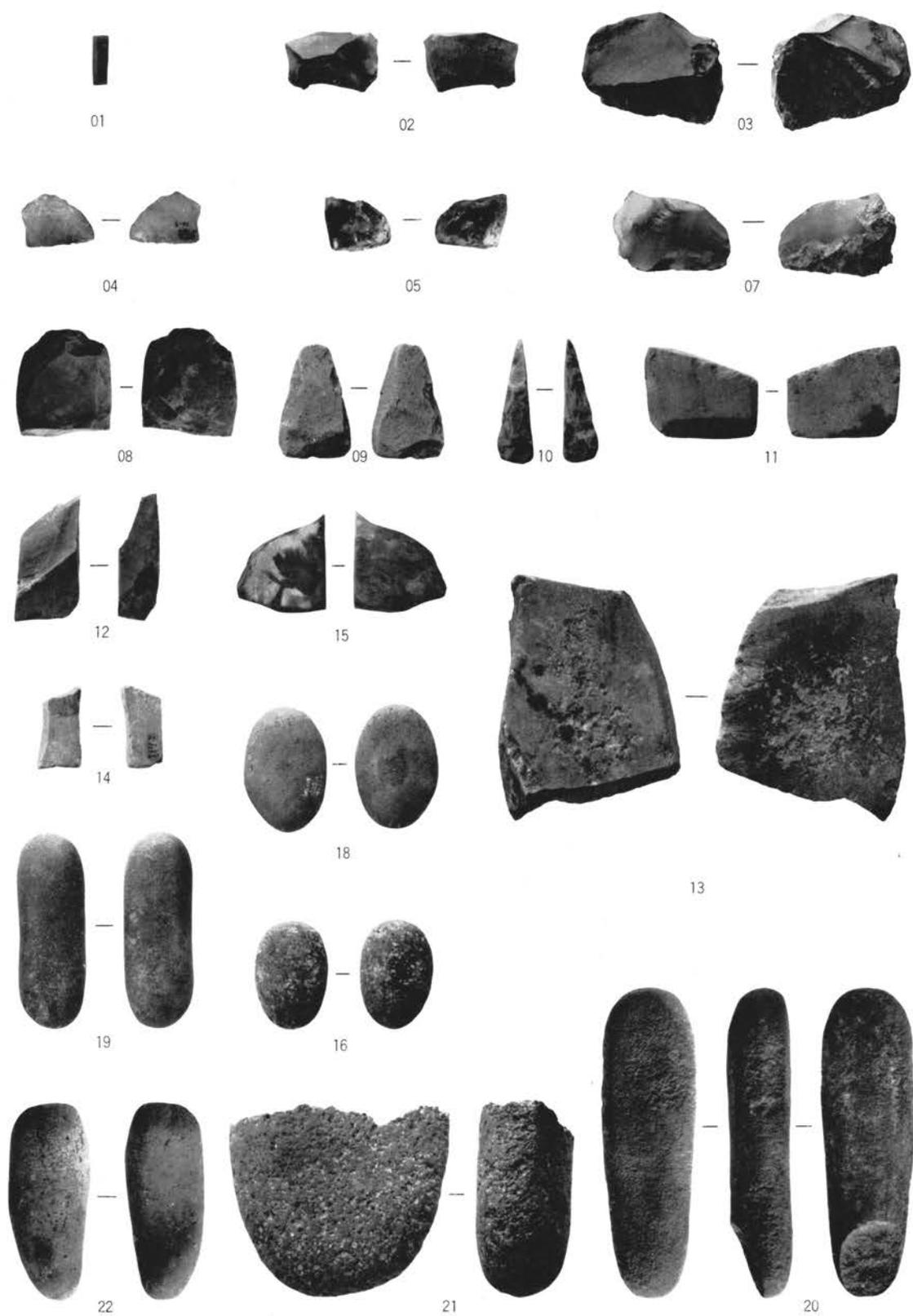
130



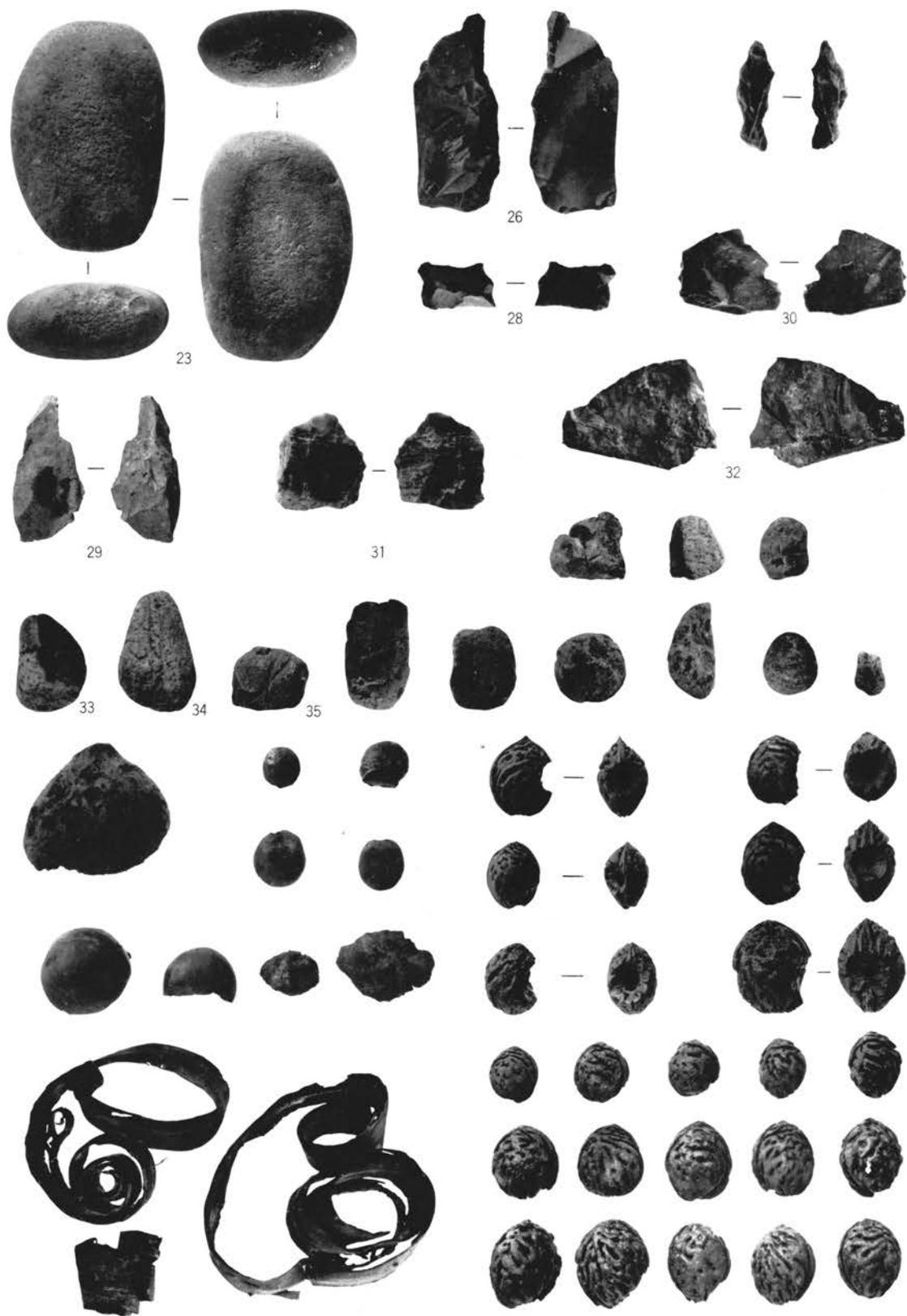
059



067



第2次調査 出土遺物 石器・石製品



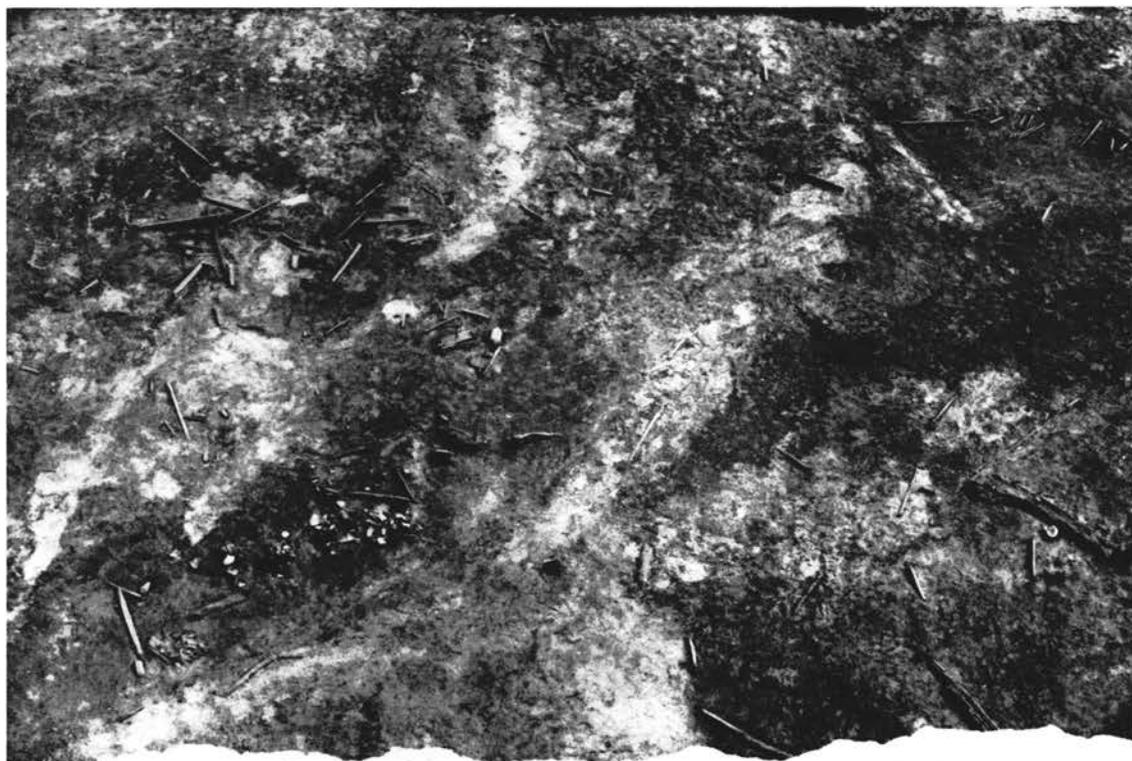
第2次調査 出土遺物 石器・石製品・その他の遺物



(1) 第3次調査 調査前全景 (東から)



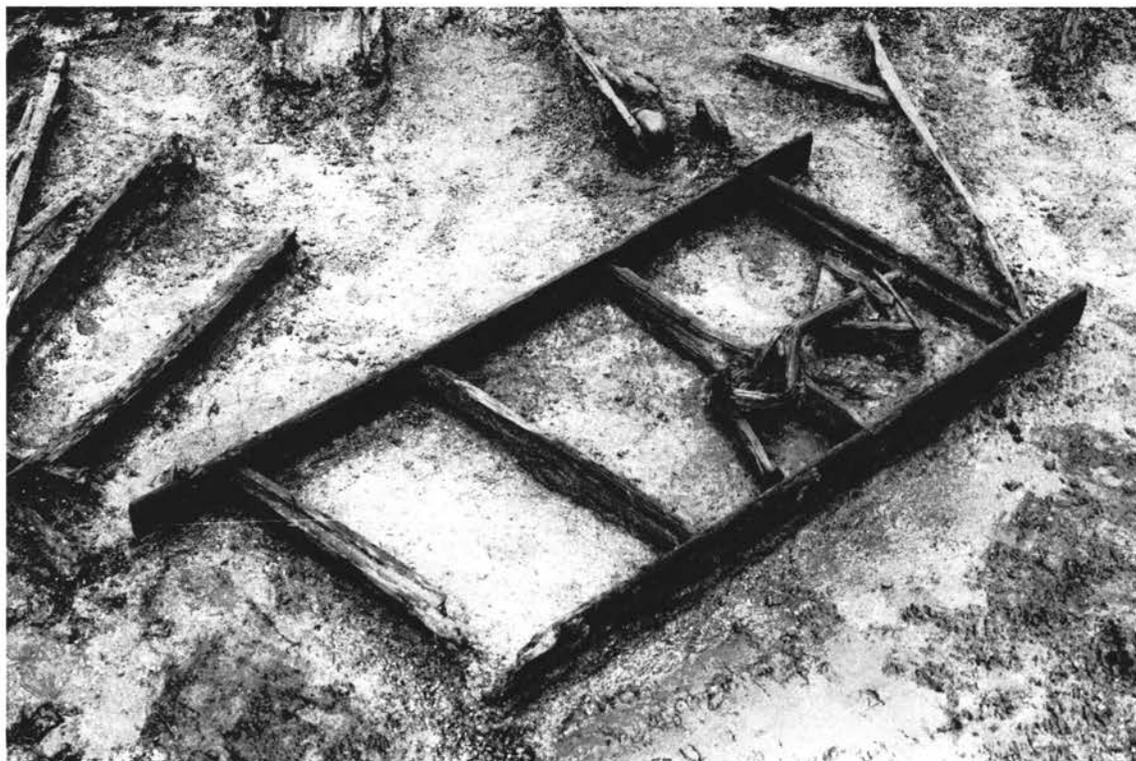
(2) 第3次調査 S D301断面土層 (南から)



(1) 第3次調査 第Ⅲ層上面遺物出土状況（北から）



(2) 第3次調査 舟・箱形木製品出土状況（西から）



(1) 第3次調査 梯子状組合せ木製品出土状況（西から）



(2) 第3次調査 梯子状組合せ木製品出土状況（東から）



(1) 第3次調査 S X 301 (南から)



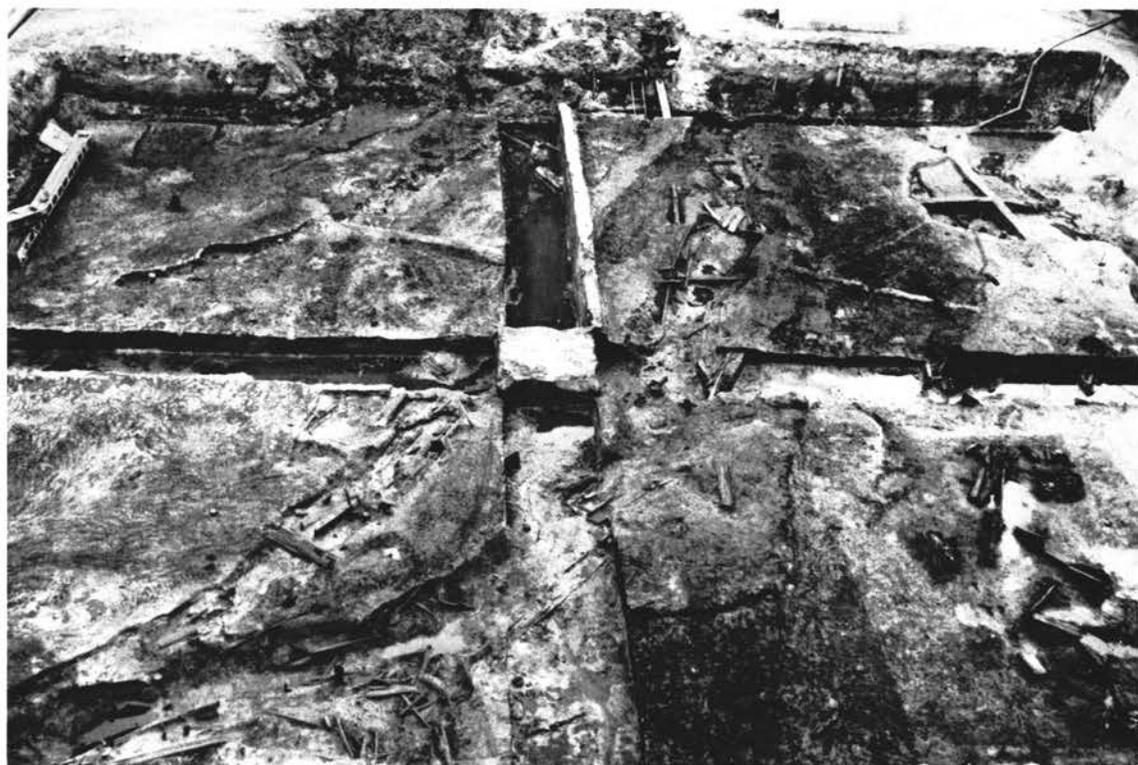
(2) 第3次調査 S X 301 (南西から)



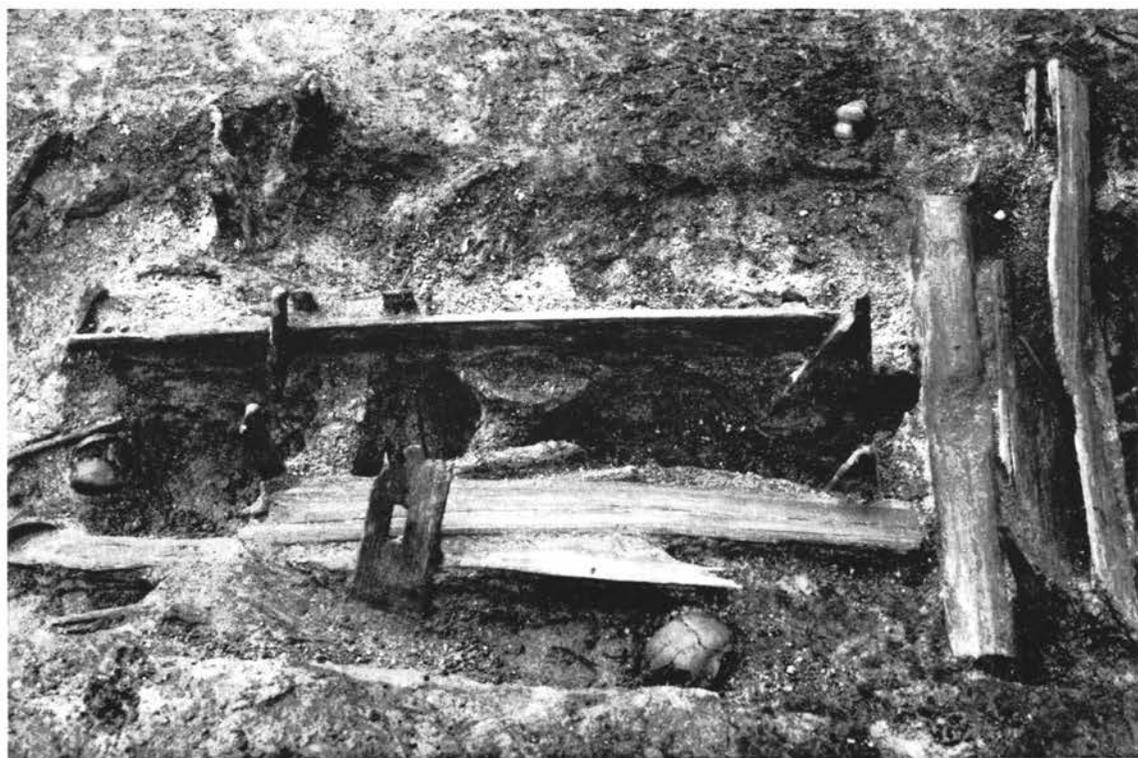
(1) 第3次調査 S X301 (北東から)



(2) 第3次調査 S D304 (南から)



(1) 第3次調査 第Ⅲ～Ⅳ期遺構全景（北から）



(2) 第3次調査 S D302 堰（南東から）



(1) 第3次調査 S D302・S D303分流地点 (北東から)



(2) 第3次調査 S D302・S D303分流地点 (南から)



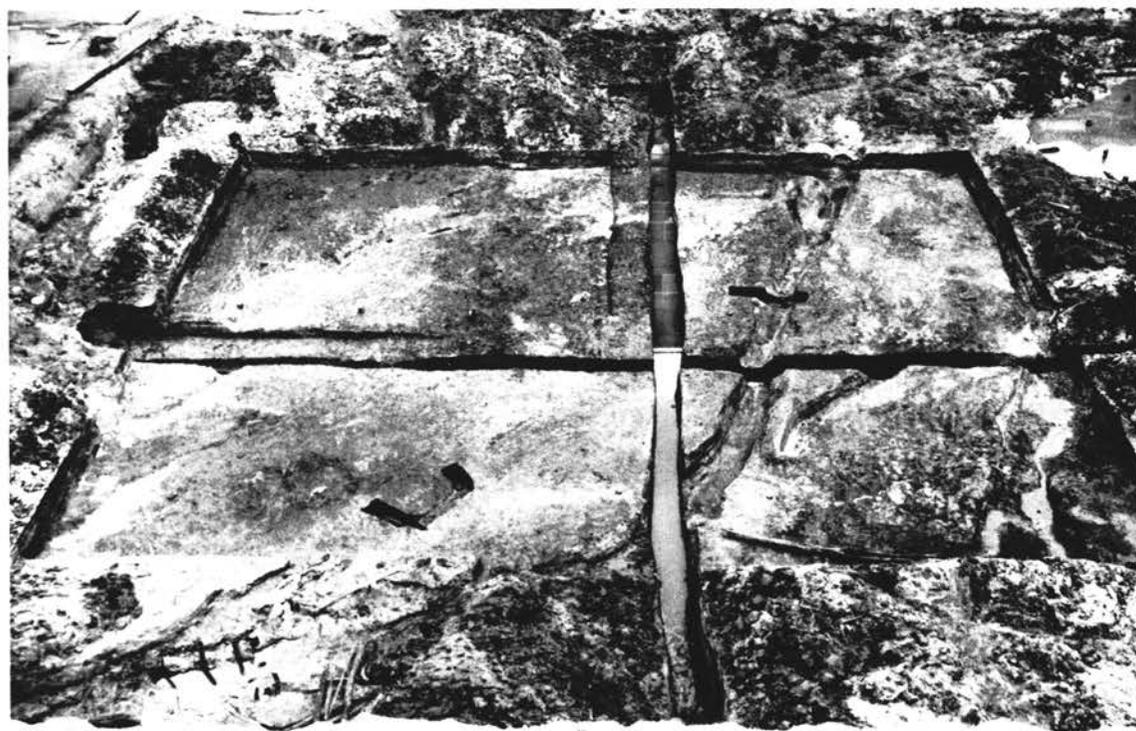
(1) 第3次調査 S D 303 案・鏝形木製品出土状況



(2) 第3次調査 S D 302 塚の一部



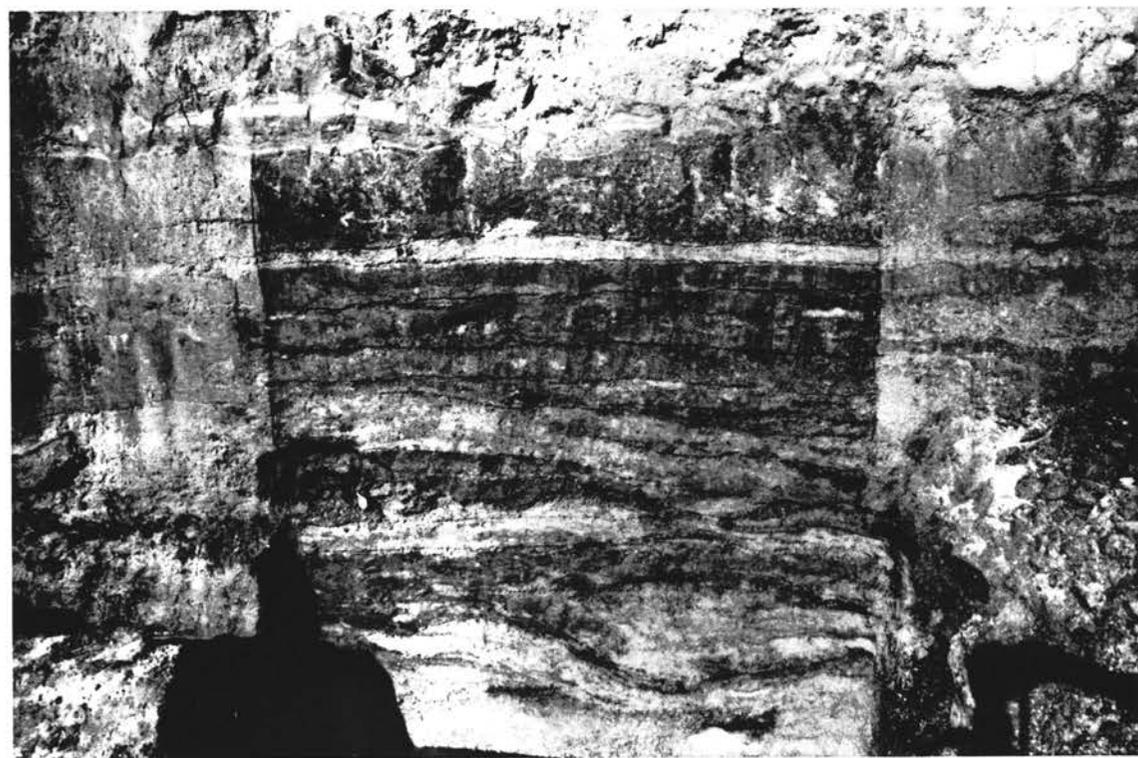
(1) 第3次調査 S D305・S D307 (南西から)



(2) 第3次調査 第Ⅱ期遺構全景 (北から)



(1) 第3次調査 S X302検出状況



(2) 第3次調査 トレンチ北壁土層



185



5



198



69



203



64



245



235



230



234



229



229'



234'



281



319



287



285



318



315



301



331



297



302



343



304



306



305



344



342



291



341



295



288
289



292



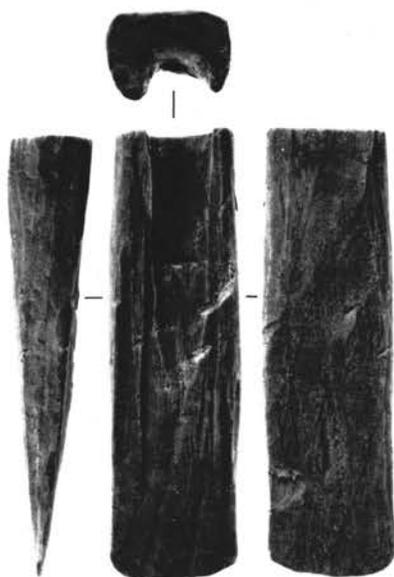
335



335



1



3



2



10



5

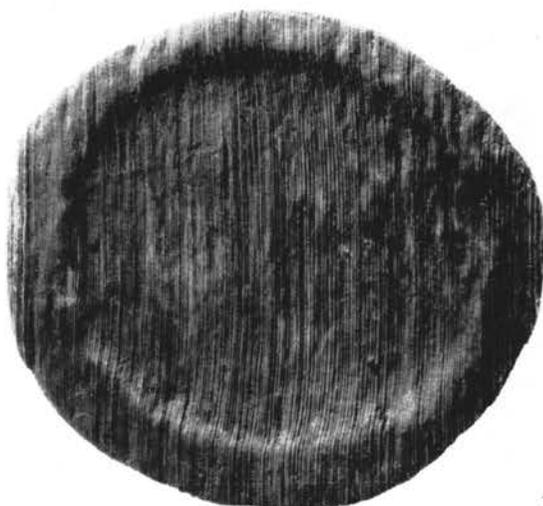
4



8



9



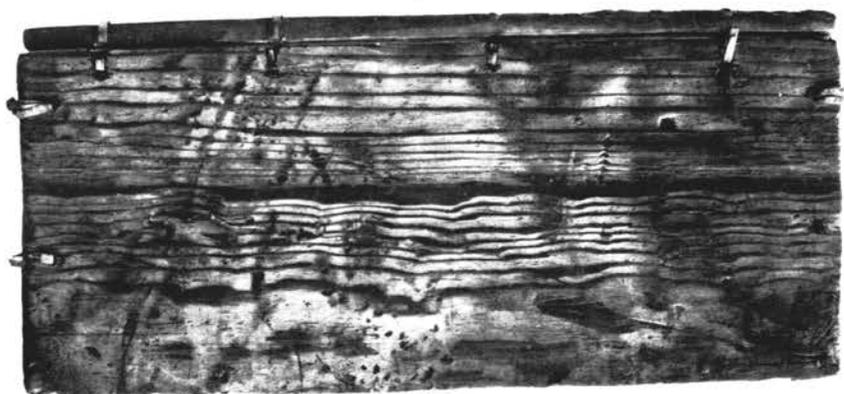
15



7



18



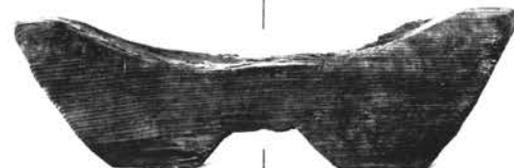
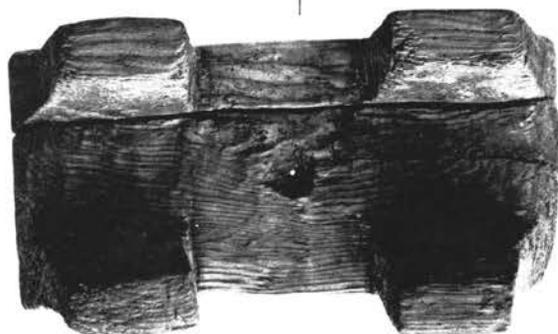
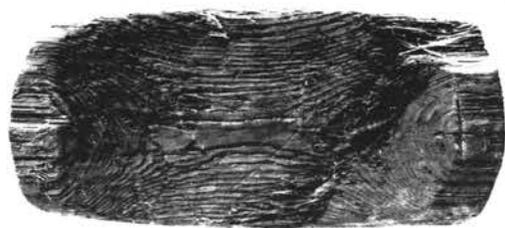
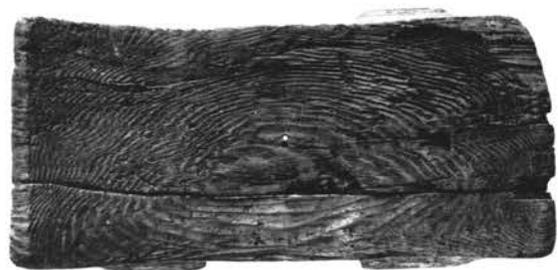
12



12



12

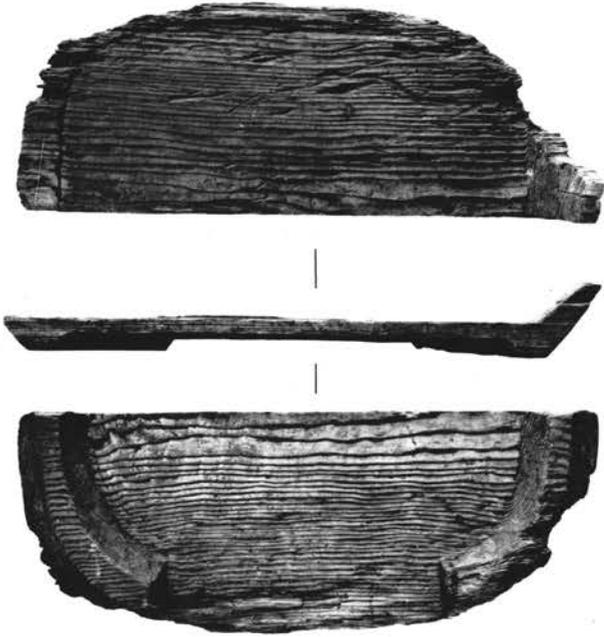


21

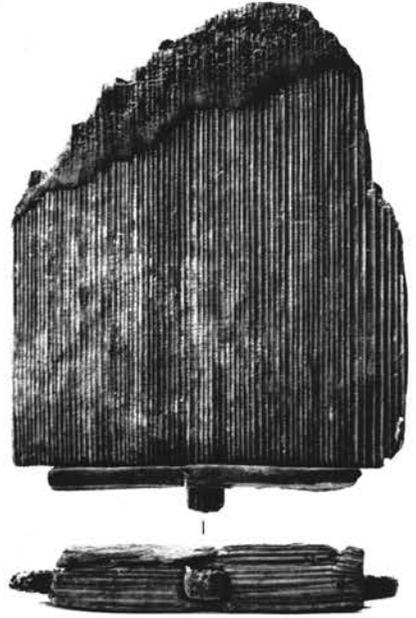
22



23



24



13



25



26

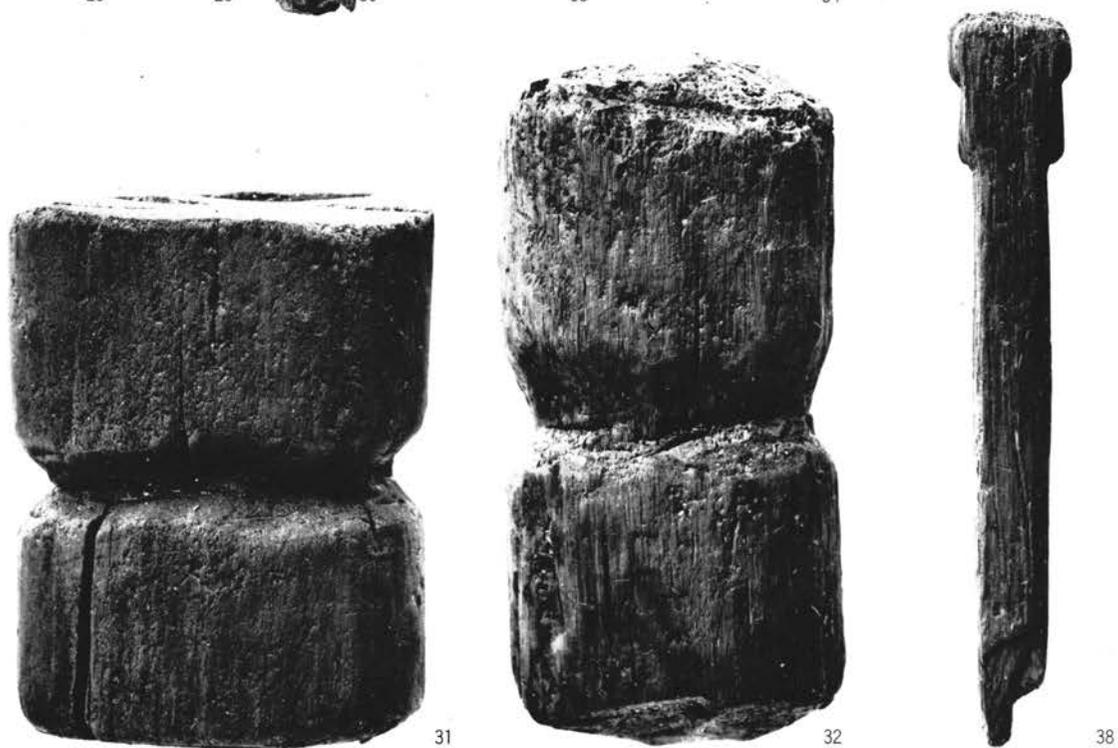
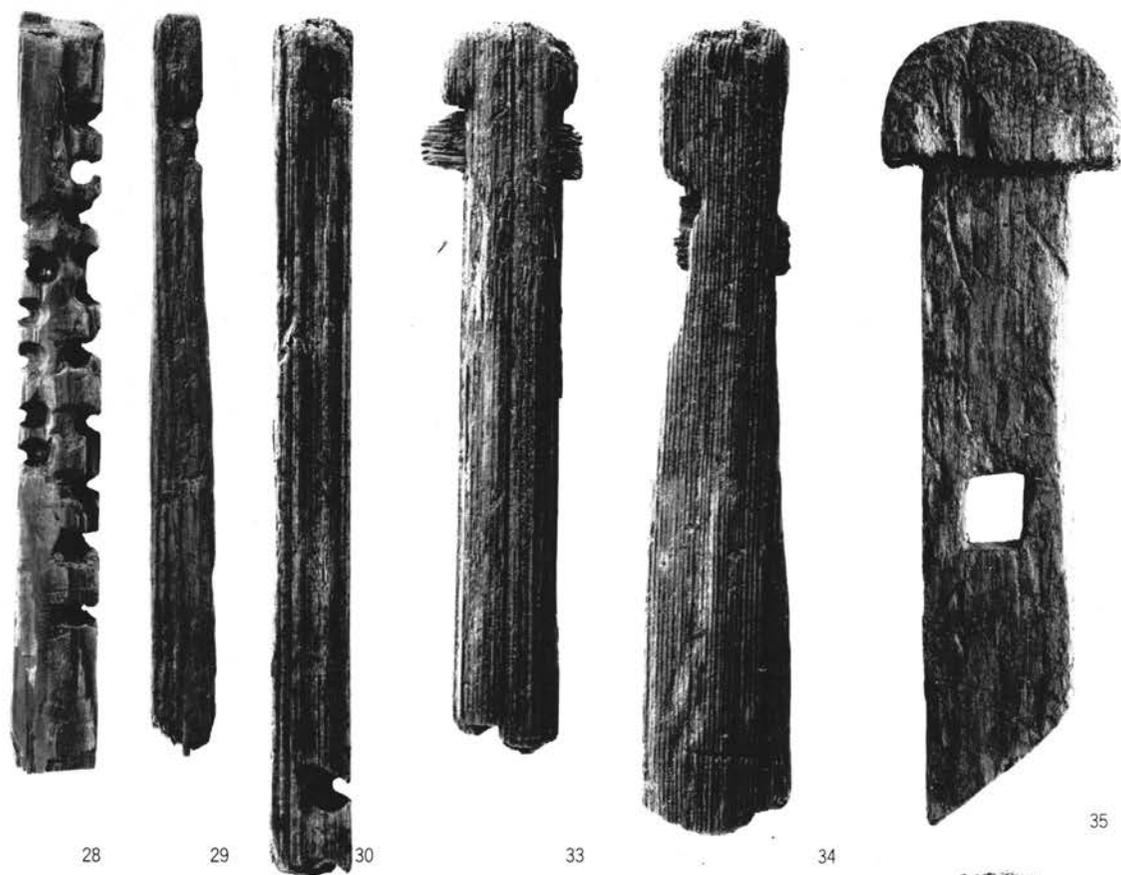


27



26





第3次調査 出土遺物 木製品(6)



43



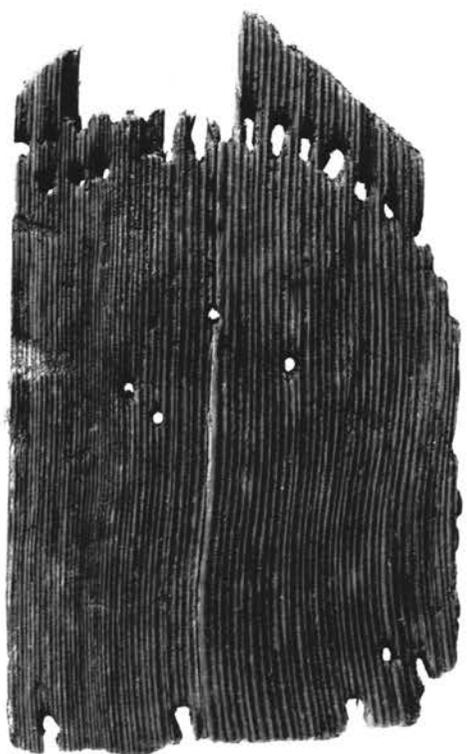
44



47



48



46



84



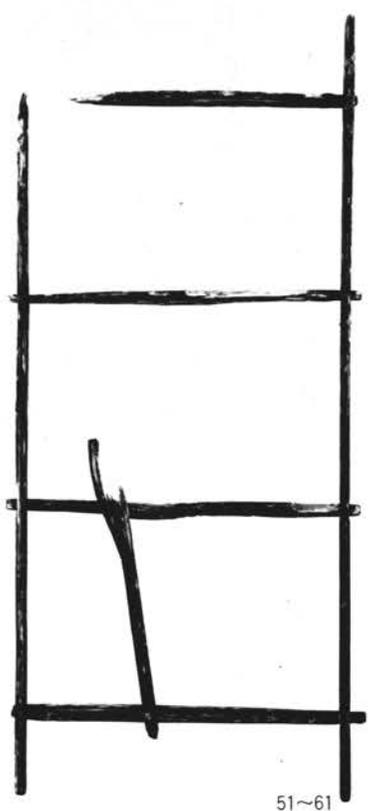
83



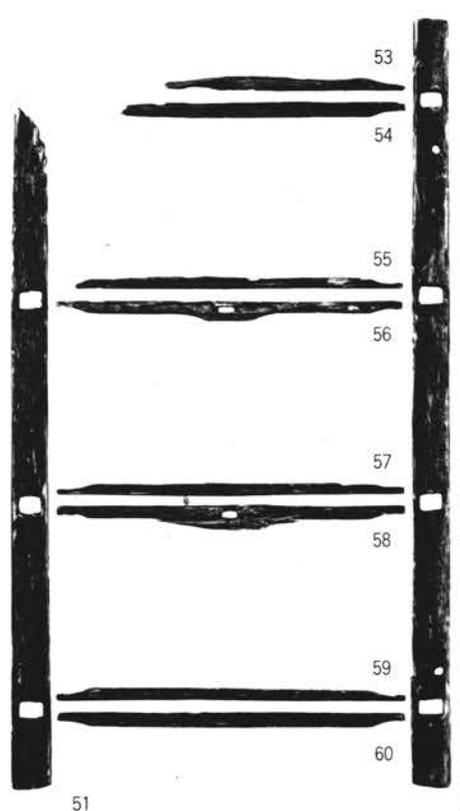
82



80



51~61

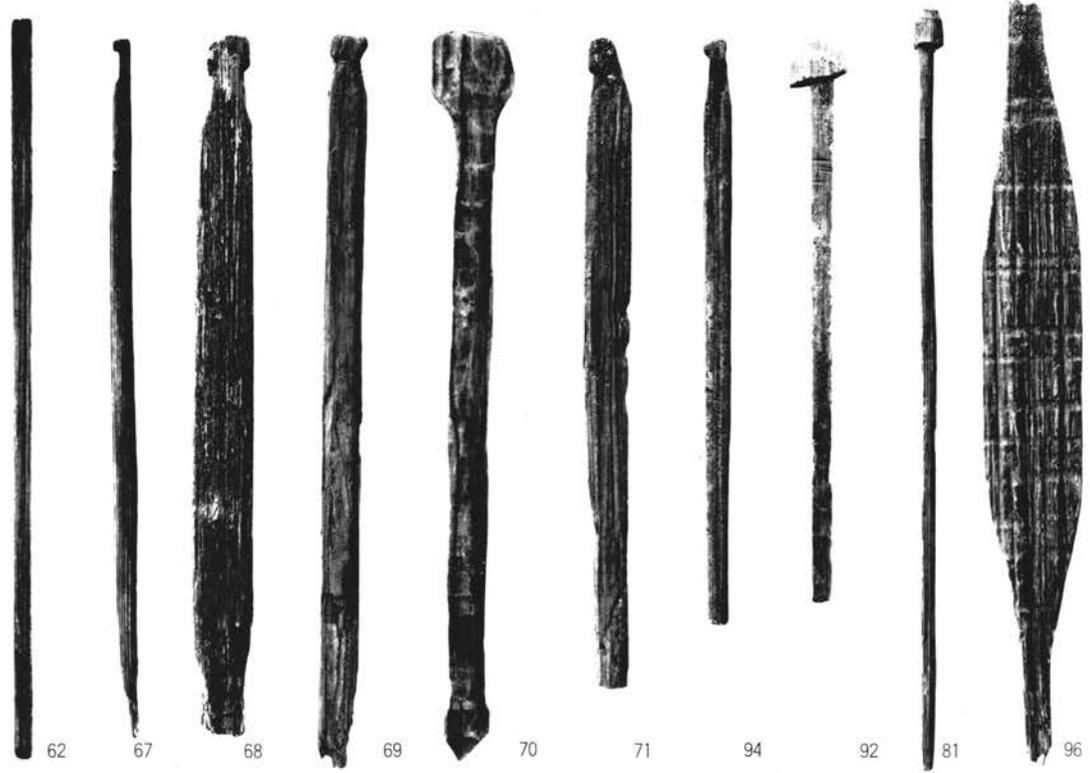


51



52

61



62

67

68

69

70

71

94

92

81

96

第2次調査 出土遺物 木製品(8)



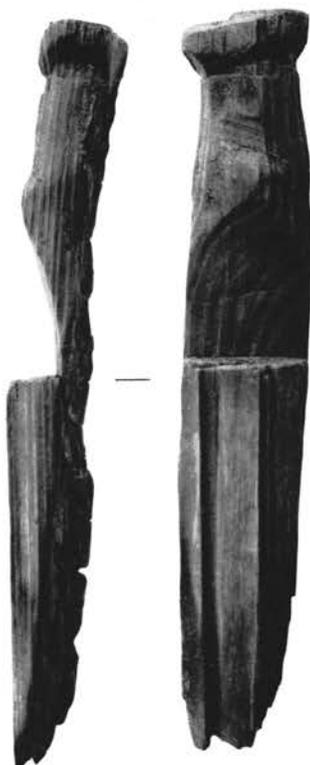
123



124



125



133



127



131



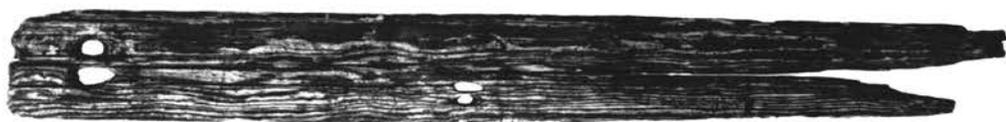
132



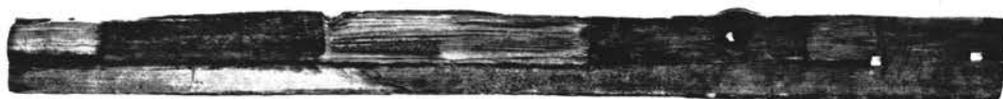
130



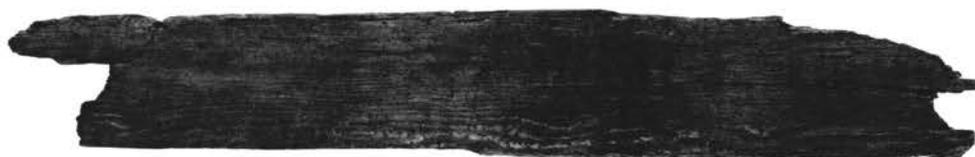
137



139



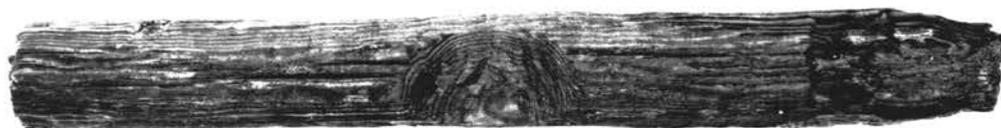
140



141



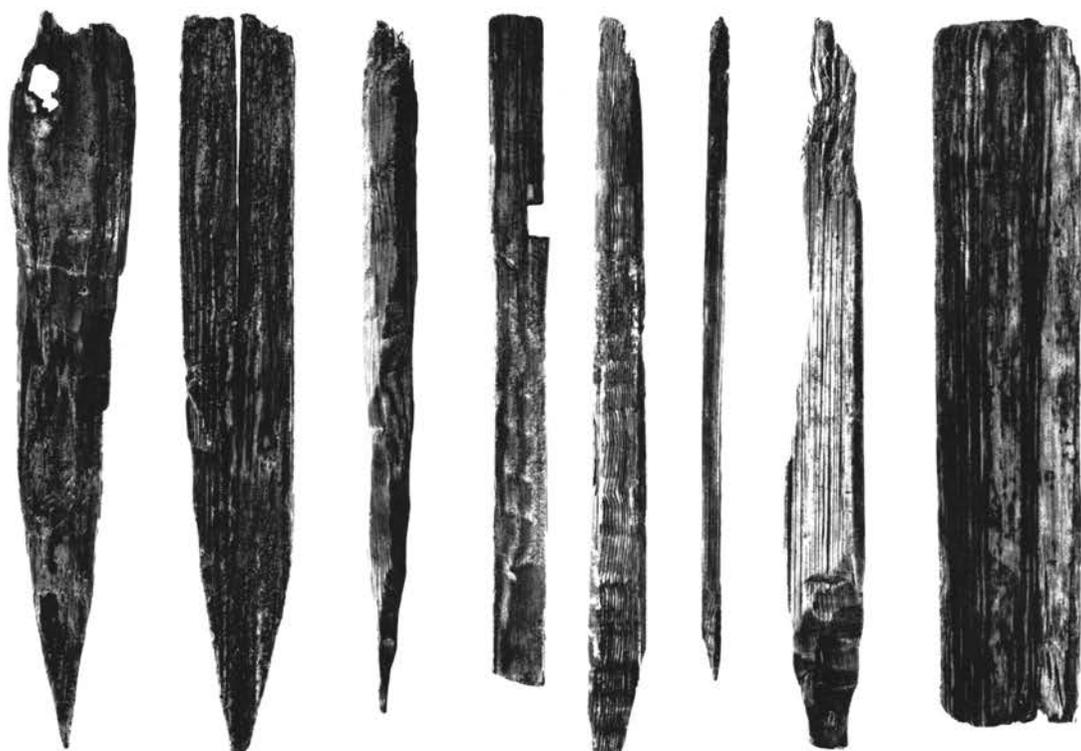
142



143



144



146

152

162

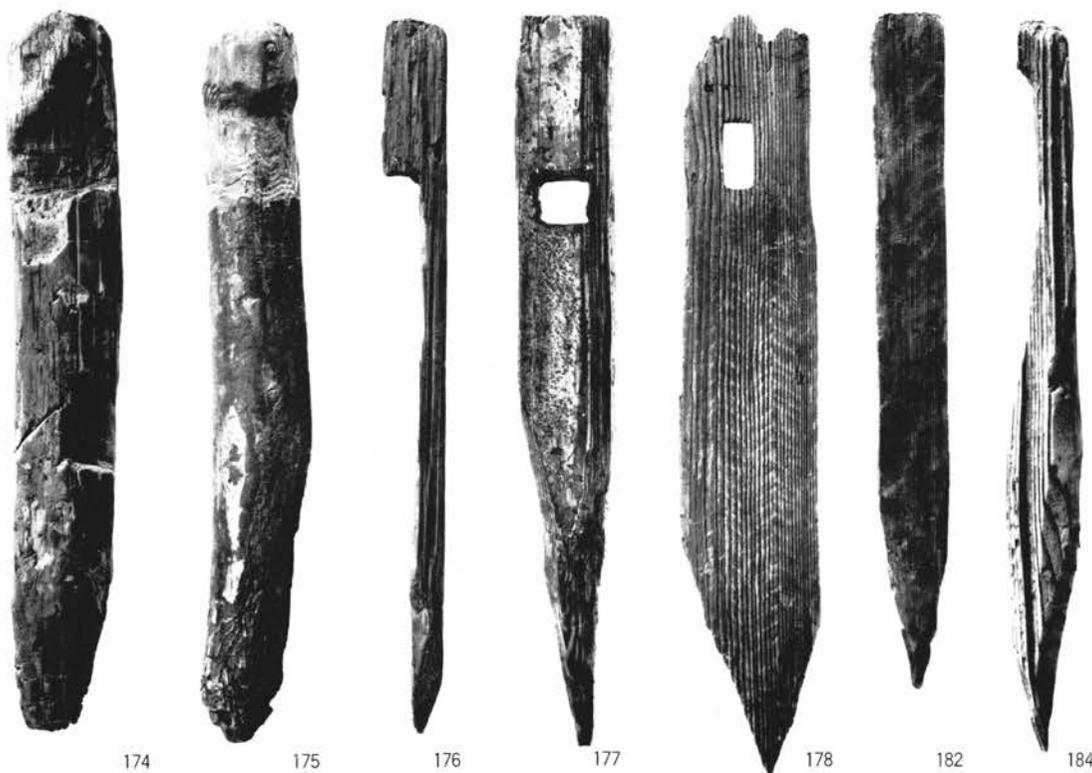
161

163

150

151

169



174

175

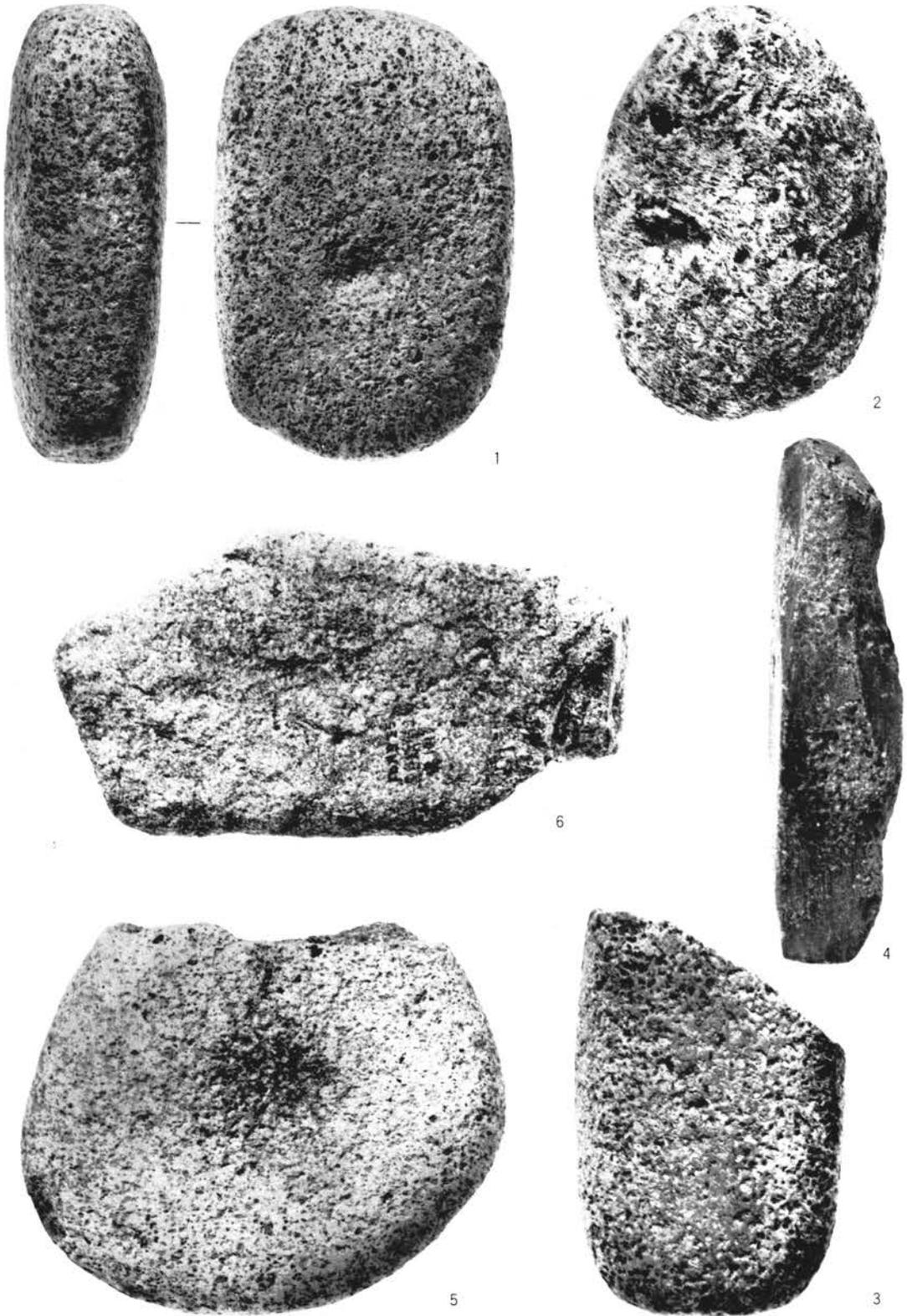
176

177

178

182

184



京都府遺跡調査報告書 第9冊

昭和63年3月25日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)